

一般国道
210号

浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第17集

堂 畑 遺 跡 I

福岡県浮羽郡吉井町大字新治所在遺跡の調査

2002

福岡県教育委員会

一般国道
210号

浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第17集

堂 畑 遺 跡 I

福岡県浮羽郡吉井町大字新治所在遺跡の調査

2002

福岡県教育委員会



1・2号掘立柱建物跡（北から）



3~5号堅穴状遺構（南から）

序

福岡県教育委員会では、国土交通省九州地方整備局（旧 建設省九州地方建設局）の委託を受けて、一般国道210号浮羽バイパス建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。昭和54（1979）年に調査を開始し、吉井町・浮羽町の一部の区間で一般供用されています。

本報告書は平成8・9年に発掘調査を実施した吉井町大字新治に所在する堂畑遺跡1・2次調査の記録です。遺跡は筑後川と耳納山脈に挟まれた緑豊かな田園地帯に立地しています。本調査でも弥生時代～近世に至る各時代の集落跡を確認することができ、当地における人々の暮らしが深い歴史的広がりもつことを各種の人間活動の痕跡、出土遺物を通じて改めて認識することができました。

本書が地域文化の研究や文化財思想の普及、及び学術研究の一助となれば幸いです。

発掘調査及び報告書の作成に当たりまして御協力、御助言いただきました方々にここで深甚の謝意を表します。

平成14年3月29日

福岡県教育委員会

教育長 光安 常喜

例 言

1. 本報告書は平成8・9（1997・1998）年度に福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局（現、国土交通省九州地方整備局）の委託を受けて実施した一般国道210号浮羽バイパスの建設に先立つ堂畑遺跡1・2次の埋蔵文化財発掘調査記録で、一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第17集となる。
2. 本書に記録した堂畑遺跡は一般国道210号浮羽バイパスの埋蔵文化財調査第4地点にあたり、福岡県浮羽郡吉井町大字新治231—12・28・29・31、234—3、236—1に所在する。
3. 堂畑遺跡の発掘調査は平成8・9・12・13年度に実施しており、平成14年度にも継続する予定である。したがって本書を堂畑遺跡調査報告の第1冊目とする。
4. 本書に掲載した遺構図は新原正典・小川泰樹・重藤輝行・進村真之・丸山喜代子・田中聖二が作成した。なお、使用した方位は全て座標北（G. N.）である。
5. 本書に掲載した遺構写真は新原正典・小川泰樹・重藤輝行・進村真之が、遺物写真は北岡伸一が撮影した。なお、図版49の空中写真は空中写真企画に委託した。
6. 出土遺物の整理・復元作業は九州歴史資料館において岩瀬正信の指導の元を実施した。出土遺物の実測は調査担当者のほかに平田春美・久富美智子・堀江圭子・小西藍・荒川妙・中川真理子・坂田順子が行った。製図は重藤と豊福弥生・原カヨ子・坂元雄紀・江上佳子が行い、土山真弓美・安永啓子・山田智子・辻清子が補助した。
7. 出土遺物・写真・図面はすべて九州歴史資料館および文化財保護課太宰府事務所に保管している。
8. 本書の執筆は小川・重藤・進村が分担し、目次に担当箇所を示した。編集は小川・進村の協力を得て重藤が実行した。

目次

巻頭図版

序

例言

目次

図版目次

挿図目次

表目次

I. はじめに	1	(重藤)
1. 調査の経過	1	
2. 調査の組織	3	
II. 位置と環境	4	(重藤)
1. 地理的環境	4	
2. 歴史的環境	4	
III. 発掘調査の記録	12	
1. 遺跡の概要と基本層序	12	(重藤)
2. 1区の検出遺構と遺物	14	(重藤)
(1) 第1面の遺構と出土土器	14	
(2) 第2面の遺構と出土土器	23	
(3) 第3面の遺構と出土土器	56	
(4) 1区トレンチ出土および表採の土器	100	
(5) 1区出土石器・土製品・金属器	104	
3. 2区の検出遺構と遺物	112	
(1) 第1面の遺構と遺物	112	(小川)
(2) 第2面の遺構と遺物	122	(小川)
(3) 第3面の遺構と遺物	135	(進村)
(4) 第4面の遺構と遺物	147	(進村)
IV. まとめ	152	(重藤)

図版目次

巻頭図版1 1・2号掘立柱建物跡(北から)

巻頭図版2 3～5号竪穴状遺構(南から)

図版1 1 1区西壁土層

2 1区西壁細部

3 1区東壁土層

図版 2	1	1 区第 1 面全景 (東から)	2	1 区第 1 面全景 (西から)
	3	1 号土坑 (東から)		
図版 3	1	2 号土坑 (北から)	2	3 号土坑 (西から)
	3	4 号土坑 (西から)		
図版 4	1	5 号土坑 (東から)	2	6 号土坑 (東から)
	3	7 号土坑 (西から)		
図版 5	1	8 号土坑 (東から)	2	1 号集石遺構 (北から)
	3	2～5 号溝 (東から)		
図版 6	1	1 号溝土層 (東から)	2	4 号溝土層
	3	5 号溝土層		
図版 7	1	1 区第 2 面全景 (東から)	2	1 区第 2 面全景 (南から)
	3	1 区第 2 面全景 (西北から)		
図版 8	1	1 区第 2 面全景 (西から)	2	1 区第 2 面全景 (西から)
	3	1 区第 2 面全景 (東から)		
図版 9	1	1 区第 2 面全景 (東から)	2	1・2 号掘立柱建物跡 (北から)
	3	1・2 号掘立柱建物跡 (東から)		
図版 10		1 号掘立柱建物跡柱掘方土層		
図版 11	1	2 号掘立柱建物跡 (北から)	2	1 区第 2 面東部竪穴住居跡群 (東から)
	3	1 号竪穴住居跡 (南から)		
図版 12	1	1 号竪穴住居跡カマド (南から)	2	1 号竪穴住居跡 P 1 土器出土状況
	3	2 号竪穴住居跡 (南から)		
図版 13	1	3 号竪穴住居跡 (南から)	2	3 号竪穴住居跡東北部土器出土状況
	3	4 号竪穴住居跡 (南から)		
図版 14	1	10 号竪穴住居跡 (東から)	2	10 号竪穴住居跡平瓶出土状況 (西南から)
	3	11 号竪穴住居跡 (南から)		
図版 15	1	12 号竪穴住居跡 (北から)	2	13 号竪穴住居跡 (北から)
	3	7 号溝土層 (東から)		
図版 16	1	7 号溝東端土器出土状況 (西から)	2	8 号溝 (南西から)
	3	9 号土坑 (南から)		
図版 17	1	10 号土坑 (北東から)	2	11 号土坑 (南から)
	3	1 区第 3 面全景 (西から)		
図版 18	1	1 区第 3 面全景 (東から)	2	1 区第 3 面全景 (東から)
	3	6 号竪穴住居跡 (南から)		
図版 19	1	6 号竪穴住居跡カマド (南から)	2	14 号竪穴住居跡 (北から)
	3	15・20 号竪穴住居跡 (南から)		
図版 20	1	16 号竪穴住居跡 (南から)	2	17 号竪穴住居跡 (南から)
	3	17 号竪穴住居跡カマド (南から)		
図版 21	1	18 号竪穴住居跡 (南から)	2	19 号竪穴住居跡 (東から)

	3	21号竪穴住居跡（北から）	
図版 22	1	22号竪穴住居跡（北から）	2 22号竪穴住居跡遺物出土状況（南から）
	3	23・25号竪穴住居跡（南から）	
図版 23	1	24号竪穴住居跡（南から）	2 26号竪穴住居跡（南から）
	3	27号竪穴住居跡（西から）	
図版 24	1	28号竪穴住居跡（西から）	2 29号竪穴住居跡（西から）
	3	30号竪穴住居跡（西から）	
図版 25	1	12号土坑（南から）	2 13号土坑（北から）
	3	10号溝土層（東から）	
図版 26		9・10・12～14号溝・調査風景	
図版 27		1・6号土坑・1号溝・1号竪穴住居跡出土土器	
図版 28		3・10・12号竪穴住居跡出土土器	
図版 29		12号竪穴住居跡・10・11号土坑・7号溝出土土器	
図版 30		7号溝出土土器	
図版 31		7号溝・13・14号溝上層包含層出土土器	
図版 32		13・14号溝上層包含層・1号落ち込み状遺構・1区第2面ピット出土土器	
図版 33		1区第2面ピット・1区第2面遺構面・6号竪穴住居跡出土土器	
図版 34		6・16・17号竪穴住居跡出土土器	
図版 35		17～19・21号竪穴住居跡出土土器	
図版 36		21・22号竪穴住居跡出土土器	
図版 37		22号竪穴住居跡出土土器	
図版 38		22・23号竪穴住居跡出土土器	
図版 39		24・26号竪穴住居跡出土土器	
図版 40		26・27・29号竪穴住居跡出土土器	
図版 41		30号竪穴住居跡・12・13号土坑・9号溝出土土器	
図版 42		9・10・12号溝出土土器	
図版 43		13・14号溝・1区第3面遺構面・1区試掘トレンチ出土土器および表採土器	
図版 44		1区出土石器・石製品（1）	
図版 45		1区出土石器・石製品（2）	
図版 46		1区出土石器・石製品（3）	
図版 47		1区出土滑石製容器・土製品・韃羽口・鉄器	
図版 48	1	2区第1面全景（西から）	2 14号土坑（南から）
	3	1号竪穴状遺構（南から）	
図版 49	1	2号竪穴状遺構（東から）	2 2号集石遺構（東から）
	3	2区第2面全景（上空から）	
図版 50	1	3～5号竪穴状遺構・31号竪穴住居跡（南から）	
	2	3号竪穴状遺構（南から）	3 3～5号竪穴状遺構（検出状況、南から）
図版 51	1	4・5号竪穴状遺構（南から）	2 4号竪穴状遺構（東から）

- 3 4号竪穴状遺構（東から）
- 図版 52 1 4号竪穴状遺構炉（検出状況、南から）
2 4号竪穴状遺構炉（土層、南から） 3 4号竪穴状遺構炉（土層、東から）
- 図版 53 1・2 4号竪穴状遺構（出土状況、南から）
3 5号竪穴状遺構（南から）
- 図版 54 1 31号竪穴住居跡（東から） 2 31号竪穴住居跡カマド（東から）
3 4・5号掘立柱建物跡（南から）
- 図版 55 1 4号掘立柱建物跡（東から） 2 5号掘立柱建物跡（東から）
3～5 4号掘立柱建物跡柱掘形土層 6 5号掘立柱建物跡柱掘形土層
- 図版 56 1～4 5号掘立柱建物跡掘方土層 5 15号溝（東から）
6 16号溝土層
- 図版 57 1 2区第3面全景（東から） 2 15号土坑（東から）
3 21号土坑土層（南東から）
- 図版 58 1 21号土坑（北東から） 2 18号土坑（南から）
3 19号土坑（南西から）
- 図版 59 1 20号土坑（南から） 2 14号溝土層（東から）
3 14号溝（東から）
- 図版 60 1 17号溝（東から） 2 2区第4面全景（東から）
3 32号竪穴住居（南西から）
- 図版 61 1 32号竪穴住居跡カマド土層（南から） 2 32号竪穴住居跡カマド（南から）
3 32号竪穴住居跡土層（北から）
- 図版 62 1 33号竪穴住居跡（南から） 2・33号竪穴住居跡貼床除去後（南から）
3 34号竪穴住居跡（南西から）
- 図版 63 1 23号土坑（西から） 2 2区第4面全景（東から）
3 浮羽バイパス路線（西から）
- 図版 64 2区陶磁器・石器・石製品
- 図版 65 1号竪穴状遺構出土土器・2区出土近代遺物（1）
- 図版 66 2区出土近代遺物（2）
- 図版 67 2区出土近代遺物（3）
- 図版 68 2区出土近代遺物（4）
- 図版 69 2区出土近代遺物（5）
- 図版 70 2区出土近代遺物（6）
- 図版 71 2区出土近代遺物（7）・4号竪穴状遺構・31号竪穴住居跡出土土器
- 図版 72 31号竪穴住居跡・15号溝出土土器
- 図版 73 2区第1・2面間包含層・17・18号土坑出土土器
- 図版 74 19号土坑・14号溝出土土器（1）
- 図版 75 14号溝出土土器（2）
- 図版 76 14号溝出土土器（3）

図版 77	14号溝出土土器(4)
図版 78	14号溝出土土器(5)・32・33号竪穴住居跡出土土器・作業風景

挿図目次

第 1 図	周辺遺跡分布図(50,000)	5
第 2 図	堂畑遺跡の位置(10,000)	7
第 3 図	調査区周辺地形図(1/2,000)	11
第 4 図	1区西壁・東壁土層実測図(1/100)	13
第 5 図	第 1 面遺構配置図(1/200)	折込
第 6 図	第 2 面遺構配置図(1/200)	折込
第 7 図	第 3 面遺構配置図(1/200)	折込
第 8 図	第 4 面遺構配置図(1/200)	折込
第 9 図	1～3・5・6号土坑実測図(土1は1/40、他は1/30)	15
第 10 図	4・7・8号土坑実測図(1/30)	16
第 11 図	1・6・8号土坑出土土器・瓦実測図(1/3)	17
第 12 図	1号溝平面実測図(1/80)	18
第 13 図	1～5号溝土層実測図(溝1は1/40、他は1/20)	20
第 14 図	1・5号溝出土土器実測図(1/3)	21
第 15 図	1号集石遺構実測図(1/30)	23
第 16 図	1号掘立柱建物跡実測図(1/80)	折込
第 17 図	1号掘立柱建物跡柱穴土層実測図(1/40)	25
第 18 図	1・2号掘立柱建物跡出土土器実測図(1～3・14は1/4、他は1/3)	26
第 19 図	2号掘立柱建物跡実測図(1/60)	27
第 20 図	3号掘立柱建物跡実測図(1/60)	29
第 21 図	1号竪穴住居跡・同カマド実測図(1/60、1/30)	30
第 22 図	1・2号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	31
第 23 図	2・3号竪穴住居跡実測図(1/60)	32
第 24 図	3・4号竪穴住居跡出土土器実測図(8は1/4、他は1/3)	34
第 25 図	4号竪穴住居跡・同カマド実測図(1/60、1/30)	35
第 26 図	10号竪穴住居跡・同カマド実測図(1/60、1/30)	36
第 27 図	10号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	37
第 28 図	11号竪穴住居跡・同カマド実測図(1/60、1/30)	38
第 29 図	12・13号竪穴住居跡実測図(1/60)	39
第 30 図	12・13号竪穴住居跡出土土器実測図(3は1/4、他は1/3)	40
第 31 図	9～11号土坑実測図(土11は1/30、他は1/40)	42
第 32 図	9～11号土坑出土土器実測図(2は1/3、他は1/4)	43
第 33 図	7号溝土層実測図(1/20)	44

第 34 図	7 号溝南北突出部・8 号溝実測図 (1/60)	45
第 35 図	7 号溝出土土器実測図 (1) (1/3)	47
第 36 図	7 号溝 (2) ・8 号溝出土土器実測図 (37~39は1/4、他は1/3)	49
第 37 図	13・14 号溝上層包含層・1 号落ち込み状遺構出土土器実測図 (4は1/4、他は1/3)	51
第 38 図	1 区第2面ピット出土土器実測図 (1) (1~8は1/4、他は1/3)	53
第 39 図	1 区第2面ピット出土土器実測図 (1) (1/3)	54
第 40 図	第2面遺構面出土土器実測図 (1・2は1/4、他は1/3)	55
第 41 図	6 号竪穴住居跡・同カマド実測図 (1/60、1/30)	57
第 42 図	6・14 号竪穴住居跡出土土器実測図 (6~10は1/4、他は1/3)	58
第 43 図	14 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	59
第 44 図	15・20 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	60
第 45 図	15・16 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1~5は1/3、他は1/4)	62
第 46 図	16 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	63
第 47 図	17 号竪穴住居跡・同カマド実測図 (1/60、1/30)	64
第 48 図	17 号竪穴住居跡出土土器実測図 (7・8は1/4、他は1/3)	65
第 49 図	18 号竪穴住居跡・同カマド実測図 (1/60、1/30)	67
第 50 図	18・19 号竪穴住居跡出土土器実測図 (7は1/4、他は1/3)	69
第 51 図	19・21 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	70
第 52 図	21 号竪穴住居跡出土土器実測図 (5は1/4、他は1/3)	71
第 53 図	22 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	72
第 54 図	22 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (3・6は1/3、他は1/4)	73
第 55 図	22 号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/4)	74
第 56 図	22 号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/4)	75
第 57 図	23 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	76
第 58 図	23 号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	77
第 59 図	23・24 号竪穴住居跡出土土器実測図 (6・20は1/4、他は1/3)	79
第 60 図	24・25 号竪穴住居跡実測図・24 号竪穴住居跡カマド実測図 (1/60・1/30) ..	80
第 61 図	25 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	81
第 62 図	26 号竪穴住居跡・同カマド実測図 (1/60、1/30)	83
第 63 図	26 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3)	84
第 64 図	26 号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/4)	85
第 65 図	27 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	86
第 66 図	27 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	87
第 67 図	28・29 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	88
第 68 図	29 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1は1/3、他は1/4)	90
第 69 図	30 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	91
第 70 図	30 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	91

第 71 図	12・13号土坑実測図 (1/30)	92
第 72 図	12・13号土坑出土土器実測図 (1/4)	92
第 73 図	9・11・12・14号溝土層実測図 (溝11は1/20、他は1/30)	93
第 74 図	9号溝出土土器実測図 (1/3)	94
第 75 図	10号溝実測図 (1/60)	95
第 76 図	10号溝出土土器実測図 (1/3)	96
第 77 図	12～14号溝出土土器実測図 (3・8・9は1/4、他は1/3)	98
第 78 図	1区第3面遺構面・ピット出土土器実測図 (3・4は1/3、他は1/4)	99
第 79 図	1区トレンチ出土土器実測図 (1・2は1/4、他は1/3)	100
第 80 図	1区表採土器実測図 (1) (1は1/4、他は1/3)	102
第 81 図	1区表採土器実測図 (2) (1/3)	103
第 82 図	1区出土石器・石製品実測図 (1) (2～14は2/3、他は1/2)	104
第 83 図	1区出土石器・石製品実測図 (2) (22は2/3、26・27は1/3、他は1/2)	106
第 84 図	1区出土石器・石製品実測図 (3) (30・32・35は1/3、他は1/2)	108
第 85 図	1区出土滑石製容器実測図 (5・6は1/2、他は1/3)	109
第 86 図	1区出土土製品・製塩土器実測図 (10・11は1/3、他は1/2)	110
第 87 図	1区出土金属器実測図 (1/2)	111
第 88 図	14号土坑・1・2号竪穴状遺構実測図 (1/60)	112
第 89 図	14号土坑・1号竪穴状遺構・2号集石遺構出土土器実測図 (1/3)	113
第 90 図	2号集石遺構実測図 (1/60)	114
第 91 図	第1面陶磁器・石器・石製品実測図 (1/3)	115
第 92 図	2区近代遺物実測図 (1) (1/3)	117
第 93 図	2区近代遺物実測図 (2) (1/3)	118
第 94 図	2区近代遺物実測図 (3) (1/3)	120
第 95 図	2区近代遺物実測図 (4) (1/3)	121
第 96 図	2区近代遺物実測図 (5) (1/2)	121
第 97 図	3～5号竪穴状遺構実測図・31号竪穴住居跡遺構配置図 (1/150)	122
第 98 図	3・4号竪穴状遺構実測図 (1/60)	123
第 99 図	3号竪穴状遺構出土土器実測図 (1/3)	124
第 100 図	4号竪穴状遺構出土土器実測図 (1) (1/4)	123
第 101 図	5号竪穴状遺構実測図 (1/60)	125
第 102 図	31号竪穴住居跡・同カマド実測図 (1/60、1/30)	127
第 103 図	4号竪穴状遺構出土土器実測図 (2) ・31号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3)	128
第 104 図	31号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3)	129
第 105 図	4・5号掘立柱建物跡実測図 (1/150、1/60)	130
第 106 図	15・16号溝土層実測図 (1/60)	132
第 107 図	15・16号溝出土土器実測図 (1/3)	133

第108図	第1・2面間包含層出土土器実測図(1/3)	134
第109図	15・16・18号土坑実測図(1/40)	136
第110図	17・19～21号土坑実測図(1/40)	137
第111図	15～19号土坑出土土器実測図(1・8・9・18は1/3、他は1/4)	138
第112図	2区14号溝土層断面図(1/30)	139
第113図	2区14号溝出土土器実測図(1)(1/4)	140
第114図	2区14号溝出土土器実測図(2)(1/3)	141
第115図	2区14号溝出土土器実測図(3)(1/3)	142
第116図	2区14号溝出土土器実測図(4)(1/3)	143
第117図	2区14号溝出土土器実測図(5)(1/3)	144
第118図	2区14号溝出土土器実測図(6)(1/3)	145
第119図	2区14号溝出土土器実測図(7)(1/3)	146
第120図	32～34号竪穴住居跡・32号住居カマド実測図(1/60、1/30)	148
第121図	32・33号竪穴住居跡出土土器実測図(7～15は1/3、他は1/4)	149
第122図	22・23号土坑実測図(1/40)	150
第123図	22号土坑出土土器実測図(1/4)	151
第124図	弥生時代・古墳時代遺構配置図 (1/600、ただし断面図鉛直方向は1/150)	153
第125図	飛鳥～奈良時代・中世遺構配置図(1/600)	155

表目次

第1表	浮羽バイパス調査遺跡一覧	1
第2表	新旧遺構番号対照表	14

I. はじめに

1. 調査の経過

一般国道210号線は大分県大分市と福岡県久留米市を結び、九州を横断する主要幹線道路である。福岡県浮羽郡内において国道210号線は浮羽町、吉井町、田主丸町の市街地中心部を東西に貫く対面2車線の道路となっているが、歩道も狭く交通混雑が頻繁に起こっている。そこで、渋滞の緩和による地域経済の発展を目的として、昭和48年度に事業化されたのが浮羽バイパスである。バイパスは東側の浮羽町より工事が進行し、現在、浮羽町と吉井町の一部で供用が開始されている。

浮羽バイパスの建設に先立つ埋蔵文化財保護の対応は昭和47年2月3日付けで建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所（現在、国土交通省九州地方整備局福岡国道工事事務所）から福岡県教育庁管理部文化課（現在、教育庁総務部文化財保護課）あての「一般国道210号浮羽～田主丸間バイパス建設予定地内の文化財の有無について」調査依頼が始まる。これによって吉井町塚堂遺跡の発掘調査が昭和54（1979）～昭和57（1982）年に実施された。

次いで昭和61（1986）年4月2日付けで福岡国道工事事務所から再度「埋蔵文化財の分布調査について」調査依頼が文化課あてに出され、文化課は塚堂遺跡を除く計16地点の発掘調査必要箇所が存する旨を回答している。現在、この回答にもとづいて福岡県教育庁文化財保護課を調査主体として順次、用地買収の完了した地点より試掘調査、本発掘調査が実施されている（第1表）。

本書に掲載した堂畑遺跡は、吉井町大字新治、浮羽バイパスと県道吉井恵蘇宿線が交差する「三牟田」交差点の東西にわたって分布している。このうち本書に掲載するのは平成8～9年度に堂畑遺跡1・2次調査として実施した県道より西の2,200㎡の調査結果である。

調査地は浮羽バイパスの予定地の踏査の結果、地形等から遺跡の存在する可能性があるため浮羽バイパス第4地点として挙げられていた個所である。平成7年度、福岡県教育庁文化課は浮羽バイパス5地点仁右衛門畑遺跡の調査と平行してこの地点に対する試掘調査を実施し、複数の遺構面からなる遺跡の存在を確認した。吉井町教育委員会が平成元年度～5年度に実施した遺跡詳細分布調査

第1表 浮羽バイパス調査遺跡一覧

地点	町名	工区と地点名	遺跡名	対象面積(㎡)	発掘調査面積(㎡)	調査年度	報告年度	報告書番号
1	浮羽	9.日永	日永	19,000	16,800	S61	H4・5	6・7集
2	吉井	7.塚堂	塚堂	18,479	12,768	S54・57・59・61	S57・59・62	1～5集
3	吉井	7.能楽	—	5,100	試掘のみ	H6	—	—
4	吉井	6.7.三牟田	堂畑	8,400		H8・9・12～	H13～	本書
5	吉井	6.新治	仁右衛門畑	8,400	3,000	H7-9	H11・12	12・14集
6	吉井	6.稲崎A	稲崎A	6,300	1,600	S62	H9	9集
7	吉井	6.稲崎B	稲崎B	4,900	520	S62	H9	9集
8	吉井	6.清宗	—	2,400	試掘のみ	H1	—	—
9A	吉井	5.6.上菅A	堺町・大碓	21,000	18,000	H1・2	H5	8集
9B	吉井	5.6.上菅B	鷹取五反田	14,000	7,420	H2・5・6	H9・10	9・10集
10	田主丸	5.船越A	船越高原	25,000		H8-H12H11～13		13・15・16集
11	田主丸	5.船越B	船越二ノ上	20,000	18,500	H6-9	H10	11集
12	田主丸	5.植木		19,200				
13	田主丸	5.常盤	松門寺A	15,000		H11～	H13～	第18集
14	田主丸	5.野田A		14,800				
15	田主丸	5.野田B	大的・日詰	10,800		H12～		
16	田主丸	5.野田C		13,500				
17	浮羽	7.朝日	—	2,400	試掘のみ			
18	浮羽			28,400				
19	浮羽			16,600				

に基づいて平成6年度に刊行した町内遺跡分布調査報告書では、本地点は埋蔵文化財包蔵地として登録されていなかったため、吉井町教育委員会と協議の結果、周辺を「堂畑遺跡」として登録することとした。

堂畑遺跡1次調査は平成8年6月4日～同年12月13日の間、要調査地点の西半分を対象に実施した。平成8年度当初には仁右衛門畑遺跡の調査を行っていたが、堂畑遺跡の調査を先行して実施してほしいとの依頼があり、仁右衛門畑遺跡の調査が一段落した6月4日より重機を投入し、発掘を開始した。重機を搬入し表土を除去したところ、第1面が検出された。第1面は8月上旬には終了し、引き続き重機によって包含層を除去しながら、第2面まで掘り下げた。第2面では予想以上に多数の遺構が検出され、調査に日数を要した。10月4日には全景写真を撮影した後、掘立柱建物跡の柱穴断ち割り等の補足調査を実施した。当初はこの第2面で遺構は完掘できると予想していたが、補足調査の過程で当初予想していなかった第3面の遺構面の存在を確認することとなった。

平成7年度、福岡県教育庁文化課では筑紫野インターに関連して筑紫野市貝元遺跡の調査を実施中であった。貝元遺跡は調査面積が大きいのに加え、複雑に遺構の切り合った発掘に多大の労力を要する調査となっており、堂畑遺跡を担当していた調査員もその調査の区切りがつく時点で貝元遺跡に合流することとなっていた。しかし、予想しない第3面を確認されたことから、その予定を変更し引き続き第3面の調査を実施することとなった。第3面でも比較的、遺構が密集した状況であったが、11月1日に重機を投入し、包含層の除去から調査を開始し、12月13日に無事、4地点西半部の調査を終了することができた。その後、調査員は貝元遺跡の調査に合流し、東半部を次年度調査とすることになった。結果として第1次調査は東西42.0m、西壁長さ19.5m、東壁長さ29.5mの東西に長い台形の調査区となり、調査面積は約1,030㎡を測る。本書ではこの調査区を1区と称することとする。

次いで、翌平成9年5月9日～平成10年2月9日の間、調査予定地の東半分に対して2次調査として、発掘を行った。調査区は南北32.0m、東西36.5mであるが、調査区東北隅は県道との接続部分となり北に拡張し、西北隅は隣接地への進入路確保のために未調査となっている。調査面積は約1,170㎡。以下、本書ではこの調査区を2区と称する。

この調査では4面の遺構面を確認することができた。調査は年度初めより準備し、5月9日に第1面の調査に着手した。第1面は7月31日には全体写真を撮影し、引き続き8月19日から第2面の表土剥ぎを開始した。第2面は10月9日に気球により全形写真を撮影した。第3面目は平成9年11月4日から表土剥ぎを始め、全形写真を12月5日に全体写真を撮影した。12月9日には第4面目の表土剥ぎを開始し、年が明けて平成10年1月27日に第4面目の全体写真を撮影し、2月9日に機材を撤収して調査を完了した。

浮羽バイパスに関連する調査報告書作成作業は堂畑遺跡とほぼ同時期に調査を実施した船越高原遺跡、仁右衛門畑遺跡の出土遺物量が多く、複数年に及ぶことが予想された。そこで、これらを優先して整理し、堂畑遺跡の整理を後回しとすることとなり、調査より4年経過した平成13年度によりやく報告書作成の運びとなった。

なお、県道より東の部分については10,000㎡を対象に堂畑遺跡3・4次調査として平成12年度から実施しており、平成14年度にも継続する予定である。調査途中ではあるが、場所によっては複数の遺構面が確認され、弥生時代～奈良時代の遺構が多数、検出されており、県道西側の1・2次調査区

と同様の状況を呈している。今後の調査の進展が期待される。

2. 調査の組織

発掘調査及び整理・報告書作成の関係者は下記のとおりである。

建設省九州地方建設局（平成12年度から国土交通省九州地方整備局）

福岡国道工事事務所

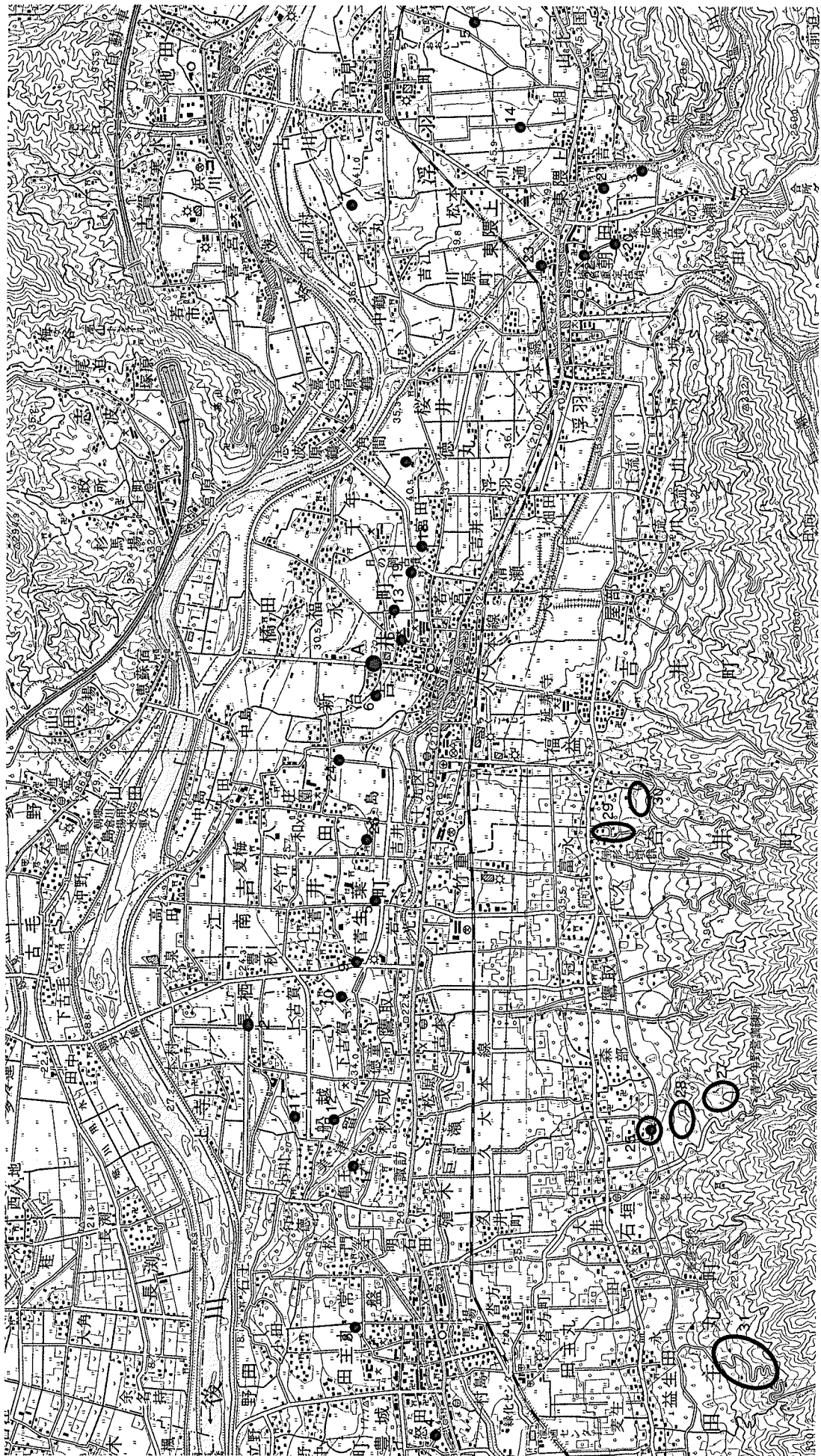
	平成8年度	平成9年度	平成13年度
所長	佐竹 芳郎	藤本 聡	森 昌文
副所長	藤波 元生	華岳 征二郎	有働 伸幸
	緒方 良一	別府 五男	田中 義高
建設監督官	松尾 義信	有家 信義	浅井 博海
	山川 武春	柴田 智	
調査第二課長	田中 義高	田中 義高	久野 隆博
調査第二係長	霧 敏信	沓掛 孝	大榎 謙
建設技官	島田 隆一	島田 隆一	佐藤 博信
工務課長	湖 幸一	河野 良行	末岡 彰
工務第一係長	黒木 俊彦	梶原 俊之	山口 隆
工務第三係長	田口 仁	斉藤 啓嗣	川内 学

福岡県教育委員会（平成9年度まで指導第二部文化課、平成10年度より総務部文化財保護課）

	平成8年度	平成9年度	平成13年度
総括			
教育長	光安 常喜	光安 常喜	光安 常喜
教育次長	松枝 功	松枝 功	森山 良一
指導第二部長	丸林 茂夫	竹若 幸二	
総務部長			三瓶 寧夫
文化課長	松尾 正俊	石松 好雄	
文化財保護課長			井上 裕弘
参事兼文化財保護室長	柳田 康雄	柳田 康雄	
参事兼課長技術補佐			橋口 達也
			川述 昭人
参事兼課長補佐			平野 義峰
課長補佐	元永 浩士	城戸 秀明	
参事補佐兼室長補佐	井上 裕弘		
庶務			
管理係長	黒田 一治	黒田 一治	三笠 ひとみ
事務主査	東 健二	鶴我 哲夫	
主任主事	鶴我 哲夫	田中 利幸	井上 雅之

			鎮守 俊明
主事			秦 俊二
調査			
参事補佐兼調査班総括	橋口 達也	橋口 達也	
参事補佐兼調査第二係長			児玉 真一
	(平成10年度より調査第二係)		
参事補佐	木下 修	木下 修	
	中間 研志	新原 正典 (調査担当)	
	小池 史哲	中間 研志	
主任技師		小川 泰樹 (調査担当)	進村 真之 (報告担当)
技師	重藤 輝行 (調査担当)	進村 真之 (調査担当)	
南筑後教育事務所			
主任技師			小川 泰樹 (報告担当)
北筑後教育事務所			
主任技師			重藤 輝行 (報告担当)

調査及び整理期間中には、浮羽郡における考古学的調査の先駆者で元福岡県文化財保護指導委員の金子文夫先生、吉井町教育委員会をはじめ周辺市町村の文化財担当職員の皆様等に多くの御指導、御助言と御協力をいただきました。また、2年におよぶ調査には多数の方々作業員として調査に参加されました。調査は悪天候、悪条件での作業も伴い、これら多くの作業員の皆様の御尽力無しには無事に調査を完了することはなかったと思います。ここに深甚の謝意を表します。



- 1. 塚堂遺跡・塚堂古墳
- 2. 千代久遺跡
- 3. 柳瀬遺跡
- 4. 豊城中ツプロ遺跡
- 5. 大碓遺跡
- 6. 仁右衛門畑遺跡
- 7. 田島北遺跡
- 8. 水分遺跡
- 9. 鷹取五反田遺跡
- 10. 船越高原遺跡
- 11. 船越一ノ上遺跡
- 12. 船越宮ノ前遺跡
- 13. 吉井中学校遺跡
- 14. 日永遺跡
- 15. 岩野遺跡
- 16. 広園遺跡
- 17. 亀王遺跡
- 18. 月岡古墳
- 19. 日岡古墳
- 20. 法正寺古墳
- 21. 弥次郎丸古墳
- 22. 重定古墳・楠名古墳
- 23. 西隈上古墳
- 24. 女塚古墳
- 25. 大塚古墳・大塚古墳群
- 26. 生業地区遺跡
- 27. 森部平原古墳群
- 28. 清長橋古墳群
- 29. 屋形原古墳群
- 30. 東屋形古墳群
- 31. 益生田古墳群

第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

Ⅱ．位置と環境

1．地理的環境

堂畑（DOUHATA）遺跡は福岡県浮羽郡吉井町大字新治字堂畑に位置する。遺跡の所在する吉井町は福岡県の南東部に位置し、町域は面積28.29km²、人口約17,500人である。町の中央を東西に国道210号線、JR久大本線が通っており、西の福岡県久留米市、東の大分県を結ぶ主要交通路上に位置している。

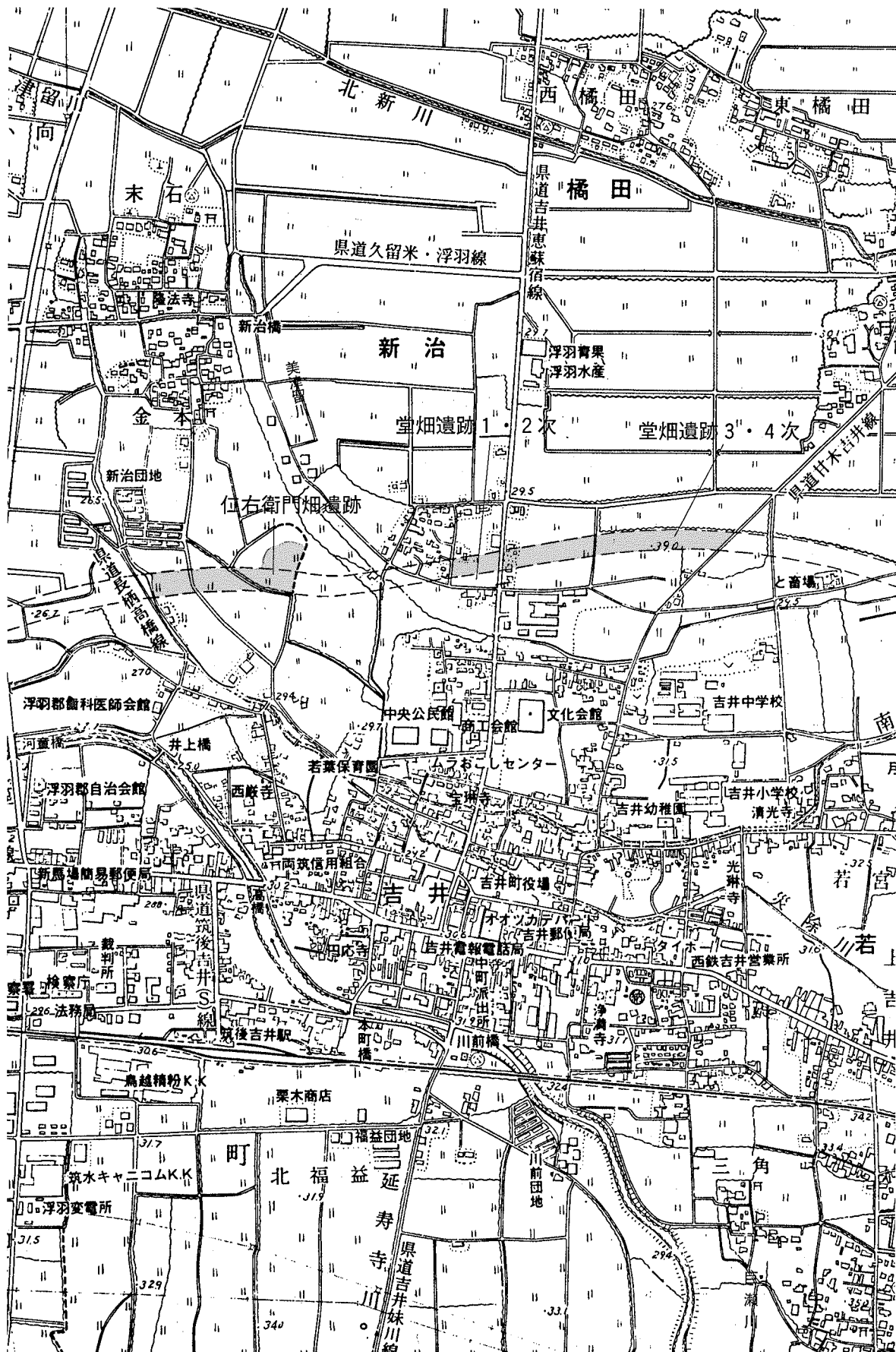
町の南には断層作用で形成された急峻な耳納連山が位置し、その山麓には小河川によって形成された扇状地地形が発達している。扇状地の北側には東西に流れる巨勢川、美津留川、筑後川の流れにより形成された筑紫平野が広がっている。耳納山麓では柿をはじめとする果樹栽培、平野部では水稲・野菜・植木栽培が盛んであり、自然と調和した農村風景が広がっている。一方、国道210号線、JR久大本線に接した地区は江戸時代より耳納山に産出する木材資源の売買を中心とした商業地および久留米と天領日田を結ぶ街道沿いの宿場町として栄え、現在でも往時を偲ばせる白壁の町並みがよく保存されている。平成9年にはこの町並みが国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、町並みの整備がさらに進み、観光客も年々、増加する傾向にある。

堂畑遺跡は吉井町役場の東北に所在し、美津留川の南岸に接するように立地している。浮羽バイパス5地点として発掘調査を行った仁右衛門畑遺跡とは美津留川をはさんで対峙し、同じく浮羽バイパス関係で調査した塚堂遺跡からは西方1.5kmのところ的位置する。仁右衛門畑遺跡では旧地表面標高は29.5m前後、遺構面標高29.0m前後であるのに対して、堂畑遺跡では旧地表面標高28.7m前後、最下層の遺構面の標高は27.0m前後とわずかに低くなっている。遺跡の基盤を形成する地質においても仁右衛門畑遺跡では安定した粘質土であるのに対して、堂畑遺跡では河川の氾濫に起因すると思われる細砂～シルト質の土壌が発達しており、両者は対称的である。平成12年度より堂畑遺跡1・2次調査地の東側の浮羽バイパス用地を堂畑遺跡3次として発掘調査を実施中で、そこでも同様の細砂～シルト質の土壌に遺跡が形成されている。

2．歴史的環境

浮羽バイパスは浮羽郡を東西に横断する路線が計画されており、それに伴う発掘調査はこの地域に対する東西方向の大きなトレンチのような調査となっている。3町ともほ場整備がほぼ完了し、それに先立つ発掘調査は各町教育委員会によって行われた。また、田主丸町では大塚古墳・寺徳古墳・中原狐塚古墳・西館古墳等からなる史跡田主丸古墳群、吉井町では史跡日岡古墳を中心とする若宮古墳群、浮羽町では史跡塚花塚古墳・重定古墳・楠名古墳を中心とする朝田古墳群をはじめとして積極的に重要遺跡の範囲確認調査が実施されている。詳しい調査成果については先行する浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告及び各町より刊行されている発掘調査報告書にゆずるとして、ここでは本書で報告する堂畑遺跡の中心時期となる弥生時代～奈良時代の遺跡の動態について概観してみたい。

浮羽郡における縄文時代遺跡の調査例は少なく、早期～中期においては吉井町法華原遺跡を中心とする耳納山麓において土器が表採されるのみである。後期～晩期になると平野部においても浮羽町柳瀬遺跡で後期集落遺跡が発掘調査され、吉井町塚堂遺跡（馬田編1983）、田主丸町千代久遺跡



第2図 堂畑遺跡の位置 (10,000)

(秀嶋1993・1994)等でも晩期前半の土器が出土している。特に柳瀬遺跡(佐土原1992)では7棟の竪穴住居跡など集落の様相を知る資料に恵まれており、本報告の刊行が待たれる。ただ、縄文時代晩期後半～弥生時代早期の資料としては耳納山麓で採集された突帯文土器、田主丸町豊城中ツプロ遺跡(丸林編1998)出土の刻目突帯文土器等断片的な資料に留まっている。弥生時代開始期における集落、墓地の構造、水田等の生業の様相等の弥生時代の開始の具体像は不明な部分が大きく、今後の発掘調査の大きな課題として残されている。

弥生時代前期の集落遺跡としては平野部に位置する吉井町大碓遺跡がある(水ノ江編1994)。大碓遺跡では前期後半～中期初頭の竪穴住居跡14棟等が検出されている。さらに弥生時代前期末～中期前半になると平野部において吉井町仁右衛門畑遺跡、浮羽町田島北遺跡(佐土原1992)、田主丸町水分遺跡(栗原編1985)等で竪穴住居跡、貯蔵穴、土坑等からなる集落構造を良く示す調査例が増えており、遺跡数が増加した様相がうかがえる。水田農耕の定着によって、集落も水田等の農耕に適した土地に隣接して営まれるようになり、平野部での遺跡の増加が起こったと推測できる。このような傾向はさらに弥生時代中期後半まで継続したようである。吉井町鷹取五反田遺跡(水ノ江編1998)では中期後半～後期前半の竪穴住居跡47棟、土坑・貯蔵穴45基等からなる集落が検出されている。田主丸町船越高原遺跡(進村編2001)は美津留川を挟んで鷹取五反田遺跡と対峙する関係にあるが、そこでは、中期後半～末の竪穴住居跡43棟が検出されている。いずれも浮羽バイパスに先行する道路幅の調査にとどまるが、多種多様な遺構が検出された点、集落の範囲の把握が可能である点で、当地における弥生時代の集落構造を捉える場合の貴重な資料となっている。このほかに田主丸町船越一ノ上遺跡(丸林編1996)では中期初頭～末の集落跡、田主丸町船越宮ノ前遺跡(江島1997・1998)では中期後半頃の集落跡が調査されている。

後期の遺跡としては吉井町塚堂遺跡(馬田編1983・1985、副島編1984、佐々木編1984)、吉井中学校遺跡(吉井町2000年調査)、浮羽町日永遺跡等(緒方編1994)で大規模な調査が実施されている。日永遺跡は広形銅矛1本・広形銅戈1本の埋納遺構が検出されており、全国的にも貴重な青銅器埋納遺構の調査例である。また、寺徳古墳(江島2001)の確認調査では弥生系小形倣製鏡鍔型が発見されている。集落の調査は実施されていないが、鍔型の存在から周辺に拠点集落級の当該期の遺跡があると考えられる。前時期までは平野部に大規模な集落が形成されていたのに対して、この時期になって山麓部の丘陵に拠点集落が移動した可能性も想定され、山麓部での今後の調査が期待される。このほか仁右衛門畑遺跡、田島北遺跡等でも同時期の竪穴住居跡等が検出されている。

弥生時代の墓地遺跡としては浮羽町岩野遺跡(寺嶋1990)が浮羽郡では例の少ない大規模な調査例であり、中期前半～後期の甕棺墓81基、箱式石棺墓21基、土壙墓33基等多数が検出されている。浮羽郡が弥生時代の甕棺分布圏にふくまれることを物語る資料である。また、鷹取五反田遺跡では中期後半～後期前半の甕棺墓19基(内成人用甕棺墓13基)、土壙墓1基、石棺墓1基からなる墓地が検出されており、同遺跡の集落と対応する状況にある。墓地は調査区外へとさらに続き、竪穴住居跡はやや離れて位置していることから、同時期には墓地と居住域と明確に区別されていたことが明らかである。他に吉井町広園遺跡(吉井町教育委員会が2001年に調査)では甕棺墓・石棺墓が検出され、田主丸町亀王遺跡(栗原編1985)は古くから甕棺散布地として著名である。

古墳時代の浮羽郡における首長墓としては吉井町若宮古墳群、浮羽町朝田古墳群をその墓域として捉えることができる。このうち月岡古墳、日岡古墳、塚堂古墳からなる若宮古墳群(児玉編

1989・1990)は堂畑遺跡の東1~2km程の所に位置している。3基はいずれも全長90m前後と筑紫平野において屈指の規模を誇り、副葬品・主体部から5世紀中頃~6世紀前半の間に、連続して造営された一列の首長墓と理解してほぼ間違いない。しかし、この系列に先行、後続する首長墓は若宮古墳群に近接した場所に無く、当該地の首長墓を論ずる際の最大の課題となっている。

浮羽町の中心部に位置する朝田古墳群は法正寺古墳、弥次郎丸古墳、重定古墳という3基の前方後円墳(寺嶋1993)と大形円墳楠名古墳(児玉1987)が首長墓級古墳である。このうち法正寺古墳は発掘調査も実施されていないため正確な時期は不明であるが、墳丘形態と地表観察では埴輪、葺石の存在が確認できないことから前期古墳とする見解が多く、妥当であろう。残る弥次郎丸古墳・重定古墳・楠名古墳は埴輪、横穴式石室の構造から6世紀前葉~7世紀前半の間におさまり、一列の首長墓級古墳と理解できる。前方後円墳の築造時期の関係だけを見ると、これらが若宮古墳群に引き続く首長墓群を形成し、若宮古墳群より朝田古墳群へ墓域が移動したかのようにもとれる。ただ、朝田古墳群には直径24mと推測される比較的、大形の円墳であり、5世紀中葉~後葉に比定できる西隈上古墳があり、墳丘規模に多少の差はあるものの弥次郎丸古墳に先行する首長墓と評価も可能であろう。したがって、朝田古墳群では5世紀まで遡るか、あるいは前期の法正寺遺跡以来連続する首長墓系譜を形成し、若宮古墳群と一時、併存したと考えておきたい。

朝田古墳群と若宮古墳群が同時に築造され、別々の首長墓系列とすると、女塚古墳や田主丸大塚古墳と若宮古墳群の関連も俎上に挙げねばならない問題である。女塚古墳は若宮古墳群の西2.5km、堂畑遺跡の西1kmの沖積平野中の微高地に単独で立地し、埴輪を出土した前方後円墳とされている。現状では耕作及び墓地によって地形の改変が激しく、墳形確認も困難で埴輪も表採できない。そのため、位置づけが難しい古墳となっており、若宮古墳群との関連は詳細な調査をまつほかない。また、生業地区遺跡(平川1990)では内濠で22m×18m長方形、中濠で44m×40mの隅丸方形、外濠で60m×50m程の隅丸方形に復元される墳丘が削平された古墳の周溝と推定される遺構が検出されている。古墳時代前期の土器を出土し、若宮古墳群との関連が問題であろう。

一方、田主丸大塚古墳(丸林2001)は耳納山麓に築造された全長103mを測る前方後円墳で、6世紀後半でも新しいころと推測されている。規模においては若宮古墳群の3基と遜色なく、時期的にも後続する首長墓と考えるのに無理はない。しかしながら、立地は大きく異なり、周辺の森部平原古墳群、清長橋古墳群、大塚古墳群などの多数の古墳時代後期~終末期群集墳の頂点に位置する存在としての性格が強い。沖積平野中に前方後円墳のみで形成される若宮古墳群との構成の違いがあることには留意すべきであろう。このような立地・群構成の違いを超えて、若宮古墳群と田主丸大塚古墳の関連を結び付けるには生産地、集落域の連続性を証明する必要があるだろうが、ここでそれを論じるには準備不足であろう。いずれにしても、これら首長墓系列の展開についての諸問題に対しては今後、周辺の集落域、生産遺跡等の解明が不可欠の課題となる。

浮羽郡は装飾古墳の集中する地域としても著名である。前述した平野部に立地する首長墓級の古墳のうち日岡古墳、塚花塚古墳、重定古墳は横穴式石室が開口しており、装飾古墳として著名である。耳納山麓では屋形原古墳群中の珍敷塚古墳、原古墳、鳥船塚古墳、古畑古墳、田主丸古墳群中の寺徳古墳(江島2001)、中原狐塚古墳、西館古墳(赤司1996)が装飾古墳である。久留米市においても耳納山麓に下馬場古墳、薬師下北古墳、薬師下南古墳、前畑古墳が所在する。また、耳納山麓は福岡県内でも群集墳が集中的に分布する地域のひとつであり、吉井町東屋形古墳群、田主丸町

益生田古墳群（栗原編1984）、大塚清長橋古墳群、平原古墳群（栗原編1984）などは数十基からなる大規模な古墳群となっている。

浮羽郡の古墳時代集落としては塚堂遺跡（馬田編1983・1985、副島編1984、佐々木編1984）が目される。遺跡は若宮古墳群と近接して前期～中期に継続する集落で、前期においては畿内系を始めとする各種の外来系土器、中期においては地域の中でも先進的にカマドを取り入れ、朝鮮半島系軟質土器も出土している。他地域との交流との活発な交流がうかがわれる遺跡であり、若宮古墳群の成立との関連が問題となる集落である。また、近年では周辺に位置する仁右衛門畑遺跡、吉井中学校遺跡の調査が実施され、現在調査継続中の堂畑遺跡も含めて、これら集落と塚堂遺跡との関連、相違点を明らかにすることによって、塚堂遺跡の特質もより明らかになるものと思われる。このほかに生葉地区遺跡（平川1990・2000）、船越宮ノ前遺跡（江島1997・1998）で古墳時代後期～奈良時代の竪穴住居跡、豊城中ツプロ遺跡（丸林1998）、生葉地区遺跡（平川1990・1999・2000）等で古墳時代の集落が調査されている。

参考文献

- 馬田 弘稔編 1983 『塚堂遺跡』Ⅰ(塚堂古墳・C地区) 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第1集
副島 邦弘編 1984 『塚堂遺跡』Ⅱ(A地区) 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第2集
佐々木 隆彦編 1984 『塚堂遺跡』Ⅲ(E地区) 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第3集
馬田 弘稔 1985 『塚堂遺跡』Ⅳ(D地区) 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第4集
緒方 泉編 1994 『日永遺跡』Ⅱ 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第7集
水ノ江 和同編 1994 『塚町大碓遺跡』 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第8集
水ノ江 和同編 1998 『鷹取五反田遺跡』Ⅰ 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第9集
水ノ江 和同編 1999 『鷹取五反田遺跡』Ⅱ 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第10集
吉田 東明編 2000 『仁右衛門畑遺跡』Ⅰ 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第12集
斎部 麻矢編 2000 『船越高原A遺跡』Ⅰ 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第13集
吉田 東明編 2001 『仁右衛門畑遺跡』Ⅱ 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第14集
進村 雅之編 2001 『船越高原A遺跡』Ⅱ 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第15集
栗原 和彦編 1984 『田主丸古墳群』田主丸町文化財調査報告書第1集
栗原 和彦編 1985 『田主丸古墳群』田主丸町文化財調査報告書第2集
秀嶋 龍男 1993 『千代久遺跡』Ⅰ 田主丸町文化財調査報告書第3集
秀嶋 龍男 1994 『千代久遺跡』Ⅱ 田主丸町文化財調査報告書第4集
赤司 善彦 1996 『西館古墳』田主丸町文化財調査報告書第6集
丸林 禎彦 1996 『船越一ノ上遺跡』田主丸町文化財調査報告書第8集
江島 伸彦 1997 『船越宮ノ前遺跡』Ⅰ 田主丸町文化財調査報告書第9集
江島 伸彦 1998 『船越宮ノ前遺跡』Ⅱ 田主丸町文化財調査報告書第11集
丸林 禎彦編 1998 『豊城中ツプロ遺跡』田主丸町文化財調査報告書第10集
丸林 禎彦 2001 『田主丸大塚古墳』田主丸町文化財調査報告書第15集
江島 伸彦 2001 『寺徳古墳』田主丸町文化財調査報告書第18集
児玉 真一編 1989 『若宮古墳群』Ⅰ 吉井町文化財調査報告書第4集
平川 裕介 1990 『生葉地区遺跡』Ⅰ 吉井町文化財調査報告書第5集
児玉 真一編 1990 『若宮古墳群』Ⅱ 吉井町文化財調査報告書第6集
平川 裕介 1999 『生葉地区遺跡』Ⅱ 吉井町文化財調査報告書第11集
平川 裕介 2000 『生葉地区遺跡』Ⅲ 吉井町文化財調査報告書第12集
児玉 真一 1987 『楠名古墳』浮羽町文化財調査報告書第2集
児玉 真一編 1987 『沖出遺跡』Ⅰ 浮羽町文化財調査報告書第3集
寺嶋 克史 1990 『岩野遺跡』浮羽町文化財調査報告書第5集
佐土原 逸男 1992 『田島北遺跡』浮羽町文化財調査報告書第9集
佐土原 逸男 1992 『柳瀬遺跡概報』浮羽町文化財調査報告書第8集
寺嶋 克史 1993 『朝田古墳群概報』浮羽町文化財調査報告書第10集



第3図 調査区周辺地形図 (1/2,000)

Ⅲ．発掘調査の記録

1．遺跡の概要と基本層序

堂畑遺跡1・2次調査は美津留川の南岸に近接するため、川の沖積作用により厚く、細砂・シルトが堆積する。そのため遺構面は1次・2次調査のいずれにおいても複数に及び、1次調査=1区では3面、2次調査=2区では4面の遺構面を検出した（第5～8図）。

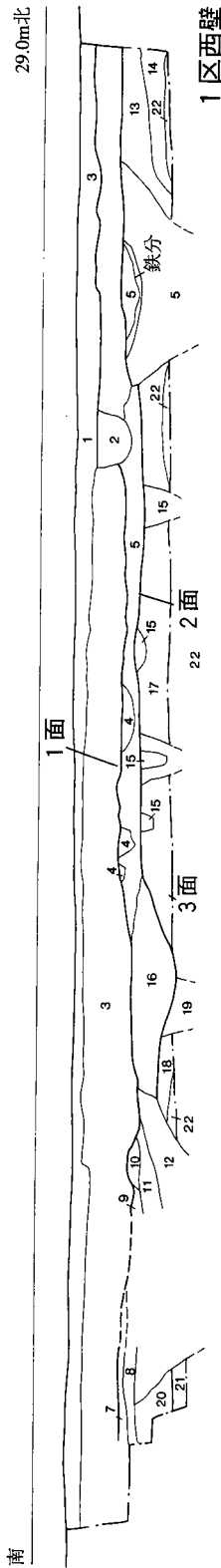
第8図は1区の西壁と、1次・2次調査区境にあたる1区東壁の土層実測図である。ほぼ南北方向の調査区断面図であり、東西に流れる美津留川の流れに対して直交方向の土層図となっている（図版1）。この土層に準じて各遺構面の状況、検出遺構について概略を述べることにしたい。

1区第1面は水田床土のほぼ直下での遺構検出面であるが、調査区の西半分では床土直下にあると西壁第3層褐色砂質シルトをさらに掘り下げてしまったために、厳密には同一面とはなっていない。また、重機を使用しての遺構面まで掘り下げたために、遺構面は微細な層の凹凸を見極めたものではないことを断っておきたい。第1面の標高は調査区西北28.0m、西南27.8m、東北28.5m、東南28.4mで、東北から西南方向に低くなる傾斜面となっている。第1面の検出遺構は土坑8基、溝6条、石積遺構であり、土坑、溝は中世を中心としている。また、本来、第1面で検出できるはずであった10号溝（西壁土層11・12層）の一部を美津留川へ落ち込む傾斜面に堆積と誤認していたために、最終的に第3面で調査することとなった。

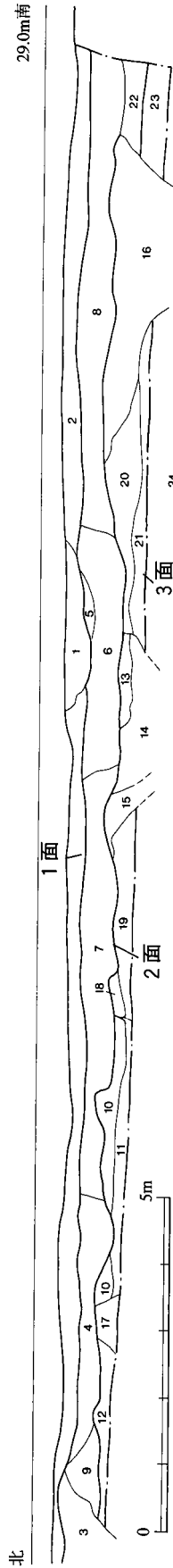
1区第2面は西壁土層で言えば第6層暗褐色シルト、東壁土層で言えば第7・8層灰褐色砂質シルト、灰黄褐色砂質シルトの下で検出を試みたものである。ただ、重機で包含層を掘削したために正確に自然の凹凸に則した遺構面とはなっていない。また、第2面の標高は調査区西北27.8m、西南27.2m、東北28.2m、東南27.6mで、第1面と同様に東北から西南方向に傾斜している。第2面検出遺構は古墳時代～奈良時代を中心とする竪穴住居跡8棟、掘立柱建物跡3棟、土坑3基、ピット等がある。しかし、調査区東部の竪穴住居跡群は第3面で検出した古墳時代溝の上層にあたり、その覆土あるいは周辺に広がる包含層との区別が難しかったために、形態等は不安が大きい。

1区第3面は西壁土層では第17層暗褐色砂質シルト、東壁土層では第19・21層の黒褐色砂質シルト、第20層の暗褐色砂質シルトを除去して完全な無遺物層となっている灰褐色砂質土上面で検出した。遺構面標高は調査区西北27.8m、西南27.2m、東北27.9m、東南27.6mで、やはり第1・2面と同様に東北から西南方向に傾斜している。検出遺構としては竪穴住居跡17棟、土坑2基、溝6条等がある。竪穴住居跡は古墳時代のものと弥生時代中期のものがあるが、前者はこの面では明瞭に検出することができ、形態はほぼ間違いないと思われる。一方、弥生時代中期の住居跡は覆土と地山との区別が難しかったため平面形には不安が大きい。また、遺物も少ないので遺構の性格付けに大きく不安を残したまま報告せざるを得ない。

このように1次調査では自然地形を意識して各面の検出を行なったが、どうしても遺構検出が不十分であり一遺構面がほぼ同一時期の遺構のみで構成される状況とはならなかった。また、同じ時代の遺構が複数面に及ぶという弊害も生じた。ましてや、一般的な緊急発掘調査では重機を利用して包含層を除去せざるを得ないので、正確に自然の堆積に則した遺構面の把握は困難であった。このような問題点もあったので、2次調査ではほぼ水平に遺構を検出して掘り下げていくという調査法で望むこととした。この調査法では傾斜地に複数の遺構面が存在する場合、理屈の上から言えば



- 1. 灰褐色砂質シルト (水田床土、下面に鉄分沈澱)
- 2. 第1面遺構
- 3. 褐色砂質シルト (斑状に鉄分混)
- 4. 第1面遺構
- 5. 溝7
- 6. 暗褐色灰褐色砂質シルト
- 7. 灰色粘質シルト
- 8. 暗褐色砂質土 (鉄分、マンガン多)
- 9. 茶褐色砂質土
- 10. 灰褐色砂質土 (マンガン多)
- 11. 10に同じ
- 12. 灰色シルト質粘土 (マンガン、鉄分多)
- 13. 黒褐色砂質シルト (土器多)
- 14. 暗褐色砂質シルト (土器多)
- 15. 第2面遺構
- 16. 暗褐色砂質土シルト (下面拳大円礫)
- 17. 暗褐色砂質シルト
- 18. 黒褐色砂質シルト
- 19. 第2面遺構
- 20. 暗褐色砂質シルト
- 21. 黒褐色砂質シルト
- 22. 灰褐色砂質土 (地山)



- 1. 灰色砂質シルト (鉄分多)
- 2. 褐色砂質シルト
- 3. 溝8埋土
- 4. 暗灰褐色砂質シルト
- 5. 灰色砂質シルト
- 6. 暗褐色シルト
- 7. 灰黄褐色砂質シルト
- 8. 灰褐色砂質シルト
- 9. 暗褐色砂質シルト
- 10. 暗褐色砂質シルト (ブロック状に灰色砂20%混)
- 11. 明褐色砂
- 12. 暗黄灰色砂質シルト
- 13. 灰褐色砂質シルト
- 14. 褐色砂質シルト (暗褐色土30%混)
- 15. 褐色砂質シルト
- 16. 溝7埋土
- 17. 黄褐色砂質シルト
- 18. 暗褐色砂質シルト
- 19. 黒褐色砂質シルト
- 20. 暗黄褐色砂質シルト (黄褐色・灰色土ブロック10%混)
- 21. 黒褐色砂質シルト
- 22. 褐色砂質シルト
- 23. 黒褐色砂質シルト
- 24. 灰褐色砂質土 (地山)

第4図 1区西壁・東壁土層実測図 (1/100)

1遺構面が1時期の遺構で構成されるということはないが、複数面に及ぶ深い遺跡を発掘するには、効率的な方法であった。また、逆に水平的に検出することによって、事後的に遺構面を復元できるという有効な面もある。このような調査を行なった2次調査で検出した遺構面は4枚である。

第1面は検出面の標高28.5m前後であり、中世を中心とした土坑1基、溝1条、竪穴状遺構2基が検出された。第2面は検出面標高28.0m前後で、掘立柱建物跡2棟、竪穴住居跡1棟、竪穴状遺構3基、溝1条が検出された。古墳時代～奈良時代のものと考えられる。第3面は検出面の標高27.7m前後で、土坑7基、溝1条、ピット等が検出された。第4面は検出面の標高27.3m前後で、竪穴住居跡3棟、土坑2基等が検出された。

第5～8図はほぼ時期的な対応関係を考慮して、1次調査と2次調査の図面を合成して示しているが、以上のような調査方針の違いのため、連続する同一遺構面とはなっていない。また、1次調査区と2次調査区で調査の方針を大きく変更したために、両者の間の遺構の連続が把握しづらくなり、その検討はほぼ断念せざるを得なかった。それによって1区と2区の間で遺構が不連続となるなど大きな問題を残すこととなった。また、1次調査と2次調査の間で遺構番号の付け方に差があるために、統一を図るため本報告に際して新たに番号を付けることとした(表2)。遺物の収蔵は新番号によるが、遺物注記は旧番号のままなので、注意されたい。

以上のように自然地形が傾斜する場所で複数の遺構面の調査となったことと調査が2ヶ年にわたり、その間で調査方法を変更せざるを得なかったことを大きな原因として、

第2表 新旧遺構番号対照表

第1次調査		第2次調査	
旧	新	旧	新
第2面 5号竪穴住居跡 7号竪穴住居跡 8号竪穴住居跡 9号竪穴住居跡	13・14号溝上層包含層	第1面 S133 S134 S531 S537	14号土坑 1号竪穴状 2号竪穴状遺構 1号竪穴状遺構
		第2面 S607 S601 S602 S600	3号竪穴状遺構 4号竪穴状遺構 5号竪穴状遺構 31号住
		S610 S631 S613～624 S625～629	16号溝 15号溝 5号掘立 4号掘立
		第3面 3面1号土坑 3面2号土坑 3面3号土坑 3面4号土坑 3面5号土坑 3面6号土坑 3面7号土坑 3面1号溝	15号土坑 16号土坑 17号土坑 18号土坑 19号土坑 20号土坑 21号土坑 2区14号溝
		第4面 4面1号竪穴住居跡 4面2号竪穴住居跡 4面3号竪穴住居跡	32号竪穴住居跡 33号竪穴住居跡 34号竪穴住居跡
		4面1号土坑 4面2号土坑	22号土坑 23号土坑

様々な問題のある調査となった。ここでおわびするとともに、今後、このような傾斜地で複数の遺構面が存在する遺跡を発掘する場合、どのような方法が有効か検討することを、調査担当者である我々に課せられた大きな宿題として受けとめたいと思う。

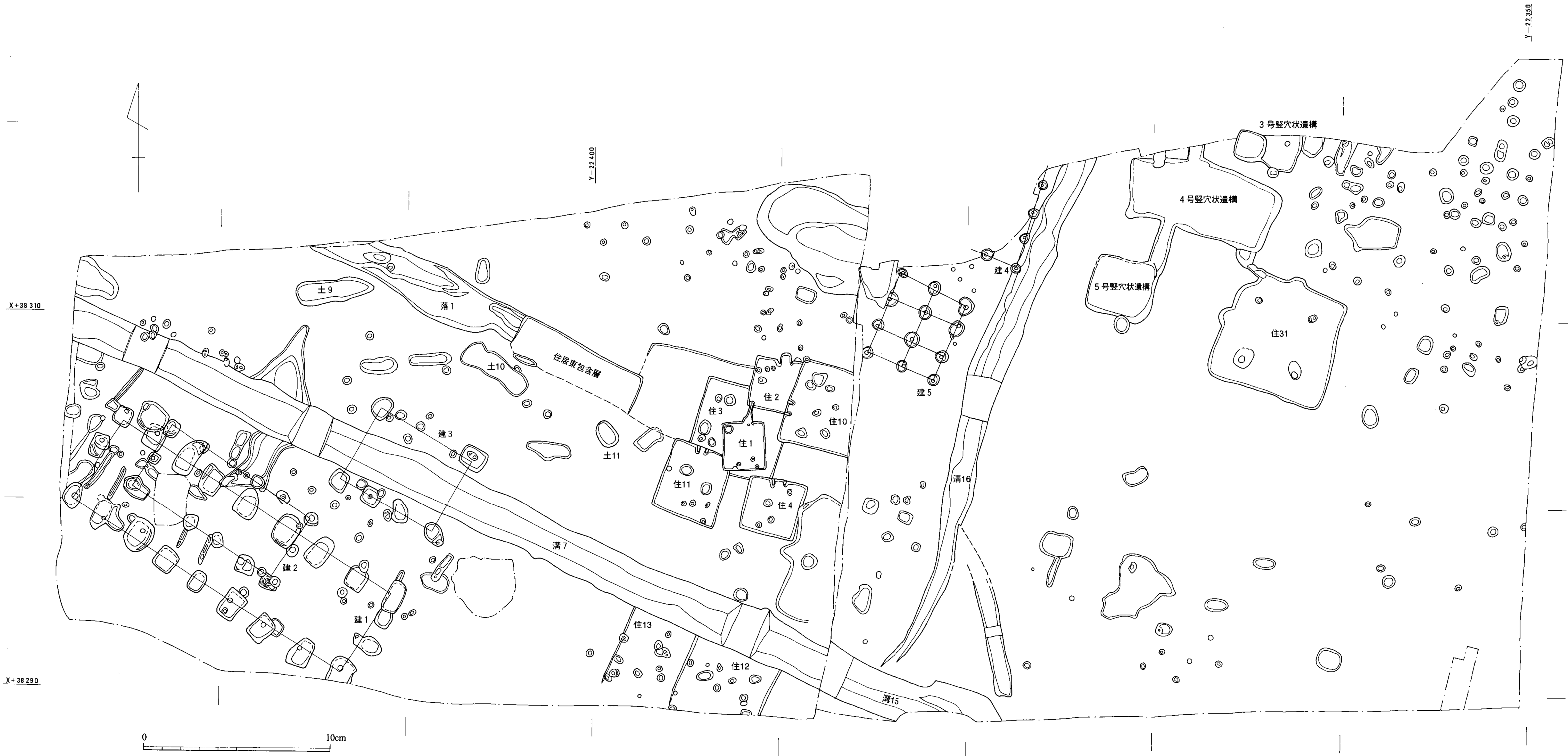
2. 1区の検出遺構と遺物

(1) 第1面の遺構と出土土器

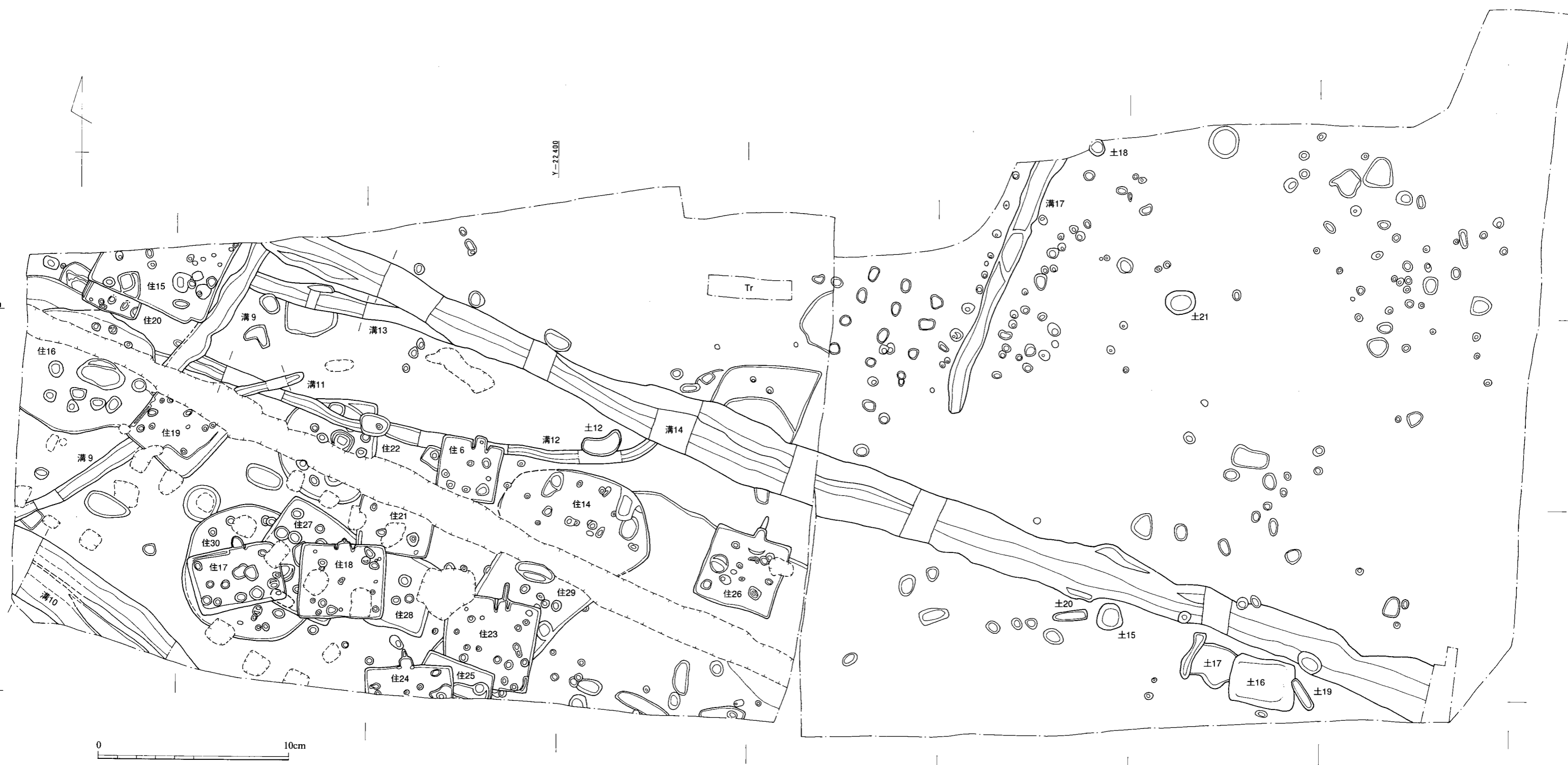
検出した遺構は土坑8基、溝6条、集石遺構1基である。このほかに調査区東北半分には多数のピットを検出したが、特に掘立柱建物を構成するような関係は抽出できなかった。また、調査区の各所で不整形の落ち込み状に発掘を行っているが、これは遺物を含むため遺構となる可能性を考えて掘り下げた部分である。



第5図 第1面遺構配置図 (1/200)



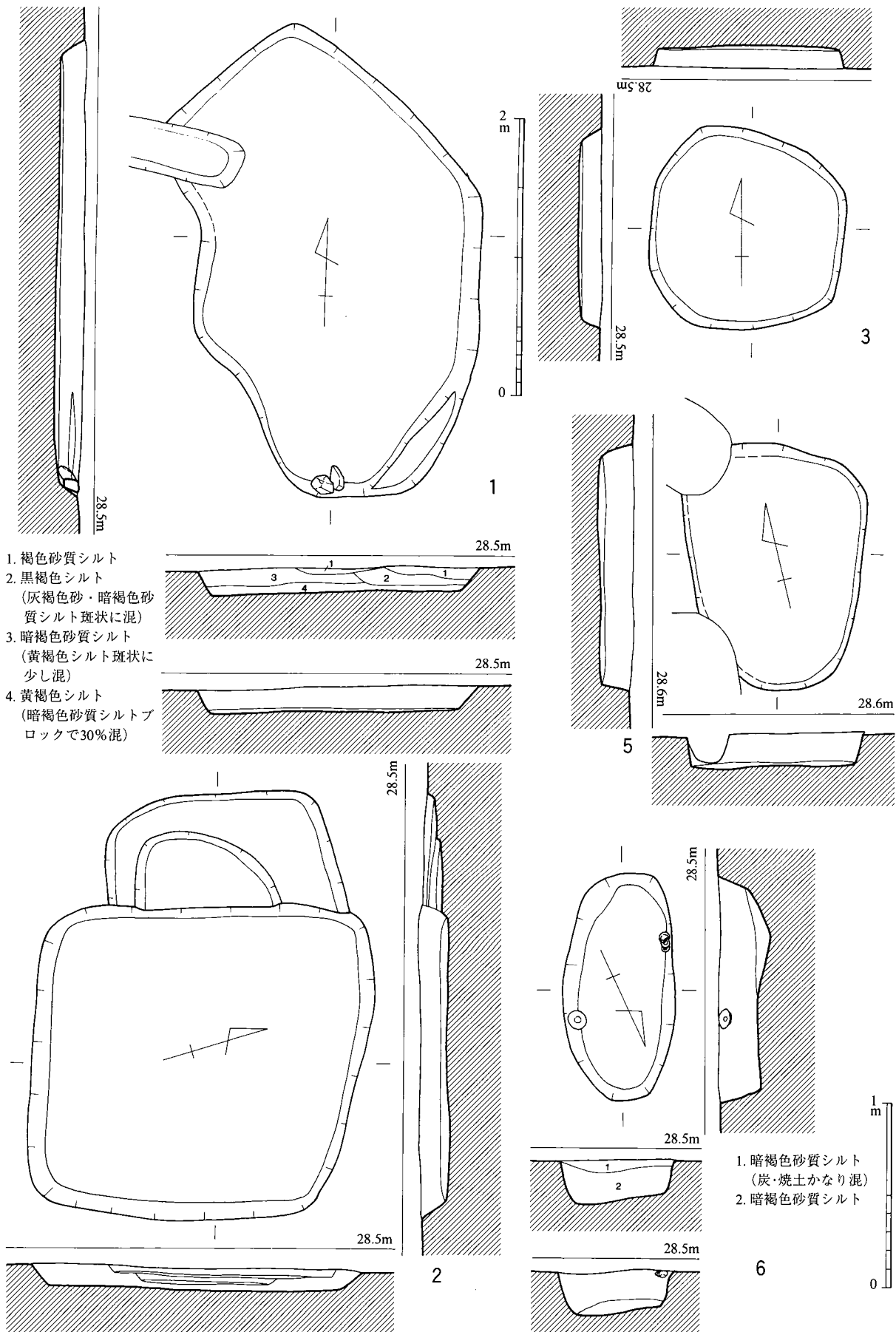
第6図 第2面遺構配置図 (1/200)



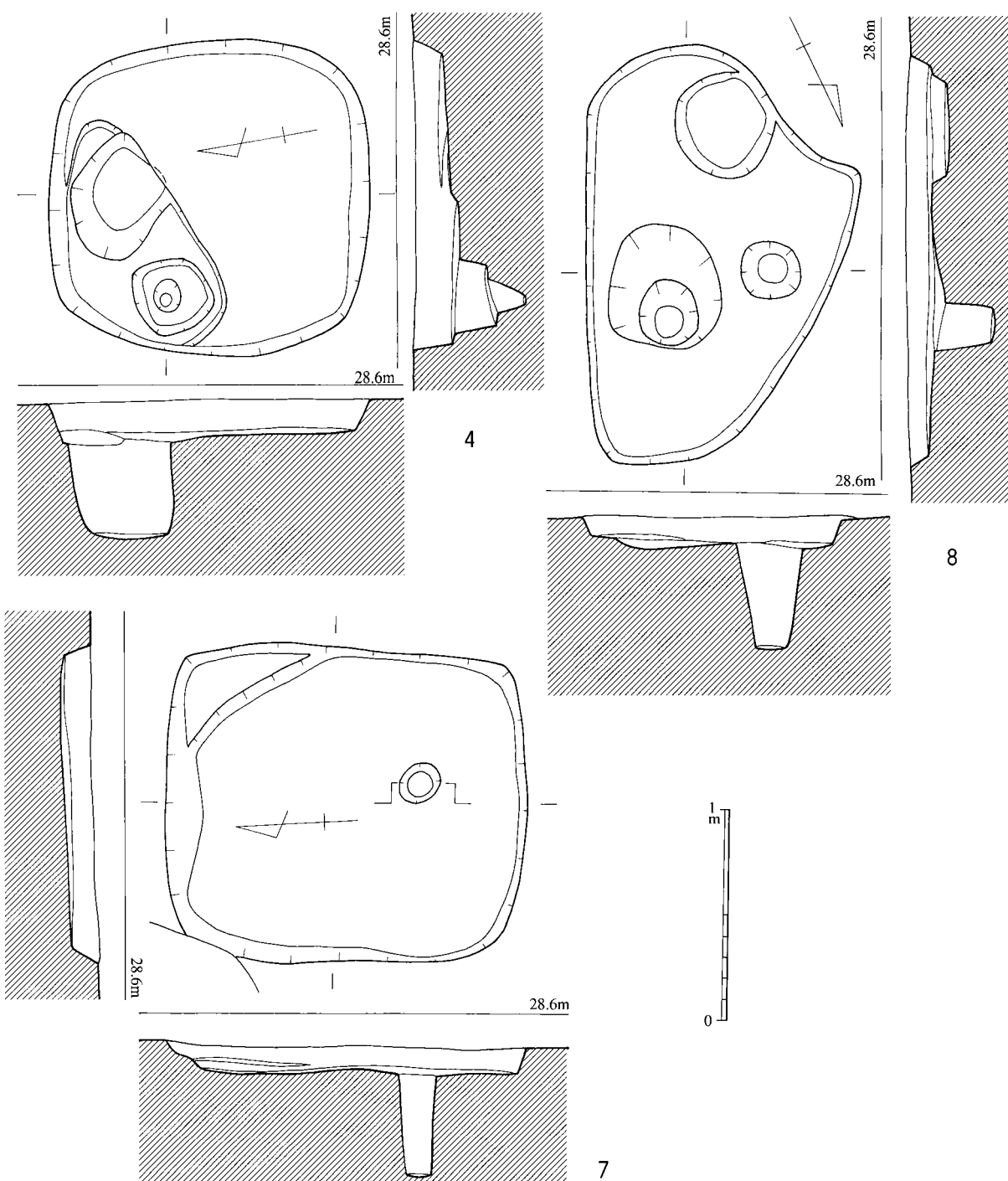
第7図 第3面遺構配置図 (1/200)



第8図 第4面遺構配置図 (1/200)



第9図 1~3・5・6号土坑実測図 (土1は1/40、他は1/30)



第10図 4・7・8号土坑実測図 (1/30)

a. 土坑

1号土坑 (図版2、第9図)

1区のほぼ中央に位置する平面楕円形の土坑である。南北方向に長軸をとるほぼ楕円形の平面形を呈し、長さ1.7m、幅1.15mを測る。底面はほぼ平らで深さは10cmに満たない浅い土坑である。覆土は褐色～暗褐色砂質シルトを主体としている。

出土土器 (図版27、第11図1) 図示できる唯一の遺物で、土師器杯である。底部はやや大きく口

縁部は直線的に外傾して立ち上がり、口径10.8cm、器高2.6cm。底部外面にはヘラ切り痕の後、板状圧痕が確認できる。胎土は精良で、1~3mm大の長石・石英を少し含み、褐灰色を呈する。

2号土坑 (図版3、第9図)

1区中央やや北よりに位置する土坑である。ほぼ東西方向に主軸をとる正方形土坑の西側に浅い掘り込みが接し、2つの土坑が切り合う可能性もある。正方形部分は1.7×1.8m、西の浅い掘り込みは南北1.3m、東西0.6m。深さは10cm余りで、底面はほぼ平らである。図示できる遺物はない。

3号土坑 (図版3、第9図)

1区中央やや北より、2号土坑の東に位置している。ほぼ円形を呈し、南北1.1m、東西1.05mを測り、底面は平らで深さ15cm前後である。埋土は黒褐色シルトが主体となっている。図示できる出土遺物はない。

4号土坑 (図版3、第10図)

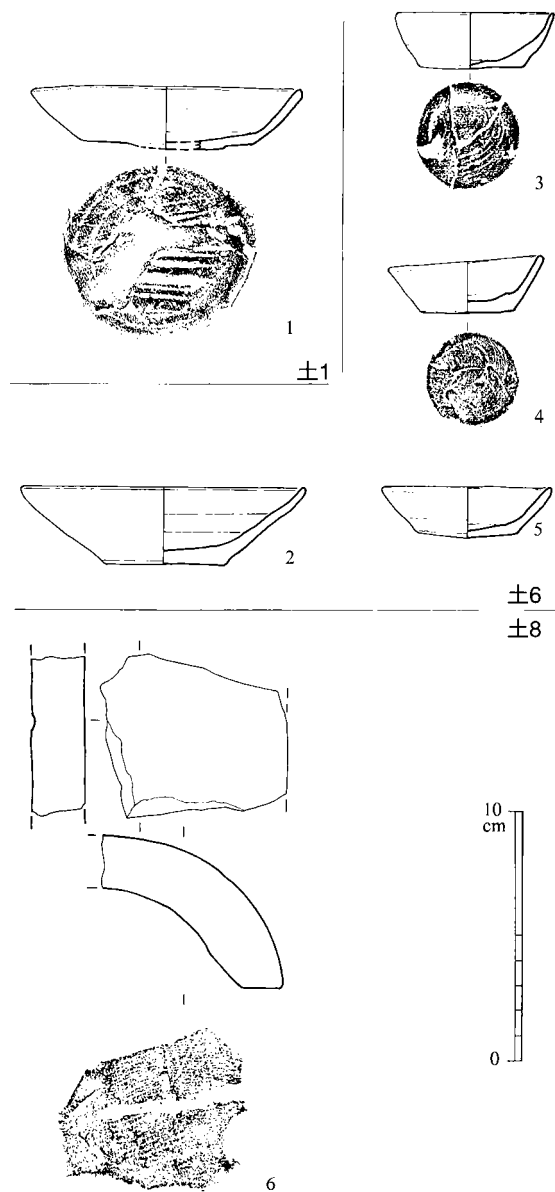
1区のやや東北より、3号土坑の東北に位置している。土坑の平面形はやや隅の丸いほぼ正方形を呈しており、東西および南北とも長さ1.5m程である。全体的には深さ15cm余りであるが、土坑の北西側に直径0.4m前後、深さ40cm前後の2つのピットがある。図示できる土器はないが、鉄器片(第87図1)が出土している。

5号土坑 (図版4、第9図)

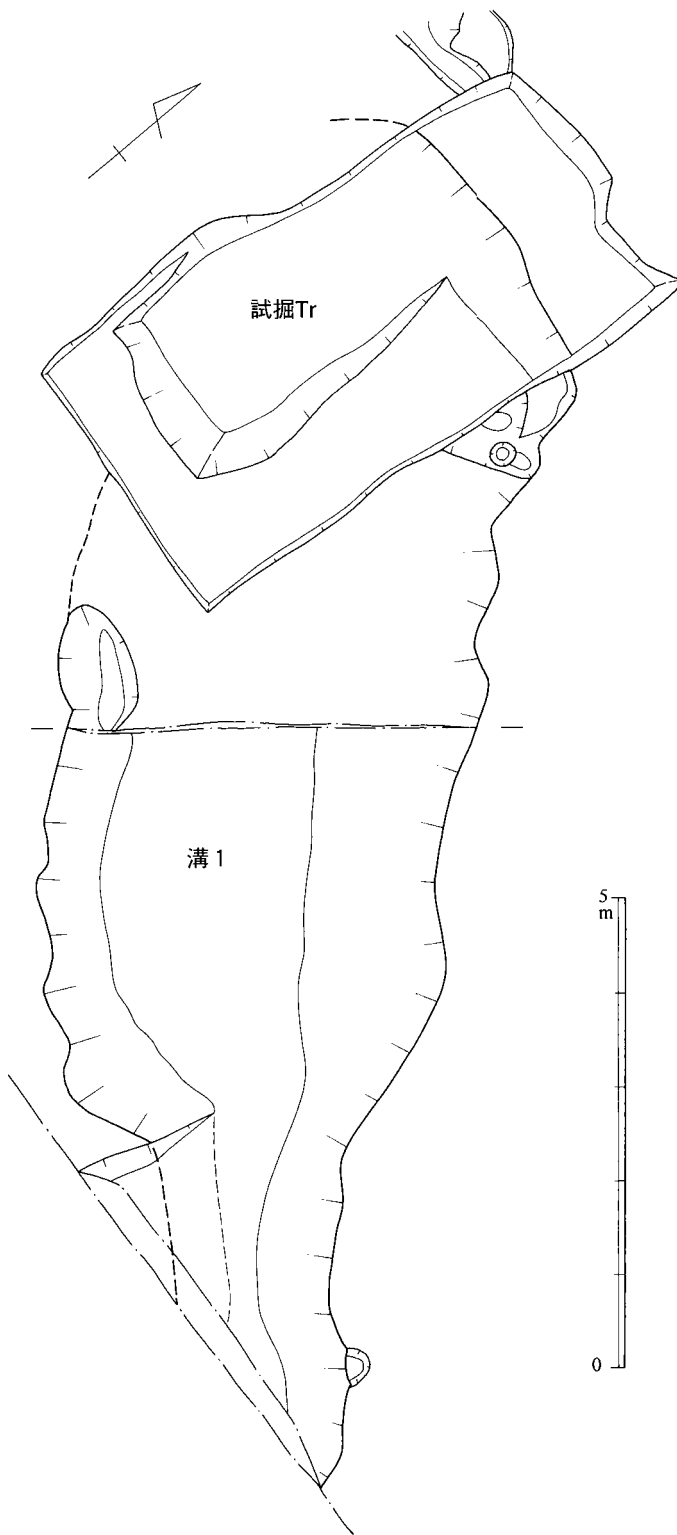
1区中央やや東よりに位置し、西北、西南をピットに壊されているが、ほぼ南北に主軸をとる楕円形土坑と言える。長さ1.35m、幅1.0m、深さ15cm余りで、床面はほぼ平らである。図示できる出土遺物はない。

6号土坑 (図版4、第9図)

1区やや東北に位置し、ほぼ南北に主軸をとる楕円形の土坑である。南北1.2m、東西0.6mを測り、



第11図 1・6・8号土坑出土土器・瓦実測図 (1/3)



第12図 1号溝平面実測図 (1/80)

1区東側中央に位置しており、平面は隅丸のほぼ正方形を呈し、東北隅にテラスがある。南北1.7m、東西1.5mを測り、深さは15cm前後である。床面やや南寄りに直径20cm弱、深さ50cm弱のピットがあるが、あるいは包含層を掘り過ぎた可能性がある。埋土は黄褐色砂質シルトブロックを含んだ暗褐色砂質シルト。図示できる出土遺物はない。

8号土坑 (図版5、第10図)

1区東側中央に位置し、7号土坑の西北に接している。北東-南西に主軸をとるほぼ楕円形の平面

中央東肩近くより土師器椀1点、中央西肩近くより土師器皿3点が出土している。また、覆土の上層には炭・焼土が含まれていた。深さは掘り上りでは20cm余りであるが、土器の出土状況からすれば下層の包含層を掘り過ぎた可能性が高い。

出土土器 (図版27、第11図2~5) 遺構図に出土状況を図示したように、土師器杯1点と土師器小皿3点が出土している。2は土師器杯であり、底部はやや小さく、体部でわずかに外反しつつ直線的に外傾している。底部外面は水平な面をなし、摩滅が進んでいるが糸切り痕が確認できる。口径11.2cm、器高3.1cm、底径4.9cmを測り、白黄褐色。3~5は土師器小皿である。3・4は口縁部がやや内湾気味に立ち上がり、深い器形をなしているが、5は口縁部が直線的に外傾しており、一括性は高いにもかかわらず器形に違いがある。3は6.3cm、器高2.3cm、底径4.0cm、4は6.2cm、器高2.2cm、底径3.7cm、5は口径6.8cm、器高2.0cm、底径3.9cmを測り、いずれも暗黄褐色を呈する。

7号土坑 (図版4、第10図)

1区東側中央に位置しており、平面は隅丸のほぼ正方形を呈し、東北隅にテラスがある。南北1.7m、東西1.5mを測り、深さは15cm前後である。床面やや南寄りに直径20cm弱、深さ50cm弱のピットがあるが、あるいは包含層を掘り過ぎた可能性がある。埋土は黄褐色砂質シルトブロックを含んだ暗褐色砂質シルト。図示できる出土遺物はない。

形をなすが、やや西南に張り出しており長さ2.0m、幅1.3mを測る。床面はほぼ平らで深さ10cm余りであるが、南側に大小3基のピットがある。埋土は黄褐色シルトブロックを含んだ暗褐色砂質シルトである。

出土瓦（第11図6） 図示できるのは丸瓦片1点である。残存するのは丸瓦の側縁で、裏面は布目圧痕、凸面は板ナデ仕上げである。厚さ2cm前後で黄灰褐色を呈し、焼成は軟らかい瓦質。

b. 溝状遺構

1号溝（図版6、第12・13図）

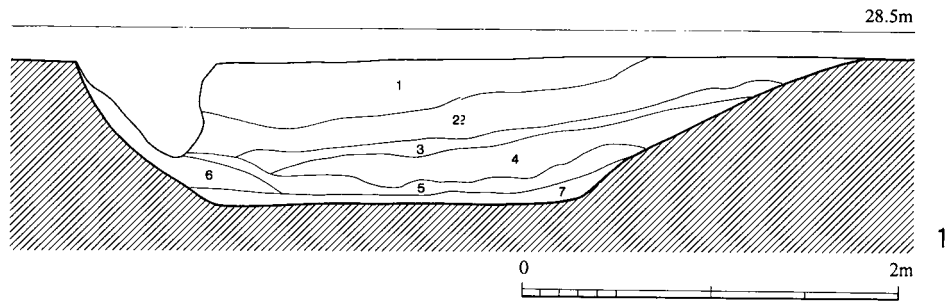
1区中央南壁際で検出された西北―東南方向の溝状遺構である。西北は試掘トレンチと重なっているが、それ以上西北に伸びないことは確実であるので、ちょうど試掘トレンチの位置で収束していた可能性が高い。また、東南部は調査区外へと続いているが、壁際で幅が急激に減少している。その部分の西側肩は誤って広く掘り過ぎていたが、壁の土層で溝断面を確認したところ、東側肩と同様にすぼまると判断された。したがって、単純な用排水ないしは区画のための溝状遺構とはならないと考えておくべきであろう。全体的には幅4.5m、細くなる東南部では幅1.8m前後である。底面標高は東南部27.7m前後、土層断面を作成した部分では27.6m前後と、東南から西北方向にわずかに傾斜しているようである。土器の他に硯片（第84図34）、石臼片（第84図35）、滑石製石鍋片（第85図3）、土錘（第86図1）、鞆羽口片（第86図10）、製塩土器片（第86図11）、鋳銅容器耳部破片（第87図12）が出土している。

出土土器（図版27、第15図1～12） 1～5は須恵器である。1は口径14.9cmを測る杯蓋口縁部片である。口縁部は嘴状に短く直立し、天井部外面はヘラケズリを施す。2は高台付杯身の底部片である。高台は低くわずかに外に踏ん張る形態である。1・2とも灰色で良く焼き締まっている。3は直立する口縁部片で内面にハケメ風の条痕が残る。口径17.6cmを測る。4は甕頸部付近の破片で、胴部外面は擬格子タタキ、内面には同心円文当具圧痕が残り、口縁部外面には極く一部にカキメが残存する。頸部径21.2cmで、胴部内面が紫灰色を呈する他は灰緑色。5は甕口縁部～頸部の破片で、口径は26.6cmを測る。口縁部は頸部から強く外反し、短く直立する口縁端部に至る。胴部内面は同心円タタキ当具圧痕が一部に残り、外面～口縁部上面には焼成時に灰をかぶる。灰色。

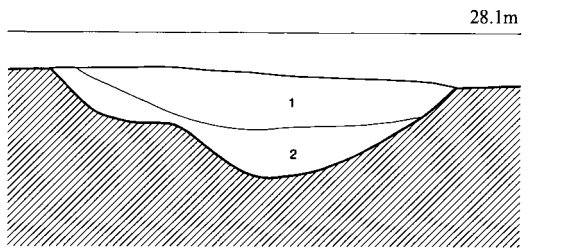
6は口径26.4cmを測る土師質鍋。口縁部から3.5cm程下がった胴部やや上位外面に段が巡るが、その上部は指頭圧痕を良く残すナデ、それより下は丁寧なナデであるいは型づくりによるものか。胴部内面は横方向の粗いハケメ。外面には煤がかなり厚く付着し、外面暗褐色、内面黄褐色を呈す。

7・8は青磁である。7は外面に縦方向の片刃彫りで浅い蓮弁文を施し、口縁部は短く外反した椀の破片。生地は灰白色で、釉は透明度の高い薄いオリーブ色。8は若干上げ底気味の底部片である。底部端はやや突出し、底部～胴部外面の残存部分は露胎である。内面は底部よりやや上に目跡らしき土が付着している。胎土は精良で、釉は透明に近いがわずかにオリーブ色を帯びている。底径5.7cm。器形は一般の椀よりやや急に体部が立ち上がっている。

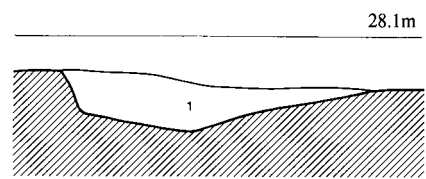
9～12は白磁椀片。9・10は玉縁状の口縁部をなす破片で、9が口径15.1cm、10が口径15.8cmを測る。9は生地が灰白色で気泡の多い濁った釉であるのに対して、10は生地灰色で、気泡の少ない透明な釉である。11・12は底部片。11は上げ底気味の高台で、体部外面に跳びカンナ状のケズリを施す。底部外面～体部外面下部は露胎で、釉は濁った白色を呈す。高台径7.2cm。12は高台が断面台形を



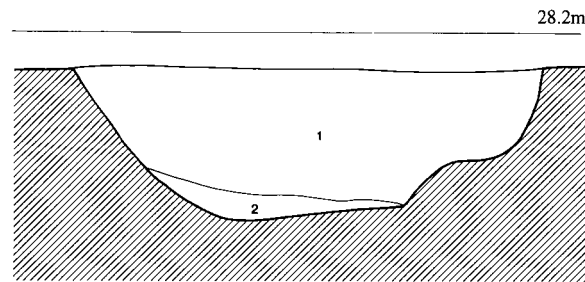
- 1. 暗褐色砂質シルト
- 2. 暗褐色砂質シルト (黄褐色砂質シルト斑状30%混)
- 3. 黄褐色砂質シルト (暗褐色砂質シルト斑状20%混)
- 4. 暗褐色砂質シルト (黄褐色砂質シルト斑状30%混)
- 5. 黄褐色砂質シルト (灰色砂・暗褐色砂質シルト斑状20%混)
- 6. 黄褐色砂質シルト
- 7. 灰色砂質シルト土 (暗褐色シルト・黄褐色シルト20%混)



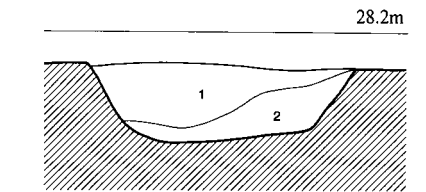
- 1. 褐色シルト (鉄分混)
- 2. 暗灰褐色砂質シルト (鉄分少し混)



- 1. 灰褐色砂質シルト



- 1. 暗灰褐色砂質シルト (土器細片多)
- 2. 暗灰黄褐色粘質シルト



- 1. 褐色砂質シルト
- 2. 灰褐色砂質シルト (黄褐色砂質シルト斑状に20%混)

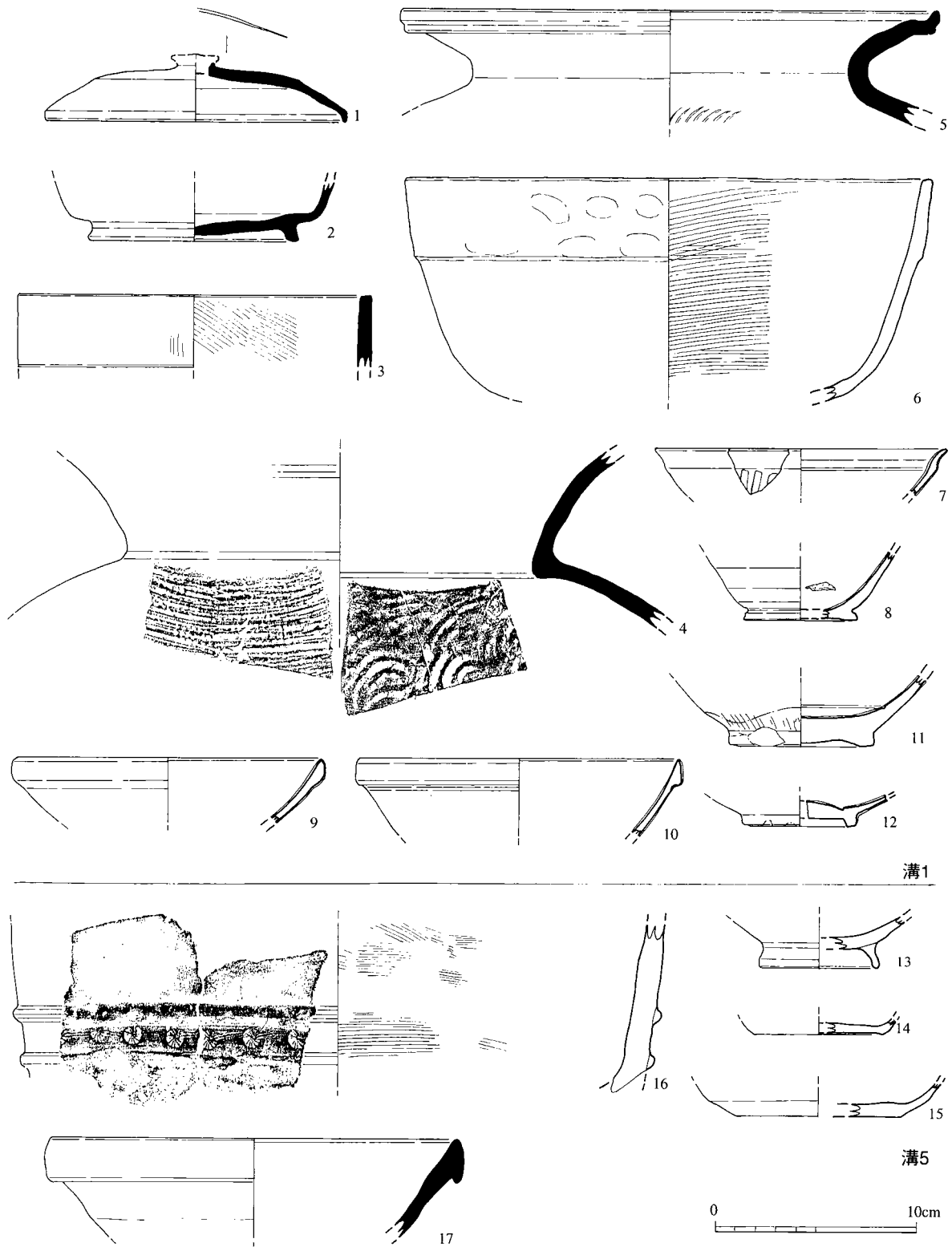
第13図 1~5号溝土層実測図 (溝1は1/40、他は1/20)

呈し、内面見込みがレンズ状に突出している。底部外面、畳付までは露胎であるが、高台外面まで青色を帯びた貫入の多い白色釉をかけている。高台径5.7cm。

これらの土器のうち最も新しいと思われる青磁碗等から推測して、遺構の下限は14世紀代に収まるものと思われる。

2号溝 (図版5、第5・13図)

1区南西部で検出した細い溝で、東南-西北西方向にやや屈曲しながら走る細い溝として発掘調査を実施した。幅1.2m前後であるが、西壁際ではやや幅広くなっている。深さは30cm弱と浅く、南壁際底面標高27.97m、西壁側底面標高27.67mを測り、底面は緩やかに西側へ低くなっている。しかしながら、第3面で検出した10号溝北側肩とほぼ方向、位置が一致しており、その一部を誤って発掘調査した恐れもある。立ち上がりは全体的に緩く、底面はやや船底形に近い。西側では誤ってプランを広く想定したため、テラスが形成されている。図示できる出土遺物はない。



第14図 1・5号溝出土土器実測図 (1/3)

3号溝 (図版5、第5・13図)

1区西部で検出した細い溝で、東端を試掘トレンチにより破壊され、西側は壁をこえて調査区外へと続いている。方向は2号溝とほぼ平行しており、幅は広い所で1.1m程、狭い所で0.8m程である。深さ15cm弱と浅く、床面はやや船底形に近い。底面標高は東端で27.87m、西端で標高27.86mを測

り、大きな差はない。埋土は砂質土を主体とし、比較的、多量の鉄分を脈状に含んでいた。図示できる出土遺物はない。

4号溝（図版5・6、第5・13図）

3号溝の北に位置し、東南－西北方向へ3号溝とほぼ平行して走る。西壁から13m程の所で東端が検出されており、西側は調査区外へと伸びている。幅はさほど広くなく0.6m前後、深さは20cm余りで底面はやや平坦である。底面標高は東端で27.99m、西端で27.86mを測り、東から西に向かって低くなっている。図示できる出土遺物はない。

5号溝（図版5・6、第5・13図）

4号溝の北に位置し、2～4号溝とほぼ平行する東南－西北方向の溝である。これらの溝の方向は傾斜する旧地形の等高線にほぼ平行すると理解することができる。3号溝東端の北側で東端が検出されており、西は調査区外へと続いている。幅は東端近くがやや広く1.1m前後、西壁際は狭くなり0.6m前後である。深さは40cm前後で、底面標高は東端で27.67m、西端で27.83mであり、西から東に向かって低くなっている。覆土に土器細片を多量に含んでいたことが特徴である。土器の他に砥石（第83図23）、鉄器片（第87図3）が出土している。

出土土器（第14図13～17） 13～15は土師器である。13は比較的高い高台に丸みをもった体部がつく椀である。底部径5.7cmを測る。淡橙褐色を呈し、胎土は精良である。14は糸切り底の小皿で、底部径6.4cmを測る。灰褐色を呈す。15は平底の杯底部片である。底部外面は摩滅が進むが、ヘラ切りのまま未調整の可能性が高い。底部径8.2cmを測り、淡橙褐色を呈す。

16は瓦質火鉢の底部に近い胴部破片。胴部は直立に近い角度で立ち上がり、下部に2条の頂部の丸くなった断面三角形突帯をめぐらして、その間に菊の花形のスタンプ文を施文する。突帯部の径32.2cmを測る。胴部内面はハケメ仕上げである。胎土はかなり粗く、内面灰褐色、外面暗灰色を呈している。

17は須恵器鉢で、口径20.0cmを測る。口縁部を肥厚させ、下に拡張させることが特徴的である。内外灰色を呈し、焼成は良好である。

図示可能な遺物は量的には少ないが、瓦質火鉢、須恵器鉢の形態から考えて、1号溝と同様に、14世紀代と思われる。

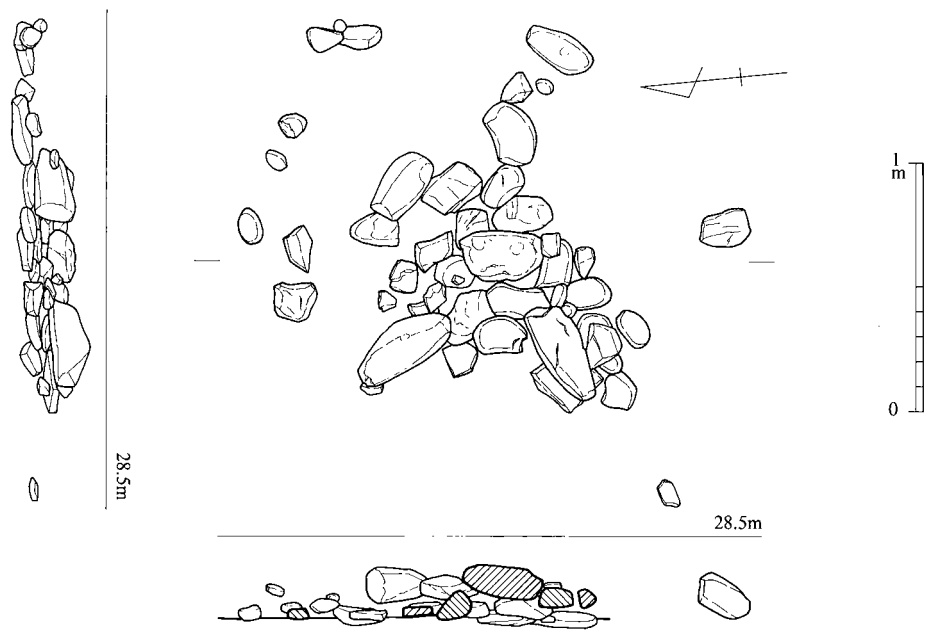
6号溝（第5図）

1区東北隅で検出したもので、やや東に振りながら南北方向に走る。幅0.5m前後、深さ10cm前後の細く浅い溝であり、底面標高は南端で28.36m、北側で28.26mを測り、南から北に向かって低くなっているようである。図示できる出土遺物はない。

c. その他の遺構

1号集石遺構（図版5、第15図）

1区中央やや南寄りで検出した。床土直下の標高28.2m前後の高さで楕円形の軽石を中心に半径1mの範囲に人頭大川原石の広がっていた。本遺構面は沖積作用で堆積した細砂、シルトの包含層



第15図 1号集石遺構実測図 (1/30)

の上に形成されており、ほとんど石を含んでいないので、これら大形の石は人為的な遺構として捉えられる。中央に大形の軽石があるほかに、片岩がいくつか含まれているが、大半は玄武岩、花崗岩の人頭大川原石である。集石の下部には掘方も無いので直接、地表面に石を積んだと思われるが、何らかの構造物の存在を示唆する配置にはなっていない。関連する出土遺物も皆無である。

(2) 第2面の遺構と出土土器

第2面の検出遺構には掘立柱建物3棟、竪穴住居跡8棟、土坑3基、溝2条がある。竪穴住居跡群は調査区の東中央に集中するが、奈良時代の1号竪穴住居跡以外の古墳時代竪穴住居跡の検出には非常に苦慮した。また、これら住居跡群の東には包含層として掘り下げた部分と1号落ち込み状遺構が位置する。しかしながら、第3面ではこれら落ち込み状遺構、包含層の下層に13・14号溝が発見されたので、その上部を間違っただけで発掘した可能性が高い。さらに古墳時代竪穴住居跡の一部も13・14号溝覆土上層を住居跡と誤認した可能性を否定できないことは認めねばならない。

このほか調査区東北部にピット群が集中しているが、特に建物は抽出できていない。また、7号溝西部及び掘立柱建物群周辺には幅10cm程の溝、ピット群があるが、溝あるいは建物群と関連する可能性があろう。

a. 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (図版9・10、第16・17図)

調査区の西南部に位置する梁間2間、桁行8間の大形掘立柱建物跡である。建物長軸はN-56°-Wでかなり西北方向に大きく振れており、旧地形の傾斜等高線と平行している。柱跡を検出したピットは少ないが、東南隅P1と西南隅P9では確実に柱痕が検出できた。その距離は17.00mであり、それより1尺30.4cm前後の尺度が導きだせる。これを適用すると桁行は柱間7尺等間隔の企画が推測できるが、柱痕の位置あるいは柱掘方の中心位置とはかなりずれている。梁行も7尺等間で隅の掘



1号掘立柱建物跡



2号掘立柱建物跡

方心々は合致しているが、中央の掘方の位置はやはり企画からはずれている。梁行7尺×2間とすると4.86mとなり、床面積は82㎡に達する比較的規模の大きい建物である。

柱掘方は楕円形に近いものもあるが、多くが梁行方向に長い隅丸長方形と理解できる。ほとんどが、1辺1m前後と規模が大きく、遺構検出面から掘方底面までの深さも0.7～1.2mと非常に深い。しかしながら、梁間中間のP10・P21、西南面桁行の中央のP5の掘方は他と比較してやや小振りである。掘方内の埋土は黄褐色砂質シルト、灰褐色砂質シルト、暗褐色砂質シルトが5～10cmの厚さで互層に堆積しており、水平方向の層位が発達した典型的な古代の掘立柱建物の柱掘方となっている。

柱痕はP1・P2・P3・P4・P7・P8・P9・P10・P12で確認することができたが、他の掘方では確認できていない。これは柱痕埋土が掘方埋土と近似しており、両者を識別できないまま掘り下げてしまった

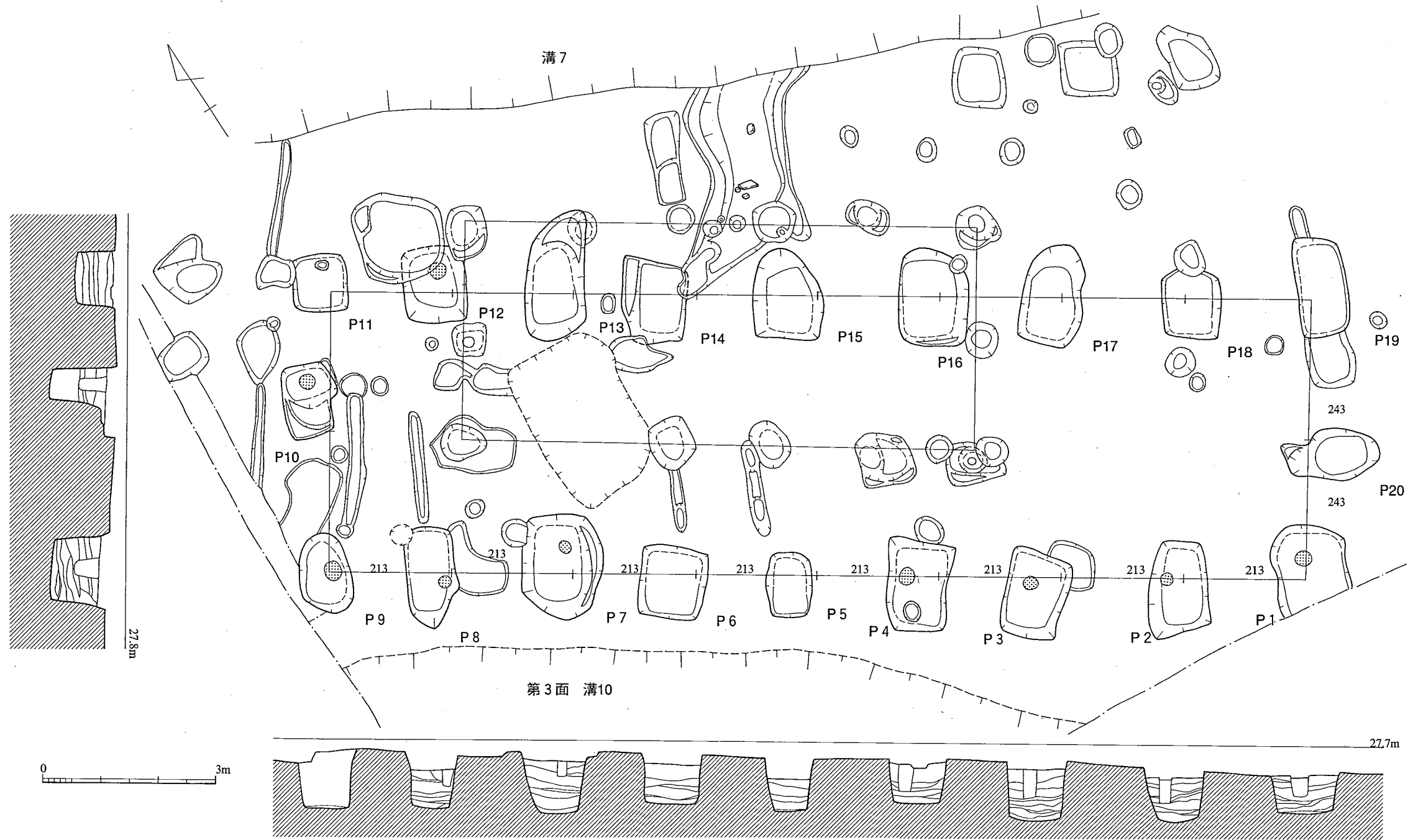
ためである。確認できた柱痕はいずれも径20～30cmと掘方規模と比較するならば、非常に小さいと言え、柱下面は掘方底面まで到達せずにその中間ほどに位置することも特徴である。また、上述したようにその位置も柱掘方の中心や想定される建物企画ともさほど一致していない。

なお、建物の西側には建物柱筋と方向がほぼ一致する柱穴がいくつか検出できたので、西側の調査区外に別の建物跡の存在する可能性を考えておくべきであろう。また、建物西側に梁行方向とほぼ平行する幅0.2m、深さ10cm程の溝が6条ほど確認されている。覆土も建物跡柱掘方埋土と類似するものであり、何らかの関連も考えられる。

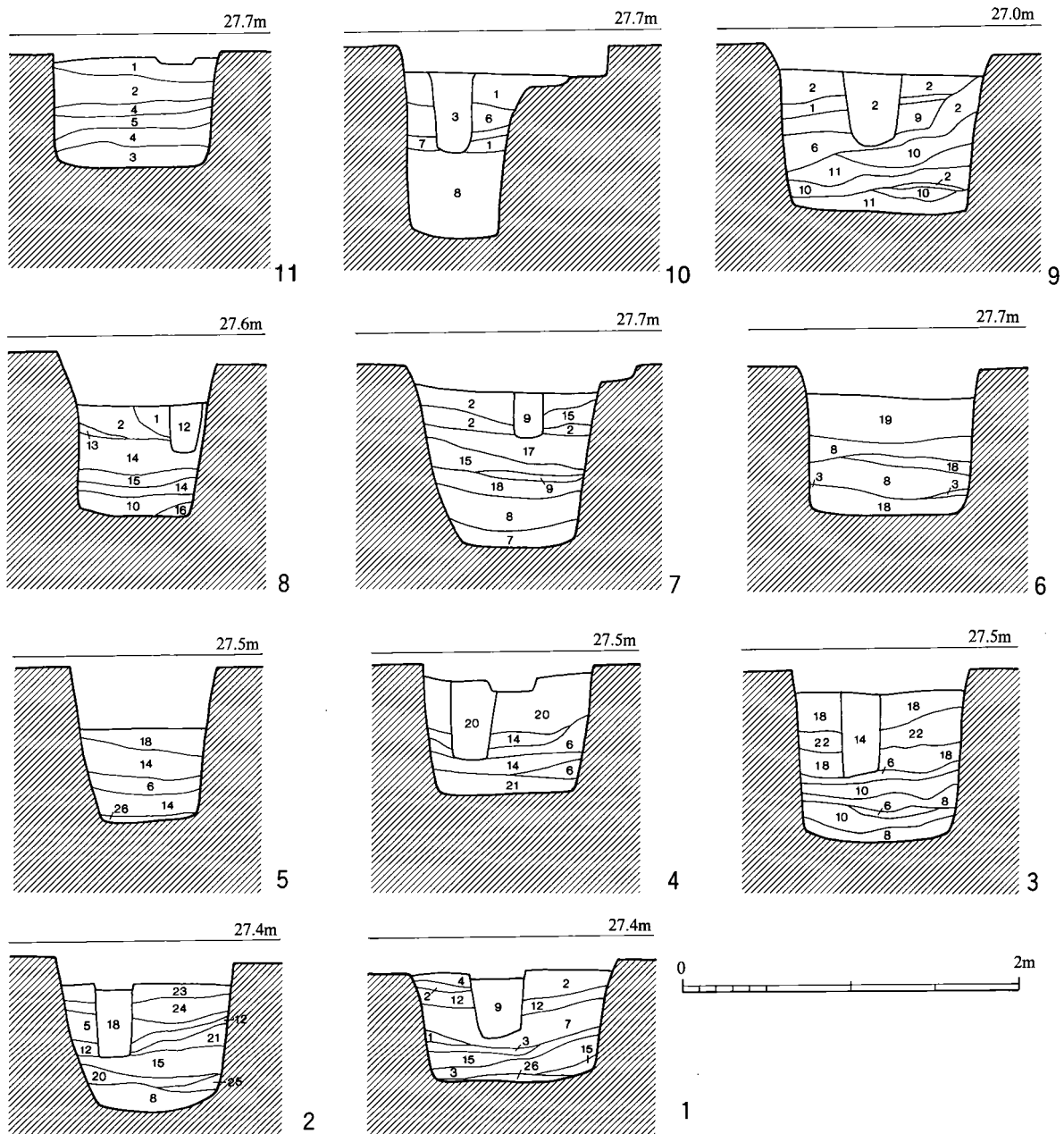
この1号掘立柱建物跡は2号掘立柱建物跡と重複・切合関係にあり、その先後関係が建物の性格を考える場合に重要となるが、1号掘立柱建物跡P11での切り合いから1号掘立柱建物跡が先行することを確認できた。また、第2面7号溝、第3面で検出した10号溝と1号掘立柱建物跡は非常に近接しており、同時に存在したとは考えにくい。これに対しては7号溝に接続する7号突出部がP14と切り合っており、1号掘立柱建物跡が先行するものと考えられる。したがって、7号溝が8世紀を中心とするので、建物はそれに先行することになろう。一方、10号溝とは切り合いがないので、その直接的な先後関係は不明である。

掘方より土器、石包丁破片（第82図18）が出土している。

出土土器（第18図1～13） いずれも掘方から出土したものである。



第16图 1号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

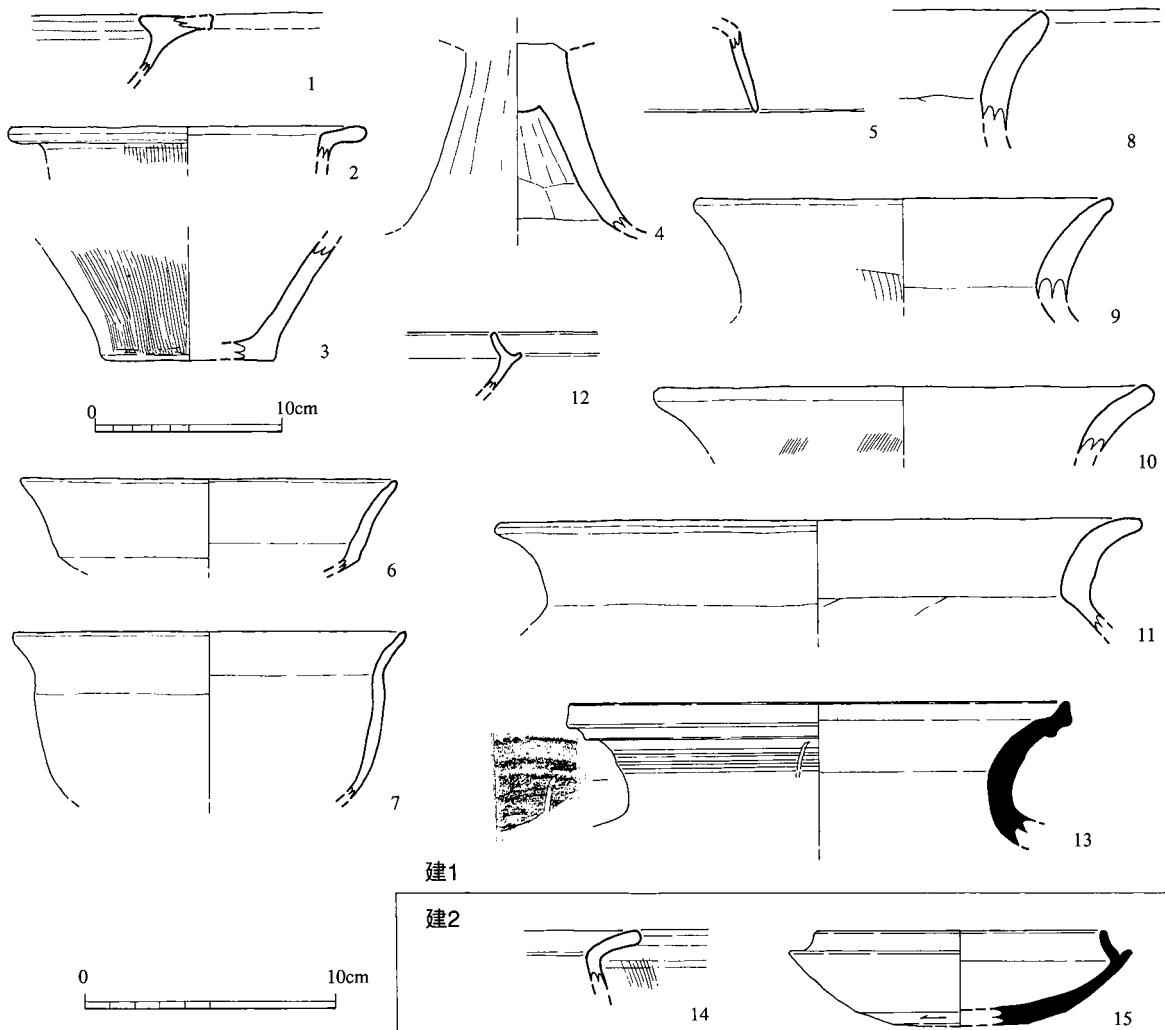


- | | | | |
|--------------|---------------|--------------------|-----------------|
| 1. 暗褐色砂質シルト | 7. 3に1が20%程混 | 13. 2に1が5%程混 | 19. 1に2・3が40%程混 |
| 2. 黄褐色砂質シルト | 8. 3に1が30%程混 | 14. 3に1・2が20%程混 | 20. 2に3が30%程混 |
| 3. 灰褐色砂質シルト | 9. 2に1が10%程混 | 15. 1に2が20%程混 | 21. 3に1が10%程混 |
| 4. 1に2が30%程混 | 10. 3に2が20%程混 | 16. 1に暗灰褐色粘質土30%程混 | 22. 3に2が10%程混 |
| 5. 2に1が20%程混 | 11. 1に3が20%程混 | 17. 2に1が30%程混 | 23. 2に1・3が10%程混 |
| 6. 1に3が30%程混 | 12. 1に2が10%程混 | 18. 3に2が30%程混 | 24. 2に1・3が30%程混 |
| | | | 25. 20に似るがやや暗い |
| | | | 26. 灰褐色粘質シルト |

第17図 1号掘立柱建物跡実測図柱穴土層 (1/40)

1~3は弥生土器である。1は中期後半の丹塗り高杯口縁部片で、外面は摩滅によりほとんど丹塗りが失われている。2は甕口縁部片で直径18.8cmを測る。口縁部はほぼ水平に外折しており、端部は丸い。3は底部片で、底部は薄く、やや外反しながら胴部に続く。2・3とも淡黄褐色を呈する。これらの甕も1の高杯とほぼ同時期であろう。

4~11は土師器片。4は高杯脚部片で、内外かなり摩滅が進むが、外面縦方向のケズリで稜が立ち、

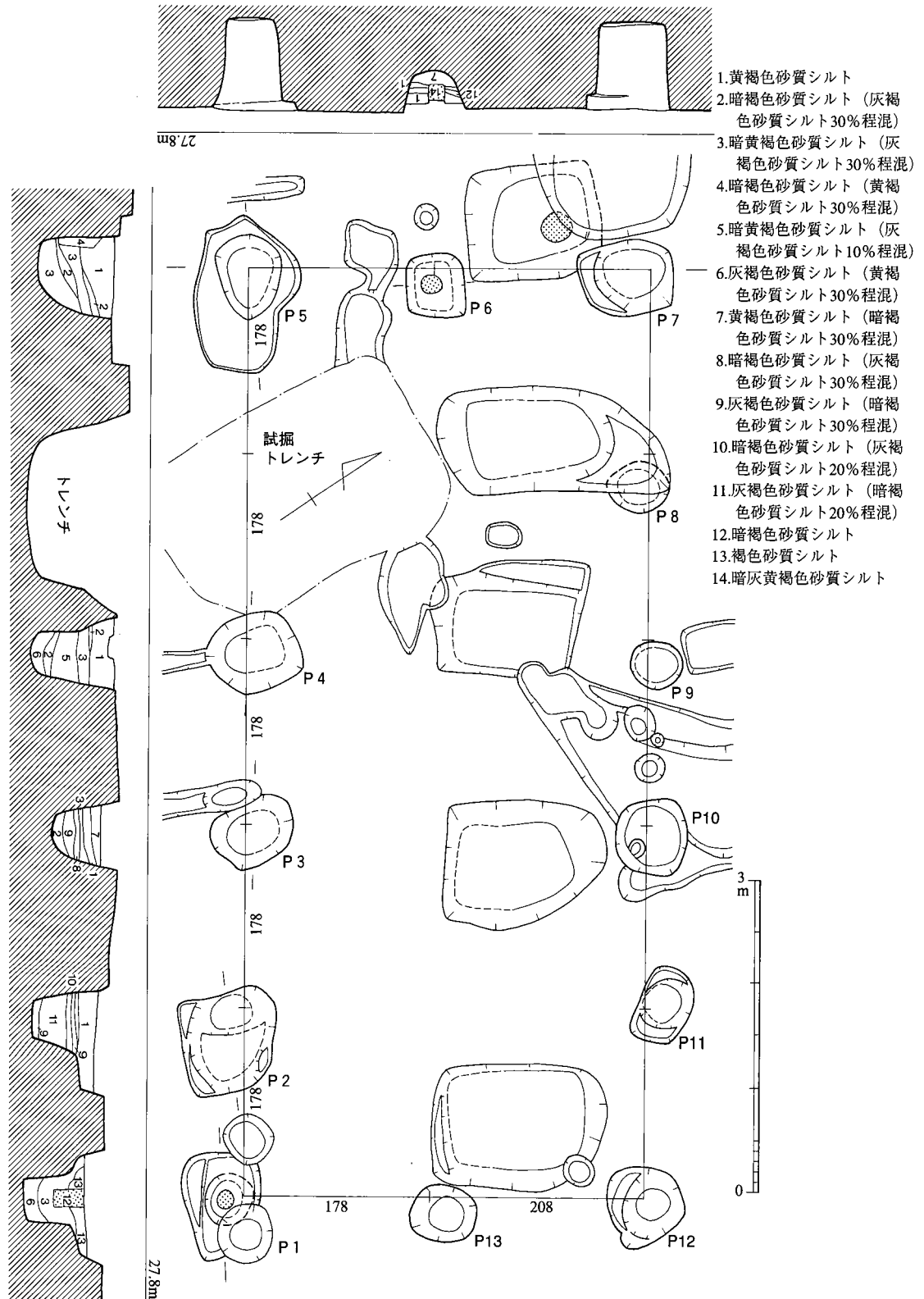


第18図 1・2号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1~3・14は1/4、他は1/3)

内面もケズリ仕上げである。脚上部は中実となっている。5は模倣杯蓋口縁部片でわずかに傾きながら立ち上がる。6は高杯口縁部片である。口径14.9cmを測り、口縁部はかなり急に杯底部から立ち上がって外反しつつ口縁端に至る。7はやや深めの鉢。胴部は比較的張りが無く、頸部もさほどくびれずに緩やかに外反する口縁へと続く。内外ともナデで仕上げている。8~11は甕の口縁部片である。9は口縁部がやや長く、11は頸部まで胴部内面のヘラケズリが達し、口縁は強く屈曲して外反する。以上の土師器は4・5・7・11が淡橙褐色、6・10が白橙色、8が淡黄褐色、9が淡褐色を呈す。

12は須恵器杯身口縁部片。立ち上がりは短く、内傾している。13は甕口縁部片で、口縁端部は上につまみ出して直立する面をなし、その直下の外面に突帯が巡る。頸部外面はカキメを施し、一部ヘラ記号状の線刻が残る。口径19.8cmを測り、内面暗灰色、外面黒灰色を呈する。

以上に述べた1号掘立柱建物跡の掘方から出土した土器は、大きく弥生時代中期後半のものと、古墳時代後期の須恵器・土師器に大別される。実測できない小片も、同時期のものがほとんどである。これらは1号掘立柱建物跡の下層、第3面で検出された竪穴住居跡の時期と符合しており、掘方掘削時にこれら先行する遺構に達したことにより、混入したものと判断される。したがって、直接、



第19図 2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

建物跡の時期を指し示すものではないので、建物跡の時期の判断にはやはり遺構間の切合関係等を重視すべきであろう。

2号掘立柱建物跡（図版9・10、第19図）

1号掘立柱建物跡のほぼ中央部で切り合う掘立柱建物跡で、西南桁行の掘方が1基、試掘トレンチで失われているが、梁間2間、桁行5間となる。建物の主軸はN-56°-Wを測り、1号掘立柱建物跡とほぼ一致している。上述したように本建物跡P7と1号掘立柱建物跡P11が切り合っており、本建物跡が後続すると判断された。また、7号溝突出部と切り合う関係にあるが、両者の先後関係は不明であった。

柱痕の残るものが少ないのが、P1およびP5の掘方心々距離が890cmを測ることから、桁行は1尺29.7cmで6尺等間の企画が復元できる。一方、梁行はP1とP12の掘方心々間で386cmを測り、13尺となる。P6、P13ともやや西南方向に寄っているので、梁行の柱間は6尺、7尺になる可能性を考えておきたい。このような企画で建物平面形を復元すると床面積は34.3㎡となり、1号掘立柱建物跡よりかなり小さいものである。

柱掘方は円形、楕円形を基調としており、方形が主体の1号建物跡とは異なる。その規模も径および長径が0.5~0.8m、深さ50~80cm前後と1号掘立柱建物跡と比べて小さい。また、梁間の中央に位置する棟持柱掘方は特に小さいものとなっている。掘方内の埋土は、5~30cmの厚さで、灰褐色砂質シルト、黄褐色砂質シルト、暗褐色砂質シルトが互層に堆積しており、典型的な建物柱掘方の様相を呈している。柱痕は掘方埋土との峻別が困難であり、P1とP6のみで検出したに留まるが、径は25cmを測る。なお、これらの掘方はP8、P9を除くといずれも掘方心々、柱痕の位置が上で推定した尺度による企画とほぼ一致していると言える。

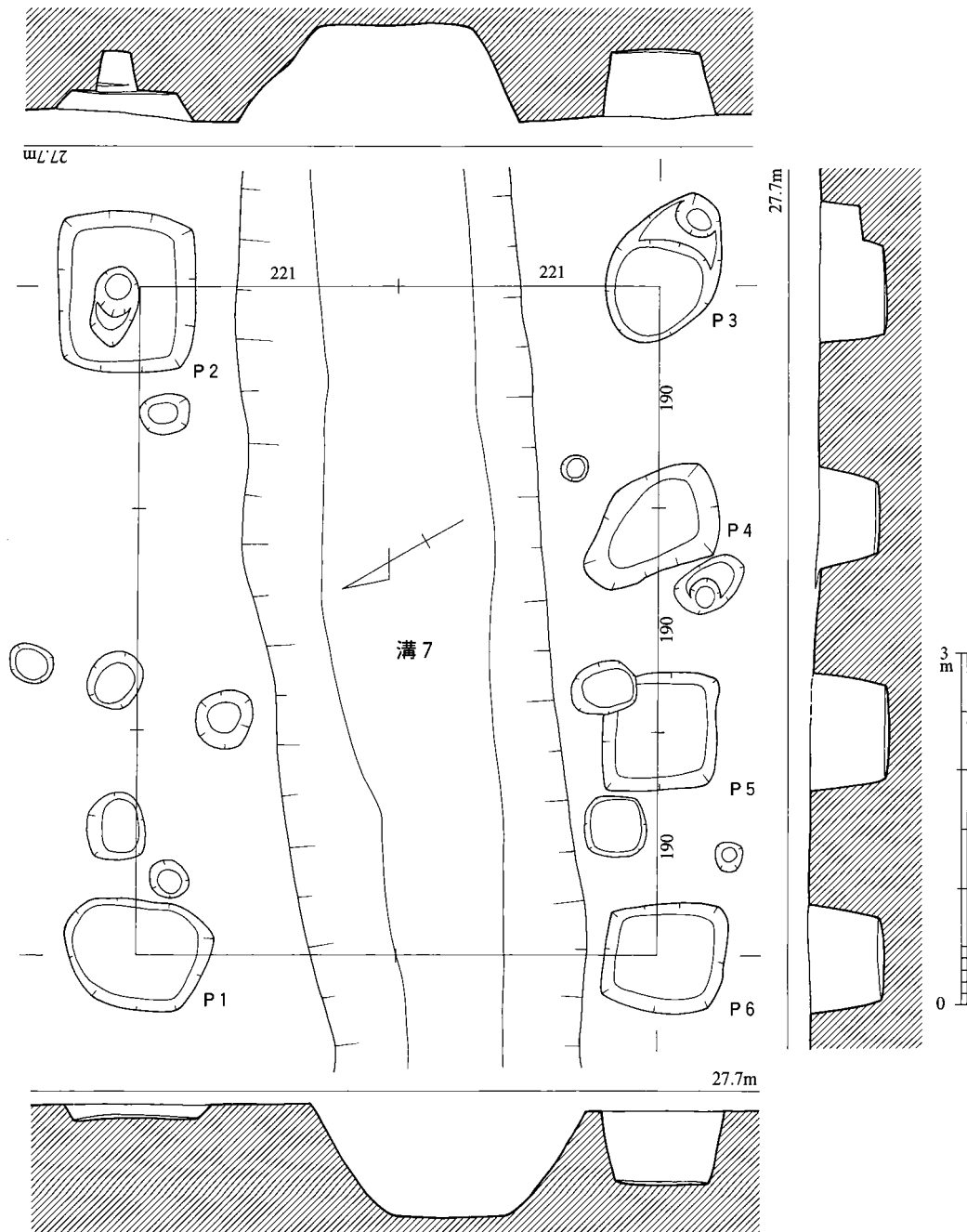
出土土器（第18図14・15） 14は弥生時代中期後半の甕口縁部小片。口縁部を外折させ、胴部外面にはハケメが残る。15は須恵器杯身で、口径11.5cm、受部径13.8cm、器高3.8cmを測る。口縁部は短く、内傾している。

これらの土器も直接、建物跡に伴うものではなく、やはり1号建物跡と同様に時期決定には切合を考慮すべきであろう。

3号掘立柱建物跡（第20図）

1・2号掘立柱建物跡の北に位置する掘立柱建物跡である。発掘調査時には建物跡とは認識していなかったために土層図の作製、個別写真の撮影を怠っているが、1・2号掘立柱建物跡とほぼ同様の方向であるN-60°-Wに主軸を向けた梁間2間、桁行3間の掘立柱建物跡としてここで報告しておきたい。ただ、建物跡と断定するには東北側桁行の中央の柱掘方2穴が検出されおらず、残る東北隅、西北隅のP1・P2の掘方が浅いという難点がある。発掘時に掘立柱建物跡とは認識できなかったのもそのためである。

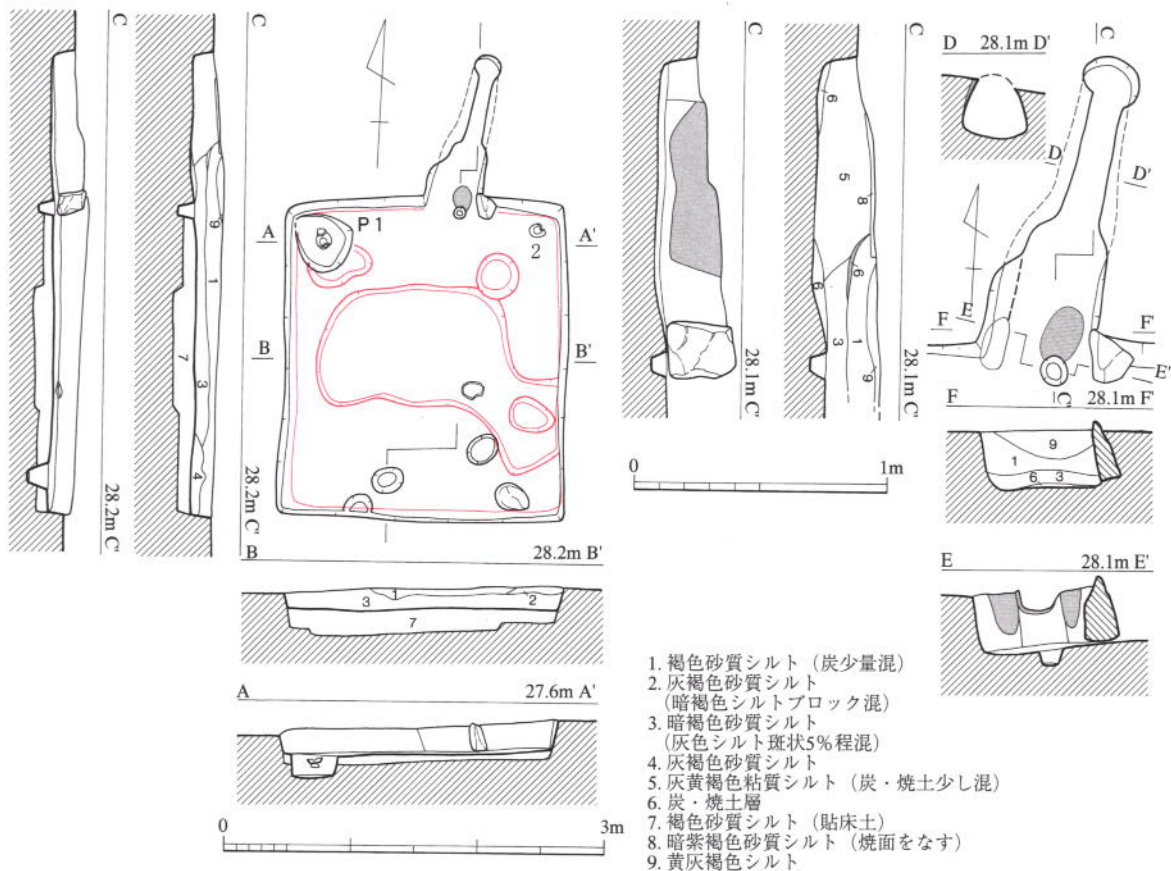
西南隅、東南隅のP3・P6掘方心々の距離は570cmを測るので、桁行は1尺31.6cmで6尺等間と復元され、実際、西南側桁行の4基の掘方心々もほぼ一致している。一方、梁間は西北側、東南側のいずれにおいても中央柱の掘方が7号溝に失われたと推定するならば、7尺等間と推測される。それぞれの掘方はP2・P5・P6がいずれも方形を呈し、P2が1辺1.2m前後と大きく、他は1.0m前後とやや小さい。残るP1・P3・P4はいずれも長軸1.3m前後、短軸1.0m前後の楕円形に近い平面形である。掘方の深さは上述したようにP1、P2が浅く15~20cm前後であり、P2では床面に径0.4m、深さ0.4mのピットを検出している。一方西南側の柱掘方はいずれも深く50~60cmである。土層図



第20図 3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

を作製していないが、これらの柱掘方にはいずれも黄褐色砂質シルトを主体とする砂質土が堆積していた。

このように東北側桁行の柱掘方中央2穴が失われており、柱掘方は深さ、平面形において統一性がないなど、建物跡と断定するには不安な点がいくつかある。しかしながら、建物全体の平面形は1尺31.6cmとした場合に6尺あるいは7尺等間で整然としており、掘方心々の位置も揃っている。また、東北側の柱筋が1号掘立柱建物跡東北梁間とほぼ一致しており、1号掘立柱建物跡とほぼ近い時期に築造された可能性もあり、建物跡の可能性を完全に排除するには躊躇を覚える。



第21図 1号竪穴住居跡・同カマド実測図 (1/60、1/30)

掘方等から出土した遺物で図示できるものはない。

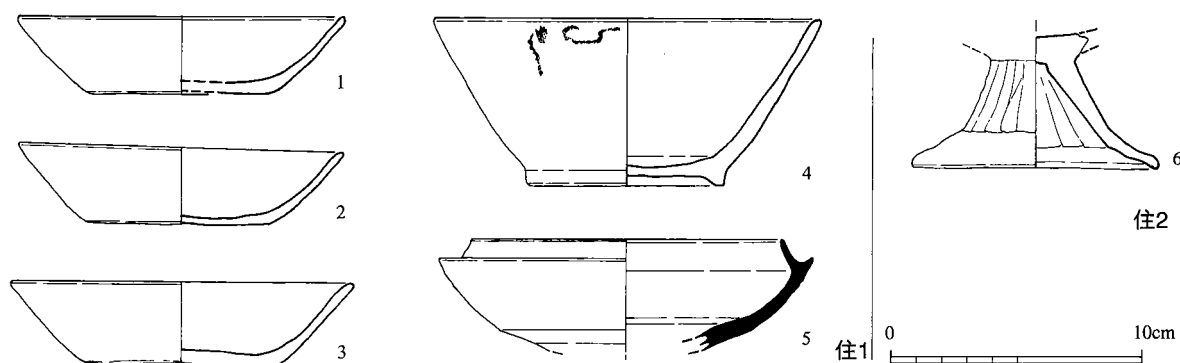
b. 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡 (図版11・12、第21図)

調査区の東部中央で検出された竪穴住居跡で、2・3・4・11号竪穴住居跡を切っており、周辺では最も新しい遺構である。そのため、周辺の他の住居跡で遺構検出に苦心したことと比べれば、比較的明瞭に平面形を捉えることができた。平面形は南北2.5m、東西2.3mを測る方形の小形竪穴住居であり、主軸をほぼ北、 $N-2^{\circ}-W$ に向けている。覆土は褐色～杯褐色砂質シルトを主体としていた。

壁は20～30cm程の高さが残っており、床面はほぼ水平である。床面では西北隅に径0.4m程の杯等の土器を納めたピットを検出し、南壁沿いに径0.2m程の小ピットを3基検出したが、支柱穴と認識できるものはない。住居床面下層の掘方は中央が凹んでいるが、下層に位置する第3面検出遺構の13・14号溝と重なっているために平面形は不安である。

カマド (図版12) 竪穴住居跡の北壁中央よりやや東寄りに、住居の壁から突出し、住居跡主軸よりやや東に主軸を振って付設されている。煙道まで検出できたので、遺存状況は比較的良好と言える。カマド突出部で住居壁が途切れる場所の中央に20×15cmの平面楕円形の硬化した焼面が検出され、本カマドの燃焼部となる。その東に高さ25cm程の河原石を立てて袖としているが、西側では石が検出されなかったため抜き取られたのであろう。燃焼部のすぐ南では直径0.1m、深さ5cm程のピ



第22図 1・2号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

ットを検出したが、燃焼部との位置関係からすれば支脚抜取痕にはなりえない。

カマド壁は高さ20~30cmが残存し、床面は燃焼部から煙道煙出し部までほぼ水平である。燃焼部中央から煙出し部までは、長さ1.1mを測る。縦断面形では燃焼部と煙道の区別がないが、平面形においては燃焼部中央から北に0.3mまでが上面で幅0.45m程であるのに対して、燃焼部中央より0.4m北から先が上面で幅0.2mと細くなっており、燃焼部と煙道の境界をその付近に求めるのが妥当であろう。縦断面土層図に示すように、煙出しからその境界付近までの最上層で暗紫褐色砂質シルト焼面が検出されており、煙道の天井部の最下層となる可能性が高い。また、煙道部分の側壁もよく焼けて、硬化している。

出土土器 (図版27、第22図1~5) 2は住居跡北東隅の床面より、3・4は住居跡北西隅のP1より出土し、5は床面下層の包含層から出土した。

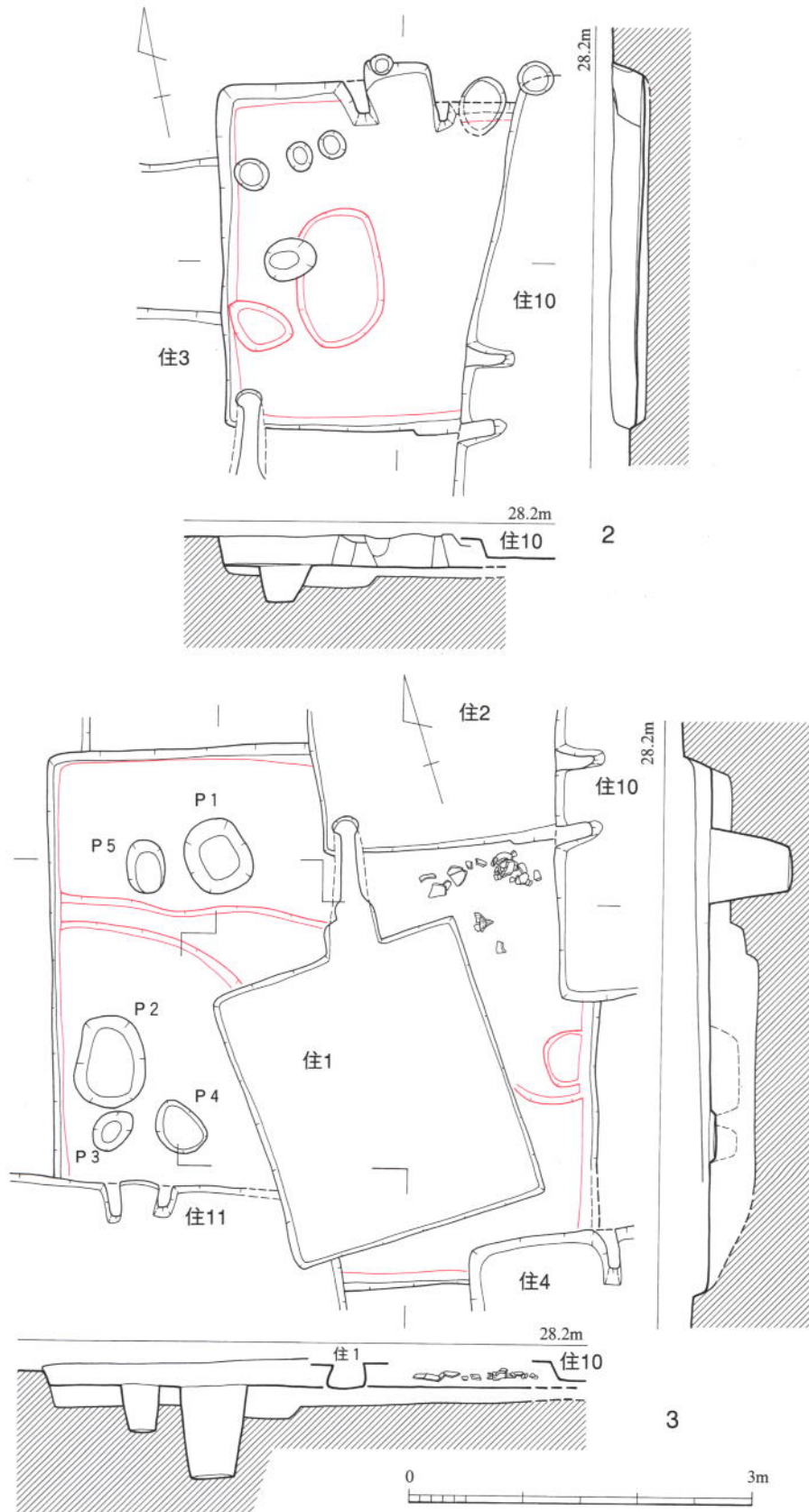
1~3は土師器杯である。いずれも平底で直線的に外傾する口縁部へと続く器形をなす。底部外面には1・3がヘラ切りの後回転ヘラケズリを施している。1は口径12.8cm、器高3.1cm、2は口径12.8cm、器高3.1cm、3は口径13.4cm、器高3.3cmを測り、1・2が橙褐色、3が淡黄褐色を呈する。4はロクロ成形の高台付土師器碗で、高台は低く、器形は深く体部から口縁にかけて直線的に伸びている。口径15.3cm、器高6.7cm、高台径7.8cmを測る。淡褐色を呈し、外面の一部は二次加熱を被り、口縁外面には油煙が付着する。

5は古墳時代の須恵器杯身。口径12.4cm、受部径14.9cmと比較的大形であるが、口縁部は短く内傾している。混入品であろう。

以上の土器から考えて、本住居跡の時期は8世紀後半と推測される。

2号竪穴住居跡 (図版12、第23図)

調査区の東側中央やや北よりに位置し、東を10号竪穴住居跡、西南を1号竪穴住居跡に切られている。前述のように本住居跡は、第3面で検出した13・14号溝の上層に位置し、平面形の検出にも苦心したので、遺構の把握に問題を残している部分に位置する竪穴住居跡である。現状では主軸はN-12°-Eを測る。西壁は南北3.0mを測り、北側にカマドを設置しているので、それを中央とすれば北壁は東西3.2mに復元される。壁は遺存の良好な北側で高さ25cm程で、床面はほぼ平坦である。西北側に直径0.2~0.5mのピット4基を検出しているが、浅く、小さいものが多いために、主柱穴とは認めがたい。掘方は全体的に床面から深さ10cm程で、中央やや西寄りに楕円形の掘り込み、ピットを検出したが、下層溝覆土との区別が困難で、掘方の全体的な形態も不安である。



第23図 2・3号竪穴住居跡実測図 (1/60)

カマド 住居跡の北側に壁から、燃焼部を0.3m程、突出させて付設している。袖は左袖で壁から0.4m、右袖で壁から0.25m程の長さが遺存していたが、覆土と区別の難しい褐色砂質シルト土を用いて構築しているために平面形には問題を残す。覆土は周辺と比べ炭、焼土を多く含んでいたが、床面でも明瞭な焼面、支脚抜取痕等を検出できなかった。カマドの位置、構造自体も不安のあることは認めざるを得ない。

出土土器（第22図6） 図示できるのは土師器高杯脚部片1点のみである。脚柱部の下方が広がり、屈曲して脚端へと至る。脚柱部外面縦方向のヘラケズリ、内面ケズリ仕上げで、裾の内外は丁寧なナデを施す。脚裾径9.8cmを測る。

3号竪穴住居跡（図版13、第23図）

調査区東部中央、1号竪穴住居跡の下層で検出したものであり、東北部を2・10号竪穴住居跡に、東南隅を4号竪穴住居跡に、西南隅を11号竪穴住居跡に切られている。したがって、住居壁を検出したのは西北隅付近と東南隅付近に限られ、加えて2号竪穴住居跡と同様に下層遺構の覆土との区別が十分でないために平面形には不安が大きい。発掘結果をそのまま報告すれば、主軸を北からやや東に振ったN-17°-Eにとり、東西、南北それぞれ4.8mのほぼ正方形の平面となる。壁は遺存の良好な部分で30cm弱の高さが残っており、床面はほぼ平らである。

床面では西半部を中心に5基のピットを検出している。このうち西北部のP1・P5はそれぞれ床面からピット底面まで40cm、80cmと深いが、西南部の3基は20cm弱と浅く支柱穴には適していない。したがって、支柱穴配置は不明と言わざるを得ない。床面下層の掘方は南が床面から40cm程と深くなっているが、これも下層の遺構・包含層を掘り過ぎた恐れがある。住居跡東北部より土器がまともに出土しており、後述するようにカマドを付設してもおかしくない時期のものであるが、カマド自体は検出されていない。住居北壁のやや東寄りに付設しており、2号竪穴住居跡に壊されたと解釈することもできるが、遺構検出の誤りも危惧される。

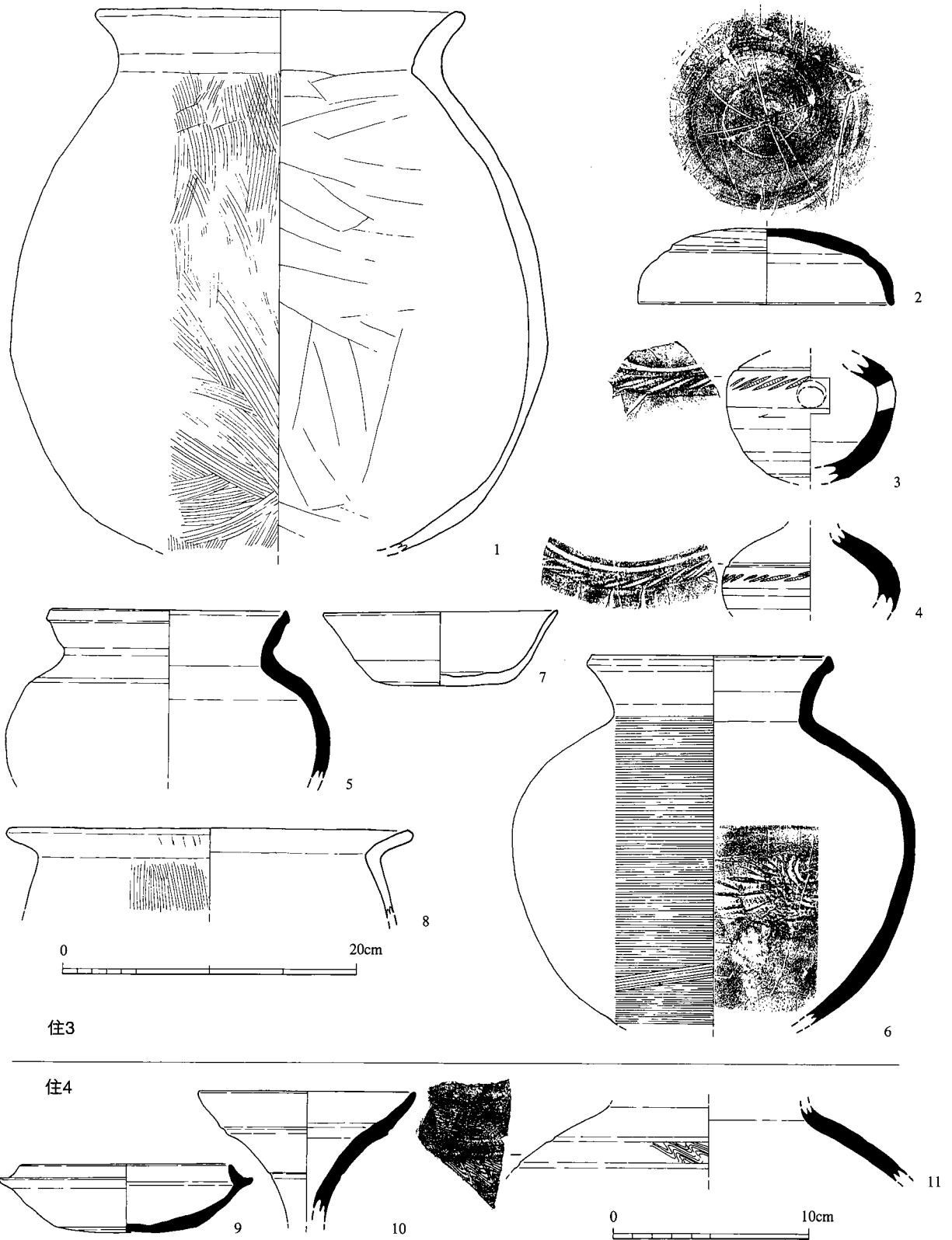
出土土器（図版28、第24図1～8） 1・2・5・6は住居跡東北部からまともに出土したものである。1は土師器甕で口径18.2cm、残存高27.5cmを測る。口縁部は厚く外反し、胴部は下半の張りが強く、外面ハケメ、内面ケズリ仕上げである。黄褐色を呈し、胴部外面上半には褐色の化粧土を施す可能性がある。

2～6は須恵器である。2は杯蓋で、口縁端部を丸く仕上げ、口縁部と天井部の境界には凹線を巡らせている。天井部外面にはヘラ記号がある。口径12.9cm、3.9cmを測る。

3・4は甕である。いずれも胴部最大径付近に櫛歯刺突文を巡らし、胴部下半にヘラケズリを施す。3では穿孔部が一部残るが、4の残存部分には見られない。胴部最大径は3が8.7cm、4が9.1cmを測る。

5・6は中形の壺である。5は口縁部は無文で、端部を拡張気味に仕上げている。胴部内面はナデ仕上げでタタキの痕跡をとどめない。口径12.0cmで内外、灰紫色を呈す。6は口縁端部をやや拡張させ、口径12.1cmを測る。胴部外面はカキメで仕上げるが、一部に先行する平行タタキの痕跡が残る。胴部内面にはいわゆる車輪文の当具圧痕が一部に残る。内外暗灰色で、胴部外面の火だすきが顕著である。

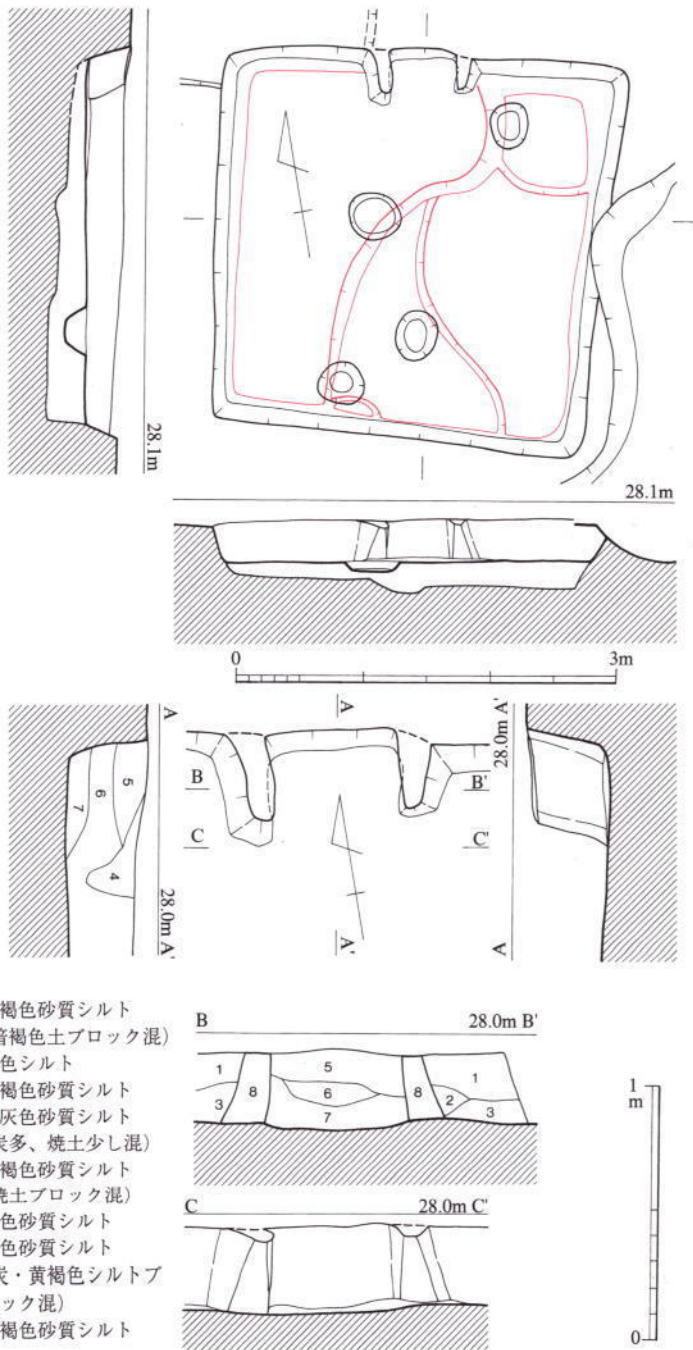
7はロクロ成形の土師器杯である。底部は平底で口縁部が直線的に伸び、口径11.9cm、器高3.9cm



第24図 3・4号竪穴住居跡出土土器実測図 (8は1/4、他は1/3)

を測る。底部外面は回転ヘラ切りの痕跡をとどめている。住居跡よりは新しく、混入品。

8は弥生時代中期後半の甕口縁部片である。胴部外面は縦ハケで仕上げ、口縁部外面には縦方向の細い線刻があり、工具痕と推測される。口径20.3cmを測り、淡橙褐色を呈する。



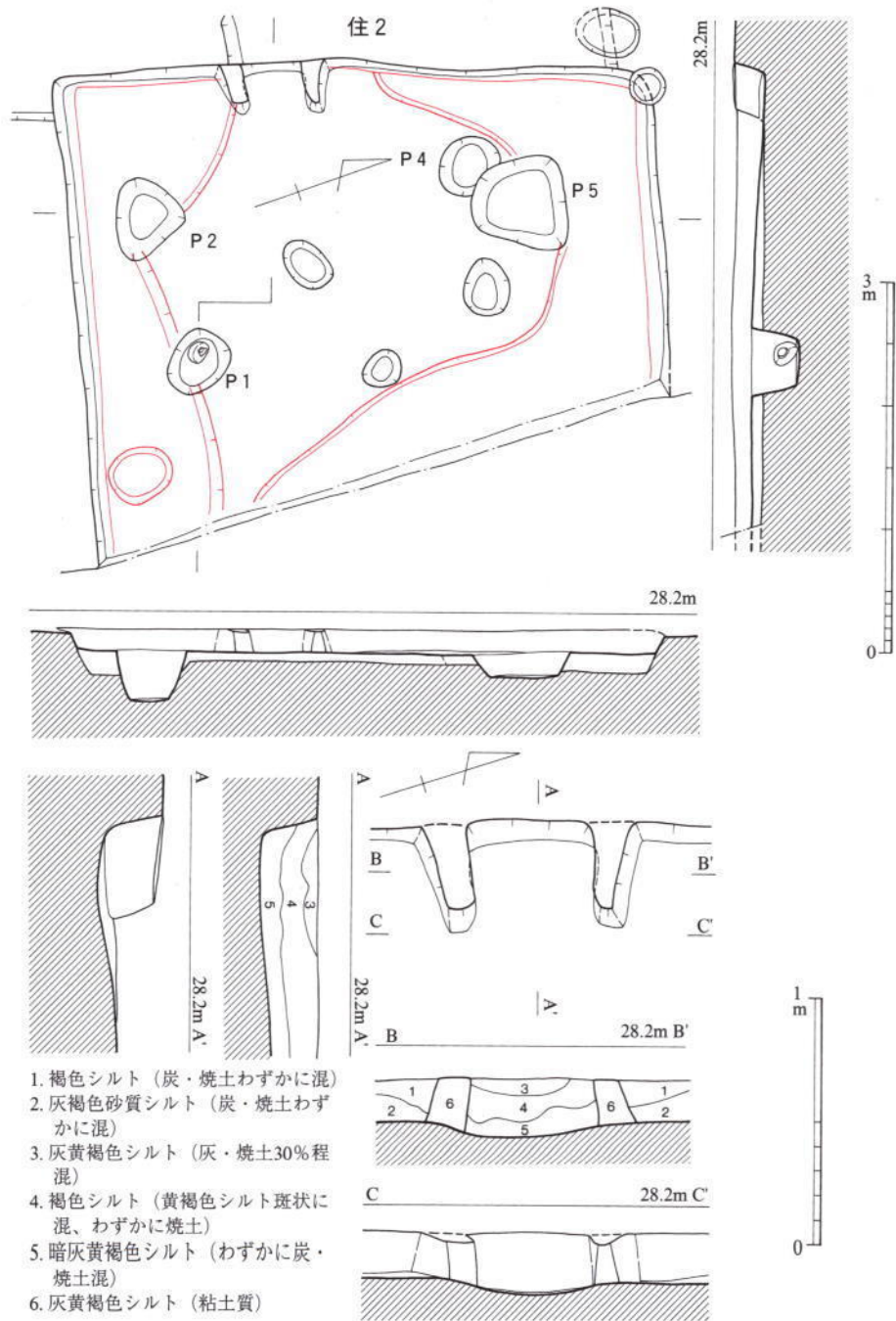
第25図 4号竪穴住居跡・同カマド実測図
(1/60、1/30)

4号竪穴住居跡 (図版13、第25図)

調査区東部やや南寄りに位置し、本住居跡の東北隅が3号竪穴住居跡を切っている。覆土は褐色砂質シルトで周辺の住居跡覆土と類似し、包含層との区別も難しかったので平面形は不安であるが、主軸を北からやや東に振ったN-10°-Eにとり、北壁中央にカマドを設けていると考えて調査をした。平面形は正方形に近いがやや歪んでおり、南北2.9~3.1m、東西2.9~3.2mを測る。北壁の残りが良好で高さ30cm余り遺存し、床面は平坦である。床面で検出した4基のピットは直径0.3~0.4m前後で、いずれも床面から20cm弱と浅く、支柱穴には適していない。床面下層の掘方は浅いところで床面から10cm、東部の深いところで30cmであるが、周辺の住居跡と同様に下層遺構、包含層と厳密に区別できていないので、その形態も不確実である。

カマド 住居跡北壁中央に付設している。左の袖は長さ0.45m、右袖は長さ0.3m程遺存し、袖間の間隔は0.5m。袖は袖間の覆土上部堆積土と類似する黄褐色砂質シルトを用いて作られており、検出に苦慮した。また、袖間の覆土には炭、焼土を比較的多く含んでいるものの、床面には顕著な焼面、支脚痕跡は検出されていない。したがって、その形態については不安が残る。

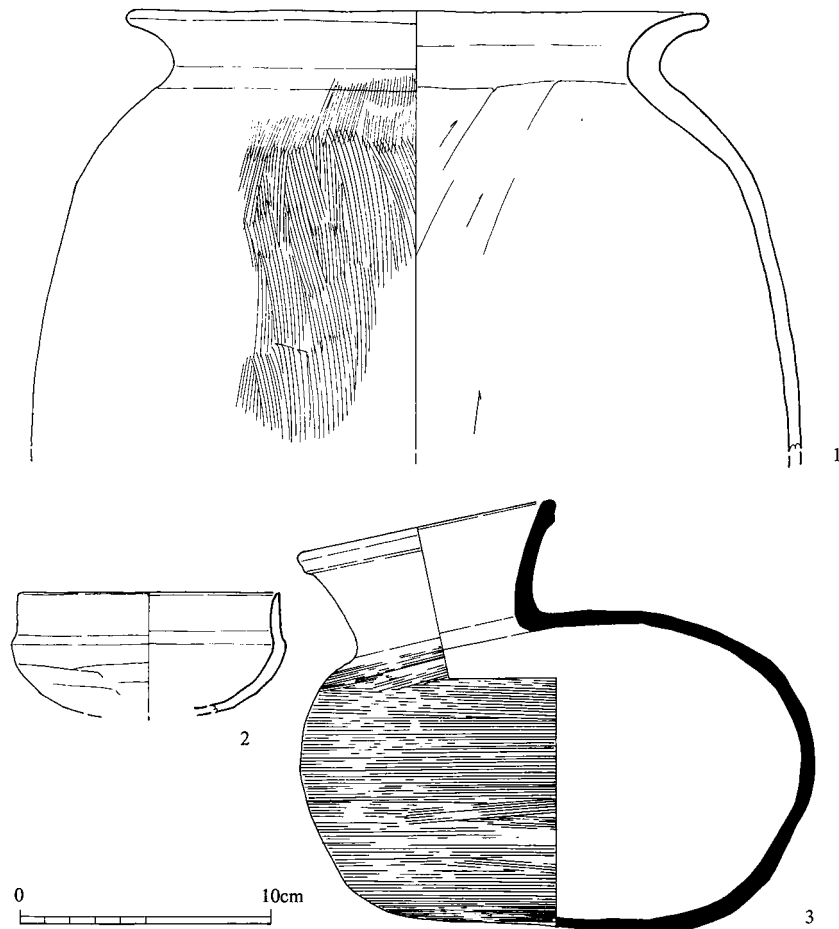
出土土器 (第24図9~11) いずれも須恵器で、9・10は床面下層から出土した。9は杯身で、口縁部は短く内傾し、底部のヘラケズリの範囲が狭い。口径10.7cm、受部径13.0cm、器高3.5cmを測り、黒灰色を呈する。10は甕口縁部で口径11.0cmを測る。頸部は非常に細く、口縁部と頸部外面には2条の凹線を巡らしている。口縁部内面は灰をかぶり、強い火を受けて器表が荒れている。11は壺胴上半部外面で、小片のために傾き、径は不安である。肩部に2条の凹線を巡らし、その間に櫛歯波状文を施文する。外面灰紫色、内面暗灰色。



第26図 10号竪穴住居跡・同カマド実測図 (1/60、1/30)

10号竪穴住居跡 (図版14、第26図)

1区と2区の境界にかかる竪穴住居跡であるが、2区では検出できていないので、周辺の竪穴住居跡と同様に包含層、あるいは下層遺構の輪郭を誤って捉えた恐れもある。検出できたのは住居跡の西半分のみで、西側にある2号・3号竪穴住居跡を切っている。西壁のやや南寄りにカマドを付設しており、カマドの位置からすれば、ほぼ西に主軸を向けたN-72°-Wとなる。南北4.7~4.8mを測り、壁は高いところで20cm余り残っている。床面では大小7基のピットを検出したが、支柱穴になるとすれば直径0.5m程のP2・P4と考えられ、それぞれ深さ50cm、深さ30cmを測る。中央南寄りのP1からはほぼ床面に密着して完形の平瓶が出土し、P5は覆土から住居跡よりも新しい遺構と



第27図 10号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

考えられる。床面下層の掘方は中央が高く掘り残され、周辺が低くなっているが、下層包含層と遺構の区別が難しく、正確に形態を捉えたとは言い難い。

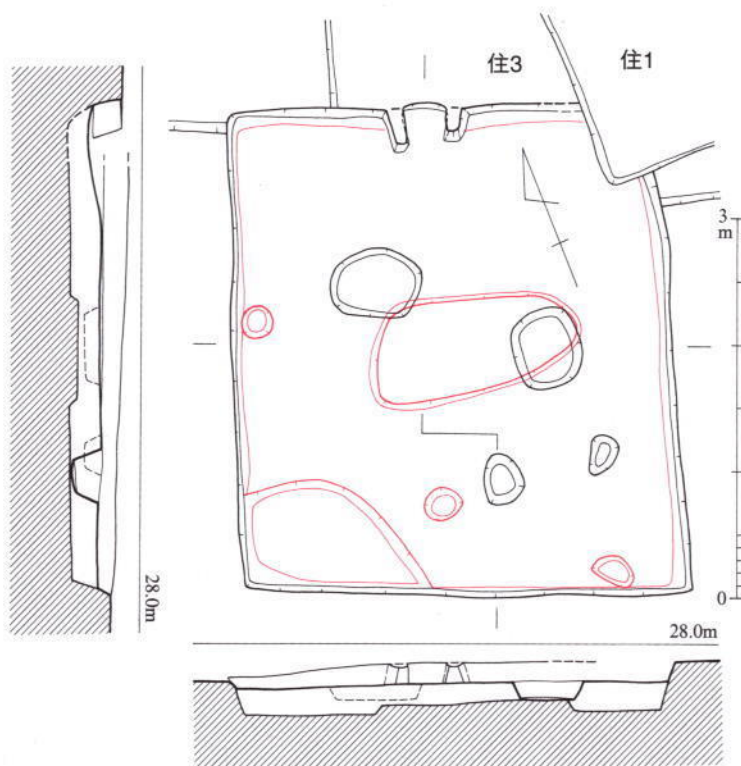
カマド 住居跡西壁の中央やや南寄りで検出したもので、袖を検出したのみである。袖は長さ0.4m程遺存しており、両袖間の間隔は0.5mを測る。しかしながら、灰黄褐色シルトで構築された袖は、カマド内に堆積した3層灰黄褐色シルト、5層暗灰黄褐色シルトとの区別が難しく、検出に苦慮した。袖間の堆積土には焼土、炭を含んでいるが、床面では顕著な焼面、支脚採取痕は検出できていない。

出土土器 (第27図) 1・2は土師器である。1は土師器甕の上半部破片で、頸部が強く絞まり、強く外反する口縁に続いており、仕上げは胴部外面縦ハケ、胴部内面縦方向のヘラケズリ。口径23.0cmを測り、淡橙褐色を呈す。2は床面下層より出土した模倣杯の身。口縁部は直立し、受部の突出が弱い。体部外面は手持ちヘラケズリを施している。口径10.2cm。

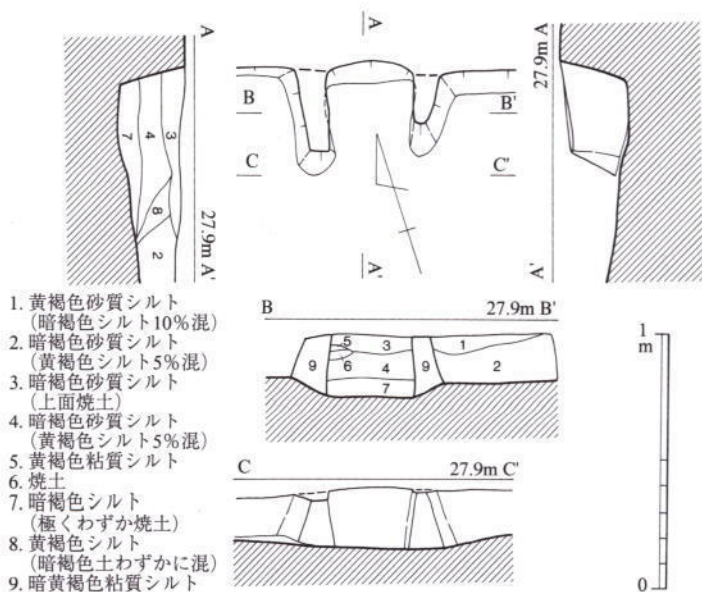
3はP1より出土した須恵器平瓶である。ほぼ完形で口径10.0cm、器高17.1cm、胴部最大径20.3cmを測る。胴部外面は丁寧にカキメを巡らし、内面は完形のため観察が難しい。口縁端部は外面に粘土を貼り付けて断面方形に肥厚させる。焼成は良好で、暗灰色を呈し、焼き絞まっている。

11号竪穴住居跡 (図版14、第28図)

調査区東部ほぼ中央に位置しており、カマド付きの方形竪穴住居跡として発掘を行ったが、周辺



の住居跡と同様に形態は不安である。覆土は暗褐色砂質シルト。本住居跡は東北隅を1号竪穴住居跡に切られており、北壁が3号竪穴住居跡を切っている。南北3.8m、東西3.4~3.6mを測り、壁は20cm前後の高さが残っていた。主軸は北から少し東に振ったN-18°-Eを測る。床面はカマド付近が低く、また全体的に西側に傾斜しているが、いずれも少し掘り下げたためか。床面では大小4基のピットを検出したが、全て深さ20cmと貧弱で、不規則な配置であり、主柱穴は不明である。床面下層の掘方は下層遺構、包含層との関係で不正確であるが、中央が島状に高く深さ20cm程で、周辺が深さ30cm前後である。出土土器はいずれも小片で、図示できるものが無い。他に黒耀石剥片(第82図3)、鉄器片(第87図8)が出土している。



1. 黄褐色砂質シルト (暗褐色シルト10%混)
2. 暗褐色砂質シルト (黄褐色シルト5%混)
3. 暗褐色砂質シルト (上面焼土)
4. 暗褐色砂質シルト (黄褐色シルト5%混)
5. 黄褐色粘質シルト
6. 焼土
7. 暗褐色シルト (極くわずかに焼土)
8. 黄褐色シルト (暗褐色土わずかに混)
9. 暗黄褐色粘質シルト

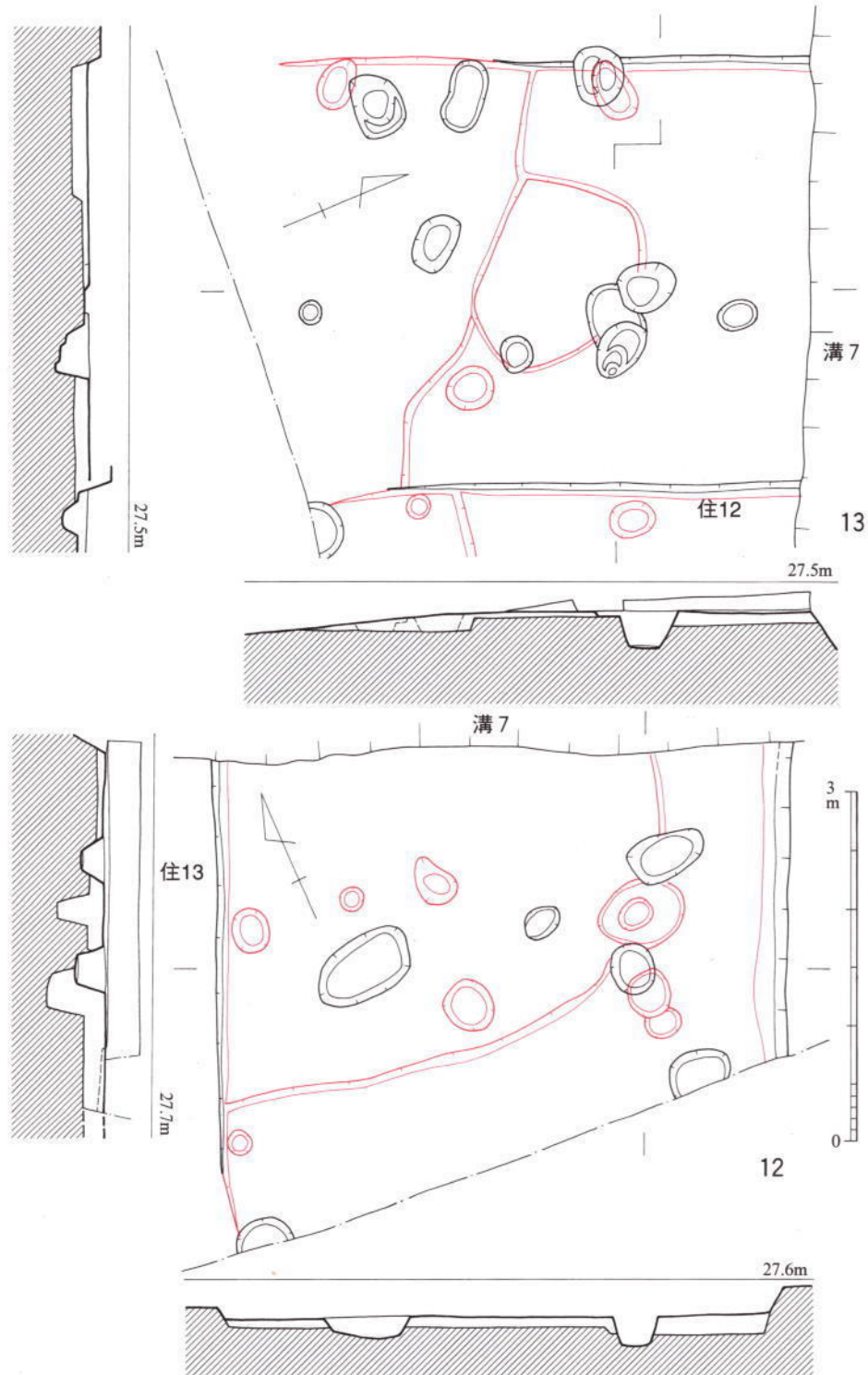
第28図 11号竪穴住居跡・同カマド実測図 (1/60, 1/30)

カマド 北壁の中央やや西寄りに設置されている。袖は暗黄褐色粘質シルトで作られているが、カマド内に堆積した褐色系の土との区別が難しく、正確な形態を捉えたかは不安である。掘り上りの状態では西側の袖が長さ0.4m、東側の袖が長さ0.3m程を測り、両者の間隔は0.35m前後である。袖間の覆

土上層には焼土が比較的、多く含まれていた。しかしながら、焼土、炭とも下層では少なく、床面に焼面、支脚抜取痕は検出できなかった。

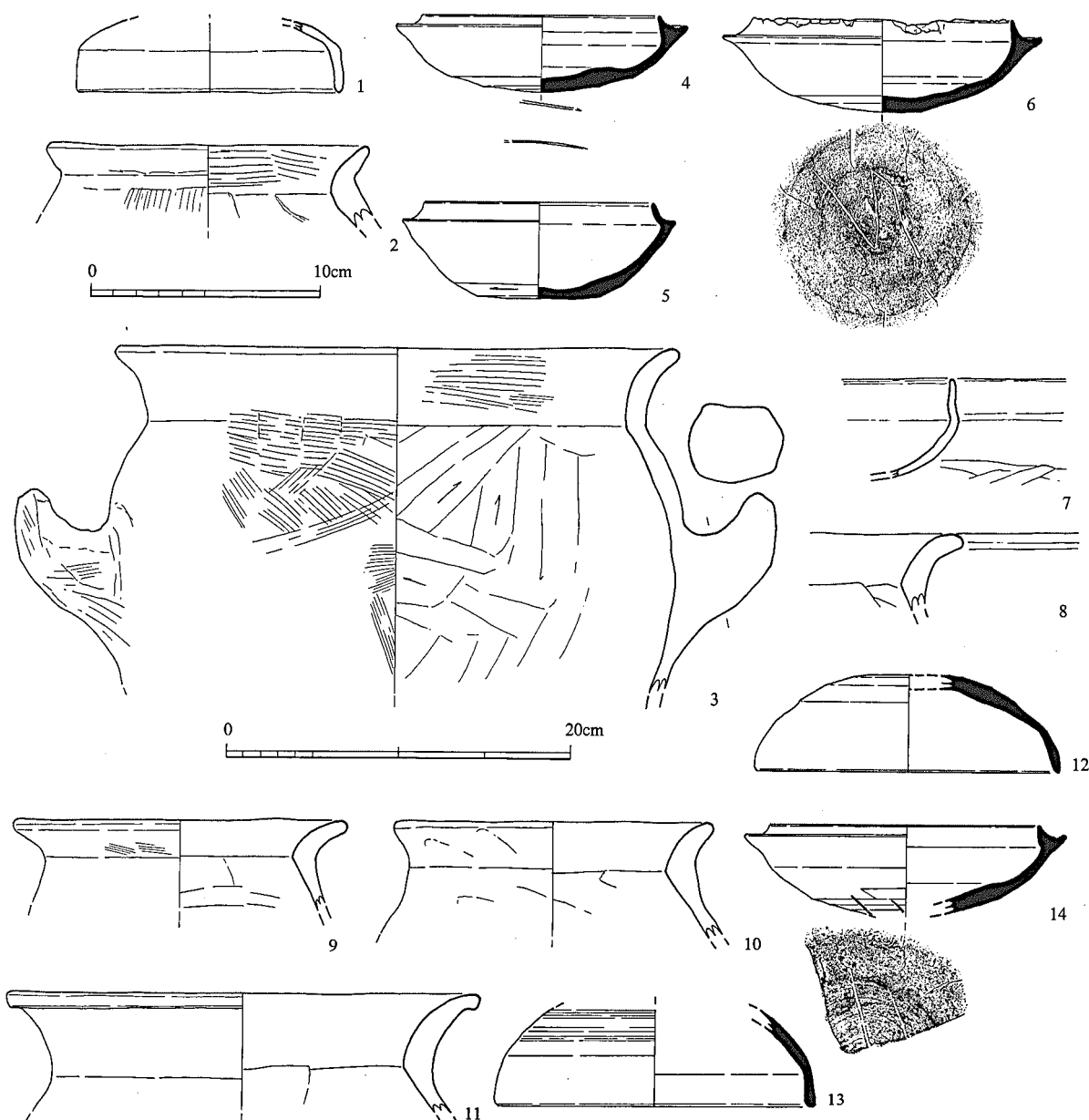
12号竪穴住居跡 (図版15、第29図)

調査区東部南壁際に位置する竪穴住居跡で、北側を7号溝に切られている。西に位置する13号竪穴住居跡に後続するとひとまず判断したが、12号・13号住居跡のいずれもが暗褐色細砂~シルトを覆土としており、両者の境界、切り合いは不安が残る。南は調査区外へと続いており、検出できた



第29図 12・13号竪穴住居跡実測図 (1/60)

のは東西の壁の一部のみである。東西壁間の距離は4.8~4.9mを測り、遺存の良好な東壁は高さ30cm程残っている。これに対して、本住居跡付近では自然地形を考慮して南に低く傾斜させつつ遺構面を検出したために、西壁の南側は削平されてしまっている。床面で大小5基、床面の下層で大小7基のピットを検出したが、支柱穴のような規則的な配置は抽出できない。床面下層の掘方は南が深くなっているが、下層の包含層との区別が難しかったので、正確な形態を捉えたものではない。後



第30図 12・13号竪穴住居跡出土土器実測図 (3は1/4、他は1/3)

述する出土土器の時期からすれば、カマドを設置していてもおかしくないので、北壁に設置したものが7号溝によって削平されと解釈するほかない。

出土土器 (図版28・29、第30図) 1~6が確実に本住居跡に帰属するもので、7~14は本住居跡と13号住居跡の上層から出土し、どちらに帰属するか区別できないものである。

1~3は土師器である。1は模倣付蓋である。小片のため、径、傾きの復元には不安が残るが、口縁部は直立し、天井部との境界の稜が明瞭である。口径11.4cmを測り、橙褐色を呈する。2は比較的小形の甕で、短い口縁が特徴的である。口縁部内面に横ハケ、胴部外面縦ハケ仕上げで、口縁部外面には工具痕と思われる凹線が巡っている。口径13.8cmを測り、褐黄色を呈する。3は大形把手付鍋の破片。口縁部はゆるやかに外反し、胴部最大径付近に把手を取り付けている。肩部外面には横ハケを施し、口縁部内面横ハケ、胴部内面ヘラケズリ仕上げ。口径32.4cmを測り、淡橙褐色を呈する。

4～6は須恵器杯身。4は口径10.3cm、受部径12.8cm、器高3.35cm、5は口径9.9cm、受部径12.0cm、器高4.3cm、6は口径11.3cm、受部径13.9cm、器高4.0cmを測る。いずれも立ち上がりは短く内傾しており、5外面が黒灰色を呈するほかはいずれも内外灰色を呈している。4の外面には2本の平行線によるヘラ記号が一部残り、6外面にはS字状のヘラ記号を施している。

7～11は土師器である。7は土師器模倣杯の身口縁部小片である。口縁部は直立し、受部を屈曲させて作りだし、底部外面には手持ちヘラケズリを施す。内面橙褐色、外面灰黄褐色を呈し、焼成はやや不良である。8～11は甕口縁部片。いずれも口縁部を外反させており、10は短く、11は長く伸びてやや角張った端部をなしている。10外面は摩滅が進むが、かすかな凹みが観察出来る。口径は9が14.2cm、10が13.8cm、11が20.3cmを測る。8淡褐色、9・10淡黄褐色、11灰黄褐色を呈し、8は外面に煤、内面にコゲが付着している。

12～14は須恵器。12・13は杯蓋で、端部の丸い口縁部は比較的短く直立し、天井部へと丸く移行している。13は天井部外面に残るカキメが特徴的である。口径は12が13.1cm、13が13.6cmを測る。13は焼成不良で灰褐色。14は杯身片で、立ち上がりは短く、内傾が強いため、断面三角形に近い形態となっている。口径11.6cm、受部径14.0cmを測り、灰色。

13号竪穴住居跡（図版15、第29図）

調査区東部の南壁際に位置しており、北側を7号溝、東側を12号竪穴住居跡に切られていると判断した。また、12号竪穴住居跡の項で述べたように、南に傾斜させつつ遺構面を検出したので、床面の南側が削平され、残存する西壁は南で途切れている。そのため住居跡の規模は不明である。壁は西壁の良好な部分でも高さ15cmしか残っていない。床面および床面下層で大小のピットを検出しているが、支柱穴となるような規則的配置は抽出できない。12号住居跡と覆土が類似しているので、時期的に大差ないとすれば、本来カマドを設置していた可能性が高い。しかし、残存部分では検出できていないので、やはり北側に設置されたものが7号溝で削平されたのであろうか。本住居跡に確実に帰属する土器として、図示できるものはないが、覆土中より黒耀石剥片（第82図5）が出土している。

c. 土坑

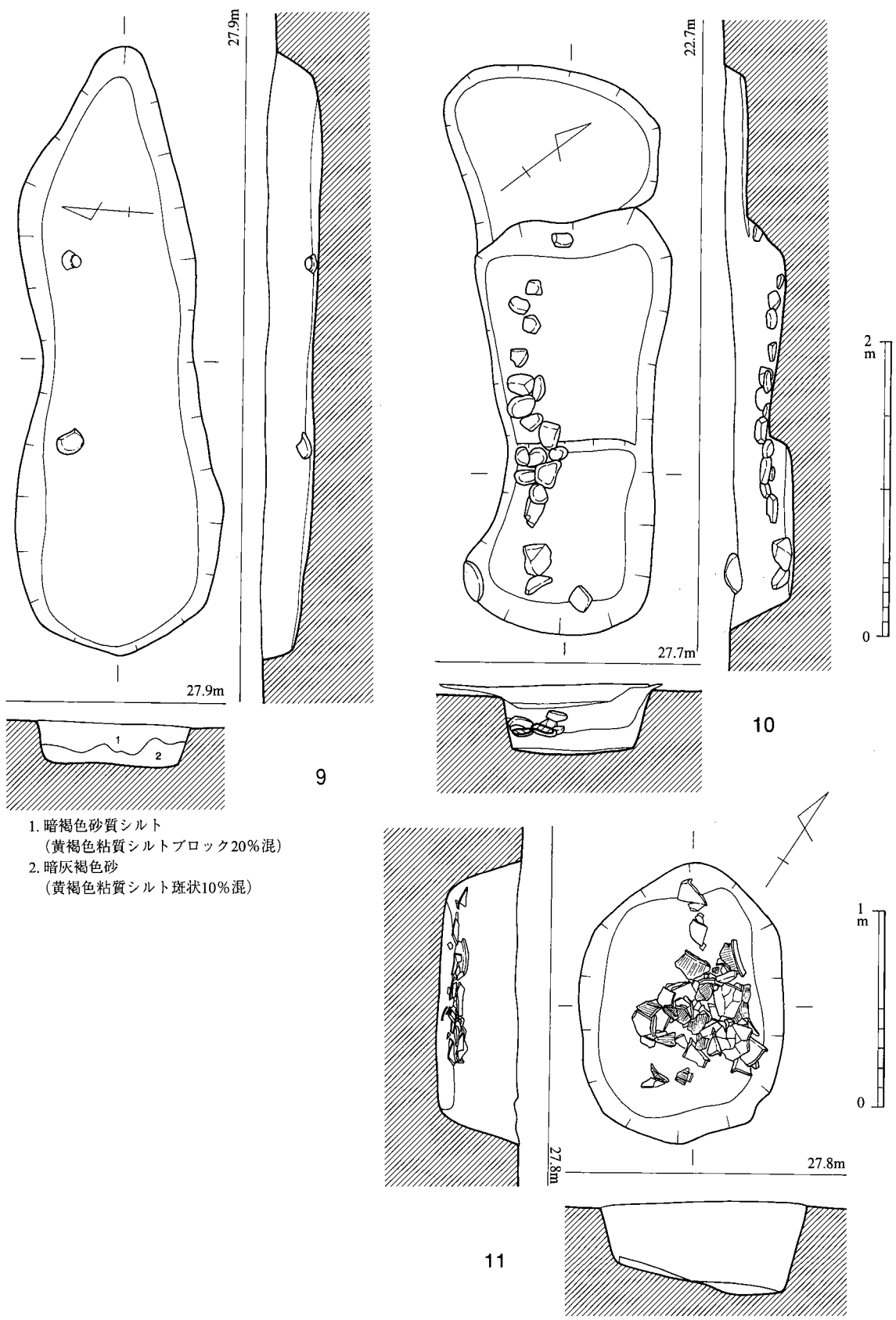
9号土坑（図版16、第31図）

調査区中央やや西寄りの北壁近くで検出した土坑である。平面形はほぼ東西に主軸をおく長楕円形を基調とし、東端が細くすぼまるとともに、中央も若干、くびれている。長さ4.15m、最大幅1.4mを測る。深さは全体的に30cm余りで、ほぼ平坦な床面をなしている。底面近くで川原石と弥生土器甕の底部片が出土した。

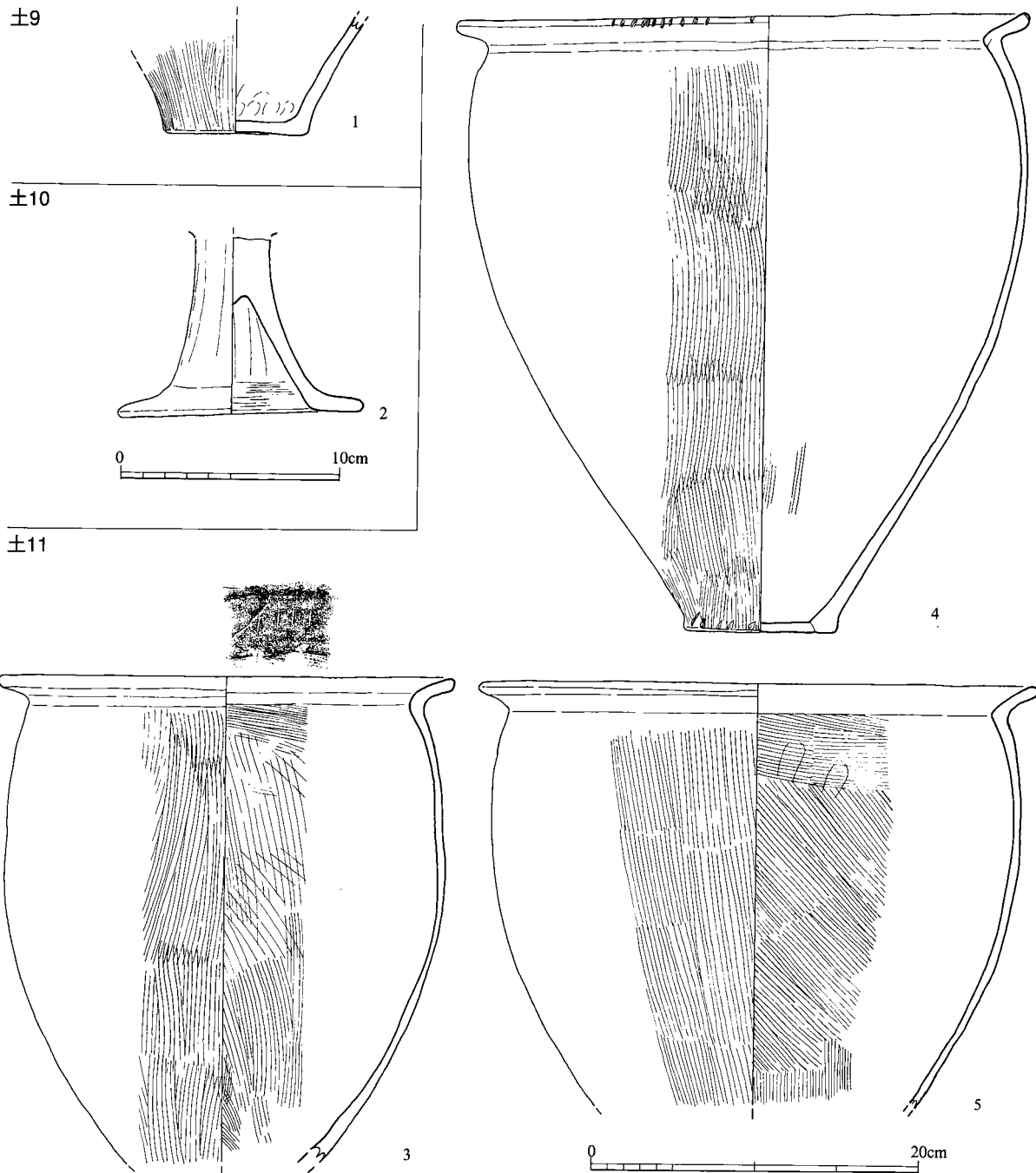
出土土器（第32図1） 図示できるのは出土状況図にも示した弥生土器甕底部片のみである。胴部はわずかに外反しながら底部から立ち上がり、外面縦ハケ、内面胴部、底部接合部付近に指頭圧痕が残す。底径8.9cmを測り、灰黄褐色を呈す。弥生時代中期後半のもの。

10号土坑（図版17、第31図）

調査区中央やや北よりで検出した土坑である。西北－東南方向に主軸をおく細長い隅丸長方形の



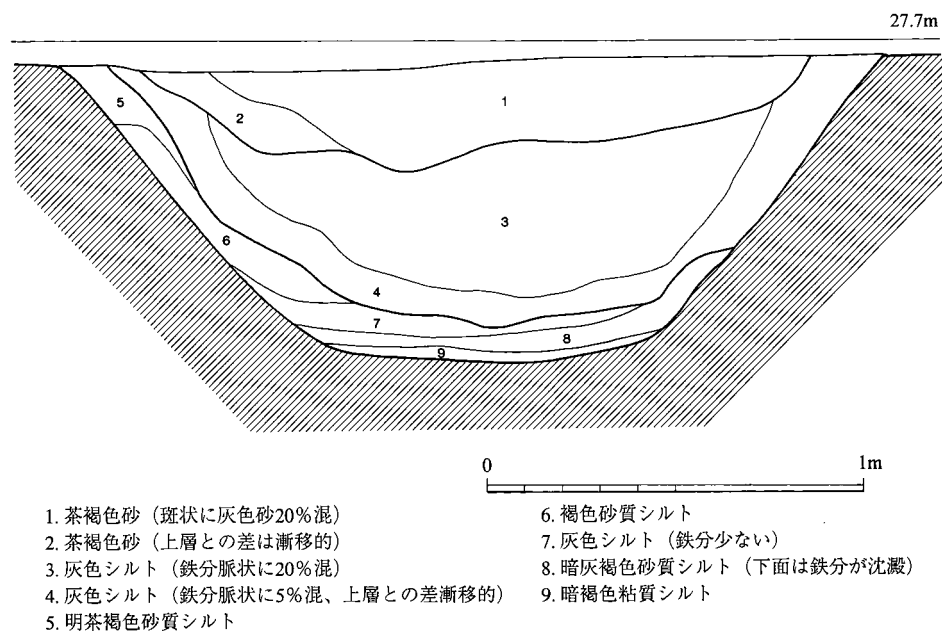
第31図 9~11号土坑実測図 (土11は1/30、他は1/40)



第32図 9～11号土坑出土土器実測図 (2は1/3、他は1/4)

平面形をなしている。平面形では長軸3.9m、幅1.3m前後を測る。しかし、西北部は検出面から深さ10cm余りと浅いので平面形を誤って捉えた恐れがある。それを除く長さ2.8mの隅丸長方形の部分が土坑本体となる可能性が高い。その部分は東南部が低く深さ40cm、他は少し高く深さ30cmである。土坑南の壁際、床面近くから20cm弱の川原石がまとまって出土している。

出土土器 (図版29、第32図2) 図示できるのは土師器高杯脚部片1点のみである。脚柱部は比較的小巧で長く、外面縦ケズリ、内面上部横ケズリ、下部横ハケ仕上げである。裾径10.9cm、高さ8.1cmを測り、黄橙色を呈す。6世紀に比定できる。



第33図 7号溝土層実測図（1/20）

11号土坑（図版17、第31図）

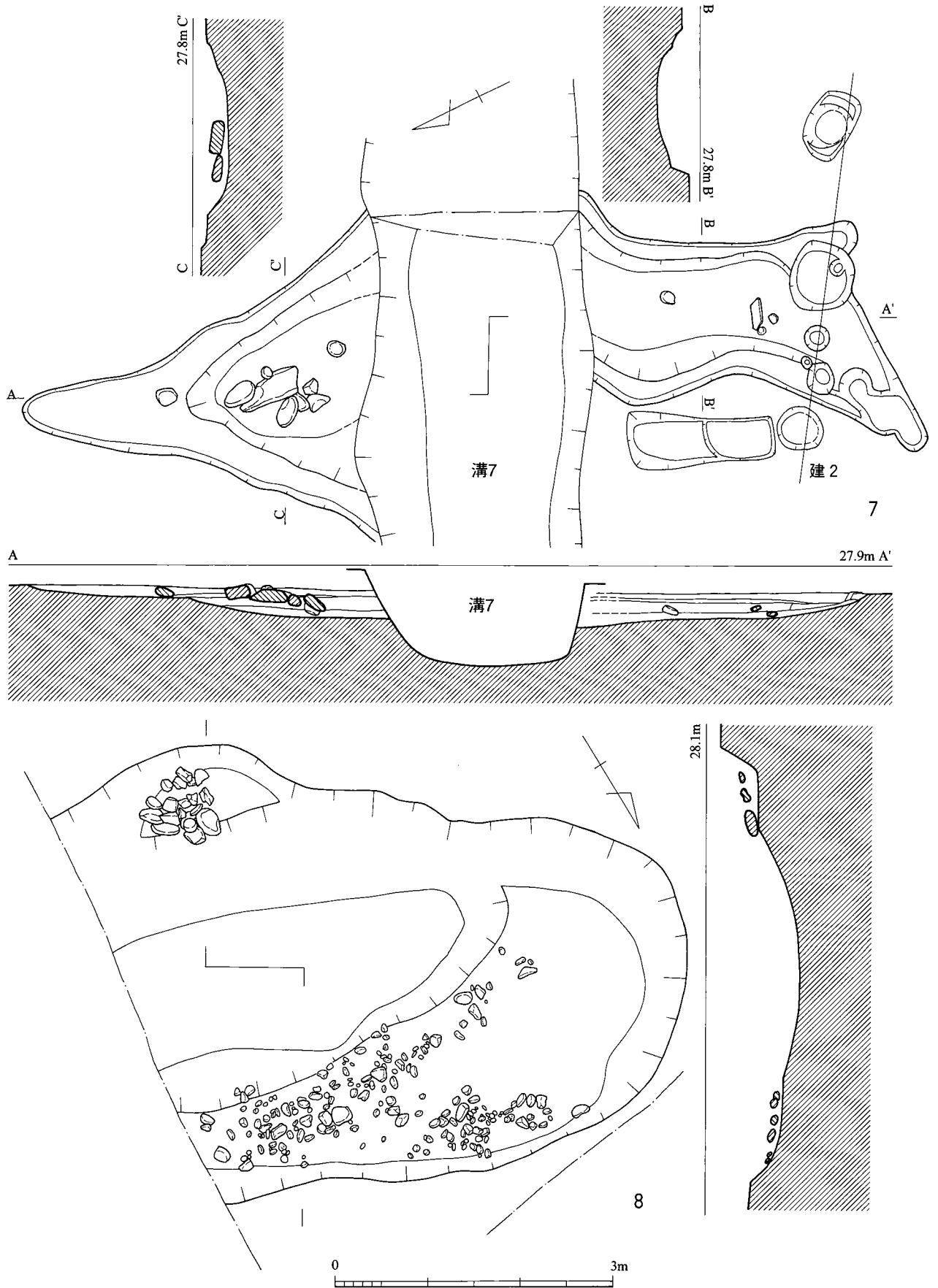
調査区の中央やや東寄りで検出した土坑である。西北—東南方向に主軸をとる楕円形の平面を呈しており、床面はわずかに船底状にくぼみつつ、北東に低く傾斜している。長さ1.45m、幅1.05mを測り、深さは深いところで50cm弱である。埋土は上層が暗褐色細砂に黄褐色細砂が斑状に混じっており、下層が褐色細砂であった。床面近くから弥生時代中期後半の甕破片がまとまって出土している。

出土土器（図版29、第32図3～5） いずれも弥生土器甕である。3は底部を欠損し、胴部は内外にハケメを良く残している。頸部が余りくびれず、外折してわずかに外反する口縁に至る。端部は面をなしている。口縁部内面には縦方向の線刻が一部に認められる。口径27.3cmを測り、淡橙褐色を呈す。4はほぼ完形に復元できるものである。底部からそれほど張りを持たずに胴部が立ち上がり、胴部最大径は比較的上部にある。頸部のくびれは強く、直線的に外傾する口縁部へと続く。口縁端部は丸く仕上げられており、図示したように部分的に刻目を施している。また、底端部外面にも刻目風の工具痕が巡っている。口径34.6cm、器高38.1cm、底径9.0cmを測る。白褐色を基調とするが、外面は煤で、内面は底部近くと胴中位よりやや下にコゲが付着し褐色に変色している。5は底部を欠失した破片。胴部はわずかに張り、内外ハケメ仕上げである。口縁部は頸部から外折して、わずかに外反しながら丸く仕上げた端部へと至る。口径33.4cmを測り、淡黄褐色を呈す。

d. 溝状遺構

7号溝（図版15・16、第6・33図）

1区第2面の西北隅から東南隅にかけて横断する溝で、方向はN-65°-Wを測る。非常に直線的で、1～3号掘立柱建物跡とも方向が一致することから、何らかの企画に基づいて掘削された可能性も気になるが、第1面の2～5号溝、第3面の10・13・14号溝とも方向がほぼ一致しているので、自



第34图 7号沟南北突出部·8号沟实测图 (1/60)

然地形による制約も考慮しておきたい。東南部で12・13号溝を切り、中央部で3号掘立柱建物跡を切る可能性がある。幅は2.0～2.5mとほぼ一定で、深さは80cm前後である。西北端での底面標高は26.9m、中央部での底面標高は26.8m、東南端での底面の標高は26.7mで、西北から東南方向へ緩やかに低くなっているようである。中央やや東寄りの土層を第33図に図示しているが、その1・2層となる茶褐色細砂層が全体的に上面に堆積していた。中間部は鉄分を脈状に含んでおり、土層図の8層下面に見るように、溝底面よりわずかに上面で鉄分が沈殿し、硬化するところがほとんどであった。

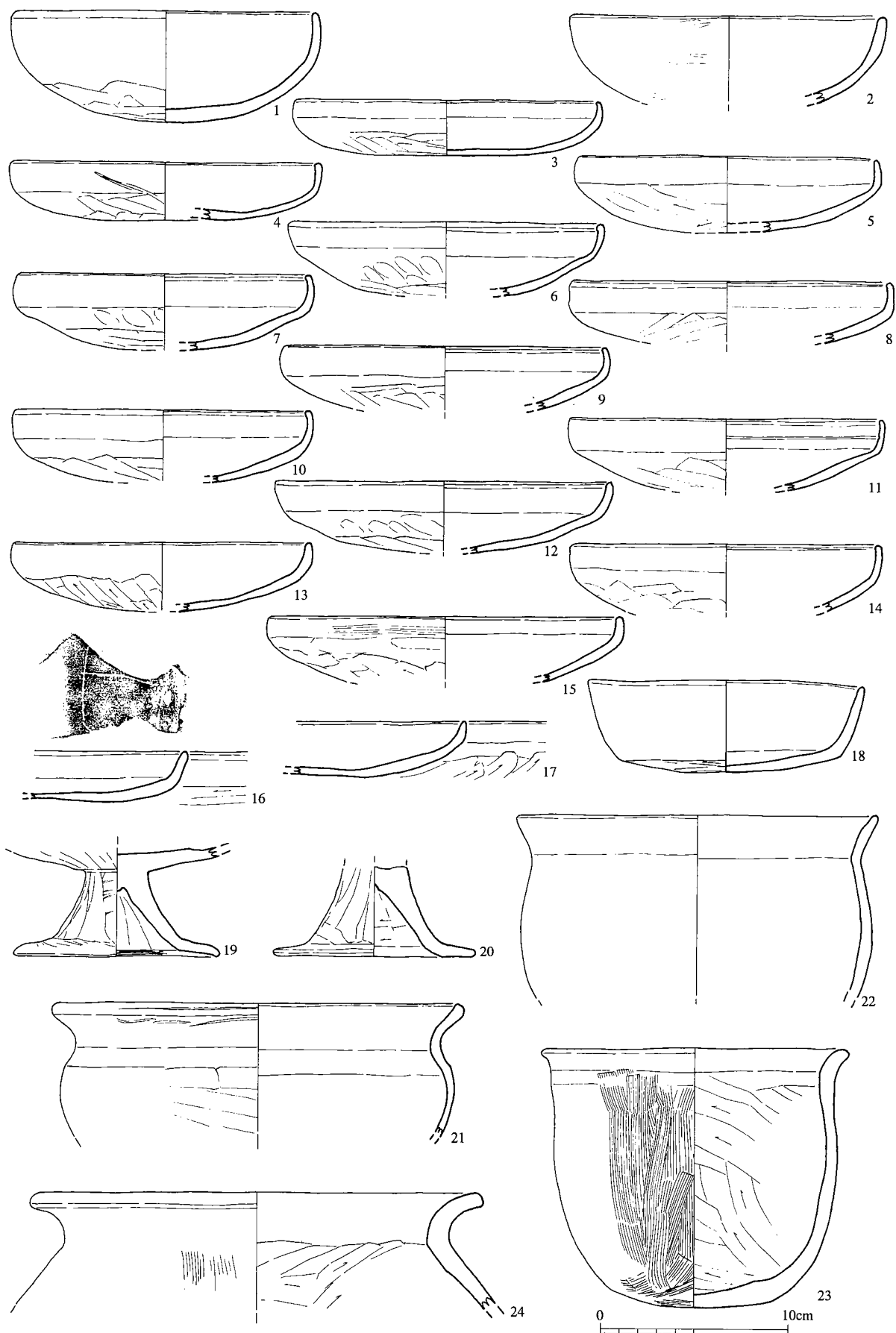
また、1・2号掘立柱建物跡のすぐ北側で、溝覆土3層とほぼ同様の鉄分を脈状に含んだ灰褐色細砂～シルトが西南、東北方向に広がって堆積していた。その部分を7号溝南北突出部として示したのが第34図である。この突出部の下部には褐色細砂が堆積しており、溝の南北のいずれにおいても、大小の河原石がまとまって出土している。図では切り合うものとして図示しているが、本来は溝と一連であった可能性が高い。前述したように、この突出部は1号、2号掘立柱建物跡を切るものと考えられる。

東南端の最上層からは第36図31の8世紀に位置づけられる須恵器杯蓋が出土し、最下層からはわずかながら古墳時代後期の土器が出土している。また、黒耀石剥片（第82図6）が出土した。

出土土器（図版30・31、第35・36図1～42） 1～24は土師器である。1・2は比較的深い器形の杯で、いずれも口縁部が直立に近く、丸く底部へと移行している。1の外面には手持ちヘラケズリを施し、2は外面にかなり摩滅が進むが、一部にミガキが残る。1は口径15.9cm、器高5.9cmを測り、白橙褐色を呈する。2は口径16.6cmを測り、橙褐色を基調とするが、一部に褐色の化粧土を施した可能性がある。

3～17は器形の浅い杯。いずれも丸底で、底部と口縁部の境界で急に屈曲し、内湾気味に直立した口縁部へと続く。底部外面に手持ちヘラケズリを施し、他をナデで仕上げるものがほとんどである。6・7・12・15では手持ちヘラケズリに先行する指頭圧痕が屈曲部直下に残っている。11は口縁部内面に強いナデによる沈線が巡り、13は口縁端部直下にかすかな細かい皺が見られる。14は口縁部外面にナデかハケメのいずれによるか不明であるが、水平方向の条痕が残っている。法量は3が径16.1cm、器高2.9cm、4が口径16.2cm、器高3.1cm、5が口径15.8cm、6が口径16.2cm、7が口径15.3cm、器高4.1cm、8が口径16.9cm、9が口径16.9cm、10が口径15.6cm、11が口径16.6cm、12が口径17.8cm、13が口径15.6cm、器高3.7cm、14が口径16.1cm、15が口径18.5cmを測る。4外面が淡黄褐色、6が淡褐色である他は、淡橙褐色～橙褐色を呈す。

18は底部が平底に近い杯である。底部外面は手持ちヘラケズリ後ナデを施し、底部との境に明確な稜をなして、わずかに内湾しながら口縁部が立ち上がっている。口縁外面には強い横ナデによる条痕が巡る。口径14.5cm、器高5.0cmを測り、淡橙褐色を呈する。19・20は高杯脚部破片で、19は杯底部がわずかに残っている。いずれも外面は杯底部から脚柱にかけて縦方向のヘラケズリ、脚裾はナデ仕上げであるが、19では脚裾外面に絞り痕状の皺が残る。内面はともに脚柱部がケズリで、19では脚裾内面にハケメが残る。19は裾径11.0cm、脚高4.5cm、20は裾径10.4cmを測る。いずれも淡橙褐色。21・22は深めで口縁の外反する鉢である。22は摩滅が進み調整の観察が困難であるが、21は胴部外面に手持ちヘラケズリが残り、口縁部外面に工具によると思われる線刻が横方向に巡っている。21は口径21.2cm、22は口径19.0cmを測り、いずれも淡橙褐色を呈す。23は小形の甕。胴部外面



第35图 7号沟出土土器实测图 (1) (1/3)

ハケメ、内面ケズリで仕上げ、胴部の張りが小さく、頸部のくびれが弱い。口縁部は短く外反して、やや角張り気味の端部に至る。口径16.1cm、器高13.8cmを測る。褐色を呈しているが、胴部外面は高さ10cm程の所まで煤が付着し、一部に二次加熱による赤変が認められる。24は大形の甕口縁部で、口縁部は外反が強い。口径23.0cmを測り、淡橙褐色を呈する。

25～36は須恵器である。25・26は6世紀代の杯身である。25は立ち上がりが短く内傾しており、底部ヘラケズリの範囲も狭い。口径11.4cm、受部径14.2cm、器高3.6cmを測り、焼成は堅緻で暗灰色を呈す。26は25に比して立ち上がりが長く直立に近く、ヘラケズリが及ぶ範囲も広い。口径12.3cm、受部径15.1cm、器高4.3cmを測り、焼成は堅緻で灰色を呈す。

27・28はかえりのつく杯蓋である。27はかえりの突出が弱く、口縁部より高い位置にあり、天井部には頂部が低く突出した撮みが付いている。撮みの接合部は天井部をわずかに彫りくぼめている様子が観察できる。口径16.9cm、受部径14.4cm、器高3.8cmを測る。焼成が甘く焼き絞まっておらず、灰黄色を呈する。28はかえりの突出が強いもので撮みは欠損している。口径16.0cm、受部径13.2cmを測り、暗灰色を呈す。29～31は口縁部が嘴状に直立する蓋である。いずれも天井部に回転ヘラケズリを施し、31は低く退化した撮みが天井部に付いている。29は口径14.8cm、30は口径16.2cm、31は口径15.9cm、器高2.7cmを測る。29・31は灰色を呈し、30は暗灰色を呈し、31はやや焼き絞まっていない。

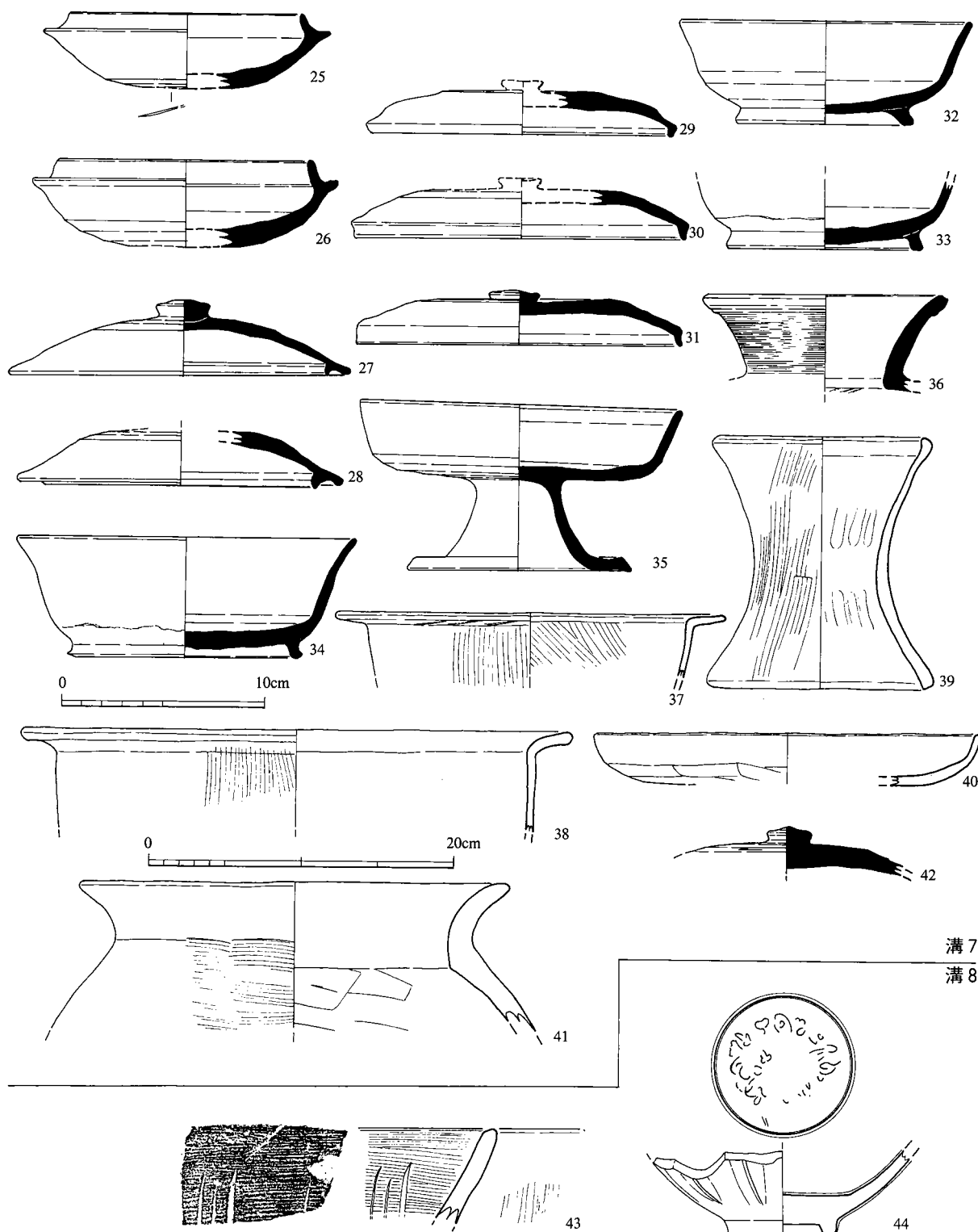
32～34は高台付の杯身破片。31は径が小さく、外側にやや踏ん張った高台で、丸みを帯びた腰部からやや外反気味に口縁に至る。外底面にはらせん状に粘土紐巻き上げ痕、ヘラ切り痕を残し、腰部外面にはヘラケズリ痕が残っている。口径14.3cm、器高5.0cm、高台径8.6cmを測り、焼成不良のため焼き絞まらず、灰褐色を呈す。33は高台が腰部に近づいている。腰部外面には接合痕が残り、外底面の調整も粗い。高台径9.6cmを測り、暗灰色を呈す。34は高台径が大きく腰部近くに接合されており、口縁部が長く伸びている。底部外面にはヘラ切り痕をらせん状に残している。口径16.6cm、器高5.9cm、高台径11.4cmを測り、暗灰色を呈し、良く焼き絞まっている。

35は高杯である。杯部は大きな平底から短く直線的に口縁部が立ち上がっている。脚部は接合部の径が大きく、脚柱部下方が広がり丸く外反して脚端部に至る。杯底部外面にはヘラケズリを施している。口径15.7cm、器高8.2cm、脚裾径10.9cmを測り、やや焼き絞まらず暗灰色を呈す。36は平瓶等の口縁部片である。端部外面を肥厚させ断面方形とし、外面にカキメを巡らしている。口径11.5cmを測り、暗灰色を呈す。

37～39は先行する遺構から混入した弥生土器である。37・38は口縁部片で、37は口縁部がほぼ水平に外折している。胴部内外はハケメ仕上げで、口縁部外面には線刻状の工具痕が見られる。口径25.1cmを測り、淡黄褐色を呈す。38はやや大形で、口縁部はわずかに外反気味である。胴部外面には縦ハケが残るが内面は摩滅している。口径35.8cmを測り、褐色を呈す。39は鼓形の器台。外面は縦ハケ、内面はナデ仕上げで、微かにナデ上げの稜が残る。口縁部は部分的に内上方につまみ出している。口径13.3cm、器高16.6cm、裾径13.7cmを測り、灰褐色～淡橙褐色。

以上の土器のうち18・31は最上層から出土し、25・26は最下層から出土した。

40～42は7号溝の南北突出部から出土したものである。40は土師器杯で底部から丸く屈曲しつつ口縁部が立ち上がり、底部外面には手持ちヘラケズリが観察される。口径14.7cmを測り、橙褐色を呈する。41は土師器甕で口縁部は外反が強く、胴部外面は横ハケ仕上げである。口径20.8cmを測り、



第36図 7号溝(2)・8号溝出土土器実測図(37~39は1/4、他は1/3)

淡橙褐色を呈する。42は須恵器杯蓋頂部片で、低い宝珠形つまみが付いている。

8号溝(図版16、第34図)

調査区の東北部に位置しており、西北から始まり東南方向に延びる溝状遺構と考えた。しかしながら、調査区を越えて2区では検出できなかったため、本来は調査区境界付近で収束する大形の土

坑あるいは落ち込み状の遺構となる可能性が高いが、ここでは調査時の遺構番号でそのまま報告することにしたい。

幅は広いところで5m弱、全体的に4m前後である。東南部が深く80cm程であるが、北から西にかけて検出面からの深さ30cmのテラス状になり、東南部でも検出面からの深さ40cmの半円形平面のテラスをなしている。このテラス部分に限って、大きいもので20cm大の河原石がまとまって出土している。あるいは深くなった東南部は掘り過ぎた恐れがある。覆土の上部は灰褐色粘質シルト、下部は暗褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は中世のものを中心としており、本来は第1面で検出できた可能性が高い。土器の他に黒耀石剥片（第82図2・3）、滑石製容器片（第85図6）が出土している。

出土遺物（第36図43・44） 43は瓦質の摺鉢で、内面ハケメ仕上げの後、櫛目を付ける。44は龍泉窯青磁であり、外面に彫りの浅い片刃彫りの蓮弁文を施文し、見込みはかすれているが界線の内側に花文を施文するようである。高台径5.3cmを測る。生地はやや粗く灰色で、釉は透明度の高い緑色を呈している。

e. その他の遺構

1号落ち込み状遺構（第6図）

1号竪穴住居跡など調査区東部中央の住居跡群から西北方向に、古墳時代後期の土器を含んだ包含層が広がっていた。このうち東半部を包含層として発掘調査し、西半分は中央を深く掘り下げたので、1号落ち込み状遺構と番号を付した。後に第3面の調査で検出された13・14号溝と位置が重なることから、その上部の包含層の可能性が高いことが判明したが、ここでは当時の番号のまま出土遺物について報告しておく。

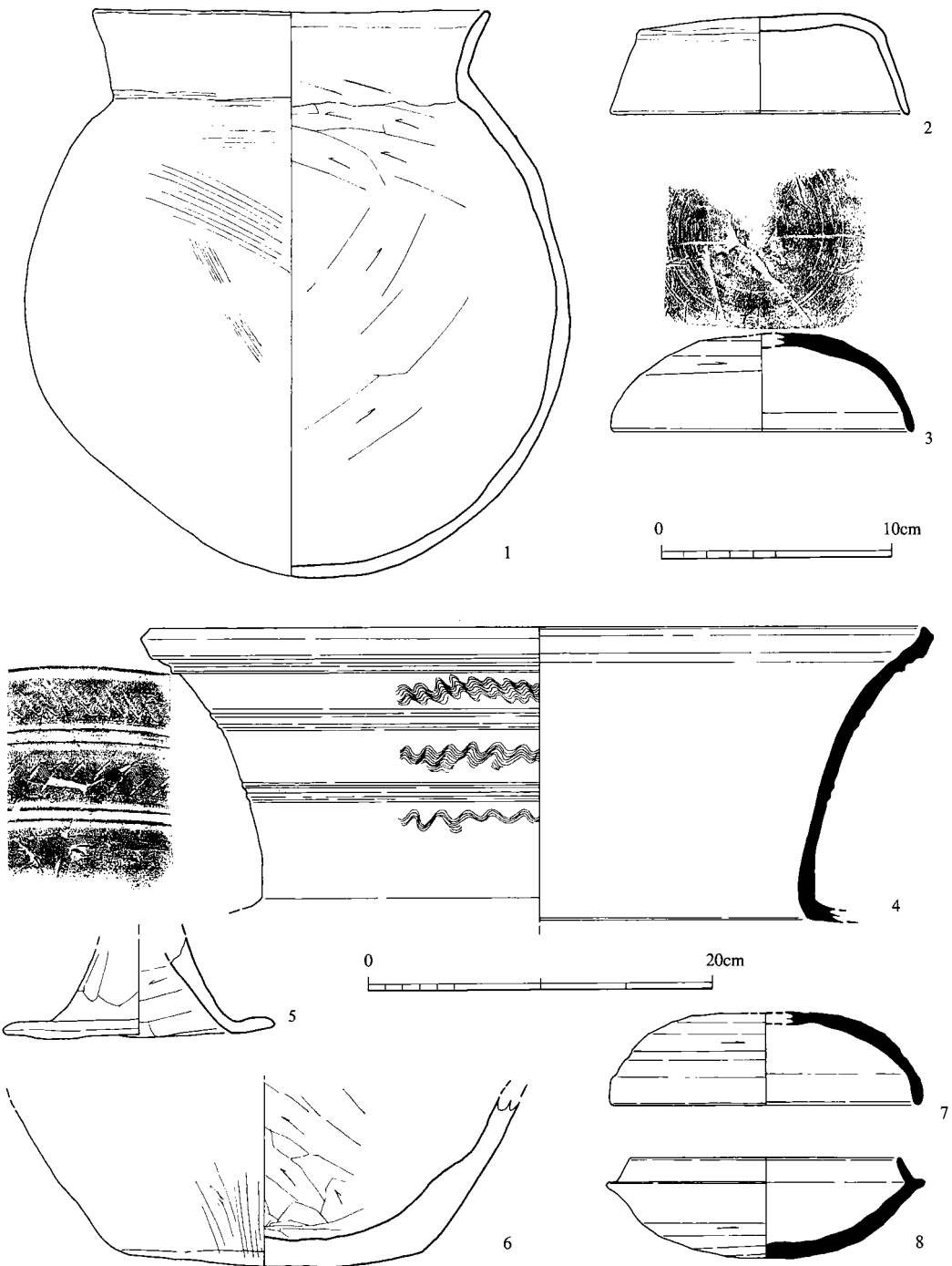
出土土器（図版32、第37図5～8） 5・6は土師器である。5は脚柱部の下方が大きく広がり、脚裾をわずかに跳ね上げた高杯脚部で、脚柱部外面縦ケズリ、内面横ケズリ仕上げである。裾径11.8cmを測り、淡橙褐色を呈す。6は平底に近いレンズ状底の甕底部片である。外面ハケメ、内面ケズリ仕上げで、外面黄褐色、内面杯褐色を呈する。

7・8は須恵器。7は杯蓋で口縁部から丸く屈曲して天井部に至り、その境界に凹線を巡らしている。口径13.2cm、器高4.1cmを測り、明灰色を呈する。8は杯身で、立ち上がりは短く内傾している。口径11.6cm、受部径13.9cm、器高4.25cmを測り、良く焼き絞まって灰色を呈す。

13・14号溝上層包含層（第6図）

上述のように調査区東部中央の住居跡群の西北、1号落ち込み状遺構との間に広がる古墳時代後期の土器を含んだ包含層である。発掘時は住居跡ではないかと何度も遺構検出を試みたが、平面形、カマドの有無などがはっきりせず、包含層として遺物を取り上げた。ここでは下層に位置する13・14号溝の上層に広がる包含層であったと解釈して、出土遺物の報告を行うことにしたい。また、土器の他に滑石製白玉1点（第83図22）が出土した。

出土土器（図版32、第37図1～4） 1・2は土師器である。1は完形に復元された土師器甕である。口縁部はわずかに外反し、胴下半部の張りが強い。胴部外面は摩滅が進むが胴上半に斜め～横ハケを施し、内面はケズリ仕上げ。頸部外面に横方向の工具痕が残るが、横ハケ工具の当たりか。口径



第37図 13・14号溝上層包含層・1号落ち込み状遺構出土土器実測図 (4は1/4、他は1/3)

17.1cm、胴部最大径23.6cm、器高24.7cmを測る。粘土がかなり粗く、1cm弱の大きな砂粒さえ含んでいる。明褐色を基調としているが、胴下部は二次加熱のため褐色、灰色に変色している。2は模倣杯蓋。天井部は平坦で、口縁部との境界が段をなし、直線的に広がって口縁端部に至る。口径12.8cm、器高4.5cmを測り、橙褐色を呈している。

3・4は須恵器である。3は杯蓋で口縁部から天井部になめらかに移行している。口径12.9cm、器高4.3cmを測り、灰色を呈す。4は須恵器甕頸部～口縁部の破片。口縁部はわずかに肥厚させ、端部を上方にわずかにつまみ出している。外面は2条1組の低い突帯により3段に区画し、その間に櫛描

波状文を巡らしている。口径40.6cmを測り、暗灰色を呈す。良く焼き絞まるが、一部は強く火を受けて器表が荒れる。

f. 第2面ピット・遺構面出土の土器

第2面ピット出土土器（図版32・33、第38・39図）

ここでは第2面の各所のピットから出土した土器について報告することにした。

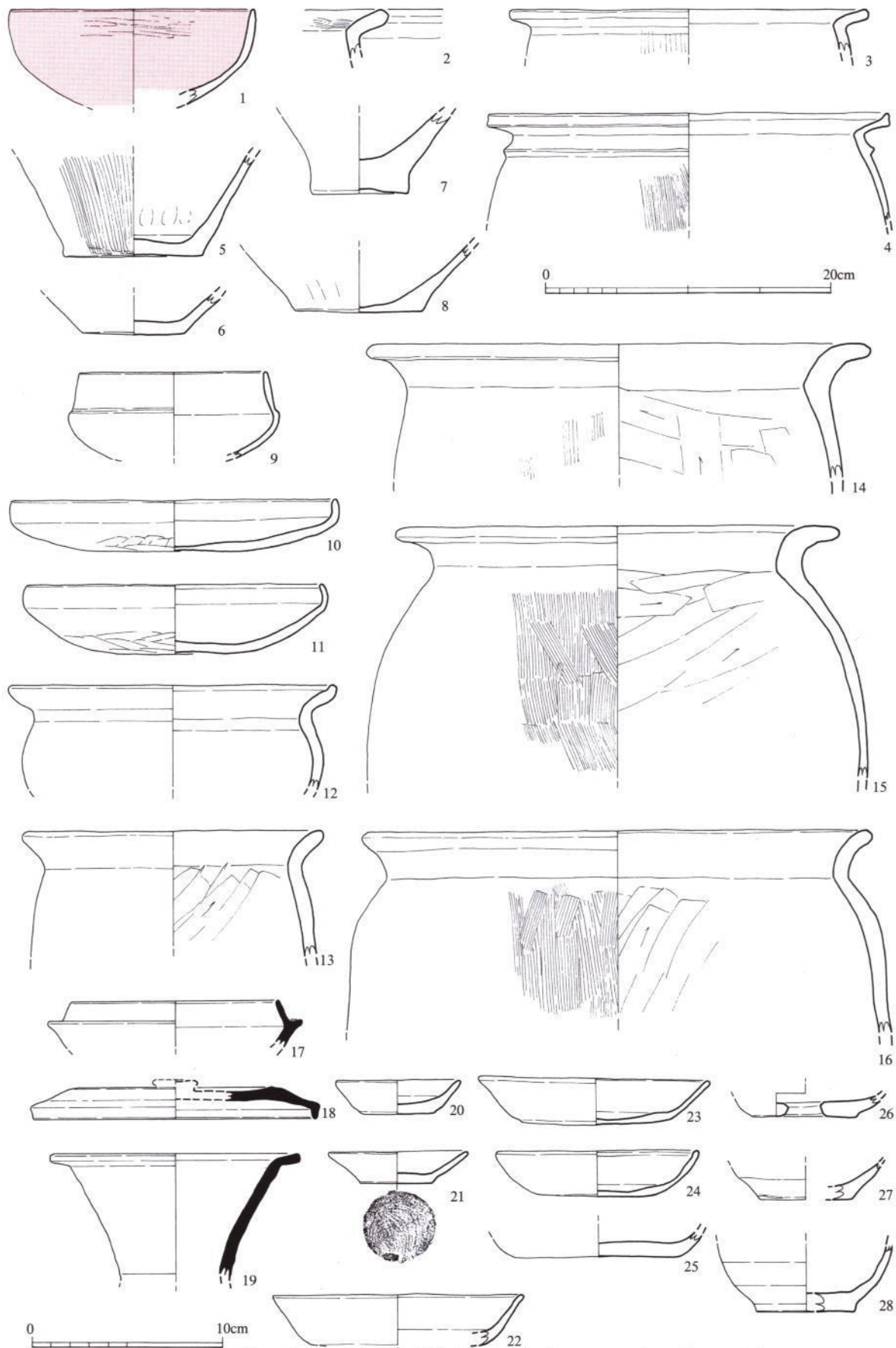
1～8は弥生土器である。1は内外丹塗りの鉢破片である。摩滅が進むが口縁部近くに横方向のミガキがわずかに残っている。口径16.8cmを測る。2～4は甕口縁部片。2は小片で口縁が短く、端部は丸く仕上げる。3は口縁部がわずかに外反しており、端部が面をなしている。口径24.7cmを測る。4は口縁部が頸部から直線的に外傾し、端部を上方につまみ上げて拡張し、外側に直立する凹面を形成している。頸部よりやや下がった位置に断面三角形の突帯を巡らしている。口径27.8cm。

5～8は弥生土器底部で、立ち上がりの角度が緩やかな6・8は壺、残る5・7は甕と思われる。5は外面縦ハケを施し、内面には指頭圧痕が観察される。他は内外ナデ仕上げであるが、8は外面に縦方向の板状工具の稜、内面見込みに工具痕が残る。底径は5が9.6cm、6が7.0cm、7が6.7cm、8が8.9cmを測る。1・6・7が淡黄褐色、2～4が淡橙褐色、5・8が淡褐黄色を呈し、4は煤のためか外面が一部褐灰色に変色する。また、7の内面は焼成不良のため灰黒色を呈する。以上の弥生土器のうち多くが弥生時代中期後半を主体としているが、7は若干古く、中期初頭頃のものではないかと推測される。

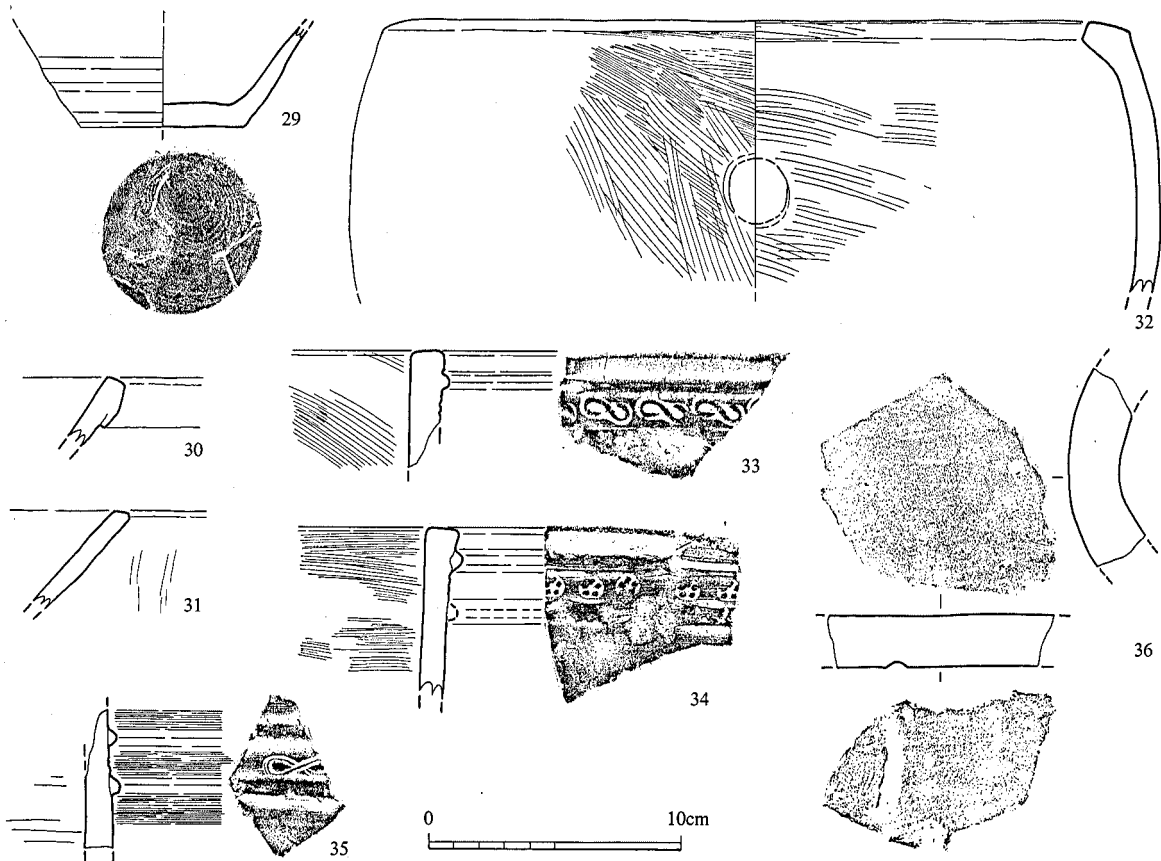
9～16は古墳時代～奈良時代の土師器である。9は模倣杯の身で、口縁部は長く、受部の突出は非常に小さい。口径9.6cmを測り、淡橙褐色を呈す。10・11は器形の低平な杯身で、いずれも口縁が直立に近く、底部外面を手持ちヘラケズりする。10は口径16.8cm、器高2.7cm、11は口径15.4cm、器高3.7cmを測り、いずれも橙褐色を呈する。12は口縁を外反させる深めの鉢で、調整は内外摩滅している。口径16.8cmを測り、淡橙褐色を呈する。13～16は甕である。13は小形で内面を斜め方向にケズリ仕上げし、外面は摩滅のため調整不明。口径15.1cmを測る。外面灰褐色、内面淡黄褐色を呈し、外面はやや強い二次加熱を受けて、口縁部内面はコゲが付着し褐変する。14は頸部のくびれが小さく、口縁は強く屈曲して外反する。口縁内外のナデが顕著で特徴的である。口径25.6cmを測り、明黄褐色を呈する。15は頸部のくびれが強く、口縁部は強く屈曲して外反する。外面細かな縦ハケ、内面ケズリ仕上げ。口径22.4cmを測り、明褐色～黄褐色を呈する。16は口縁部が緩く外反しており、胴部外面縦ハケ、胴部内面縦ケズリ仕上げ。内外黄褐色を呈し、口径26.1cmを測る。

17～19は古墳時代～奈良時代の須恵器。17は暗灰色を呈する蓋杯の身口縁部片で、口径10.7cm、受部径10.7cmを測る。18は口縁部が嘴状に直立する蓋。口径14.7cm、内外暗灰色。19は長頸壺の口縁部片か。口縁端部は外折し、水平な面をなすのが特徴的である。口径12.6cmを測り、内外とも明灰色を呈す。

20～32は中世土師器。20・21は小皿で、いずれも糸切り痕を底部外面に残す。20は口径6.3cm、器高1.8cm、21は口径7.2cm、器高1.7cmを測る。22～25は杯。底部外面は23が回転ヘラ切り、24が平行の板圧痕、25が糸切り痕を残す。22は口径13.0cm、23が口径11.9cm、器高2.5cm、底径7.8cm、24が口径10.4cm、器高2.4cm、底径6.0cm、25が底径8.7cmを測る。26～29は椀状の器形と推測されるもの。26は底部に直径2.7cmを測る焼成前穿孔を施している。底部外面は26・28・29が糸切り痕、27が工



第38図 1区第2面ピット出土土器実測図(1) (1~8は1/4、他は1/3)



第39図 1区第2面ピット出土土器実測図(2)(1/3)

具による平行条痕を残している。また、29は体部外面のナデ痕が顕著である。底径は26が5.5cm、27が4.8cm、28が5.1cmを測る。これらの土師器は20~22が黄褐色、23・25が淡橙褐色、24が白橙色、26・28・29が明褐色、27が暗褐色を呈す。30・31は外傾する鉢口縁部片。30は粘土を外面に折り返して口縁部を肥厚させ、31は単口縁で外面に調整によると思われる縦方向の微かな凹みが観察される。32は口縁部を内傾させる火鉢片である。内外をハケメ仕上げし、胴部に直径2.5cm程の穿孔を施している。口径26.4cm前後に復元され、褐灰色を呈す。

33~35は瓦質火鉢片。33・34は口縁部片でいずれも口縁部下を突帯で区画し、33は逆S字文、34は梅の花文のスタンプを施文している。35は恐らく底部近くの破片で∞文をスタンプで巡らしている。いずれも内外を黒色に燻している。

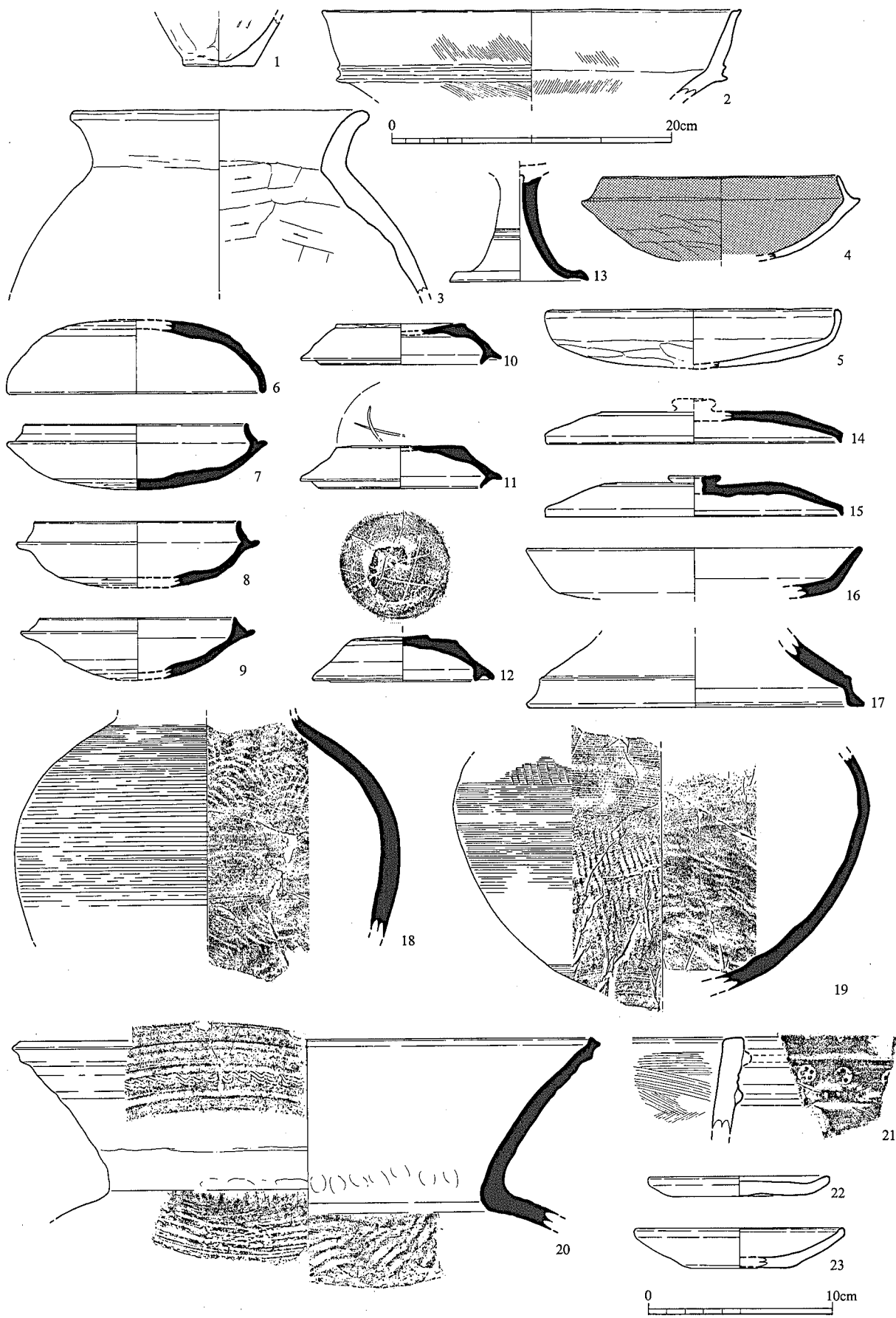
36は丸瓦片。凸面は縄目タタキ後丁寧なナデを施し、内面には布目が残る。焼成は瓦質に近く軟らかい。

第2面遺構面出土土器(図版33、第40図)

ここでは第2面の遺構面から出土し、どの遺構に帰属するか不明の土器をまとめて報告することにした。

1は底径4.9cmと小さく、器形も歪であるが、弥生土器の底部であろう。外面は板状工具によるナデを施し、内面にも板状工具小口痕が遺存している。

2~5は古墳時代~奈良時代の土師器。2は古墳時代初頭前後の二重口縁壺口縁部片。口縁部は外傾し、上端が凹面をなしている。屈曲部は外側にわずかに突出し、その上部に強いナデによるもの



第40図 第2面遺構面出土土器実測図 (1・2は1/4、他は1/3)

か断面三角形の突帯をさらに巡らす点が特徴的である。内外ハケメを残し、橙褐色を基調とするが、内外二次加熱を受けて暗褐色に変色している。3は甕上半の破片である。外面調整は摩滅しているが、頸部に平行の条痕がかすかに残り、ハケメ痕と考えられる。内面は頸部までケズリを施す。口径15.3cmを測り、暗褐色を呈す。4は模倣杯の身破片で、口縁部はやや内傾し、受部の突出が顕著な須恵器を比較的、忠実に模した器形をなしている。口径12.7cm、受部径15.1cmを測り、内外黒漆塗である。5は低平な器形に直立する口縁の付く杯。底部外面は手持ちヘラケズリを施し、他はナデ仕上げ。口径15.5cmを測り、淡黄橙色を呈する。

6～20は須恵器。6は杯蓋で、口縁部から天井部に丸く移行する。口径13.7cm、器高4.0cmを測り、堅緻な焼成で暗灰色を呈する。7～9は杯身で、いずれも立ち上がりが短く、内傾している。特に9は短いために、断面三角形状を呈している。7は口径11.9cm、受部径14.0cm、器高3.6cm、8は口径10.9cm、受部径13.1cm、器高3.5cm、9は口径10.4cm、受部径12.6cmを測る。いずれも灰色で焼成良好であり、7の外面は特に火を強く受けて紫色を帯びている。10～12は返りのついた蓋である。いずれも天井部は平坦でヘラ切り未調整であり、回転ヘラケズリは12の稜下部分に観察できるのみである。11・12には天井部外面にヘラ記号が付される。口径、受部径、器高は10が8.6cm、10.8cm、2.2cm、11が8.1cm、10.9cm、2.3cm、12が7.8cm、9.6cm、2.5cmを測る。いずれも灰色～暗灰色で焼成は良好である。14・15は口縁部が嘴状になる杯蓋である。いずれも低平な器形で、15は頂部に低い撮みを付している。14は口径15.8cm、15が口径16.0cm、器高2.2cmを測る。いずれも灰色を呈すが、14の焼成が甘いものに対して、15は強く火を受けて灰を被っている。16は皿で、底部は若干突出し、直線的に外傾する口縁がつく。口径17.9cmを測り、焼成不良のために焼き絞まっておらず、触ると手に砂粒が付着する。

17は脚付壺の脚部となるか。脚部と脚裾を凹線で画し、脚裾は短く直立して端部を外側に拡張している。灰色を呈し、脚裾径18.0cm。18・19は中形の壺胴部片である。18は外面カキメを施し、内面の同心円文当具圧痕を少し擦り消している。焼成堅緻で内外ともやや緑色を帯びた灰色を呈す。19は外面擬格子タタキの後カキメを巡らし、胴部最大径付近に櫛歯刺突文を施す。内面の同心円文当具痕を擦り消している。20は甕口縁部～頸部片。口縁部は端部直下を凹線で区画し、振幅の小さい波状文を巡らしている。外面頸部よりやや上に微かな稜が立ち、胴部外面は平行タタキ。頸部内面に横ナデが施されないために成形時の指頭圧痕を残し、胴部内面には同心円文当具痕が残る。

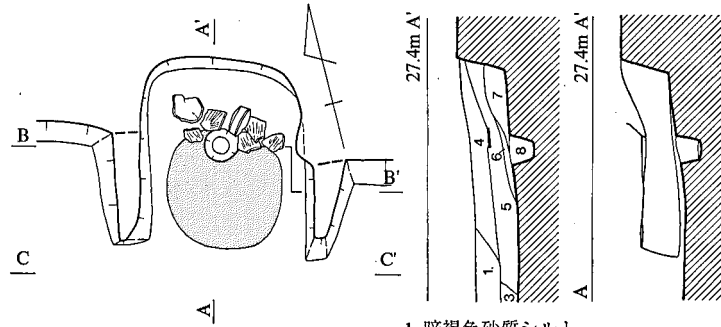
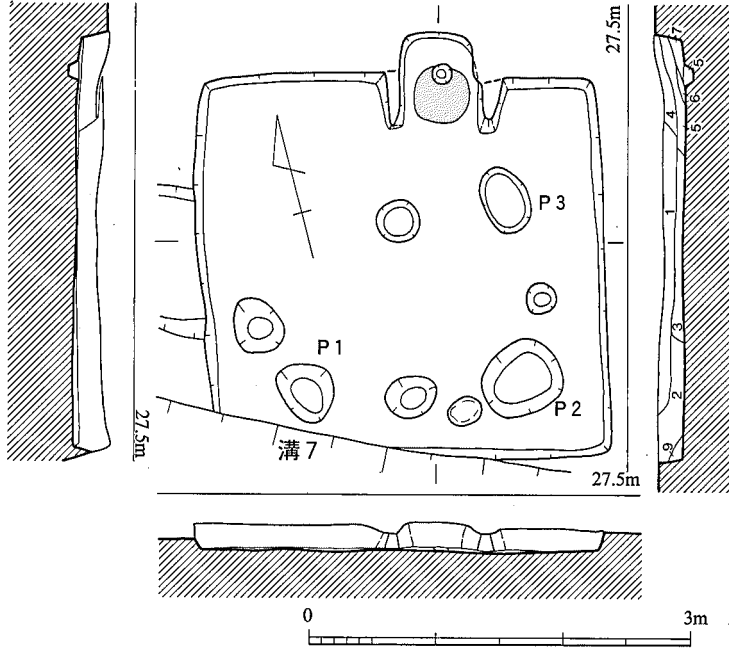
21は瓦質火鉢口縁部片で口縁端直下に頂部の丸い突帯を2条巡らし、その間に梅の花状のスタンプリ文を施している。内面はハケメを施す。21は内外燻して仕上げ暗灰色。脚部とは凹線で区画されている。

22・23は中世土師器小皿で、22の外底面にはヘラ切り後板圧痕が観察される。23の調整は摩滅している。22は口径9.4cm、器高1.1cm、23は口径11.1cm、器高2.2cmを測る。

(3) 第3面の遺構と出土土器

第3面の検出遺構には堅穴住居跡18棟、土坑2基、溝6条、ピットがある。堅穴住居跡、土坑等遺構は主として調査区の南側に集中しており、調査区の東北部では遺構が希薄である。その理由として、本面で検出される弥生時代遺構が調査区東北に分布していないことが第1に挙げられる。さらに、調査区付近の自然地形が北から美津留川の方に向けて低く傾斜しており、調査区南部での堆積

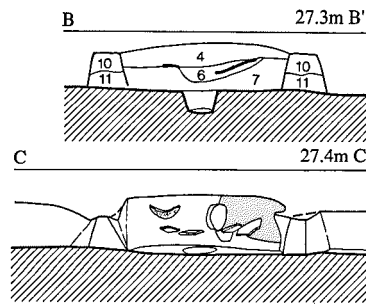
層が厚かったために、そこに分布する古墳時代の竪穴住居跡等遺構は第2面では検出できず、第3面になって検出が可能になったことも影響している。したがって、調査区東部に分布する古墳時代の竪穴住居跡を第2面で、調査区西南部に分布する古墳時代の竪穴住居跡を第3面で検出し、同一時期の遺構が複数面に及ぶという問題が生じている。もちろん、重機を利用して包含層を掘削する場合に、自然地形の傾斜を十分考慮したつもりであるが、それでも層序に応じて1層ずつ包含層を除去することができなかつたことが最大の理由であろう。複数の遺構面がある遺跡の調査に伴う困難と、自身の経験・技術の不足を痛切に感じる結果となった。



a. 竪穴住居跡

6号竪穴住居跡 (図版18、第41図)

調査区の中央に位置する竪穴住居跡である。北からやや東に振ったN-14°-Eを主軸に取り北壁にカマドを設置している。南西部を7号溝に切られているが、ほぼ完全な形で検出できた。竪穴部分は南北3.0m、東西3.1mを測り、壁は残り



1. 暗褐色砂質シルト
2. 黒褐色砂質シルト
3. 暗黄褐色砂質シルト (2を30%ブロックで混)
4. 褐色粘質シルト (粘土、炭少し混)
5. 黒褐色粘質シルト (上面に焼土推積)
6. 黄褐色粘土 (焼土・炭多)
7. 黄褐色シルト (焼土・炭少し混、地山由来)
8. 暗褐色粘土
9. 黄褐色粘質シルト
10. 暗褐色粘質土
11. 黄褐色砂質土

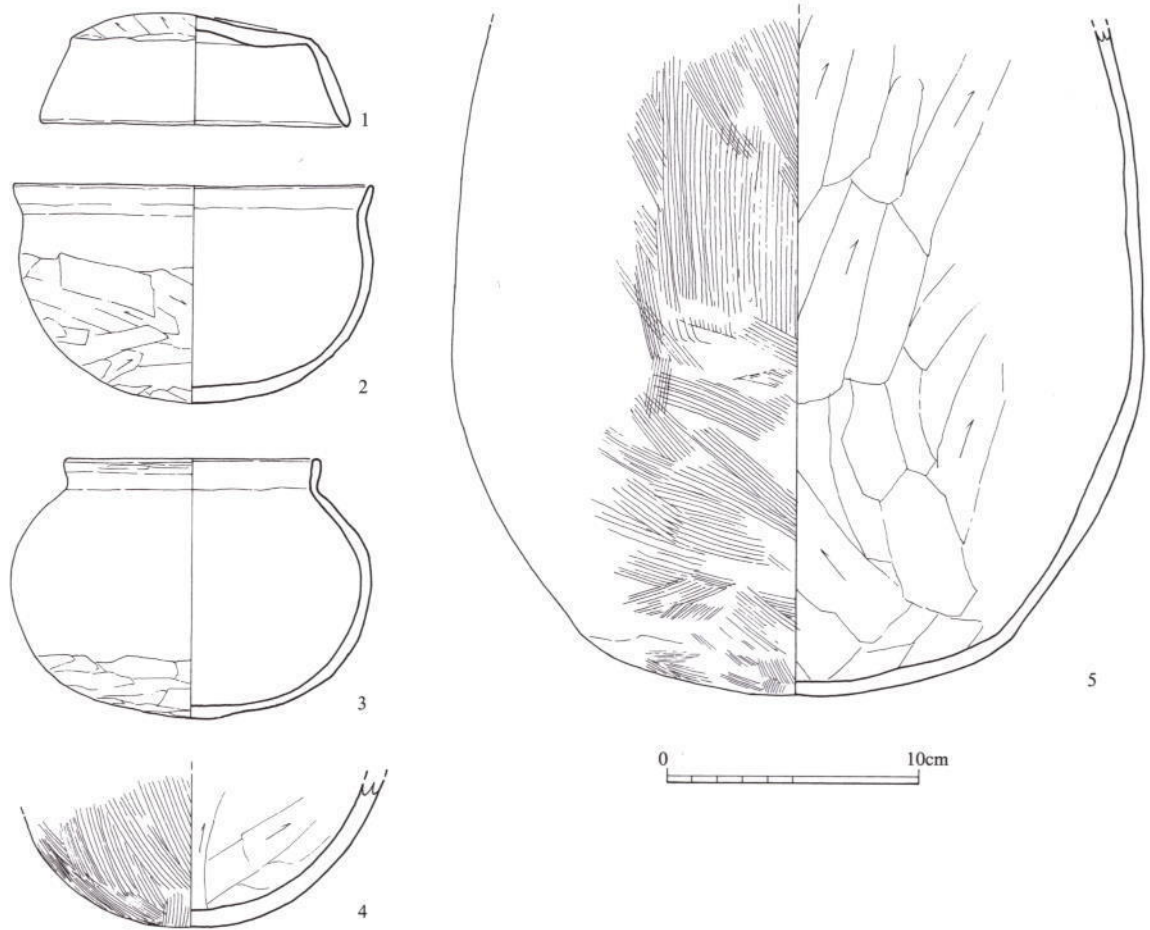
第41図 6号竪穴住居跡・同カマド実測図

(1/60、1/30)

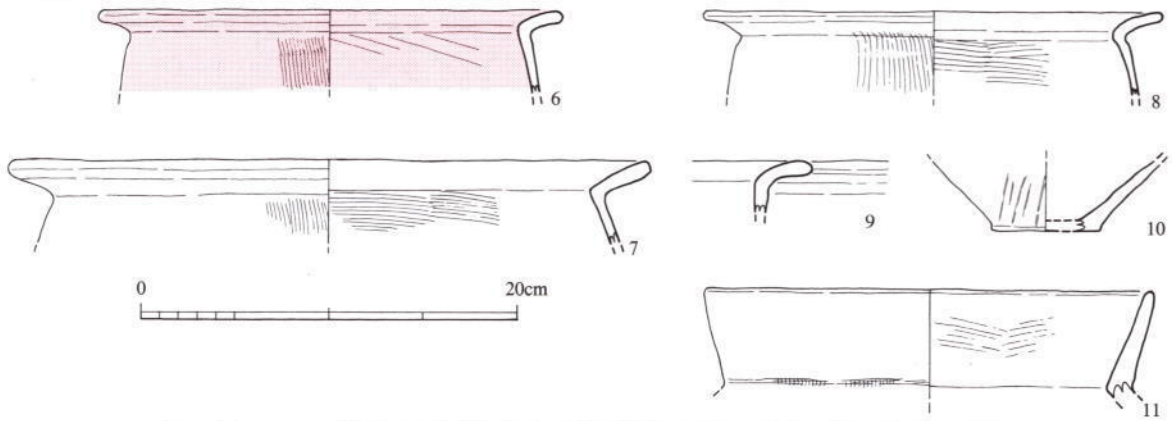
の良好なところで20cm強である。覆土

は暗褐色砂質シルト～暗黄褐色砂質シルトが主体となる。床面では大小7基のピットを検出しており、大形のP1～P3が支柱穴の可能性もある。しかしながら、これらはいずれも深さ20cm弱と浅く、北西部の支柱穴も検出していないので、断定までには至らない。また、住居跡南の床面、P2のすぐ西から直径20cm程の河原石が出土している。

カマド (図版19) 住居跡の北壁中央やや東寄りに壁から0.3m程突出させて、カマドを設置している。奥壁から0.35mほど南側の床面に直径0.1m、深さ10cmのピットがあり支脚抜取痕と考えられる。その前面が直径0.5m弱の範囲内で硬化はしていないが、シルト質の土が赤変し焼面となって



住6
住14



第42図 6・14号竪穴住居跡出土土器実測図 (6~10は1/4、他は1/3)

いた。また、奥壁も東側が同様に熱変していた。煙道は残っていない。暗褐色～黄褐色の粘質土を用いて構築した袖は竪穴部の壁から0.4m程突出しており、両袖間の間隔は幅0.6mを測る。カマド内には下部に焼土と炭の多く混じった黄褐色粘質土が堆積しており、その上部を中心に土師器甕、土師器模倣杯蓋が出土している。

出土土器 (図版34、第42図1~5) いずれも土師器で、1・4はカマド内から出土したもの。1は模倣杯蓋である。天井部は平坦であり、内傾する口縁部と続く。口縁部と天井部間の屈曲部は器壁が薄くなっており、天井部外面は手持ちヘラケズリ仕上げである。口径12.0cm、器高4.0cm。2は口

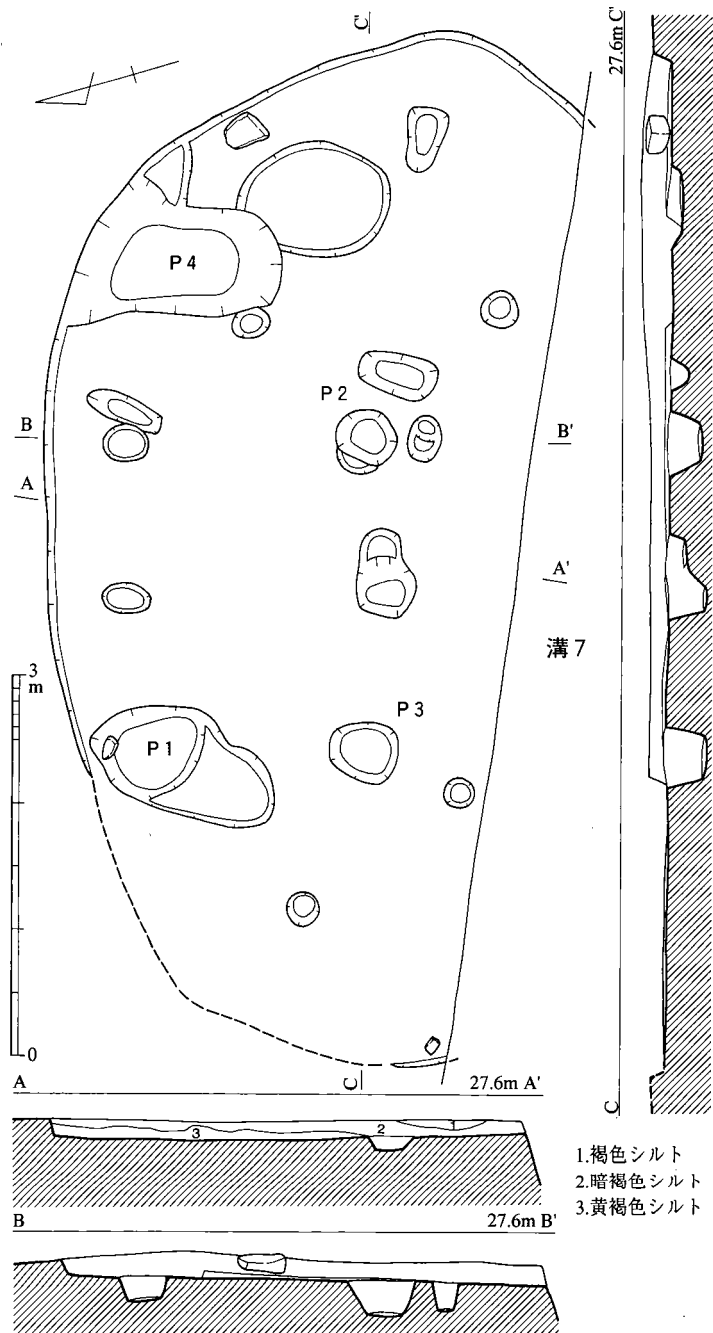
縁部が外反する鉢。口縁部は短く、胴部は半球形を呈している。胴外面下部に手持ちヘラケズリを施す以外はナデ仕上げ。3は口縁部が短く直立する小形の壺。胴部は偏球形をなし、胴外面下部手持ちヘラケズリを施す以外は摩滅が進行しているが、口縁部外面の一部にミガキが残存する。口径9.9cm、胴部最大径14.3cm、器高9.9cmを測る。4は甕底部片で、5は甕胴下半部破片。いずれも内面ケズリ、外面ハケメ仕上げで、5は胴部最大径27.7cmを測る大形品となる。以上の土師器は1~3・5が淡橙褐色を呈し、4は褐灰色が基調であるが、外面の煤付着、二次加熱による変色が顕著である。5も高さ20cmの付近まで二次加熱、煤の付着が顕著である。

14号竪穴住居跡 (図版19、第43図)

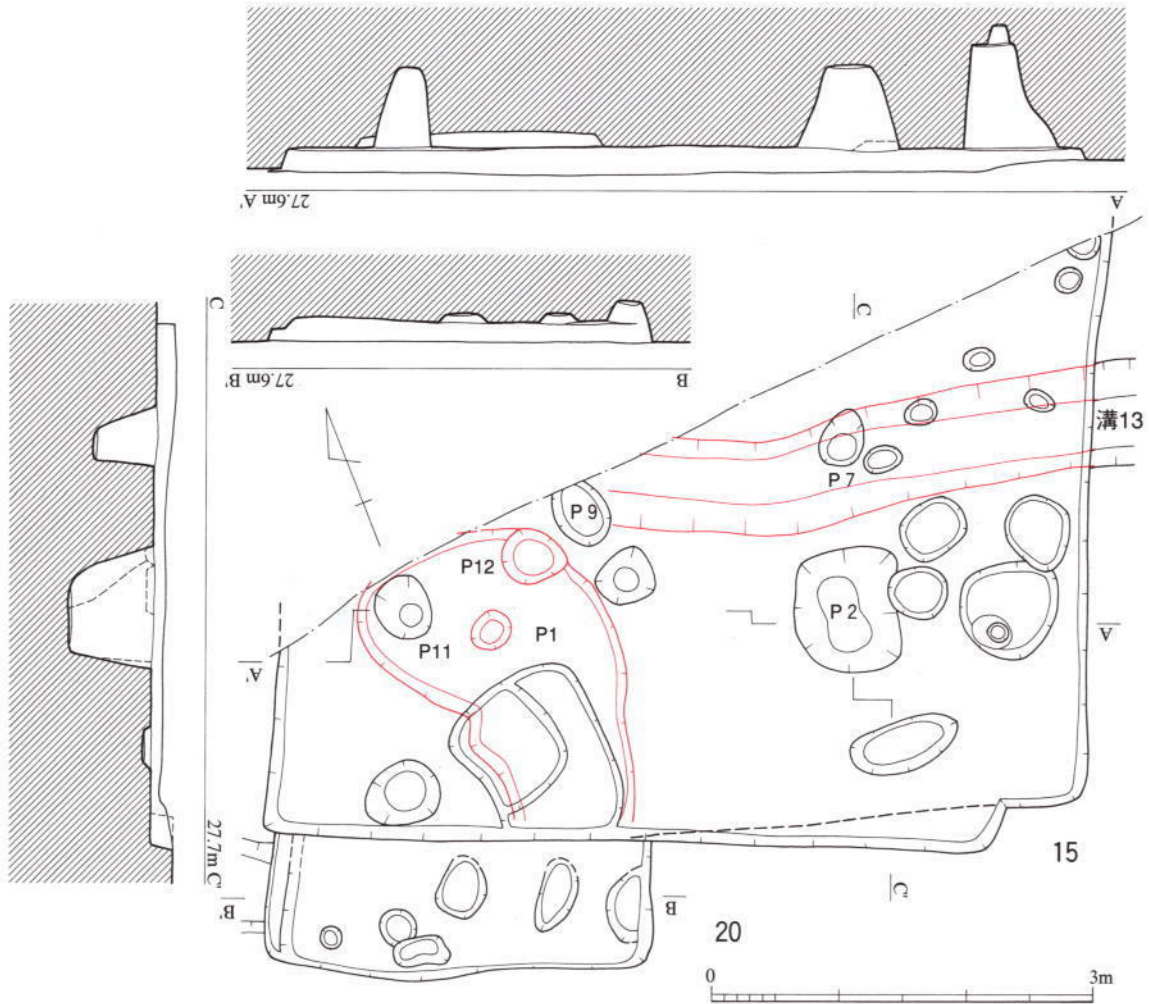
調査区の中央やや東に位置する。平面楕円形の竪穴住居跡ではないかと考えて調査したが、後述する出土土器の時期とも合致していない。また、規模も大きく不自然であるので、平面形自体に疑問が残る。このような問題はあるが、以下では調査結果をそのまま述べることにしたい。

平面形は西北部の壁が失われ、西端でかろうじて壁の一部を検出しているがこれがつながるとすれば長軸8.2m、幅4.8m以上の楕円形になる。壁は残りのよい場所で高さ20cm余りで、覆土は褐色~暗褐色シルトが主体となる。南側は第2面で検出した7号溝に全体的に削られている。床面では多数のピットを検出しているが、中央部で検出したP2・P3があるいは主柱穴となるか。炉跡は検出していない。また、西南部に位置するP1は平面楕円形で長さ1.6m、幅0.8m、東北部のP4は平面隅丸方形に近く長さ1.6m、幅0.8mのいずれも大形のピットである。

出土土器 (第42図6~11) 6~10は弥生土器で、6~8はP1より出土した。6~9は甕口縁部片で、6は内外丹塗りを施している。6・8・9は口縁部がわずかに外反しており、端部を丸く仕上げている



第43図 14号竪穴住居跡実測図 (1/60)



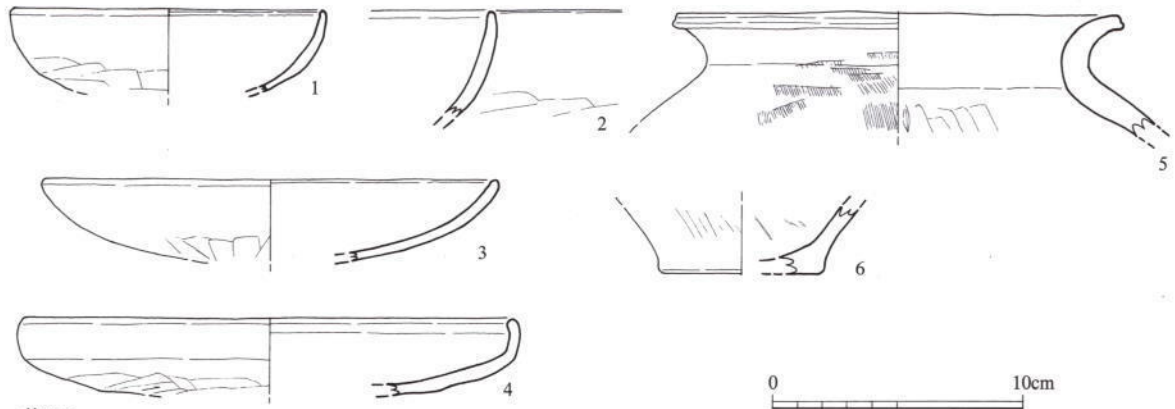
第44図 15・20号竪穴住居跡実測図 (1/60)

のに対して、7は直線的に外傾する。6は胴部外面にハケメを残し、内面は工具による斜め方向のナデの痕跡が残る。7・8は胴部外面縦ハケ、胴部内面横ハケ仕上げである。6は口径24.0cmを測り、黄灰褐色を基調とするが、割口は黒変し焼成が良くない。7は口径33.4cmで、淡褐黄色を呈する。8口径24.3cmで黄褐色、9は焼成が悪く、白褐色を呈する。10は底部片で、胴部外面には縦方向の工具痕が残る。底径5.6cmを測り、淡黄褐色を呈する。以上の土器は弥生時代中期末に位置づけられよう。

11は土師器甕口縁部で、混入と思われる。口縁部は直線的に外傾し、内面に一部ハケメ、頸部外面にハケメ工具の小口痕跡が残っている。口径14.7cmを測り、橙褐色を呈する。

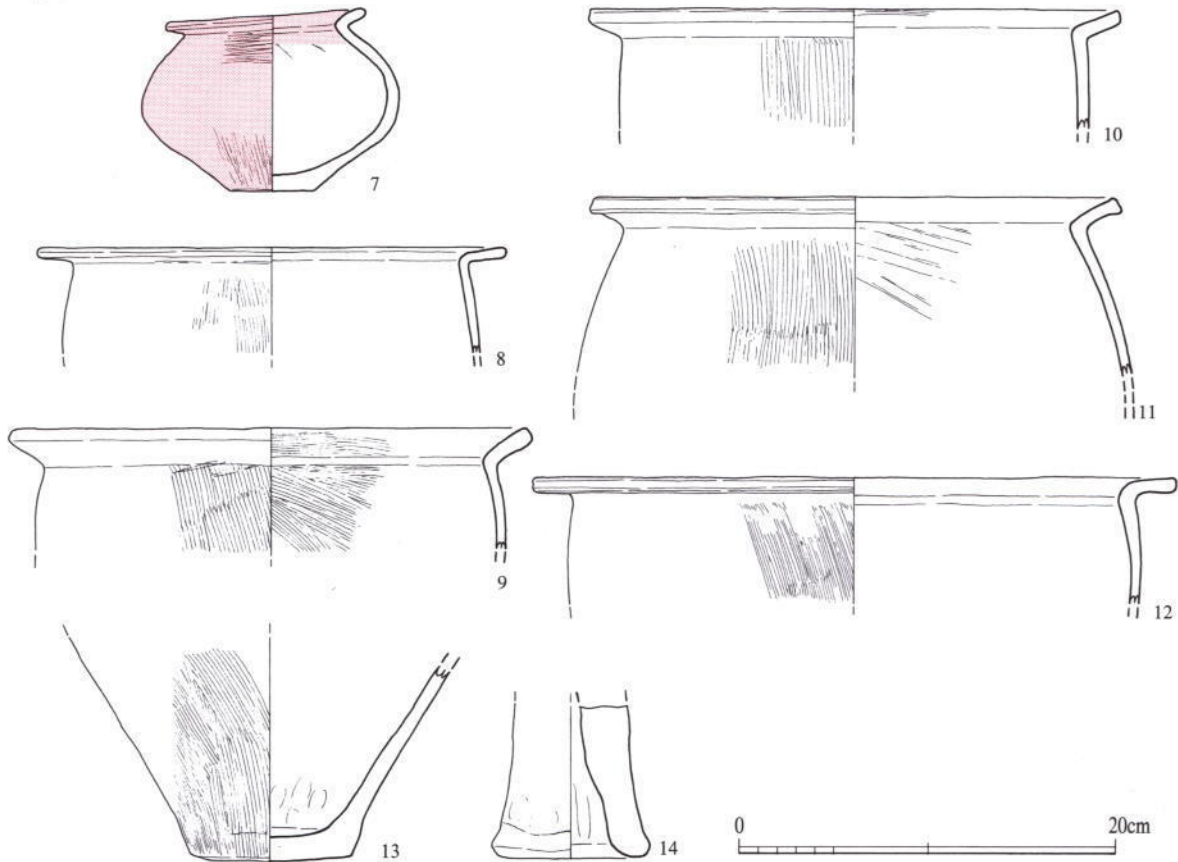
15号竪穴住居跡 (図版19、第44図)

調査区の西北部に位置する竪穴住居跡で、下層では13号溝を検出している。東に9号溝、南に20号竪穴住居跡が位置しているため輪郭の検出が難しく、20号住居跡との先後関係は十分に確認することができなかった。北側は調査区外へと続き、南壁と東壁の一部と西壁の一部を検出したにとどまるが、南壁で東西6.4mを測り、比較的大形の部類に属す竪穴住居跡であったと推測される。主軸は北よりやや東に振ったN-22°-Eとなる。なお、南壁の東部は平面形を誤って捉えたため、



住15

住16



第45図 15・16号竪穴住居跡出土土器実測図 (1~5は1/3、他は1/4)

少し掘り過ぎている。壁の高さは残りの良い箇所では15cm余りで、覆土は暗褐色細砂～シルトが主体とし、下部には黄褐色砂が混じっていた。床面では多数のピットを検出しているが、東西方向の断面に示したP2・P11が比較的、深くしっかりしたピットになるので、4本主柱とした場合の主柱穴となるか。床面下層では住居跡西南部に長さ2.5m程、深さ10cm程の掘り込みが検出されており、あるいは20号竪穴住居跡と一連と可能性がある。この掘り込み中に検出されたP11では底から石がいくつか検出された。残存部分ではカマドが見られないので、調査区外の北壁に位置していると思われる。土器の他に砥石(第83図29)、鉄器刀子片(第87図11)が出土している。

出土土器(第45図1~6) 1・2・6はP9から出土し、4はP7から出土した。

1～3は丸底の杯である。いずれも口縁部から底部に丸みを帯びて移行し、底部外面は手持ちヘラケズリ仕上げである。1は口径12.4cm、3は口径17.9cmを測る。4は低平な器形のものである。口縁部は急に立ち上がって直立し、内外を丁寧なナデを施している。底部外面は手持ちヘラケズリ仕上げ。口径19.4cmを測る。5は甕口縁部片で、口縁部は強く屈曲して外反し、端部は凹線の巡る面をなしている。胴部外面は縦ハケの工具小口痕が顕著に残り、内面はケズリの痕跡かと思われる縦方向の凹み見える。口径17.6cmを測る。1～4は橙褐色、5は淡黄褐色を呈し、4底部外面には大きな黒斑が見られる。

6は弥生土器底部片。底部からやや外反しながら胴部が立ち上がり、外面縦ハケ仕上げで、内面には工具痕が残る。底径8.4cmを測り、淡褐色を呈する。

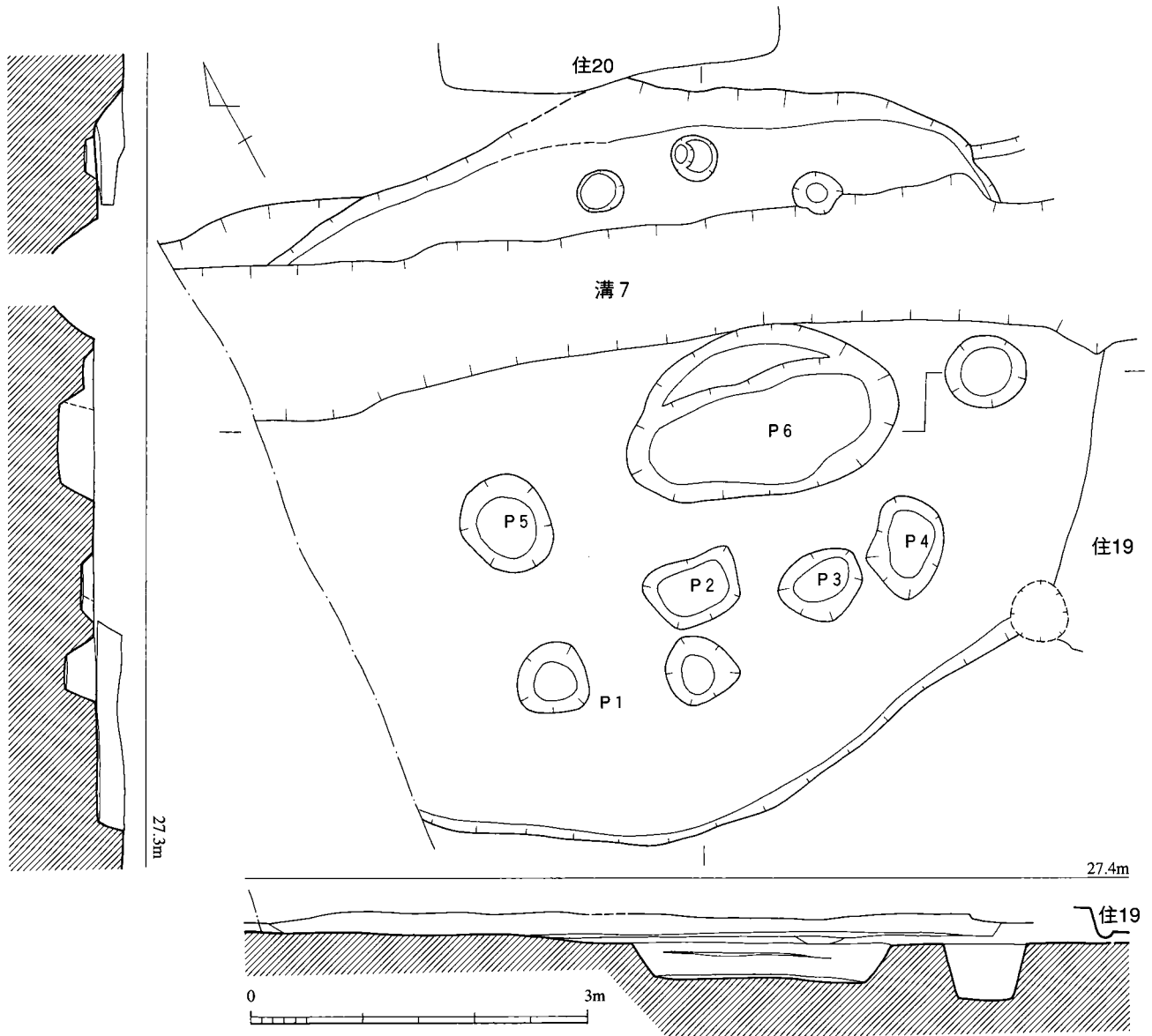
16号竪穴住居跡（図版20、第46図）

調査区西部の中央に位置し、中央を7号溝が横断し、東南部を19号竪穴住居跡が切っている。そのため平面形を捉えにくく調査結果には不安がある。特に北側の輪郭は不明瞭であったが、西北－東南方向に主軸をおく、楕円形の平面形と考えて発掘を行った。現状では西北－東南方向は7mを越え、調査区壁を越えて西へと広がり、東北－西南方向は最大幅6.6mを測る。壁の高さは良好な部分で20cm程である。床面では多数のピットを検出したが、明確に主柱穴と捉えられるものはない。P2は上層に暗褐色細砂、下層に炭を雑えた黄褐色細砂が堆積しており、炉跡の可能性もある。その場合、中心より少し南側に寄りすぎているので、平面形を間違えた可能性がさらに大きくなるであろう。中央で検出されたP6は長さ2.5m、幅1.5mの大形の土坑状を呈している。出土遺物が少ないために時期は不明であるが、住居跡床面に設けられるものとしては大きすぎるので、先行する別の遺構と考えるべきであろう。土器の他に石包丁未製品（第82図17）、砥石（P4より、第83図27）が出土した。

出土土器（図版34、第45図7～14） 弥生土器8点を図示した。7はほぼ完形の小形無頸壺で、外面～口縁部内面に丹塗りを施している。口縁部は短く外反し、胴部は偏球形で最大径の位置が低い。外面はミガキを施すが摩滅する部分が多く、肩部内面には工具痕と推測される沈線が残る。口径10.4cm、器高9.5cm、底径4.4cmを測る。8～12は甕口縁部である。口縁部は直線的に外傾するものが多く、12は特に上面が水平に近い面をなす。いずれも端部はわずかに角張っていて、11・12はその中央がわずかに凹んでいる。11は胴部の張りも強い。9は口縁部内面～胴部内面ハケメ仕上げで、10も口縁部内面にハケメと思われる条痕が残る。11胴部内面は工具によるナデか。口径は8、24.6cm、9、27.2cm、10、27.9cm、11、27.5cm、12、34.0cmを測る。13は甕底部片。外面縦ハケ、内面ナデ仕上げで、底部近くに指頭圧痕が微かに残る。底径8.6cmを測る。14は粗製の支脚片でP3より出土した。器壁が厚く、内外に粗いナデを施している。裾径7.8cmを測る。7・8・13が黄褐色、9外面・11外面が灰黄褐色、9内面が淡橙褐色、10・11内面・14が褐色、12が褐灰色を呈し、10は外面に煤が付着し、13は内面底部がコゲのため褐色に変色する。これらの弥生土器は弥生時代中期末頃のものであろう。

17号竪穴住居跡（図版20、第47図）

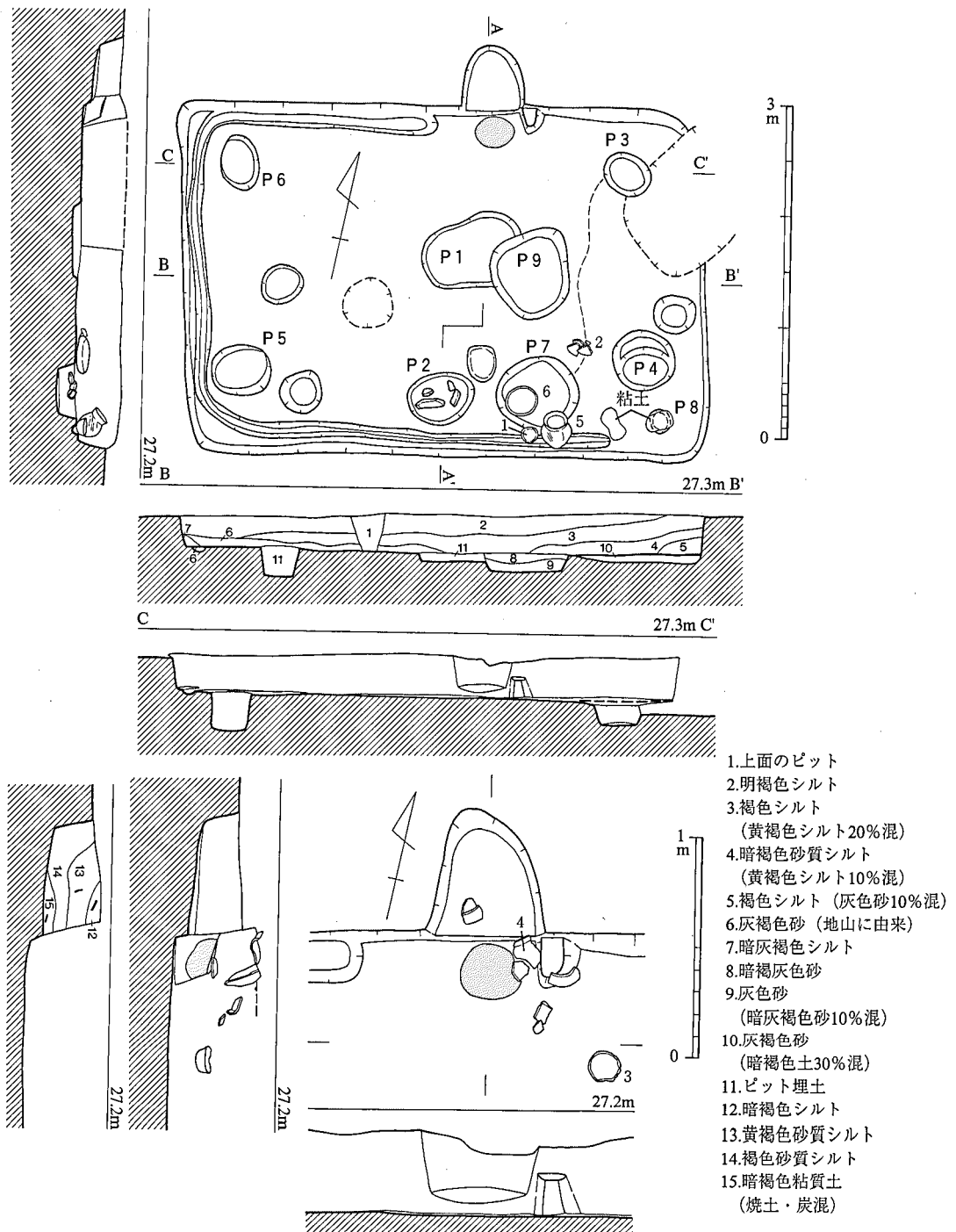
調査区中央よりやや西南に位置する竪穴住居跡で、北壁中央やや東寄りにカマドを設置する長方



第46図 16号竖穴住居跡実測図 (1/60)

形の平面をなす。主軸は北からやや西に振った $N-17^{\circ}-W$ を測る。住居跡は北東隅の近くを上層のピットによって壊されているが、輪郭も明瞭であり、確実に全形を捉えることができた。復元すると東西4.6m、南北3.2mを測る。余りにも長方形の平面であるために発掘当初は弥生時代後期の長方形住居跡ではないかと考えたほどであり、そのため、カマドの存在に最後まで気付かなかった。壁は残りの良いところで高さ40cmである。床面はほぼ平らであるが、東側、平面図の破線より東は誤って掘り下げすぎたために、低くなっている。覆土は上層が明褐色シルト、下層が褐色シルトを主体としていた。

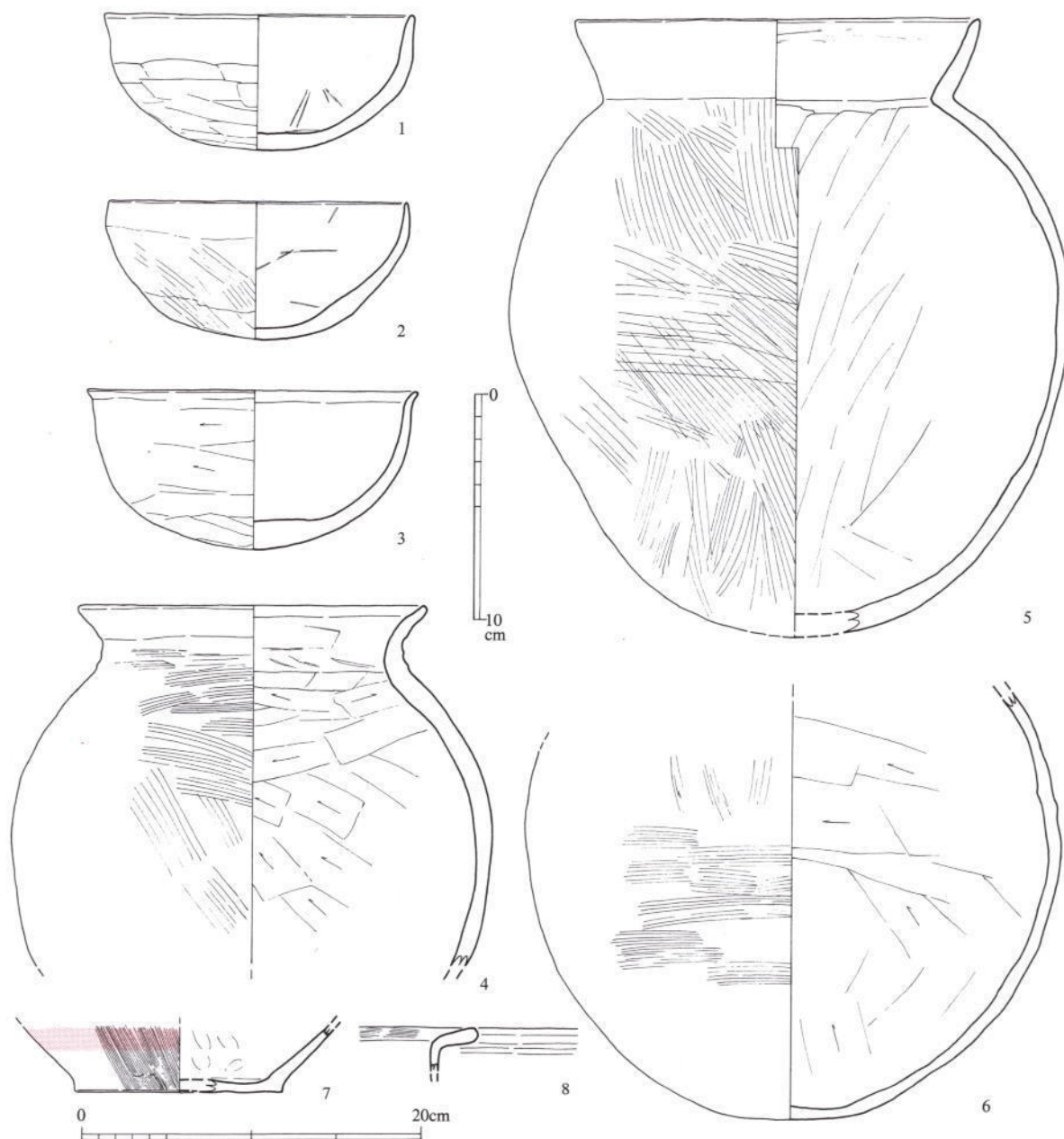
床面では多数のピットを検出したが、直径0.4mを超え、床面からの深さも30cm以上のP3～P6が主柱穴と考えられる。一般の竖穴住居跡からすれば住居跡の隅近く寄っている点の特徴である。また、カマドの対面に位置し、直径0.6mを越えるP2、P7は前者から砥石(第83図26)、石がまともに出土し、後者は甕の底部が出土しているのでカマド対面土坑のような正確が想定される。住



第47図 17号竖穴住居跡・同カマド実測図 (1/60、1/30)

居跡中央に位置するP9は顕著な熱変、炭の堆積は見られなかったが、位置から考えてあるいは下層にある30号竖穴住居跡の炉跡の可能性が考えられる。住居跡の南壁から西壁、北壁の西半分には幅15cm、深さ5cmの周壁溝が巡っている。

また、P7のすぐ南からそれぞれ完形の土師器杯と土師器甕が出土し、P8上層とP7東側からは精製された粘土が出土した。また、P2とP7の間からは30cm大、厚さ10cmを越える花崗岩製の台石が出土している。なお、床面下層の掘方は明確なものではなかった。他に覆土中より石鎌片 (第82図15) が出土。



第48図 17号竪穴住居跡出土土器実測図 (7・8は1/4、他は1/3)

カマド (図版20) 竪穴住居跡北壁中央やや東寄りで検出された。上述したような理由で発掘当初はカマドの存在を想定できず、床面近くまで下げて燃焼面を検出した段階で初めてカマドの存在に気が付いたために、土層図の作製が不十分であり、カマドの袖もほとんど残っていない。住居跡の壁に接して直径0.25mの範囲で床面の熱変した部分が焼面にあたり、その東側では床面よりかなり浮いて、土師器甕等の土器片がまとまって出土している。支脚およびその痕跡は全く検出されなかった。東側では黄褐色粘質土で構築された袖が壁から長さ20cm余り、床面から高さ20cm程残っていたが、焼面の位置からすればさらに伸びていたものと想定される。袖の内側は一部、熱変が進んでいる。西側の袖は掘り過ぎたために残っていないが、焼面を中心として折り返すと内側の間隔が0.45m程に復元できる。焼面より北には、住居跡床面から高さ5cm程のところにもつ幅0.5m、長さ0.55mの掘り込みがあり、壁はさほど熱変していないものの煙道部と推測される。この煙道部

の覆土最下層には焼土、炭を比較的多く含んだ暗褐色粘質土が堆積していた。

出土土器（図版35、第48図） 1～6は土師器で、3・4はカマド周辺より、1・2・6は住居跡南側の床面より出土し、6はP7内から出土した。1～3は杯でいずれも体部が半球形を呈している。1は口縁部を微かに外反させており、外面下半は手持ちヘラケズリ、内面見込みには工具痕が残る。2は外面を板ナデ風のハケメで仕上げ、内面には工具痕かと思われる線条が観察できる。3は口縁部を短く外反させており、外面手持ちヘラケズリを施す。口径、器高は1が13.7cm、6.0cm、2が13.1cm、6.1cm、3が14.4cm、7.0cmを測る。4～6は甕。4は胴部上半の破片で、外面板ナデ風の粗いハケメを斜め～横方向に施し、口縁外面にもハケメ工具の当たりと思われる横方向の条痕が残る。口縁部内面には調整によると思われる斜め方向の皺が見られ、胴部内面は頸部までヘラケズリを施す。口縁部はやや強く外反し、口径15.2cmを測る。5はほぼ完形に復元されるもので、口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、胴部最大径は胴部中央よりやや高い位置にある。胴部外面は粗いハケメ仕上げで、内面のケズリは頸部近くまで及んでいる。口縁部内面には工具痕状の水平方向の線条が残る。胴部外面の高さ8～15cmのところ帯状に煤が付着している。口径17.7cm、復元器高27.4cm、頸部径15.5cm、胴部最大径24.8cmを測る。6は甕胴下半部破片で、内面ケズリ、外面板ナデ風の粗いハケメ仕上げである。外面には煤が付着し、胴下部には1/4周大の黒斑が見られる。以上の土師器は1が白橙色、2・3が淡橙褐色、4が褐色、5・6が淡褐色を呈す。

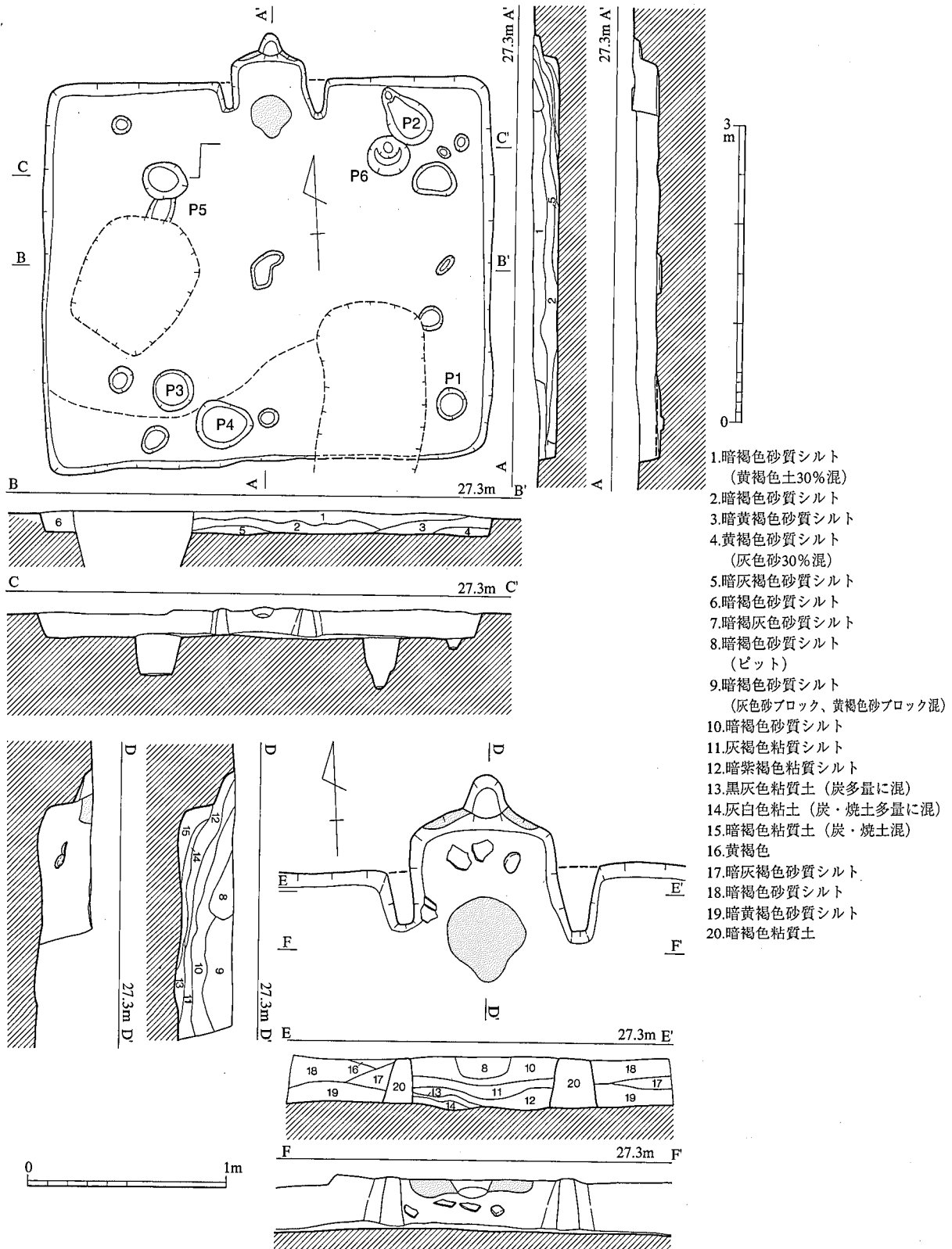
7・8は弥生土器。7は壺の底部と思われ、外面の一部に丹塗りが残っている。胴部外面ハケメ仕上げで、胴部内面には指頭圧痕が残り、底部外面はほとんど調整を加えていない。底径12.3cmを測る。8は口縁部小片で、端部をやや厚く仕上げている。口縁部内面はハケメが残る。いずれも淡橙褐色を呈す。

18号竪穴住居跡（図版21、第49図）

調査区の中央やや南寄りに位置する方形の竪穴住居跡である。住居跡の東南炭近くと西側が上層のピットで壊されているが、輪郭も明瞭でありほぼ完全な形を検出することができた。主軸は北よりわずかに東に振ったN-3°-Eで、南北3.9m、東西4.5mとやや東西方向に長い。北壁のほぼ中央に、壁よりわずかに突出させてカマドを設置している。壁は残りの良いところで高さ20cm余り。床面はほぼ平らで余り硬化が進んでおらず、南壁近く、平面図破線より南では誤って掘り過ぎてしまっている。覆土は暗褐色砂質シルトを主体とし、下層、壁際には暗灰褐色砂質シルト、暗黄褐色砂質シルトが堆積していた。

床面では大小多数のピットを検出したが、直径が0.4m以上で深さが40cm以上のP3・P5・P6が支柱穴と考えられる。東南部では支柱穴にあたるようなピットを検出していないが、ちょうど上層のピットによって壊された場所に位置していたと思われる。P3の東南に接するP4は覆土に炭を多く含んでおり、土器片もまとまって出土した。また、カマド脇に位置するP2からも土器片がまとまって出土している。土器の他に貼床内から黒耀石剥片（第82図10）が出土した。

カマド 住居跡の北壁ほぼ中央に、住居跡の壁よりカマド本体部分を0.3m程突出させて、構築している。カマド奥壁より南に0.6mの地点を中心として、直径0.4m程の範囲で床面が橙色に硬く焼き締まっており、焼面と考えられる。この焼面の北側に本来支脚が位置していたはずであるが、採取痕は検出されなかったため、土器等を転用し床面に置いていたものと思われる。暗褐色粘質土を



第49図 18号竪穴住居跡・同カマド実測図 (1/60、1/30)

用いて構築した袖は住居跡壁から東側で0.4m、西側で0.3mの長さが遺存しているが、焼面の位置から考えて、本来はもう少し長かったものと推測される。両袖の間隔は突出部の幅と等しく、0.6m余りである。袖間の埋土には下層を中心に炭、焼土が多く含まれていた。また、下部に灰白色粘

質土、暗褐色粘質土が堆積しており、カマド上部は袖とは異なる灰白色粘質土を中心に構築していた可能性が想定される。奥壁は上部、煙道近くがわずかに熱変しており、硬く締まっていないが壁が暗紫褐色となっていた。奥壁近くを中心に床面から10m程浮いて、土師器甕胴部片等の土器片が出土している。煙道は床面から高さ30cmの所からはじまり、カマド奥壁より北に20cm程突出させ、幅は20cm強である。煙道底面はゆるやかに立ち上がっている。

出土土器（図版35、第50図1～6） 1～3は土師器である。1は高杯杯部片で、杯底部と口縁部との境は微かな稜をなし、口縁部は直線的に外傾する。口径15.2cmで淡橙褐色を呈する。2・3は甕である。2は口縁部片で、口縁部はやや外反しながら短く伸び、外面に横方向の工具痕が観察される。胴部外面には横ハケがわずかに残る。口径17.7cmを測り、内外暗褐黄色を呈する。3は外面に横ハケを施す肩部破片で、厚い器壁が特徴的である。淡褐色を呈する。

4・5は須恵器。4は杯蓋で、口縁が短く直に近い角度で立ち上がり、天井部外面のヘラケズリの範囲は狭い。口径12.4cm、器高3.5cmを測り、焼成不良で灰白色を呈す。5は頸部から折損した小形の壺口縁部片。口縁部外面中央に2条の凹線を巡らし、その上に櫛描波状文を施している。口径9.6cmを測り、内外自然釉状に薄く灰かぶりするため黒灰色を呈する。

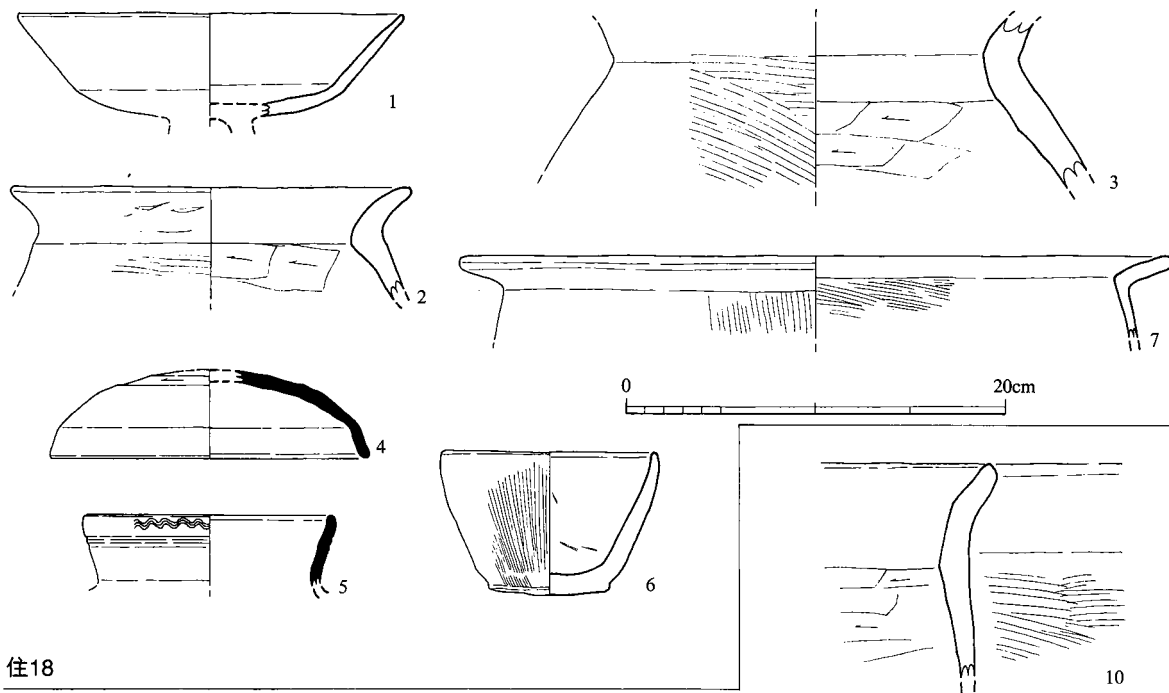
6・7は弥生土器で、先行する遺構からの混入品。6は平底の小形鉢である。外面縦ハケ、内面工具小口痕が残り、底部外面は調整が粗雑である。口径8.3cm、器高5.7cmを測り、内面褐色、外面暗黄褐色を呈する。7は甕口縁部片。外面縦ハケ、内面横斜めハケをとどめ、口縁部は直線的に外傾している。口径37.0cmを測り、淡黄褐色～淡灰褐色を呈する。

19号竪穴住居跡（図版21、第51図）

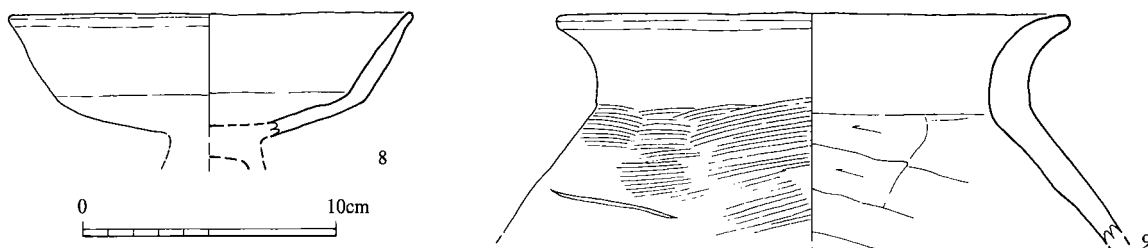
調査区の西側中央に位置しており、ほぼ西北―東南方向に主軸をおく方形の竪穴住居跡である。16号竪穴住居跡を切っている。また、9号溝を切るように図示しているが、その切合関係は十分に確認できていない。最初は溝状遺構ではないかと考えて東南部を掘りすぎ、住居跡であることに気が付いたのは北東側、7号溝に隣接して支脚石、焼面を検出した後のことである。埋土は暗褐色細砂。

北東壁を大きく7号溝に壊されているため、住居の2/3程が残存するのみである。また、南西壁は上層のピットによって3ヶ所壊されている。南北は4.2mを測り、壁は残りの良い北西壁で高さ30cm程遺存し、主軸方向はN-50°-Wとなる。床面は掘り過ぎのため南東部が溝状に低くなっている。床面では9基のピットを検出し、そのうち直径0.3m、深さ40cmを超えるP1～P4が支柱穴となる可能性が高いが、P1はややカマドに近すぎる感がある。北西壁には幅20cm、深さ5cm前後の周壁溝が検出されたが、南西壁には続いていない。土器の他にカマド内より砥石（第83図25）が出土している。

カマド 住居覆土とともにカマド周辺を掘り下げた後、支脚石、焼面を検出して段階で初めてカマドの存在に気が付いた。そのため、土層の観察が不十分となり、カマド周辺の個別図も作成していない。カマドは住居跡の北西壁に設置されており、その部分の住居跡壁もわずかに外に張り出している。支柱穴との関係からすれば、中央よりやや北に寄っているようである。支脚石は住居跡壁から0.3m程離れており、その前面が直径0.2mの範囲で焼面となっている。支脚石は太さ径10cm、長さ20cm程の河原石であり、焼面は赤褐色に熱変し、硬化が進んでいる。北袖は7号溝と重なりほと



住18
住19

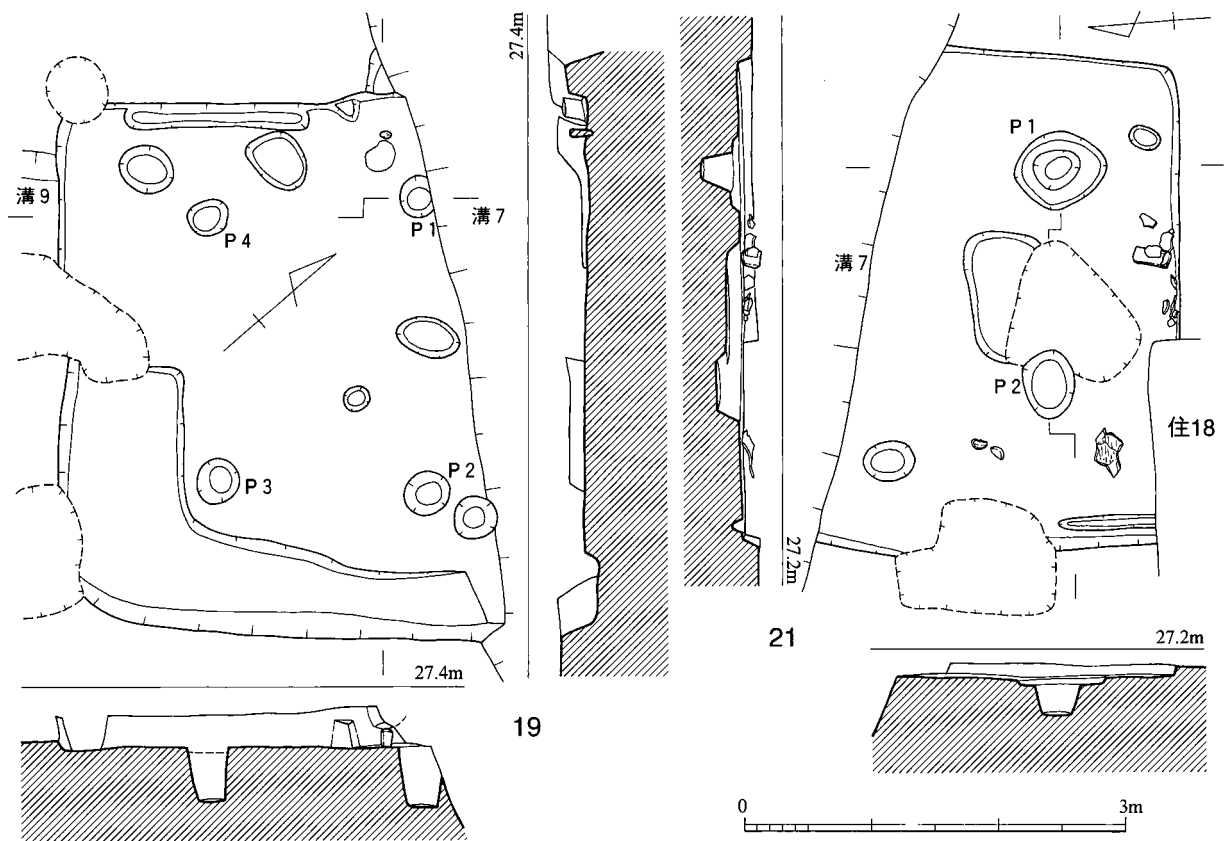


第50図 18・19号竪穴住居跡出土土器実測図 (7は1/4、他は1/3)

んど残っておらず、南袖は掘りすぎのためにわずかに壁から15cm程延びるのを確認したのみである。出土土器(図版35、第50図8~10) 図示したものはいずれも土師器。8は高杯杯部破片で、底部と口縁部の境は微かな稜をなし、口縁部が直線的に外傾する。口径15.8cmを測り、橙褐色を呈する。9は甕口縁部片。器壁が厚く、口縁部は強く屈曲して外反する。外面は横ハケ仕上げで、肩部のやや下がったところに線刻が残るが、記号あるいは文様などの意図的なものは不明である。口径19.9cm、淡黄褐色~淡褐色を呈し、胴部外面には煤が付着する。10は口縁部小片で、甑のものか。頸部のくびれが小さく、口縁部は緩やかに外反している。胴部外面は横ハケ仕上げで、淡黄褐色を呈するが、外面には大きな黒斑がある。

20号竪穴住居跡(図版19、第44図)

調査区西北部に位置し、15号竪穴住居跡の西南部で検出された。15号住居跡に切られるように掘り上げているが、両者の先後関係の十分な確認はできないままであった。15号住居跡に切られるために住居の南部のみを検出したにとどまるが、15号住居跡とほぼ主軸が一致している。南壁は東西幅2.9mを測り、比較的小形の竪穴住居跡と推測される。壁は15cm余りの高さしか残っていない。床面ではいくつかピットを検出しているが、支柱穴配置も不明である。出土土器も少なく、図示で



第51図 19・21号竪穴住居跡実測図 (1/60)

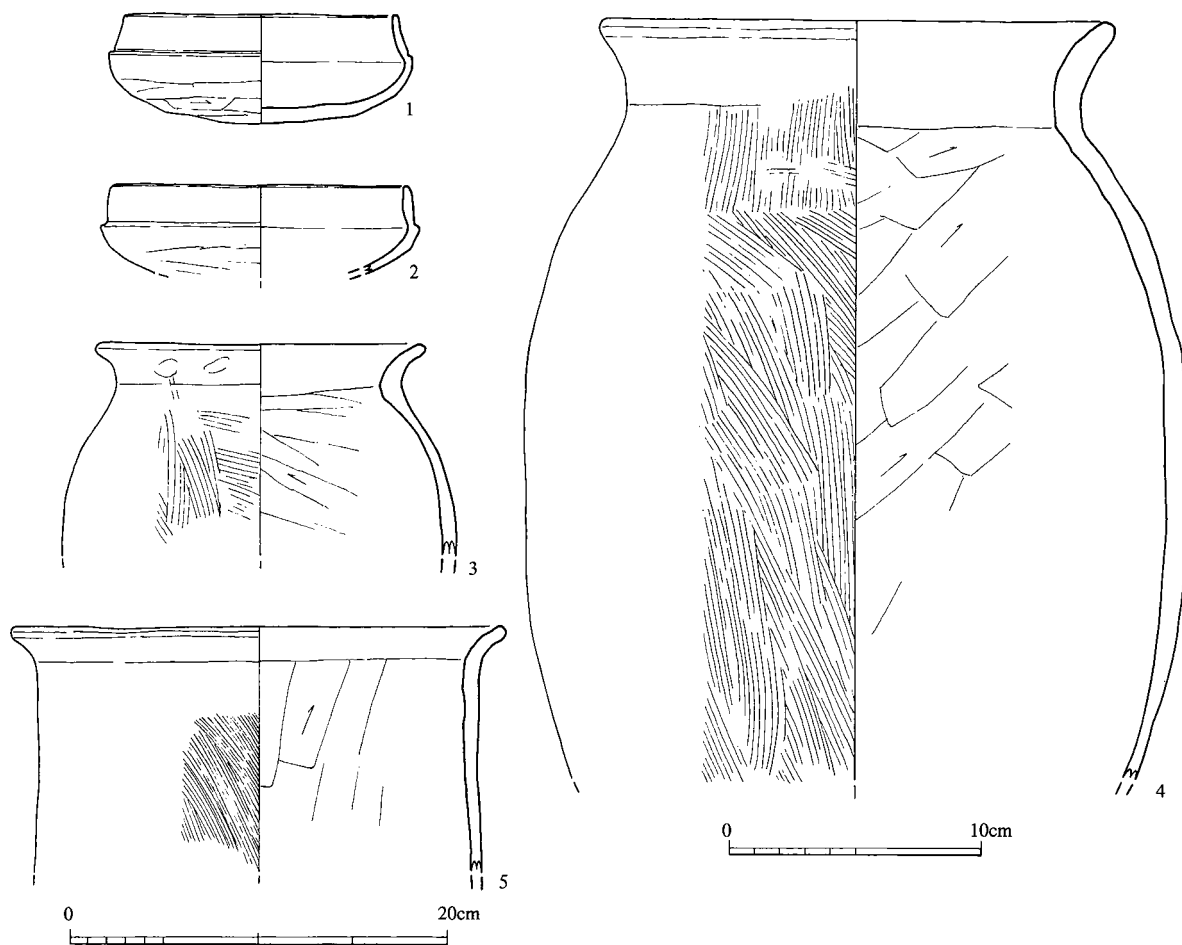
きるものがない。

21号竪穴住居跡 (図版21、第51図)

調査区のほぼ中央に位置する方形の竪穴住居跡である。北側を第2面7号溝に大きく壊され、住居跡の南半分を検出したのみである。また、南西部を18号竪穴住居跡に切られ、西壁も上層のピットによる攪乱を被る。主軸をほぼ南北に向け、東西壁の間隔は4.0m前後を測る。壁はさほど残りが良くなく、全体的に高さ10cm程。床面では大小4基のピットを検出しているが、P1とP2が支柱穴か。また、西壁に沿って一部に幅15cm、深さ10cm程の壁溝が検出された。

P2の西側と南壁沿いの床面から土器等が出土している。さらに、南壁沿いからは台石に使った可能性のある25cm×13cm×8cmの直方体の花崗岩も出土した。床面はさほど硬化しておらず、覆土上層は暗褐色細砂～シルト、覆土下層は黄褐色細砂～シルト。時期的にカマドを設置していてもおかしくないが、残存部分ではカマドの痕跡すら検出できなかった。恐らく7号溝に壊された北壁沿いに設置していた可能性が高い。

出土土器 (図版35、第52図) 1・2は土師器模倣杯の身である。1は口縁部がわずかに内傾し、蓋受部と口縁部の境界を沈線によって区画しているが、蓋受の突出は目立たない。底部外面は手持ちヘラケズリを施し、内面は摩滅している。口径10.7cm、受部径12.0cm、器高4.3cm。2の口縁部は直立し、蓋受が1より突出して段を形成している。口径11.5cm、受部径12.6cmを測る。1・2とも橙褐色。

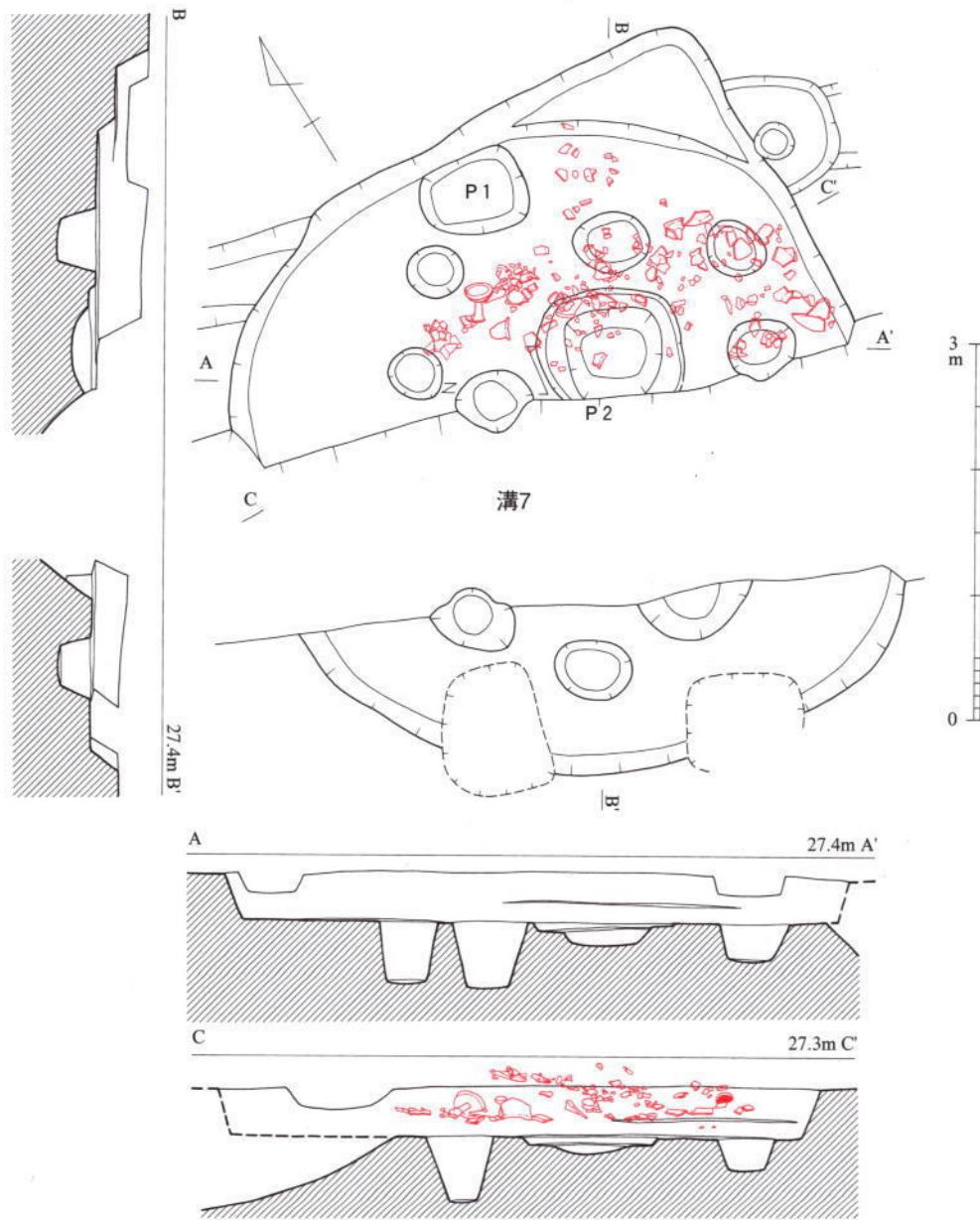


第52図 21号竪穴住居跡出土土器実測図 (5は1/4、他は1/3)

3～5は土師器甕である。3は小形品。外面縦ハケ、内面ケズリ仕上げで、口縁部外面に指頭圧痕状の凹みが残る。口径12.6cmを測り、内外褐色を呈するが、内面はややコゲが付着し、暗く変色している。4は底部を欠損しているがかなり長胴になると推察される。口縁部はゆるく外反し、胴部外面は縦ハケで仕上げる。口径19.8cm、残存高30.0cm。石英、角閃石、雲母等5mm大の砂粒を多く含んだ粗い胎土を用い、淡黄褐色を呈し、外面下部は煤が付着している。5は頸部のしまりがなく、胴の張りが弱い特徴的な器形のもの。口縁部は短く、緩やかに外反している。口径25.6cmを測り、外面白橙褐色、内面淡黄褐色～灰黄褐色。

22号竪穴住居跡 (図版22、第53図)

調査区の中央やや西寄りに位置する竪穴住居跡である。中央を7号溝に切られ、南部を上層のピットにより壊されている。加えて、覆土も灰褐色細砂～シルトを主体とし、周辺の土との区別が難しかった。円形の平面形を想定して調査し、ここではその結果にもとづいて報告するが、本来は小形の長方形であった可能性も考えられる。円形とした場合は直径5.5m前後となり、壁の高さは残りの良い部分で40cm前後を測る。東北部は平面プランを誤って、三角形に掘りすぎている。床面では多数のピットを検出したが、支柱穴は明確ではない。中央やや北寄り、7号溝の北側に接して直径1.1m、深さ20cm程のピットを検出したが、その下部近くでは炭混じりの黒褐色細砂が堆積していたので、炉跡となる可能性が高い。



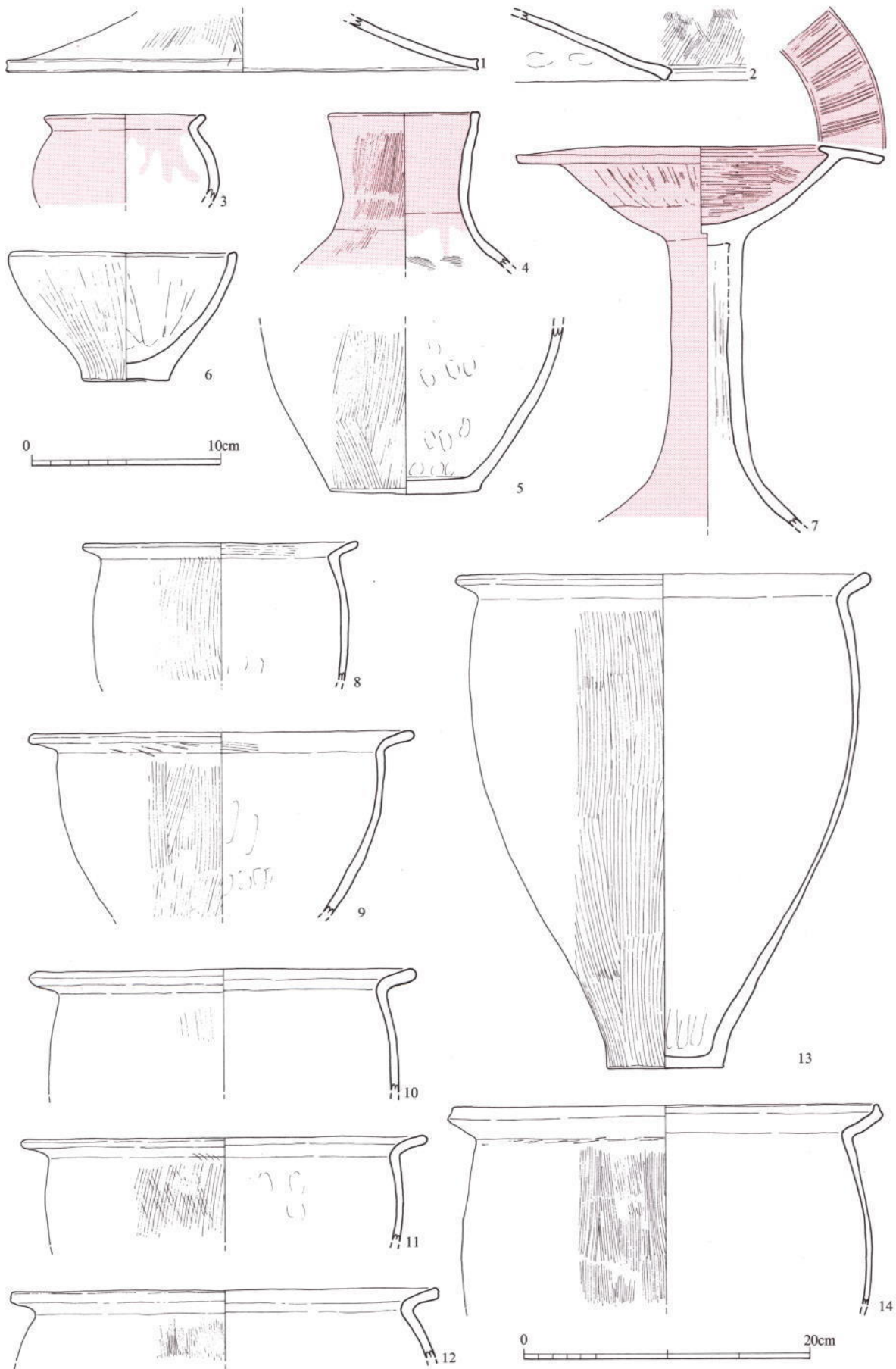
第53図 22号竪穴住居跡実測図 (1/60)

住居跡の北半分から流れ込んだような状態で多数の土器が出土した。床面に密着するものではなく、土器の上層は主として西から東に傾斜して堆積し、下部ではほぼ水平に並んで土器が出土している。後者の土器を覆土下層として区別して取り上げた。これらの土器以外に石包丁（第82図16）が出土した。

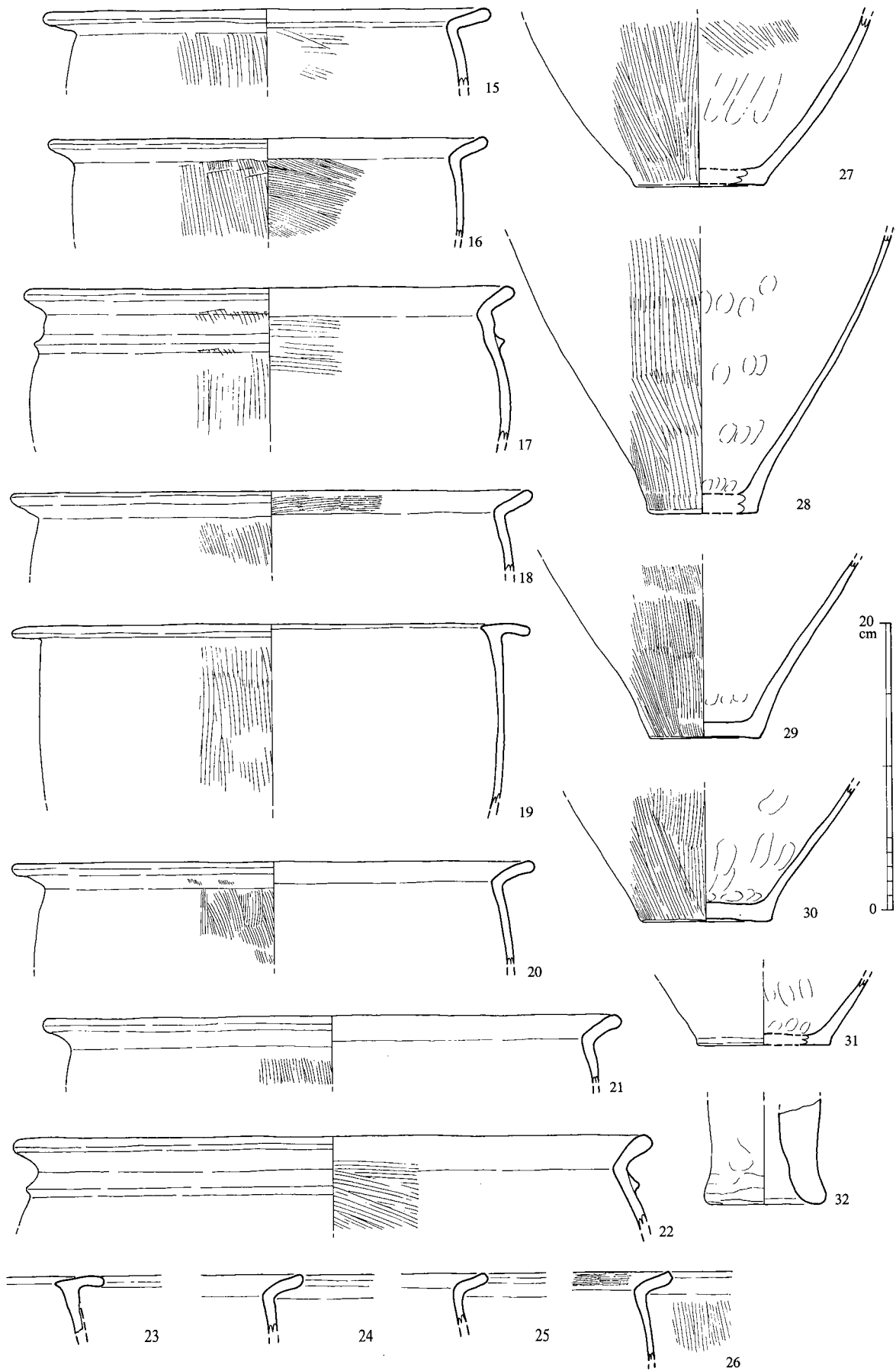
出土土器（図版36～38、第53～55図） 3・5～9・14・16・18・20・21・23・28・30・31・32は下層出土品である。19は炉跡と考えられるピットから出土したもの。

1・2は傘形に開く蓋の口縁部片である。いずれも口縁端部が丁寧なナデによって、やや凹んだ面をなしている。ともに外面ハケメ、内面ナデ仕上げで、2の内面には指頭圧痕も残る。1は口径33.0cm、白褐色を呈し、2は橙褐色。

3・4は壺で、5の底部片も壺になると思われる。3は小形の無頸壺で、外面～口縁内面に丹塗りを施す。口径8.1cm。4は口縁部が長く直立する珍しい器形のもので、外面～口縁部内面に丹塗りを施



第54図 22号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (3・6は1/3、他は1/4)

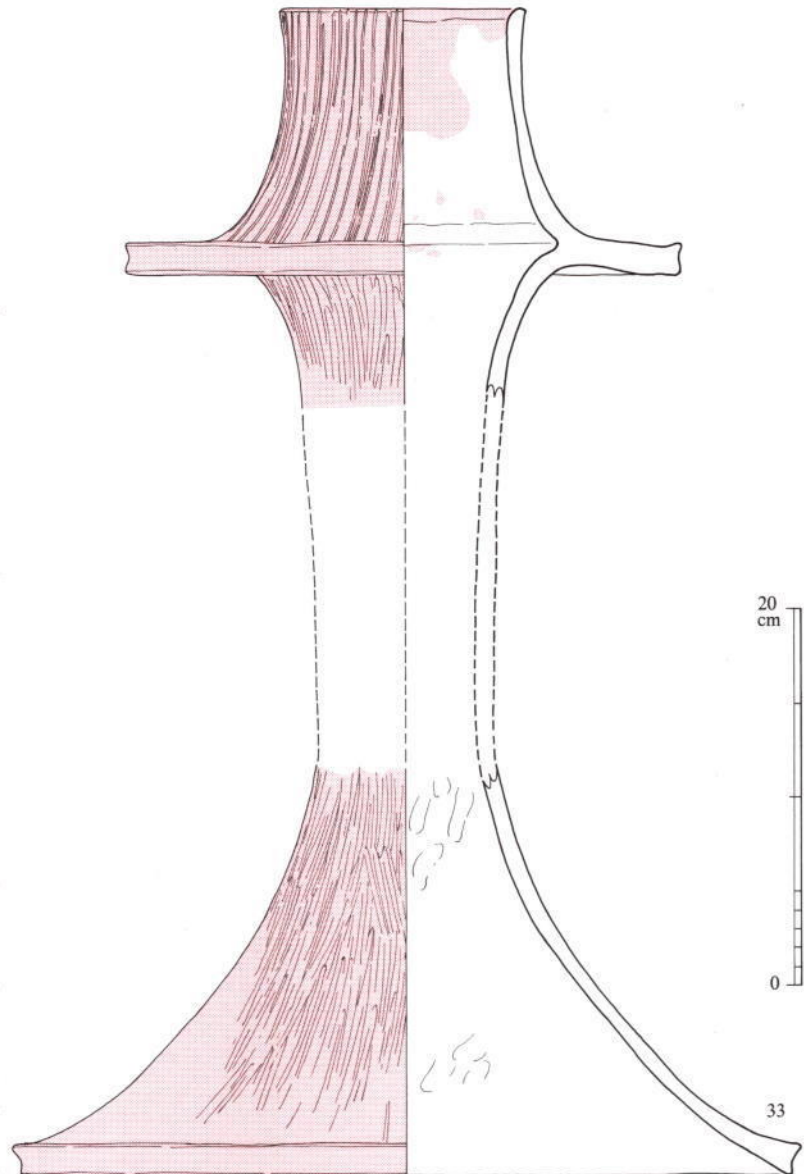


第55图 22号竖穴住居跡出土土器実測图 (2) (1/4)

している。口縁端部はやや角張った面をなしている。外面縦ハケ、内面は口縁部ナデ、胴部ハケ仕上げである。口径10.0cm。5は直径10.4cmの大きなやや歪んだ平底から、内湾気味に胴部が立ち上がる。外面は縦ハケ、内面はかすかに指頭圧痕の残るナデ仕上げである。3は橙褐色、4は外面白黄褐色、内面灰褐色、5は淡褐色を呈す。

6は単口縁の小形鉢である。外面縦ハケ仕上げで、内面は縦方向の工具によるナデの条痕が残る。口径11.6cm、器高6.8cm、底径4.4cmを測り、白黄褐色を呈す。

7は鋤先口縁で外面～杯部内面に丹塗りを施した高杯。脚裾部は欠損しているが、他はほぼ完存する。内外器表の摩滅が進み調整の観察が困難であるが、杯部内面は横ミガキを施し、杯部外面上半は板状工具による縦方向の調整が

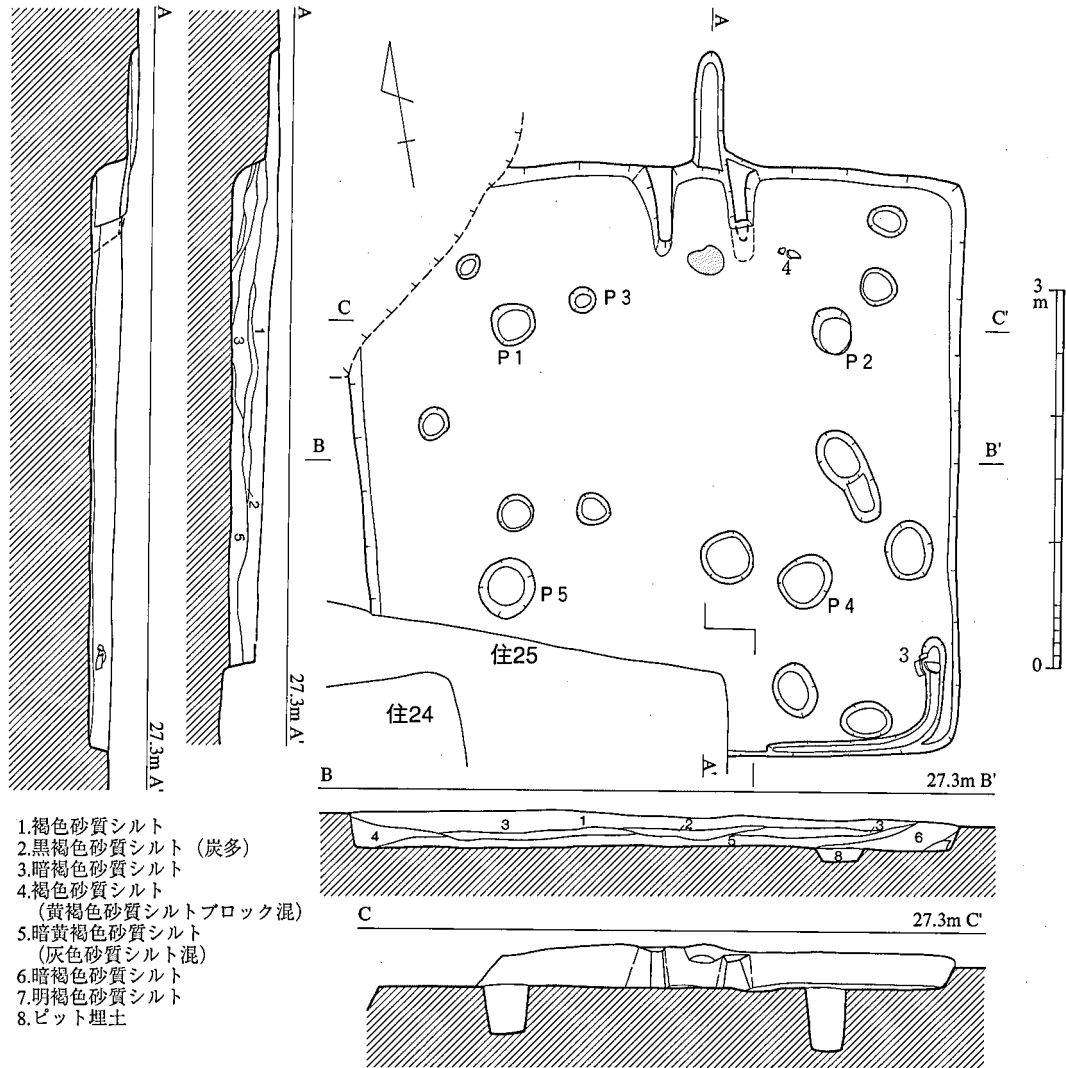


第56図 22号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/4)

残っている。口縁部上面には3～4条を1単位とする放射状の分割暗文を施文している。脚部内面は絞り痕が見られる。口径25.9cm、口縁部内径16.8cm、杯深5.4cm、残存高26.0cmを測り、生地は淡褐黄色を呈す。

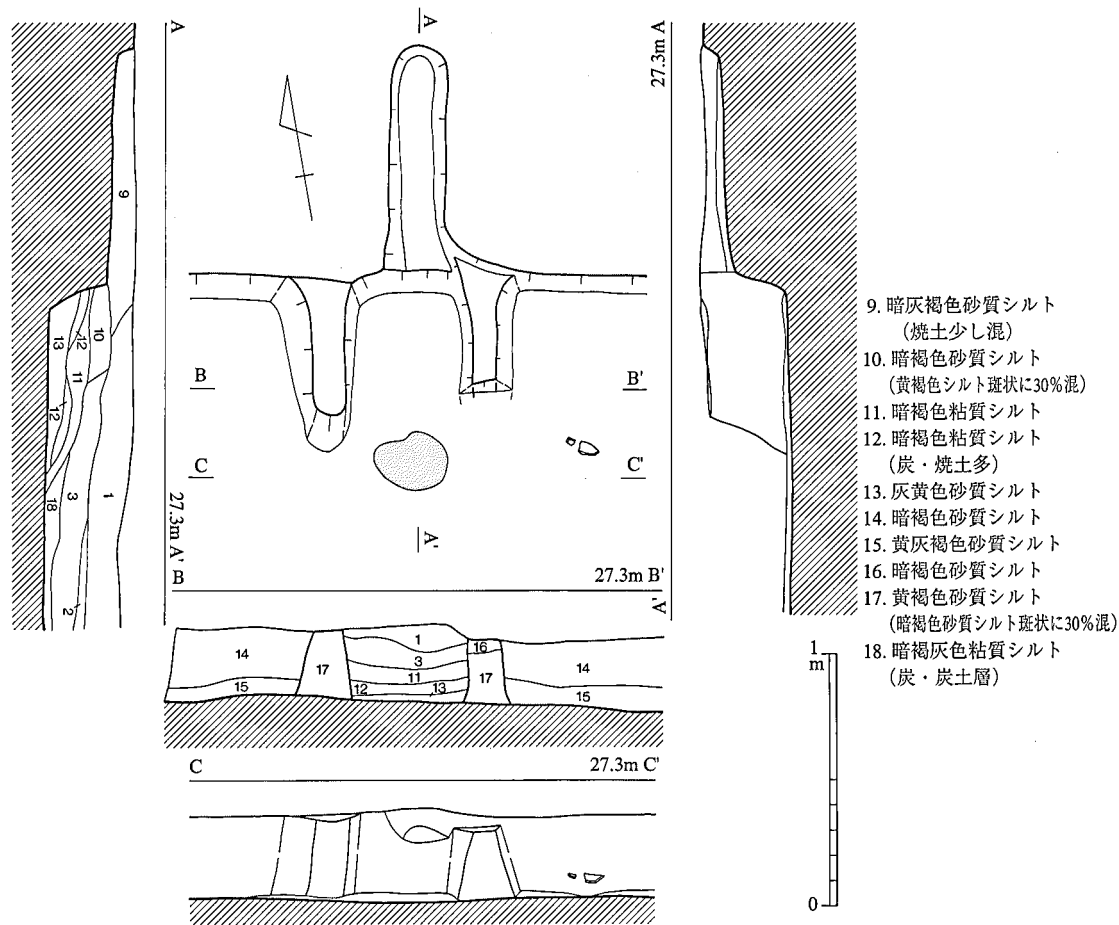
8～26は甕で、27～31の底部片も甕のものと思われる。口縁部は頸部で外折する断面くの字口縁、逆L字状口縁をなすものがほとんどであるが、17・22は口縁直下外面に断面三角形突帯を巡らし、19・23は鋤先口縁となる。口縁部内面～胴部内面はナデ仕上げを主体とするが、8・9・18・26は口縁部内面に、13・16・17・22・27は胴部内面、特に口縁直下付近を中心にハケメが残っている。

8は小形品で、口径19.2cmを測り、外面には煤が付着する。9は口縁部直下に斜め方向の工具痕が残り、底部に向かって急にすぼまる鉢に近い器形。口径26.3cm。10は口径26.3cmを測り、口縁端部が厚くなる。内外の摩滅が顕著である。11は口径27.9cm。12は頸部の絞まりが強く、口縁端部はやや角張っている。内面にはコゲが付着して変色する。口径29.6cm。13は完形品で、口径28.4cm、器高34.6cm、底径7.8cmを測る。内面底部近くにナデ上げ痕が残り、内面底部にはコゲが付着してい



第57図 23号竪穴住居跡実測図 (1/60)

る。底部外面はほとんど調整を加えていない。14は口縁端を上方につまみ出して、面を形成している。頸部外面にはハケメ工具の小口痕が巡っている。口径29.6cm。15は口径30.2cm。16は外面頸部下にハケメ工具小口痕が顕著に残り、口径30.2cm。17は口縁部が比較的短く、外面の突帯に対応して頸部内面の少し突出することが特徴的である。18は口径35.2cm。19は鋤先口縁で、口縁外端はやや下方に垂れている。口径36.0cm、口縁内径29.0cmを測る。外面は煤の付着、二次加熱が顕著。20は口縁外面にハケメ工具の当たりが目立ち、外面には焼けむらが生じている。口径35.2cm。21は口径39.2cmを測る。22は口径43.2cmを測る大形品で、口縁端部が厚くなっている。25は外面に橙色の化粧土を施した可能性がある。27はわずかに内湾しながら胴部が立ち上がり、底径8.8cmを測る。28は内面に指頭圧痕が帯状に巡り、外面高さ5cmより上に煤が付着している。底径7.6cm。29は底径7.8cmを測り、外面は二次加熱、煤の付着が顕著である。割れ口の形に沿って内面が褐色に変色する個所があり、廃棄されて割れた後に火を受けた可能性が大きい。30は内面の指頭圧痕が顕著で、底径8.6cmを測る。31は外面摩滅が進み調整の観察が困難であるが、外底面はほとんど調整を施していない。二次加熱を受け、外面器表が荒れている。底径9.0cm。8・9外面は灰褐色、9内面・13・



第58図 23号竖穴住居跡カマド実測図 (1/30)

15・30は黄褐色、10・16・17外面・18・20・24外面は淡橙褐色、11・12・17内面・19・21・24内面・25・26・28は淡黄褐色、14は褐灰色、22・23・29は淡褐色。

32は内外粗いナデを施して仕上げた粗製支脚。裾径7.4cmを測り、褐色を呈する。

33は大形の筒形器台である。上部と裾部に分かれて接合しないが、同一個体と考えられ、外面～口縁部内面に丹塗りを施している。筒部中間は欠損するものの、残存部分の観察、全体的な器形から恐らく透かしは無いものと考えられる。上部は口縁部から鐙部やや下まで残っており、口縁部は長く直立し、鐙部も広がっている。口縁部外面は分割暗文を施文し、鐙部より下には縦ミガキを施す。内面はナデ仕上げで、口径12.7cm、鐙部径29.5cmを測る。裾部はスカート状に大きく開き、端部は厚く凹面をなしている。外面縦ミガキ、内面ナデ仕上げで指頭圧痕を一部残し、裾径40.7cmを測る。生地は白黄褐色を呈す。

これら22号住居跡出土土器は甕内面にハケメを残すものが目立つこと、丹塗り筒形器台が大形化していることなどから、中期末頃に位置づけられるだろう。

23号竖穴住居跡 (図版22、第58図)

調査区の中央やや南寄りに位置し、西北部を攪乱に大きく壊され、西南部は25号竖穴住居跡に切られている。ただ、残りの部分は良好に遺存しており、ほぼ全形を捉えることができた。住居跡は南北よりわずかに東に振ったN-11°-Eに主軸を置き、北壁中央わずかに東寄りにカマドを設置

している。南北4.6m、東西4.7mを測り、壁は残りの良い北側で高さ40cm余りである。床面では多数のピットを検出したが、位置関係から考えてP1・P2・P4・P5が支柱穴と考えられる。いずれも直径0.3~0.4mで、深さは40cmを超えている。支柱穴は南北2.1m、東西2.5mの方形配置をなすが、P4はやや中心方向にずれている。東南隅近くの床面では幅10cm前後、深さ5cm前後の壁溝を検出しているが、この部分に限られている。床面は薄く黄褐色砂質土を貼り床していた可能性があるが、硬化はさほど進んでいない。覆土は上層が褐色砂質シルト、下層は暗黄褐色砂質シルトを主体としていた。

カマド 北壁の中央やや東寄りに位置しており、東側の袖端部を誤って掘りすぎているが、ほぼ全形を捉えることができた。カマドの奥壁から南に0.75mの地点を中心に、径0.3mの範囲で床面が熱変しており、焼面と考えられる。焼面はさほど硬化が進んでいないが、赤褐色に熱変していた。支脚及び支脚抜取痕は残っていないので、恐らく土器を転用し、カマド廃絶時に取り出されたと推察される。袖は黄褐色砂質シルトを主体に構築している。前述のように東袖の前端は誤って掘り飛ばしており長さ0.45m程残るに過ぎないが、西袖は壁から長さ0.7m程延びている。両袖の間隔は0.4m余りである。カマド内には下部に炭、焼土を多く含む土が堆積していた。煙道はカマドの奥壁の床から高さ25cmの所から主軸方向にまっすぐ0.9m程延びている。煙道の床面はわずかに先端に向かって上がっている。煙道、袖内面、カマド奥壁の熱変はさほど進行していない。

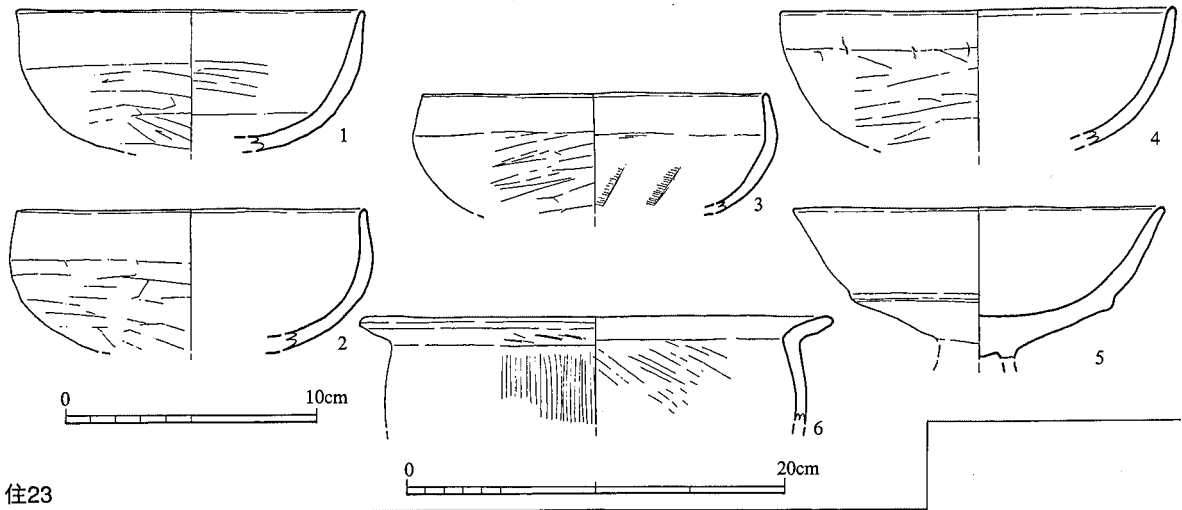
出土土器（図版38、第59図1~6） 1~5は土師器である。1~4は半球形の体部をなす杯である。いずれも体部外面下半に手持ちヘラケズリを施しており、ほぼ直立する単口縁をなしている。1は内面にミガキかと思われる痕跡が残り、4は内面底部近くにハケメ工具小口痕が残る。4は外面上部に接合痕かと思われる縦方向の皺が見られる。口径は1が13.7cm、2が13.8cm、3が13.5cm、4が15.5cmを測る。5は高杯杯部片で、口縁部と杯底部境が明瞭な段をなし、口縁部はやや内湾しながら立ち上がっている。杯底部下は接合のため粘土が突出している。口径14.7cm、杯深4.3cmを測る。以上の土師器はいずれも淡橙褐色を呈し、3外面は二次加熱を受ける。1~5の土師器は初期須恵器に平行する時期の一括遺物を構成すると思われる。

6は断面くの字に外傾する弥生中期後半の甕口縁部片で混入品。外面は胴部が縦ハケ仕上げで、口縁下面に皺が巡っている。内面は胴部内面は板状工具によるナデ。口径24.5cmを測り、淡黄褐色~褐灰色を呈す。

24号竪穴住居跡（図版23、第60図）

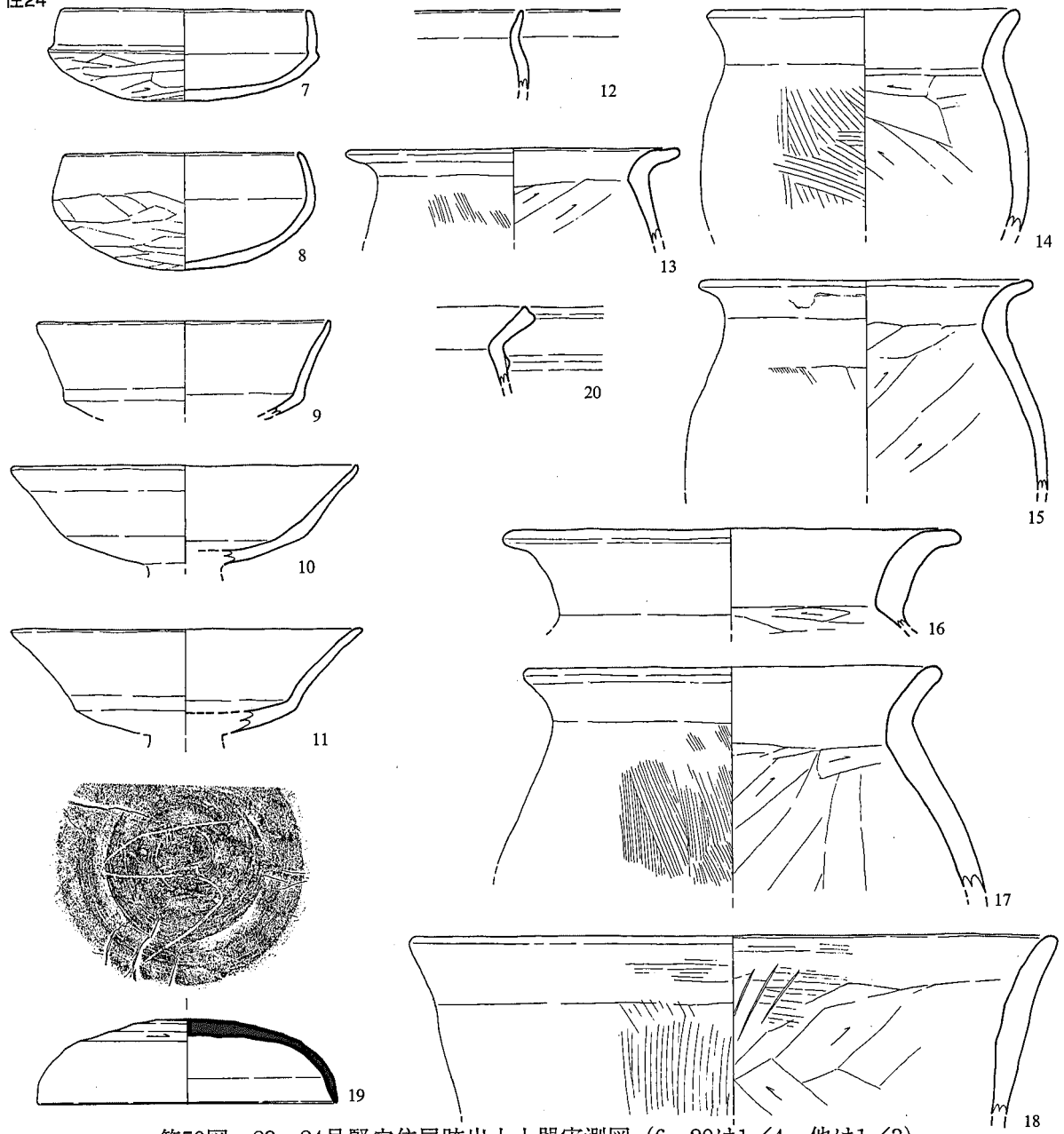
調査区の南壁沿い中央で検出したもので、南半は調査区外へと延び、検出できたのは北半のみである。北壁中央にカマドを設置し、主軸は南北よりわずかに西に振ったN-4°-Wとなる。東西壁間は4.6mを測り、南北は1.6m以上。壁の残りの良い北東部分では高さ30cm余りとなる。床面ではいくつかピットを検出しているが、調査区南壁に接して検出されたP1が深さ40cmを測り、支柱穴となるか。また、床面下層で検出されたP2は覆土に焼土を含んでおり、25号竪穴住居跡のカマドの痕跡と推測される。覆土は暗褐色砂質シルトが主体となるが、中間に灰褐色砂質シルトが堆積していた。土器の他に砥石（第83図28）が出土している。

カマド 住居跡北壁のほぼ中央に住居跡壁体から奥壁まで0.5m程突出して、設置している。カマドの奥壁から0.35m南の床面に、太さ10cm、高さ20cmを超える河原石を立てて支脚としている。こ

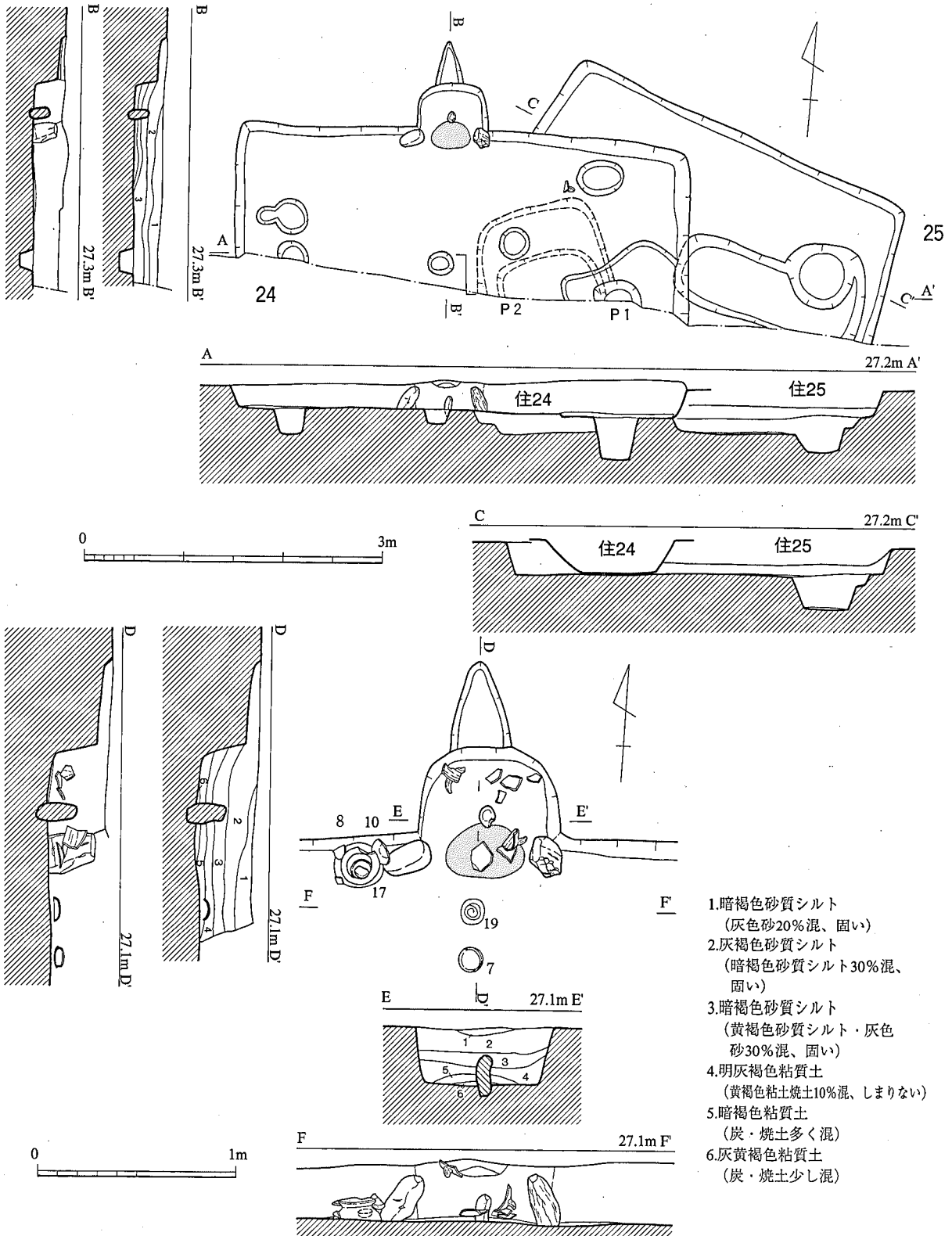


住23

住24



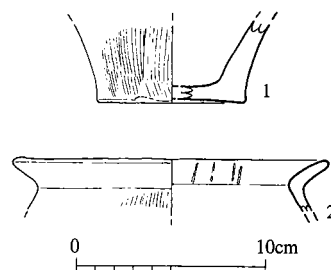
第59図 23・24号竖穴住居跡出土土器実測図 (6・20は1/4、他は1/3)



第60図 24・25号竪穴住居跡実測図・24号竪穴住居跡カマド実測図 (1/60・1/30)

の支脚の前面は東西0.4m、南北0.25mの範囲で熱変しており、燃焼部と考えられる。焼面は赤褐色に変色していたが、さほど硬化していない。住居跡壁からカマド突出部へと屈曲する場所に太さ20cm、高さ30cmの大形河原石を立てて袖とし、石の外側に接して焼土が堆積していたことから、袖の

下半はほとんど土を用いずに構築していたと考えられる。煙道はカマド床面から20cmの高さから始まり、わずかに先端に向かって高くなりながら、0.4m程北に延びる。煙道、カマド壁面ともさほど熱による変色は進行していない。カマド内からは甑等の土師器片が出土し、カマドの前面からは完形の須恵器杯蓋、土師器杯身が出土した。また、カマドの西袖外側から土師器甕の下半を除去して器台としたものが出土し、その内外から土師器杯が出土した。



第61図 25号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

出土土器(図版39、第59図7~18) 7~18は土師器である。7は模倣杯の身で、口縁部は直立し、蓋受の突出が弱い。底部外面に手持ちヘラケズリが残るが、内面は摩滅している。口径10.9cm、器高4.1cmを測る。8は半球形の胴部をなす杯。口縁部はわずかに内傾し、体部外面下半に手持ちヘラケズリを施す。口径10.3cm、器高5.2cmを測る。9は模倣杯蓋かも知れないが、高杯口縁部として図示した。口縁部と杯底部境界には微かな稜をなし、器壁が薄い。口径12.9cmを測る。10・11も高杯杯部片。いずれも口縁部と杯底部の稜が甘く、口縁部は直線的に外傾している。10は口径15.3cm、11は口径15.4cmを測る。12は口縁部が小さく外反し、深めの器形をなす鉢と思われる。13~17は甕である。13は口縁部が強く外反し、端部が水平の面をなす。口径14.5cmを測る。14は緩やかに口縁が外反し、胴部外面縦~斜めハケ、内面ケズリ仕上げ。内面はコゲが薄く付着している。口径13.5cm。15は外面ナデ仕上げの特異なもの。口縁部は丸く屈曲して外反し、外面の一部には工具によるナデの痕跡が観察される。口径14.4cm。15は口縁部が厚く、丸く屈曲して外反し、上端が水平面をなす。口径19.6cm。17は胴部中位で意図的に水平に打ち欠いており、器台に転用したものか。口縁部が緩やかに外反しており、口径18.0cmを測る。18は甑口縁部。外面ハケメ、内面口縁部近くにハケメを施した後、下半をケズリ仕上げする。口縁部内面に一部ケズリ工具の動きによる斜め方向の線刻が見られる。口径28.4cmを測る。7・12は白橙褐色、8~11・17・18は淡橙褐色、14は褐色、13・15は淡黄褐色、16は灰黄褐色を呈する。

19は須恵器杯蓋。口縁部から天井部に丸く移行し、口縁端部も丸く仕上げている。天井部外面のヘラケズリの範囲はそれほど広くない。天井部外面にはS字のヘラ記号を施している。口径13.2cm、器高3.9cmを測る。焼成堅緻で暗灰色を呈し、天井部に火だすきが見られる。

20は弥生時代中期後半の甕口縁部小片。口縁部は直線的に外傾し、端部は凹面をなす。口縁部直下に断面三角形の突帯を添付している。白橙色。

25号竪穴住居跡(図版22、第60図)

調査区の南壁沿い中央で検出したもので、24号竪穴住居跡の北東に位置し、24号住居跡に切られ、23号竪穴住居跡を切っている。そのため検出できたのは住居跡の北壁と東壁・西壁の一部のみで、南は調査区外へと広がっている。主軸は南北よりやや東に振っており、東西3.8mを測る。壁の高さは残りの良好な場所で30cm弱である。床面では東側で楕円形のピットと円形ピットが重なって検出された。23号・24号住居跡との層位的な関係から本住居跡でもカマドを付設しているもおかしくないが、北壁沿いでは検出できなかった。24号住居跡床面下層で検出された掘り込み(住25P2)に焼土が含まれていたため、恐らく西壁沿いに設置していたものと考えられる。覆土は上層が黒褐色砂質シルト、下層が黄褐色土を雑えた暗褐色砂質シルトであった。

出土土器（第61図） 図示できるのは24号住居跡床面下層で検出されたP2から出土した弥生土器2点のみである。1は甕底部片である。底部はやや上げ底で、胴部はやや外反して立ち上がる。底径7.6cmを測り、外面橙褐色、内面褐灰色で底部にはコゲが付着する。2は断面くの字口縁で、口縁内面にはハケメ工具小口痕が観察される。外面淡黄褐色、内面淡褐色。

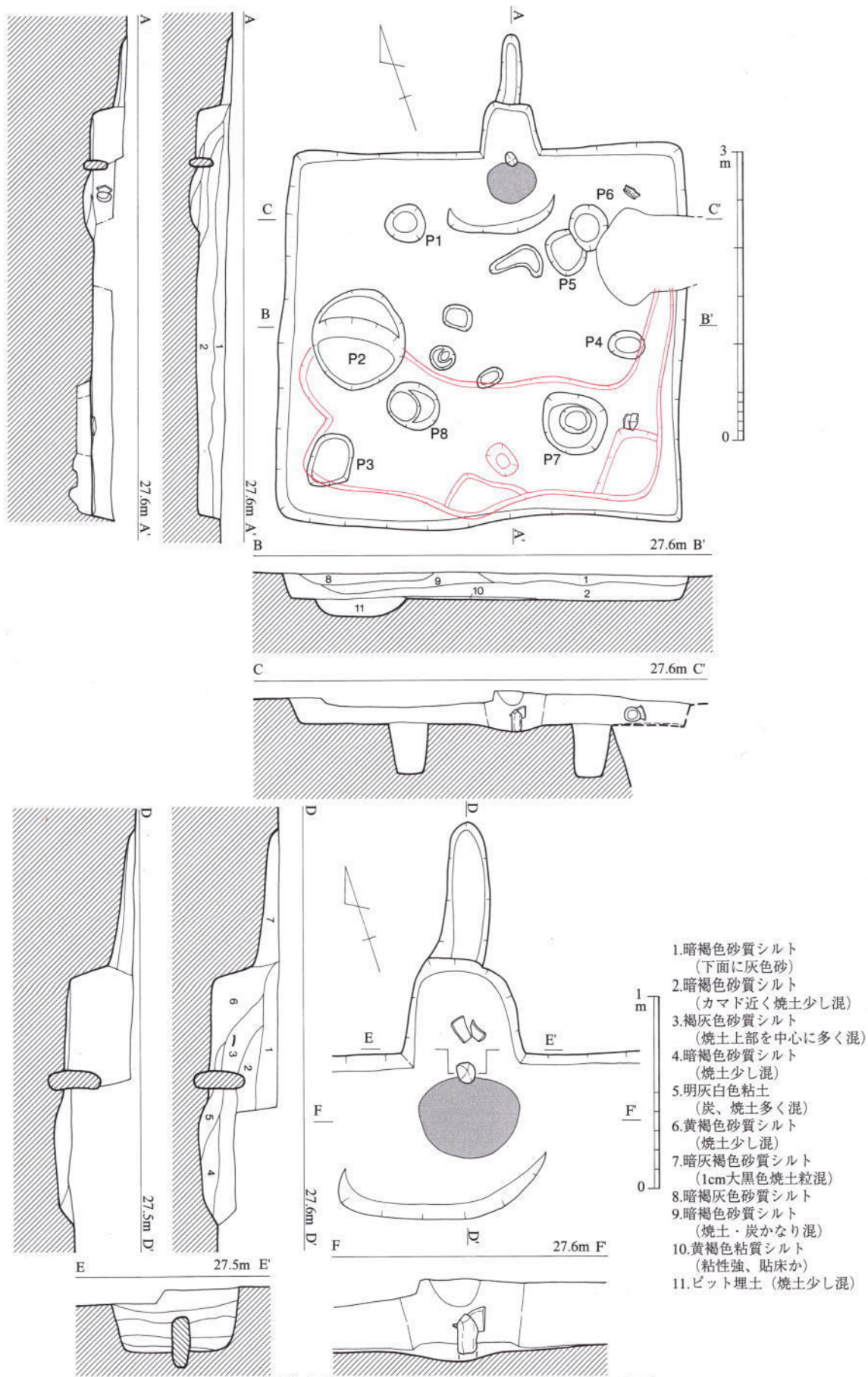
26号竪穴住居跡（図版23、第62図）

調査区東部の中央やや南よりで検出された方形の竪穴住居跡である。東壁の一部を上層のピットに壊されているが、ほぼ完全な形で検出することができた。主軸は南北よりやや東に振ったN-18°-Eで、北壁中央にカマドを壁から突出させて設置している。竪穴部は南北3.9m、東西4.1mを測り、壁は高さ30cm弱が遺存している。床面では多数のピットを検出したが、直径0.4m、深さ40cmを超えるP1・P5・P7・P8が主柱穴であろう。床面西側に位置するP2は直径1m弱、深さ20cm弱の2段掘りのピットで覆土に焼土を少し含む特徴的なものである。床面下部は南側に幅1.0~1.4mの掘り込みがある。覆土は褐色~暗褐色砂質シルトを主体としている。

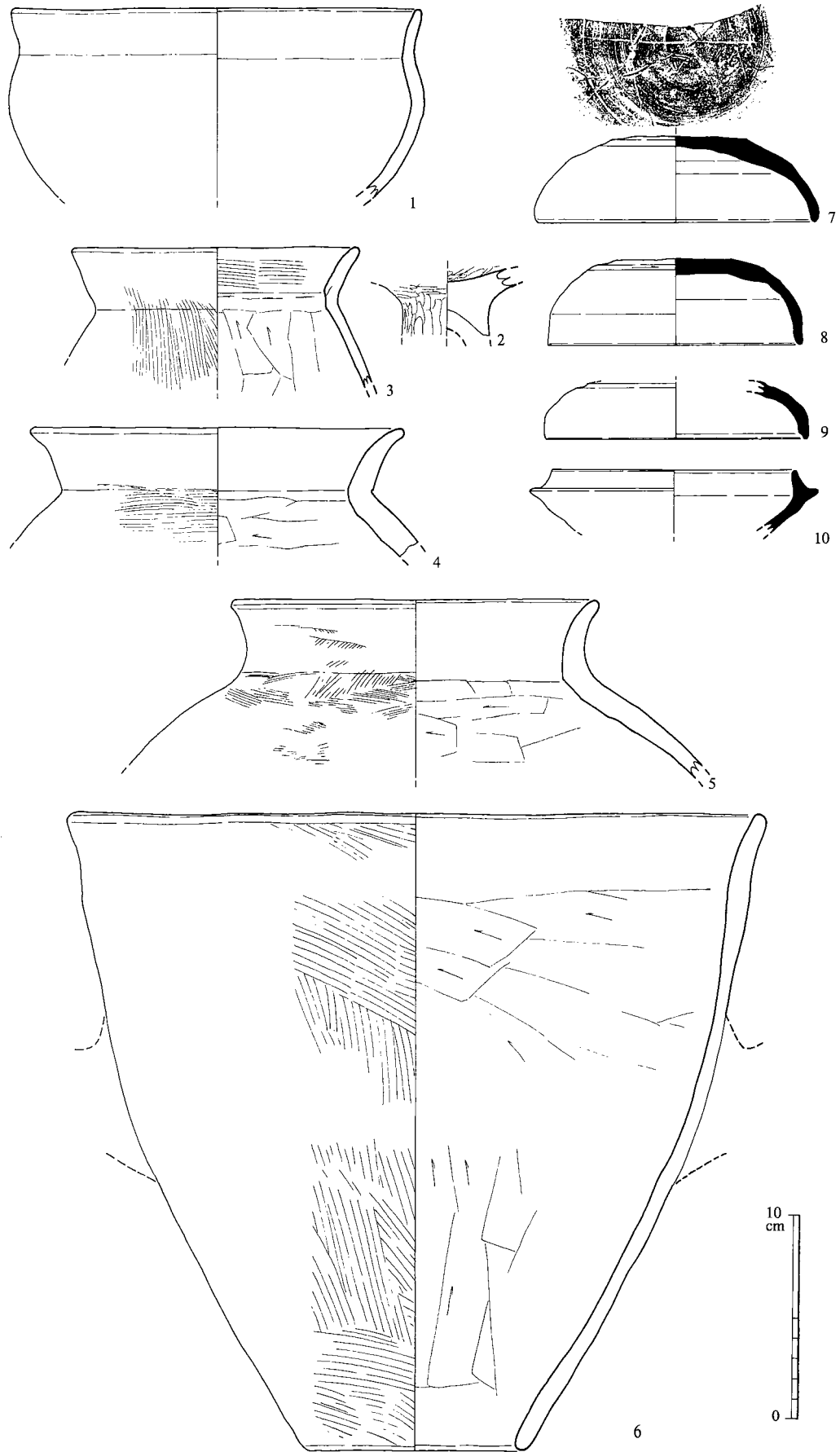
カマド 住居跡の北壁中央わずかに東寄りに住居跡壁から0.5m程突出させてカマドを構築している。カマドの奥壁から南に0.6mの床面で太さ10cm、高さ30cm弱の河原石を立てて、支脚とし、この支脚石の南は直径0.5mの範囲でかなり硬化した焼面となっていた。さらにその前面には弧状に高さ5cm程の段が形成され、カマドの床面は住居跡床面より1段低くなっている。焼面、支脚の位置からすれば袖が壁から突出していたと考えられるが、誤って掘りとはしてしまったため残っていない。床から高さ20cm弱の所から北に煙道が0.7m程まっすぐ延び、煙道の床面は緩やかに先端に向かって高く傾斜している。煙道、カマド壁とも熱による変色はさほど進行していない。カマド内からは土師器甑の破片が出土した。カマド下部には明灰白色粘土が堆積しており、カマド上部に用いられたと推測される。

出土土器（図版40、第125・126図） 1~6は土師器である。1は口縁が外反するやや大形の鉢。頸部のくびれは弱く、口縁部が直立よりやや外傾している。調整は内外とも摩滅のため不明である。口径19.7cmを測り、橙褐色を呈す。2は高杯杯部と脚部の接合部小片である。脚部外面、杯部外面にはミガキを施し、内面は接合部より剥離している。剥離面には工具の刺突文が明瞭に残っている。褐色。3~5は甕である。3は口径13.8cmの小形品。口縁部はわずかに外反気味で、内面にハケメ、接合痕が残る。黄褐色。4は口縁部が緩やかに外反し、肩部は横ハケを施している。口径17.7cmで褐色を呈す。5は肩部以上の破片であるが胴部が大きく球形に張ると推測され、口縁部は緩やかに外反する。口径17.5cmで黄褐色。6はカマド内から出土した甑である。口縁部と裾部の2片に分かれて接合しないが、図上で復元を行なっている。把手は残存していない。口縁部はわずかに外反気味で端部は丸く仕上げられている。外面には粗いハケメが施され、内面はケズリ仕上げである。口径33.4cm、裾径10.2cm、復元器高31.0cmを測り、白橙色を呈するが化粧土のためか外面橙褐色の部分がある。

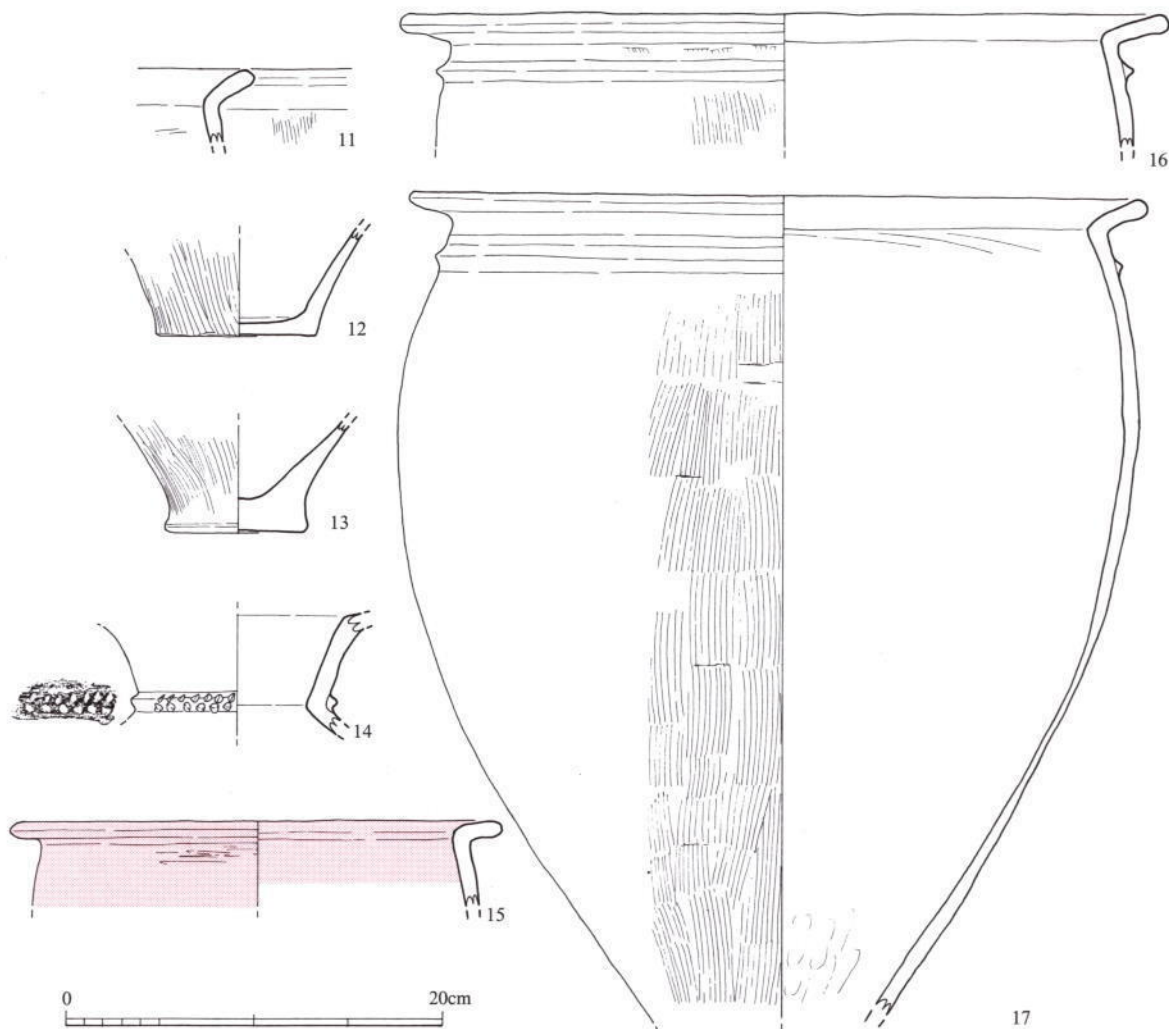
7~10は須恵器。7~9は杯蓋である。7口縁端部が丸く、口縁部から丸く屈曲して天井部に至る。天井部外面のヘラケズリは範囲が狭く、雑であり、中央にはヘラ切り痕を残している。口径13.5cm、器高4.2cmを測り、暗灰色を呈す。8は口縁部がわずかに直立し、天井部との境を画さずになめらかに天井部に至っている。天井部ヘラケズリの範囲も狭い。口径12.3cm、器高4.2cmを測り、黄灰色を



第62図 26号竪穴住居跡・同カマド実測図 (1/60、1/30)



第63图 26号竖穴住居跡出土土器実測図(1)(1/3)

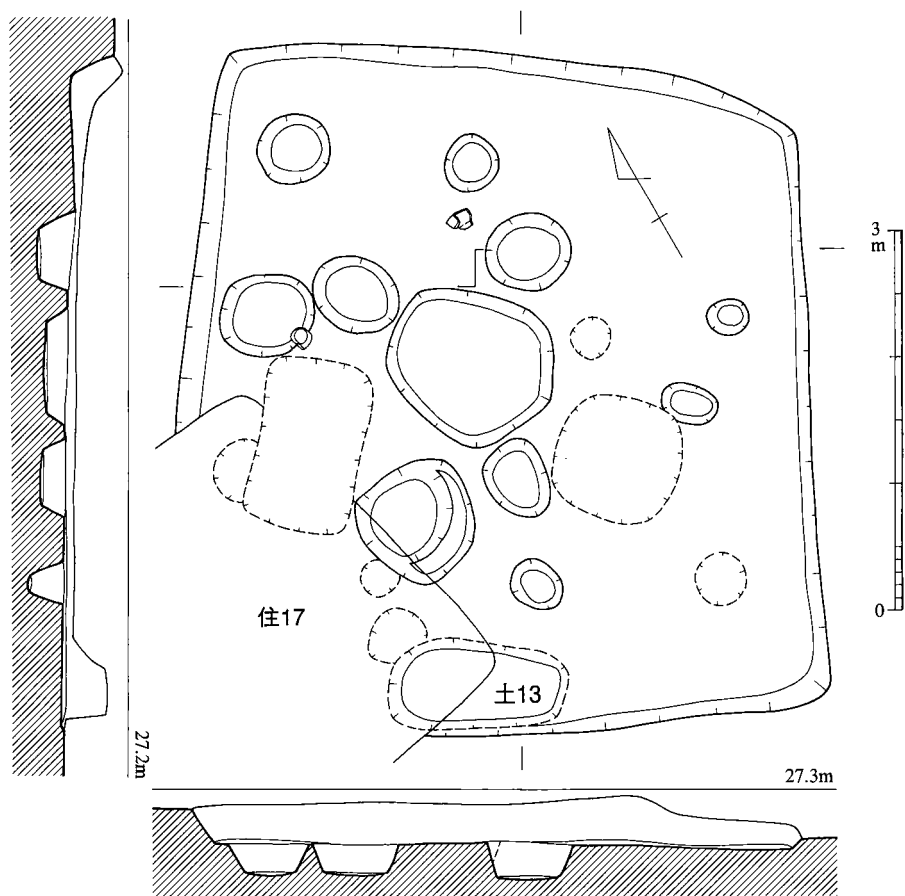


第64図 26号竖穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/4)

呈す。9は口縁端部内側に内傾する凹面をなしており、口縁部は短く直立してなめらかに天井部に至る。口径12.6cmを測る。焼成は堅緻で内外暗灰色を呈す。10は杯身。口縁部は短くやや内傾し、残存部分には回転ヘラケズリ痕は見られない。口径11.8cm、受部径14.0cmを測る。灰黄色。

これらの土師器、須恵器から考えて住居跡は6世紀後半に比定できるだろう。

11～17は弥生土器。このうち14が覆土中、15が床面下層からの出土品であるが、他は26号住居跡周辺の包含層から出土した。11・15～17は甕である。11はゆるやかに外反する甕口縁部小片である。15は外面～胴内面上部に丹塗りを施した口縁部。ただし、外面は鮮やかな赤色であるのに対して、内面は橙褐色を呈す。口縁部は逆L字に近い角度で外折し、内面の稜は弱い。胴部外面には摩滅が進むが横ミガキが観察される。口径24.8cmを測り、生地は黄灰褐色を呈す。16は口縁部が外折し、直線的に伸び、口縁直下には断面三角形の突帯が巡っている。口径39.8cmを測り、外面淡褐黄色、内面淡褐色を呈す。17は底部を欠損する大形の破片。口縁部はくの字に外反し、端部を丸く仕上げている。内面頸部直下には板状工具による斜め方向の調整痕が残る。胴部外面は縦ハケ仕上げである。口径37.8cm。胴下半部には煤が付着し、灰黄褐色を呈す。12・13は底部片で甕に伴うものであろう。12はわずかに外反しながら胴部が立ち上がり、底部は薄い。外面縦ハケ仕上げで、底部外面は未調整と言って良いくらい目立った調整痕がない。底径8.3cmで黄褐色を基調とするが、内面



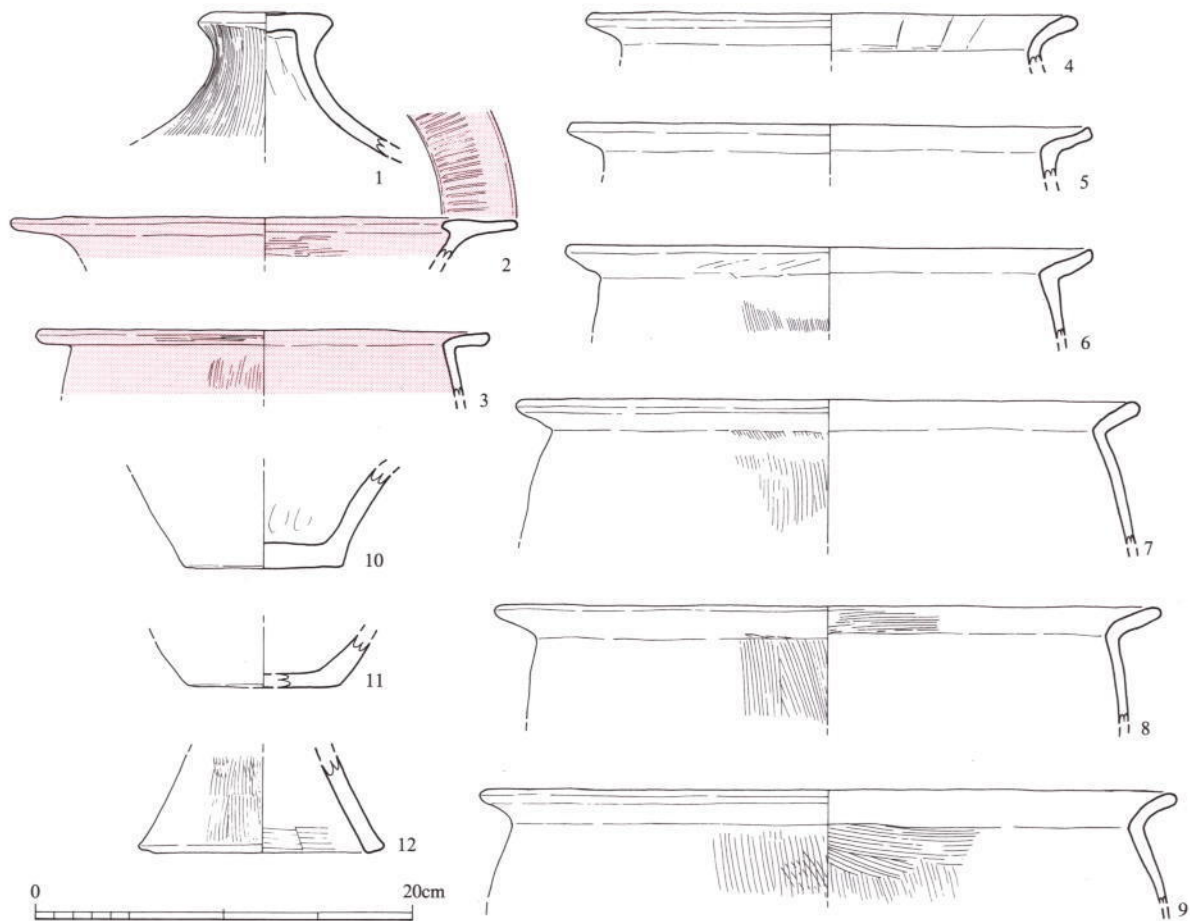
第65図 27号竪穴住居跡実測図 (1/60)

はコゲのため褐色に変色する。13は口縁部から胴部が大きく屈曲して外反している。胴部外面は縦ハケ、底部外面は同心円上に丁寧なナデを施す。底径7.3cmで淡黄褐色を基調とするが、内面底部にはコゲが付着。14は壺頸部片か。口縁部は直線的に伸び、残存部上端で外折すると思われる。頸部外面には断面三角形突帯を添付し、その上面、下面に棒状工具刺突文を巡らしている点が特異なものである。あるいは豊後地域からの搬入品となるか。

27号竪穴住居跡 (図版23、第65図)

調査区の中央やや南寄り、18号竪穴住居跡の下層で検出されたもので、西南部を17号竪穴住居跡により壊され、30号竪穴住居跡を切っている。新しい遺構にかなり壊されており、遺存状況は良いとは言えないが、平面形は比較的是っきりと検出することができた。主軸を北寄りやや東に振ったやや歪な方形の竪穴住居跡で、南北4.6~5.4m、東西4.7~5.1mを測り、壁は残りの良いところで高さ30cm余りである。床面では大小多数のピットを検出したが、炉跡は確認できず、支柱穴配置も不明である。南側の壁沿いでは弥生土器がまとまって出土した13号土坑が検出されている。ひとまず住居跡には付属しない可能性を考えて別番号を付したが、あるいは27号竪穴住居跡の屋内土坑となる可能性があるだろう。土器の他に覆土中より黒耀石剥片 (第82図9) が出土した。

出土土器 (図版39・40、第66図) いずれも弥生土器である。1は蓋の頂部片。頂部は平坦で端が突出気味になり、強く外反して口縁部へと伸びている。外面ハケメ、内面ナデ上げ。頂部径7.1cm



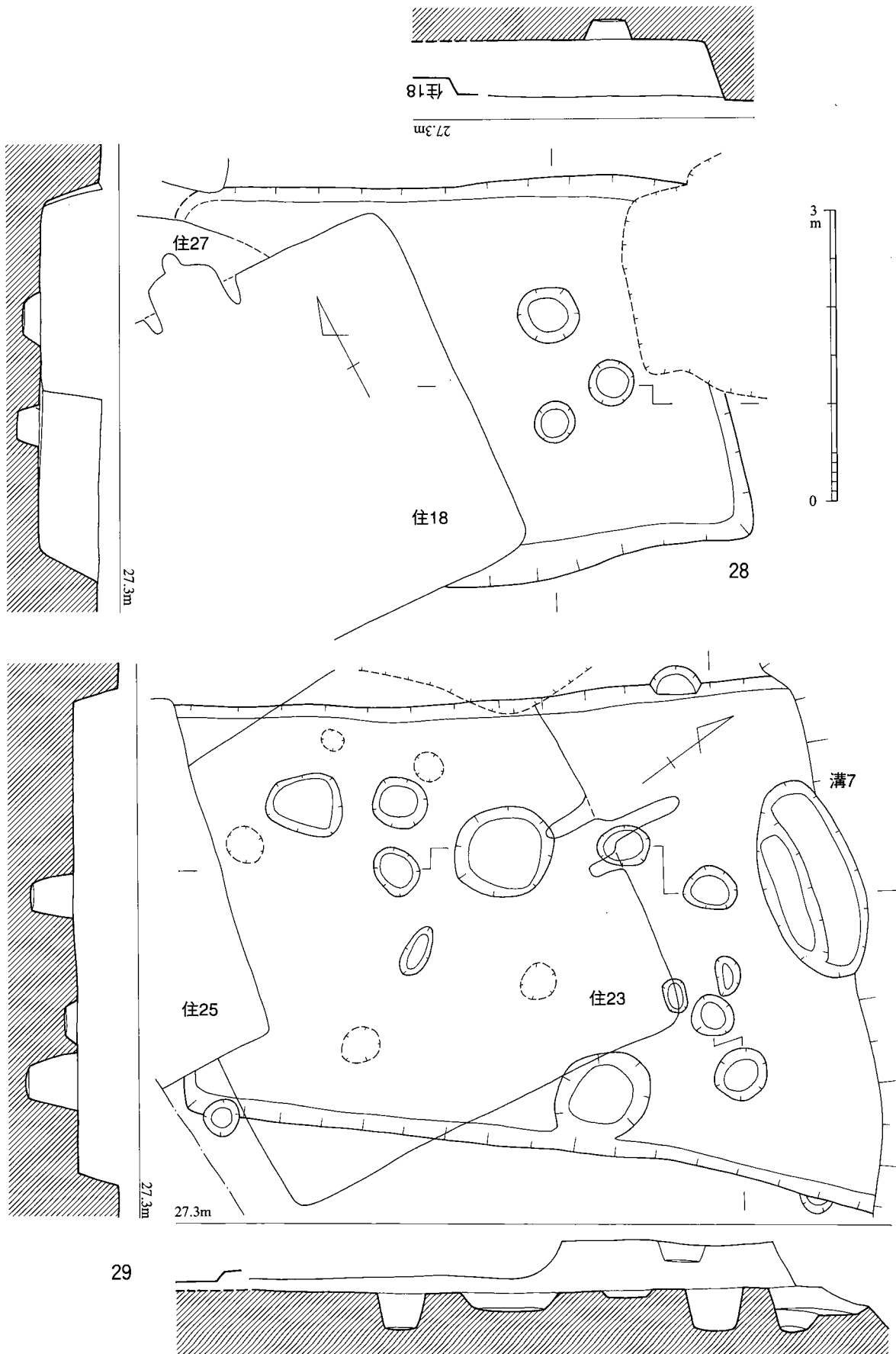
第66図 27号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

を測り、淡黄褐色を呈す。

2は内外丹塗りの口縁部片で、高杯となるか。内外の調整は摩滅するが、口縁部上面に放射状に暗文を施している。口径26.8cm、口縁内径18.8cmを測り、生地は淡橙褐色を呈す。

3～9は甕口縁部片。3は内外丹塗りで、口縁は逆L字状に外折し、端部はやや厚くなる。胴部外面縦ハケ仕上げで、口縁端部外面にミガキらしき調整が見える。口径23.6cmを測る。4は緩やかに外反する口縁部で、端部はやや厚くなり、丸く仕上げている。口縁部内面には放射状にハケメ工具小口圧痕が残る。口径25.1cm。5・6はいずれも口縁部がくの字に外折し、端部はかすかに上方につまみ出して、角張っている。6の口縁部外面には斜め方向のハケメ工具小口痕が残る。5は小片のため径は不安であるが、口径27.3cmに復元され、6は口径27.6cm。7・8は口縁部がくの字に外傾し、端部を丸く仕上げている。8の口縁部内面には横ハケが残る。7は口径32.3cm、8は口径34.6cmを測る。9は大形品で、胴部の内面のハケメ仕上げが特徴的である。口縁部は緩やかに外反するくの字口縁。口径36.2cmを測る。3・6は橙白色、4は淡橙褐色、5は白黄褐色、8は淡褐色、9は淡黄褐色を呈する。

10・11は底部片。10は外面二次加熱のため器表が荒れて調整不明であり、内面にはナデ上げの痕跡が残る。底径8.0cmを測り、淡黄褐色を呈する。11は胴部が緩やかに内湾しながら立ち上がるので、あるいは壺のものか。底径8.0cmで、外面一部二次加熱を受け、摩滅が進み調整不明である。淡褐色を基調とする。



第67図 28・29号竪穴住居跡実測図 (1/60)

12は鼓形器台の裾部と思われる破片。端部は角張った面をなし、外面縦ハケ、裾部内面は横ハケを施す。外面淡黄褐色、内面灰褐色を呈す。これらの土器は全体として弥生中期後半でも新しい頃に位置づけることができよう。

28号竪穴住居跡（図版24、第67図）

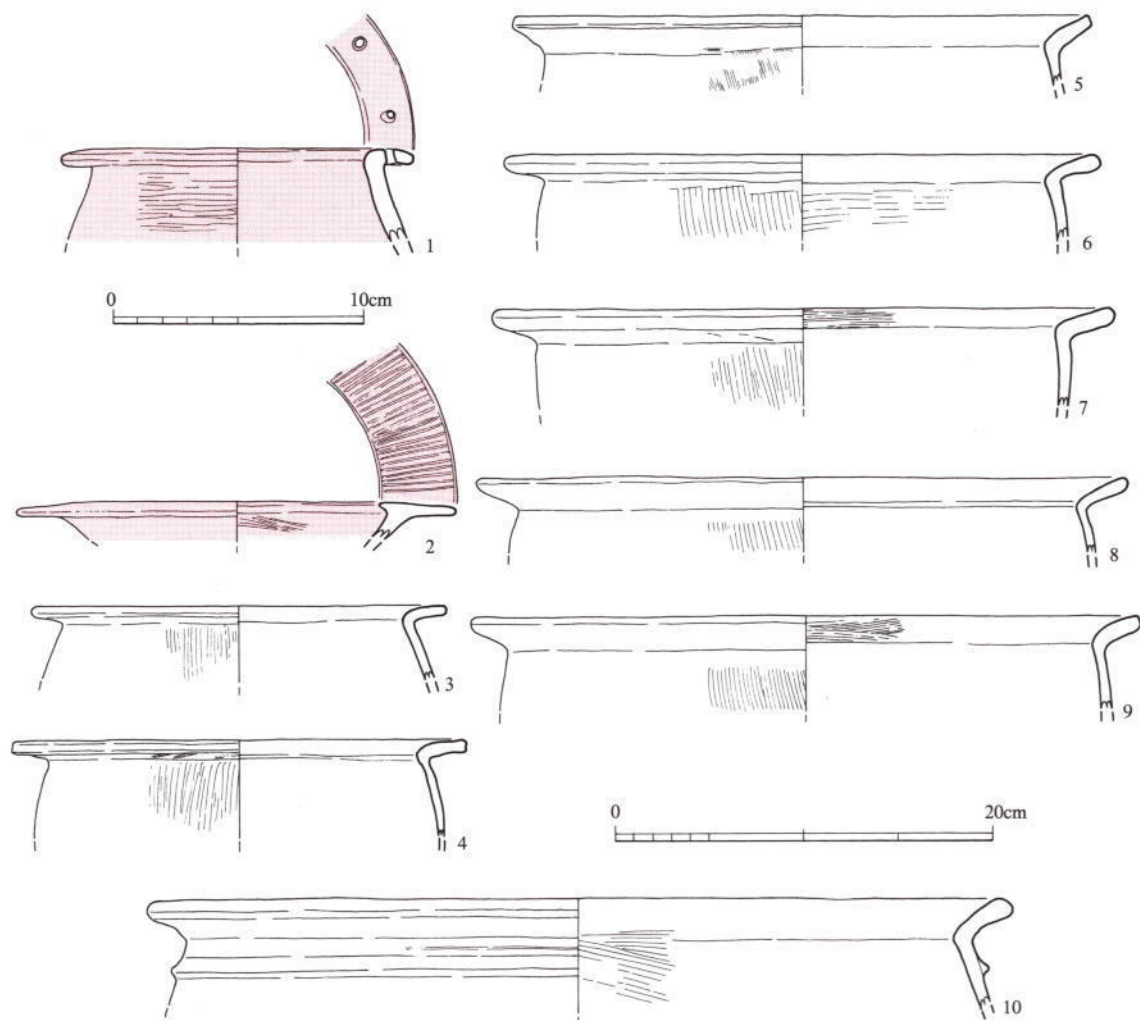
調査区中央やや南寄りに位置している。西側を18号・27号竪穴住居跡、北側は21号竪穴住居跡の床面下層で検出したが、東南－西北に主軸をおいた長方形ないしは方形の竪穴住居跡ではないかと考えて発掘を行なった。また、東側も上層からの試掘トレンチにより壊されている。現状では東北側の壁は長さ4.6m程検出しているが、27号竪穴住居跡と接する部分では輪郭が不明確となっている。東北壁と南壁との間隔は最大4.1m余り。壁の高さは遺存状況の良好な部分で60cm近くに達する。検出した床面が正しいとすれば、比較的深い位置にあるので18号竪穴住居跡の下層でも検出できたはずであるが、調査が不十分なままに終わった。床面では3基のピットを検出したが、炉跡、支柱穴は不明である。壁も一部しか検出できていないので、平面形は不安である。出土土器はいずれも小片で、図示できない。

29号竪穴住居跡（図版24、第67図）

調査区の中央やや南よりに位置し、南側を23号竪穴住居跡に切られ、北側を第2面7号溝により壊されている。東北－西南に主軸をおく長方形の竪穴住居跡ではないかと考えて発掘を行なったが、検出できたのは西北壁の一部、東南壁の南側とそれに挟まれる部分の床面のみである。23号住居跡の南側で隅を検出したが、そうすると東南壁は7.2mを超えやや異様である。西北壁と東南壁のラインも平行ではないので、複数の遺構が切合っていたか、遺構の輪郭を誤った可能性がある。壁の高さは残りの良い部分で50cmに達しており、比較的深い。床面ではいくつピットを検出したが、炉跡、支柱穴は不明である。また、7号溝に切られる部分では東西方向に長い長軸2.2m、短軸1.0mの土坑状のピットを検出したが、遺物も少なく性格、あるいは本住居に帰属するかどうか不明である。土器の他に磨製石鏃（第82図14）が出土した。

出土土器（図版40、第68図） 2は無頸壺口縁部である。頸部のくびれは弱く、口縁部は逆L字状に外折しているが、頸部内面の稜は目立たない。口縁部には2ヶ所に穿孔されている。胴部外面は横ミガキが残る。口径14.1cm、口縁内径10.0cmを測る。2は内外丹塗りの高杯口縁部である。口縁部上面には暗文を施し、口縁部内面は横ミガキが一部に残る。口径23.3cm、口縁内径15.0cmを測る。3～10は甕口縁部片である。口縁部は3・4が断面逆L字に近い角度で外折しており、他はくの字口縁をなす。10は他と比べ大形品で頸部下に断面三角形突帯を巡らしている。4・5は口縁端部が角張り、6・10は口縁端部の厚みが増し、丸く仕上げている。胴部外面縦ハケ、他はナデ仕上げが基本となるが、7・9は口縁部内面に、6・10は胴部内面にハケメが遺存する。4・5・7は口縁部下面にハケメ工具の小口痕跡が残っている。口径は3、21.4cm、4、23.7cm、5、30.3cm、6、30.6cm、7、32.3cm、8、34.1cm、9、35.1cm、10、44.8cmを測る。1・3内面・6・7は黄褐色、2・10内面は橙褐色、3外面・4・8・9・10外面は淡褐色、5は白橙色、6は外面が煤のために一部褐色に変色している。

これらの土器は全体として弥生時代中期後半でも新しい頃に位置づけられよう。



第68図 29号竪穴住居跡出土土器実測図 (1は1/3、他は1/4)

30号竪穴住居跡 (図版24、第69図)

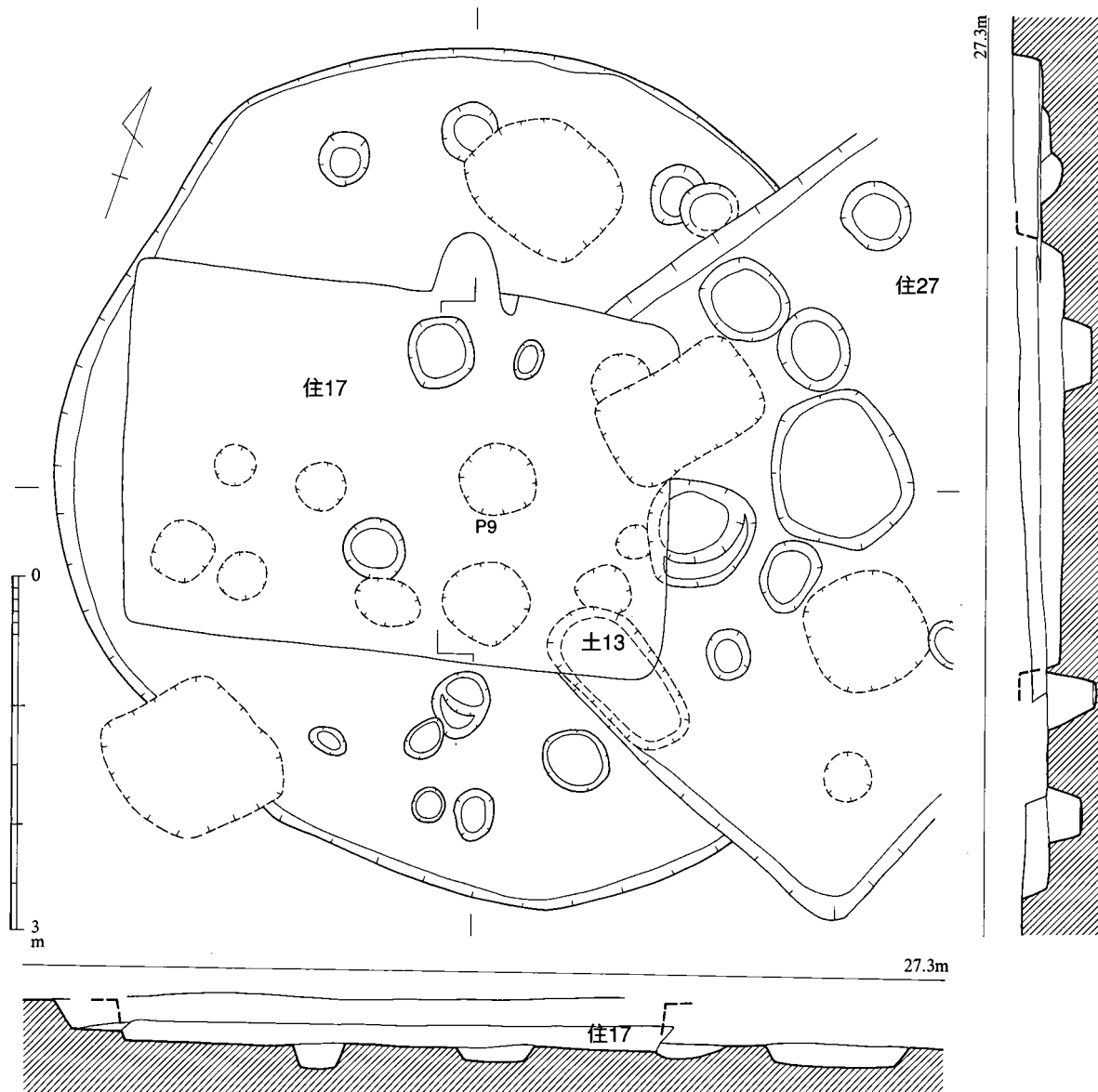
調査区の西南に位置し、17号竪穴住居跡、27号竪穴住居跡の下層で検出された。直径7.0m程の弥生時代の円形住居ではないかと考えて発掘したが、遺構検出面では輪郭線が明確でなかったため平面形には不安が残る。壁の残りの良い部分では高さ30cmを超える。床面では多数のピットを検出したが、支柱穴は明確でない。炉跡として可能性のあるのは、位置的に考えて17号竪穴住居跡の床面で検出されたP9であるが、熱変、炭の堆積も顕著ではなかった。

出土土器 (図版41、第70図) 弥生土器甕底部片である。底部は薄い平底で、やや外反しながら胴部が立ち上がる。外面縦ハケ、胴部内面指頭圧痕の後、縦ハケを一部に施す。底径8.4cmを測り、黄褐色を基調とするが、内面と外面高さ10cmより上はコゲ、煤のため褐色に変色している。

b. 土坑

12号土坑 (図版25、第71図)

調査区の中央やや東側、14号竪穴住居跡のすぐ北で検出されたもので、12号溝を切っている。中

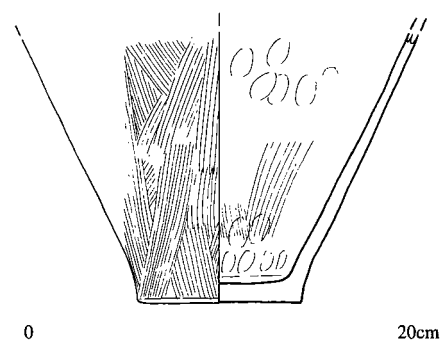


第69図 30号竪穴住居跡実測図 (1/60)

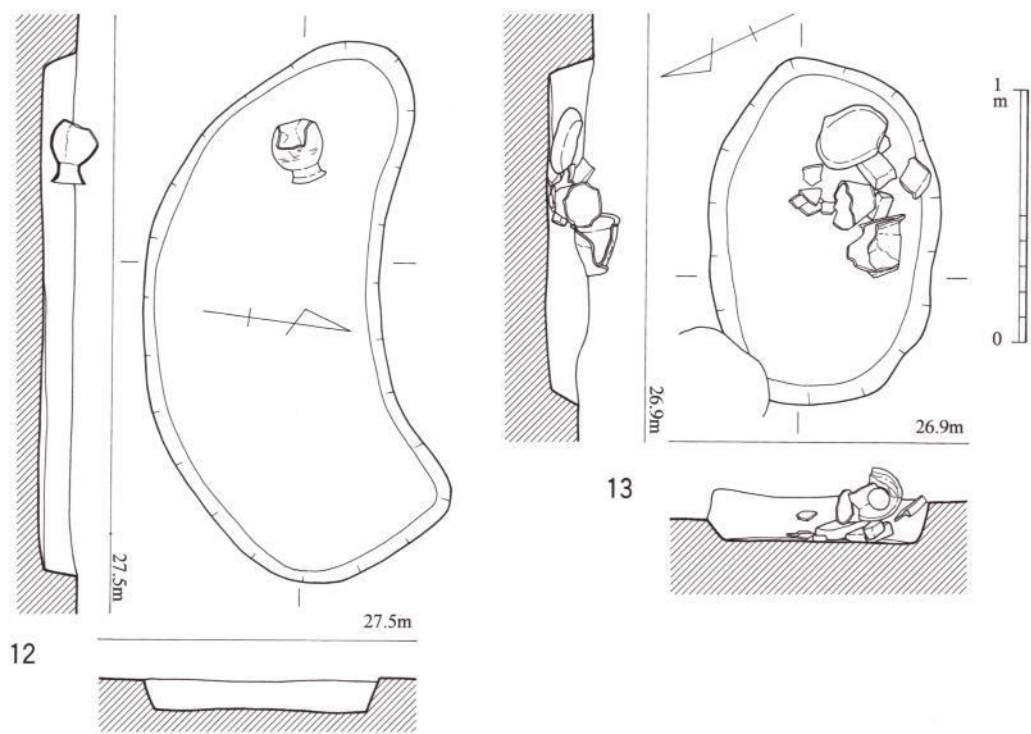
央で屈曲した楕円形の平面形をなし、長さ2.1m、幅0.9m程である。壁は高いところで15cm程と浅く、床面はほぼ平らである。覆土は暗灰褐色砂質シルト。土坑の西側から床面より若干浮いて、弥生土器壺上半破片が横倒しになった状態で出土した。

出土土器 (図版41、第72図1) 図示できるのは出土状況図に示した弥生土器壺のみである。口縁部は長く伸びて外反し、端部がやや角張っている。底部を欠損するが、残存する部分から見て倒卵形の胴部になると推測される。

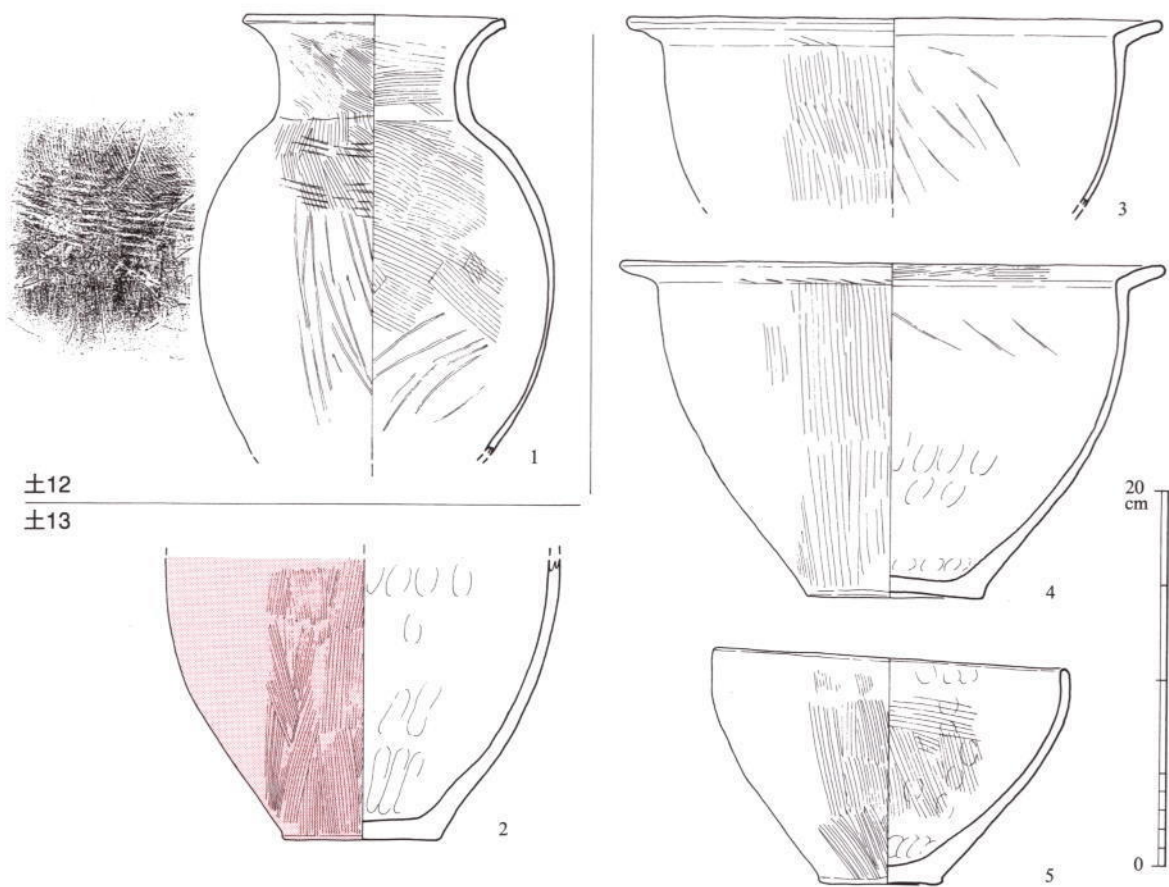
胴部外面下半板状工具によるナデ、肩部横方向のタタキ後、肩部から口縁外面にかけてハケメ仕上げである。胴部内面は底部近くが板状工具によるナデ、他はハケメ仕上げ。口径13.5cm、胴部最大径18.9cm、残存高23.4cmを測る。灰褐色を呈す。



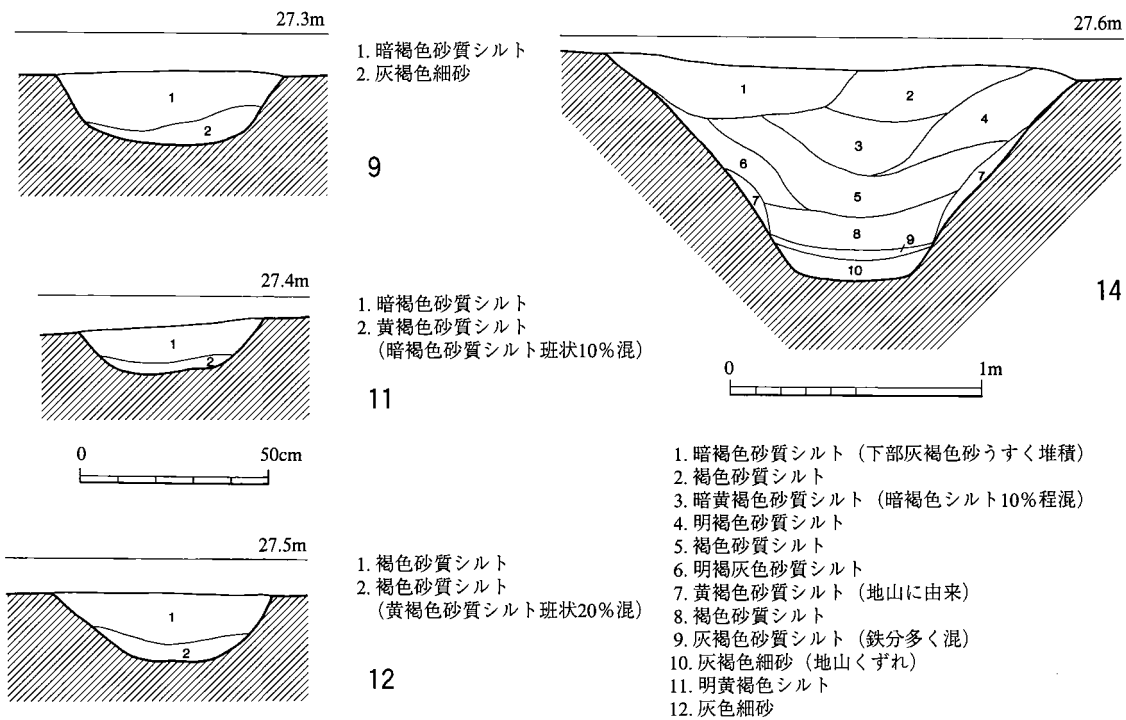
第70図 30号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)



第71图 12·13号土坑实测图 (1/30)



第72图 12·13号土坑出土土器实测图 (1/4)



第73図 9・11・12・14号溝土層実測図 (溝11は1/20、他は1/30)

13号土坑 (図版25、第71図)

調査区西南、27号竪穴住居跡の南壁沿いの下層で検出されたもので、主軸を北西—東南方向に向けた楕円形の平面をなす。長軸方向に長さ1.35m、幅0.9mを測る。壁は残りの良い部分で高さ20cm弱であり、ほぼ垂直に立ち上がっている。土坑内からは弥生土器壺・鉢、花崗岩の台石、砥石 (第84図30・32) が出土している。

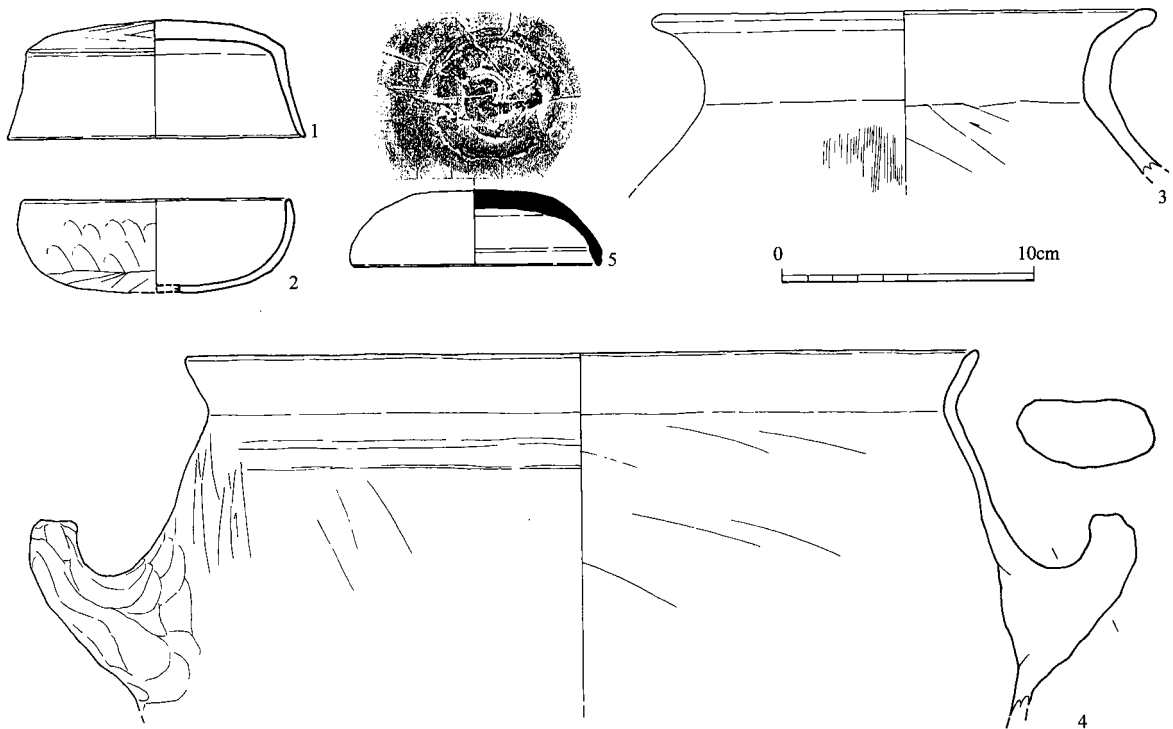
出土土器 (図版41、第72図2~5) いずれも弥生土器である。2は外面丹塗りで、胴部の張りが強いことから壺となるか。外面ハケメ仕上げで、内面は指頭圧痕を良く残している。底部径8.0cmを測る。淡橙褐色を基調とするが、外面は高さ5cmより上が熱を受けて、暗褐色に変色する。また、内面も灰色で、底部外面は焼成不良のため黒変している。

3・4は口縁部が断面くの字に外反する鉢。いずれも口縁部が直線的に外傾し、頸部下からすぼまって底部に至る。いずれも胴部外面は縦ハケで、3は胴部内面に斜め方向の板状工具のナデによる条痕が残る。4は口縁部内面ハケメ、胴内面は上部板状工具のナデによる条痕、胴内面下部は指頭圧痕が見られる。また、口縁外面にはハケメ工具の小口圧痕が残る。3は口径27.9cmを測り、淡橙褐色～淡黄褐色を呈す。4は口径28.4cm、器高17.7cm、底径9.3cmを測る。5は単口縁の鉢。外面は縦ハケ、内面は指頭圧痕後ハケメ仕上げである。また、内外口縁部は丁寧に横ナデを施している。口径18.4cm、器高12.1cm、底径6.4cmを測る。淡黄褐色～淡橙褐色を呈す。

c. 溝状遺構

9号溝 (図版26、第73図)

調査区の西北、15号竪穴住居跡の東を西南方向に延びる溝である。調査時には7号溝、19号竪穴



第74図 9号溝出土土器実測図 (1/3)

住居跡に切られて、調査区西壁の方へと続いていくと考えたが、あるいは19号住居跡より西南は11号溝と続き、本溝は途中で途切れていた可能性もある。幅1m前後で、最大幅1.3mを測り、壁は緩やかに立ち上がっている。底面は北壁際で27.29m、7号溝の北側で27.23m、西壁近くで26.88mを測り、北から南西に傾斜しているようである。

出土土器 (図版41・42、第74図) 1~4は土師器。1は模倣杯蓋で、口縁はやや内傾しながら長く伸び、明確な境界をなして天井部へ続く。天井部外面は手持ちヘラケズリ仕上げ。口径11.8cm、器高4.7cmを測り、淡橙褐色を呈す。2は杯。外面上半部は指頭圧痕を残すナデの後、底部に手持ちヘラケズリを施す。内面の調整は摩滅している。口径10.4cm、器高3.8cm。橙褐色を呈し、器壁は薄く、胎土に砂粒をほとんど含まない精製品である。3は口縁部の外反が強い甕。口径19.1cmを測り、褐色を呈す。4は把手付鍋の上半部破片。口縁部はほぼ直線的に外傾し、胴部最大径付近に板状に近づいた把手を接合している。肩部から口縁部の器壁が大形器種にしては薄く特異である。頸部下に2条の段が形成され、胴部外面はケズリ後ナデ仕上げか。胴部内面もケズリの稜が残るが、砂粒の動きがほとんど観察されないのその後ナデを施したと推測される。口径31.2cmを測り、橙褐色を呈している。

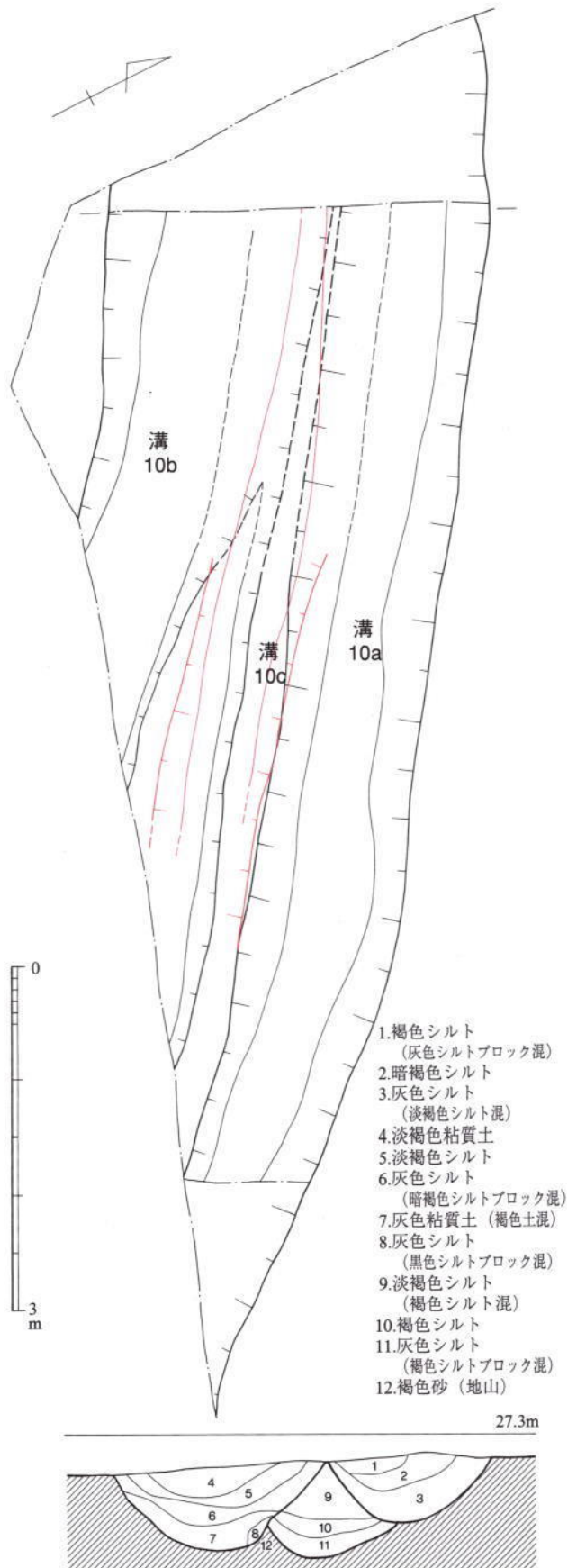
5は須恵器杯蓋で口径9.7cm、器高3.1cmの小形品。口縁部から天井部へと丸みを帯びて続いている。天井部外面には回転ヘラケズリを全く施さず、ヘラ切り痕を残している。さらに、天井部外面には一直線のヘラ記号が施文される。焼成は良好で黒紫色を呈す。

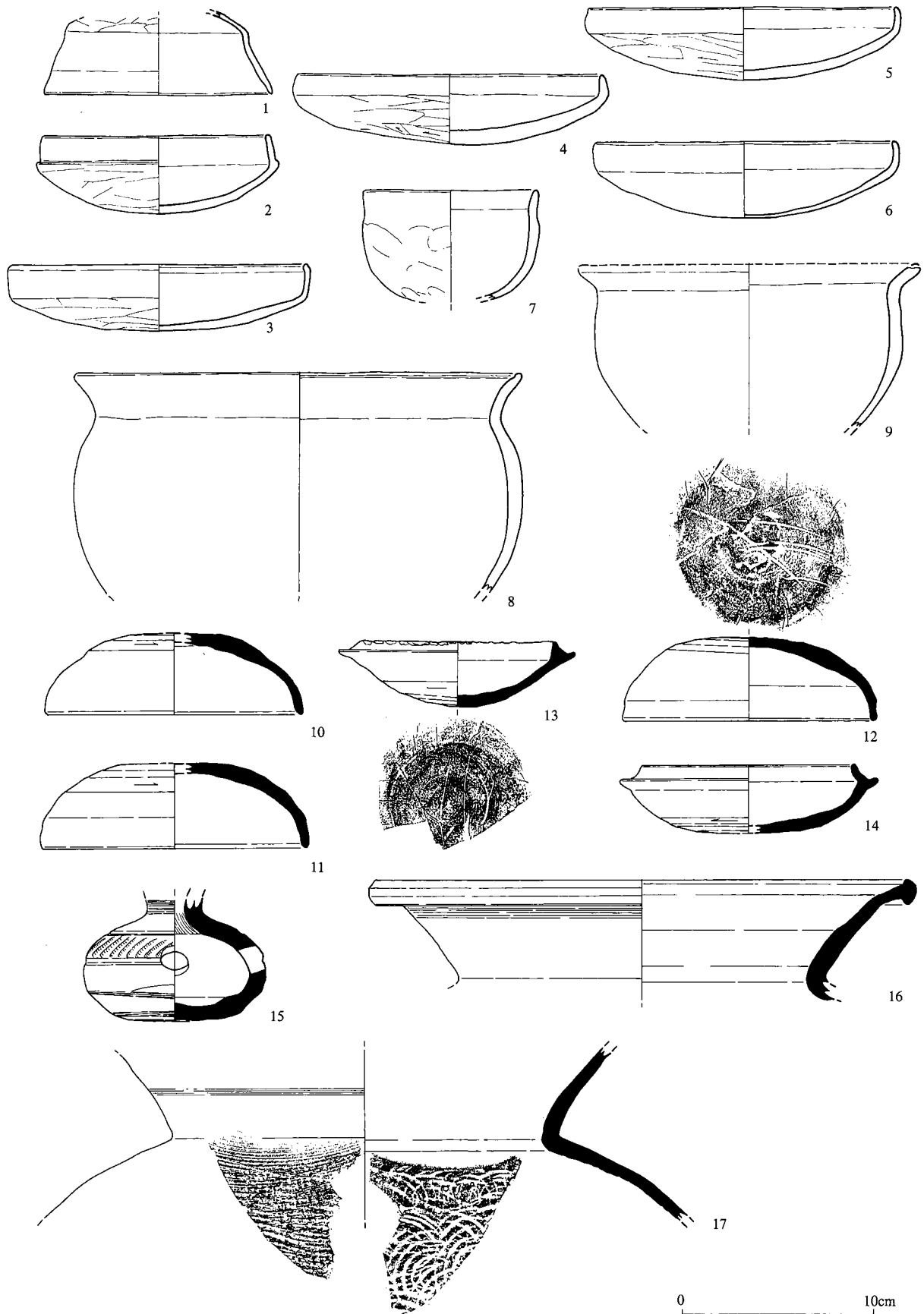
10号溝 (図版25・26、第75図)

調査区西南隅を緩やかに屈曲しながら走る溝で、調査区南壁、西壁を越えて調査区外へと延びている。遺構検出面では幅3.2mを測る1条の太い溝と考えたが、掘り下げて土層を確認すると3条の溝の切合いであることが判明し、それぞれを10号溝 a、10号溝 b、10号溝 c と細分することとした。それによると10号溝 a は上面幅1.45m、深さ0.6m、10号溝 b は上面幅1.85m、深さ0.7mを測る。10号溝 c は10号溝 a、10号溝 b より古いことが判明する。検出した部分ではほぼ平坦で、どちらの方向に傾斜していたかは不明である。

出土土器 (図版42、第76図) 1・2・10は確実に10号溝 c から出土したものである。しかしながら、かなり掘り進めた後で3条の溝の切合いであることが判明したため、他の土器はいずれに帰属するかは、確かめずに取り上げている。なお、3~6は西端、調査区壁付近で一括して出土した。

1~9は土師器である。1は模倣杯の蓋で口縁部が大きく内傾し、天井部との境は明確な稜をなしている。全体的に摩滅が進行しているが、天井部外面は手持ちヘラケズリが観察される。口径11.8cmを測る。2は模倣杯の身である。口縁部はわずかに内傾し、蓋受けは明確な段をなしているが突出は小さい。底部外面は蓋受けの稜近くまで手持ちヘラケズリを施している。口径11.7cm、受部径12.7cm、器高4.1cmを測る。胎土は精良。3~6は一括して出土した杯で、いずれもやや低平な器形に直立する口縁部がつく。3・5・6は口縁部内面をかすかに肥厚させている。底部外面には手持ちヘラケズリを施す。口径、器高は3が15.5cm、3.5cm、4が15.8cm、3.7cm、5が16.1cm、3.8cm、6が15.6cm、4.0cmを測る。7は小形で深い器形の鉢。内外ナデ仕上げで、外面にはかすかに指頭圧痕が残る。口径8.8cm。8・9は口縁部が外反し、深い器形の鉢。8は口縁部がゆ





第76图 10号溝出土土器实测图 (1/3)

るやかに外反し、端部内面に沈線を巡らす点が特徴的である。口径23.0cmを測る。9は口縁端部を欠損するが、口径17.5cm前後に復元できる。内面はナデを施すが、外面の調整は摩滅のため不明である。1・3・4・6・8・9は淡橙褐色、2は淡黄橙色、5は明褐色、7は淡灰褐色を呈する。

10～17は須恵器である。10～12は杯蓋で、いずれも口縁部から丸く天井部へと続いており、口縁部と天井部を画する段、凹線は見られない。回転ヘラケズリの範囲はかなり狭くなっており、12はヘラケズリが粗雑なため、天井部外面中央にヘラ切り時の突出を残したままである。天井部外面に「冊」字状のヘラ記号が施される。10、暗灰色、11・12は焼成不良のため白灰色を呈す。13・14は杯身。ともに立ち上がりが短く内傾しており、13は断面三角形状になっている。13の外面には3本の平行線によるヘラ記号が施される。13は口径10.0cm、受部径12.4cm、器高3.4cm、14は口径10.9cm、受部径13.5cm、器高3.6cmを測る。13、青灰色、14灰色を呈す。15は臑胴部片である。肩部に2条の凹線を巡らし、その間に櫛歯刺突文を充填している。穿孔はこの文様帯の下半～胴部最大径のところに位置し、直径1.5cmを測る。頸部外面はカキメを施し、胴部下半はカキメ後回転ヘラケズリで仕上げる。胴部最大径9.5cm。焼成は良好で灰色を呈し、胴外面に円弧状の火だすきが生じている。16は甕口縁部片である。口縁端部は上下に拡張して玉縁状に仕上げ、口縁端直下の外面にはカキメを巡らしている。口径27.6cmを測る。外面は灰色で火を強く受けているが、内面は灰褐色である。17は頸部径20.0cm前後に復元される大形甕の頸部片。胴部外面は擬格子タタキ後カキメ、内面は同心円文当具圧痕が残る。また、口縁部外面にも一部帯状にカキメが残っている。内外暗灰色を呈している。

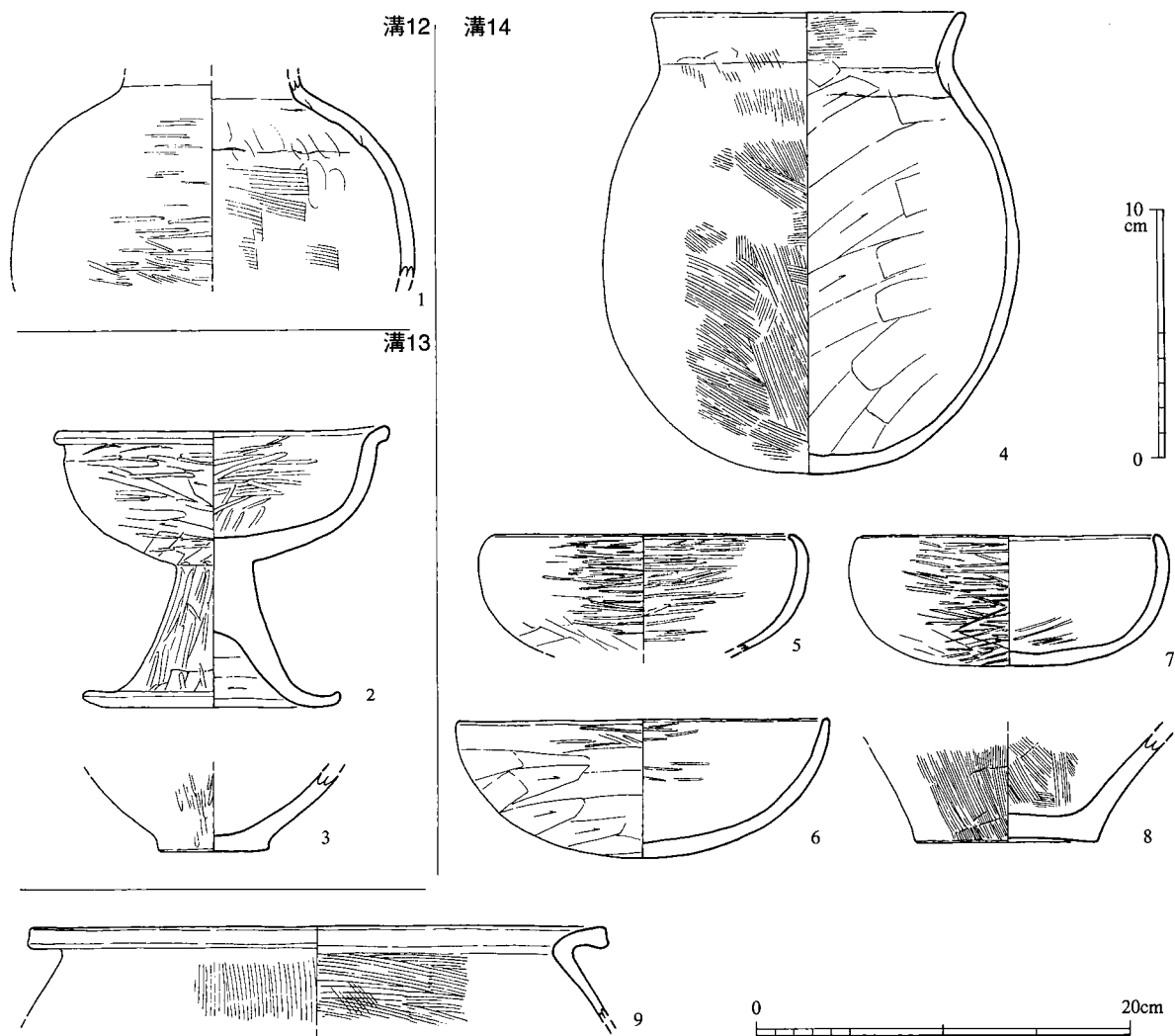
11号溝（第6・73図）

調査区中央やや西よりから始まる細い溝で、12号溝を切り、7号溝に切られる。7号溝より南では検出できないが、19号竪穴住居跡を超えて、9号溝南半分とした部分に続く可能性もある。幅は0.5m前後で断面は底の平坦な逆台形を呈する。深さは10cm前後で、東端の底面標高27.24m、7号溝北側の底面標高27.16mであることから、東から西へ傾斜している可能性がある。図示できる出土遺物はない。

12号溝（図版26、第73図）

14号竪穴住居跡の北から西へ延び、途中から7号溝と平行して走る。9号溝に切られ、そこから西は16号竪穴住居跡など他の遺構と重複するために検出できていない。また、14号溝に切られているが、浅い溝のため遺構面上の包含層を下げる過程で掘りすぎたことによるのか、14号溝の北側では検出できなかった。このほか、6号竪穴住居跡、12号土坑より古く、22号竪穴住居跡より新しいことが切合関係から判明している。幅0.5～1.1mで断面は緩やかに立ち上がっている。そこから北側でも検出できていない。深さは15cm前後で、22号竪穴住居跡の上層の底面標高27.12m、14号溝近くでは底面標高27.02mで、西から東に低くなっている。

出土土器（図版42、第77図1） 古式土師器壺の胴部片である。外面は摩滅が進むが、横方向に粗いミガキが一部に残っている。内面は板状工具によるナデでハケメ風条痕が残り、肩部内面にはそれに先行するナデ上げの痕跡が観察できる。



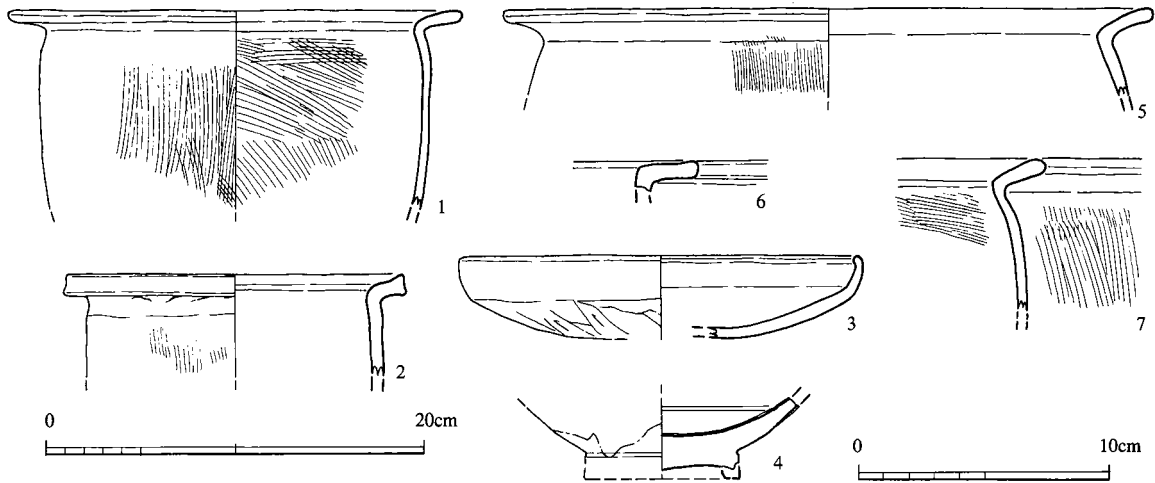
第77図 12～14号溝出土土器実測図 (3・8・9は1/4、他は1/3)

13号溝 (図版26、第6図)

14号溝の西北部から枝分かれするように西に延び、15号竪穴住居跡の下層へと続いている。第6図には、14号溝に先行するように図示しているが、両者の切合いは十分な確認ができていない。14号溝土層図の最上層に相当する可能性も考えられ、そうとすれば14号溝より新しくなる。幅0.9m前後で、深さは40～50cmで、底面標高は9号溝付近で27.08m、14号溝付近で26.94mとなり、西から東に緩やかに傾斜している。土器の他に黒耀石剥片 (第82図8) が出土した。

出土土器 (図版43、第77図2・3) 2は5世紀末～6世紀初頭と考えられる土師器高杯。杯部外面は横斜め方向にヘラケズリした後、ミガキを施して仕上げている。脚部外面は縦ケズリの後、縦ミガキを施す。灰部内面は横ミガキ、脚部内面は横方向のケズリ、脚裾は内外丁寧なミガキ仕上げである。口径13.1cm、脚裾径10.4cm、器高11.2cmを測る。淡黄褐色が主体となるが、外面に一部、橙褐色化粧土を施している。

3は弥生土器壺底部。外面は縦方向のミガキの可能性があり、内面は器表が荒れるために調整不明である。底径6.0cmを測り、白黄褐色を呈す。



第78図 1区第3面遺構面・ピット出土土器実測図 (3・4は1/3、他は1/4)

14号溝 (図版26、第6・73図)

調査区北壁中央やや西より始まり、東南へと延びて2区へと続く。溝の方向は7号溝とほぼ平行するN-63°-Wとなる。幅1.5~2.0mであるが、調査区東部では13号溝と重なっているためか幅3m前後と幅広になる。深さは断面を作製した部分で0.8m余り。底面は平らで断面傾斜の緩やかな逆台形を呈している。底面標高は北壁近くで26.64m、中央で26.54m、東壁付近で26.4mを測り、西から東に低くなっている。土器の他に石包丁片 (第82図19)、砥石片 (第84図33) が出土した。出土土器から考えて、5世紀後半~6世紀初頭のものであろう。

出土土器 (図版43、第77図4~9) 4~7は土師器である。4は甕で完形に復元できた。口縁部は直線的に外傾し、胴部最大径はほぼ胴部中央に位置している。外面ハケメ、内面ケズリ仕上げで、頸部内面に粘土紐接合痕が残る。胎土に砂粒を多く含み、橙褐色を呈す。胴下半は煤が付着している。5~7は反球形の杯である。5・7は口縁端部をやや内傾させており、いずれも外面下部手持ちヘラケズリの後に内外に横ミガキを施している。6も同様の調整であるが、ミガキの範囲が狭いために、外面に広く手持ちヘラケズリ痕が残る。いずれも橙褐色を呈す。

8・9は弥生土器。8は甕底部片で内外ハケメ仕上げ。底部はやや上げ底気味で、底径9.4cmを測る。9は甕口縁部片。口縁部は短く、やや強く屈曲して外反し、端部は凹面をなしている。胴部はハケメ仕上げ。口径30.2cmを測り、橙褐色を呈す。

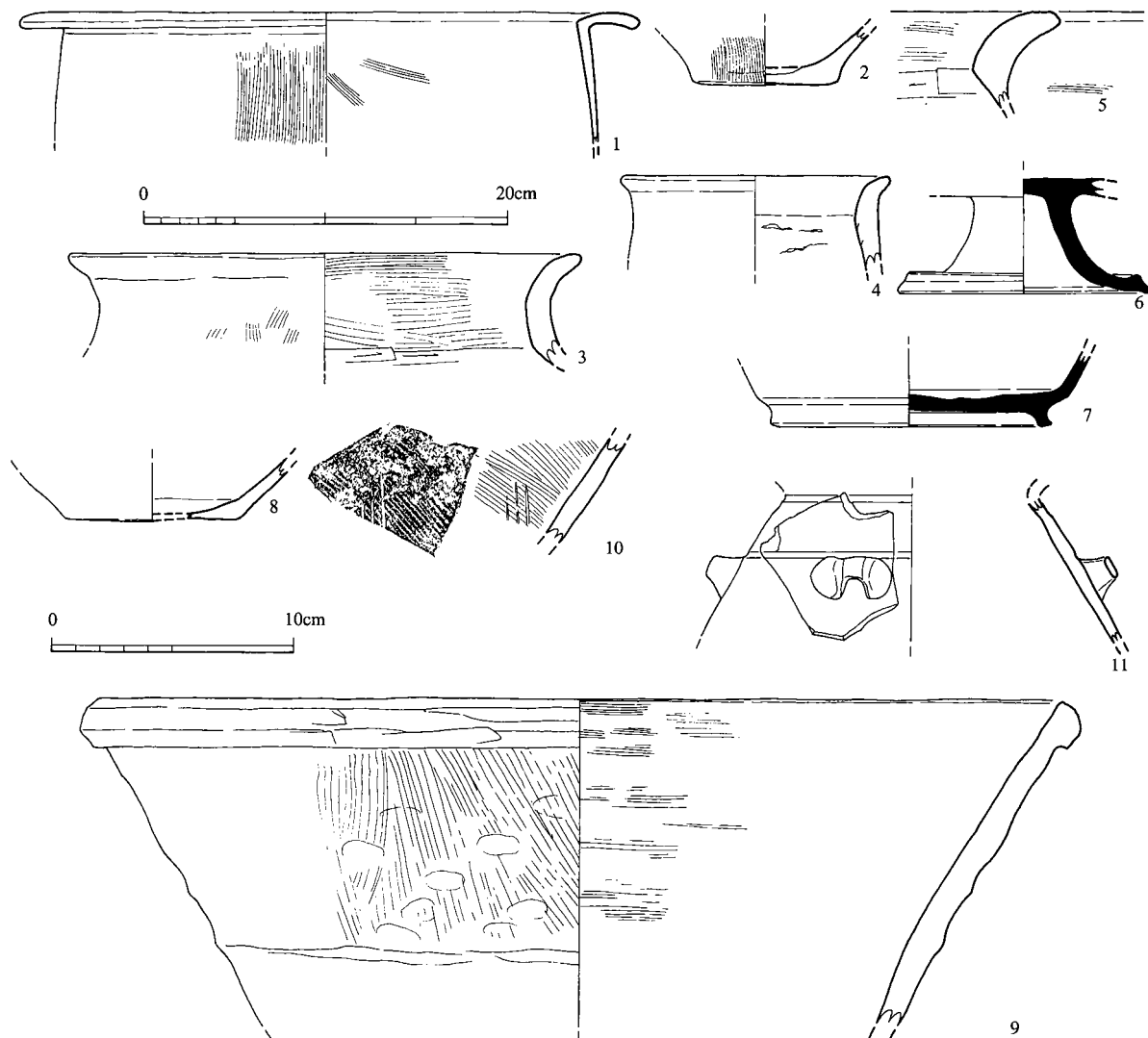
d. 第3面ピット・遺構面出土の土器

第3面ピット出土土器 (第78図5~7)

いずれも弥生土器甕である。5は口縁部がくの字に外反し、端部を丸く仕上げている。外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。口径33.8cmを測る。6は口縁部小片。傾きは不安であるが、断面逆L字状に外折するようであり、口縁端部は角張っている。7は断面くの字口縁で、胴部内面上部斜めハケ、胴部外面縦ハケ仕上げ。淡褐黄色を呈すが、口縁内外は褐変。

第3面遺構面出土土器 (図版43、第78図1~4)

1・2は弥生土器甕口縁部片である。1は緩やかに外反しながら外折し、胴部外面縦ハケ仕上げで、



第79図 1区トレンチ出土土器実測図 (1・2は1/4、他は1/3)

胴部内面は全体に斜めハケが残る。口径23.7cmを測り、淡黄褐色を呈する。2は口縁部が短く外折し、端部をやや拡張させる特徴的な器形。内面ナデで、胴部外面は縦ハケ後ナデ。口縁部下面には工具痕と思われる皸が観察される。口径17.5cmに復元される。3は土師器杯。口縁部は短く直立し、丸く屈曲して底部へと続く。外面下部はヘラケズリ、他はナデ仕上げである。口径15.6cm、器高3.3cmを測り、外面橙褐色、内面白褐色。4は白磁底部片。外面の釉は高台よりもやや上で止っており、高台～底部外面は露胎となる。高台径6.1cm。釉は濁り、生地は粗雑で灰白色を呈す。

(4) 1区トレンチ出土および表採の土器

試掘トレンチ出土土器 (図版43、第79図)

トレンチ内、調査区各所の包含層の状況を確認するために設定したトレンチ内からの出土土器を一括して、ここで報告することにしたい。

1・2は弥生土器である。1は口縁部が断面逆L字状を呈するもの。口縁は緩く外反し、外端部が垂れている。外面縦ハケ、内面ナデを基調とするが一部にハケメが残る。口径34.0cm、内口径27.6

cm、褐色を呈す。2は底部片である。胴部は緩やかに外反しながら立ち上がっている。底径8.0cm、淡黄褐色を基調とするが、外底面は焼成不良のため、灰黒色を呈する。

3～5は古墳時代後期～奈良時代の土師器甕口縁部である。3は口縁部が大きく外反し、内面にハケメが残る。口径20.9cmを測り、外面白橙色、内面淡橙褐色を呈す。4は口径10.8cmの小形品。口縁部は短く外反し、胴部内面に接合痕が残る。明褐色。5は緩やかに外反する口縁部片で、器壁が厚い。口縁内面にはかすかに横ハケが観察される。淡橙褐色。

6・7は須恵器である。6は高杯脚部片である。脚部は大きく外反して開き、端部をやや拡張させている。裾径10.2cmを測り、ややオリーブ色がかった灰色を呈す。7は高台付杯の底部片。高台は腰部よりやや内側にあり、低いがわずかに踏ん張る形態である。高台径12.1cmを測り、暗灰色を呈している。

8・9は中世土師器である。8は杯で、底部外面は回転ヘラケズリか。内面灰褐色、外面淡黄褐色を呈し、底径7.1cmを測る。9は大形の土師器鍋。体部は直線的に開き、口縁部を玉縁状に肥厚させている。外面は胴下半が滑らかであるのに対して、上半は縦ハケ、指頭圧痕が良く残り、凹凸が顕著である。恐らく下半は型づくりであろう。口縁部外面は板状工具を横に動かして、面をつくっている。内面は横ハケ後ナデ仕上げ。口径39.4cmを測り、白黄褐色を呈す。内面コゲ、外面口縁下に煤が付着する。

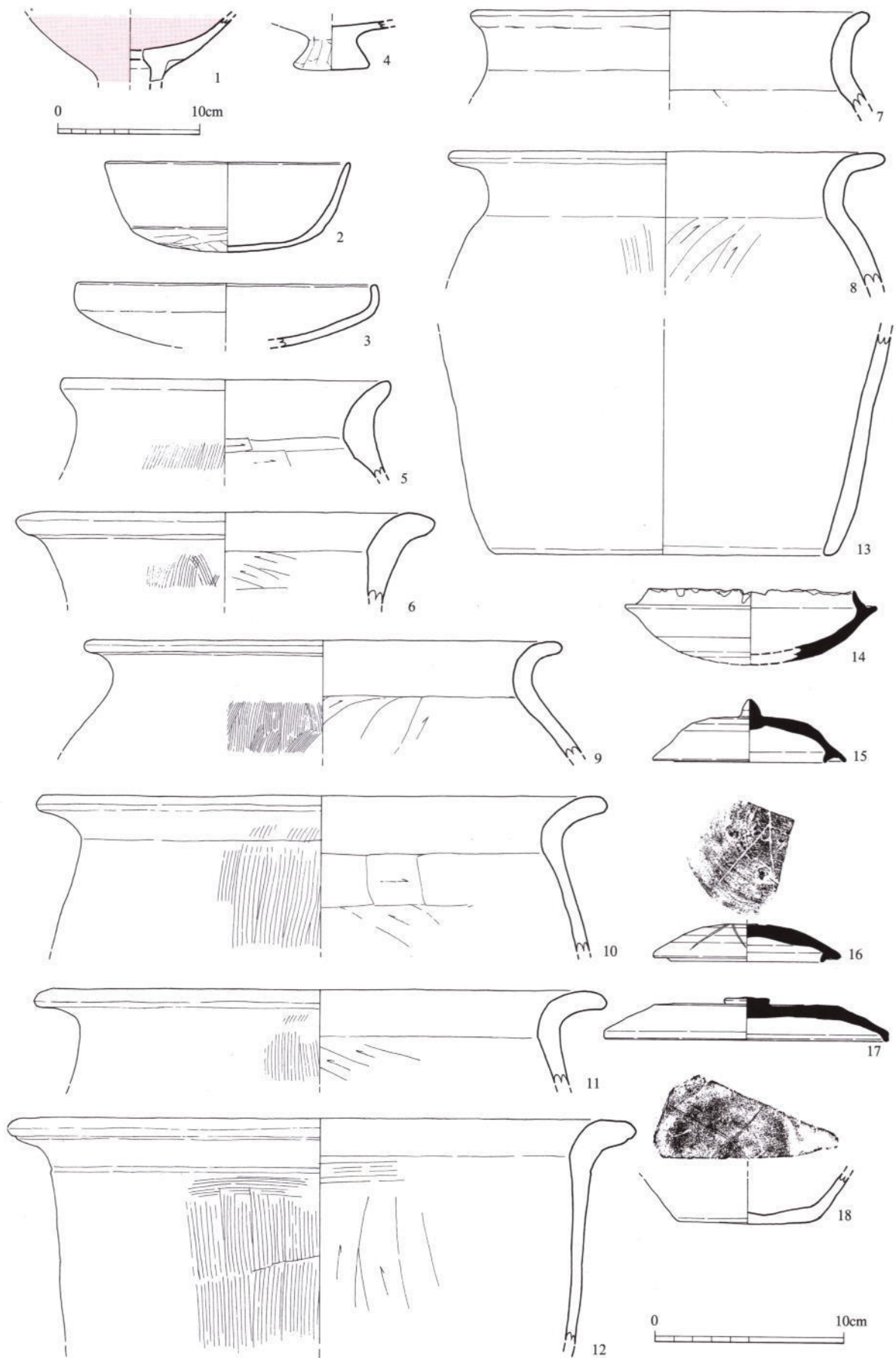
10は瓦器摺鉢体部片。内面にハケメ、摺目が残る。灰色～暗灰色を呈す。

11は青磁四耳壺肩部破片。肩部に凹線を巡らし、その直下に水平方向の橋形耳を貼付している。生地は砂粒の多い灰色で、釉は透明度の高い淡いオリーブ色を呈す。

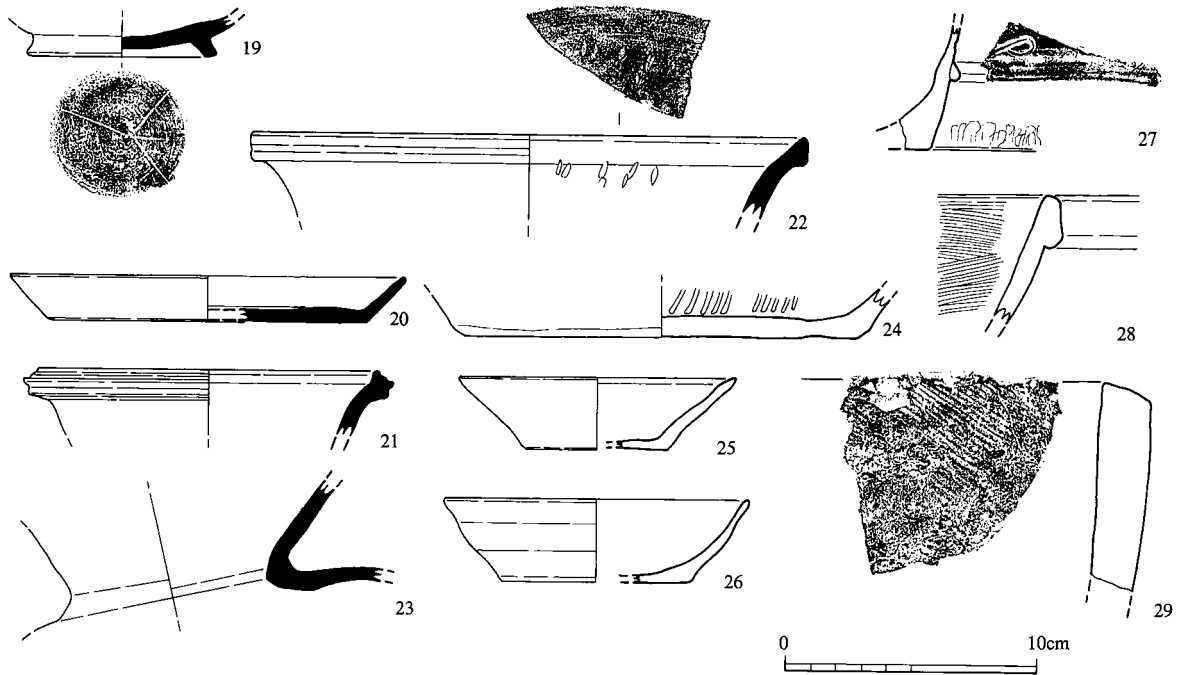
表採土器（図版43、第80・81図）

1は弥生土器高杯の杯部と脚部の接合部破片である。外面、杯内面は丹塗りを施している。杯部と脚部の境界をなめらかに仕上げるために、外面に粘土を貼付した様子が接合痕・剥離面から観察され、小片でも貴重な例である。橙褐色。

2～13は土師器である。2は杯で口縁部は外傾した底部と口縁部の境界に微かな段が生じている。全体的に摩滅が進行しているが、底部外面は手持ちヘラケズリの可能性がある。口径12.7cm、器高4.1cmを測る。3は口縁部が直立し、浅い器形の杯で、内外摩滅のため調整不明である。口径15.6cmを測る。4は特異な器形のもので、蓋撮み部の可能性もあるが、取りあえず鉢状の器形につく脚部ではないかと考えて図示した。全面をナデ仕上げするが、脚部外面には縦方向のナデの凹みがかすかに残る。裾径4.0cmを測る。5～12は甕口縁部である。5は器形は厚く、口縁が緩やかに外反する。口径17.0cmを測る。6・12は頸部のくびれがなく、厚い器壁で口縁部先端近くを急に外反させている。6は口径22.0cmを測る。12は口縁部下面が強いナデにより沈線状に凹み、頸部外面にも段が生じている。外面縦ハケ、内面ケズリ仕上げで、上部にはハケメも残る。口径29.4cm。7は直立気味に立ち上がり、先端へと緩やかに外反するもの。外面には化粧土を施した可能性がある。口径20.4cm。8は口縁部が大きく外反し、先端は水平面をなす。口径22.5cmを測る。9は頸部のくびれがつよく、口縁部が直立に近い角度で立ち上がり、大きく外反する。口径24.2cm。10は大きく口縁が外反し、外面に煤が付着する。口径29.4cmを測る。11は口縁部が強く外反し、端部が水平に近い面をなしている。口径22.7cmで外面には煤が付着する。13は甕裾部である。胴部は直線的に立ち上がり、



第80図 1区表採土器実測図 (1) (1は1/4、他は1/3)



第81図 1区表採土器実測図 (2) (1/3)

内外摩滅のため調整は不明。2~4・7・9・11・12外面・13は橙褐色、5・8~10は明褐色、6は褐灰色、12内面は灰黄褐色を呈す。

14~23は須恵器である。14は杯身である。立ち上がりは短く内傾しており、口縁部を打ち欠いている。灰色を呈し内面には自然釉が付着する。口径10.8cm、受部径13.3cm。15は宝珠撮み、返りのついた小形の蓋である。返りの立ち上がりは短く、口縁部と高さはほとんど差がない。天井部内面は宝珠撮みに対応して突出している。口縁部径10.0cm、返り径7.8cm、器高3.4cmを測り、灰色。16は返りのついた小形の蓋であるが、撮みはない。また、15と比べ低平な器形で、返りの突出は大きい。天井部外面はヘラ切り未調整であり、ヘラ記号が施される。口縁部径9.9cm、返り径7.9cm、高さ2.0cmを測る。灰色。17は口縁部が嘴状になる蓋。器形は低平で、低いつまみが付く。天井部の平坦になった範囲にヘラケズリを施す。口径14.9cm、器高2.3cmを測り、灰色を呈す。18は平底の杯である。内外摩滅が進んでおり、見込みにヘラ記号が施される。焼成不良で灰黄色を呈し、底径7.7cmを測る。19は高台付の杯底部片。高台は低い径は小さく7.5cmである。高台内はナデで仕上げた後、ヘラ記号を施す。内外暗灰色。20は平底の皿。口縁部は短く直線的に立ち上がり、底部外面は回転ヘラケズリの後、平行条痕が多数つく。灰色。21・22は壺・甕の口縁部である。21は外反させる口縁の上に断面三角形に突出させて、口縁部を拡張している特徴的な形態。口径13.4cmを測り、灰色。22は口縁部を肥厚させ、端面を沈線上に凹ませている。口径21.7cmを測る。23は平瓶頸部片。内外とも横ナデ仕上げで、灰黒色を呈す。

24~26・28は中世の土師質土器。24は摺鉢底部片で、内面に5条一単位とする摺目を施している。底径15.5cmで淡橙褐色を呈す。28は摺鉢口縁部片か。口縁部は粘土を折り返して断面三角形に肥厚させている。内面ハケメ、外面摩滅し、褐色を呈す。25は平底杯。口縁部は直線的に伸び、底部は小さく、外面に糸切り痕が残る。口径10.9cm、器高2.9cm、底径5.5cmを測る。褐灰色を呈す。26は口縁部がわずかに内湾気味に外傾し、内外を丁寧にナデで仕上げている。底部外面にはヘラ切り痕

が残る。口径11.9cm、器高3.3cm、底径7.4cmを測る。

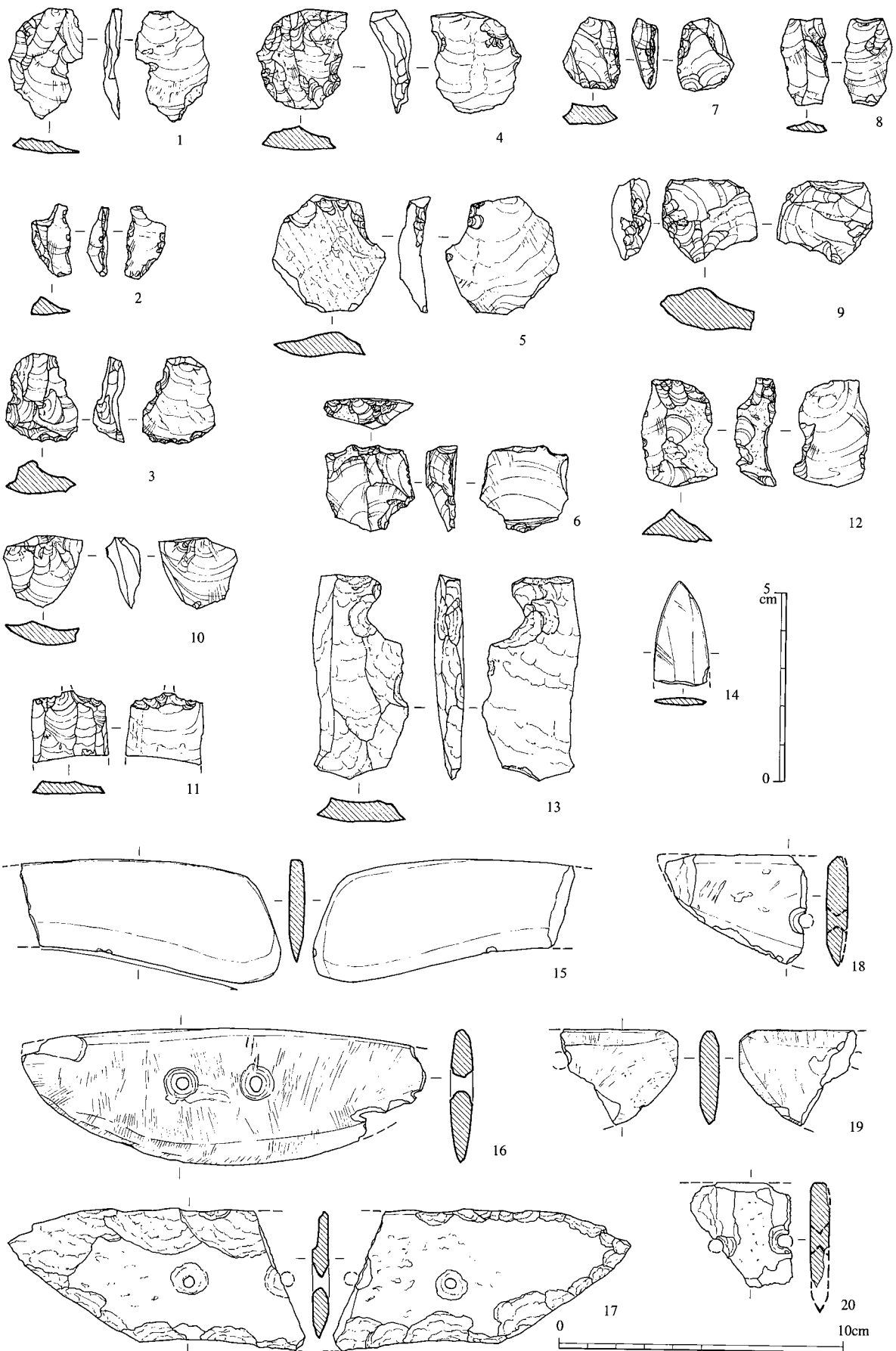
27は瓦器火鉢片で、下部が急に屈曲するようになっており、底部近くの破片と推測される。三角形突帯をめぐらし、その上方に∞字形のスタンプ文を施している。

29は端部を厚く断面方形に仕上げたもの。内面にハケメ状の条痕が残り、外面は摩滅のため調整不明である。あるいは平瓦の可能性もあるだろう。須恵質である。

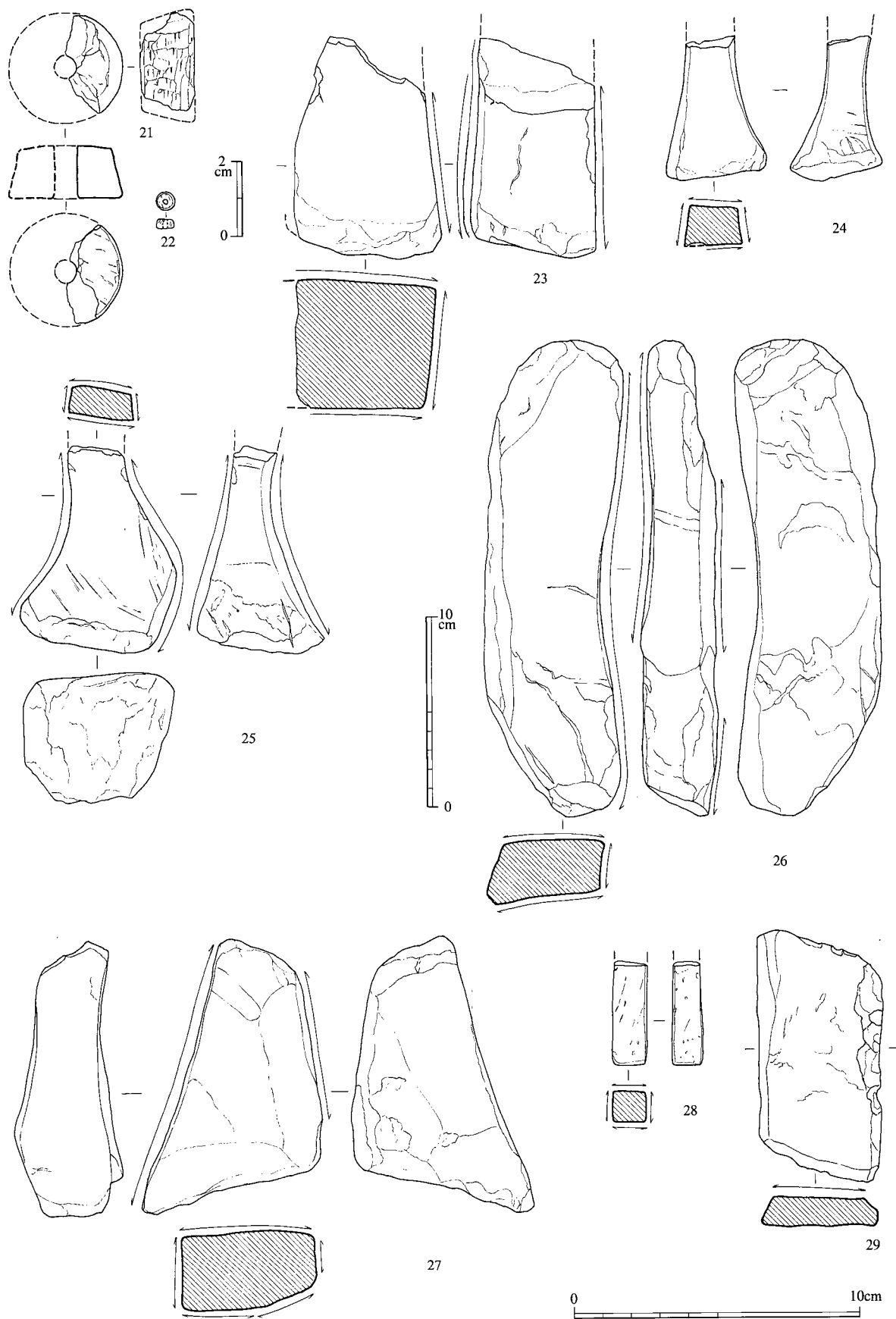
(5) 1区出土石器・土製品・金属器

1区出土石器・石製品（図版44～46、第138～140図）

1～12は黒耀石の剥片。1は第2面の8号溝から出土した。長さ3.0cm、幅2.0cmを測り、厚さ0.2cmと比較的、薄いものである。下部左側縁と上端に礫面を残し、左縁上部に不整方向の剥離が見られるが、微細剥離痕は観察されない。やや灰色がかかった漆黒の黒耀石。2は8号溝から出土したもの。長さ2.0cm、幅1.0cm、厚さ0.5cmの小形のもので、表裏いずれも上方から打撃を加え剥離している。上端の打点は折り取られ、左右側縁に微細剥離痕がある。漆黒の黒耀石で不純物、脈が目立つ粗悪な石材。3は1区2面11号竪穴住居跡から出土したものである。長さ2.15cm、幅1.9cm、厚さ0.7cmを測る。表裏とも上方から剥離しており、左、下は刃つぶし状の剥離を行っている。また、下縁は微細剥離も目立つ。漆黒で、不純物、脈が目立つ質の悪い石材。4は1区第2面から出土したもので、長さ2.6cm、幅2.4cm、厚さ0.6cmを測る。表裏とも主として上方から剥離しているが、左側縁、右下縁は刃つぶし状の剥離を行っている。上面も自然の礫面が一部に残っている。漆黒で不純物の多い粗悪な石材。5は第2面13号竪穴住居跡より出土したもの。長さ4.1cm、幅3.0cm、厚さ0.6cmを測る。表面には礫面をかなり残しているが、右側縁上部を刃つぶし状に剥離し、上端打点も除去されている。漆黒で脈のかなり発達した石材。6は7号溝より出土したもので、長さ2.2cm、幅2.3cm、厚さ0.8cm。表裏とも下方から剥離を行っている。上面は裏側から剥離し、平坦になるように加工し、右側縁、左側縁下部に微細剥離が少し見られる。透明度の高い灰黒色の黒耀石。7は第2面のピットから出土した。長さ1.8cm、幅1.5cm、厚さ0.7cmを測る。表裏とも各方向から剥片を剥離するとともに、下端は表裏から剥離し、鋭利にしている。右側縁は微細剥離が観察される。黒色で脈があるが、不純物は少ない。8は第3面13号溝より出土した。長さ2.3cm、幅1.2cm、厚さ0.2cmを測る小形で薄い剥片。表裏とも基本的に上方から剥離しているが、右側縁上部は右からの大きな剥離が見られる。右側縁を中心に微細剥離が見られる。9は第3面27号竪穴住居跡から出土した。長さ2.2cm、幅2.5cm、厚さ1.1cmを測る。裏面は上方から剥離するが、表面は下および左からの大きな剥離が見られる。また、左側縁下部は刃つぶし状に剥離を行っているが、使用に伴うような微細剥離は観察されない。10は1区3面18号竪穴住居跡貼床内出土の剥片。表裏とも上方から剥離しており、裏は上面の打点を除去している。微細剥離痕など無く、それほど使用されていないと考えられる。長さ1.85cm、幅2.0cm、厚さ0.8cmを測り、石材は不純物の少ない漆黒の黒耀石。11は第3面遺構面より出土したもの。表裏とも上下から剥離した薄い剥片の上部に、左右から挟りを加え、基部状に成形している。上端は折れて、欠損する。長さ1.7cm、幅2.0cm、厚さ0.25cmを測る。漆黒の黒耀石。12は表採品。表裏とも上方からの剥離を行ない、上端は折り取られている。上下にさらに刃つぶし状の比較的大きな剥離を行っており、表面右側には大きく礫面を残している。左側縁は微細剥離が目立つ。長さ2.8cm、幅1.8cm、厚さ0.9cmを測る。不純物をわずかに含むが、比較的良好の漆黒黒耀石。



第82図 1区出土石器・石製品実測図 (1) (1~14は2/3、他は1/2)



第83図 1区出土石器・石製品実測図(2) (22は2/3、26・27は1/3、他は1/2)

13は第3面遺構面から出土した安山岩の剥片。表裏と上方から剥離しており、右側縁上部は抉り状に整形しているが、微細剥離痕はさほど目立たない。長さ5.4cm、幅2.5cm、厚さ0.75cmを測る。

14は第3面29号竪穴住居跡から出土した石剣切先片。断面はレンズ状を呈し、刃部断面はそれほど鋭くない。長さ2.7cm、幅1.5cm、厚さ0.25cmを測る。砂岩。

15は第3面17号竪穴住居跡から出土したもので、石鎌基部片かと推測される。先端を欠損しており、残存長9.1cm、幅3.8cm、厚さ0.6cmを測る。下縁、図の矢印範囲を刃部としており、上縁は角張っている。片岩。

16～20は石包丁破片、およびその未製品である。16は22号竪穴住居跡出土品。右側縁をやや欠くが、ほぼ完存する。長さ14.2cm、幅4.8cm、厚さ0.8cmを測る。2個所に穿孔され、孔径0.4cm前後。表裏全面に上下方向の細かな擦痕が残る。粘板岩。17は片岩を使った石包丁未成品で、16号竪穴住居跡下層から出土した。上縁破損部付近に一部、研磨した痕跡が残るが、ほぼ外周全体を刃つぶし状に剥離したままで加工を中断している。穿孔部は1ヶ所完存するが、もう1ヶ所はほとんど残っておらず、孔径は0.3cm程。残存長10.4cm、最大幅4.7cm、厚さ0.6cmを測る。18は第2面1号掘立柱建物跡P5より出土したもので、端部～穿孔部の破片。残存長5.0cm、残存幅3.8cm、厚さ0.8cmを測り、輝緑凝灰岩製。19は第3面14号溝より出土した端部～穿孔部の破片。表裏に細かな擦痕を残している。残存長4.1cm、残存幅3.4cm、厚さ0.7cmを測り、輝緑凝灰岩製。20は第2面遺構面より出土した石包丁穿孔部付近の破片で、本来の形状をとどめるのは上縁のみ。厚さ0.7cmを測り、孔径0.5cm前後に復元される。頁岩製。

21は第2面遺構面出土の滑石製紡錘車の1/3強の破片。上面と下面を平滑に仕上げているが、側面はケズリの稜線を顕著に残している。高さ1.8cm、直径4.0cm、孔径0.8cmを測る。22は第2面13・14号溝上層包含層より出土した滑石製白玉。高さ0.25cm、直径0.45cm、孔径0.1cmを測る。半透明で薄いオリーブ色を呈する。

23～33は砥石である。23は第1面5号溝より出土したもので、細粒砂岩製の仕上げ砥か。上面、左側面は破損し、下面は未使用と思われるが、その他4面を使用している。残存長7.6cm、残存幅5.1cm、厚さ4.6cmを測る。

24は第2面遺構面より出土した細粒砂岩製の仕上げ砥。上部は欠損しているが、中央が細くなるまで使い込んでいる。下面は使用していない。残存長5.1cm、幅3.5cm、厚さ3.2cm。

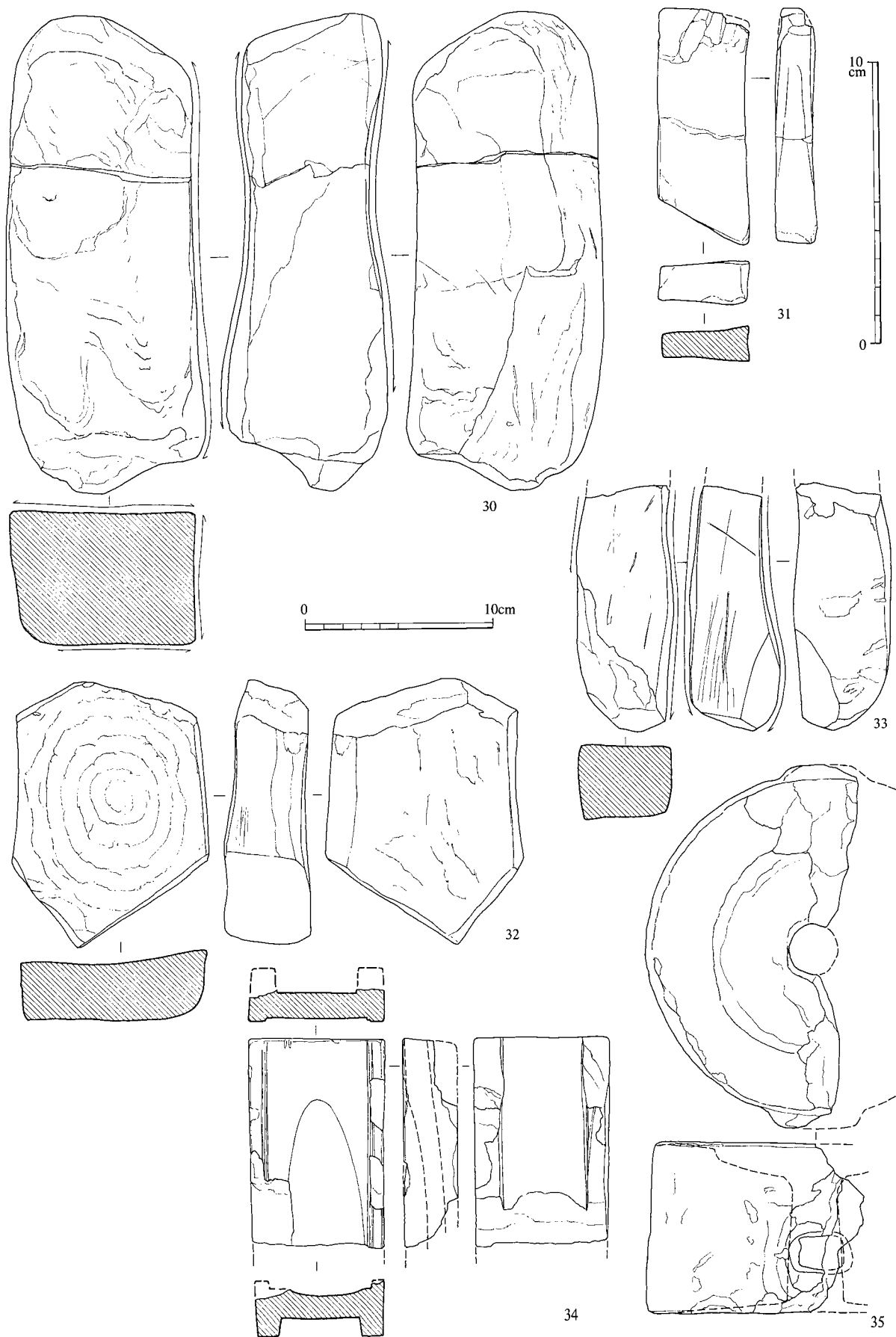
25は19号竪穴住居跡出土の細粒砂岩製仕上げ砥。上部を欠損し、下端小口面は使用していないが、その他の4面は良く使い込んで中央が細くなっている。残存長7.2cm、幅5.5cm、厚さ4.4cm。

26は第3面17号竪穴住居跡P2より出土した緑泥片岩製中砥。完存しており、長さ24.9cm、幅6.4cm、厚さ3.9cmを測る。上下面、左側面は未使用で、表裏、右側面の3面を使用している。右側面は仕上げ砥のような滑らかな面となっている。

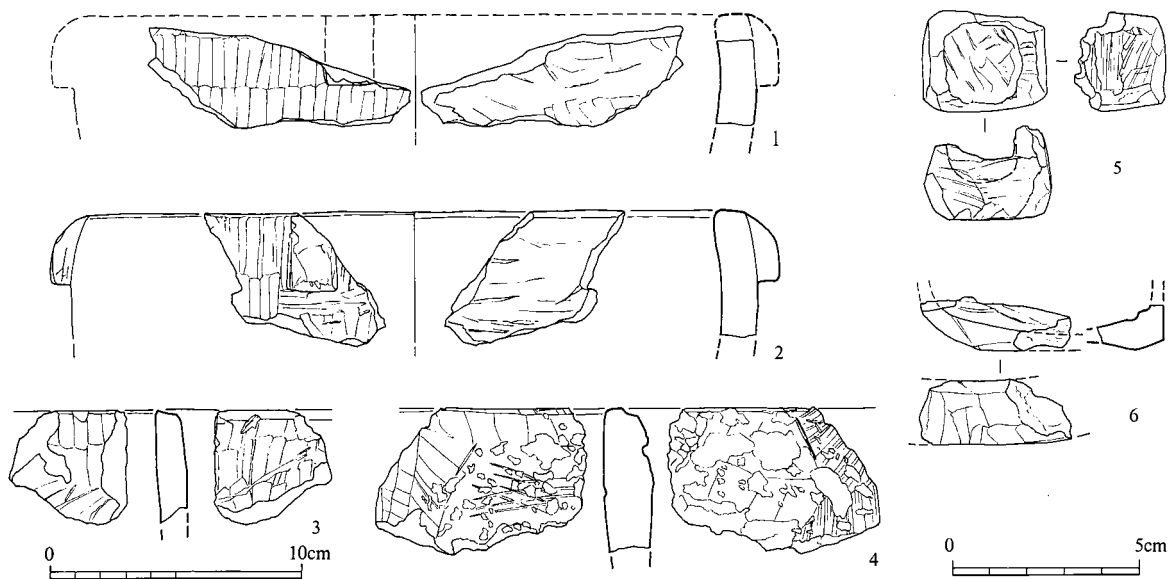
27は第3面16号竪穴住居跡P4より出土した砂岩製の粗砥。上下面を除く4面を使用しているが、いずれも粗雑で自然礫の形態をとどめた粗い面となっている。長さ14.5cm、幅9.5cm、厚さ5.7cmを測る。

28は第3面24号竪穴住居跡より出土した細粒砂岩製の仕上げ砥。上部は折れていると思われ、下端は使用していないが、残る4面は使用している。長さ3.6cm、幅1.2cm、厚さ1.1cmを測る。

29は第3面15号竪穴住居跡より出土したものの。平坦な板状片岩の上面を砥面として使用している



第84図 1区出土石器・石製品実測図 (3) (30・32・35は1/3、他は1/2)



第85図 1区出土滑石製容器実測図 (5・6は1/2、他は1/3)

が、他の面はほとんど使用していない。右側縁は平坦に粗く加工した後に粗雑な剥離を加えている。長さ8.9cm、幅4.2cm、厚さ1.0cmを測る。

30は第3面13号土坑から出土した大形の片岩製粗砥。各面の整形は粗雑で、自然面の凹凸の痕跡をなおとどめているが、上面、下面、左側面を除く3面を使用している。長さ25.4cm、幅10.4cm、厚さ8.5cmを測る。

31は第3面30号竪穴住居跡から出土した白色の細粒砂岩製仕上げ砥。平面平行四辺形に近い板状をなしており、6面全てを使用している。長さ8.4cm、幅3.2cm、厚さ1.5cmを測る。

32は第3面13号土坑から出土した平面六角形板状の片岩製砥石で、各面を全て使用している。特に上面は皿形に凹むように使用している。長さ14.1cm、幅10.4cm、厚さ4.4cmを測る。

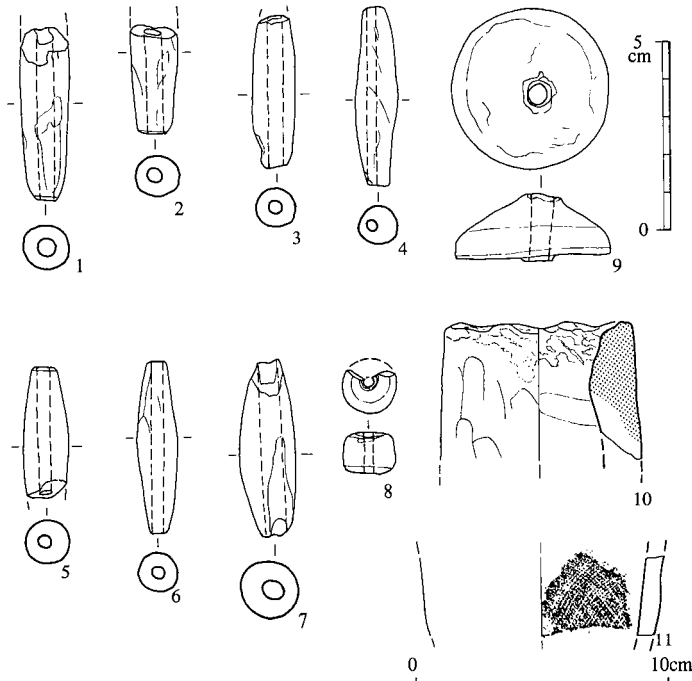
33は第3面14号溝から出土した比較的良好の細粒砂岩製仕上げ砥。上端は欠損しており、下端は剥離等で丸みを帯び使用していないが、表裏、左右側縁の4面を使用している。長さ8.8cm、幅3.4cm、厚さ3.2cmを測る。

34は第1面1号溝より出土した薄い小豆色の赤間石製硯破片。陸～海の一部が残る上半部破片で、側縁が表裏に突出している。上面の側縁突出部は頂部がほぼ平坦であるが、内側よりにかすかな段を作っている。長さ7.4cm、幅4.8cm、厚さ1.9cmを測る。

35は第1面1号溝より出土した凝灰岩製石臼である。現状では1/2強の破片となっており、直径18.0cm、孔径2.5cm、高さ9.1cm、表裏とも中央に向かって凹んでいる。また下部近く2方向に断面2cm大方形で、深さ3cm程の孔を穿っている。

1区出土滑石製容器 (図版47、第85図)

1～4は滑石製石鍋口縁部片である。1・2はいずれも口縁部に方形の突起を付けたもので、ともに器壁が1.5cm前後と厚く、端部が角張っている。両者直径30cm弱と復元したが、何分小片であり不安が残る。1外面は調整が丁寧であるが、内面は粗い。2は内外とも丁寧な調整である。1は第1面ピ



第86図 1区出土土製品・製塩土器実測図 (10・11は1/3、他は1/2)

ットより、2は第2面遺構面より出土した。3は第1面1号溝より出土した口縁部小片。内外とも仕上げは粗い調整である。4も口縁部小片で、気泡の多い粗雑な暗灰色石材を用いている。器壁は2.0cm前後と厚く、内外の調整も粗雑である。左側側縁は破面に対して斜め方向のケズリを加えて再加工を行っている。第2面ピットから出土した。

5は上面観が3.3cm×2.7cmでほぼ丸方形をなす小形の容器。口縁はかなり破損が進んでおり、残りの良いところで高さ2.4cmとなる。内側の彫り込みは半球形を呈している。灰色で不純物・脈を含んだ石材を使用している。第1面のピットから出土した。

6は第2面8号溝より出土した小形容器の小片。残存部から見て上面観が舟形あるいは隅丸方形をなす容器の縁部分の破片と考えられる。高さ1.8cm、残存長4.0cmを測る。

1区出土土製品・製塩土器 (図版47、第86図)

1～7は管状の土錘である。1は第1面1号溝出土で残存長4.6cm、最大径1.3cm、孔径0.5cmを測る。淡褐灰色。2は第1面ピット出土で残存長2.9cm、最大径1.3cm、孔径0.4cmを測る。淡橙褐色。3は第2面ピット出土で残存長4.0cm、最大径1.15cm、孔径0.4cmを測る。褐灰色。4は第2面ピット出土のほぼ完形品で長さ4.7cm、最大径1.1cm、孔径0.25cmを測る。淡橙褐色。5～7は表採品である。5は残存長3.4cm、最大径1.25cm、孔径0.3cmを測る。淡橙褐色。6はほぼ完形品で長さ4.5cm、最大径1.05cm、孔径0.3cmを測る。淡橙褐色。7は上端、下端をわずかに欠損するが、ほぼ完形品で長さ4.7cm、最大径1.5cm、孔径0.5cmを測る。淡褐灰色。

8は第3面10号溝から出土した丸玉。3/4周程の破片となっており、直径1.4cm、高さ1.1cm、孔径0.25cmを測る。淡褐色を呈す。

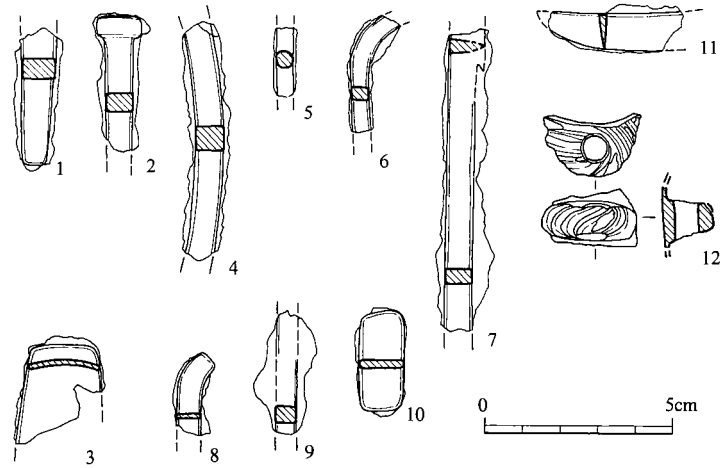
9は22号縦穴住居跡の覆土出土の土製紡錘車。中心部に向かって高くなり、裏面は孔の周囲以外は平坦に整形されている。直径4.1cm、高さ1.8cmを測り、明褐色。

10は第1面1号溝から出土した轡羽口口縁部片である。口縁部に向ってわずかにすぼまり、口縁端部内外には鉄滓が付着している。また、割れ口を見ると口縁部近くの器壁が灰色に変色する様子が観察でき、実測図では断面網かけ部として図示した。孔径7.0cmを測り、高さ1.8cm、孔径0.5cm。胎土が粗く淡橙褐色を呈す。

11は第1面1号溝から出土した土器片で、内面に布目が残ることから製塩土器体部片となるか。外面は二次加熱を受けたためか器表が荒れている。

1区出土金属器（図版47、第87図）

1～11は鉄器である。1は第1面4号土坑から出土した棒状の鉄片。錆が厚いため側縁の形態や下端が残存しているかどうか不安である。残存長3.7cm、幅0.9cm、厚さ0.5cm前後。2は第1面のピットより出土したもので、上部が一回り大きくなることから釘となるか、残存長3.5cm、上部幅1.1cm、下部幅0.7cm、厚さ0.5cmを測る。3は第1面1号溝より



第87図 1区出土金属器実測図（1/2）

出土した板状鉄片。上部が隅丸方形を呈し、下方へと側縁がわずかに広がっている。また、上面がわずかに突出している。現存長2.6cm、幅2.0cm、厚さ0.2cm。4は第2面遺構面から出土した断面方形の棒状鉄器の破片。外形は錆が厚く不明な部分が多いが、現状では長さ6.3cm、幅0.7cm、厚さ0.65cmを測る。5は第2面のピットより出土した断面円形の棒状鉄器破片。現存長1.85cm、断面径0.45cmを測る。6は第2面ピットより出土したもので、錆が厚く形態には不安が残るが、途中屈曲した断面長方形の棒状鉄器破片と考えられる。現存長3.2cm、幅0.5cm、厚さ0.3cmを測る。7は第2面遺構面から出土したものである。先端部分は錆が厚いが、茎部、切先の折れた片刃の長頸鏃になるとと思われる。現存長8.0cm、鏃身部幅0.9cm、鏃身部厚さ0.4cm、頸部幅0.7cm、頸部厚さ0.4cm。8は第2面11号竪穴住居跡より出土した細長い板状鉄片。上端は本来の形をとどめている可能性があり、わずかに屈曲している。下端は折れている。現存長2.15cm、幅0.65cm、厚さ0.1cm。9・10は第2面P128から出土した。9は断面が1片0.5cm程の方形の棒状鉄器で、上下とも折損している。現存長3.3cm。10は平面隅丸長方形の鉄片である。ほぼ本来の形をとどめているが、刃部、孔などは見られず用途は不明。長さ2.7cm、幅1.2cm、厚さ0.2cmを測る。11は第3面15号竪穴住居跡から出土した刀子切先部近くの破片である。先端近くはゆるやかに上方に屈曲している。現存長3.65cm、幅0.9cm、厚さ0.2cmを測る。

12は第1面1号溝から出土した青銅製で容器の耳の破片と思われる。断面形から見て、耳は恐らく容器の胴部等に水平方向に取り付けられていたと思われる。耳の中央には直径0.6cmの垂直方向の孔があり、表面には孔をほぼ中心にする渦巻き状の彫りの深い線刻が施されている。耳部幅2.6cm、厚さ1.0cmを測る。

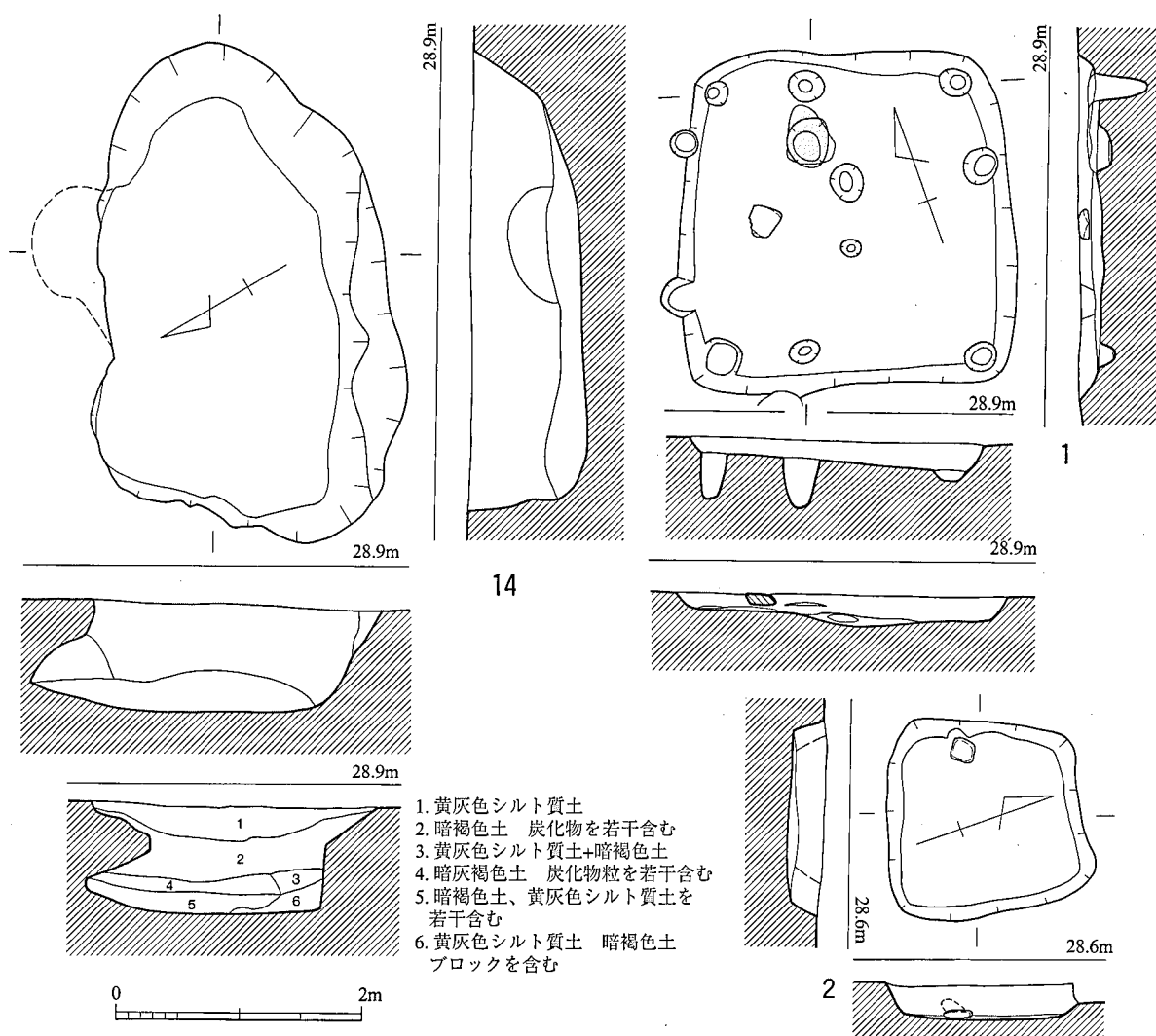
3. 2区の検出遺構と遺物

(1) 第1面の遺構と遺物

2区第1面の調査は、平成9年（1997）5月9日からバックホーによる表土除去作業を開始し、同月19日より作業員による手作業での遺構検出・掘り下げ作業に着手した。途中、梅雨の時期を挟み作業は思うように進展しなかったが、8月18日に全ての作業を終了した。

1面遺構面と現在の地表面との比高差は0.2～0.5m程であり、近代のゴミ穴かと考えられる攪乱が調査区内の数ヶ所で認められ、殊に西南部の規模の大きな攪乱からは大量の近代の陶磁器類が出土した。

また、遺構検出作業段階に調査区南側の20ヶ所以上で、円形あるいは隅丸長方形の土坑状のものを検出したが、掘り下げたところ何れも深さ0.1m以下程度のもので、遺構というよりもむしろ地形の窪みというべきもので、ここでは遺構としては取り扱わない。調査区内では、先述した近代の攪乱以外には近世以降の遺構・遺物は検出されておらず、第1面はほぼ中世の生活面であったと考えられる。



第88図 14号土坑・1・2号縦穴状遺構実測図（1/60）

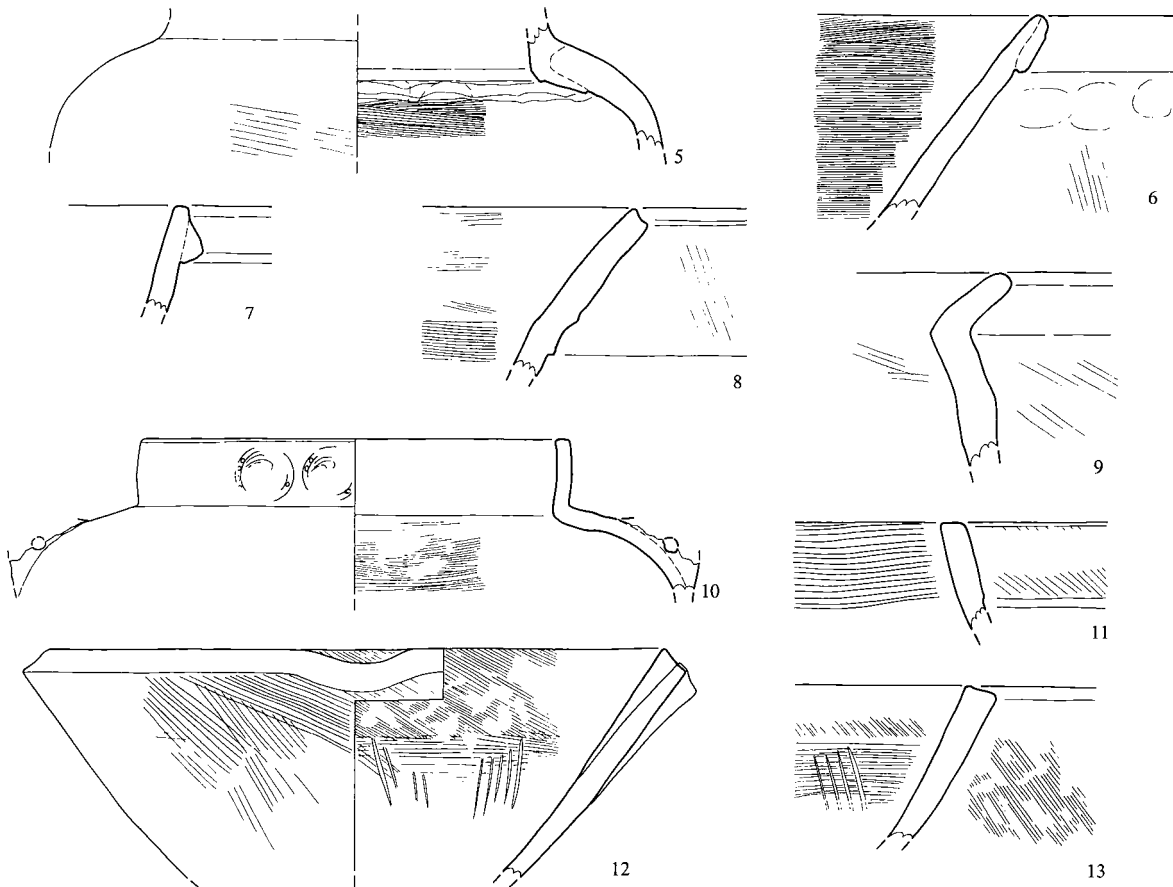
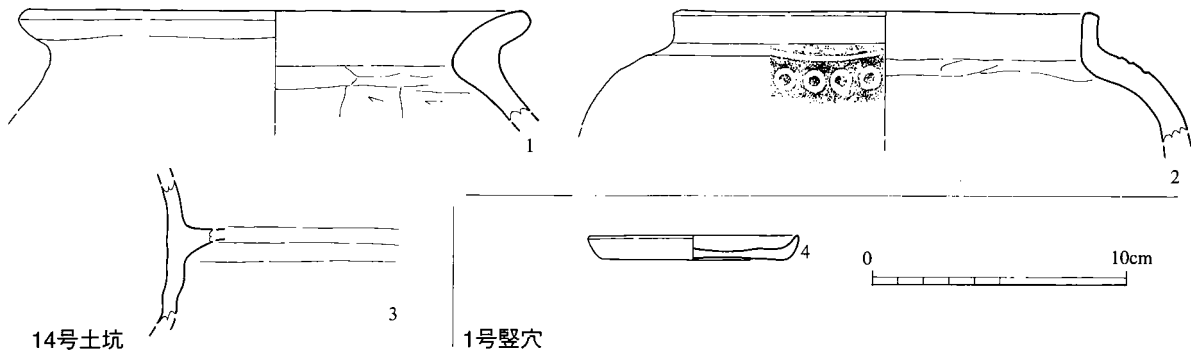
a. 土坑

14号土坑 (図版48、第88図)

調査区東端部に位置する。平面形は平行四辺形に近い不整形で、上部で最大長3.8m、最大幅2.55m。底部では長さ3.25m、幅1.85mであるが、北西部の一部をさらに深さ約0.7m、幅約0.9mの平面半円形に、狸掘り状に土坑下位だけ挟って横方向に掘り込む。かなり大形の土坑であるが、形状が不正形であること、地山土の黄灰色シルト質土が埋土上層に堆積していたことから、人為的な遺構というよりも倒木痕等である可能性が高い。

出土土器 (第90図1~3) 1は土師器甕。器壁は頸部で肥厚し、屈曲して口縁部が短く開く。胴部内面は横方向のヘラケズリ、その他はヨコナデ調整。復元口径20.0cm。

2・3は瓦質土器釜。2は体部が丸みを持ち、口縁部が直立する。肩部の口縁部との境近くに沈線



第89図 14号土坑・1号壺穴状遺構・2号集石遺構出土土器実測図 (1/3)



第90図 2号集石遺構実測図 (1/60)

を巡らし、直下に竹管文を丁寧に並べて押印する。復元口径16.6cm。3は体部の鏝部分だが、先端部は欠失する。外面の鏝以下の部分は火を受けており、煤が付着する。内面も鏝の位置を境に下部には付着物が認められる。

b. 竪穴状遺構

1号竪穴状遺構 (図版48、第88図)

調査区中央やや東寄りにある。平面形は隅丸正方形で、一辺2.7m、深さ0.15～0.25m。遺構の四隅にはそれぞれピットがあるが、深さわずか5cmのものもあり、柱穴とするにはやや無理がある。遺構の底部北寄りに0.4×0.35m、深さ0.1mのピットがあり、上面に炭化物が薄く堆積する。また、底面西側には径25cm、厚さ10cmの扁平な川原石1個が置かれる。

出土土器 (第90図4) 4は土師器皿で、底部は糸切り。口径8.3cm、器高1.0cmを測る。

2号竪穴状遺構 (図版49、第88図)

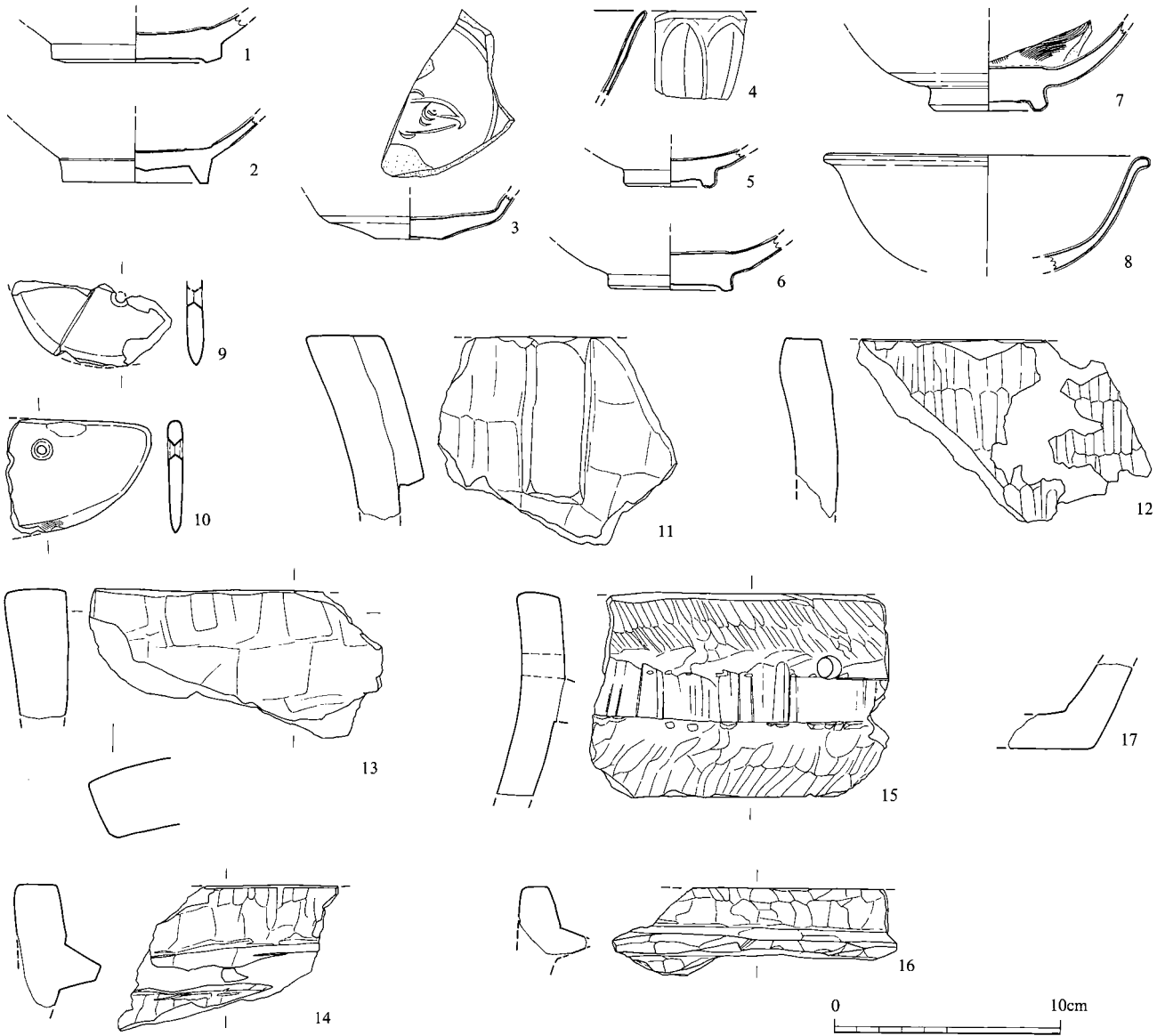
調査区西端部に位置し、近代の攪乱によって切られる。平面形は正方形に近い隅丸台形で、南北方向1.6m、北辺1.2m、南辺1.6m、深さ0.3m。底面西壁に接して径20cm、厚さ5cmの扁平川原石1個が置かれる。遺物の出土はない。

c. 集石遺構

2号集石遺構 (図版49、第89図)

調査区北西端部にある。中央部が近代の攪乱によって破壊されているが、径10～50cmの自然石が、長さ6.8m以上、最大幅1.1mの範囲で、北東-南西方向の溝状に集合した状態で検出した。遺構は、さらに北および西側の調査区外に延びているものと考えられる。平面的には確認できなかったものの、溝の一部である可能性も考えて、北東端部付近の一部を断ち割って、断面の状態を確認した。その結果、水平に堆積した層位を確認したのみで、溝の立ち上がり等は認められなかった。また、集石より下層でも遺物が出土したが、これらは第1面と第2面間の遺物包含層と考えられる。

出土土器 (第90図5～12) 5～8は土師質土器。5は釜。体部は丸みをもち、屈曲して口縁部が立ち上がる。口縁部と体部の境で両者を接合しており、一部で剥離して接合を強化するためのキザミが観察できる。肩部内面には接合の際の指ナデの痕跡が明瞭に残る。体部外面には粗いハケメがわずかに、内面は細かいハケメが残る。6～8は鉢。6・7は口縁部外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。8は外面に段を有する。3点とも内面は横方向の細かいハケメ調整、6・8の外面は縦方向の粗いハケメの後ナデ。外面は火を受けて黒く変色している。



第91図 第1面陶磁器・石器・石製品実測図 (1/3)

9～13は瓦質土器。9は鍋か。器壁は厚く、「く」字に屈曲して口縁部が開く。内外面とも斜め方向の粗いハケメの後ヨコナデ・ナデ調整。10は釜で、器壁が薄く、作りも丁寧である。丸みをもつ体部に直立する口縁部が付き、肩部には径0.7cmの孔を穿った耳を付す。口縁部外面には三つ巴文と考えられるスタンプを押印する。わずかな破片であるが、復元すると口径16.8cm。11は鍋か。口縁部は内傾し、端部は四角く仕上げる。また、口縁部下に沈線がめぐり、この下部が屈曲する可能性がある。内面は横方向のハケメ調整、外面は斜め方向のハケメの後ナデ調整。12・13は摺鉢。12は内面に5本前後の筋目を入れる。13の筋目の単位は不明。12は片口が一部残存する。2点とも内外面ハケメ調整。

d. 1面出土の特殊遺物

陶磁器 (図版65、第91図1～8)

1・2は白磁碗。1は内面の底部と体部の境に沈線を有し、この部分できれいに割れている。高台

内部の削り取りがわずかで、結果的に底部が厚くなる。釉は乳白色で、高台周辺以外に施釉する。高台径7.5cm。2は高台を比較的高く作る。釉は灰白色で、高台周辺以外に施釉し、見込は蛇の目釉剥ぎ。高台径6.4cm。

3は青磁皿で、底部が小さく、底部と体部の境で屈曲して立ち上がる。見込に片彫りで魚文を描く。釉は淡緑色で、底部以外に施釉。底径2.9cm。

4～8は青磁碗。4は器壁が薄く、口縁部でわずかに開く。体部外面に鎬蓮弁文様を有する。釉は淡緑色。5は小形の高台を有し、釉は灰緑色で、高台外面にまで施釉する。高台径4.1cm。6は高台内側の削り出しが少なく、底部が厚い。釉はオリーブ色～灰緑色で、高台外面にまで施釉。高台径5.7cm。7は高台の削り出しが浅く、底部が厚い。体部内面にへらおよび櫛状工具で施文する。釉は灰緑色で、高台内側を除いて施釉する。高台径5.3cm。8は体部に丸味をもち、口縁部が如意形に小さく開く。釉は灰緑色で、全面に貫入が入る。復元口径14.4cm。

石器（図版65、第91図9・10）

9・10は石包丁で、2点とも過半部を欠失している。9は片岩、10はいわゆる輝緑凝灰岩製。

石製品（図版65、第91図11～16）

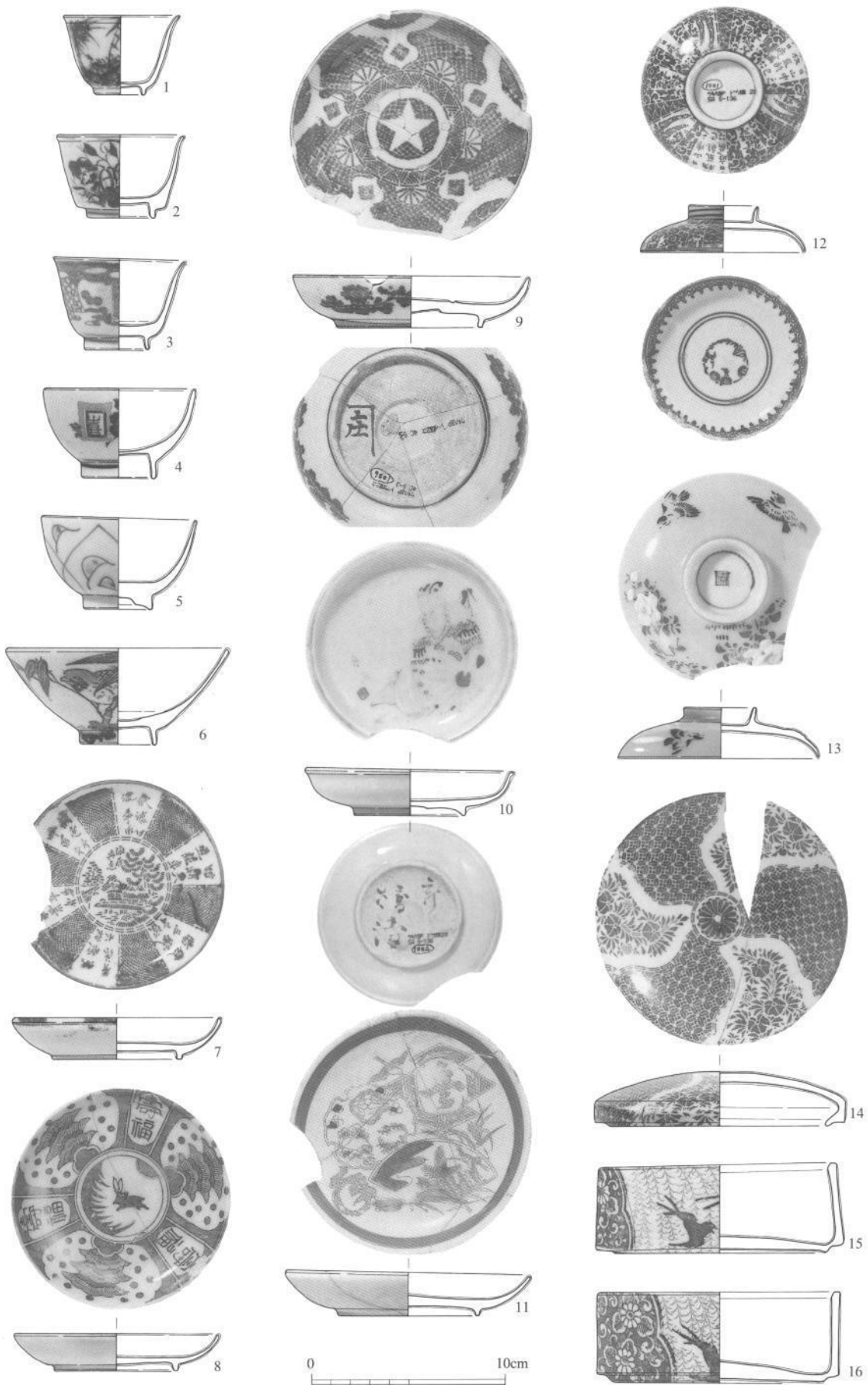
11～16は滑石製石鍋。11～13は縦耳型のものと考えられ、11には耳が残存する。11・12は口縁部が内傾し、13は内傾がわずかで直立して口縁部内側を肥厚させる。12は縦方向の細かいノミ状工具痕が明瞭に残る。13は破損面の一部に再加工の削りの痕跡がある。11・12は外面口縁部付近まで煤が付着する。14～16は口縁部下に鏝が巡るタイプ。14・15の鏝以下の部分には煤が付着している。3点とも再加工の痕跡が残る。14は内面から下部にかけて削る。15は穿孔して、鏝を削り取り、周囲の破損面も削り整えようとした痕跡が残る。16は破損面と、内面から下部にかけて、さらに鏝の先端部分も削り取っている。

e. 2区出土近代遺物

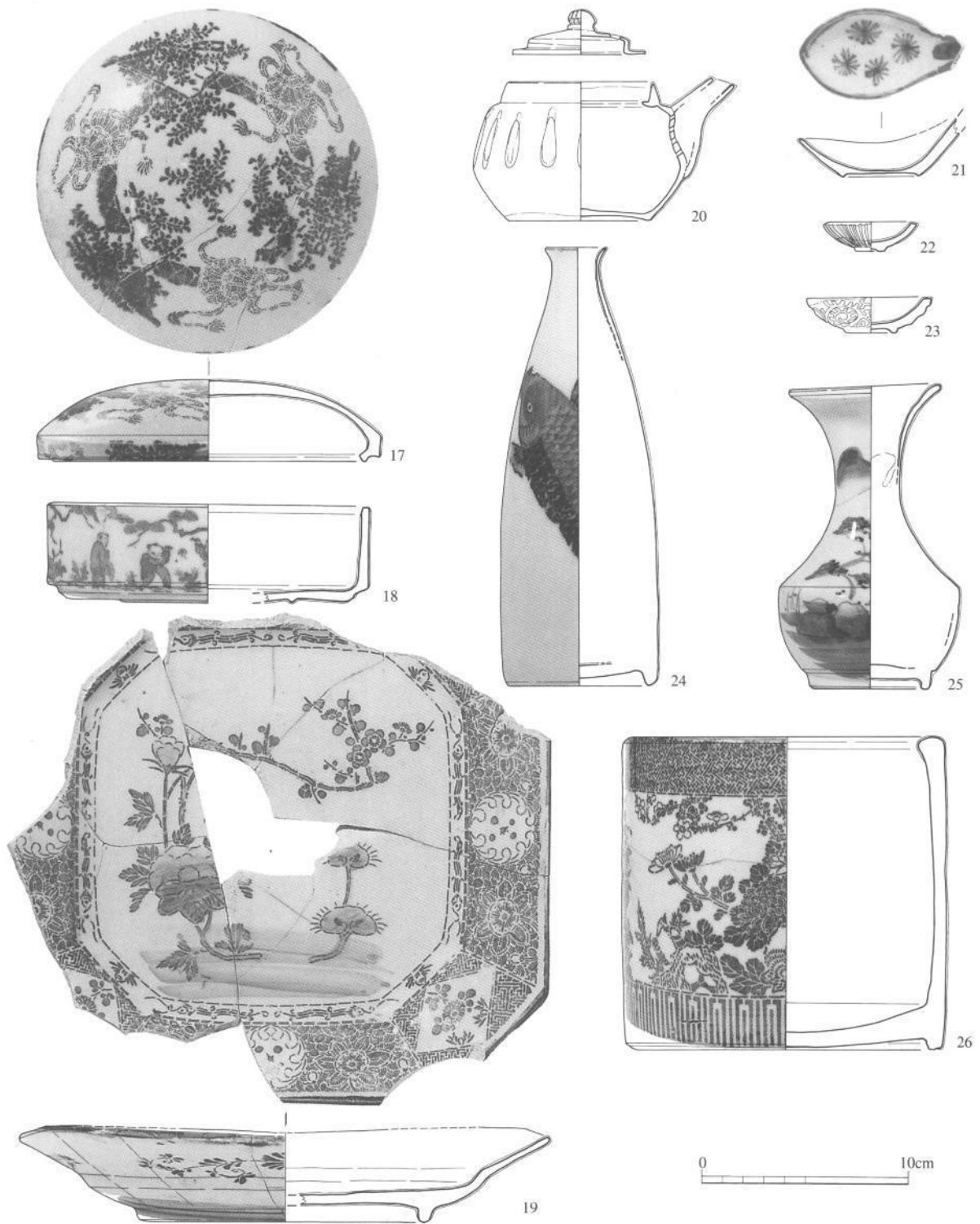
今回調査した1面目の遺構面は、現在の地表面からわずかに0.2～0.5mの深さにある。表土を除去した段階で、明らかに新しいと考えられる埋土の、かなり規模の大きな不整形の掘り込みが数箇所検出された。手作業で掘り下げたところ、埋土中から近代の陶磁器類、瓦等が出土した。このうち調査区西寄りにあるものは、長軸5.8m、幅4.1m、深さ1.9mの大形楕円形土坑状の掘り込みから、さらに南側に溝状に連続して別の土坑状の掘り込みと接続しつつ南側調査区外にまで延びた大規模なものである。埋土中からは大量の陶磁器類が出土した。

掘り込みはいずれも不整形であること、埋土の状況から人為的に埋めたことがうかがえること、埋土中から破損した陶磁器類や瓦等のいわゆるガラクタが出土すること等から、近代のゴミ穴である可能性が高い。以前この地に某資産家の別荘があったとの話も聞いた。建物の基礎等は検出されなかったが、深く掘削したゴミ穴だけが遺存したものか。

近代期の遺構・遺物について、文化財として取り扱うかについては意見の分かれるところであろうが、ここでは文化財とはせず単に攪乱として取り扱った。しかしながら出土した陶磁器類等が大量であるため、参考のためその一部についてのみ報告する。



第92图 2区近代遺物実測図(1) (1/3)



第93図 2区近代遺物実測図 (2) (1/3)

出土遺物 (図版65~71、第92~96図) 1~26は磁器。1~3は盃で、口径6.0~6.8cm。器高4.1~4.7cm。1・2は体部下半を数箇所押さえて面を作る。3点とも染付で、1は竹、2は草花と鳥、3は壺に青海波文で、描かれた壺が様々な文様をもつのが興味深い。3文様が重なった部分があり、銅板転写等の印判手である。

4・5は大きさから湯飲み椀とすべきであろう。口径7.8~8.0cm。、器高4.6~4.7cm。4は3箇所額

に書かれた「壽」、「福」、「喜」の吉祥字を配置し、それぞれ桜、菊、牡丹の花を添える。文字と花卉を染付で描いた後、額、茎葉、花心を緑、茶金で描く。5は染付で花卉に葉を幾何学的に描いた後、葉には茶で色付け、青磁釉を掛ける。

6は染付椀。内面見込部分には蛇の目釉剥ぎをおこない、外面の文様は竹に雀の印判手。口径11.5cm、器高5.0cm。

7～9は染付小皿。7・9は型紙摺り、8は銅板転写等の印判手。7は中央円内に樹に囲まれた家屋、周囲の区画間には漢詩と刺子文を交互にあしらう。8は中央円内に月と兎、周囲の区画間には壽福と松葉を交互に配置する。9は中央に☆、周囲にも幾何学文を円形に配置する。☆の周囲5箇所にはハリ支え痕が残る。外面にも花文をあしらひ、底部には田の墨書がある。

10・11は色絵皿。10は葉団扇を持った人物とカシオペア座、「朱武」の文字を、黒、赤、緑、青、肌色、金等多彩な色を使用して描く。底部には朱で種子「亭？」と「橋浩」の文字が書かれる。口径10.8cm、器高2.5cm。11は赤の細線で吉祥図柄を描き、一部赤と緑で色付けする。口径12.6cm、器高2.2cm。

12・13は蓋。12は内外面型紙摺の染付で、外面は細かく区画した間に漢詩、花、幾何学文を描く。内面は中央に樹竹花、周囲は瓔珞文。口径8.7cm、器高2.4cm。13は外面に青磁釉を掛け、型紙摺で雀と花を黒、緑で、花卉は白色で厚く半立体的に描き、花心を桃で色付ける。口径10.3cm、器高2.6cm。

14～18は段重。14～16は小振りなタイプで、14の蓋は中央の菊花と周囲の七宝文を呉須で、花文を緑で描く。口径13.0cm、器高2.9cm。15・16は同じ模様をもつセットで、区画間の花文と燕を呉須で、柳葉を茶色で描く。口径12.2～12.5cm、器高4.6～4.7cm。17・18は大振りなタイプ。17は型紙摺で、枝葉に扇、違枳文を呉須で、葉団扇を緑で描く。側面にも同様の文様が描かれる。口径16.6cm、器高3.9cm。18は単色染付で松に唐子を描く。口径15.7cm、器高4.8cm。

19は八角形の染付大皿。内外面に型紙摺で花文を描き、見込中央部分のみ一部筆で塗る。復元口径25.7cm、器高4.4cm。

20は急須で、胎土が灰色で透明釉を掛けるため、見た目は陶器に近い。器壁は薄く、体部外面の周囲を工具で縦方向に削り取り、この部分を白で着色して装飾とする。口縁部7.0cm、最大径10.5cm、器高6.7cm。蓋は口径6.5cm、器高2.2cm。

21は散り蓮華。先端部が尖り気味で、外面に稜をもつ。内外面呉須で文様を描く。

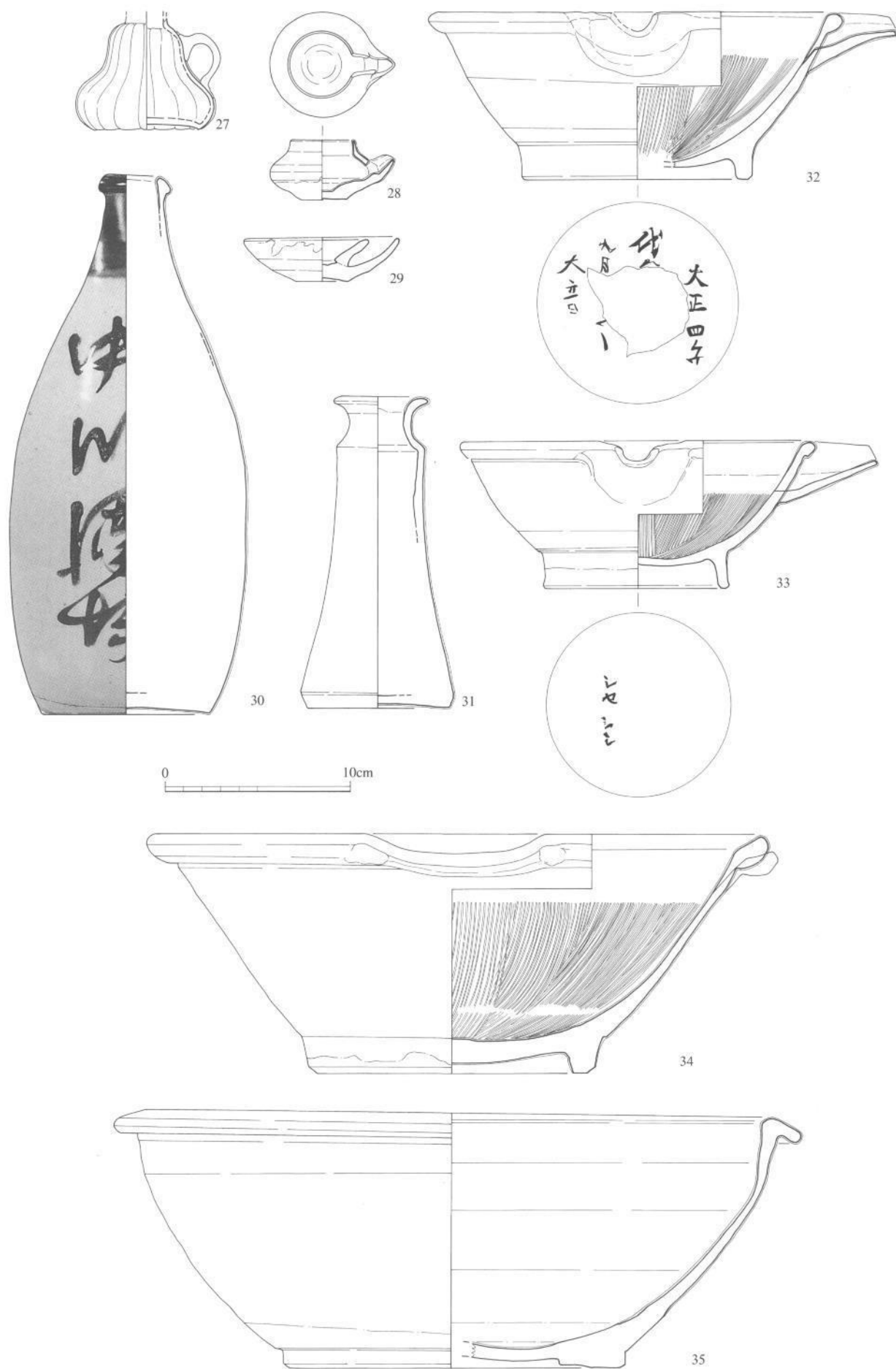
22・23は紅皿。2点とも型押し成形で、22は貝殻文、23は蛸唐草文、内面のみに透明釉を掛ける。22は口径4.6cm、器高1.4cm、23は口径6.1cm、器高1.7cm。

24は瓶。器高が高く、体部はわずかな膨らみをもって直線的に立ち上がり、口縁部が小さく開く。体部外面に呉須で鯉を描き、腹と鰭を茶で着色する。口径3.1cm、器高21.2cm。25は染付花生。肩部に稜をもって屈曲し、弧を描いて頸部が締め、口縁部が大きく開く。頸部から体部外面に山、水、土坡に松等の風景を、余白を生かして描く。口径7.4cm、器高14.8cm。

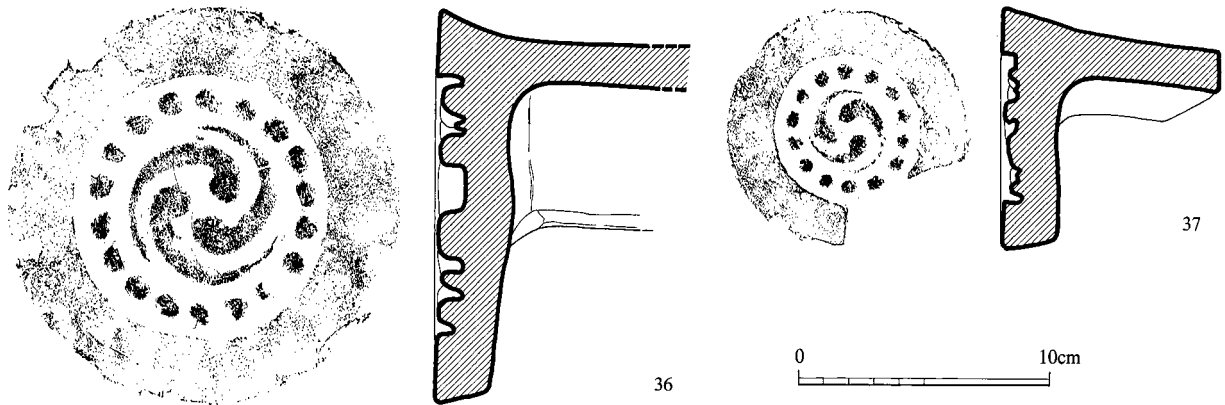
26は染付火鉢。寸胴形で口縁部は内面を肥厚させて丸く納める。外面には型紙摺で、上下に幾何学文を配して間に花鳥を描き、口縁部上面には刷毛で呉須を塗る。口径15.5cm、器高15.2cm。

27はガラス製豆ランプ。型作りで、器壁は薄く、一方に耳を取り付ける。ガラスは青味がかかる。

28～35は陶器。28は片口の付く扁平な小型壺形の容器であるが、片口の上が切れている。灯火具



第94図 2区近代遺物実測図 (3) (1/3)



第95図 2区近代遺物実測図 (4) (1/3)

ではないか。内面と外面上半部に鉄釉を掛けるが、風化が激しい。口径3.6cm、体部最大径5.7cm。器高3.2cm。

29は灯明皿。体部は内彎気味に立ち上がり、内面のみ鉄釉を掛け、外反する受け皿を接合する。口径8.3cm、器高2.3cm。

30は通徳利。口径部に鉄釉を掛け、体部に同様の釉薬で「中川酒場」、「美保松」、「イ三十五号」の文字を流麗に書き、さらに全体に透明釉を掛ける。口径4.0cm、器高29.1cm。

31は瓶。体部は直線的に立ち上がり、肩部で屈曲して短い口頸部が付く。体部に鉄釉、肩部に長石釉、口頸部に鉛釉の3種の釉薬を掛ける。口径5.1cm、底径7.7cm、器高16.8cm。

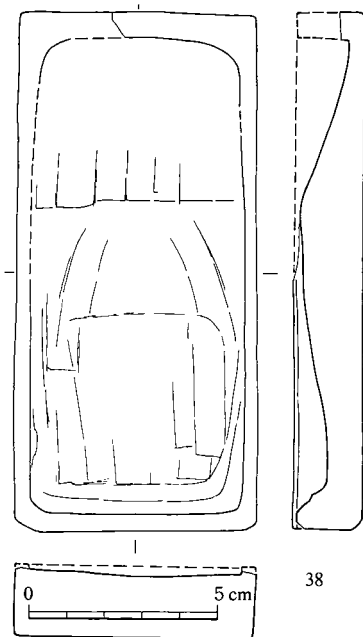
32~34は摺鉢。32・33は片口が長く延びる。体部はやや彎曲して立ち上がり、口縁端部を外方に折り曲げて肥厚させる。口縁部から体部外面にかけて藁灰釉を掛ける。2点とも底部に墨書がある。32は「大正四年 代□ 九月□□□ 大立日 (あるいは大音)」と読める。33は文字が不明瞭だが、片仮名で「□セ□□」か。32は口径22.5cm、器高9.0cm。33は口径19.5cm、器高8.0cm。

34は備前系の大型摺鉢。直線的に開く体部に、口縁部が屈曲して開き、端部を外方に折り曲げて肥厚させる。口径33.5cm、器高13.0cm。

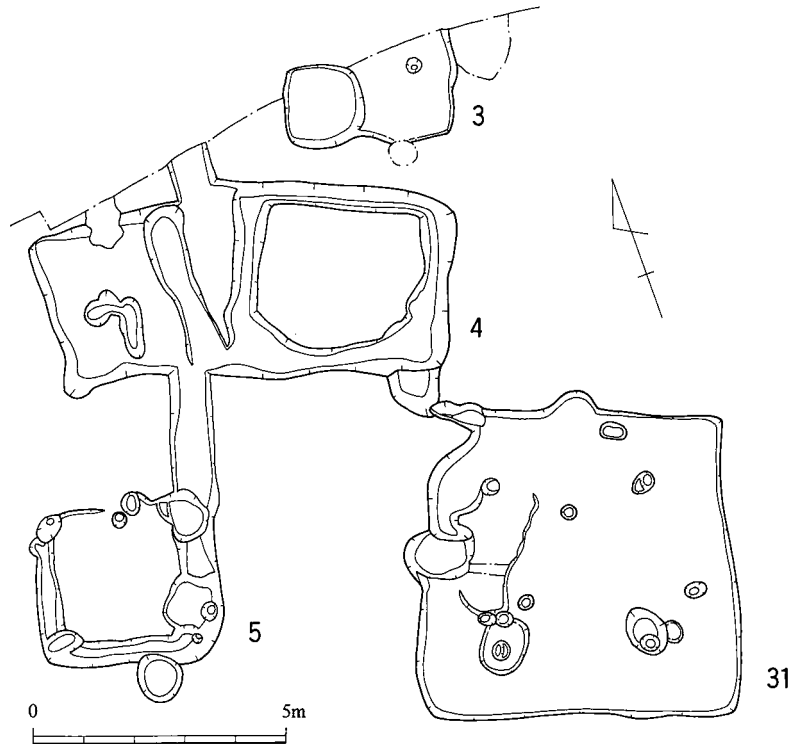
35は大型の鉢。高台は低く幅広く、体部は丸味をもって大きく開き、口縁部は外に折り曲げる。内外面に透明釉を掛け、見込部は蛇の目釉剥ぎをおこなう。口径37.5cm、器高13.7cm。

36は丸瓦。瓦当は中央に三つ巴、その周囲に18個の珠文を巡らす。瓦当径15.7cm。37は菊丸と呼ばれる棟飾りの瓦。瓦当の文様は36と同様で、三つ巴の周囲に14個の珠文を巡らす。瓦当径9.7cm、差し込み部長6.2cm。

38は石硯。余程使用したものとみえて、陸部の手前側が海部と変わらない程に磨り減っている。手前の小口面の周囲は角を削り取った痕跡がある。長さ13.8cm、幅6.3cm、厚さ1.8cm。



第96図 2区近代遺物実測図 (5) (1/2)



第97図 3～5号竪穴状遺構実測図・31号竪穴住居跡遺構配置図 (1/150)

(2) 第2面の遺構と遺物

2面目の調査は、1面目の遺構記録作成が終了した段階で、引き続き8月19日からバックホーによる掘り下げを開始し、10月17日に全ての作業を終えて撤収した。

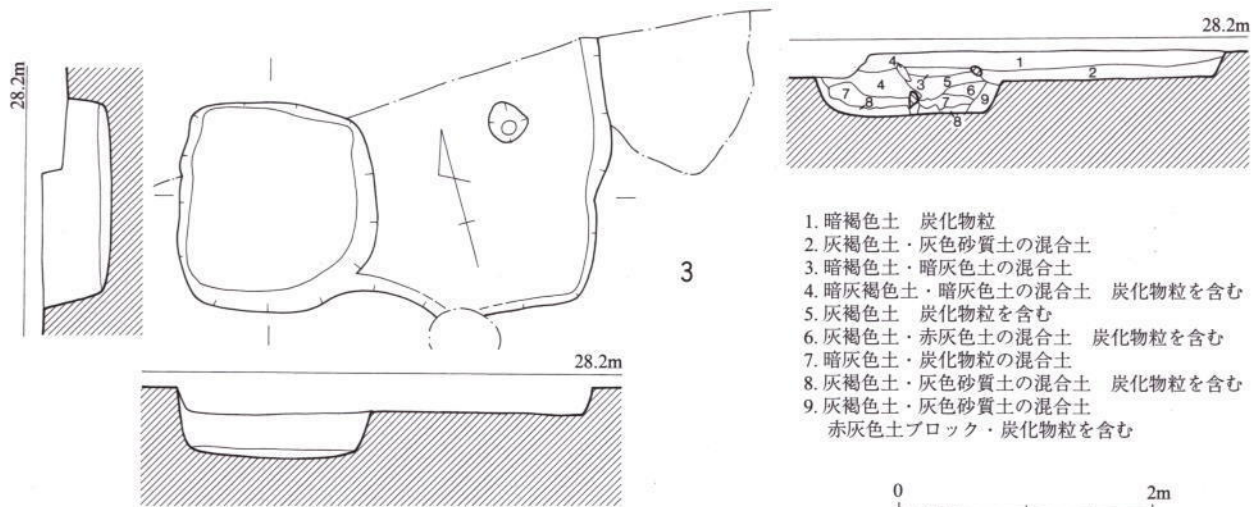
a. 竪穴状遺構

遺構検出段階に、調査区北側で4基の竪穴状遺構あるいは土坑が、方位をほぼ揃えて、さらにその内の5基は溝で接続した状況で、密集して検出された(図版50、第97図)。調査の結果、これら4基の遺構は、4・5号竪穴状遺構と3号竪穴状遺構・31号竪穴住居跡の、大きく2時期に別れことが判明した。遺構の方向が揃っているのは、時期を問わず遺跡全体の傾向であり、本来の地形の傾斜に起因するものと考えられる。遺構検出段階で4号竪穴状遺構の南東隅部と31号住居跡の北西隅部を接続しているように見えた溝状の部分は、掘り下げた結果不整形の落ち込みであり、また両者の時期も違うことから、この部分は本来遺構に伴うものではなく、遺構廃棄後に水流等によって崩れたものではないかと推察される。

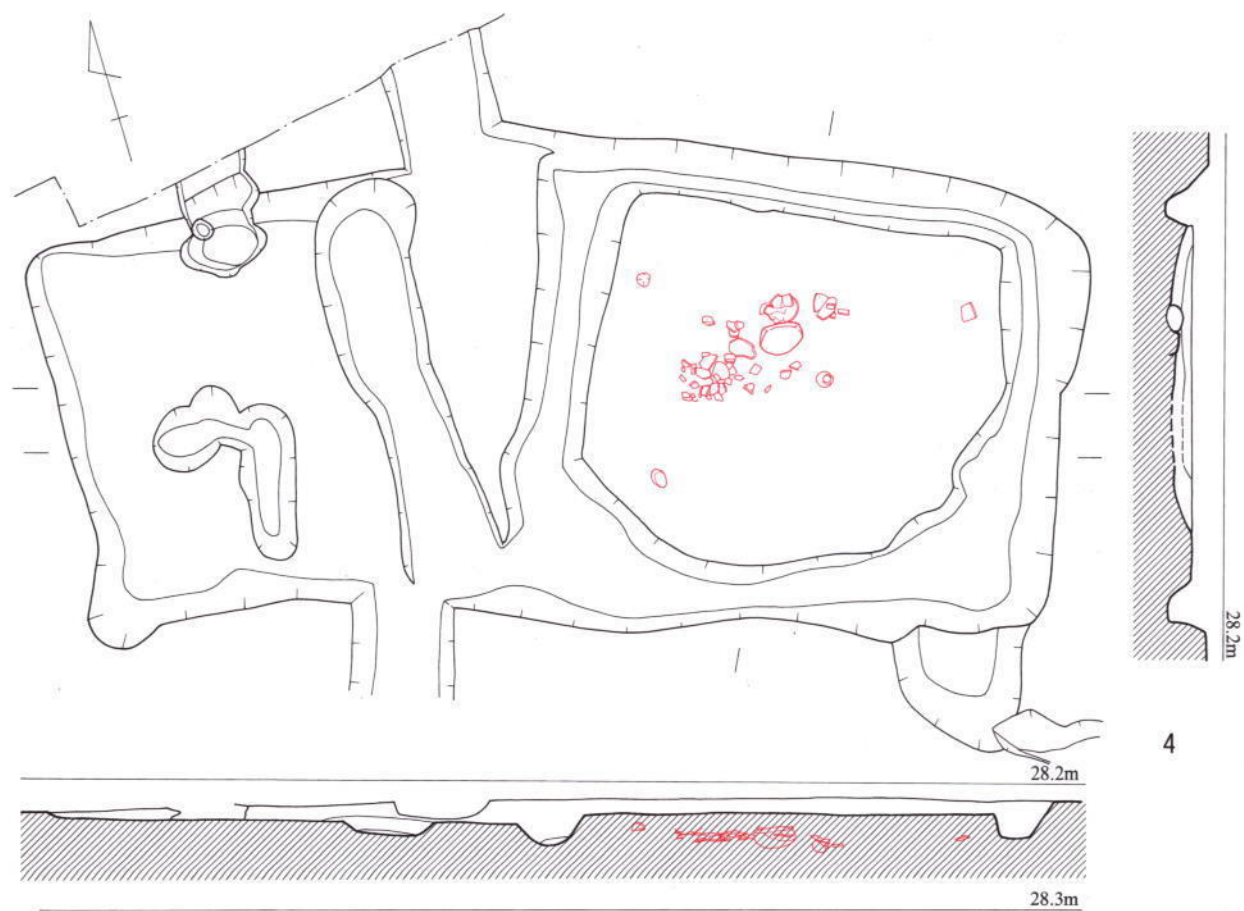
これに対して4・5号竪穴状遺構間の溝は、長さ2.3m、幅0.8m、深さ0.15m程の整った形状のもので、竪穴状遺構との切り合い関係も認められなかったことから、同時期で一連の遺構と考えられる。さらにこれと同様の溝が4号竪穴状遺構から北側調査区外にまで延びており、遺構の広がりを示唆している。

3号竪穴状遺構 (図版50、第98図)

調査区北端部にあり、遺構の一部はさらに北側調査区外に延びる。土坑を切り、ピットに切られ

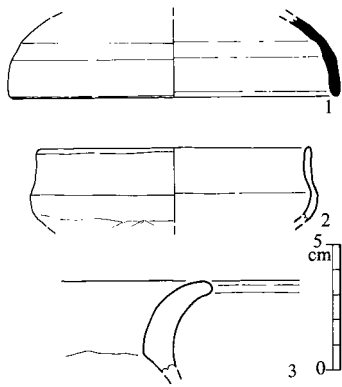


1. 暗褐色土 炭化物粒
2. 灰褐色土・灰色砂質土の混合土
3. 暗褐色土・暗灰色土の混合土
4. 暗灰褐色土・暗灰色土の混合土 炭化物粒を含む
5. 灰褐色土 炭化物粒を含む
6. 灰褐色土・赤灰色土の混合土 炭化物粒を含む
7. 暗灰色土・炭化物粒の混合土
8. 灰褐色土・灰色砂質土の混合土 炭化物粒を含む
9. 灰褐色土・灰色砂質土の混合土
赤灰色土ブロック・炭化物粒を含む



1. 暗灰色土
2. 焼土
3. 焼土・灰色砂質土の混合土
4. 灰色砂質土 暗灰色土
ブロックを含む
5. 暗灰色土・灰色砂質土の混合土
6. 灰色砂質土・黒褐色土ブロック
・灰褐色土ブロックの混合土
炭化物粒を若干含む
7. 暗灰色土
8. 暗灰褐色土
9. 暗灰褐色土 灰色砂質土をブロック状に含む
10. 暗褐色土・灰褐色土の混合土
11. 灰褐色土
12. 灰色砂質土
13. 灰褐色土 淡黄褐色粘土ブロックを含む
14. 淡黄褐色粘土・灰褐色土の混合土 炭化物を含む
15. 灰褐色土 淡黄褐色粘土ブロック・炭化物を含む

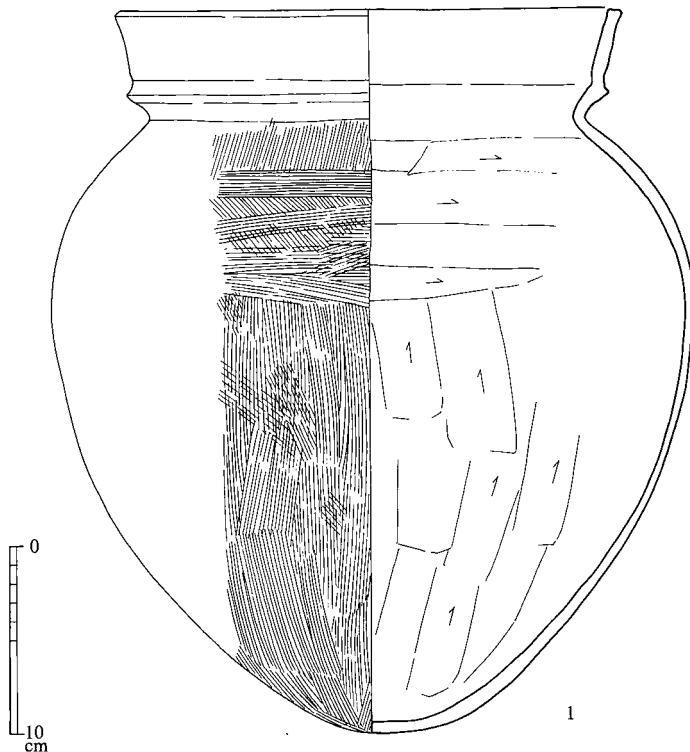
第98図 3・4号竪穴状遺構実測図 (1/60)



第99図 3号竪穴状遺構出土土器実測図 (1/3)

る。調査区内の部分で東西3.35m、南北2.05m以上、深さ0.2mで、西側の1.55×1.65mの隅丸方形部分がさらに0.3m程掘り込まれた、二段掘り状になっている。埋土は全体的に炭化物粒を含むが、殊に西側の深い部分の底部付近に集中して堆積する。

出土土器 (第99図) 1は須恵器杯蓋。天井部と口縁部の境は不明瞭で、口縁端部は丸く納める。天井部回転ヘラケズリ調整。復元口径13.2cm。2は土師器杯。受け部に稜をもち、たちあがり部はわずかに彎曲して口縁部で垂直に近くなる。胎土は精良で、内外面ヨコナデ・ナデ調整で、底部はヘラケズリ調整。復元口径11.0cm、復元受け部径11.5cm。3は土師器甕。内面の胴部と口縁部の境に稜をもち、口縁部は弧を描いて開き、先端に向かって薄くなる。胴部内面ヘラケズリ、その他はヨコナデ調整。



第100図 4号竪穴状遺構出土土器実測図 (1)
(1/4)

4号竪穴状遺構 (図版51~53、第98図)

3号竪穴状遺構のすぐ南側にある。東西に長い遺構であるが、中央やや西寄りの部分の南北に幅0.8m、深さ0.15m程の溝がそれぞれ取り付き、北側の溝は調査区外に延び、南側のものは2.3mの距離で5号竪穴状遺構の北東隅に接続する。4号竪穴状遺構は、平面的にはこの南北の溝が接続する部分で若干屈曲しており、2つの長方形を重ねたような、あるいは北側の開いた扇面状の形状を呈する。東西長は北側で8.4m、南側で7.5m、南北幅は中央部で3.8m。

遺構の東半部はさらに幅約0.5m、深さ0.2mの溝で区画し、その内部は地山を一旦0.2mの深さまでレンズ状に掘り、淡黄褐色粘土と灰褐色土の混合土で丁寧な埋め戻し、上面を平坦にしている。この地

山面と埋土の間から相当量の土器が出土した。

さらに遺構の中央西寄り部分にも溝があり、遺構の西側約3分の1を区画する。この部分の遺構北壁に接して炉 (あるいはカマド) が作り付けられる。

遺構は特殊な構造であり、殊に東半部の周囲を溝で囲み内側を粘土質の土で貼床する部分は、湿気を嫌う製品の製作に関わる工房的な性格を連想させるが、それらを示す遺物の出土はない。また、遺構内からは柱穴も検出できなかった。

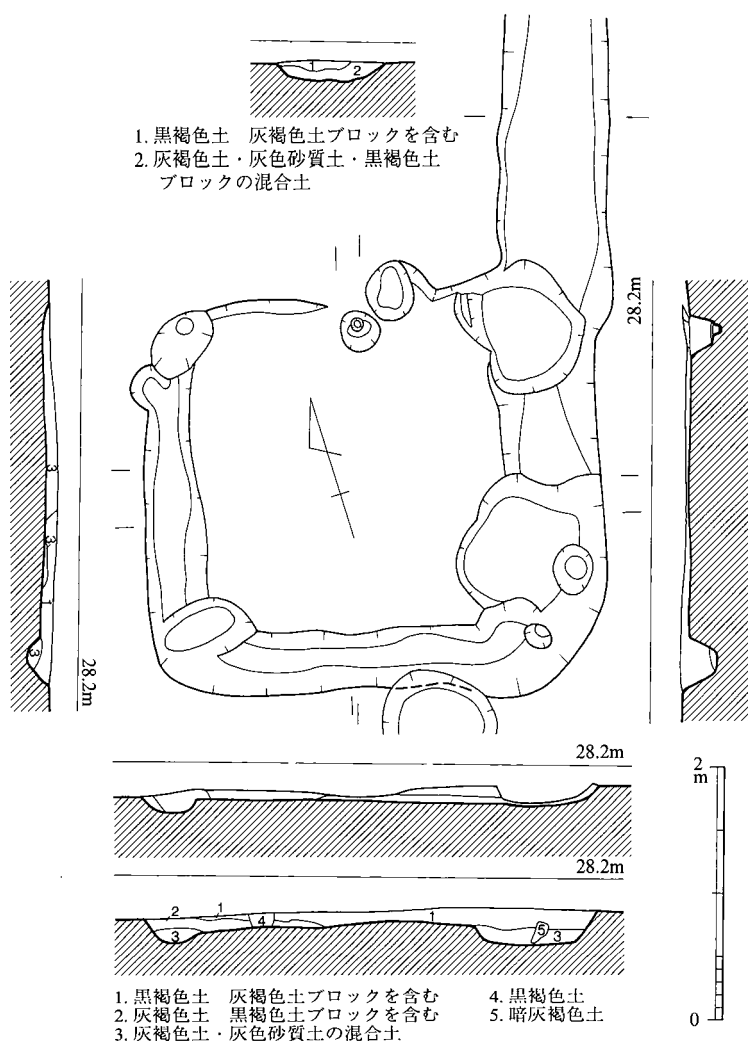
出土土器 (図版71、第100・103図) 2は壺の口頸部で、わずかに彎曲して開く。ヨコナデの後、内

面斜め方向、外面縦方向のミガキ調整。

1・3~9は甕。1は二重口縁の甕。口縁部はやや開き、端部は水平になり、わずかに内側につまみ出す。胴部の最大径は上位にあり、底部は尖り気味の丸底。口縁部はヨコナデ、胴部内面は下位を縦方向、上位が横方向のヘラケズリ調整。胴部外面は、全体に縦方向の、肩部に横方向のハケメ調整をおこない、肩部上位には櫛状工具による4~5条の浅い沈線が巡る。外面には煤が付着する。口径26.9cm、胴部最大径33.1cm、器高38.4cm。3・4・7は胴部から屈曲して開く口縁部は直線的で、端部を横方向につまみ出す。5は口縁部が直線的に開き、わずかに上方につまみ出す。胴部の器壁は薄く、最大径は上位にあり、底部は尖り気味の丸底。口縁部はヨコナデ調整、胴部は内面がヘラケズリ

りで、底部周辺には指頭痕が多く残る。外面は縦方向で肩部のみが横方向のハケメ調整。外面下位には煤が付着し、熱のために表面の剥離している部分がある。復元口径16.9cm、胴部最大径22.4cm、器高24.5cm。6は小型の甕で、短い口縁部は薄く、体部はやや扁平な形状で、底部は丸底。口縁部内面にハケメの痕跡が残り、その後内外面ヨコナデ調整。体部は内面ヘラケズリで、底部はナデ調整、外面はハケメ調整。復元口径9.5cm、体部最大径12.0cm、器高9.0cm。外面下位には煤が付着する。8は「く」の字に屈曲する口縁部で、器壁が比較的厚く、端部をわずかに上方につまみ出す。9は胴部の破片で、器壁が薄く、内面はケズリ後ナデ調整、外面は横方向のタタキ後縦方向のハケメ調整。

10~13は鉢。10~12は粗製で歪みが強く、ともに不安定な平底をつくる。10は彎曲して開く体部に、上位で口縁部が内彎する、鉄鉢形とでもいふべき形状で、底部周辺の器壁が厚い。内面はヘラケズリ後ナデ調整、外面はタタキ後ナデ調整。復元口径12.6cm、器高8.1cm。11は体部の器壁が比較的薄く、口縁部が開く。口縁部は横方向ハケメ調整、内面ヘラケズリ後ナデ調整、外面タタキ後ナデ調整。復元口径11.6cm、器高6.9cm。12は比較的細身で、内外面ケズリ後ナデ調整。口径10.6cm、器高8.4cm。13は精製で、胎土も比較的精良。体部は半球形で、口縁部に向かって薄くなる。内面



第101図 5号竖穴状遺構実測図 (1/60)

ヨコナデ後ナデ調整、外面ヨコナデ後粗いミガキ調整。復元口径10.6cm。

14は3・4号竪穴状遺構間の溝から出土した。土師器甕で、口縁部はほぼ直線的に開き、端部をわずかに横方向につまみ出す。口縁部はハケメ後ヨコナデ調整、胴部は内面ヘラケズリ調整、外面ハケメ調整。復元口径18.1cm。

5号竪穴状遺構（図版53、第101図）

4号竪穴状遺構の南側に位置する、東西3.6m、南北3.1mの隅丸方形の竪穴状遺構。遺構の北東隅部から溝が延びて4号竪穴状遺構の南側に接続する。この溝が連続するように、遺構の東・南・西側は壁際に幅0.35～0.8mの溝がめぐる。遺構の四隅にほぼ対応して土坑状の掘り込みを確認したが、いずれも不整形である。出土遺物はない。

b. 竪穴住居跡

31号竪穴住居跡（図版54、第102図）

4号竪穴状遺構の南東側の約1mの間隔で近接する。最大部分で東西6.4m、南北6.1m、深さは0.25mが残存する。4本柱で、柱間は東西3.0m、南北3.3m。西壁ほぼ中央部にカマドを付設し、0.4m程半円形に外部に突出する。袖部は完全に失われており、粘土ブロックが周辺から検出された。カマドの前面の幅2.8m、奥行き1.3mの範囲で、厚さ約0.1mの貼床状の一段高くなった部分が確認された。

出土遺物（図版71・72、第103・104図） 15は須恵器杯蓋で、口縁端部は丸く、天井部回転ヘラケズリ、その他はヨコナデ・ナデ調整。復元口径13.6cm、器高4.4cm。

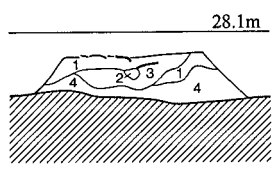
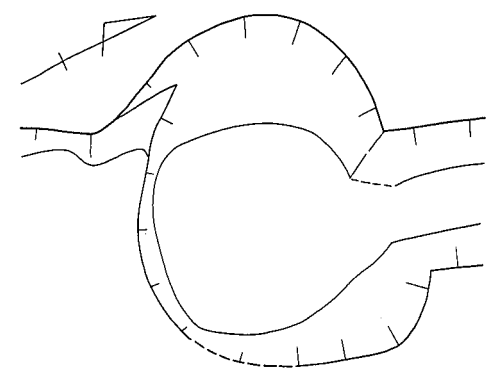
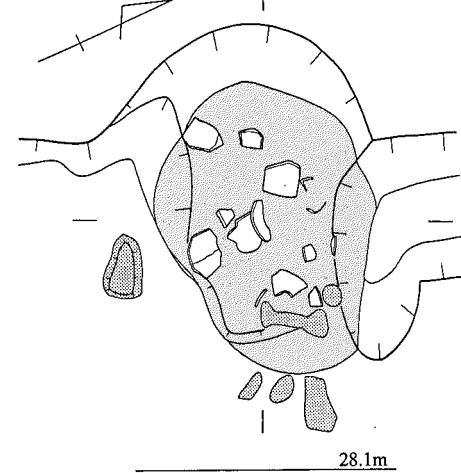
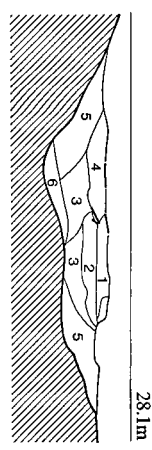
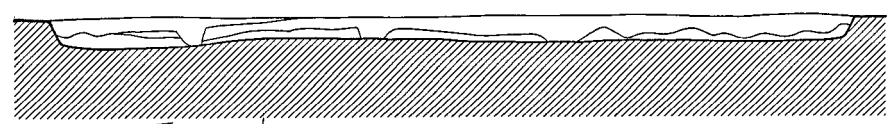
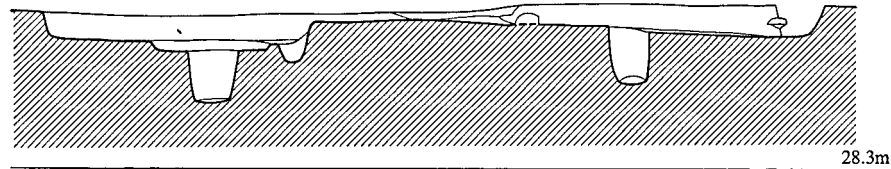
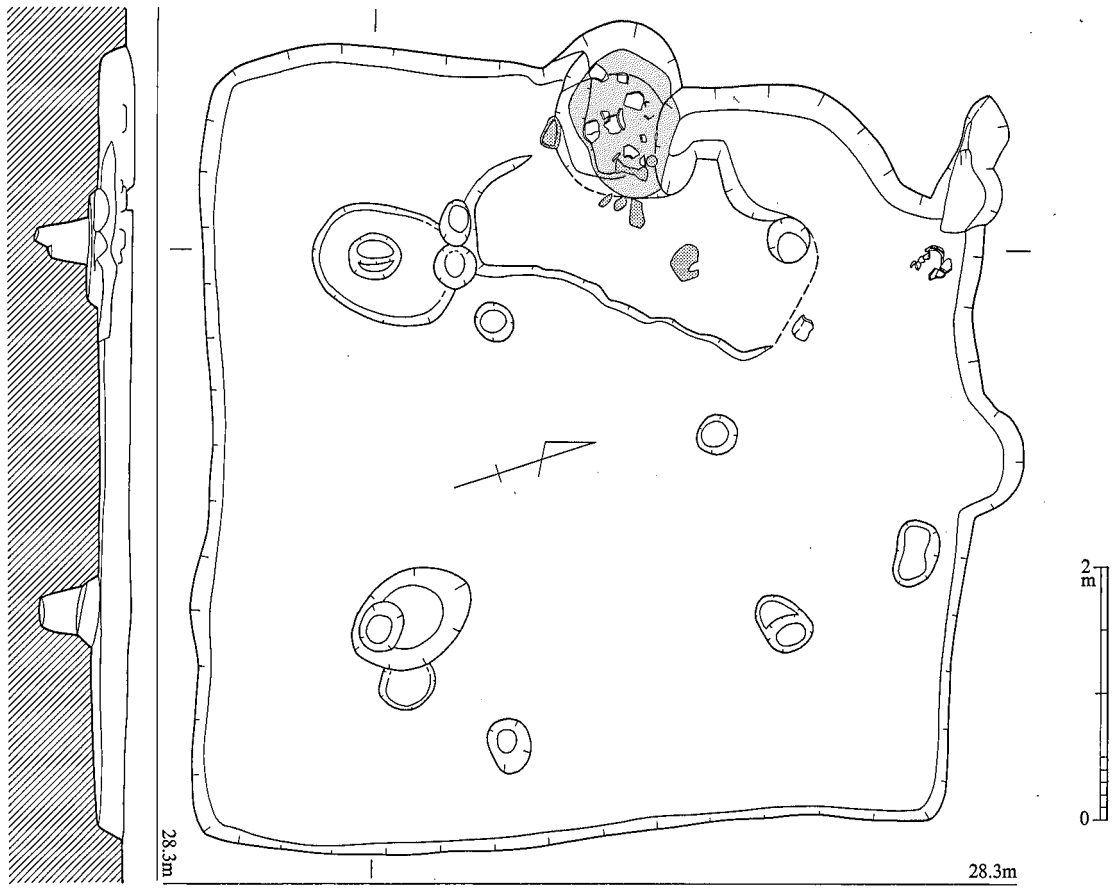
16・17は杯身。たちあがり部は内傾し、端部は薄い。底部は回転ヘラケズリ、その他はヨコナデ・ナデ調整。16は復元口径11.8cm、復元受部径14.0cm。17は口径11.6cm、受部径14.1cm、器高4.1cm。

18～20は土師器杯。受け部に段をもち、たちあがり部は内傾する。胎土は精良で、底部はヘラケズリ、その他はヨコナデ・ナデ調整。18が復元口径10.2cm、復元受部径12.1cm、19は復元口径11.8cm、復元受部径13.0cm、20は復元口径12.2cm、復元受部径13.1cm。

21は椀であろう。底部と体部の境に段を有し、わずかに内彎しながら立ち上がる。器壁は風化しているが、内外面にミガキの痕跡が認められる。復元口径11.5cm。

22は高杯として図示したが、杯蓋の可能性も高い。底部と体部の境に段を有し、直線的に開く。風化が激しいが、内外面ミガキ調整か。復元口径13.0cm。23～26は高杯。23～25は底部と体部の境に稜があり、23は直線的に、24・25は口縁部でわずかに外反して開く。3点とも底部はケズリ後ナデ調整。24の体部下位には横方向ハケメ調整の痕跡が残り、その他はヨコナデ・ナデ調整。脚部が残存するのは25のみであるが、外面縦方向、内面横方向のケズリ後、外面はナデ調整。復元口径は23が15.0cm、24が17.0cm、25は14.6cm。26は短脚で、裾が大きく開き、3箇所上方からの穿孔がある。混入品であろう。

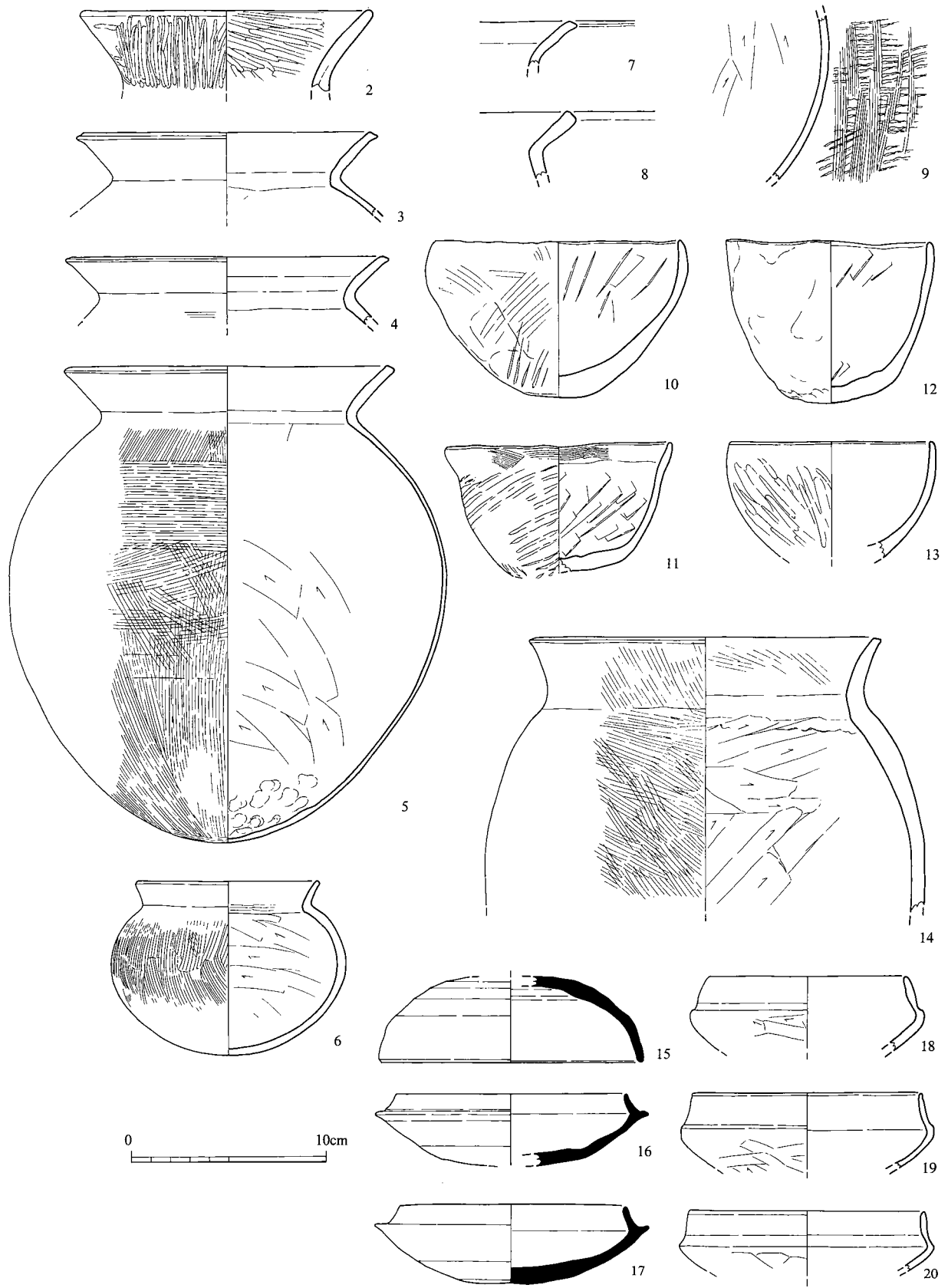
27～36は甕。口縁部は、27は短く屈曲して開くが、それ以外のものは弧を描いて外反して開く。いずれも口縁部と胴部の境内面に稜をもち、胴部内面を斜め方向にケズリ調整する。胴部外面はハケメ調整、34は口縁部内面にもハケメ調整をおこない後ナデ調整。口径の復元できるものは、16.6



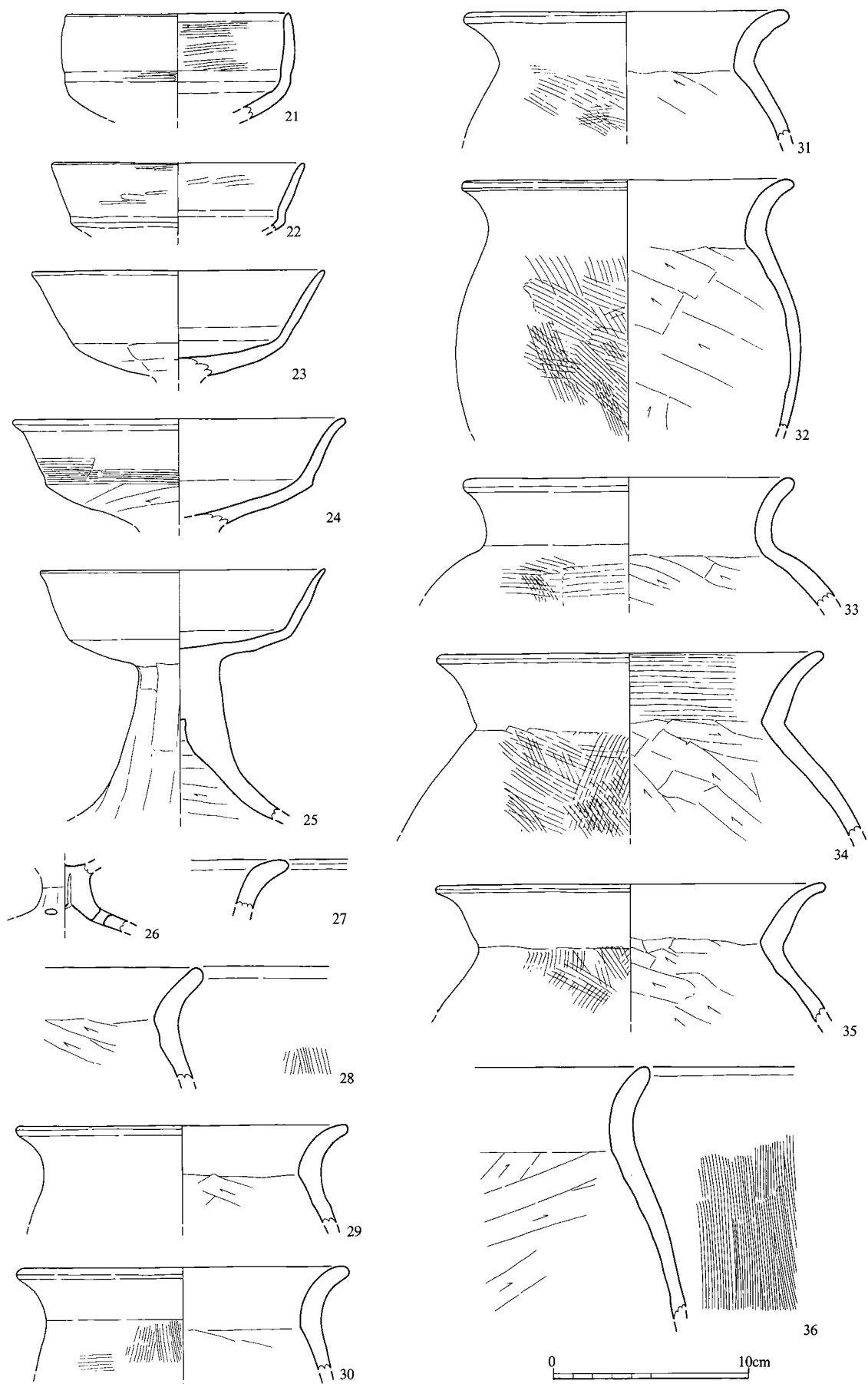
1. 灰色砂質土、焼土ブロック、暗褐色土ブロック、炭化物粒の混合土
2. 焼土 灰色砂質土を含む
3. 灰色砂質土、焼土ブロックの混合土 炭化物粒を若干含む
4. 灰色砂質土 暗褐色土、焼土粒を若干含む
5. 灰色砂質土と灰褐色土ブロックの混合 炭化物粒を若干含む
6. 灰色土



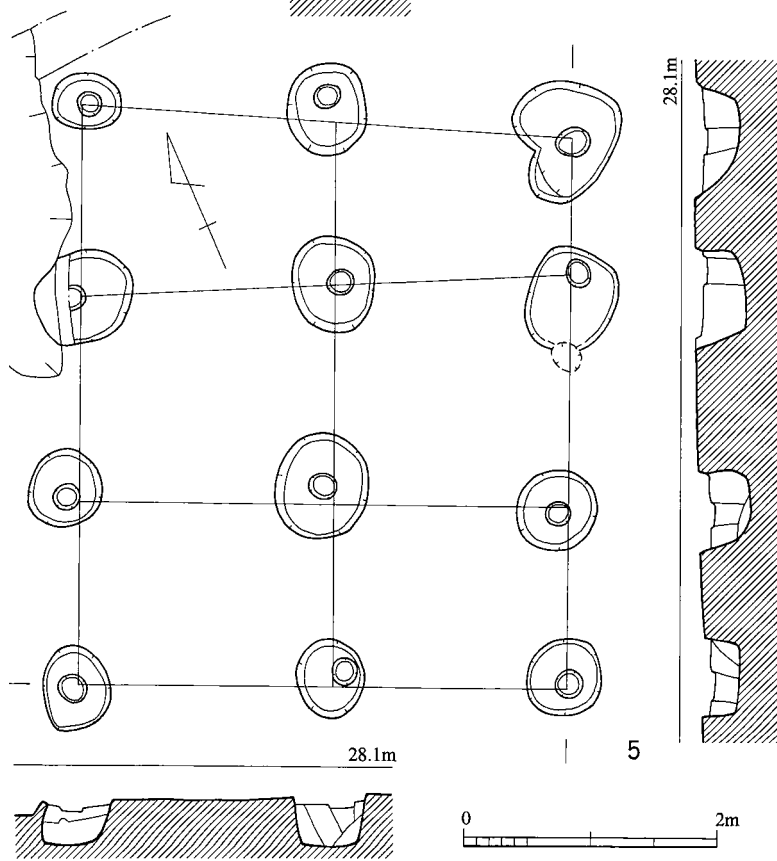
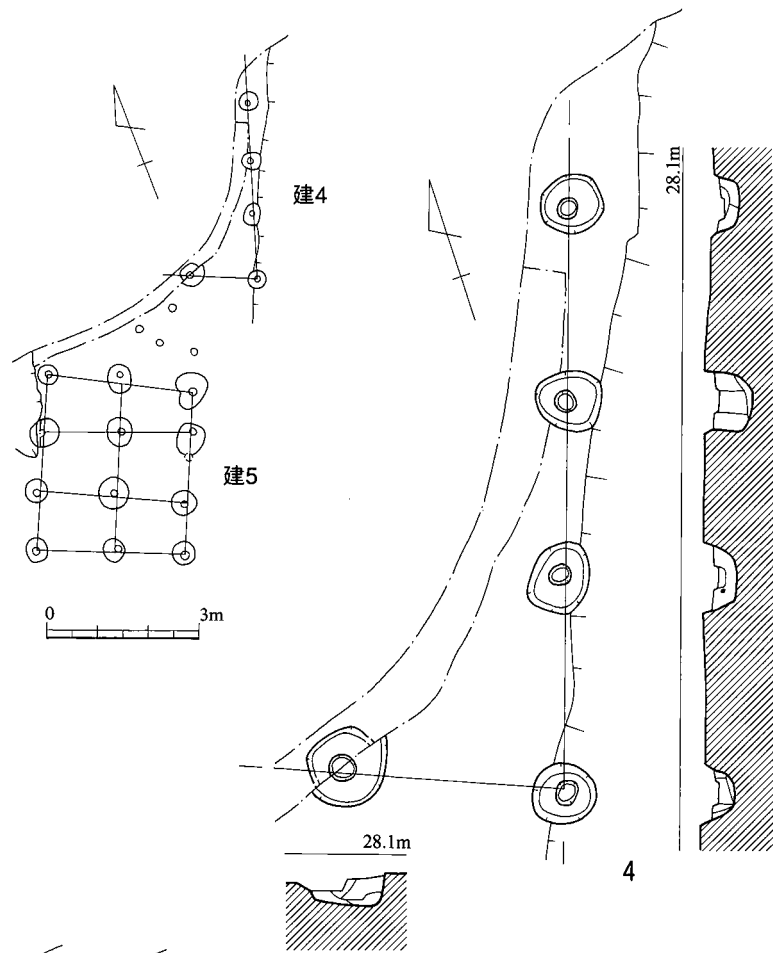
第102図 31号竖穴住居跡・同カマド実測図 (1/60、1/30)



第103图 4号竖穴状遺構出土土器実測図 (2)
 ・31号竖穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3)



第104图 31号竖穴住居跡出土土器実測図(2)(1/3)



第105图 4·5号掘立柱建筑物迹实测图 (1/150、1/60)

～20.0cm。

c. 掘立柱建物跡

調査区北西隅部で2棟の掘立柱建物跡を検出した。建物跡の配置から2棟は同時期に並び建っていた可能性が高いが、4号掘立柱建物跡は遺構の過半数が北側調査区外にあり、規模等不明な点が多い。

4号掘立柱建物跡（図版54・55、第105図）

調査区北西隅部にあり、16号溝に切られる。北西側の過半数が調査区外にあたるため、現状で確認することができたのは、東西1間、南北3間分のみである。しかしながら、南側の5号掘立柱建物跡の東側柱列の延長上に4号掘立柱建物跡の柱掘形が有ること、建物の方位が揃っていることを考えれば、2棟の建物跡は同時期に並び建っていた可能性が非常に高い。従って4号掘立柱建物跡は東西方向も3間以上の総柱建物であった可能性が高いものとする。柱掘形は円形で、径0.5～0.6m、深さは0.25～0.4mが残存する。柱痕跡は径0.15～0.2mで、柱間は東西方向が1.8m、南北方向は1.4～1.7m。建物主軸は、南北棟建物と考えてN-18°-E。遺物の出土はない。

5号掘立柱建物跡（図版54～56、第105図）

4号掘立柱建物跡の南側に位置し、両者の間隔は柱痕跡の中心で測って3.0m。梁行2間、桁行3間の南北棟総柱建物跡。柱掘形は円形で、径0.55m～0.9m、深さ0.3～0.4m。柱痕跡は径0.15～0.2mで、柱間は梁行が1.8～2.1m、桁行は1.1～1.9mと多少のばらつきがある。建物主軸はN-24°-E。遺物の出土はない。

d. 溝状遺構

15号溝（図版56、第106図）

調査区南西隅で検出した。1区第2面の7号溝に連続する同一の溝。断面は逆台形で、上部幅2.3m、底部幅0.55～0.8m、深さ1.0～1.3m。溝は西北西側が高く、1次調査区から、2次調査区を通過してさらに東南東側に調査区外に延びる。調査区内で9.8m分を検出した。

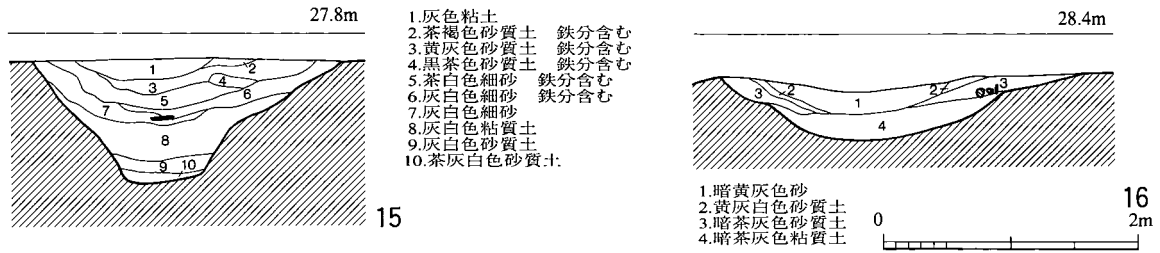
出土土器（図版74～78、第107図） 1・2は須恵器杯蓋。1は口縁部内面にかえりをもつタイプで、天井部に扁平な擬宝珠形のつまみが付く。焼成が悪く、灰白色を呈する。2は口縁端部を下方に折り曲げるタイプで、器高が低い。ともに天井部回転ヘラケズリ調整。1が復元口径16.8cm、器高3.7cm、2は復元口径15.8cm。

3は須恵器杯で、高台の付く小型品。体部は直線的に開きながら立ち上がり、口縁部は薄く作る。高台はハの字に開き、端部を外側につまみ出す。復元口径9.5cm、器高4.5cm。

4は土師器椀で、底部と体部に境をもたずになだらかに弧を描いて立ち上がる。底部はヘラケズリ調整であるが、風化している。復元口径12.3cm。

5は土師器皿。底部と口縁部の境は不明瞭で、なだらかに立ち上がる。底部はヘラケズリ調整、それ以外はヨコナデ・ナデ調整。復元口径13.2cm。

6～10は土師器杯。底部から彎曲して立ち上がり、口縁端部がわずかに内側を向くタイプ（6・



第106図 15・16号溝土層実測図 (1/60)

8・9)と、底部と体部の境が比較的明瞭で、垂直に近く立ち上がるもの(7・10)がある。6は内外面の一部に漆が付着する。器面は風化しており不明瞭であるが、内外面にミガキ調整の痕跡が残る。復元口径15.6~16.7cm、8は器高3.2cm。

11は鉢で、体部は丸味をもち、屈曲して口縁部が開く。小破片であるが、復元すると口径22.4cm。

12は短脚の高杯脚部で、短くハの字に開いて端部が屈曲して水平に開く。脚部外面は縦方向の、内面は横方向のヘラケズリ調整。

13は甕。口縁内面の胴部との境に稜をもち、口縁部は細身で弧を描いて開く。胴部内面はヘラケズリ調整。

16号溝 (図版56、第106図)

調査区西側にある。北側調査区外から、南南西に延びて15号溝の手前で途切れている。傾斜は北北東側が若干低い。4号掘立柱建物跡を切る。断面はレンズ状で、最大部分で幅1.9m、深さ0.4m。調査区内で29m分検出した。

出土土器 (第107図) 14・15は土師器甕。14は口縁部が長めで、彎曲して開き、15は水平に近く開き、端部が薄くなる。胴部内面はヘラケズリ調整、口縁部はヨコナデ調整。復元口径は14が26.0cm、15は30.0cm。

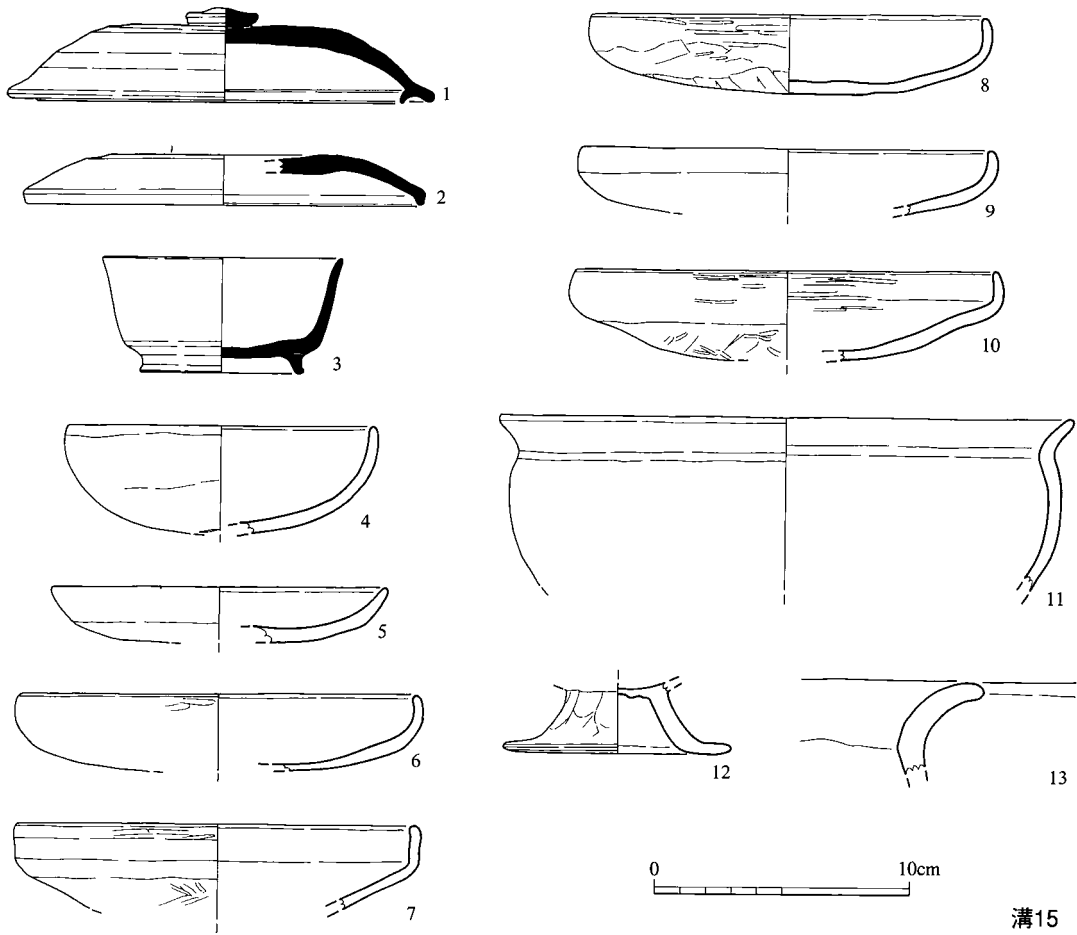
16は土師質土器鉢。外面中位に段をもち、体部は直線的に開き、口縁端部は四角い。外面下位と内面は横方向のハケメ調整、外面上位はナデ調整。外面は全体に煤が付着する。1面2号集石遺構の8と同一個体の可能性がある。復元口径27.0cm。

17は土師質土器摺鉢。器壁が厚く、体部と底部の境にはヘラ状工具痕が多く残り、段状になる。

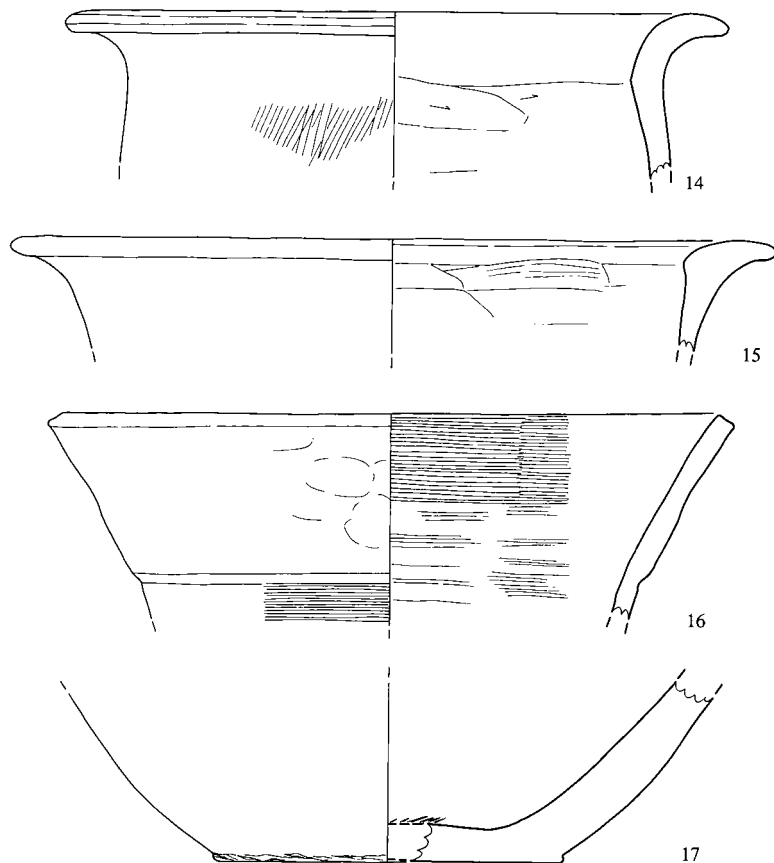
e. 第1・2面間包含層出土土器

第1面の調査が終了して、下層の第2面を検出するためにバックホーにより堆積土を掘削している際に若干の土器が出土した。遺構面が複数存在する場合、遺構面間の堆積土出土の遺物は上層遺構面の時期の上限を示す目安となり得ると考える。しかしながら今回の調査の場合、本来の地形が北北東が高く南南西に向かって傾斜していたと考えられるのに対して、誤って水平に近く掘削したために、結果的に層位間の齟齬が発生してしまった。第1・2面間の堆積土から出土した遺物に、はたして有効性があるかは心許ないが、参考までに報告する。

出土土器 (図版73、第108図) 1は須恵器平瓶等の口頸部。直線的に立ち上がり、口縁部外面をわずかに凹ませる。外面カキ目、内面ヨコナデ調整復元口径9.0cm。

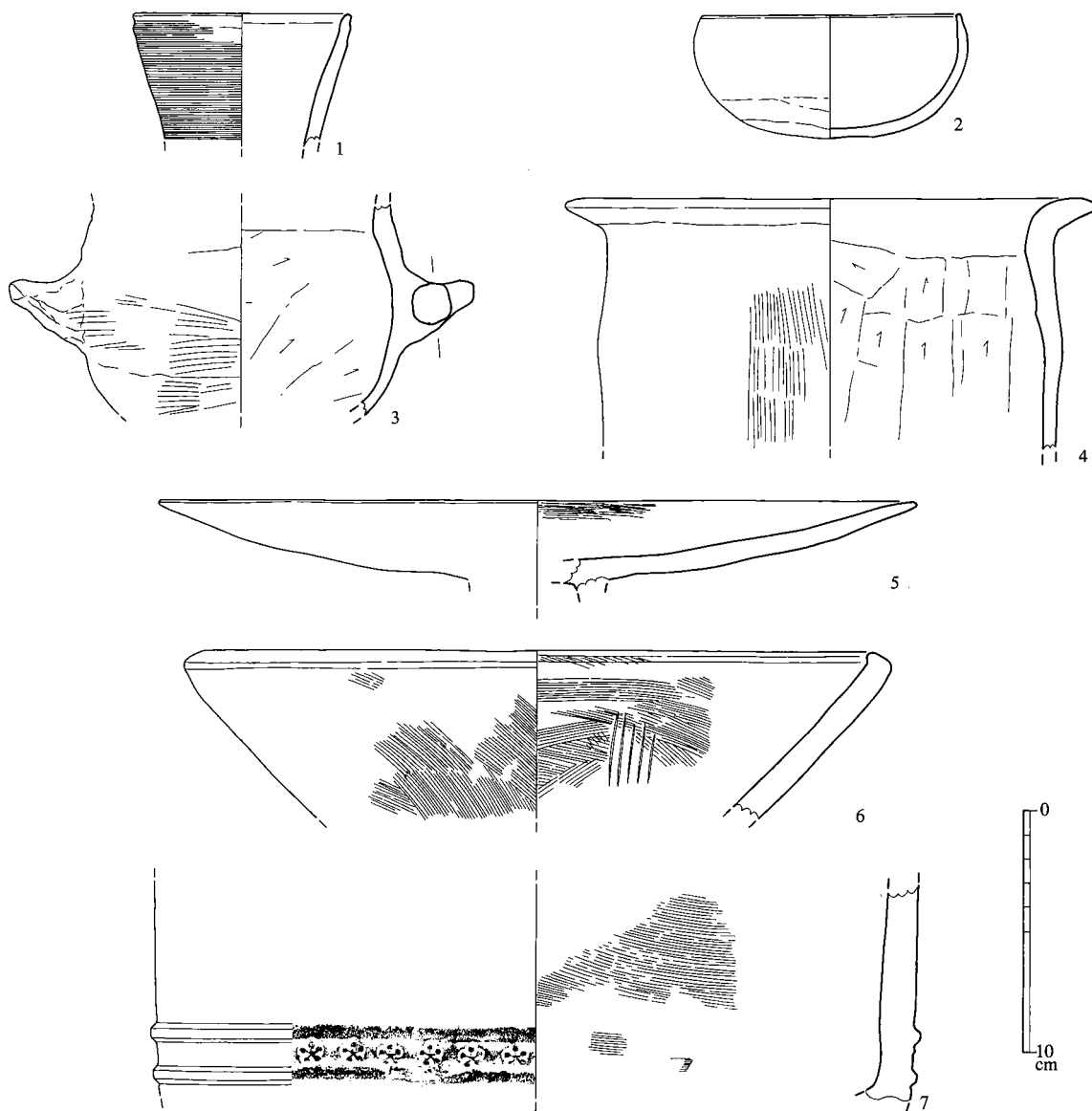


溝15



溝16

第107图 15·16号溝出土土器実測图 (1/3)



第108図 第1・2面間包含層出土土器実測図 (1/3)

2は土師器碗。半球形で、口縁部をわずかに内傾させる。底部外面はヘラケズリ、それ以外はヨコナデ・ナデ調整で、胎土は精良。口径口径10.7cm、器高5.1cm。

3は土師器把手付甕胴部片。小型で胴部は丸く、中位に把手が付く。内面ヘラケズリ、外面横方向のハケメ調整。

4は土師器甕で、器壁の薄いほぼ垂直の胴部に短く開く口縁部が付く。復元口径21.8cm。

5は土師器高杯の杯部で、直線的に大きく開き、端部は薄くシャープにつくる。内外面に丹塗りの痕跡が残り、ミガキ調整。復元口径31.2cm。

6は瓦質土器摺鉢。直線的に開き、口縁端部を内側につまみ出す。外面斜め方向、内面横方向のハケメ調整で、筋目の単位は5本。復元口径29.0cm。7は瓦質土器鉢。体部は垂直に立ち上がり、下部に断面蒲鋒形の突帯2条を貼付し、その間に梅花文を押印する。内面には煤が付着する。

(3) 第3面の遺構と出土土器

a. 土坑

15号土坑（図版57、第109図）

調査区の中央南よりで検出した。東西1.5m、南北1.3mの楕円形を呈し、深さは約0.4mである。埋土はレンズ状の堆積である。遺物は土師器が出土している。

出土土器（第111図1） 1は土師器碗小片で口径の復原は不可能である。内外面の調整はナデ。外面底部の調整はケズリ。

16号土坑（第109図）

調査区の南東よりで検出した。17・19号土坑と重複し、17号土坑より新しく、19号土坑より古い。東西3.1m、南北2.6mの略菱形を呈する。深さは約0.3mでなだらかに掘り込まれ、埋土はレンズ状に堆積する。遺物は弥生土器と土師器が出土しているが、古墳時代の遺構であろう。

出土土器（第111図2～8） 2～7は弥生土器の甕で内外面にハケメ調整を施すものが多い。4は胴部が張らないもの。7の底部はやや膨らみをおびる。胴部下半が大きく張る器形であろう。

8は土師器碗である。口縁部は小さいが強く外反させる。外面胴部は横方向のケズリ。口縁部から内面にかけてはナデ調整を行う。

17号土坑（第110図）

調査区の南東よりで検出した。16号土坑と重複し、これより古い。残存で東西2.2m、南北2.3mの不整形を呈し、深さは0.25mである。遺物は弥生土器と土師器が出土しているが、古墳時代の遺構であろう。

出土土器（図版73、第111図9～11） 10・11は弥生土器甕の口縁部である。11は胴部が張らず底部に向かってすぼまる。

9は土師器の碗である。外面底部から胴部にかけてケズリ調整。口縁から内面見込にかけてはナデ調整を行う。

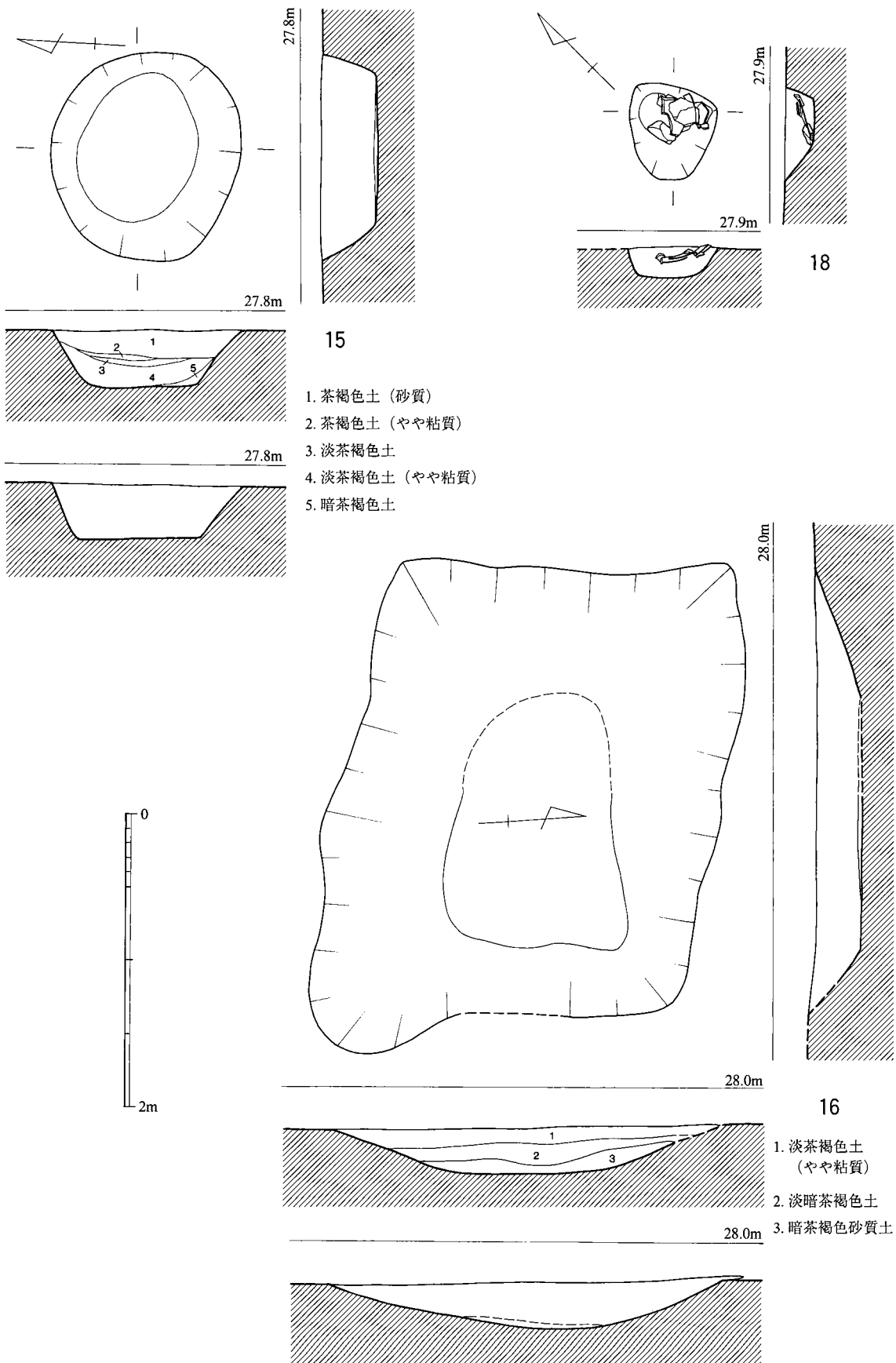
18号土坑（図版58、第106図）

調査区の北端中央で検出した。東西0.6m、南北0.6mの略三角形を呈する。深さは0.2mである。やや浮いた状態で甕がまとまって出土している。遺物は弥生土器が出土している。

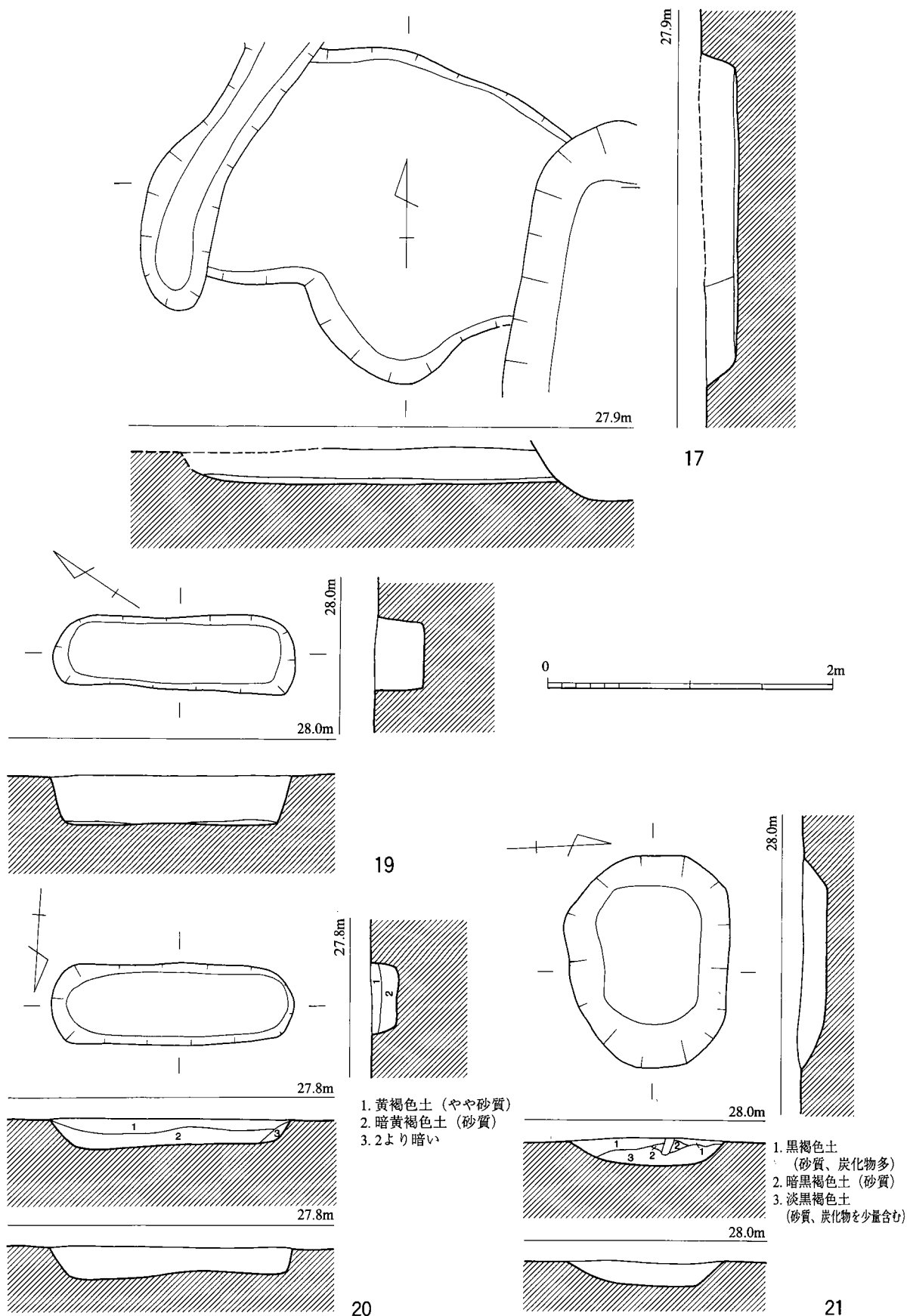
出土土器（図版73、第111図） 12～17は弥生土器の甕である。12は口縁端部をくぼめるものである。口縁下のハケメは横ナデにより一部ナデ消されている。13は胴部がやや張るもので、胴部最大径の部分に小さな三角凸帯を貼り付ける。外面に煤が付着する。14はシャープなつくりで口縁部に煤が付着する。15は内面にハケメが残る。口縁上端面にはヘラで直線が2本刻まれる。16はやや小形で外面に煤がくっきりと付着する。17は底部片で、底面はハケメがナデ消されている。

19号土坑（図版58、第110図）

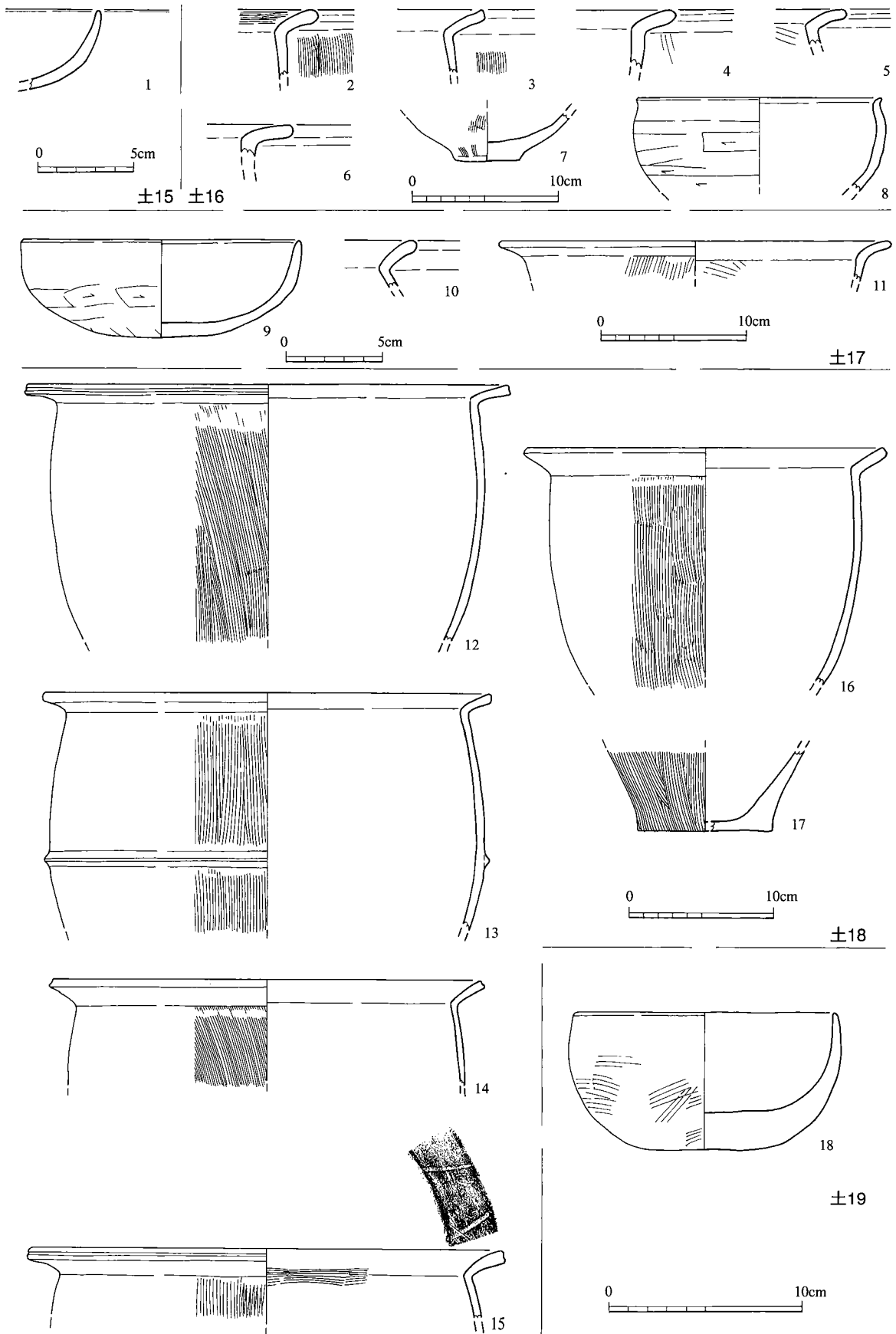
調査区の南東よりで検出した。16号土坑と重複し、これより新しい。東西0.55m、南北1.7mの長楕円を呈する。深さは0.35mで、壁の立ち上がりは急である。形状からみて土坑墓の可能性もある。



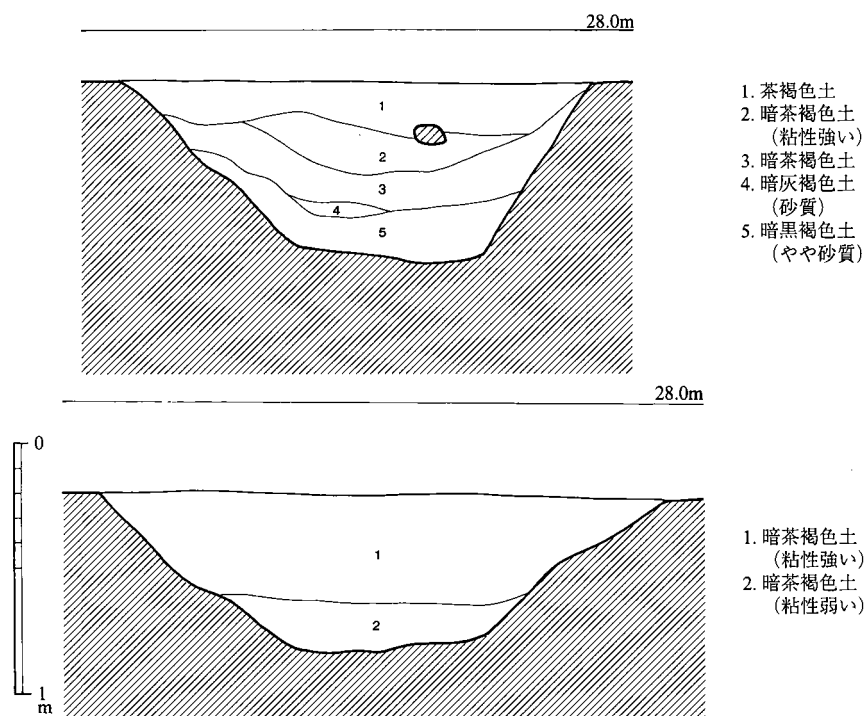
第109図 15・16・18号土坑実測図 (1/40)



第110図 17・19~21号土坑実測図 (1/40)



第111図 15~19号土坑出土土器実測図 (1・8・9・18は1/3、他は1/4)



第112図 2区14号溝土層断面図 (1/30)

遺物は土師器が出土している。

出土土器 (図版74、第111図18) 18は土師器碗である。器形に特異な点はないが底部が異様に厚い。外面胴部は不定方向のハケメ調整が残り、底部はナデ調整を行う。内面の調整はナデである。

20号土坑 (図版59、第110図)

調査区の中央南よりで検出した。東西1.7m、南北0.5mの長楕円を呈する。深さ0.2mで埋土はレンズ状堆積であるが、形状から土坑墓の可能性もある。遺物は出土していない。

21号土坑 (図版57・58、第110図)

調査区中央やや北よりで検出した。東西1.5m、南北1.1mの楕円形を呈する。深さは0.15mで、緩やかに掘り込まれる。埋土に炭化物を含む。遺物は土器が出土したが細片で図化できなかった。

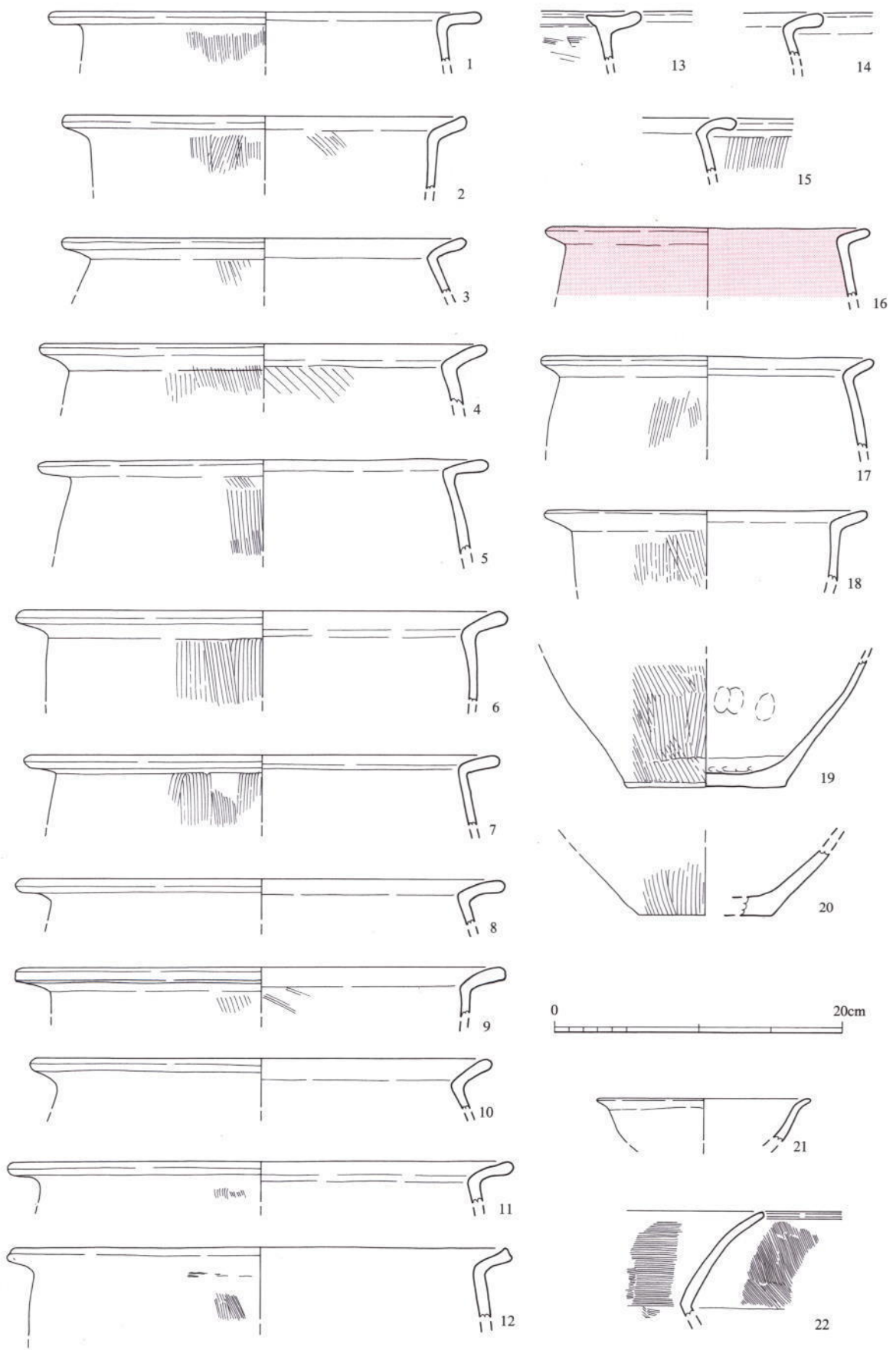
b. 溝状遺構

14号溝 (図版59、第112図)

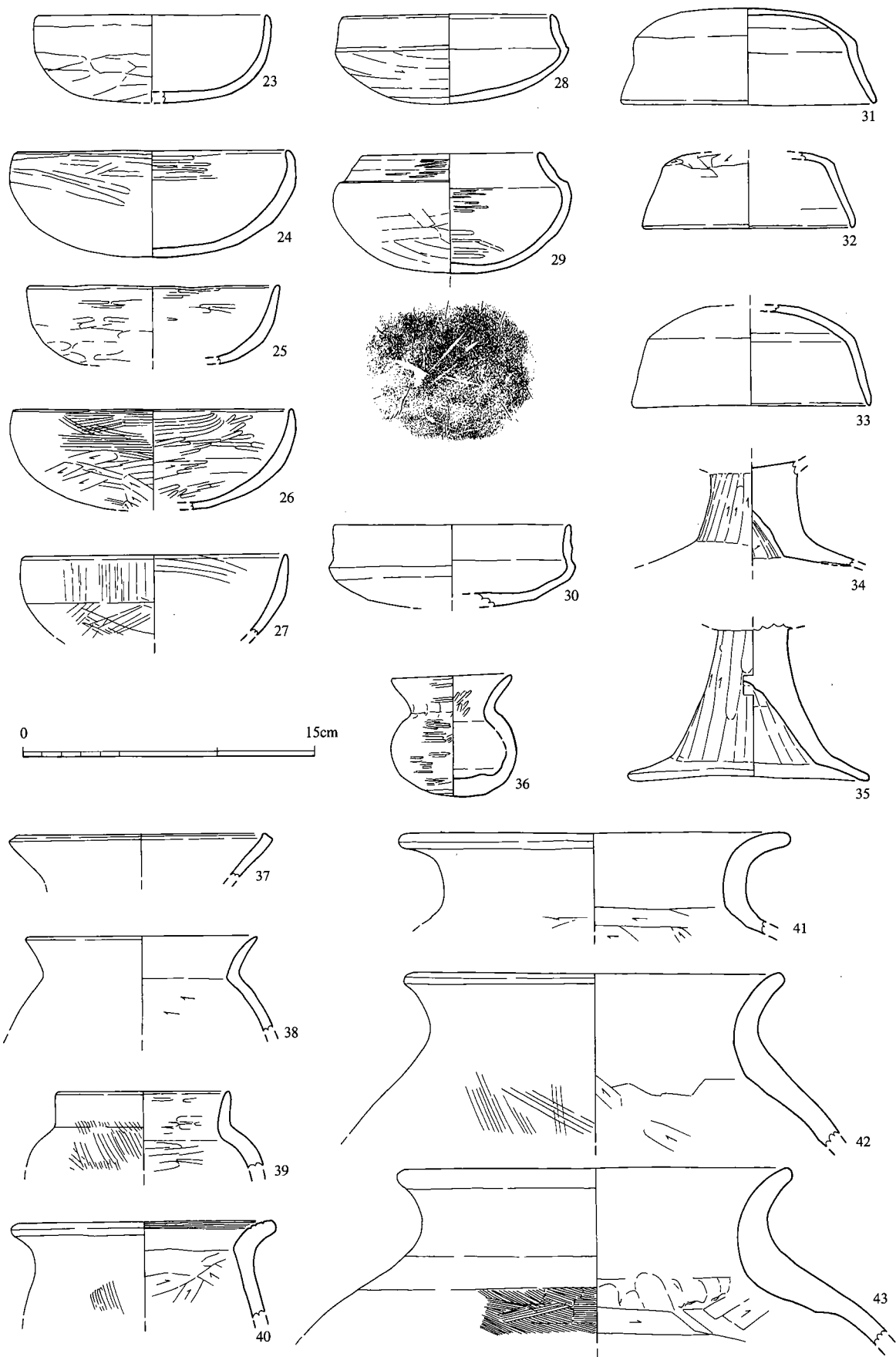
調査区の南よりで検出した。東西に横断し、1区に続く。断面は台形状を呈し、現状で深さ0.7mである。遺物は弥生土器、土師器、須恵器が出土している。

出土土器 (図版74~78、第113~119図) 1~20は弥生土器甕である。

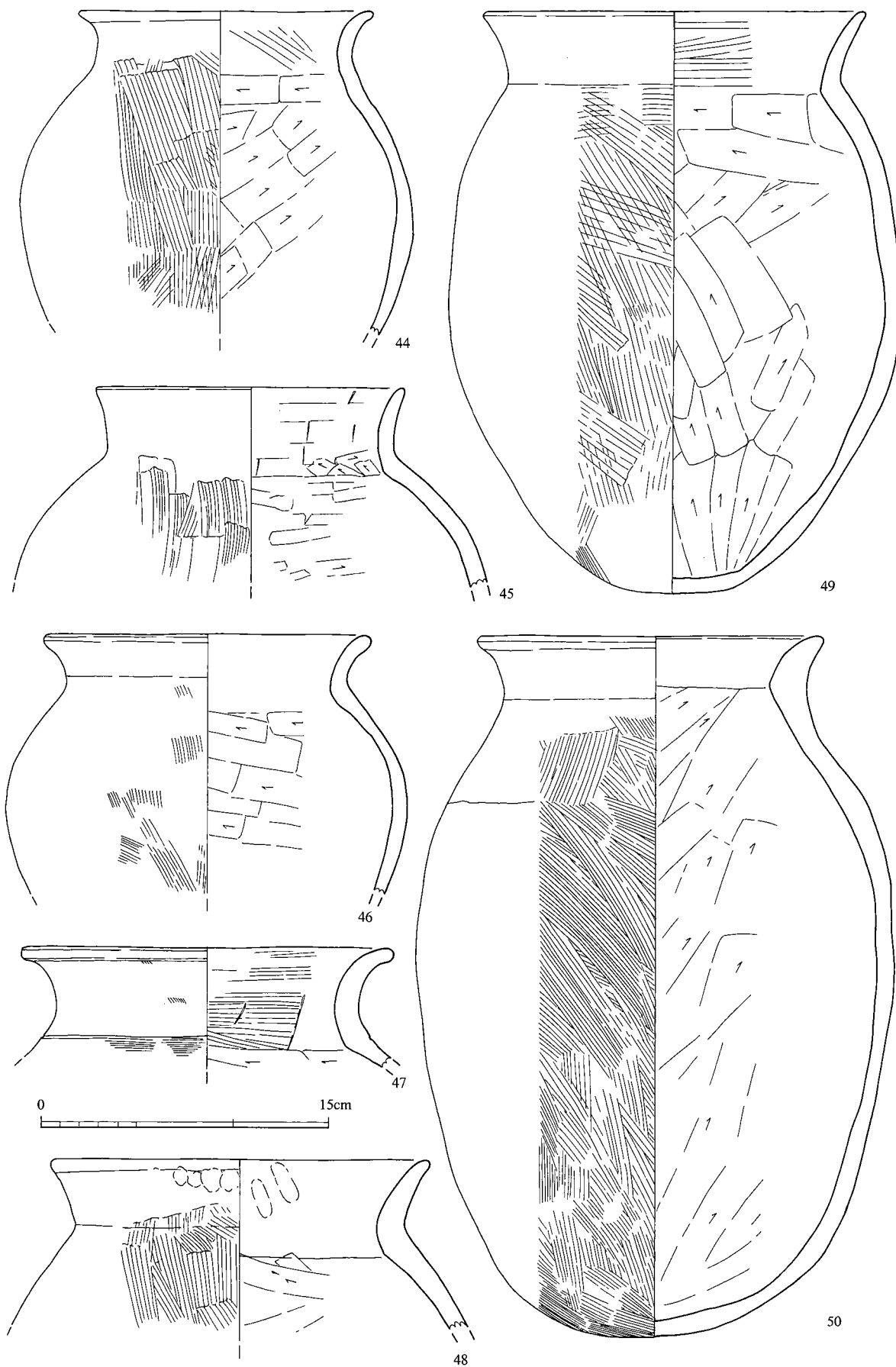
1の口縁内面には黒斑がつく。2は口縁端部をわずかに摘み上げる。内外面ともにハケメ調整を施す。3は外面に口縁部接合時の貼り付け痕が残る。4は外面にハケメ、内面に極めて粗いハケメを施す。5は口縁部上面にもハケメを施している。12は口縁を角張って仕上げしており、外面には口縁部



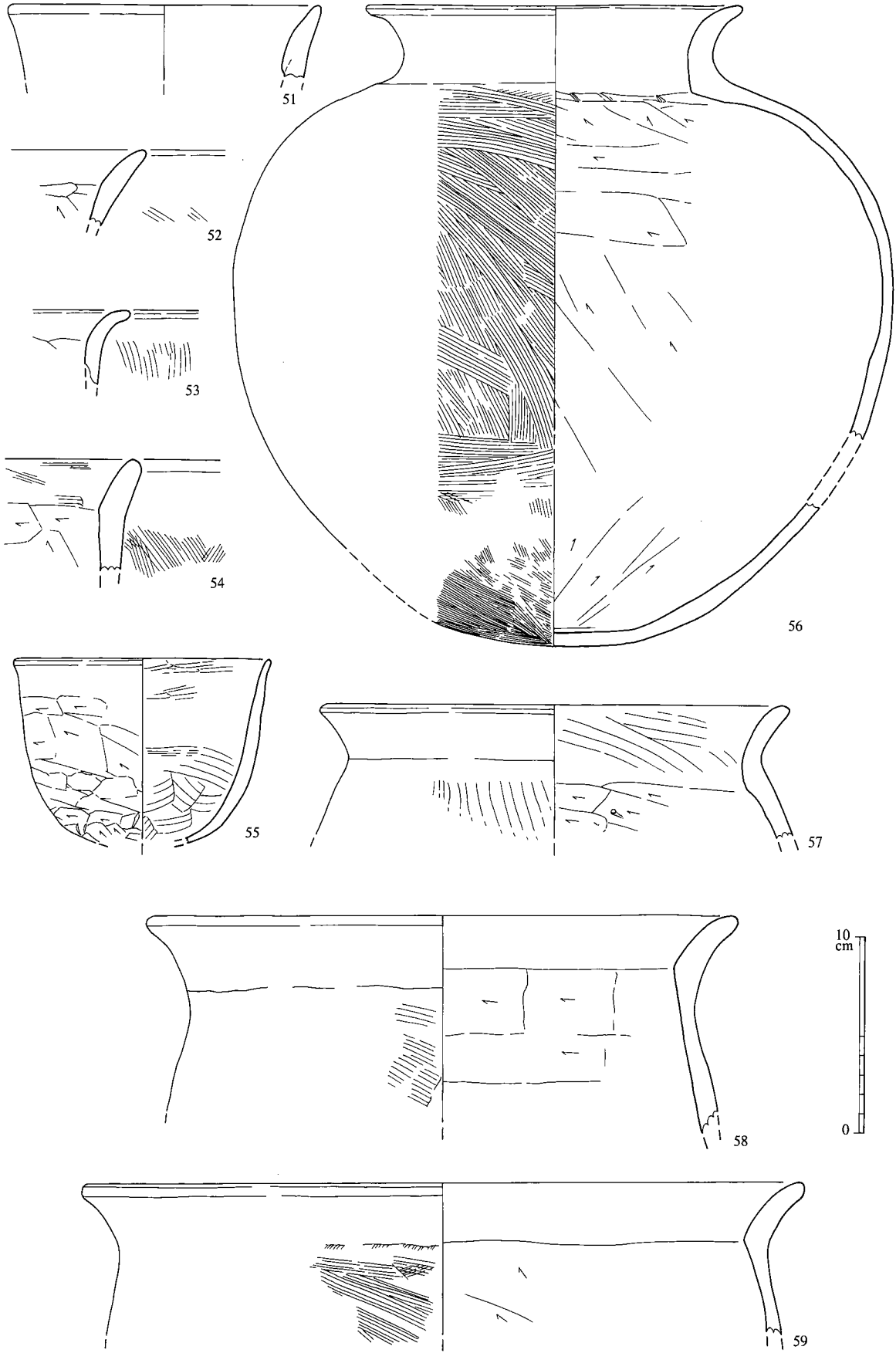
第113图 2区14号沟出土土器实测图 (1) (1/4)



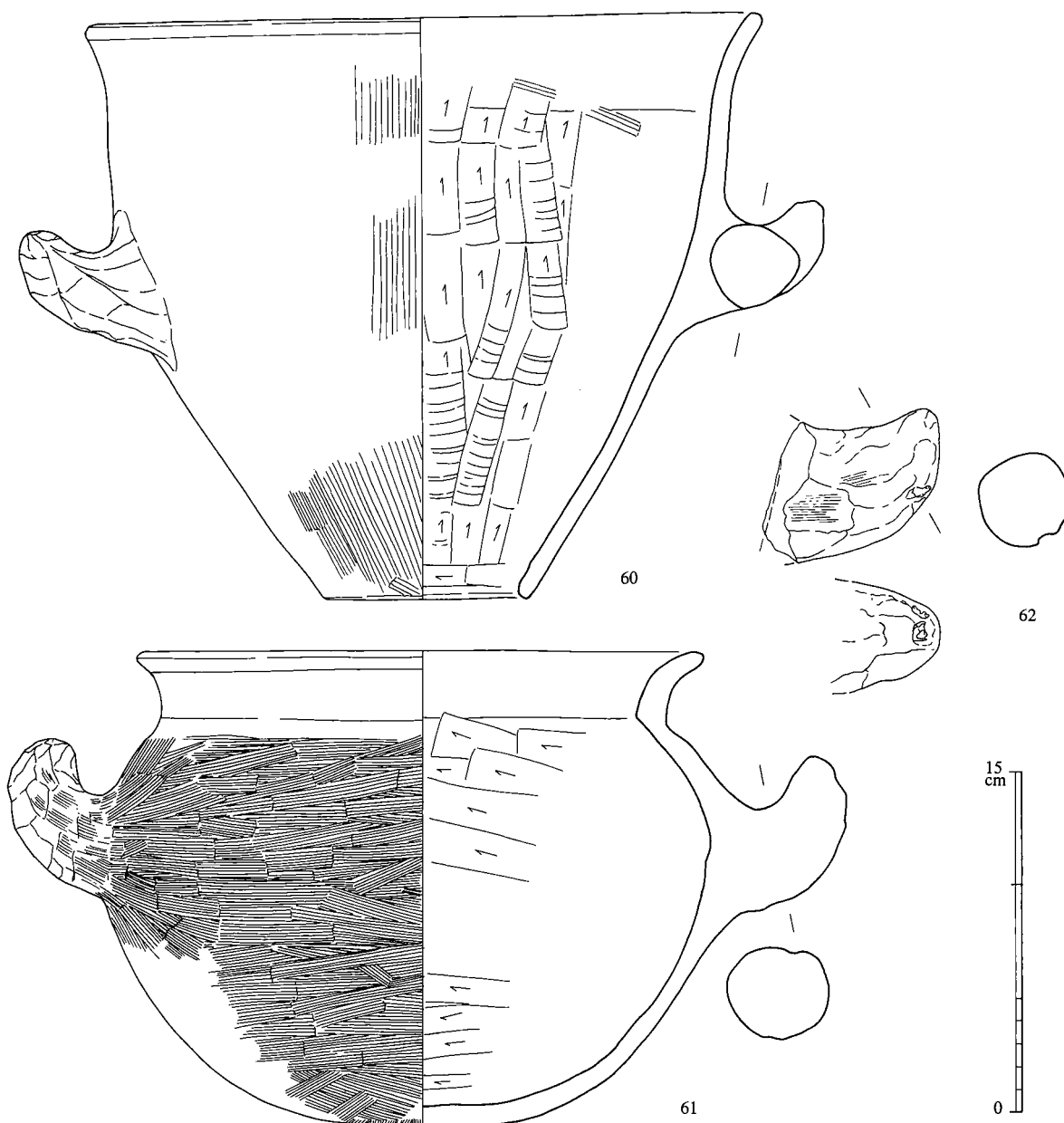
第114图 2区14号沟出土土器实测图(2)(1/3)



第115图 2区14号沟出土土器实测图 (3) (1/3)



第116图 2区14号沟出土土器实测图 (4) (1/3)



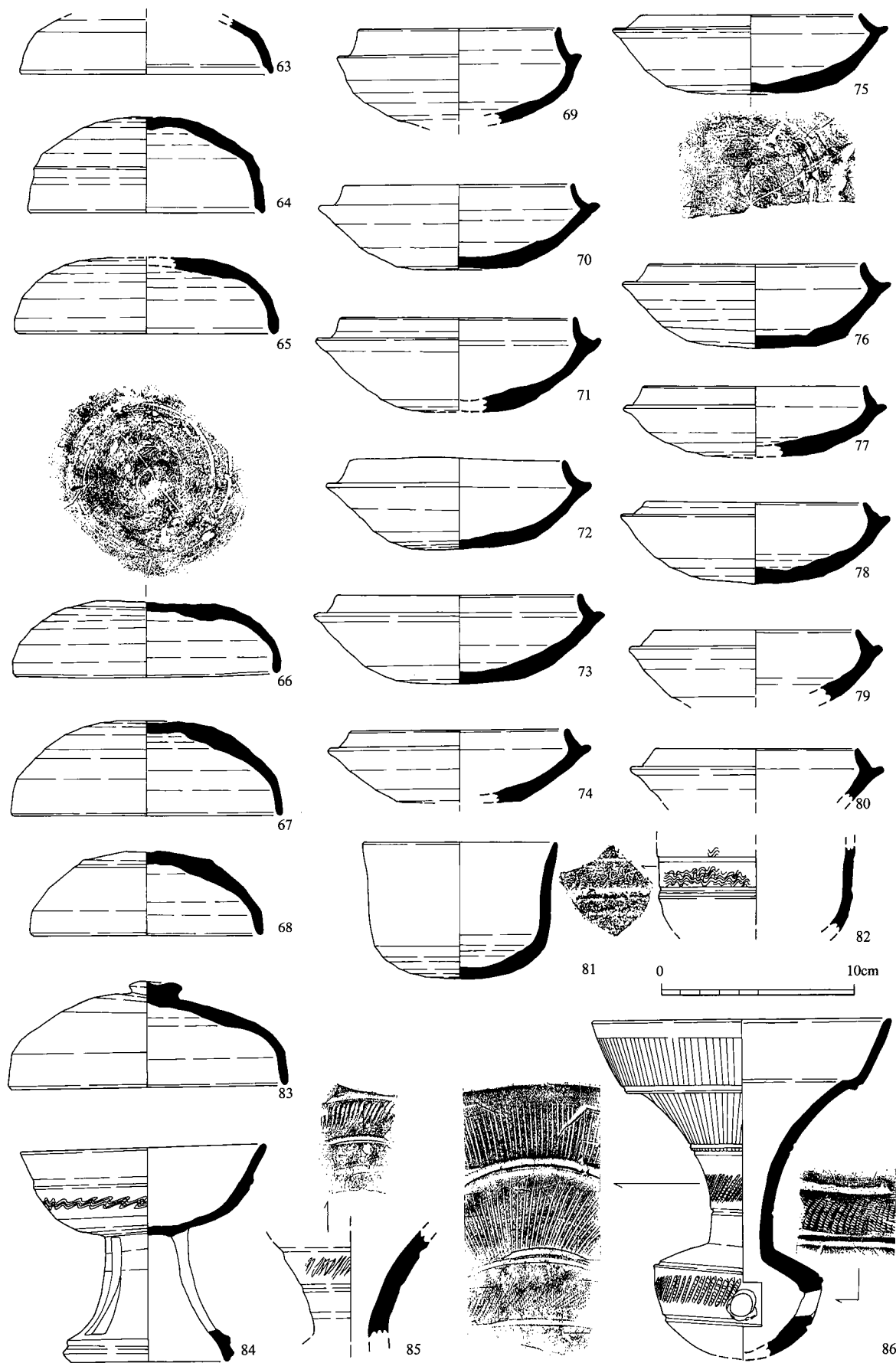
第117図 2区14号溝出土土器実測図 (5) (1/3)

接合時の貼り付け痕が残る。13は口縁が内側にも突出するもので、外面には煤が付着している。15は小形の甕で、粗製であるが内外面に丹塗を施している。19は底部が大きく胴部下半が張るもので内面底部には指頭圧痕が残る。外面底部には植物の茎の圧痕が残る。20の外面底部にはハケメがわずかであるが残存する。

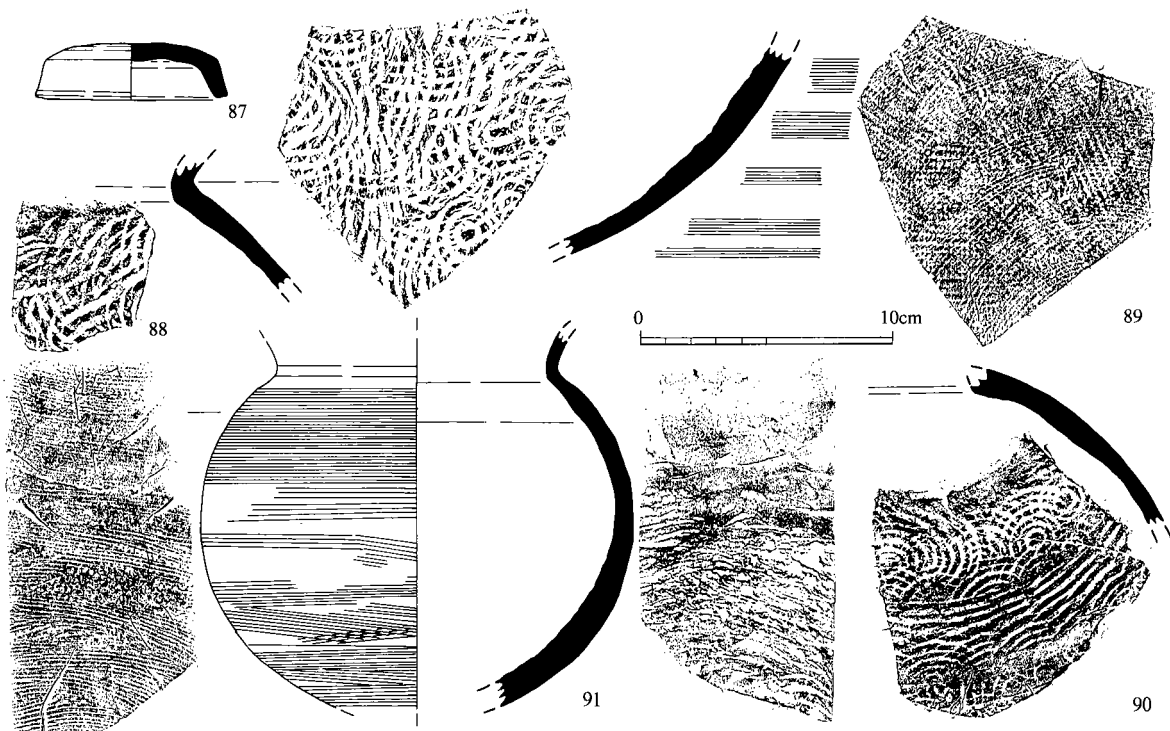
21は弥生土器の椀である。外面は横方向のミガキ、内面はナデ調整。内外面ともに丹塗を施す。

22は弥生土器の壺である。外面は斜めのハケメ、内面は横ハケである。

23～27は土師器椀である。外面底部から胴部はケズリ。口縁部から内面にかけてはナデである。24の調整はミガキ。25の外面底部はケズリ、その他の部分はミガキである。26の外面はケズリを行うがケズリの無い部分はハケメが残存する。内面はハケメの後、ミガキである。27の口縁部は外面縦方向のハケメ。底部付近は不定方向のハケメ。内面はハケメが残存する。



第118图 2区14号沟出土土器实测图 (6) (1/3)



第119図 2区14号溝出土土器実測図 (7) (1/3)

28～33は土師器の杯である。28の外底部はケズリ調整。29は口縁部が大きく内傾する。外底部付近は不定方向のケズリ、その他の部分はミガキである。31は口縁が大きく広がる。外面の一部に黒斑がつく。

32は小形の蓋である。

34・35は高杯脚部である。いずれもケズリによる調整を施す。35は脚端部が大きく歪む。

36は小形の壺で内面以外はミガキを施す。

37は布留系の甕の口縁である。端部を摘み上げている。38は小形の甕。口縁が外反する。39は口縁が直立する小形甕である。外面はハケメ、内面はミガキである。40は小形の甕。口縁上面にハケメを施す。

41～48・56は胴部が大きく張るタイプの甕である。球形に近い胴部をもつものと考えられる。43の頸部内面には強い指頭圧痕が残る。46は内面に煤が付着している。

49・50・57～59は長胴の甕である。50は肩部より下に煤が付着している。また、横置きで焼成されたのか胴部に黒斑がつく。58は頸部外面に粘土の接合痕が残る。51～54は胴部の張らない甕である。55は胴部の張らない小形の甕である。外面はケズリ。内面は粗いハケ調整である。

60は甑である。口縁の外反は小さい。外面には把手の接合痕が明瞭に残るが、内面に接合時の膨らみはみられず、把手接合後に内面のケズリを行ったと考えられる。

61は把手付の甕である。球形の胴部を持ち、口縁部を強く外反させる。62は把手で、下側に2箇所のかぼみが残る。

63～91は須恵器。63～68は杯蓋である。63・64は口縁端部に段があり、他のものより古い形態を残す。66の外表面天井部にはヘラ記号あり。68の外表面天井部分はヘラ切り未調整。

69～80は杯身である。69は立ち上がりもしっかり直立しており、体部も深く古い形態を残す。75

の外面底部にはヘラ記号がある。

81は深い体部をもつ椀である。外面底部は回転ヘラケズリ、その他の部分は回転ナデである。82も同様の器種かと思われるが、胴部に波状文と沈線を施す。

83は有蓋高杯の蓋である。84は高杯である。杯部外面に波状文を施し、脚部には3箇所の方形の透かしを開ける。

85・86は甕である。86は口縁が大きく広がる。口縁外面はカキメの後、強いナデにより沈線をつくっている。穿孔は外面から行っている。

87は小形壺の蓋である。88から90は甕の胴部である。91は球形の胴部を持つ小形壺。外面は全面にカキメを施す。

17号溝（図版60）

調査区の北端やや西よりから南に延びる溝。幅1m、深さ30cm前後である。遺物は土器が出土しているが細片で図化できなかった。

（4）第4面の遺構と出土土器

a. 竪穴住居跡

32号竪穴住居跡（図版60・61、第120図）

調査区の南東部で検出した。東西4.2m、南北2.8m + α で深さは約0.1mである。床面で複数のピットを検出しているがはっきり主柱穴といえるものは無い。北壁中央部にカマドを付設する。床面下は全体に一段深く掘り込んでいる。遺物は土師器が出土している。

カマド（図版61、第120図） 両袖が極端に短く検出に失敗した可能性がある。袖の内側は火を受け赤変している。また、カマド内部の床面も火を受けた痕跡があるので、カマド内は本来の大きさであろう。カマド東袖外側には灰が検出された。また、その東側から灰が溜まったピットを検出している。

出土土器（図版78、第121図1～14） 1～3は土師器の甕である。2の内面には指頭圧痕が強く残る。3は底径が大きく、胴がやや張るタイプである。

4は小形の甕で口縁端部をやや角張って仕上げている。

5は小形の壺で、口縁を強く外反させている。

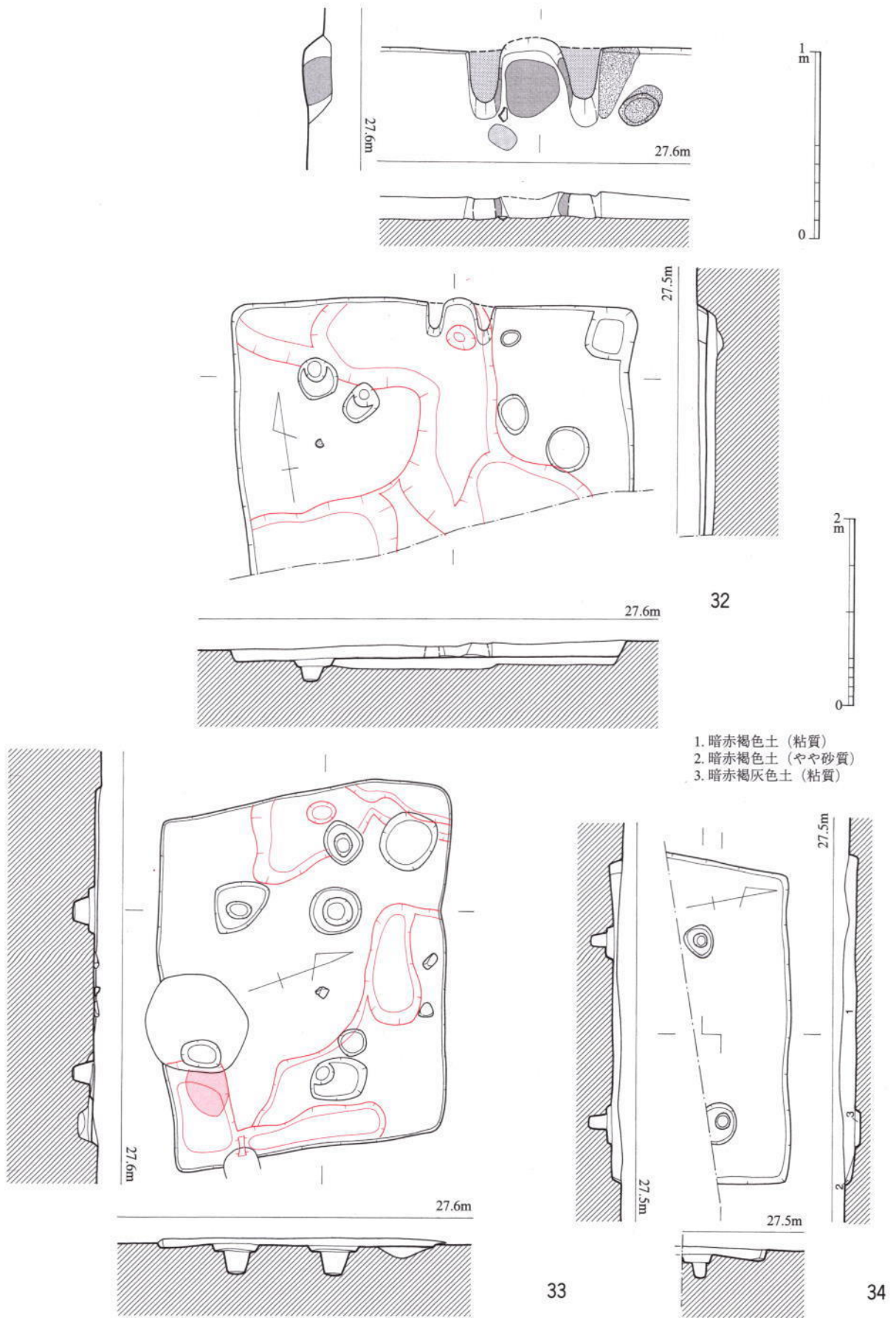
6は高杯の杯部である。口縁は外側へ大きく伸びる。内外面にミガキを施し、丹塗。口縁上端面に放射状に暗文がある。

7～13は土師器椀。7の外面は横方向のミガキ。内面は縦方向のミガキである。8～11の外面底部はケズリ。1 2 の外面底部付近には黒斑がつく。1 3 は小形で、外面はハケメ、底部に黒斑がつく。

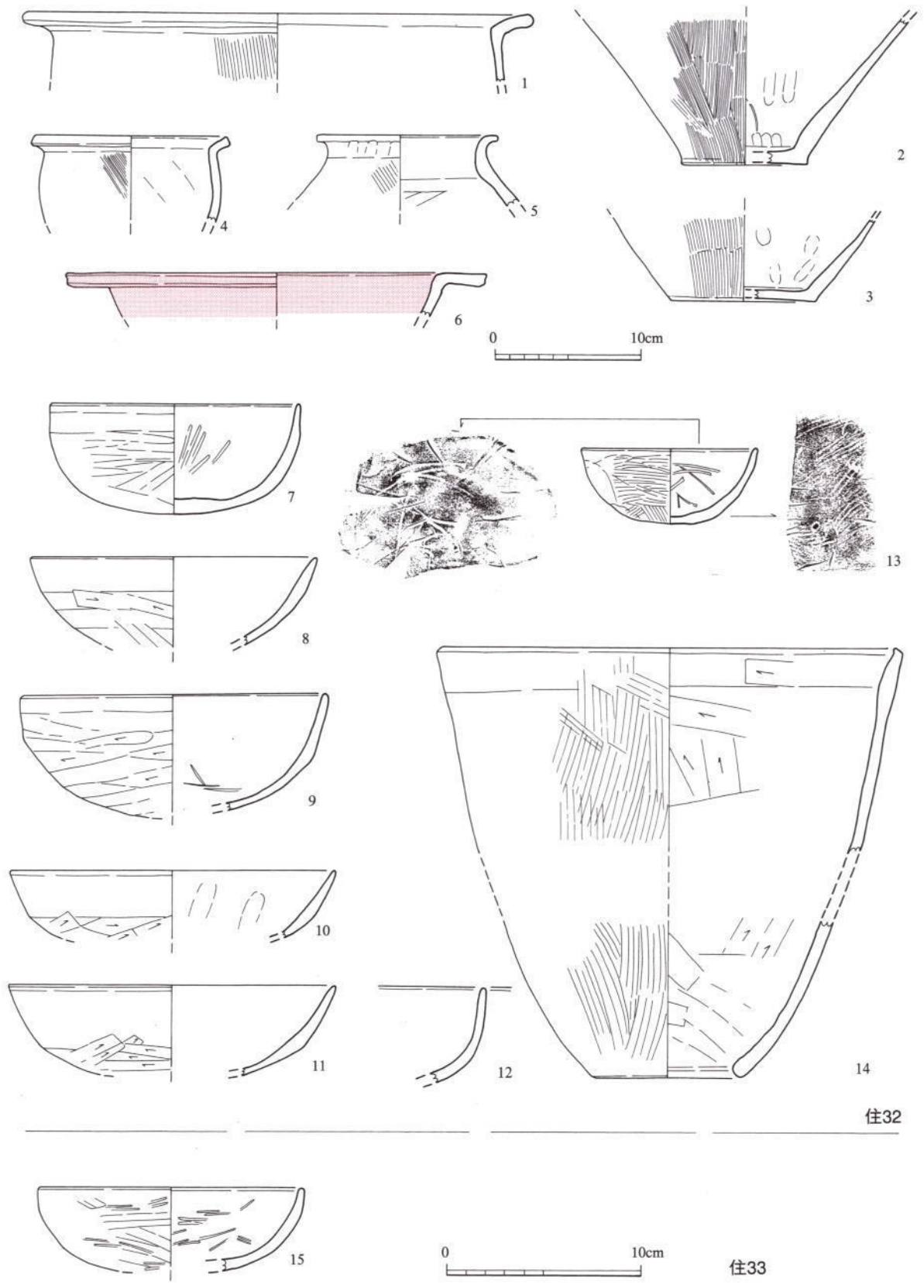
14は甗片である。全体が出土していないので把手がつくかどうかは不明である。口縁部の外反は弱い。

33号竪穴住居跡（図版62、第120図）

調査区の中央部南よりで検出した。東西3.7m、南北3.0mの略平行四辺形を呈する。壁の深さは5cm程である。複数のピットを検出しているが、いずれが主柱穴となるかは不明である。カマドは無



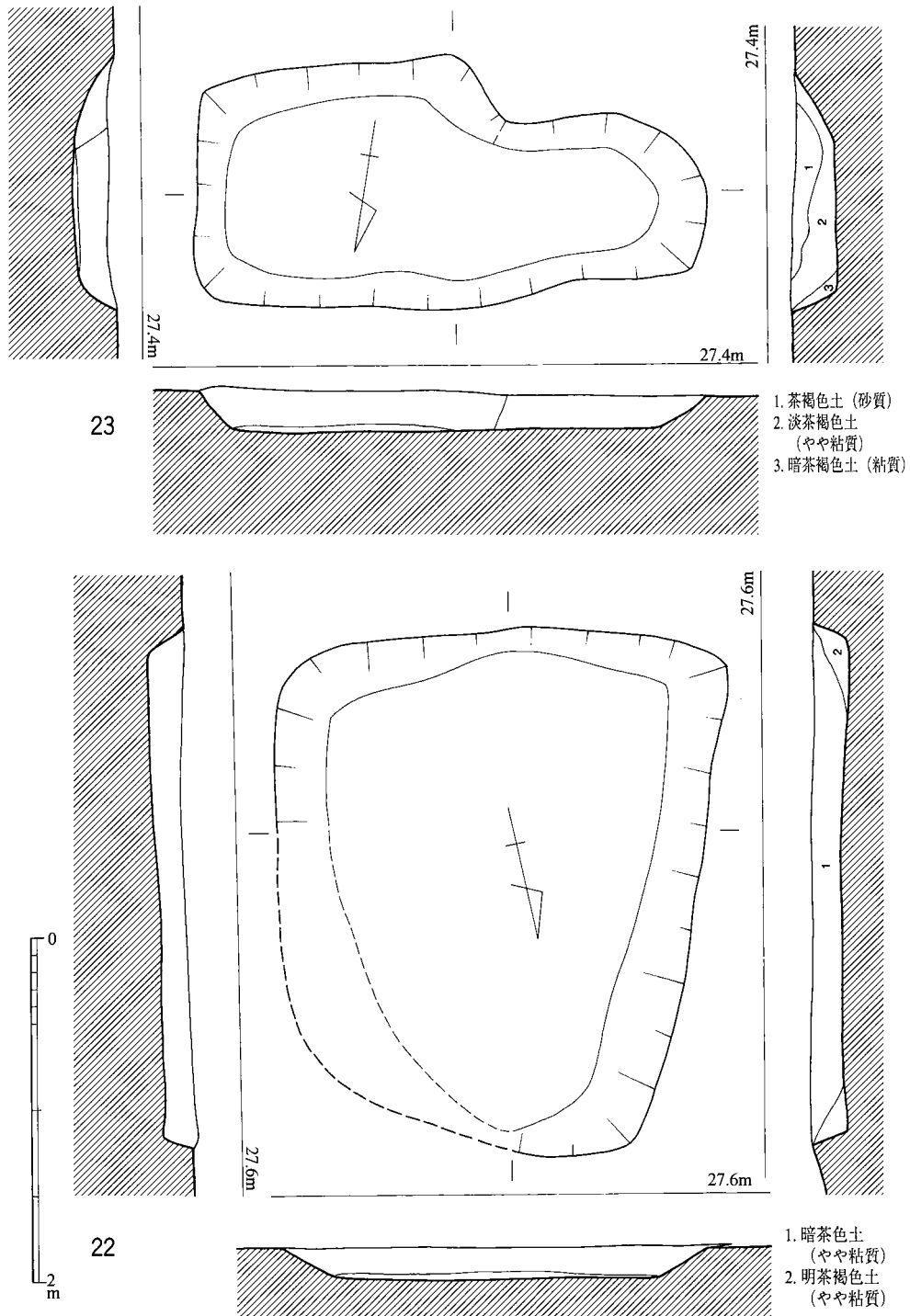
第120図 32~34号竪穴住居跡・32号住居カマド実測図 (1/60、1/30)



住32

住33

第121図 32・33号竖穴住居跡出土土器実測図 (7~15は1/3、他は1/4)



第122図 22・23号土坑実測図 (1/40)

いが、南東隅で焼土面を検出している。床面下は壁に近い部分を一部浅く掘り込んでいる。遺物は土師器が出土している。

出土遺物 (図版78、第121図15) 15は土師器の椀である。器壁はやや厚い。外面はケズリの後、胴部付近はミガキを行う。内面はミガキ調整を施す。内面見込み部分はナデ調整を行っている。

34号竪穴住居跡 (図版62、第120図)

調査区中央部南端で検出した。東西3.5m、南北1.3m + α である。壁の深さは0.1m程である。ピット2基を検出しており、支柱穴になると考えられる。カマドは検出できなかった。床面下の掘り込み等は無い。遺物は出土していない。



第123図 22号土坑出土土器実測図 (1/4)

b. 土坑

22号土坑 (第122図)

調査区南よりで検出した。2号住居と重複し、これより古い。東西2.9、南北1.5の不整形で深さは0.2mである。埋土はレンズ状の堆積である。遺物は弥生土器が出土している。

出土遺物 (第123図1) 2は小形の甕である。口縁はやや角張って仕上げられている。内外面の調整はナデである。

23号土坑 (図版63、第122図)

調査区南西よりで検出した。東西2.5m、南北3.0mの台形を呈する。深さは0.2m。埋土はレンズ状の堆積である。遺物は出土していない。

IV. まとめ

堂畑遺跡の1区・2区の調査では弥生時代～中世の間の1000年を超える人々の生活、各種活動の痕跡を明らかにすることができた。しかし、それぞれの調査区において複数の遺構面が存在し、かつ調査方法の不備もあって同時期の遺構が複数面に及ぶ複雑な様相を呈している。そこでここでは、時代別に遺構配置図（第124・125図）を作成し提示するとともに、各時期の遺構の特徴について気が付いたことを述べてまとめに代えることにしたい。

弥生時代（第124図上）

弥生時代の遺構としては1区第3面で検出された14・16・22・27～30号竪穴住居跡と13号土坑、1区第2面検出の11号土坑、2区第3面の18号土坑がある。いずれも出土土器からすれば弥生時代中期後半～中期末に比定できると考えられる。また、出土土器が少なく時期決定に不安を残す1区第2面検出の9号土坑、2区第4面検出の22・23号土坑もこの時期に収まる可能性がある。

弥生時代の遺構は分布図にも見るように特に1区に集中し、1区の中でも南西部に多い。検出遺構は竪穴住居跡を主体とするが、上述したように本時期の遺構は非常に検出に苦慮したために、調査段階での平面形など遺構の理解に不安を残すものも多い。また、炉跡の検出できなかった竪穴住居跡もあるので、本来は別種の遺構を誤認したことも懸念される。ただ、22号竪穴住居跡では覆土から一括で比較的まとまって遺物が出土しており、床面では炉跡も検出されているので、竪穴住居跡を含む集落遺跡となることは確実であると考えられる。また、11号土坑、13号土坑は比較的まとまって土器が出土しており、土坑となることはほぼ間違いないだろう。特に13号土坑は27号竪穴住居跡の西南壁に接して構築されているので、同住居跡の壁際土坑となる可能性も考えられる。したがって、美津留川の沖積作用の激しい地形であったと推測される場所に、竪穴住居等からなる集落が展開していたことは間違いのないようである。

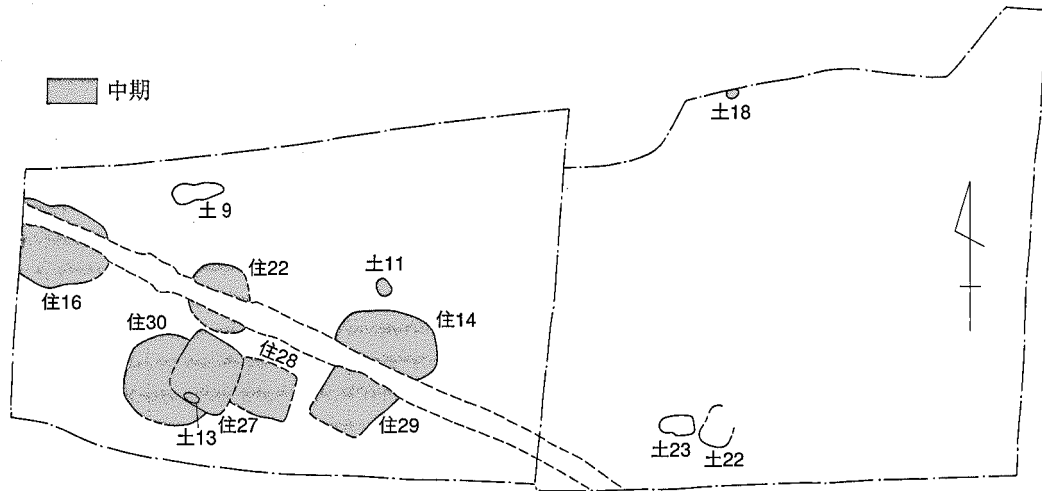
また、2区第3面18号土坑は検出面標高27.8m、1区第3面30号竪穴住居跡は検出面標高28.05mを測り、80cm近くの差である。したがって、弥生時代の自然地形は美津留川に向かって、相当、急に傾斜していたと考えられる。

堂畑遺跡と美津留川を挟んで隣接する関係にある仁右衛門畑遺跡では前期末～中期前半、後期の竪穴住居跡等、多数の弥生時代の遺構が検出されている。しかしながら中期後半の遺構となると、バイパス幅等限定された調査範囲ではあるが、ほぼ皆無と言ってよい状況である。あるいは、その時期に川を挟んだ堂畑遺跡周辺に集落が移動した可能性を考慮すべきかも知れない。なお、調査中の堂畑遺跡3次調査でも弥生時代中期～後期の遺構が比較的まとまって検出されており、本調査の遺構と時期的に平行するようである。2区では弥生時代の遺構は少ないので、途中、弥生時代の遺構が途切れて、堂畑遺跡1区検出の一群とは別単位と捉えられるかどうか、今後の調査の進展、調査結果の報告に期待することにしたい。

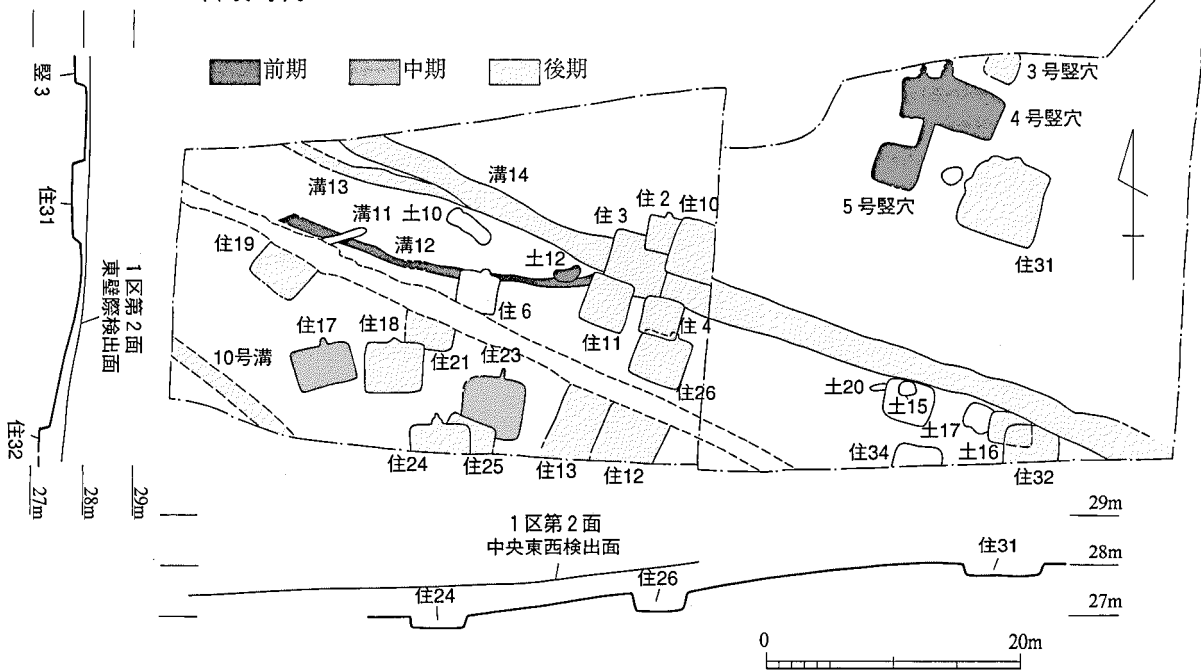
古墳時代（第124図下）

図では時期を細分し、前期、中期、後期と網の調子を変えて示した。前期の遺構で確実なもの

弥生時代



古墳時代



第124図 弥生時代・古墳時代遺構配置図（1/600、ただし断面図鉛直方向は1/150）

しては古式土師器を一括して出土した2区第2面4・5号竖穴状遺構があり、古墳時代初頭前後の土器を出土した1区第3面12号溝、12号土坑もこの時期に属する可能性がある。4号竖穴状遺構は二つの方形の区画を接続したような形態である。東側の区画では壁際を排水のためか溝状に掘り下げており、中央部分に貼り床を厚く施し湿気を防ぐような措置を施していたと考えられる。一方、4号竖穴状遺構の西側の区画では北壁に炉のような構造物を設置していた可能性がある。5号竖穴状遺構も4号竖穴状遺構東区画に見るように壁際を溝状に掘り下げており、炉跡も発見されていないので単純な竖穴住居跡とは考えられない。なおかつ溝で4号竖穴状遺構と連結していた可能性が高く、さらに同様の溝が北、調査区外へと伸びている。これらの遺構の機能について推測する場合に根拠と

なるような特殊な遺物は出土していないが、排水溝や防湿のための貼り床の存在からすれば、例えば鉄器製作工房などの工房の可能性を考えても良いかも知れない。類例、機能等について類例を御教示いただければ幸いである。

中期の遺構としては1区西南に位置する17号竪穴住居跡、23号竪穴住居跡がある。いずれもカマドを設置しているが、須恵器等が出土せず、杯部の屈曲する高杯を含むので仁右衛門畑遺跡資料等を材料とした土師器編年（重藤2000）の6期頃に位置づけることが出来よう。周辺では塚堂遺跡、仁右衛門畑遺跡と並び出現期のカマド付竪穴住居跡として注目できる。次の後期の遺構とは23～25号竪穴住居跡の切合いの存在から考えて、集落としてはほぼ途切れることなく展開しているものと考えられる。

後期の遺構は数が多く、本遺跡の中心時期といえる。確実なものとしては1区第2面の2～4・10～13号竪穴住居跡、第3面の6・19・21・24～26号竪穴住居跡、10号溝c・14号溝、2区第2面の31号竪穴住居跡、3号竪穴状遺構、2区第3面16号土坑、31号竪穴住居跡がある。竪穴住居跡はカマド付のものが大多数を占めている。仁右衛門畑遺跡の土師器編年而言えば8・9期に相当する。1区第2面の2～4・10～13号竪穴住居跡はカマドが確認できなかつたり、下層の14号溝上層包含層との区別が困難であったりしたために、平面形等を誤認してしまった恐れがあるが、これらも本時期に属する遺構である。当該期に属する14号溝は1・2区を西北～東南方向に横断する比較的規模の大きな直線的な溝である。13号溝と切りあうが、土器からすればいずれも仁右衛門畑遺跡土師器編年7期を中心とする時期と考えられる。10号溝は上層の10号溝a・bにおいて奈良時代の土器が出土しているが、下層の10号溝cでは当該期の遺物しか出土しないので、後期には掘削されていた可能性が高い。また、2区第3面15・17・20・21号土坑、2区第4面33・34号竪穴住居跡も古墳時代中期～後期と推測されるが、土器が少ないため細かな時期決定ができない。このほか出土遺物が無い11号溝も切合いから言えば古墳時代のものであろう。

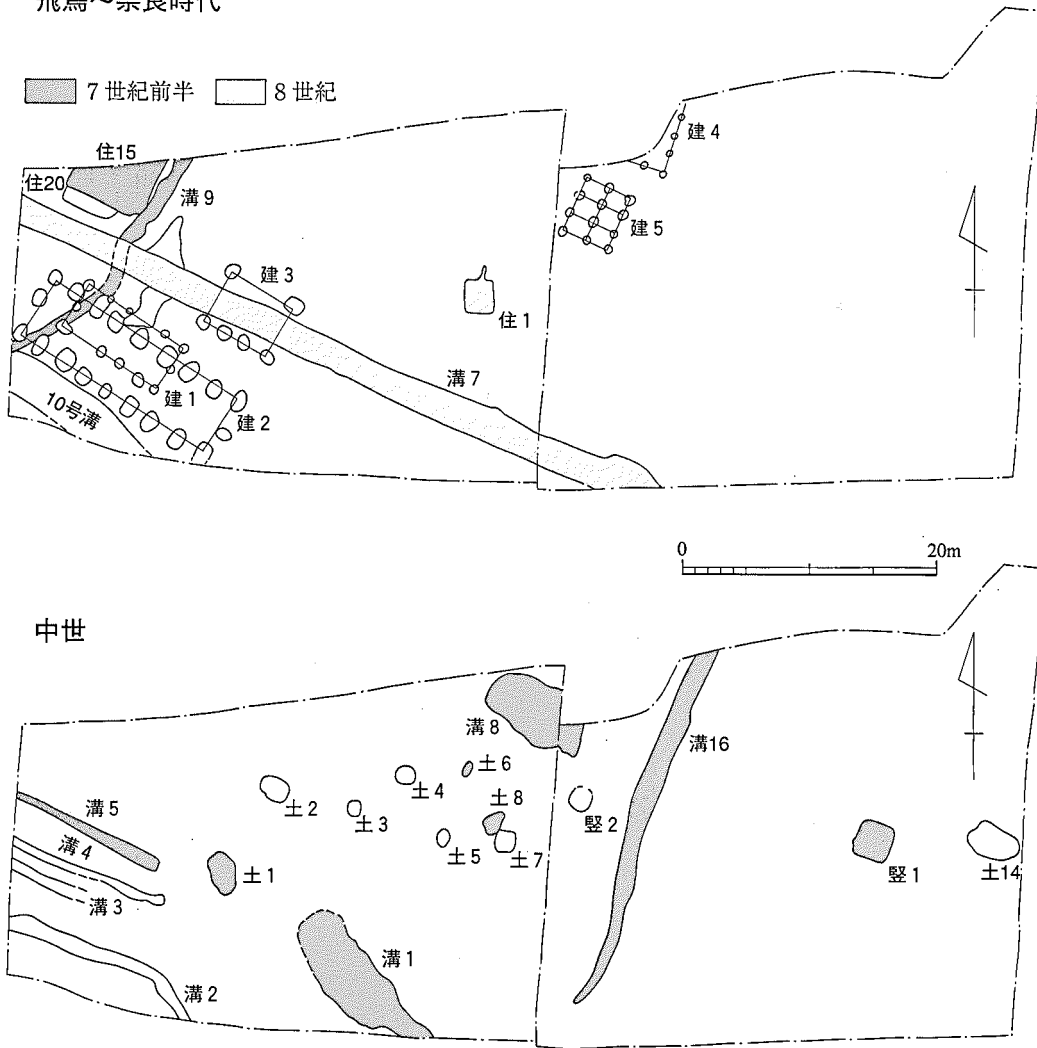
なお、本期の竪穴住居跡は1区第2面、1区第3面、2区第2面と複数面に及んでいる。住居跡の中でも東北部に位置する31号竪穴住居跡では遺構検出面標高は28.05m前後、住居跡床面標高は27.85m前後となる。これに対して調査で検出された住居跡群の中で最も南、すなわち美津留川寄りに位置する24号竪穴住居跡では遺構検出面標高は27.00m前後、住居跡床面標高は26.75m前後を測る。いずれの数値においても1mを超える差があることに驚かされる。

また、図には南北方向に2区第2面3号竪穴状遺構－同31号竪穴住居跡－2区第4面32号竪穴住居跡の断面図と1区東壁際での第2面検出面断面図を重ねて示した。東西方向では2区第2面31号竪穴住居跡－1区第3面26号竪穴住居跡－同24号竪穴住居跡断面図と1区第2面中央部での検出面断面図を重ねてみた。これによると1区第2面の北側では古墳時代遺構面を捉えているのに対して、南側および西側では1区第2面のさらに下に古墳時代遺構面があることがわかる。1区の発掘調査では自然地形の傾斜を意識して表土剥ぎを実施したが、その際に想定していた以上の比高差であったためにこのような食い違いが生じているのである。本遺跡のような沖積地において自然地形に則して遺構面を検出することがいかに難しいことであるかを、改めて感じている。

飛鳥～奈良時代（第125図上）

飛鳥時代の遺構として確実なものには、7世紀前半の土器を出土した1区第3面の東北部に位置す

飛鳥～奈良時代



第125図 飛鳥～奈良時代・中世遺構配置図 (1/600)

る15号竖穴住居跡と9号溝がある。一方、奈良時代のものには1区第2面7号溝、これに連続する2区第2面15号溝と1区第2面1号竖穴住居跡がある。7号溝・15号溝は弥生・古墳時代の遺物を含むが、8世紀前半の遺物を下限とするので、その時期に機能していたと考えられる。一方、1号竖穴住居跡では量は少ないながらも8世紀後半でも新しい時期の土器がセットで出土している。

時期決定に足る遺物は出土していないが、1区第2面西南部に位置する1～3号竖穴住居跡、2区西北部に位置する4・5号掘立柱建物跡も本時期に属すると推測される。このうち1・2号掘立柱建物跡は1号掘立柱建物は掘方が方形を基調としていること、この1号掘立柱建物跡を切ることで規模を縮小して建替えられたと思われる2号竖穴住居跡が7号溝突出部に切られることから7号溝以前の時期、すなわち7世紀後半頃と考えられる。柱穴を完全に検出できなかったなど掘立柱建物と断定するには難点がある3号掘立柱建物は1号掘立柱建物跡と梁の柱筋が一致することから、建物であったとすれば1号掘立柱建物と同時期の可能性さえ想定される。これらが7世紀後半とすれば、1号建物跡のように他遺跡での同時期の建物跡と比較しても大形の部類に入るものがあり、その性格・機能が問題となる。その場合、注意されるのは1号建物跡→2号建物跡の切合いが有り、規模を縮小して建替えられており、2号建物跡の規模は取り立てて卓越した関係を指摘できるものではないということ

である。したがって、特に官衙等公的な機能を想定するよりは、一般集落の中での有力者の居館的な性格を考えるべきであろう。仁右衛門畑遺跡でも同様に居館的性格が推測される大形掘立柱建物跡群が検出されており、今後、比較資料をさらに収集し、その類型化等を進める必要を感じる。

なお、一見すれば7号・15号溝も1～3号建物跡と方向がほぼ一致しているように見えるが、この方向は古墳時代の14号溝とも共通しているので、自然地形の等高線にほぼ平行するように配置されたと考えるのが妥当であろう。計画的、人為的な集落の配置等を考える場合に注意されるのは、このような自然地形とは無関係に真北方向に軸をとる1号竪穴住居跡のほうである。

このほかに15号竪穴住居跡と切合いながら方向の一致する20号竪穴住居跡も本時期に属するのであろう。

中世（第125図下）

遺物の出土によって確実に中世の遺構と判断できるものには1区第1面1・6・8号土坑、1・5号溝、1区第2面8号溝、2区第1面1号竪穴状遺構、2区第2面16号溝がある。このうち8・16号溝は本来なら第1面で検出できたはずであるが、周辺の包含層との土質が類似していたために第2面まで掘り下げて検出できたものである。ほぼ調査区の全域に及んでいるが、掘立柱建物跡等明確な居住遺構は検出されていない。このほか出土遺物が少なく時期決定に難があるが、層位的な関係から考えて1区第1面検出の2～4・5・7号土坑、2～5号溝2区第1面検出の2号竪穴状遺構、14号土坑も本時期に該当すると考えられ、埋土の状況もそれに矛盾していない。この時期の遺構面は緩やかに美津留川の方に傾斜しているが、それ以前の時期の遺構と比較するならば、検出面は平坦に近い。

以上のように、堂畑遺跡で検出された弥生時代～中世の遺構を時期別に概観してみた。本遺跡は調査前にはほぼ水平な水田面となっていたが、古墳時代の遺構に見るように、かつては美津留川の方に比高差1mに達する傾斜面を形成していたことが調査によって明らかになった。本調査地点から道を挟んで南には、現在でも1m以上の落差をなして水田が営まれているが、本来は川に向かって傾斜する同一面となっていた可能性が高い。また、古墳時代、飛鳥～奈良時代の遺構ともさらに調査範囲を超えてさらに美津留川の方に広がる様相がうかがえ、どこまで遺構が続いているかが非常に興味深い問題である。また、最上部の遺構面と最下部の遺構面の間にも1m程の包含層が形成されており、美津留川に接するこの地点では非常に沖積作用が大きいことを確認することができた。今後、周辺地の調査が進展し、このような場所にどのような目的で集落が形成されたかという問題を考える材料がさらに豊富になることを期待したい。

版 圖

1 1区西壁土層



2 1区西壁土層細部



3 1区東壁土層

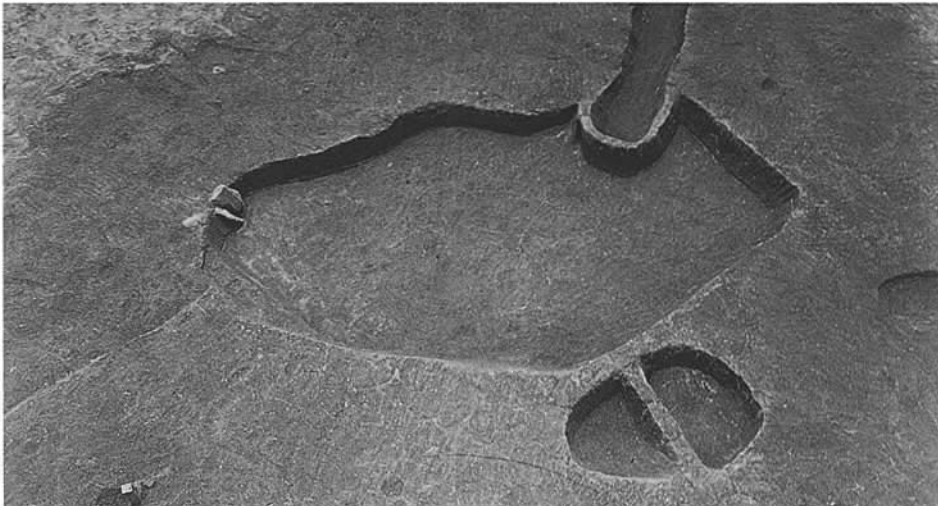




1 1区第1面全景（東から）

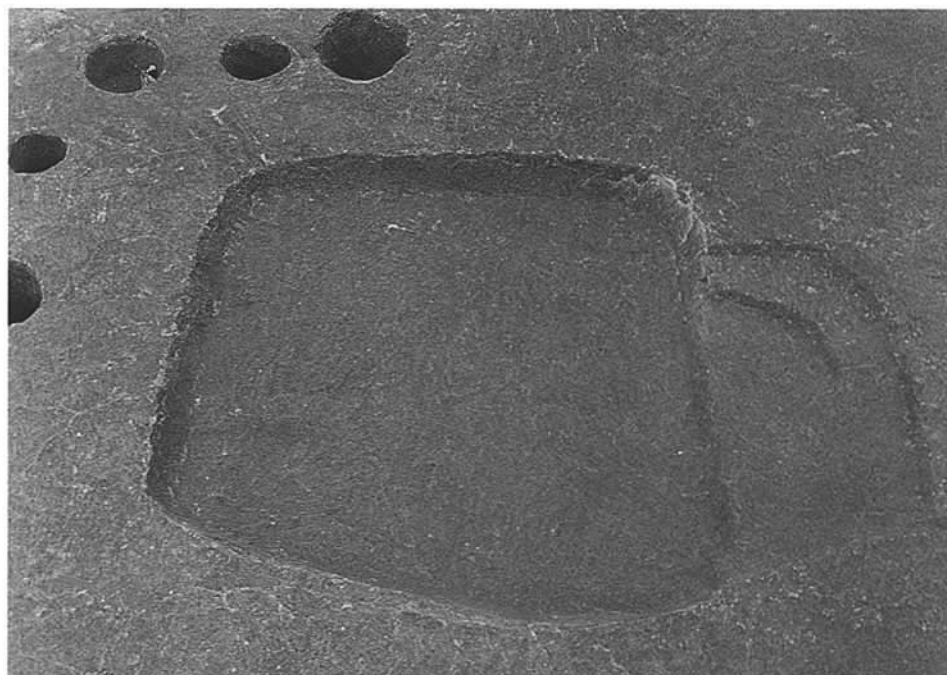


2 1区第1面全景（西から）

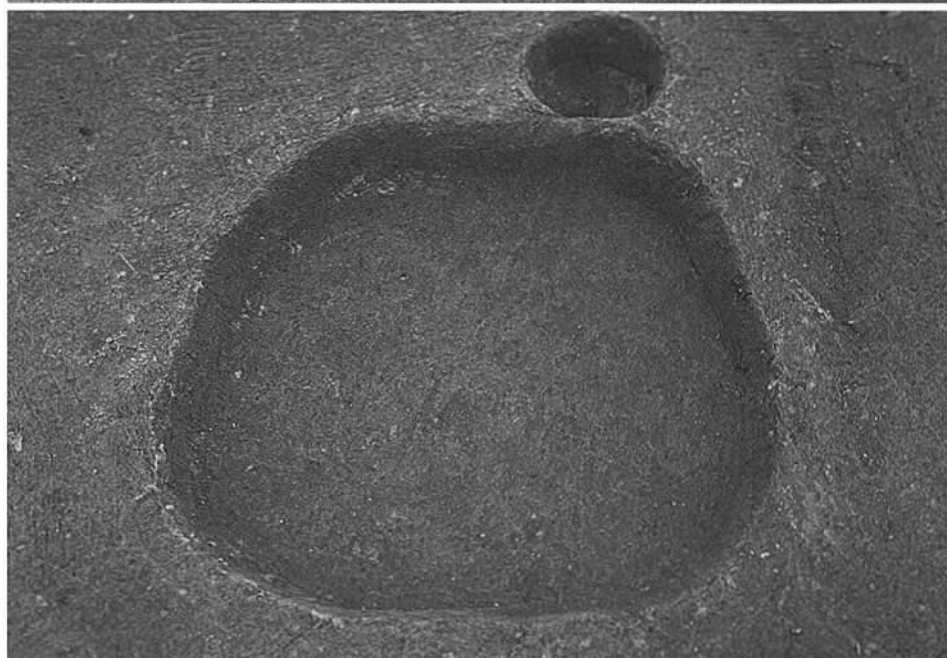


3 1号土坑

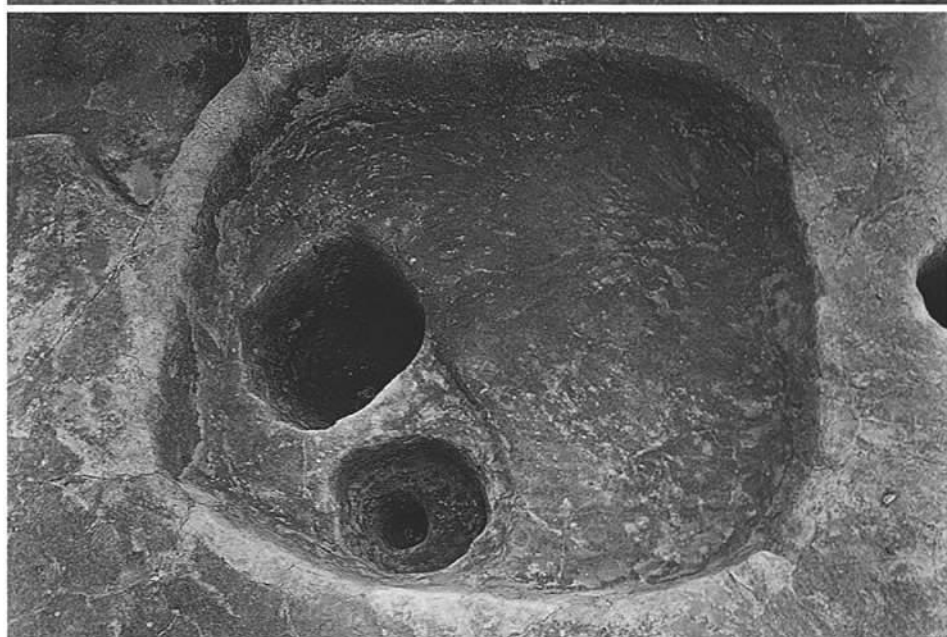
1 2号土坑（北から）



2 3号土坑（西から）



3 4号土坑（西から）





1 5号土坑 (東から)



2 6号土坑 (東から)



3 7号土坑 (西から)

1 8号土坑（東から）



2 1号集石遺構（北から）



3 2～5号溝（東から）





1 1号溝土層（東から）



2 4号溝土層



3 5号溝土層

1 1区第2面全景（東から）



2 1区第2面全景（南から）



3 1区第2面全景（西北から）





1 1区第2面全景（西から）



2 1区第2面全景（西から）



3 1区第2面全景（東から）



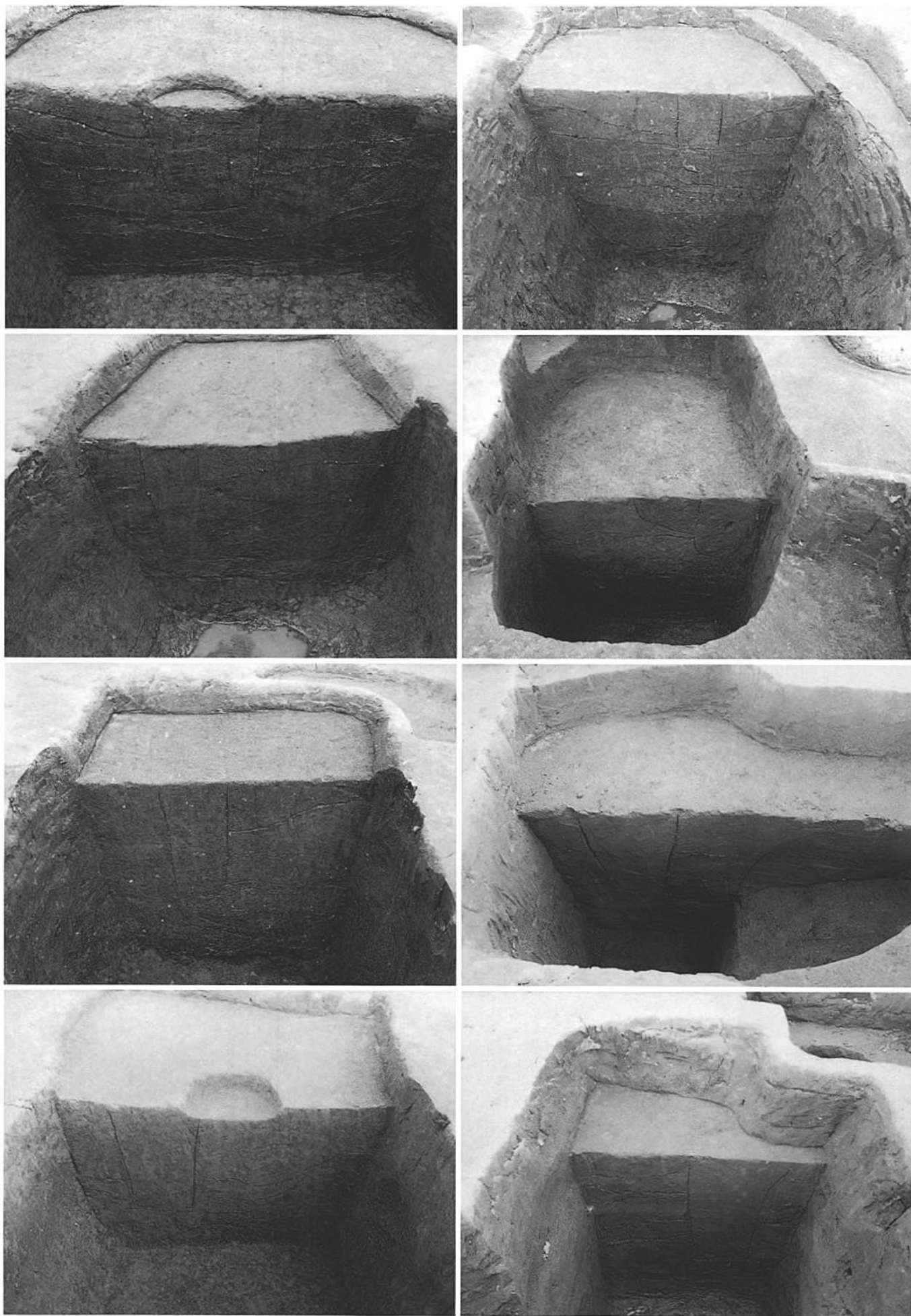
1 1区第2面全景（東から）



2 1・2号掘立柱建物跡
（北から）



3 1・2号掘立柱建物跡
（東から）



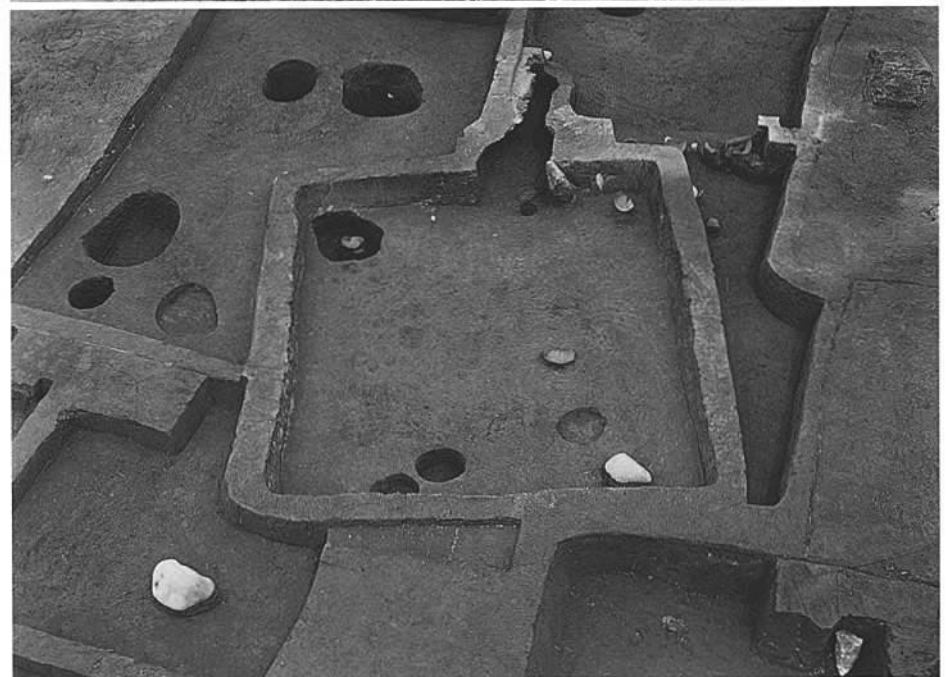
1号掘立柱建物跡柱掘立土層（左列上からP1～P4、右列上からP7・P8・P10・P12）



1 2号掘立柱建物跡（北から）



2 1区第2面東部竪穴住居跡群
（東から）



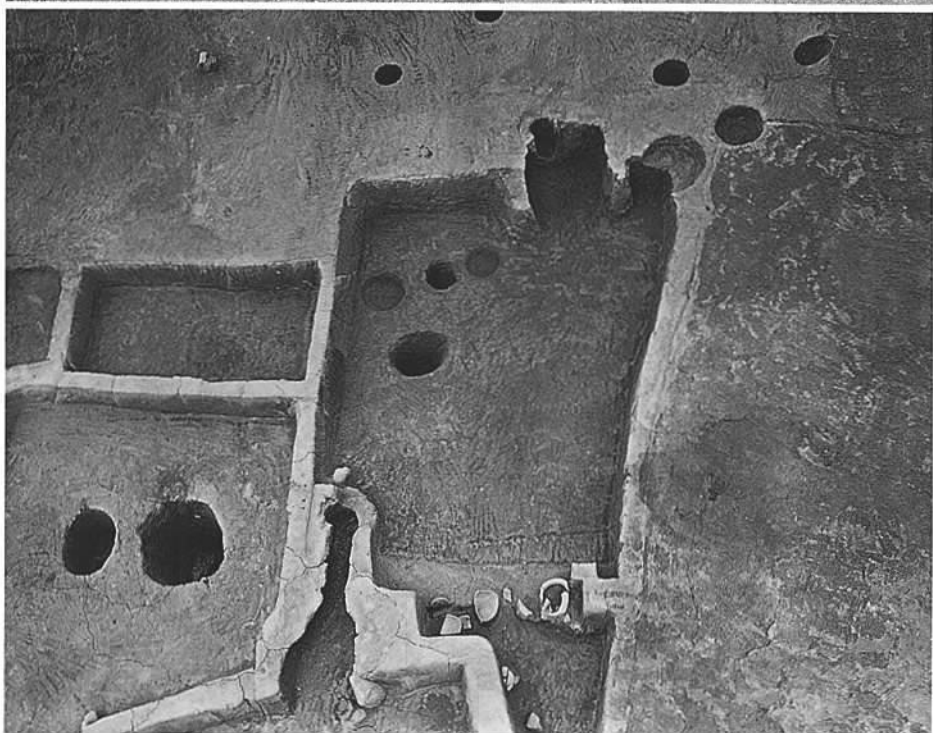
3 1号竪穴居住跡（南から）



1 1号竪穴居住跡カマド
(南から)



2 1号竪穴居住跡P1土器
出土状況

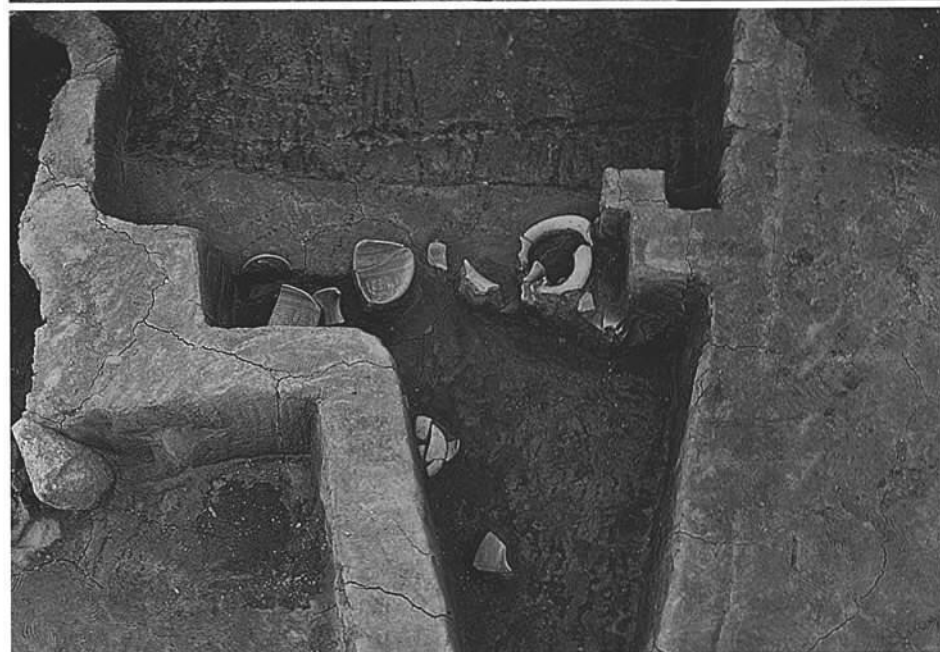


3 2号竪穴居住跡 (南から)

1 3号竖穴居住跡（南から）

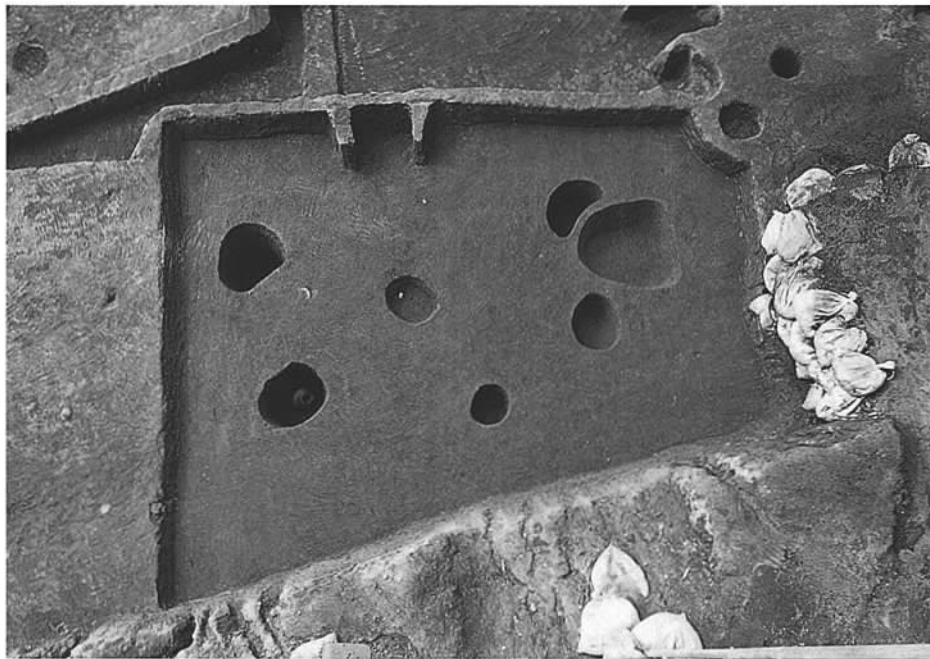


2 3号竖穴居住跡東北部土器
出土状況（南から）



3 4号竖穴居住跡（南から）

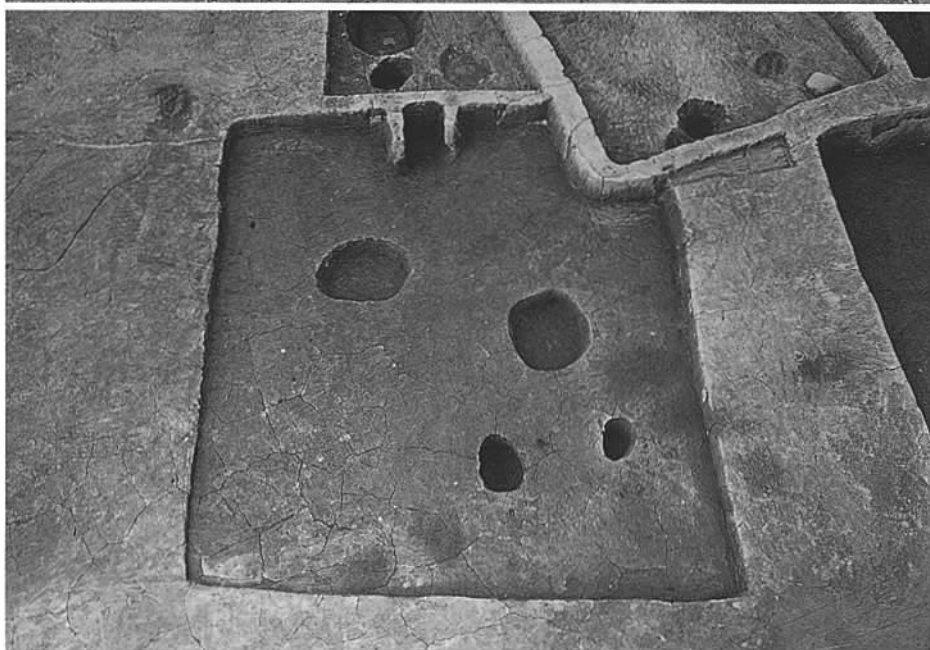




1 10号竪穴居住跡（東から）

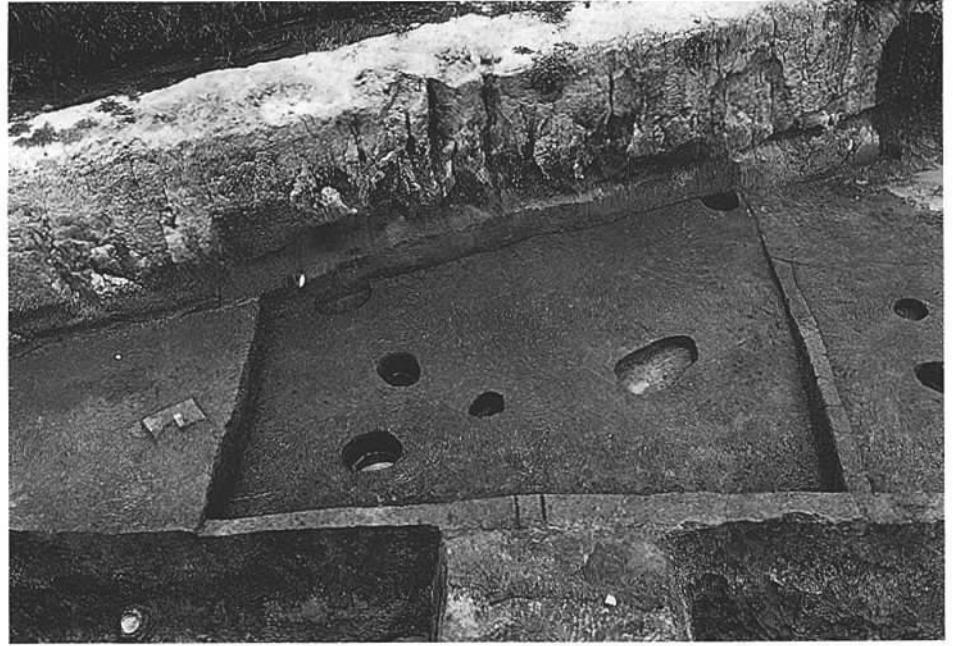


2 10号竪穴居住跡瓶出土状況
（西南から）

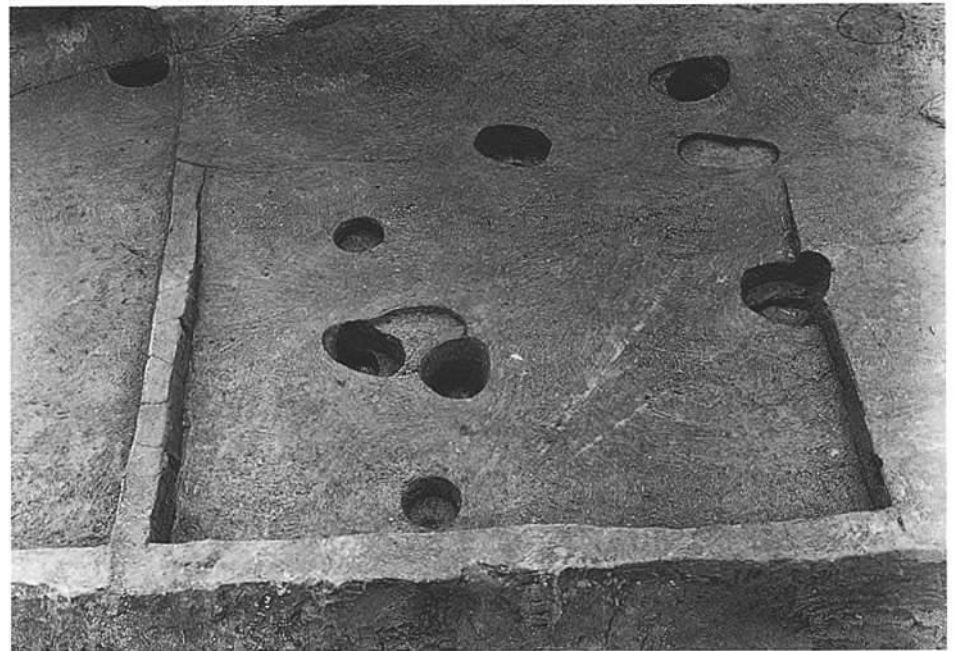


3 11号竪穴居住跡（南から）

1 12号竪穴居住跡（北から）



2 13号竪穴居住跡（北から）



3 7号溝土層（東から）

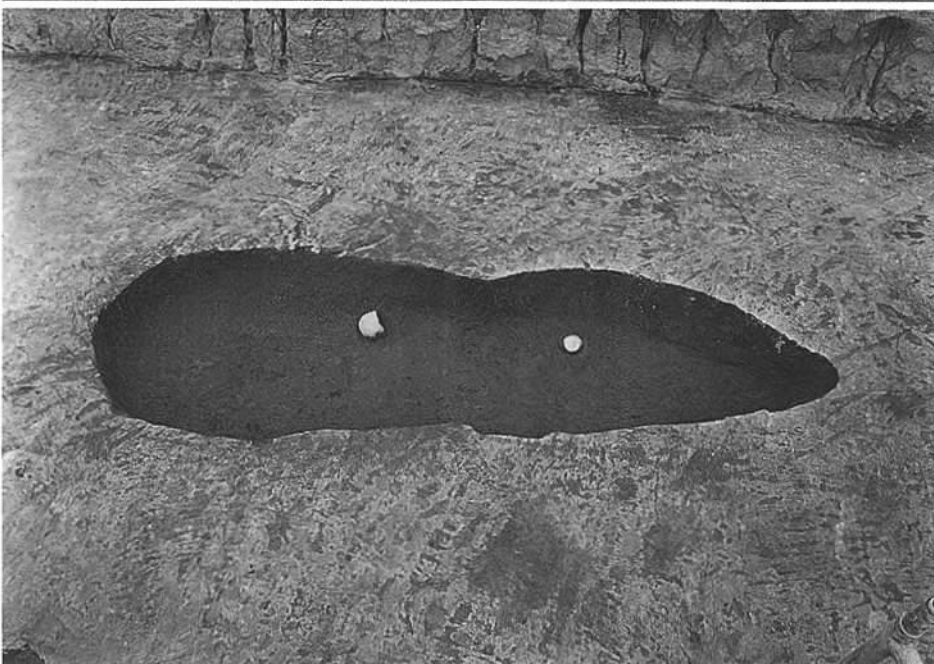




1 7号溝東端土器出土状況
(西から)



2 8号溝 (南西から)



3 9号土坑 (南から)



1 10号土坑 (北東から)



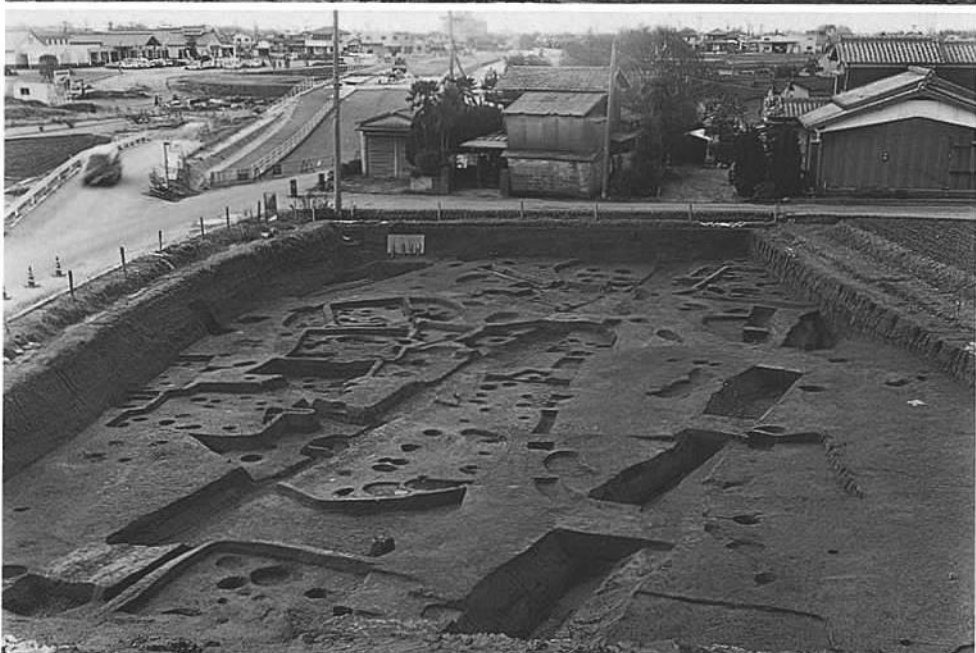
2 11号土坑 (南から)



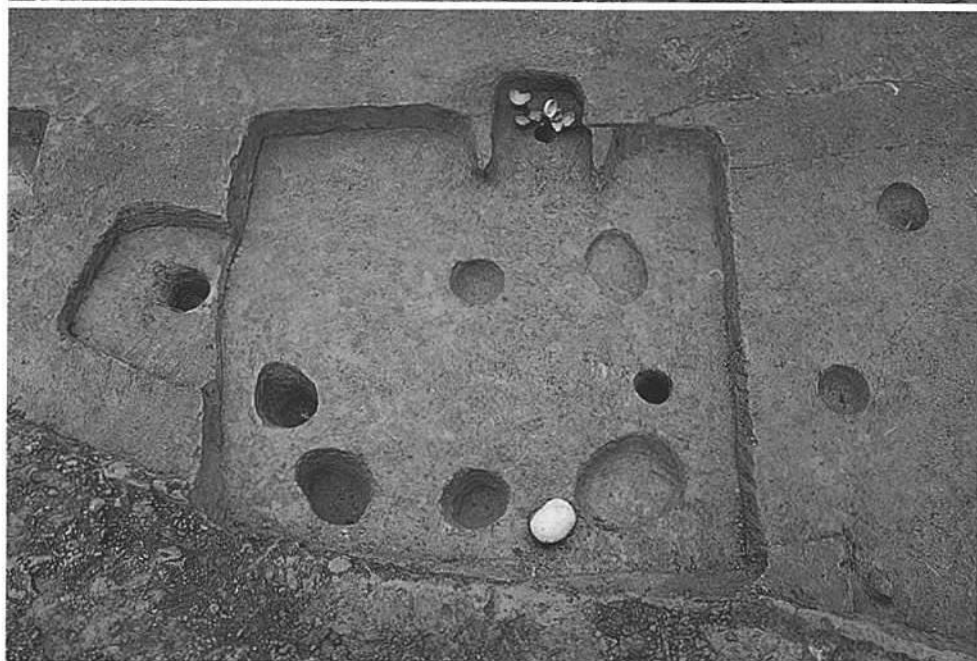
3 1区第3面全景 (西から)



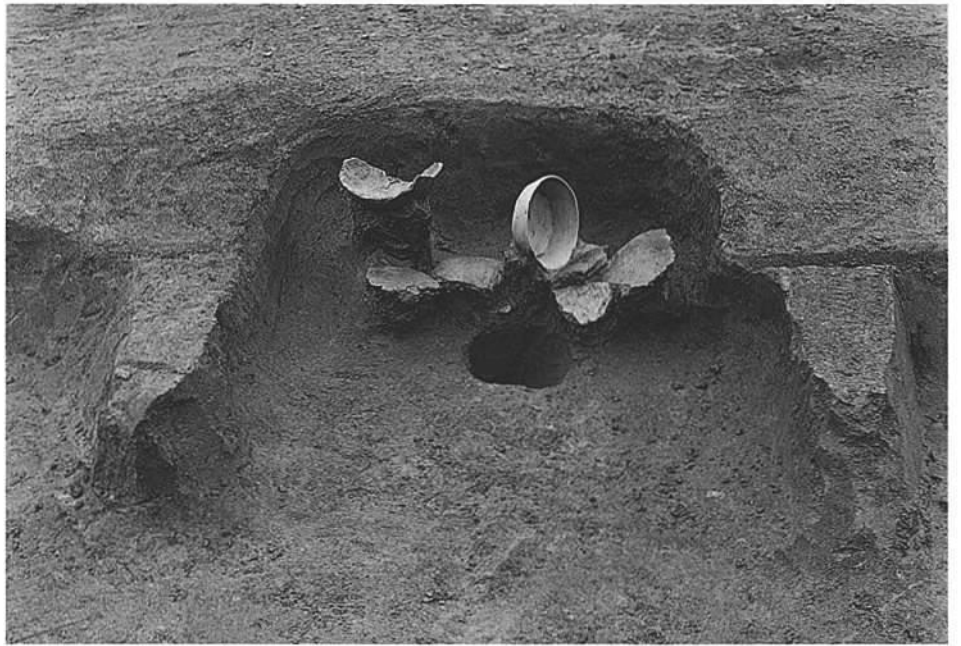
1 1区第3面全景（東から）



2 1区第3面全景（東から）



3 6号竪穴居住跡（南から）



1 6号竪穴住居跡カマド
(南から)



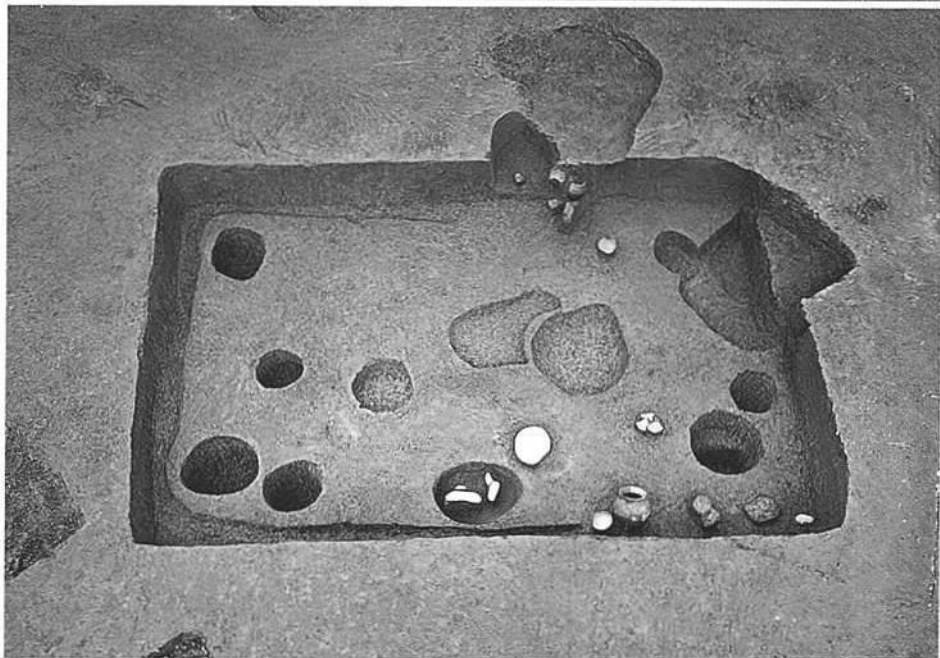
2 14号竪穴住居跡 (北から)



3 15・20号竪穴住居跡
(南から)



1 16号竪穴住居跡 (南から)



2 17号竪穴住居跡 (南から)



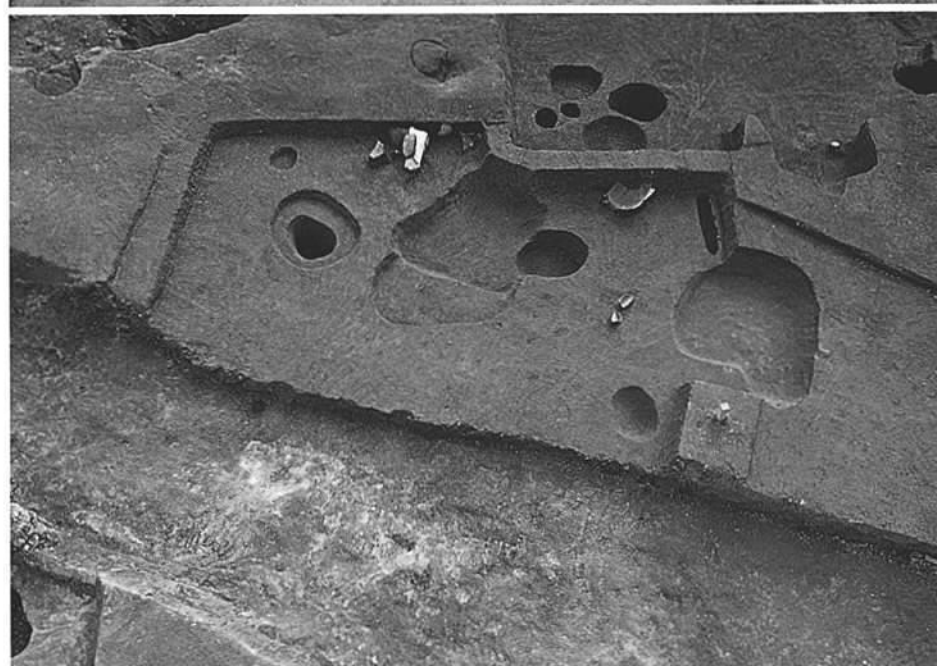
3 17号竪穴住居跡カマド (南から)



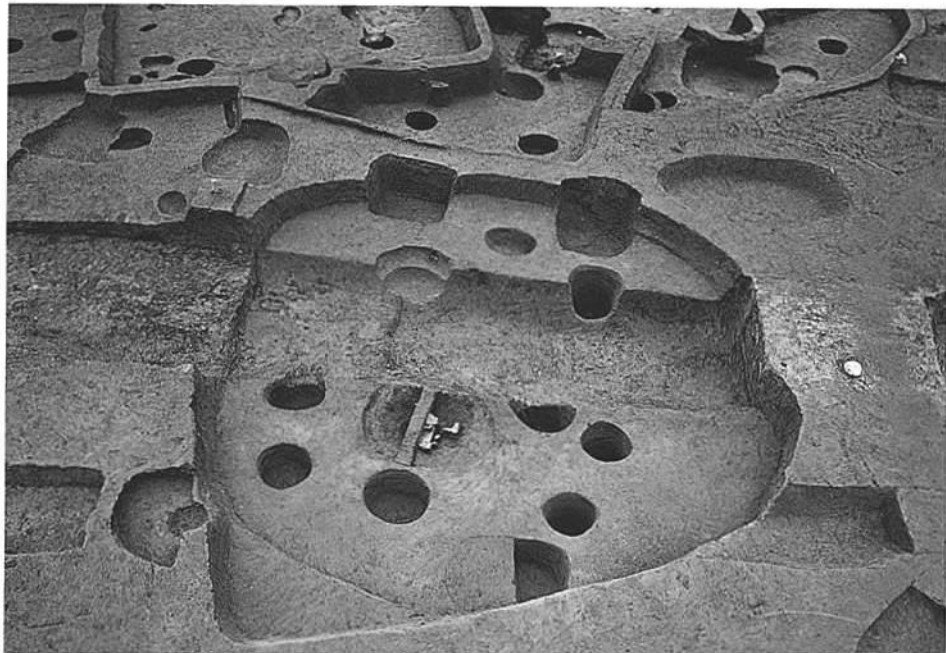
1 18号竪穴住居跡（南から）



2 19号竪穴住居跡（東から）



3 21号竪穴住居跡（北から）



1 22号竪穴住居跡（北から）



2 22号竪穴住居跡遺物
出土状況（南から）



3 23・25号竪穴住居跡
（南から）

1 24号竪穴住居跡（南から）



2 26号竪穴住居跡（南から）

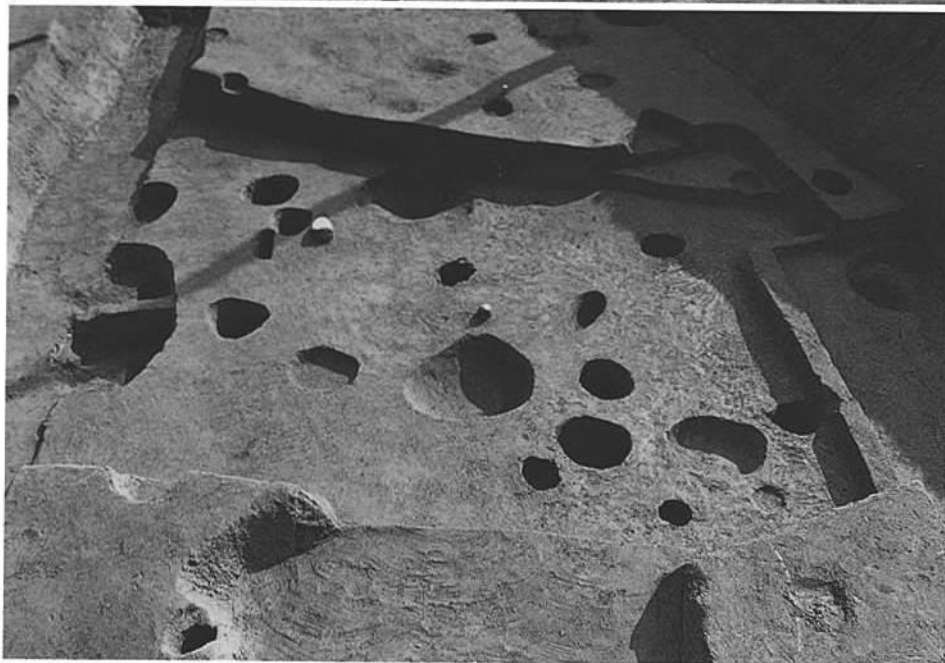


3 27号竪穴住居跡（西から）

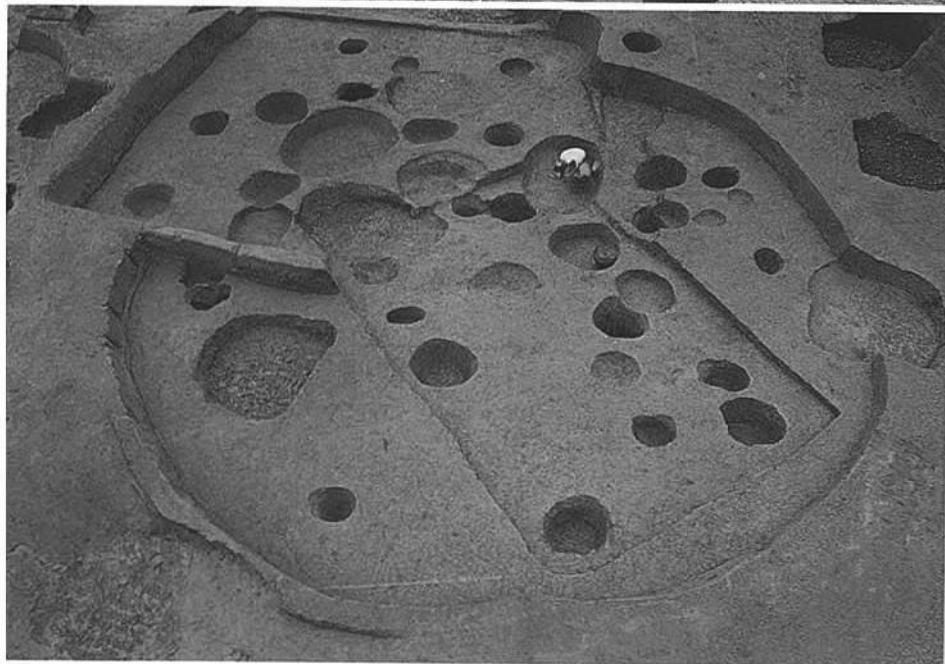




1 28号竪穴住居跡（西から）



2 29号竪穴住居跡（西から）



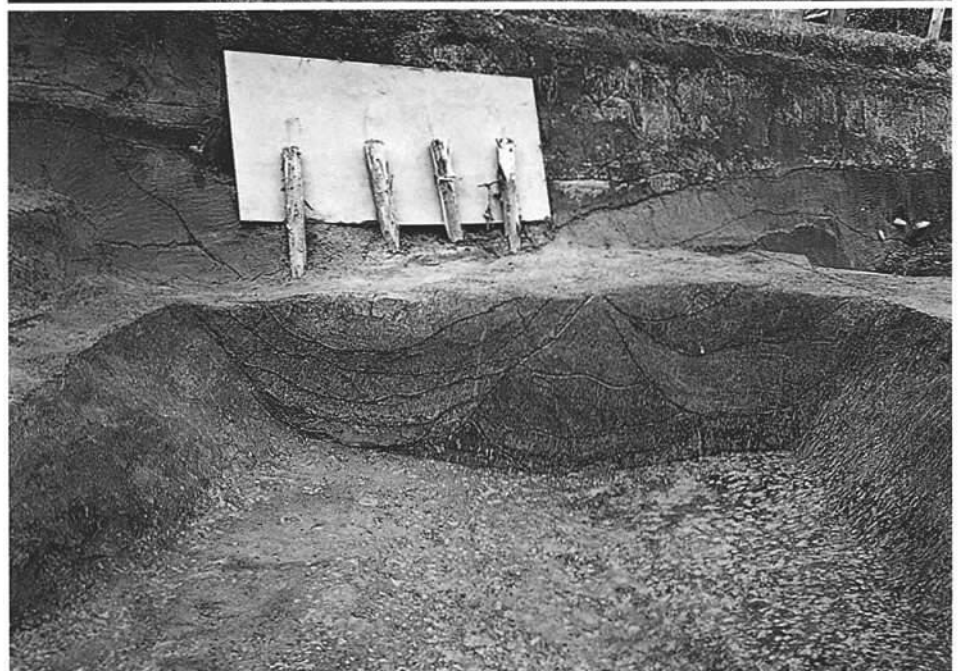
3 30号竪穴住居跡（西から）



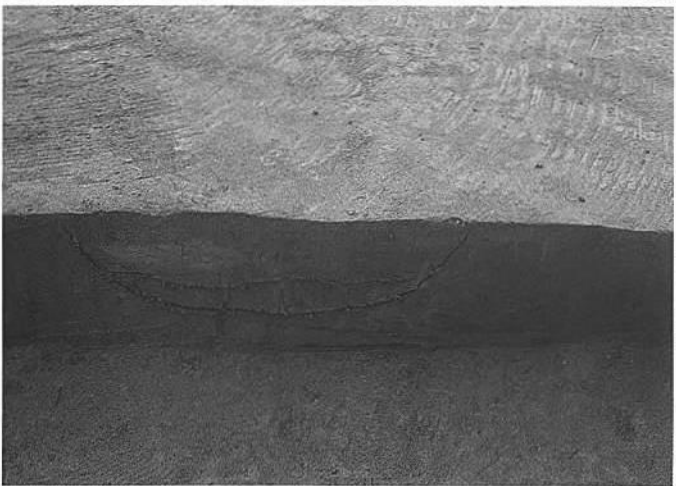
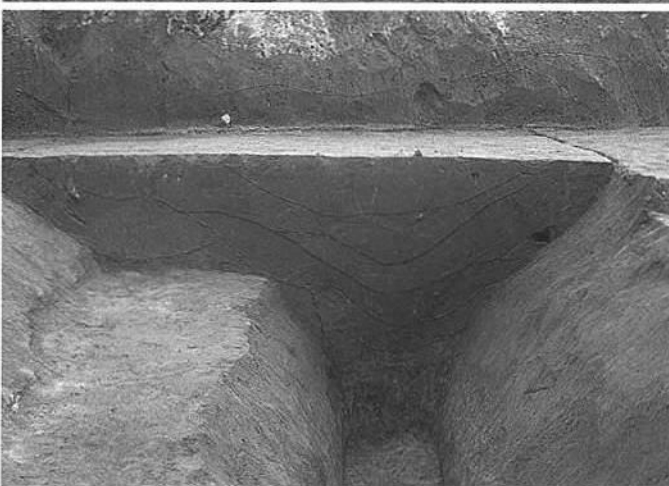
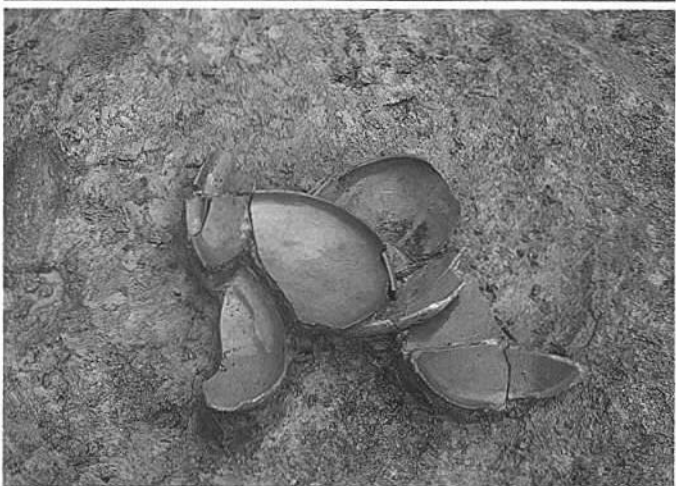
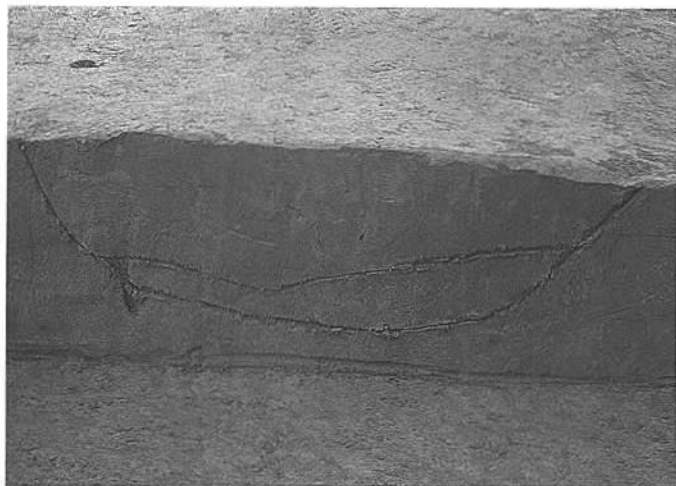
1 12号土坑（南から）



2 13号土坑（北から）

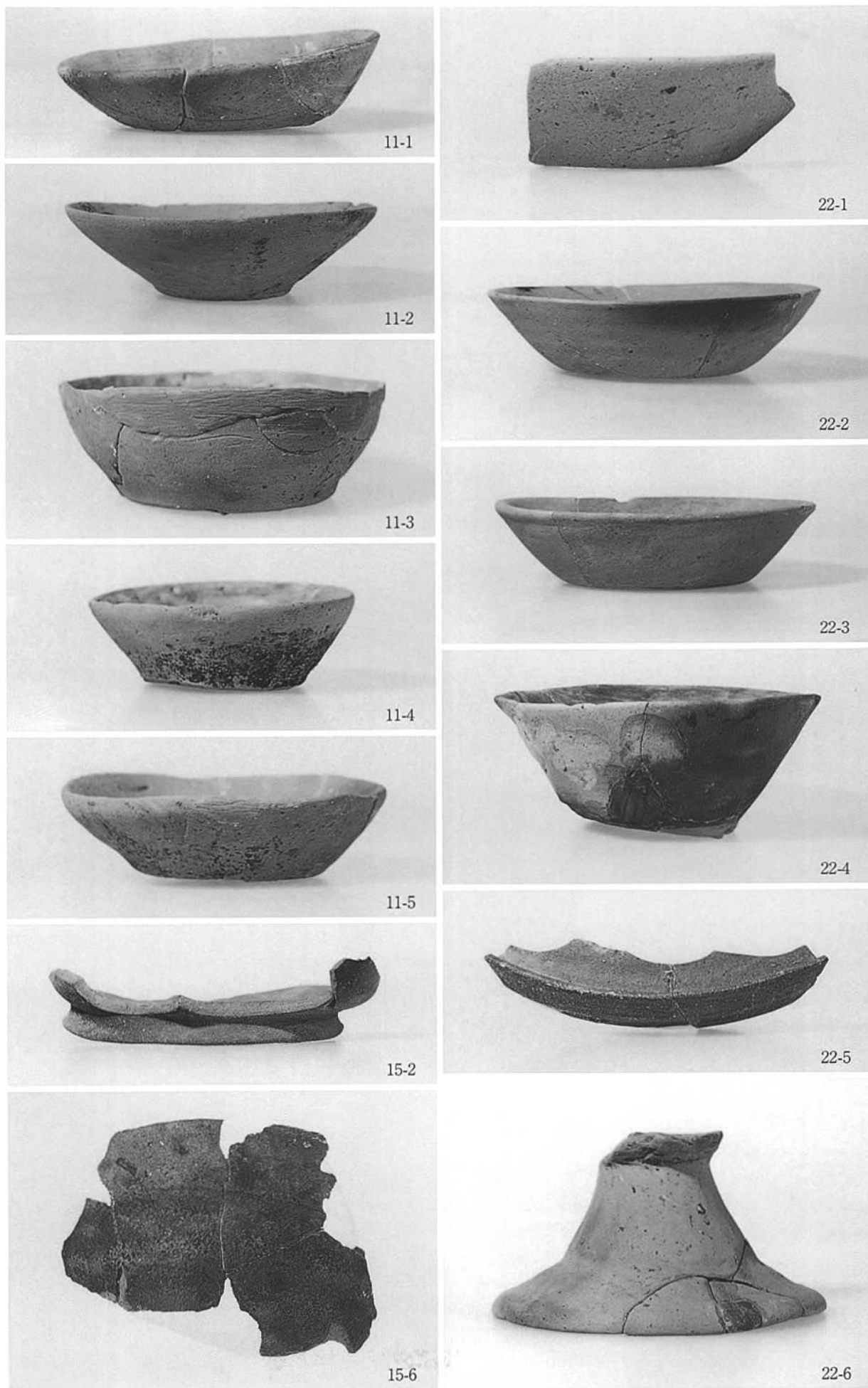


3 10号溝土層（東から）

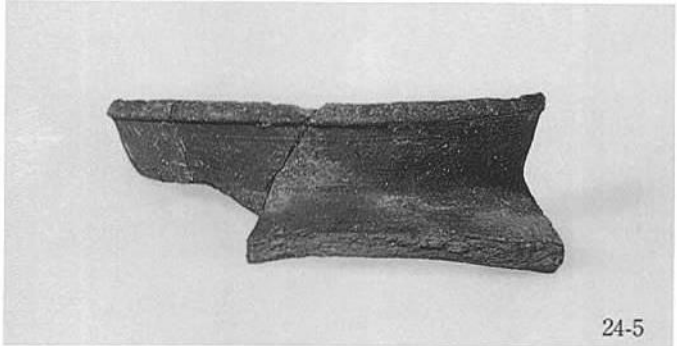
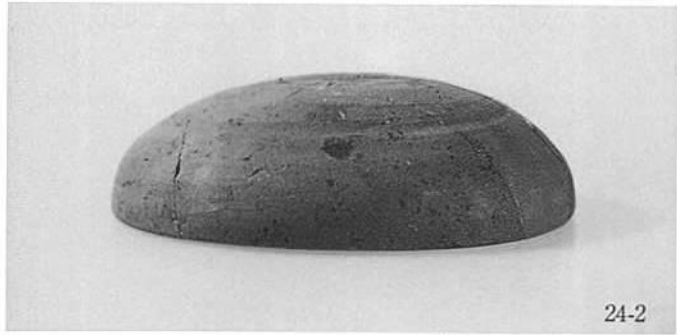
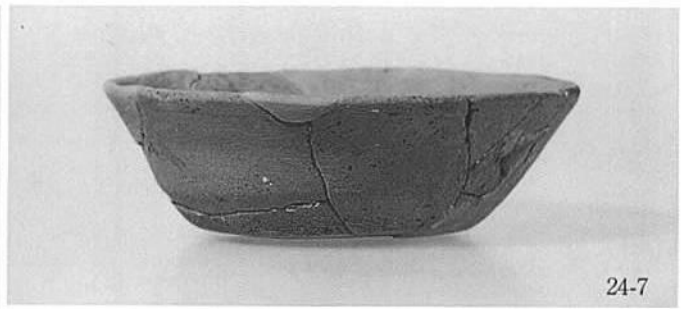


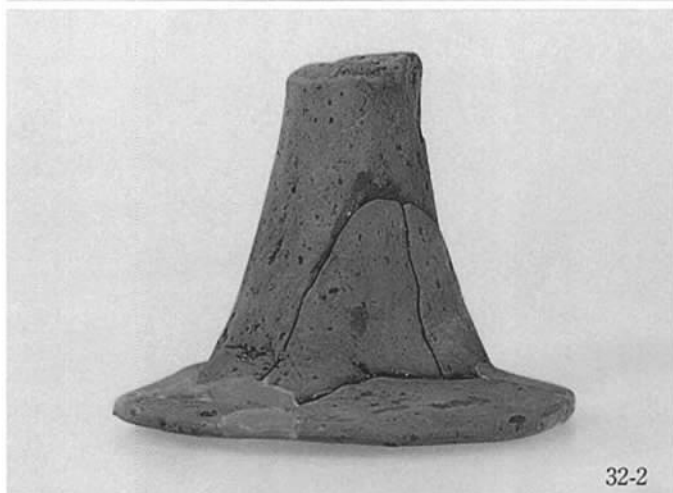
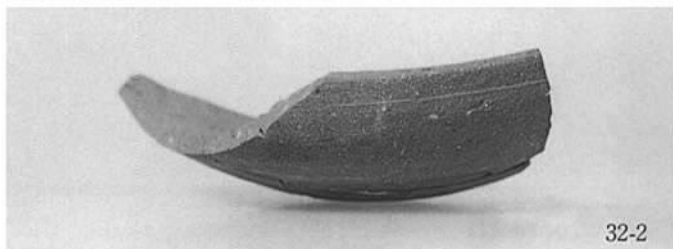
9・10・12～14号溝・調査風景

(左列上から9号溝土層・同遺物出土状況、10号溝遺物出土状況、12号溝土層、右列上から13号溝土層、14号溝土層1、14号溝土層2)

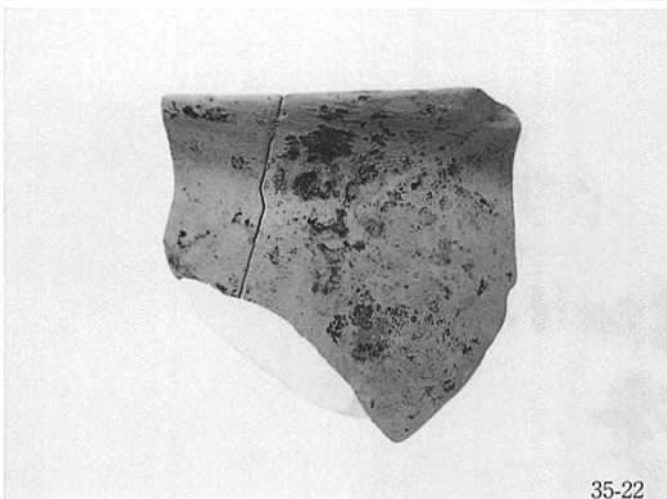
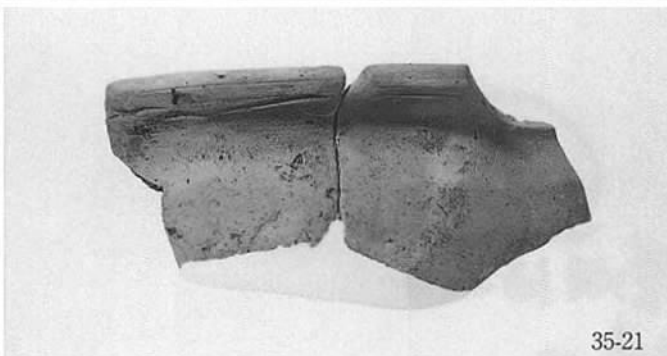
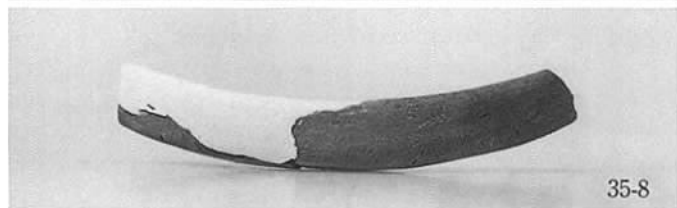


1·6号土坑·1号沟·1号竖穴住居迹出土土器

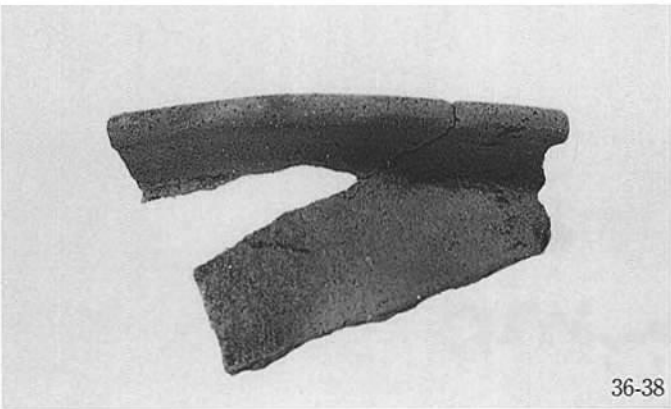
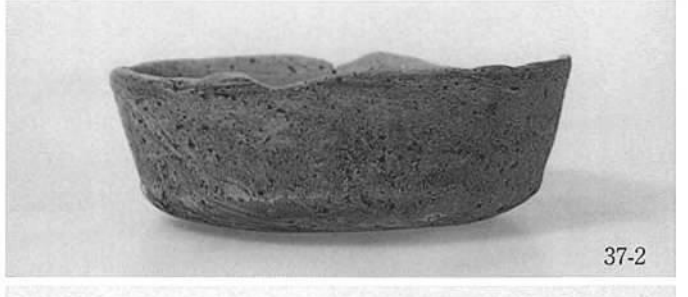
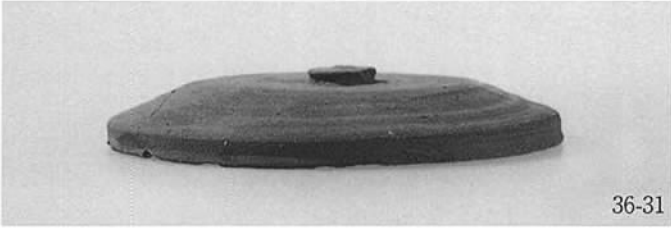
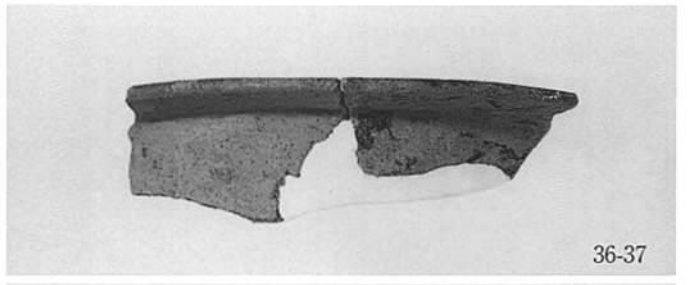
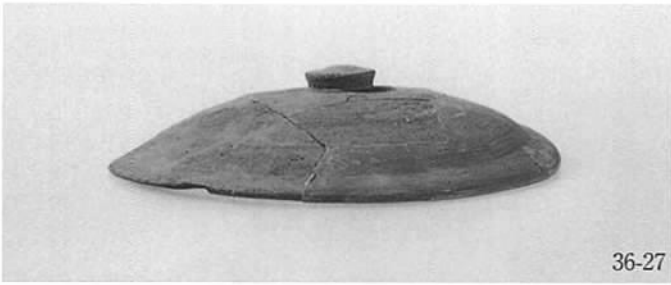




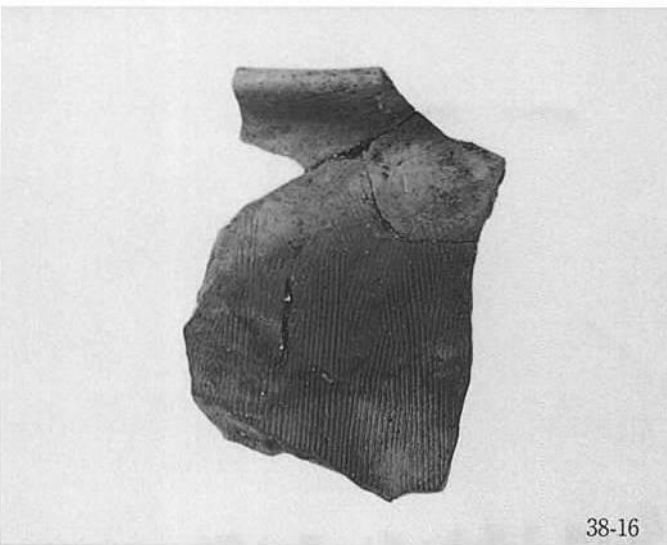
12号竖穴住居跡・10・11号土坑・7号溝出土土器



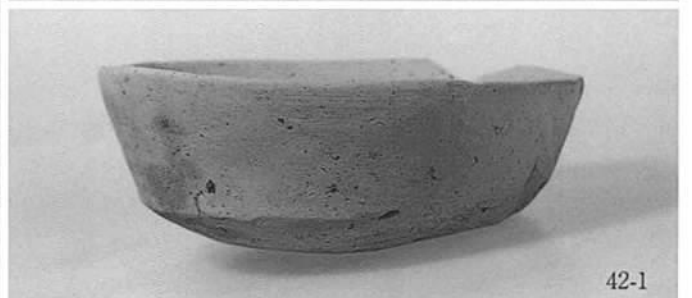
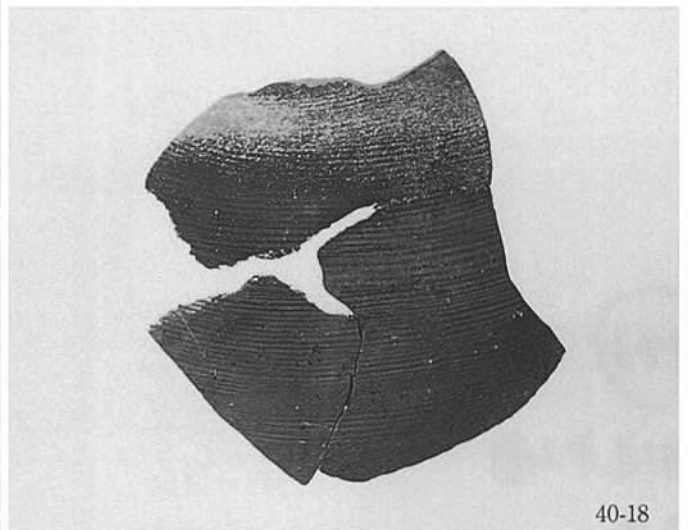
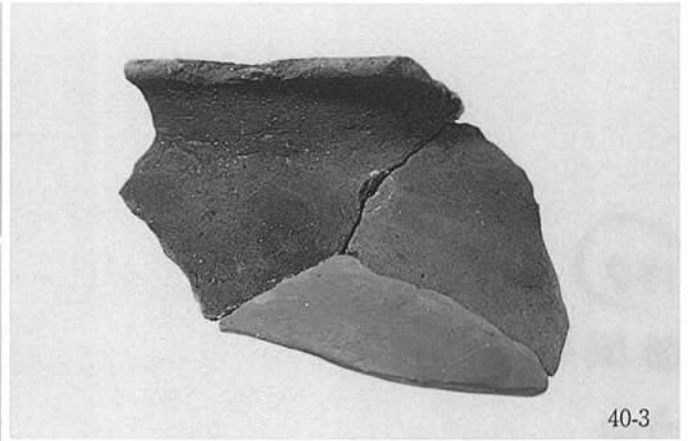
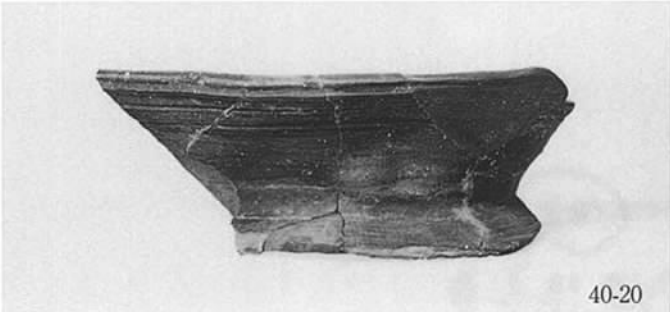
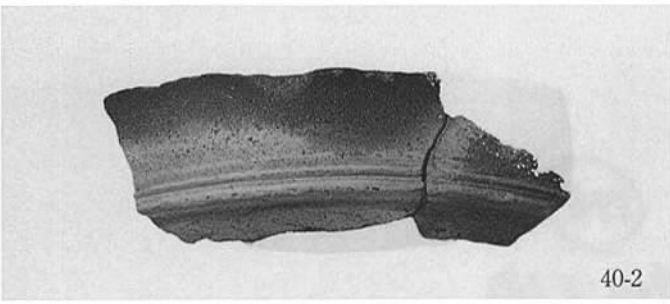
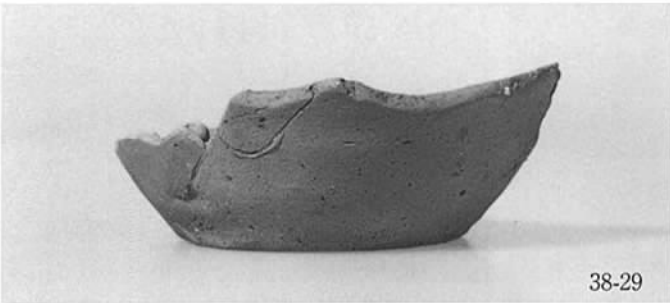
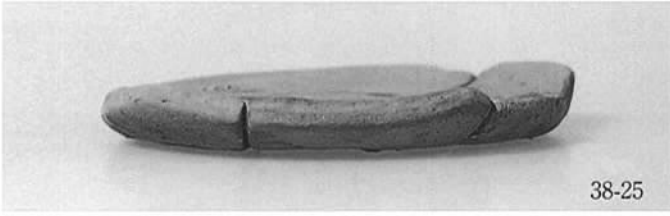
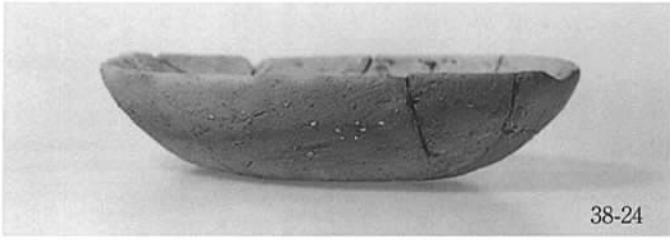
7号沟出土土器



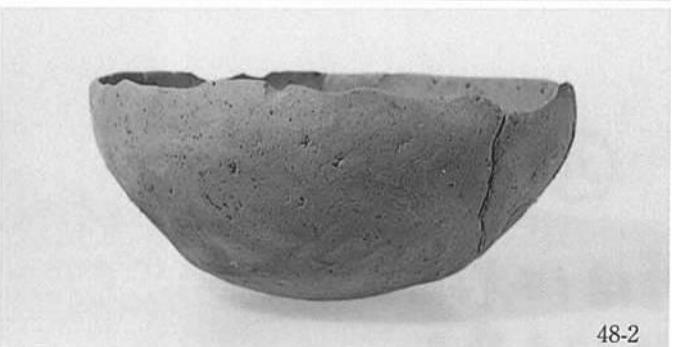
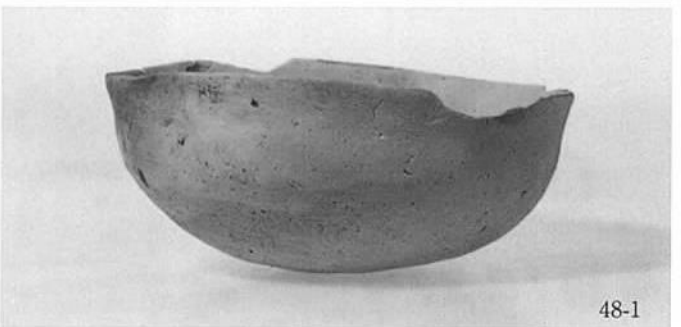
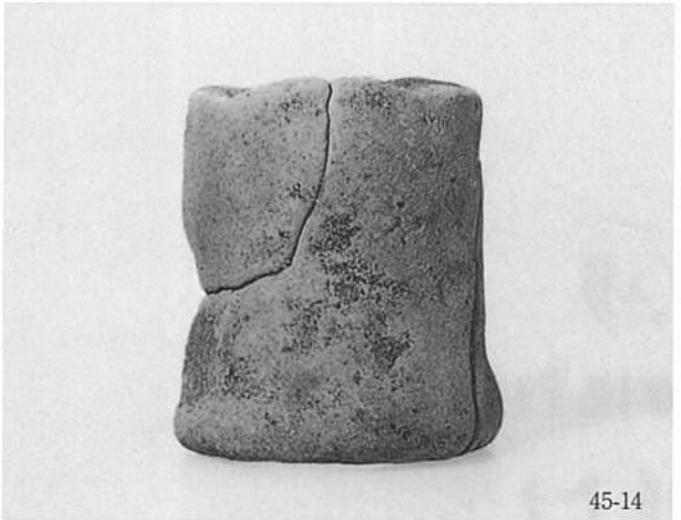
7号沟·13·14号沟上层包含层出土土器

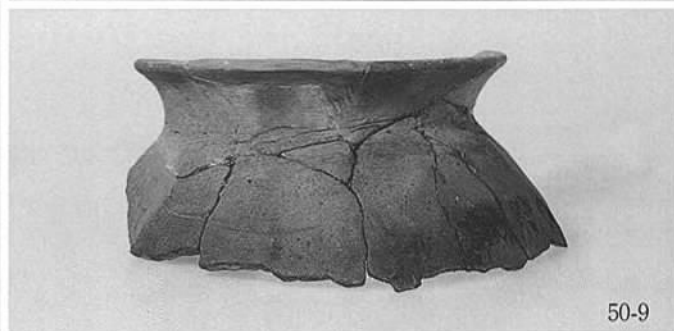
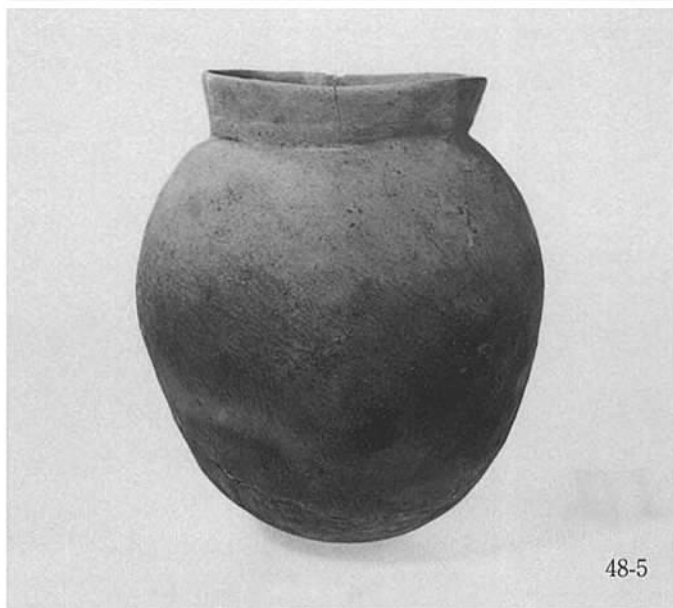


13・14号溝上層包含層・1号落ち込み状遺構・1区第2面ピット出土土器

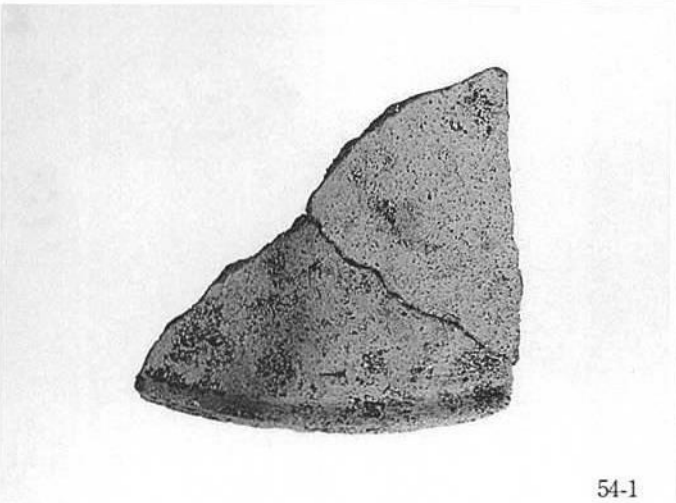
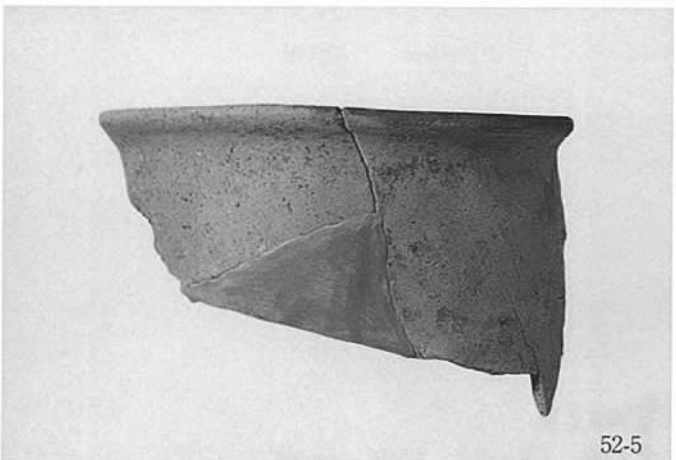


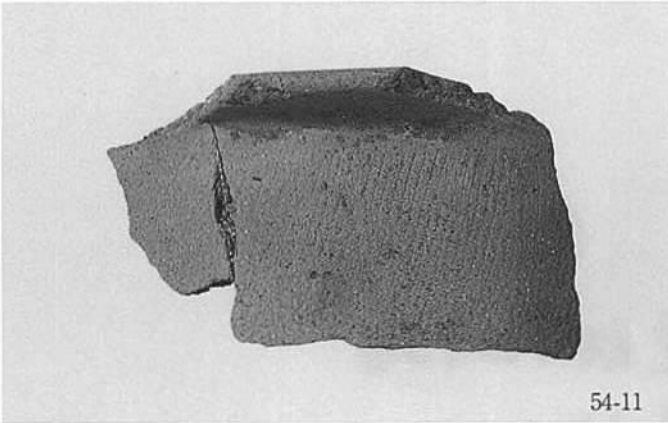
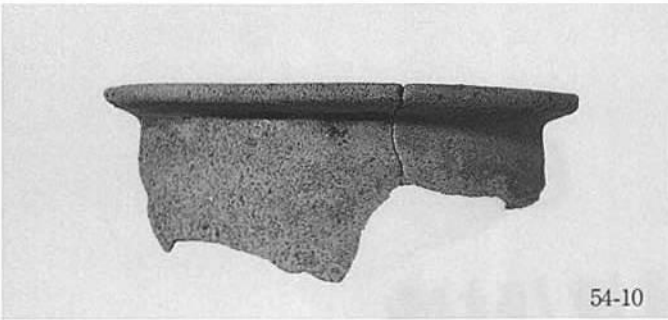
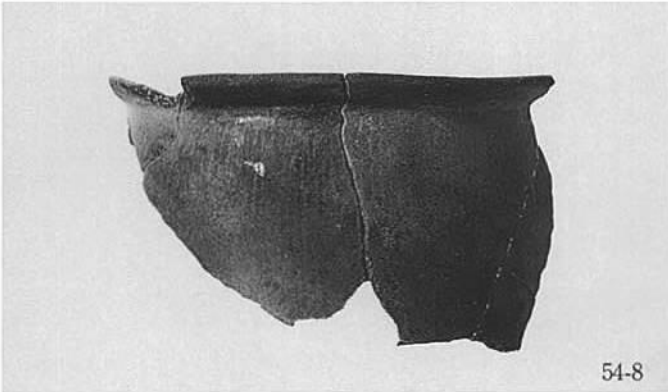
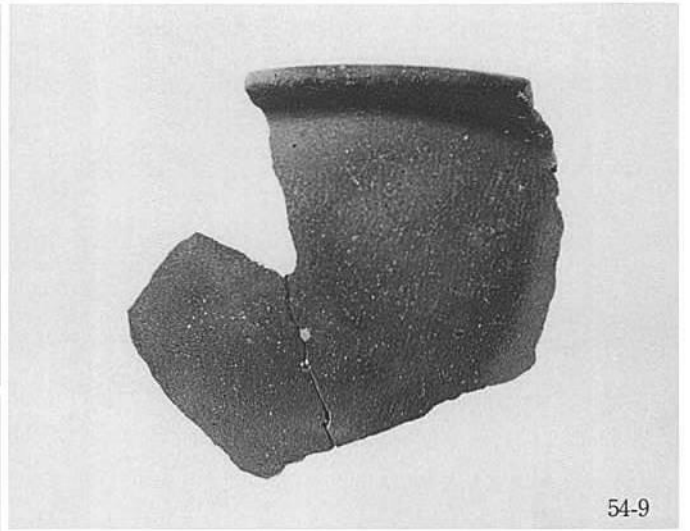
1区第2面ビット・1区第2面遺構面・6号竪穴住居跡出土土器



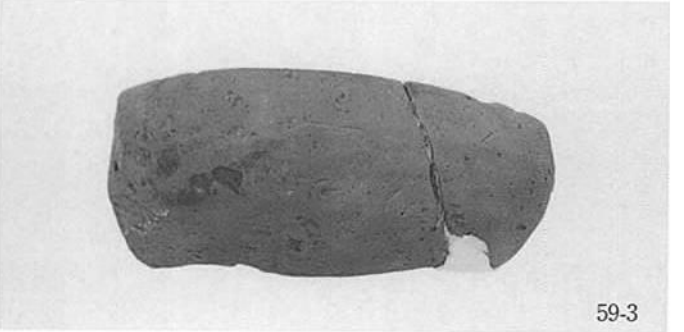
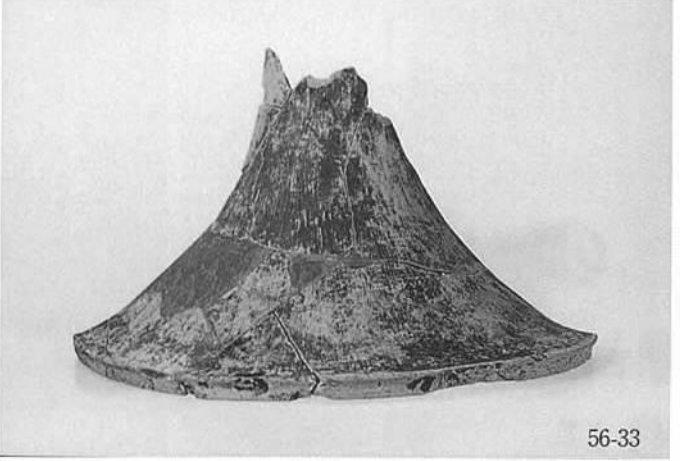
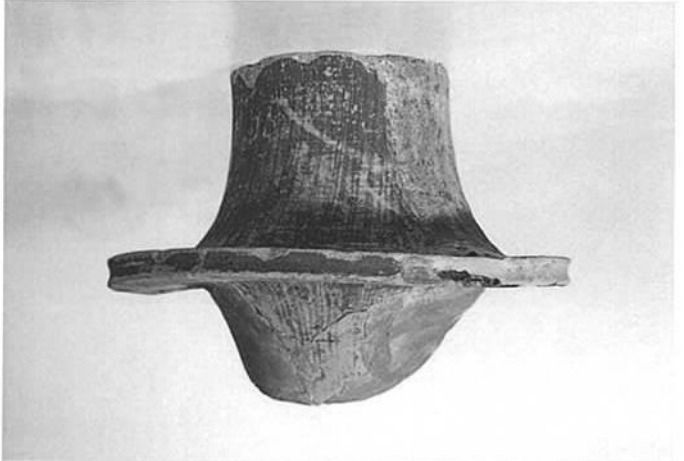
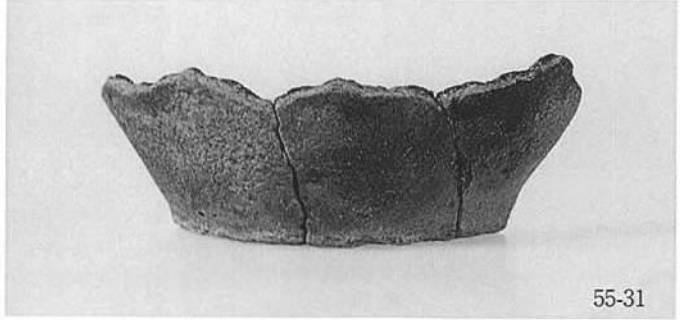
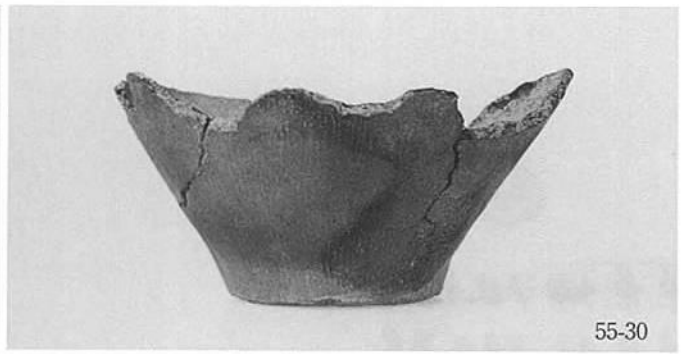
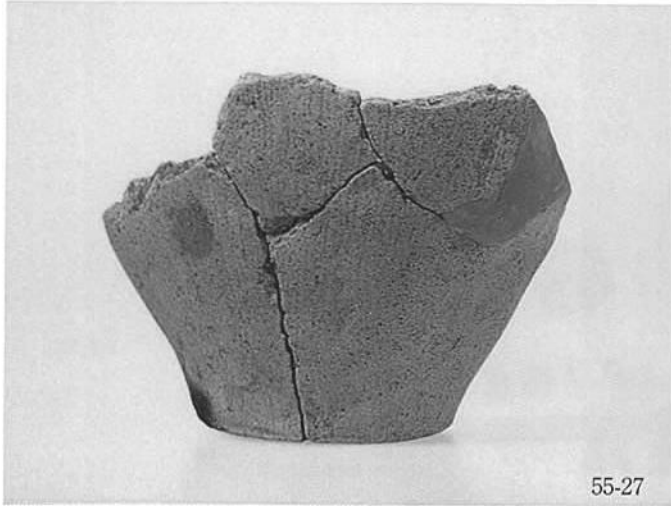


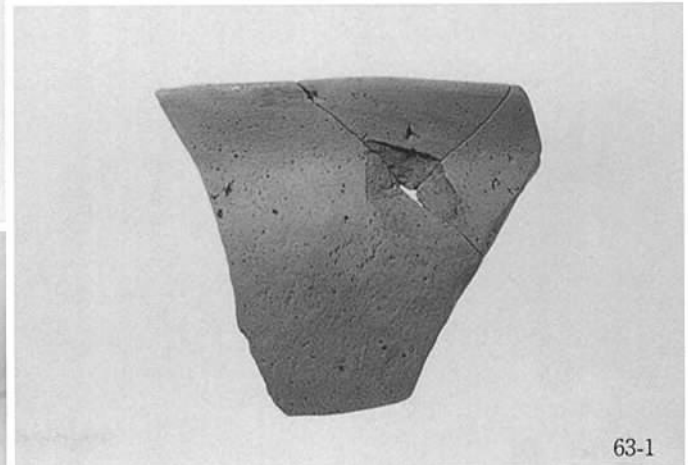
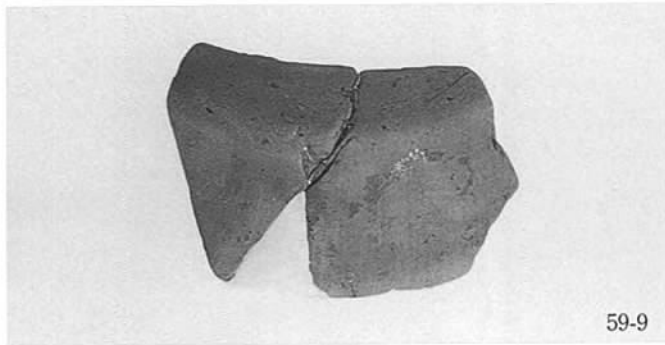
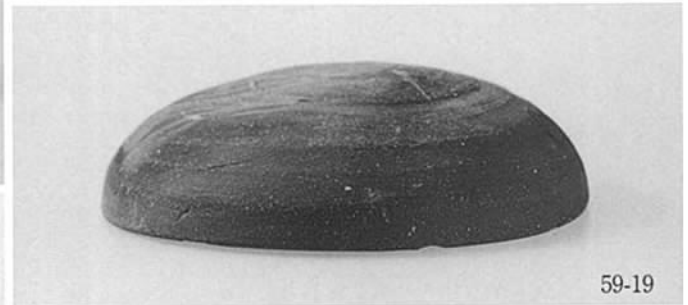
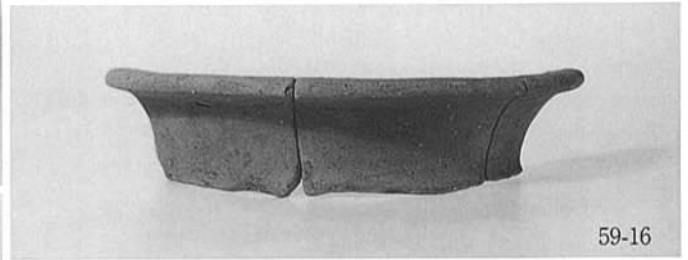
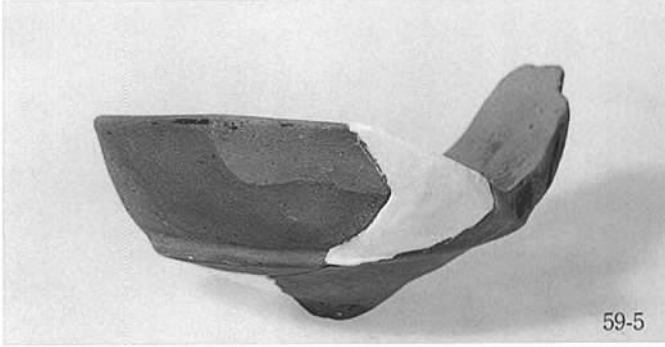
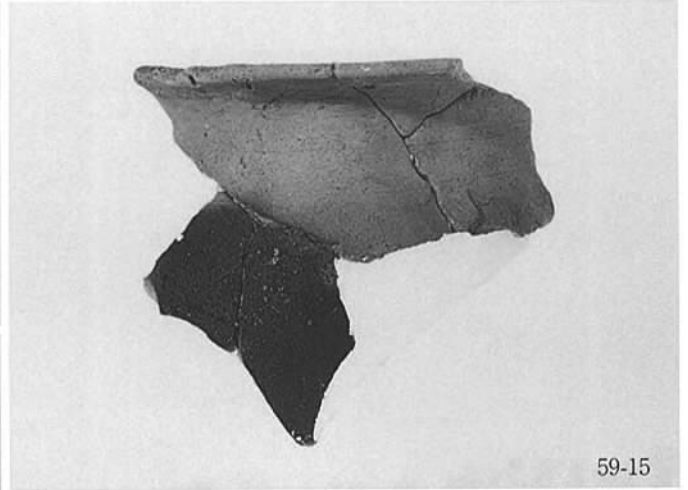
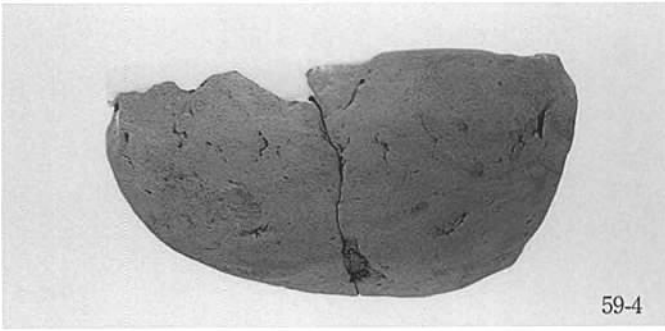
17~19·21号竖穴住居跡出土土器



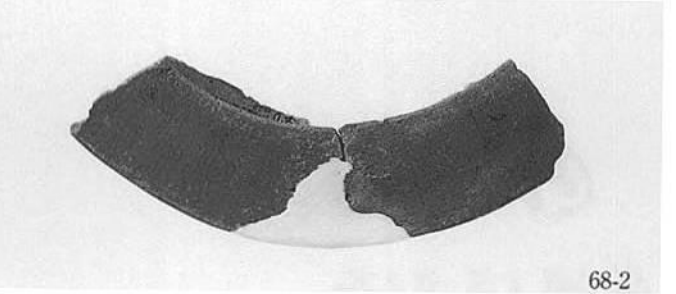
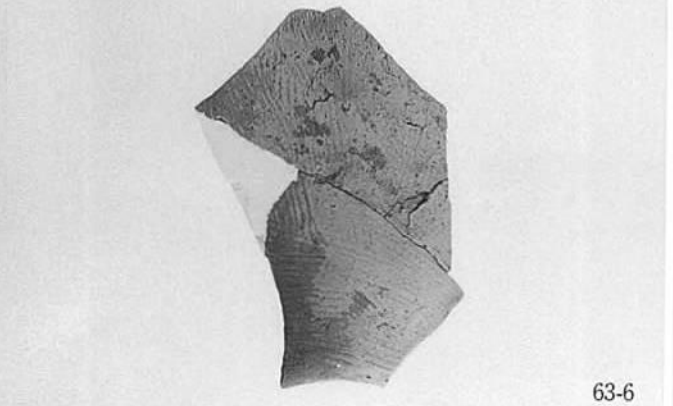
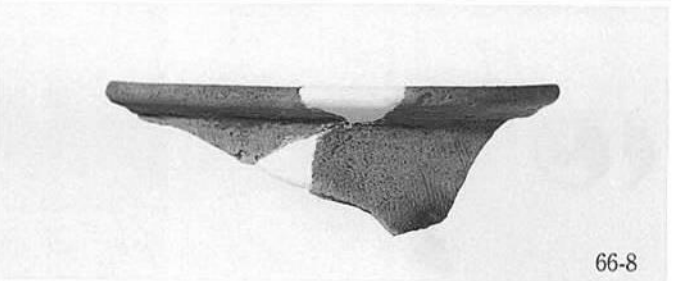
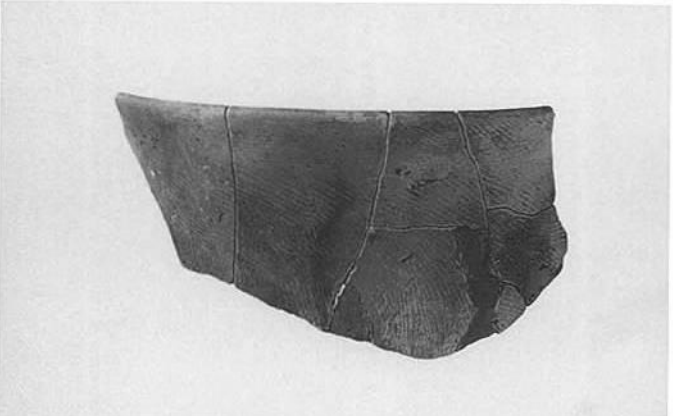


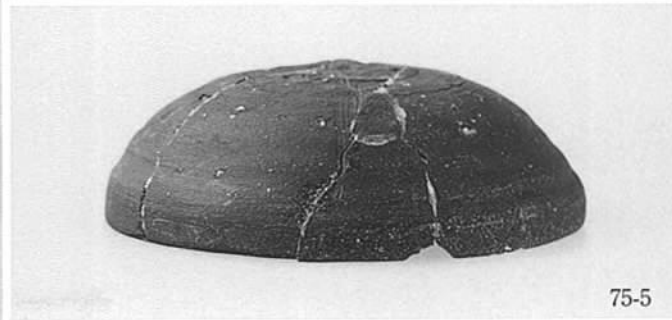
22号竖穴住居跡出土土器



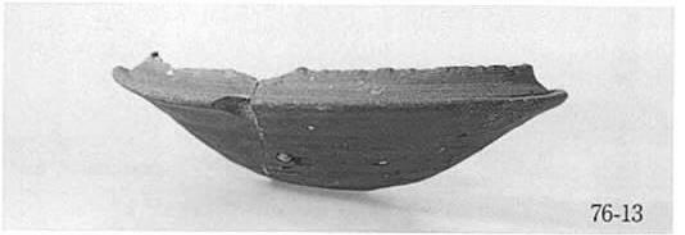
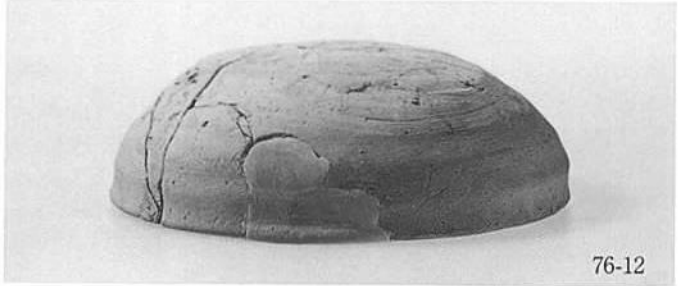


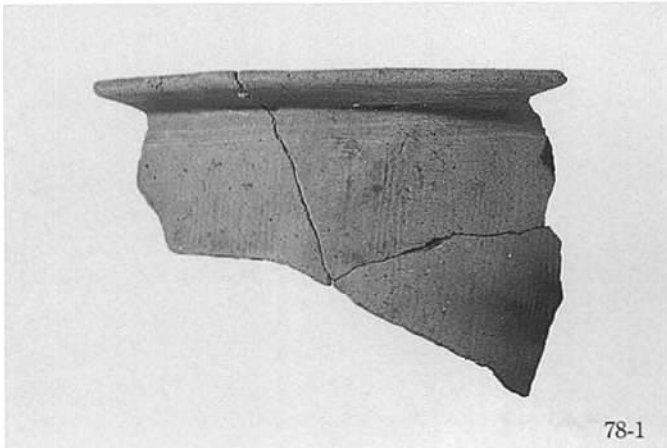
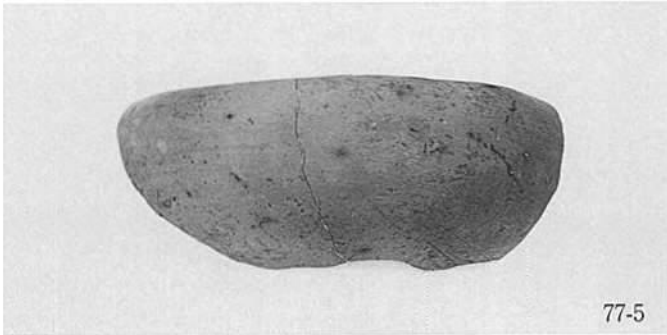
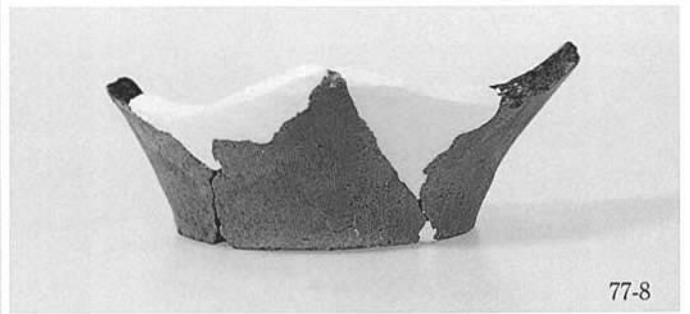
24·26号竖穴住居跡出土土器



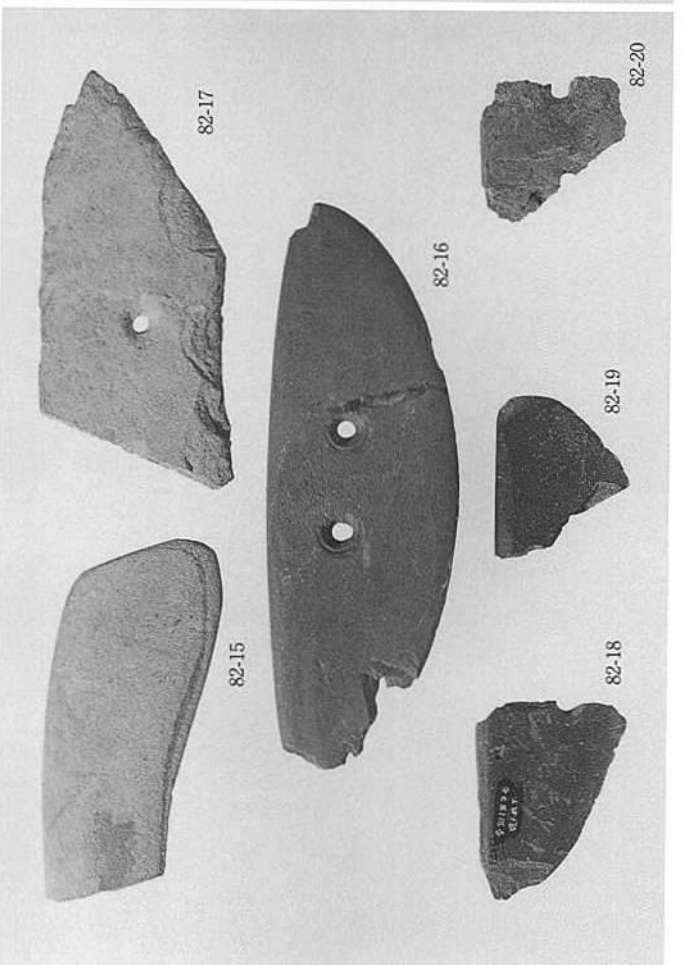
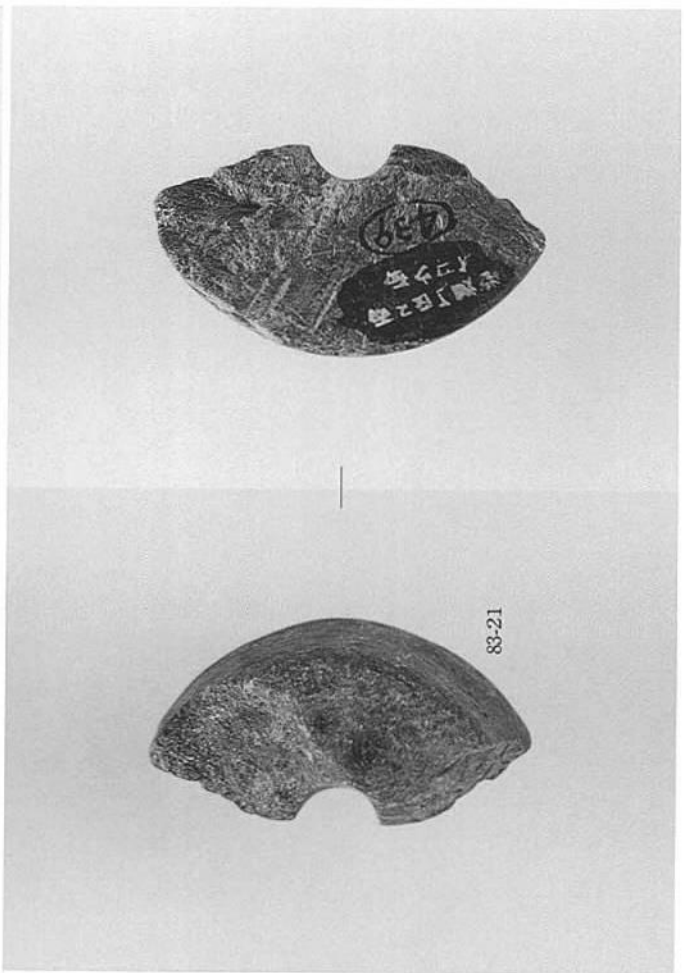
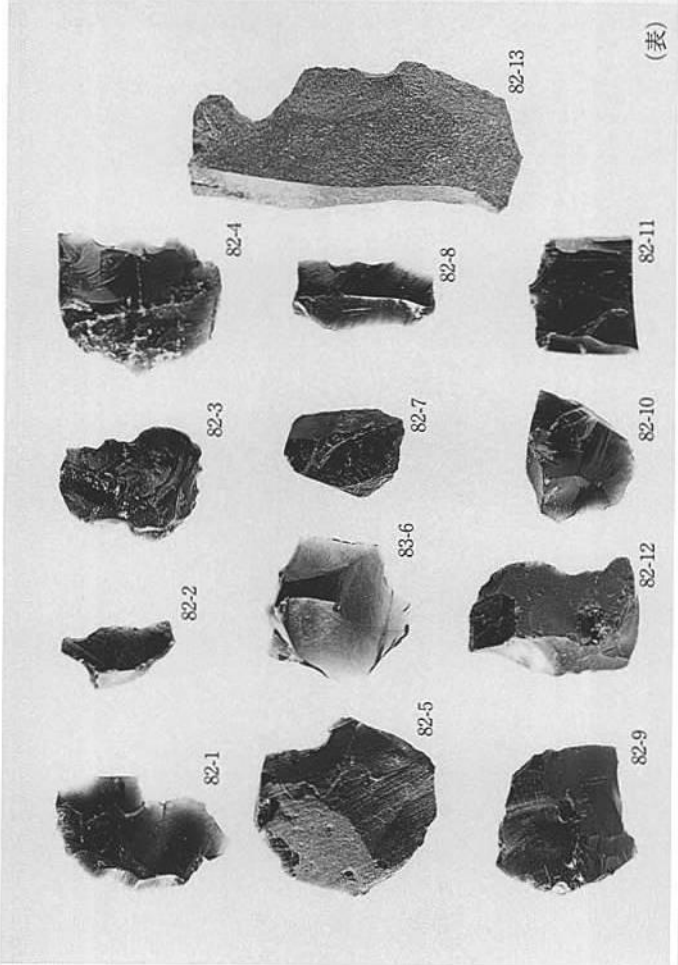
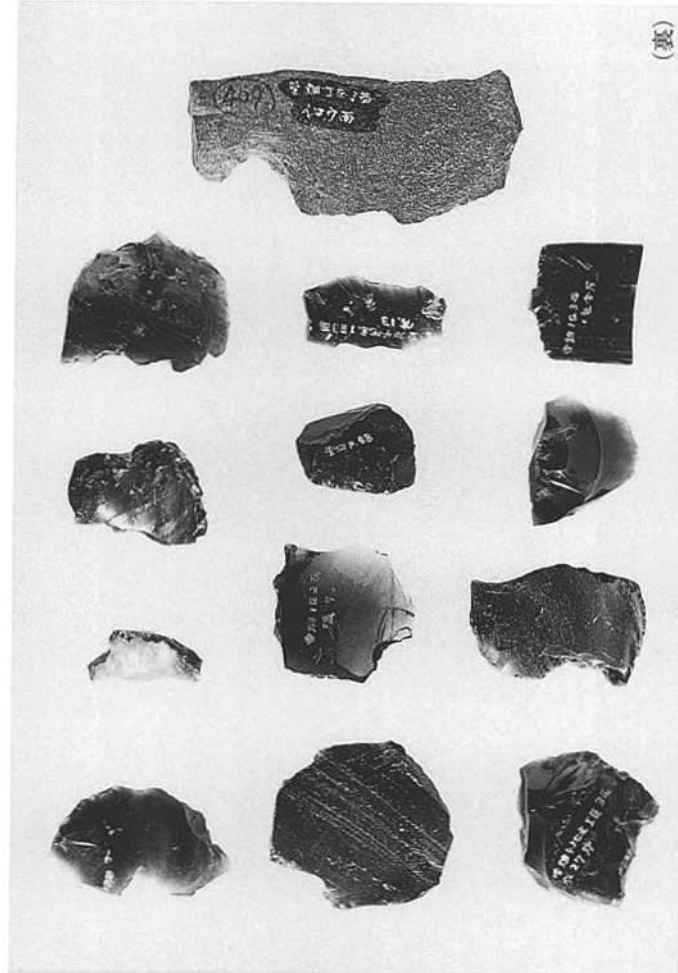


30号竖穴住居跡・12・13号土坑・9号溝出土土器

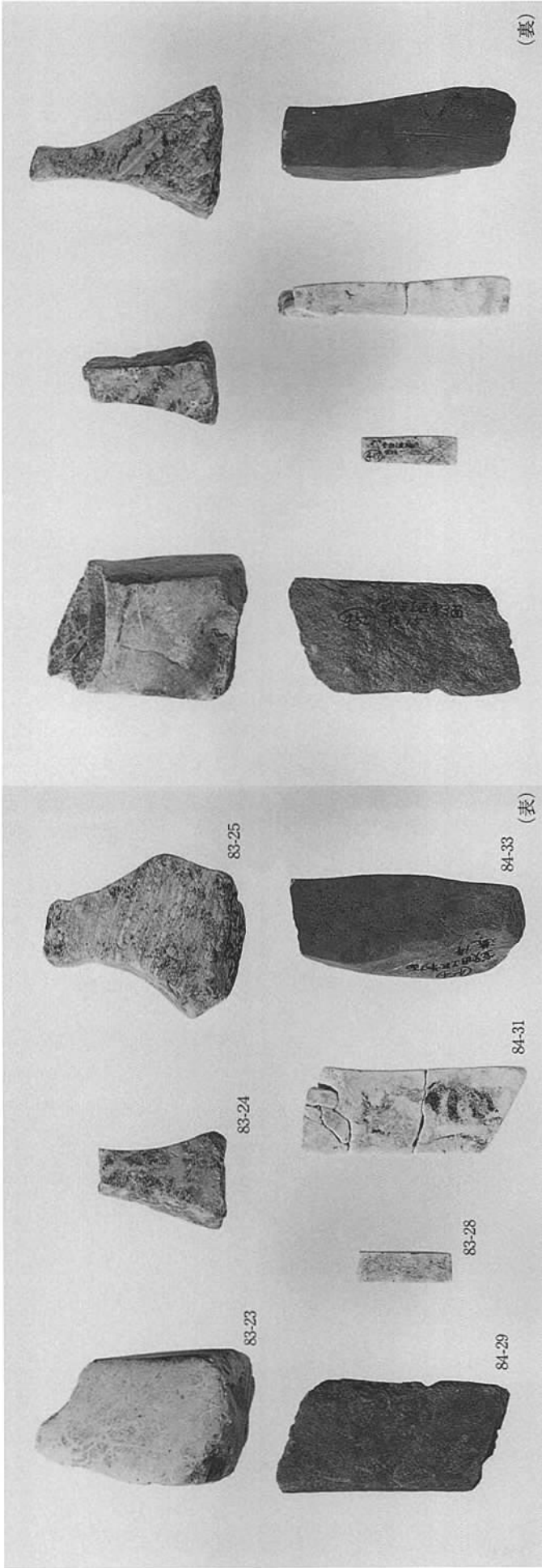




13・14号溝・1区第3面遺構面・1区試掘トレンチ出土土器および表採土器

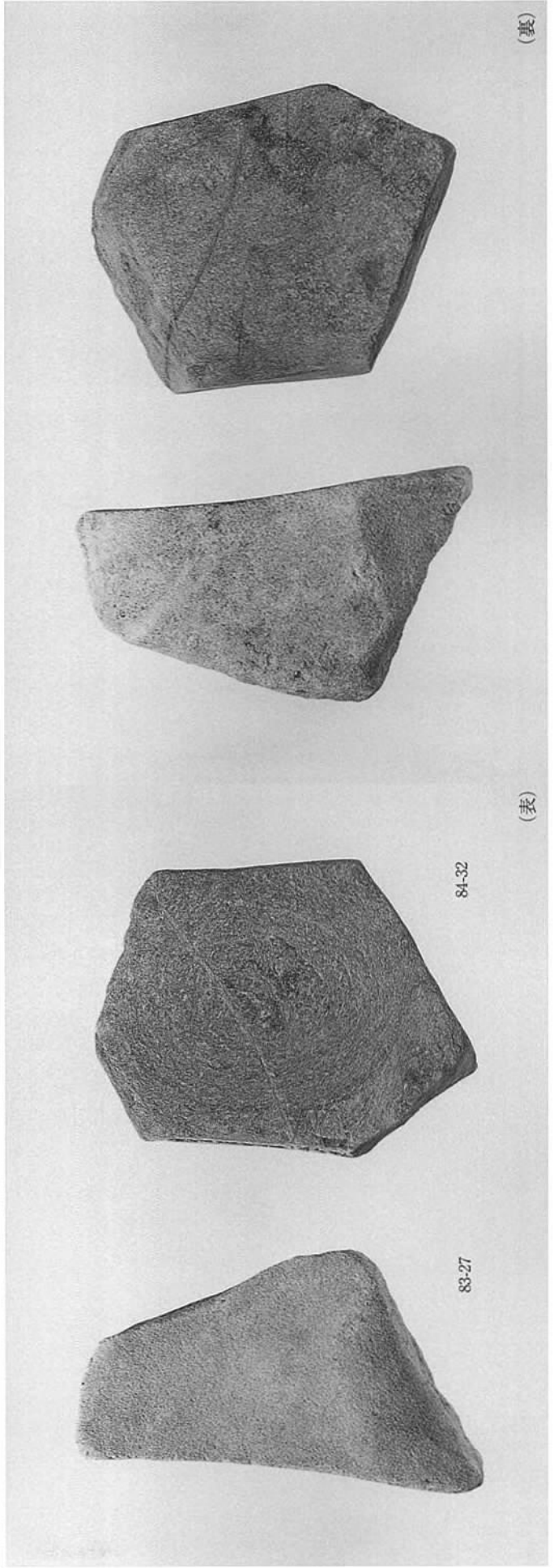


1区出土石器・石製品(1)



(裏)

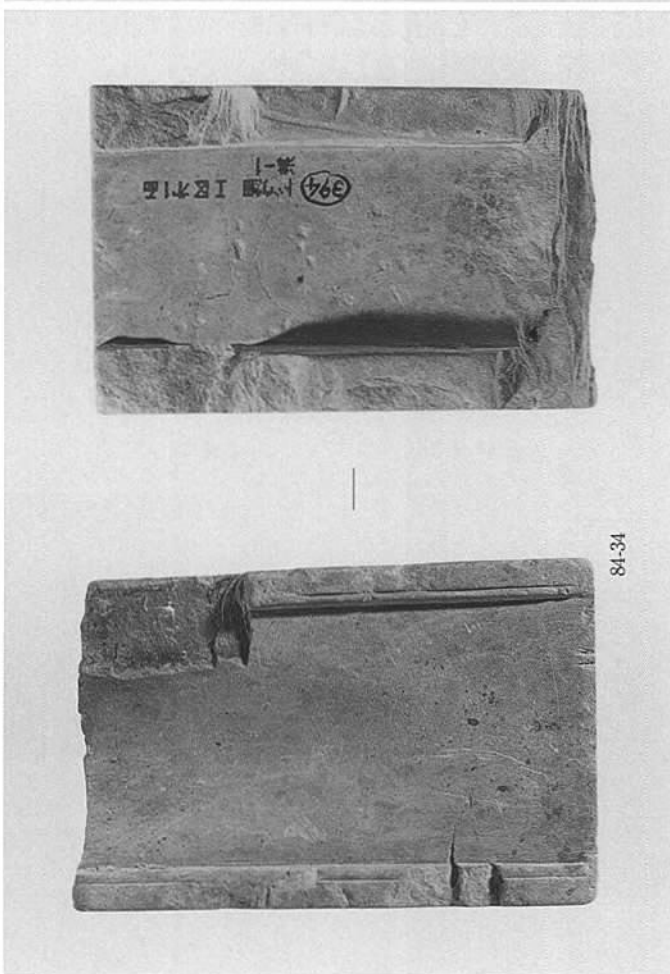
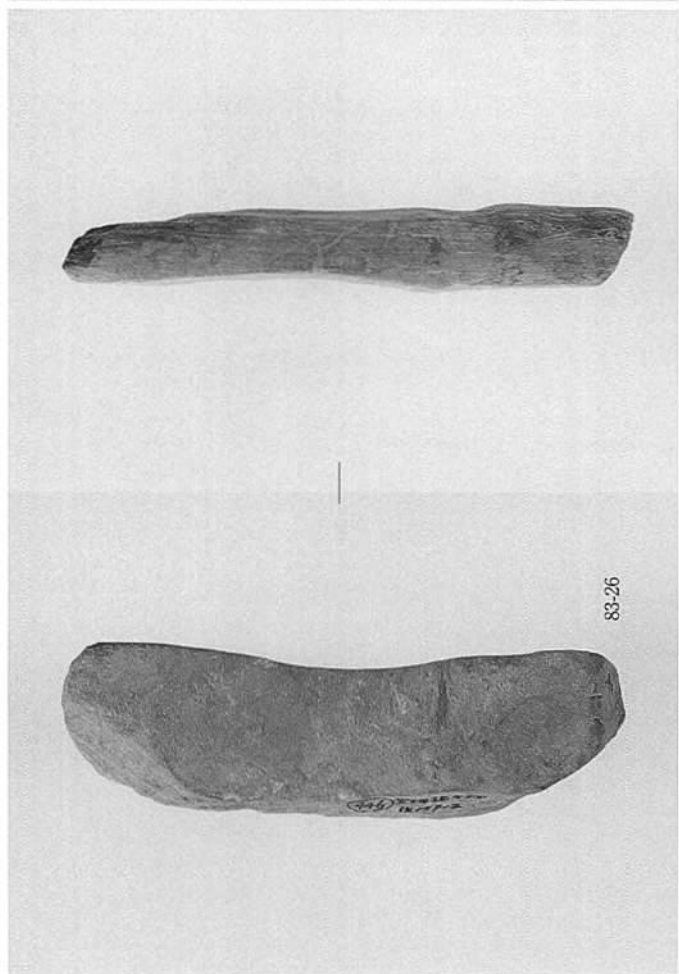
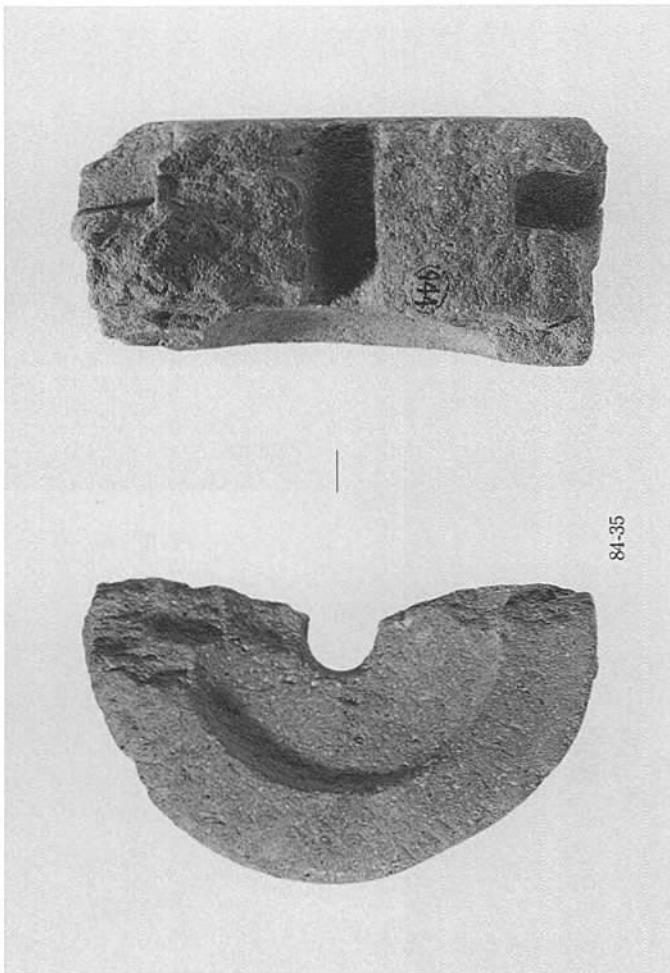
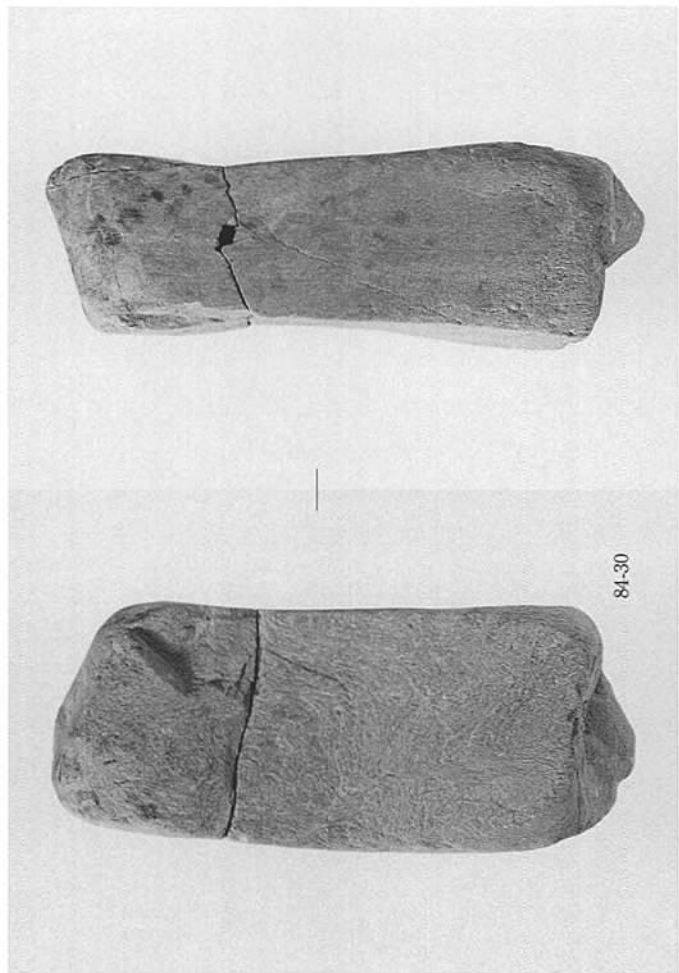
(表)

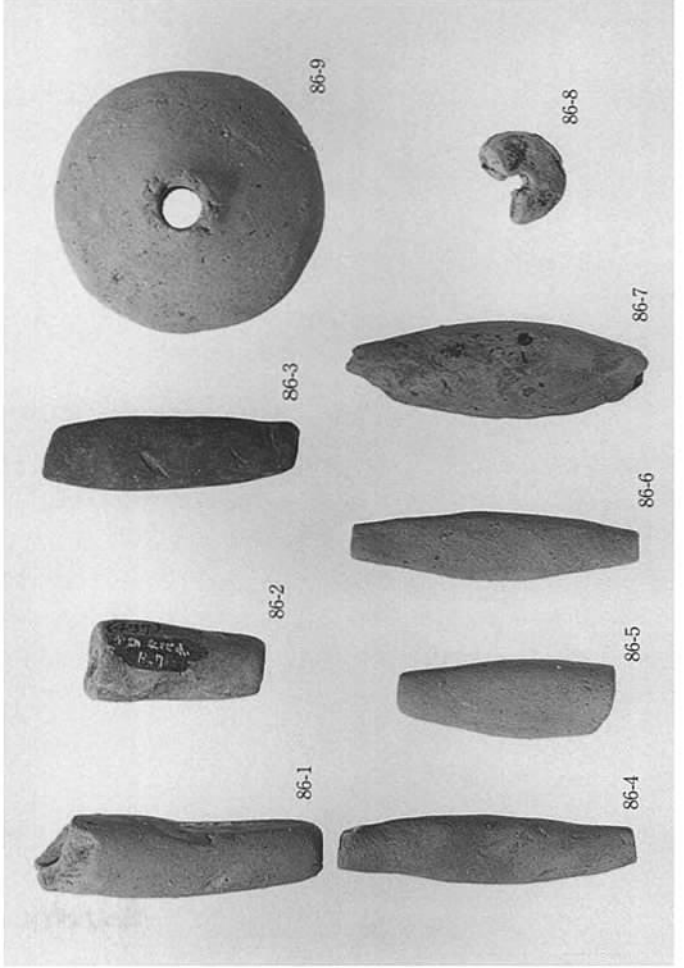
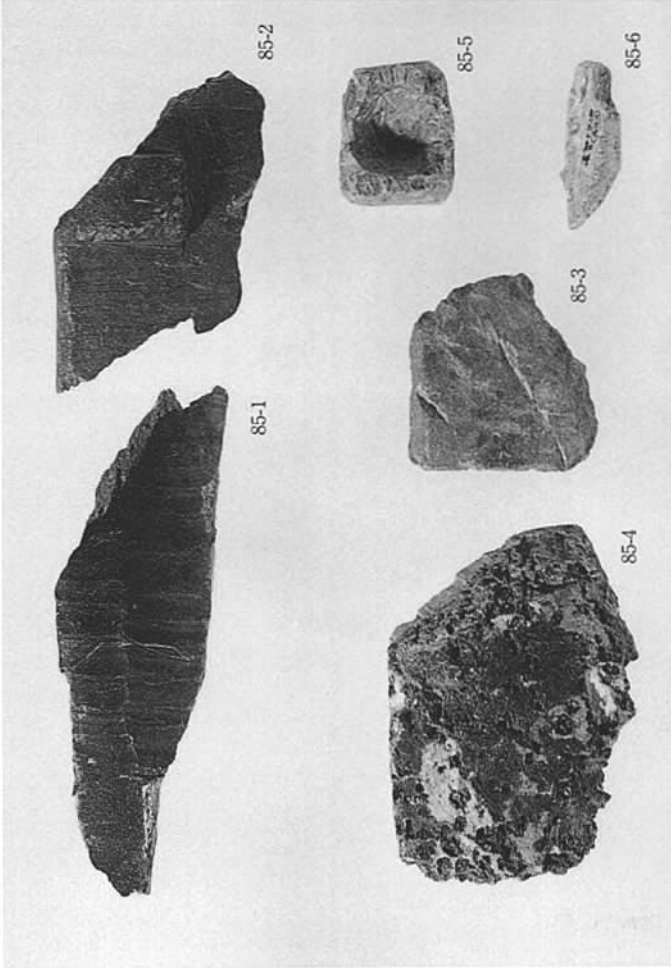
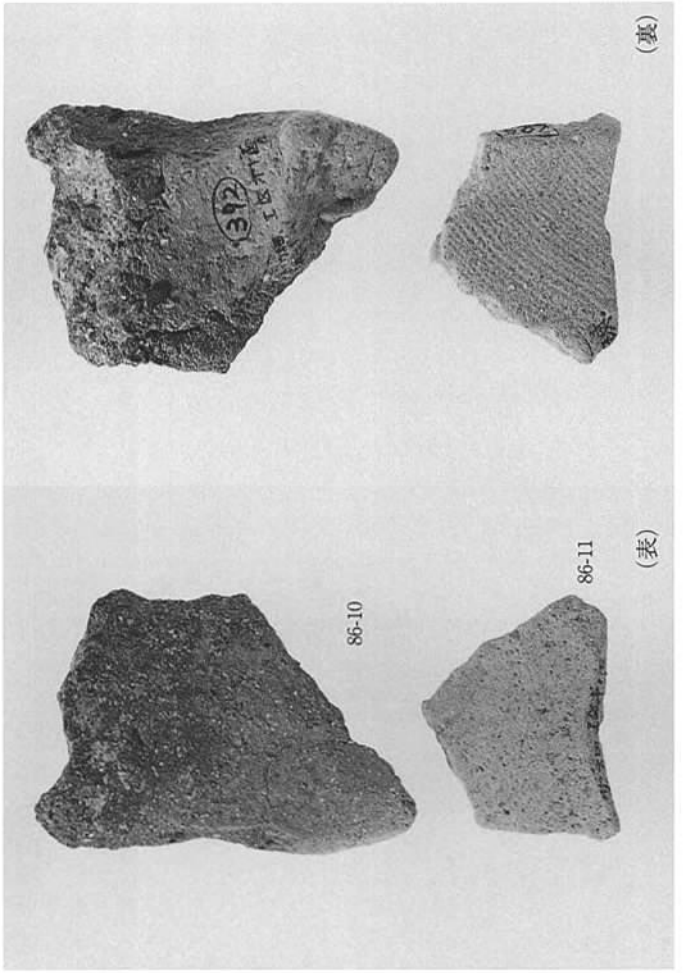
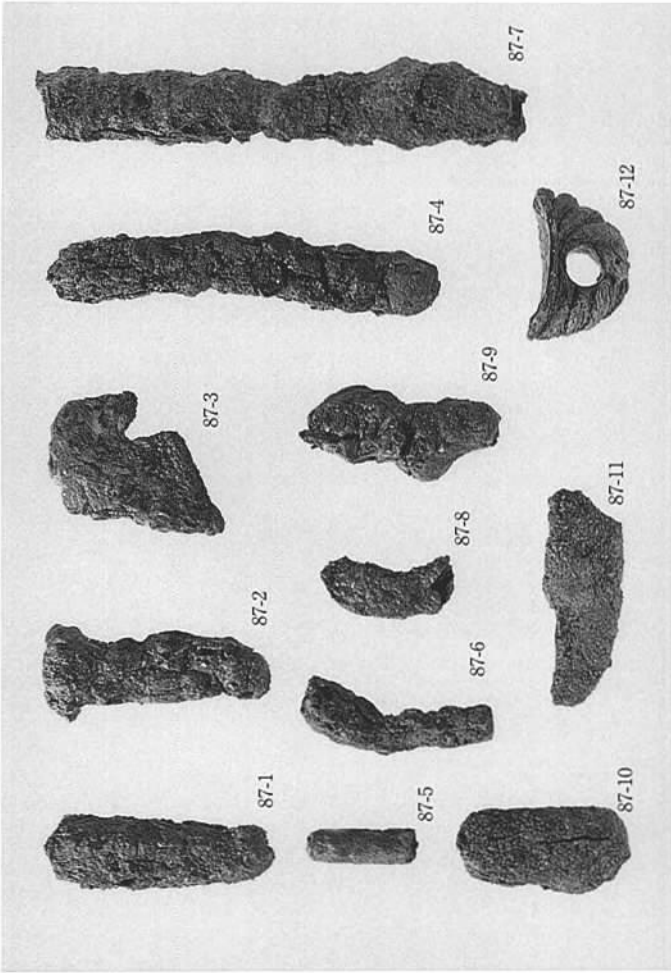


(裏)

(表)

I区出土石器・石製品(2)





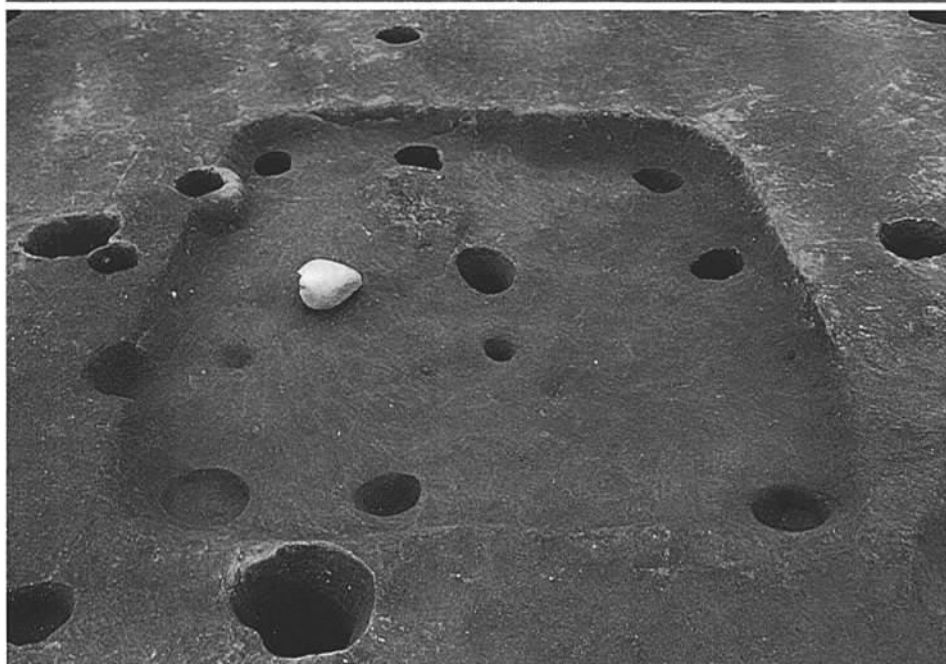
1区出土滑石製容器・土製品・製塩土器・輔羽口・鉄器



1 2区第1面全景（西から）

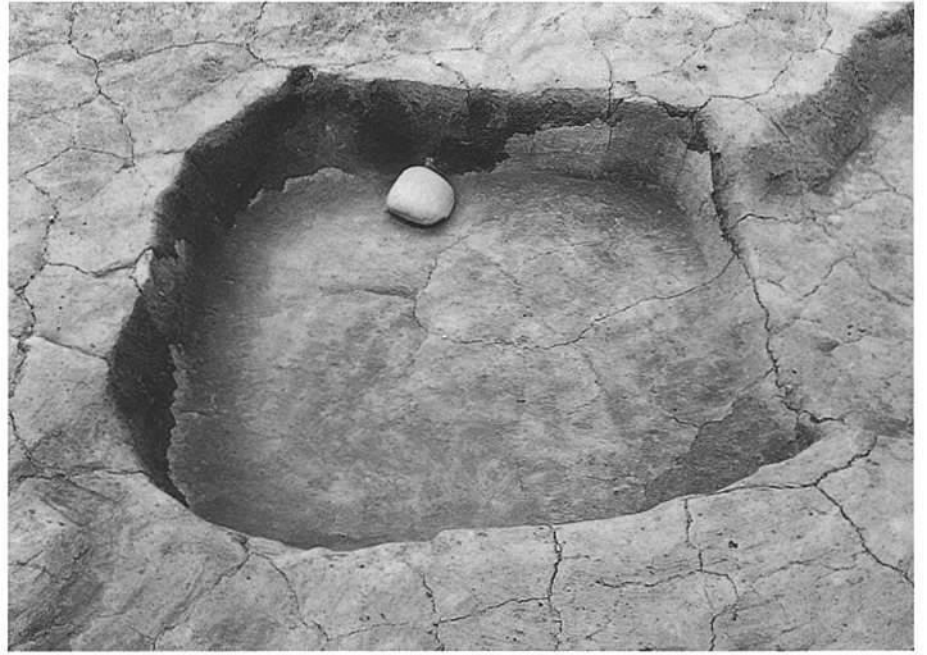


2 14号土坑（南から）



3 1号竪穴状遺構（南から）

1 2号竪穴状遺構(東から)



2 2号集石遺構(東から)



3 2区第2面全景(上空から)





1 3～5号竪穴状遺構・31号
竪穴住居跡（南から）



2 3号竪穴状遺構（南から）



3 3～5号竪穴状遺構
（検出状況、南から）



1 4・5号竪穴状遺構
(南から)



2 4号竪穴状遺構 (南から)



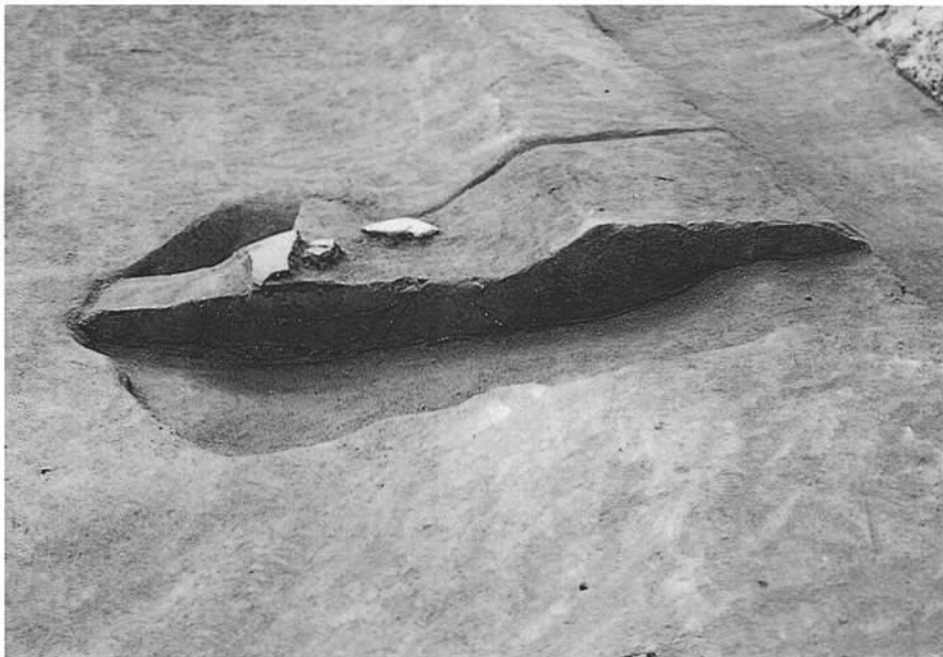
3 4号竪穴状遺構 (東から)



1 4号竪穴状遺構炉
(検出状況、南から)

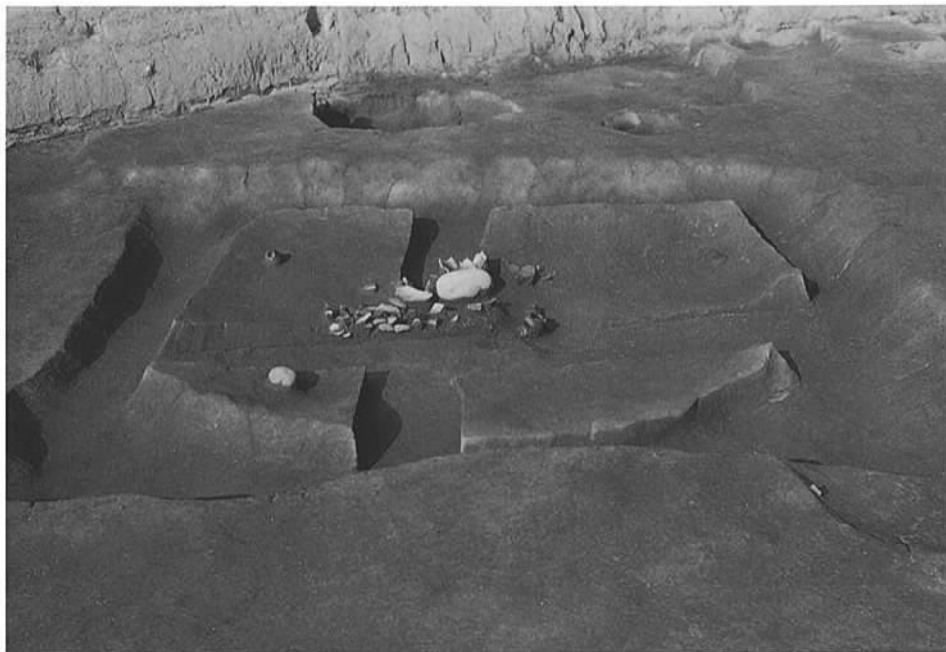


2 4号竪穴状遺構炉
(土層、南から)



3 4号竪穴状遺構炉
(土層、東から)

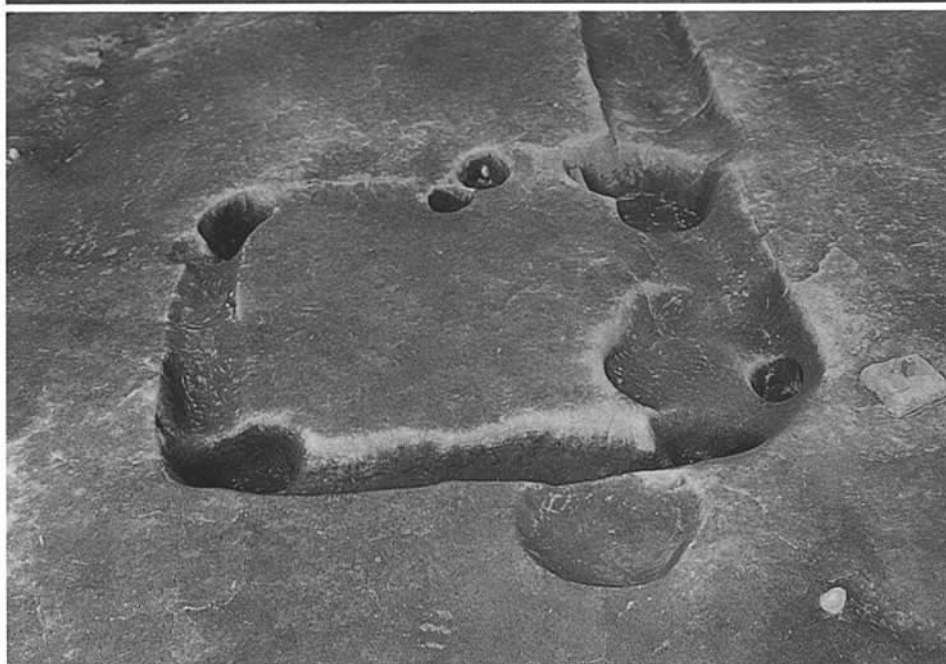
1 4号竪穴状遺構
(出土状況、南から)



2 同上



3 5号竪穴状遺構 (南から)





1 31号竪穴住居跡 (東から)



2 31号竪穴住居跡カマド
(東から)



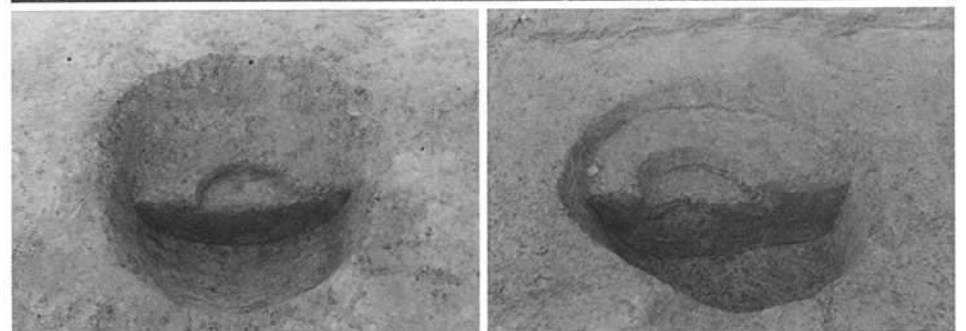
3 4・5号掘立柱建物跡
(南から)



1 4号掘立柱建物（東から）

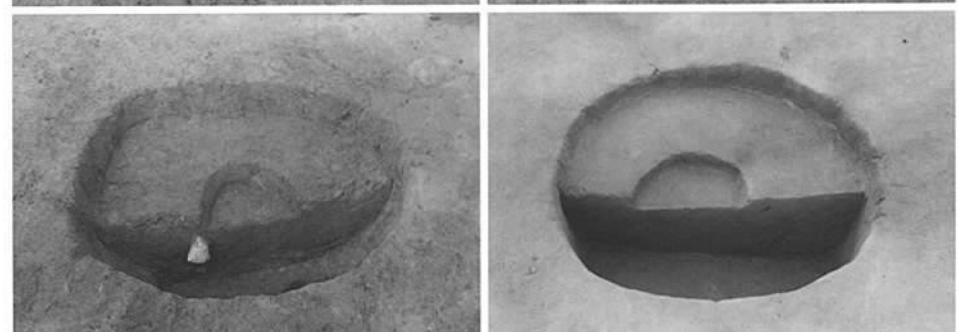


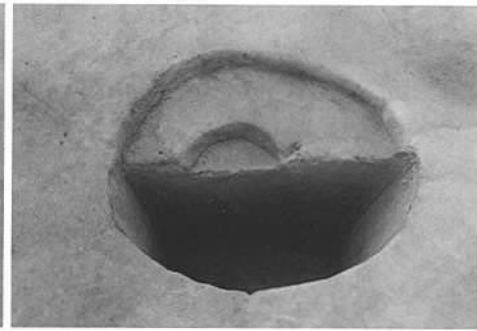
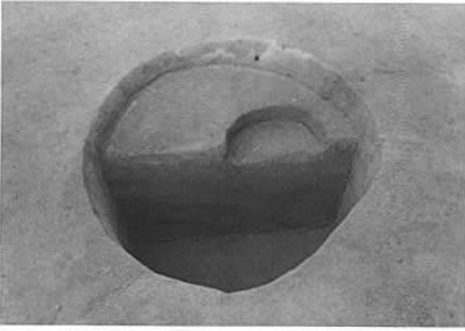
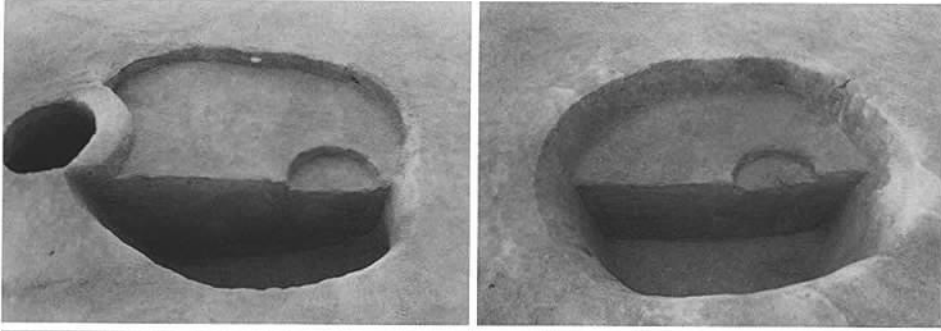
2 5号掘立柱建物（東から）



3～5 4号掘立柱建物跡
柱掘形（土層）

6 5号掘立柱建物
柱掘形（土層）





1 ~ 4 5号掘立柱建物跡
柱掘形(土層)



5 15号溝(東から)



3 16号溝(南から)

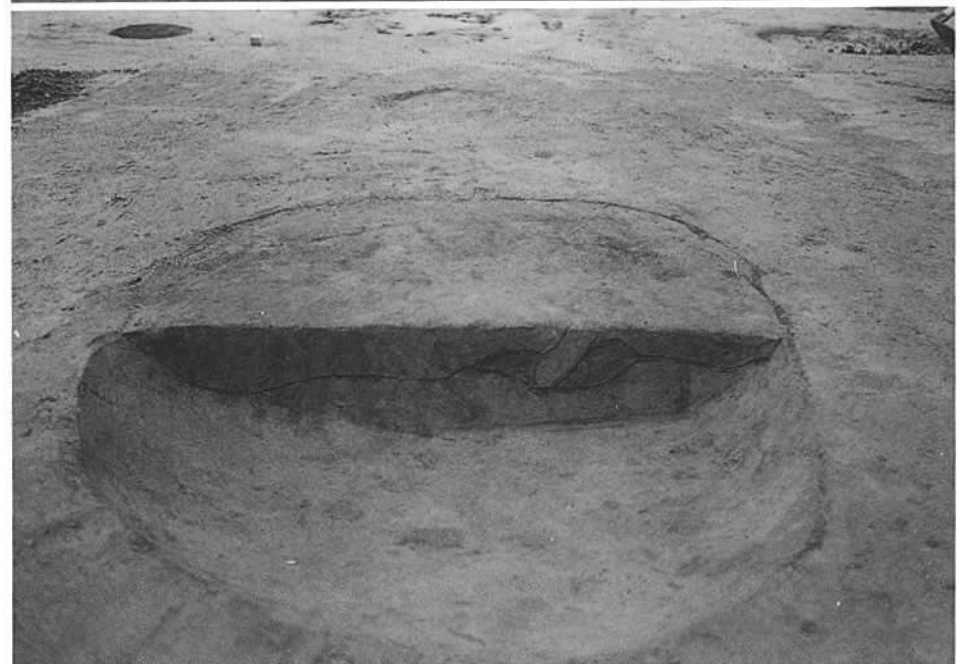
1 2区第3面全景（東から）



2 15号土坑（東から）



3 21号土坑土層（南東から）





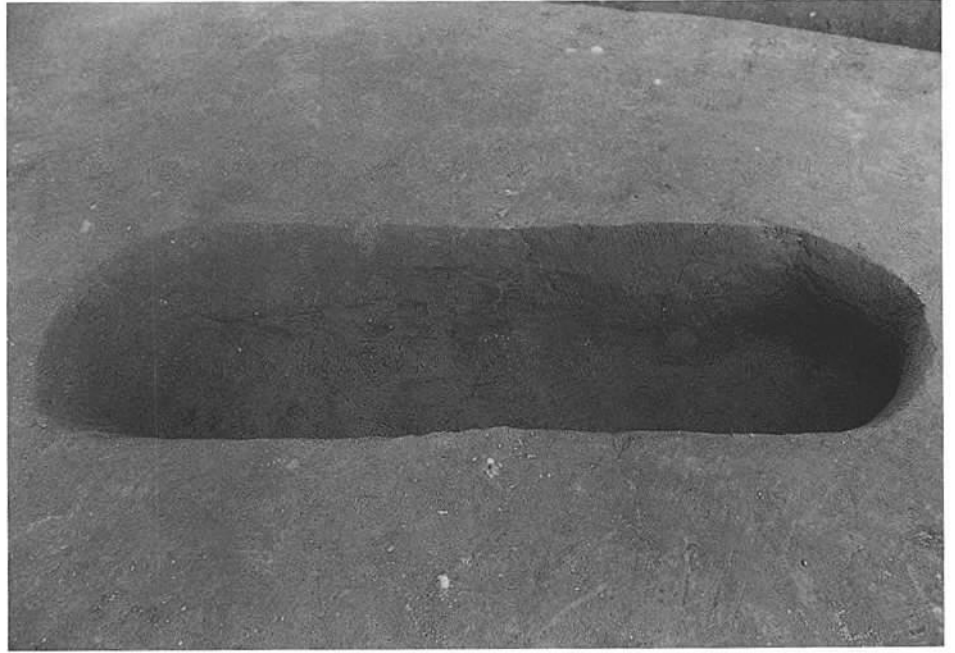
2 21号土坑（北東から）



2 18号土坑（南から）



3 19号土坑（南西から）



1 20号土坑（南から）



2 14号溝土層（東から）



3 14号溝（東から）



1 17号溝 (東から)



2 2区第4面全景 (東から)



3 32号竪穴住居 (南西から)

1 32号竪穴住居跡カマド土層
(南から)



2 32号竪穴住居跡カマド
(南から)



3 32号竪穴住居跡土層
(北から)





1 33号竖穴住居跡 (南から)



2 33号竖穴住居跡貼床除去後 (南から)



3 34号竖穴住居跡 (南西から)



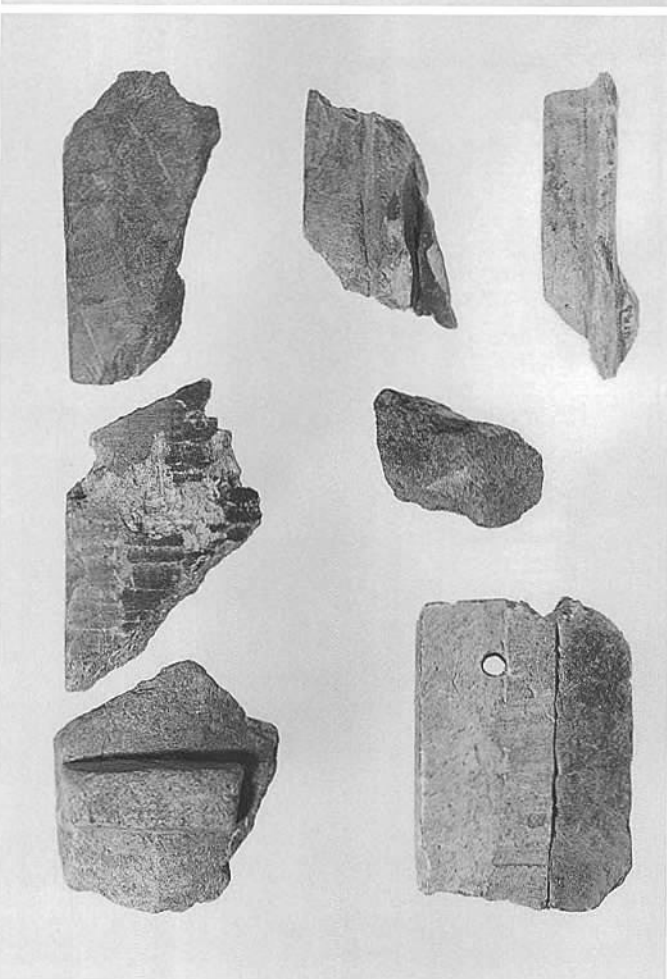
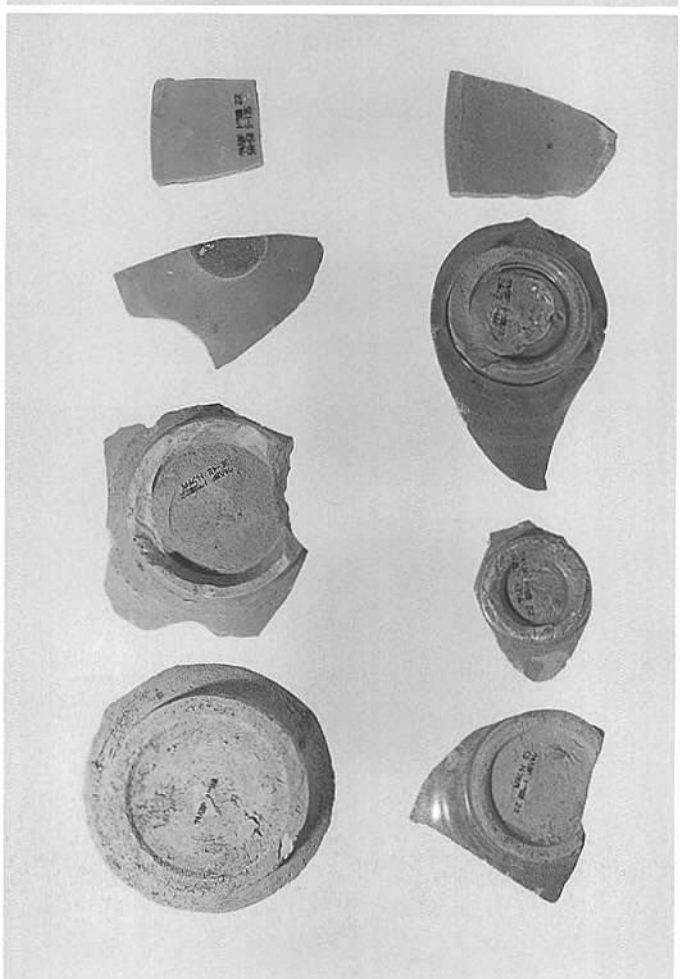
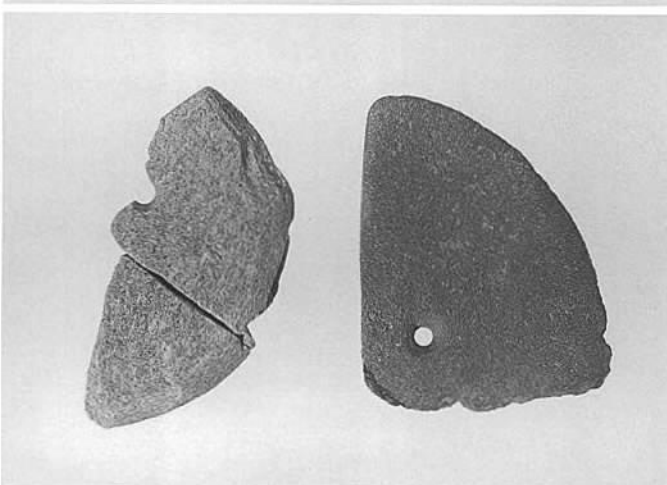
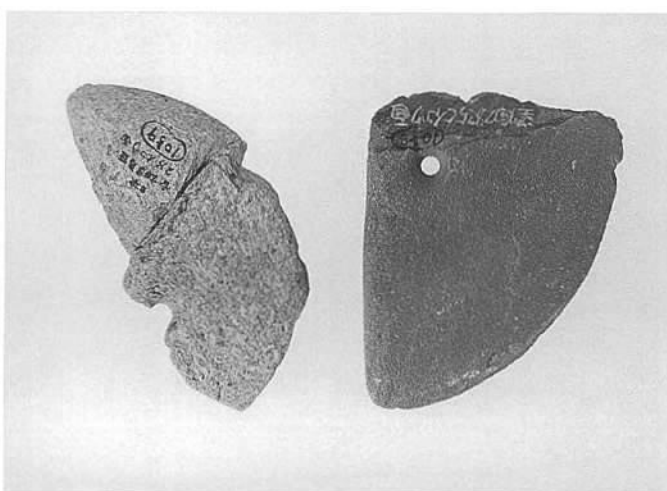
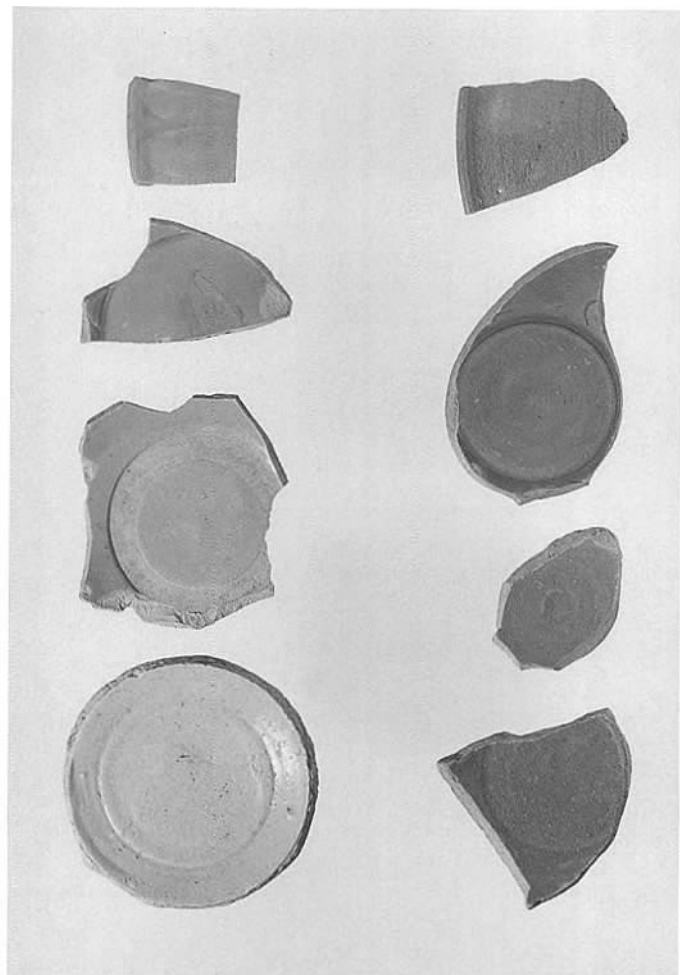
1 23号土坑（西から）



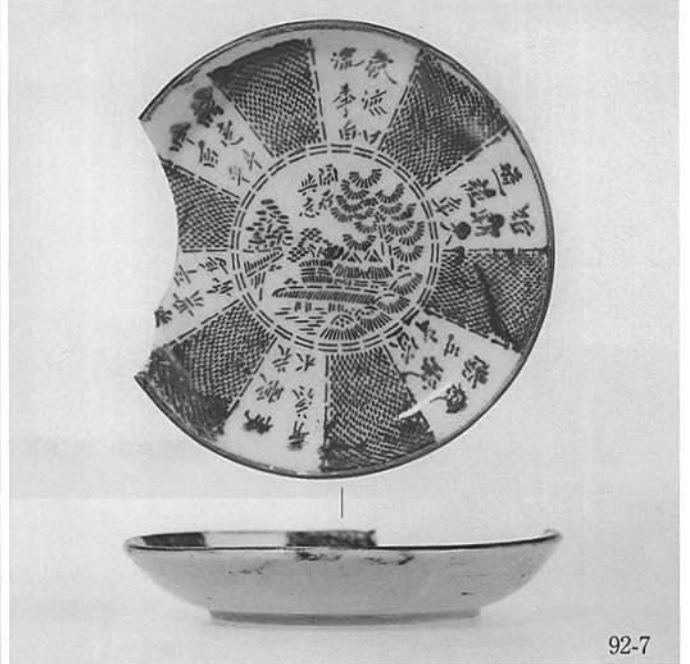
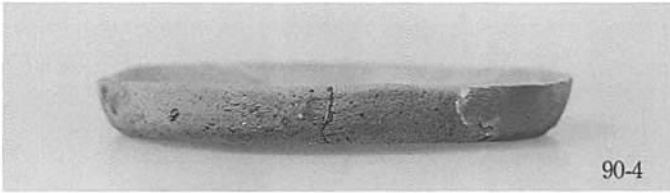
2 2区第4面全景（東から）



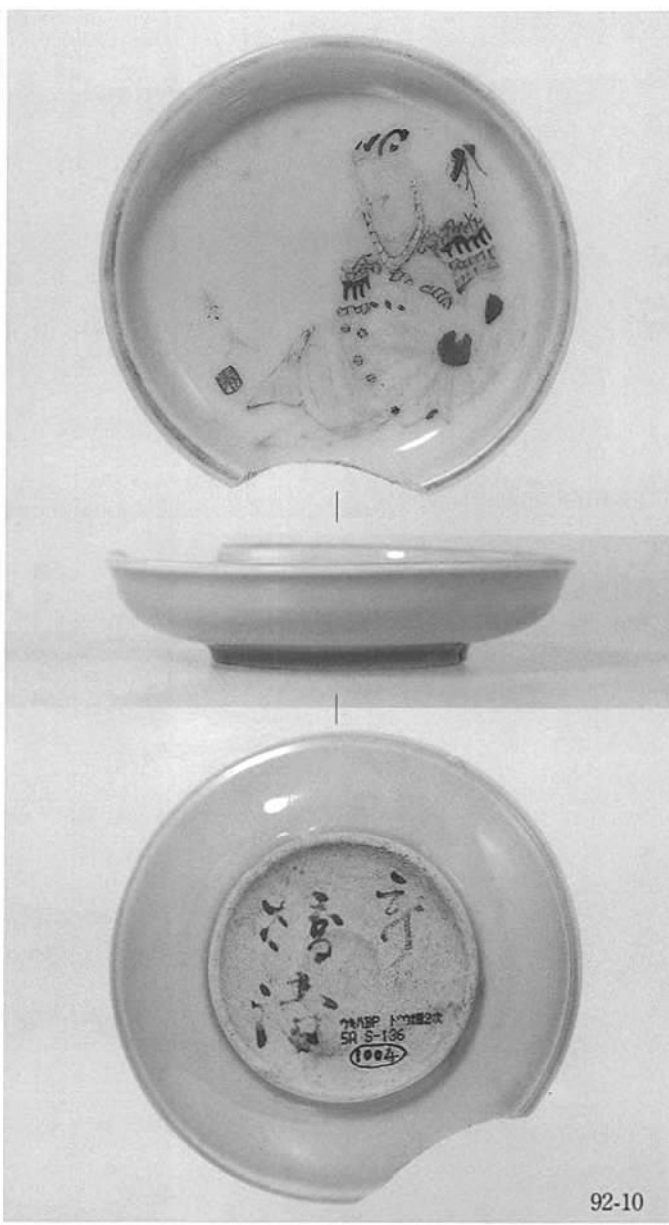
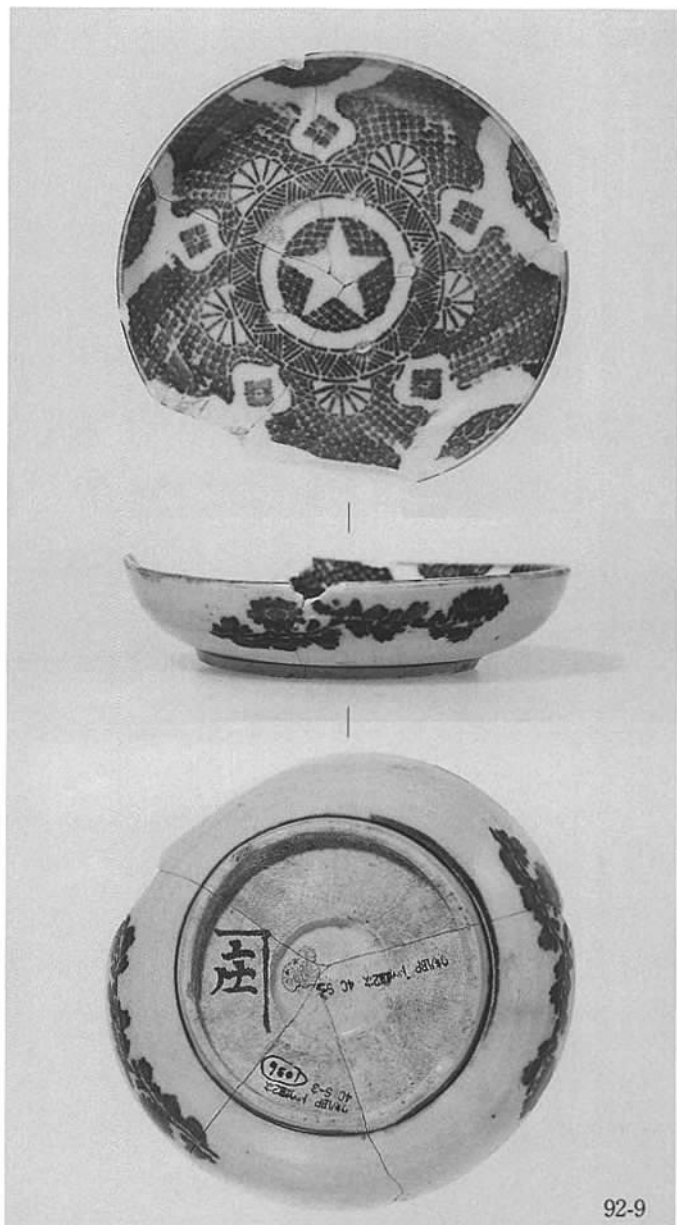
3 浮羽バイパス路線（西から）



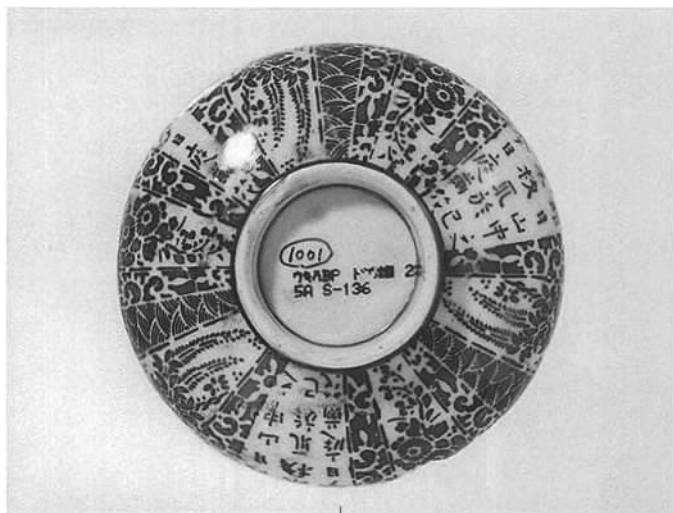
2区第1面 陶磁器・石器・石製品



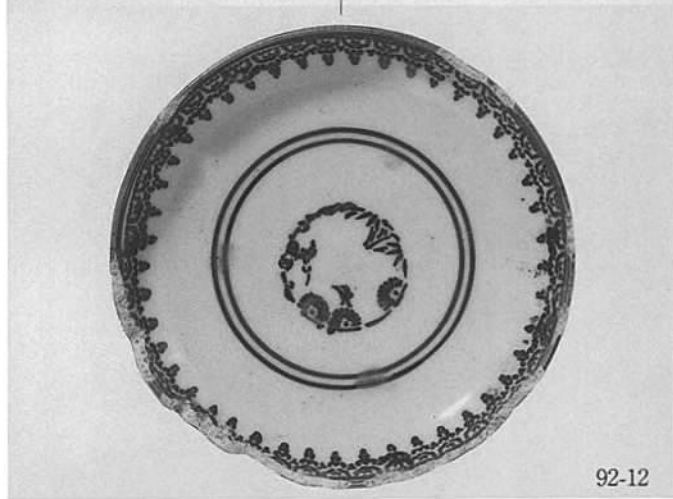
1号竖穴状遺構出土土器・2区出土近代遺物(1)



2区出土近代遺物(2)



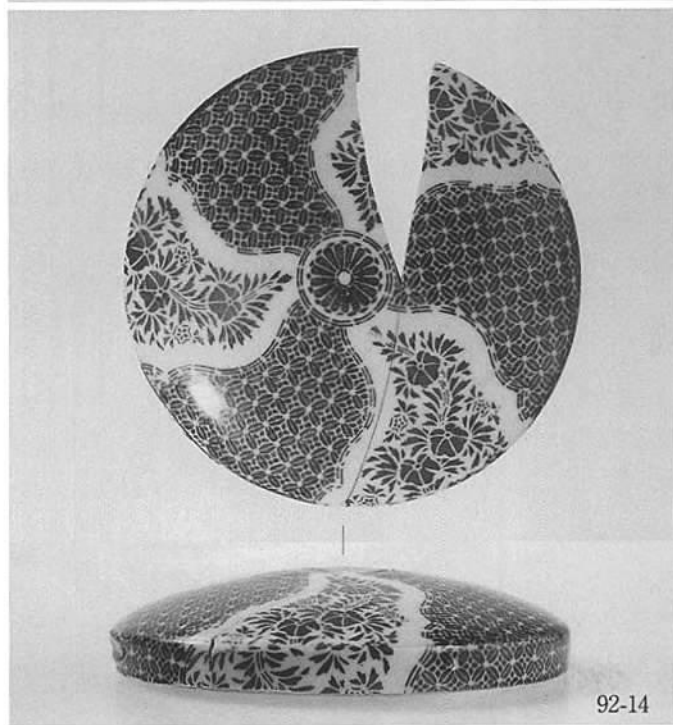
92-15-16



92-12



93-17



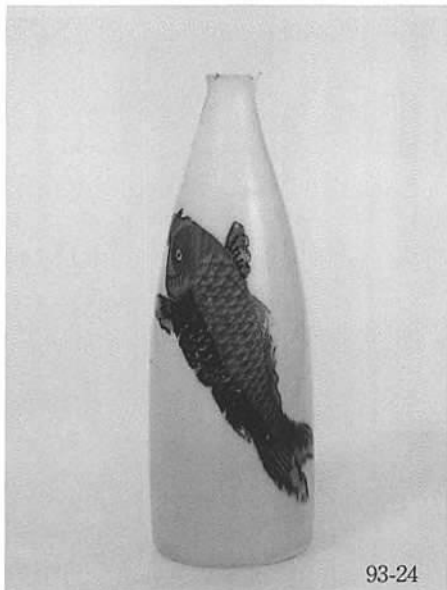
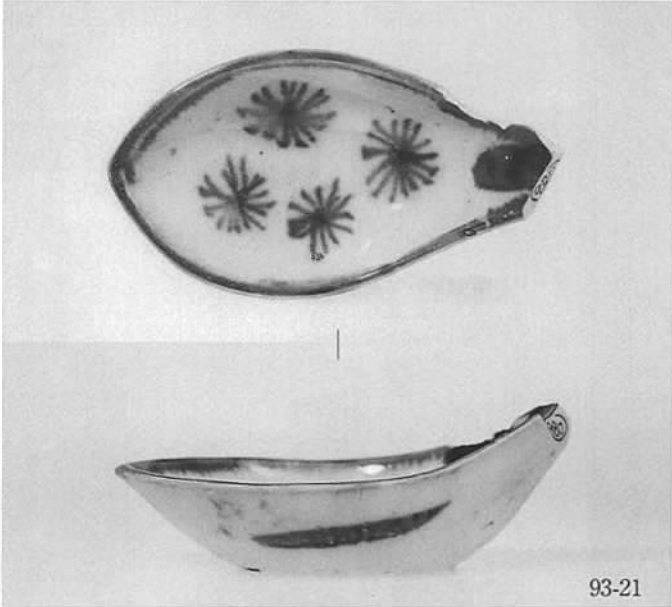
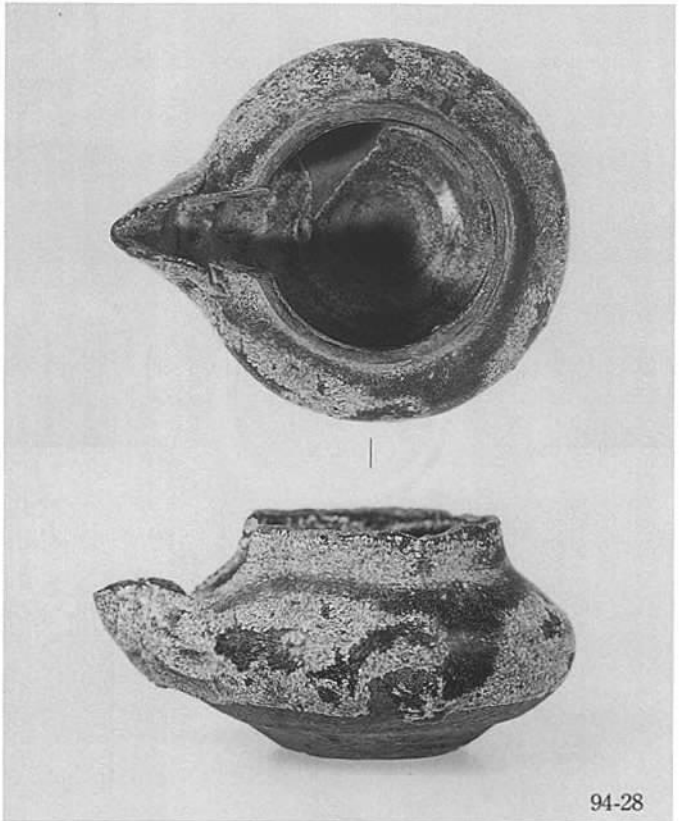
92-14



93-18



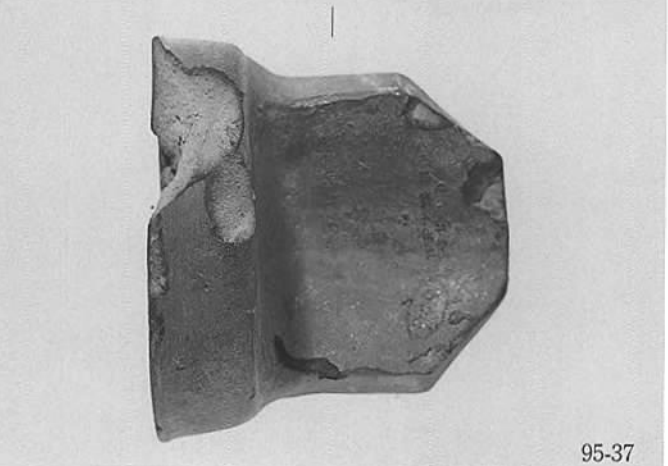
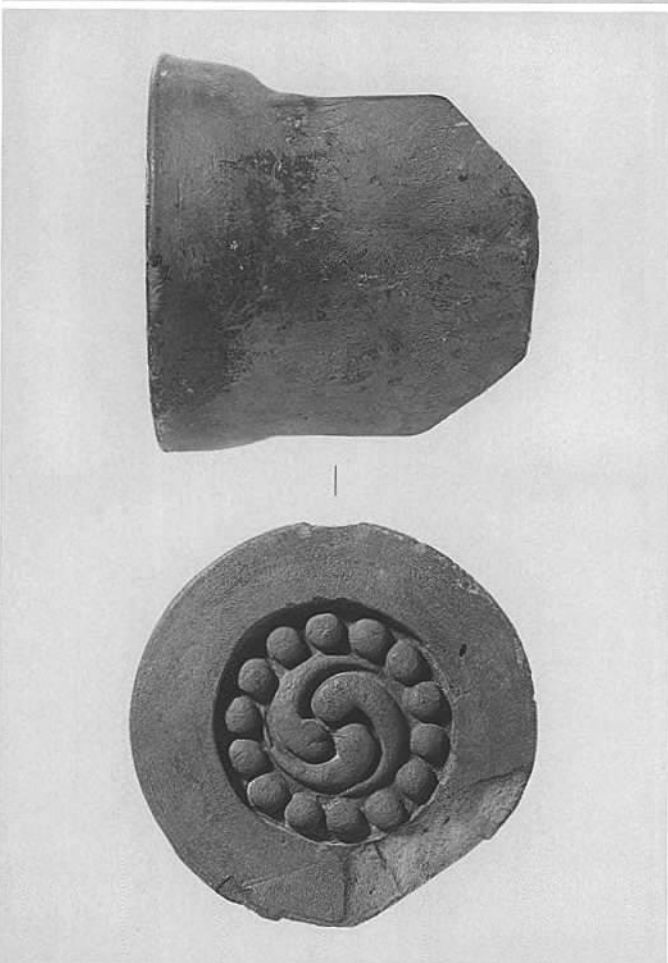
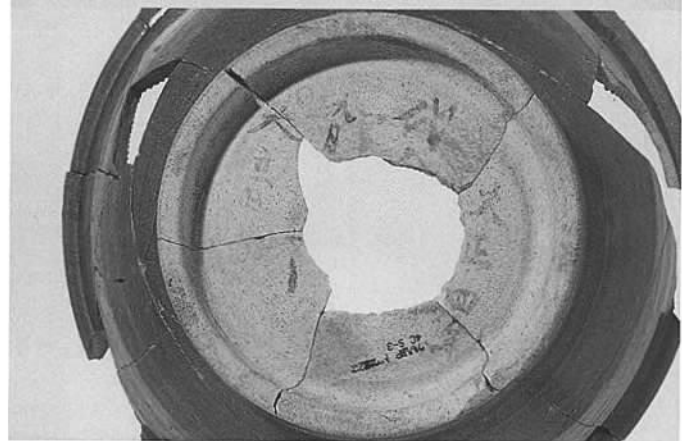
93-20

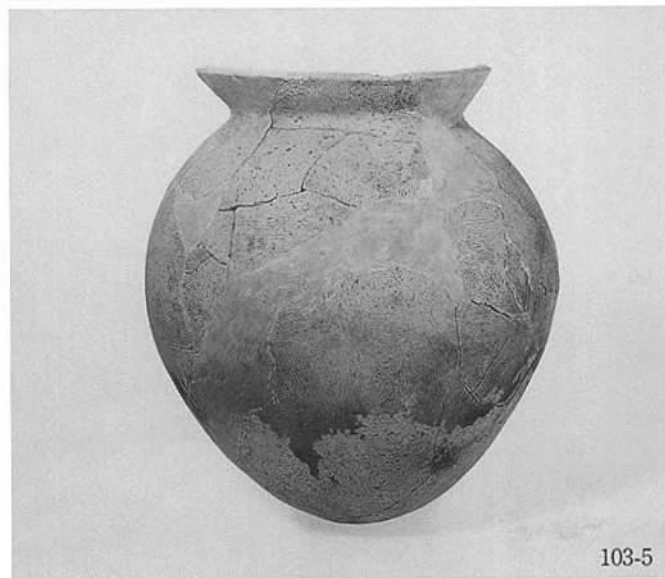


2区出土近代遺物(4)

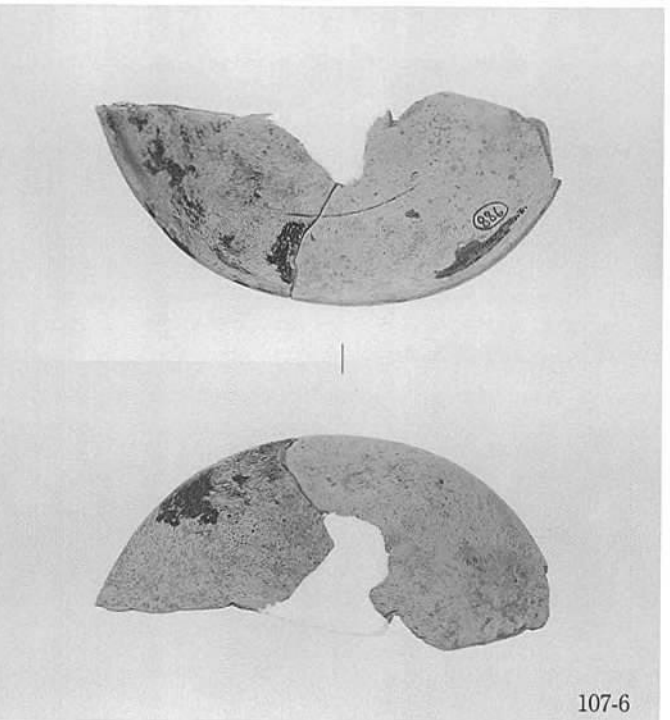
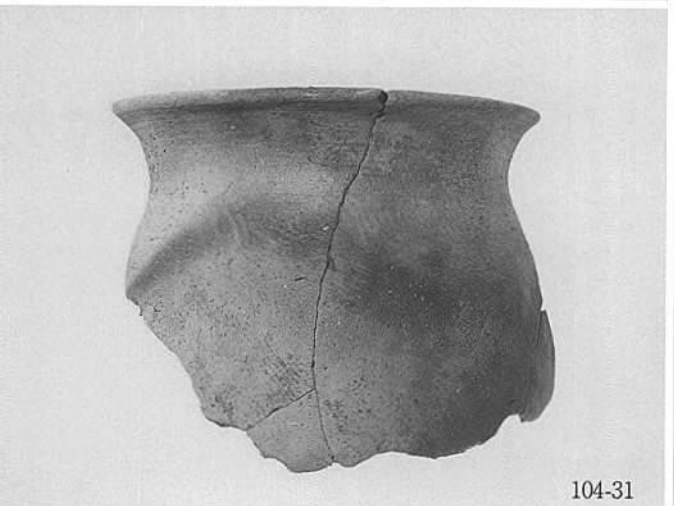
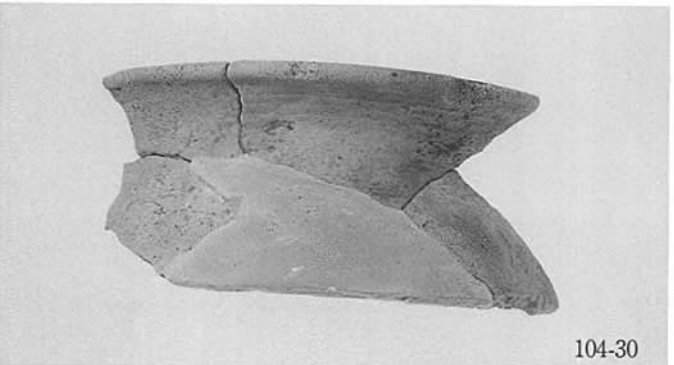
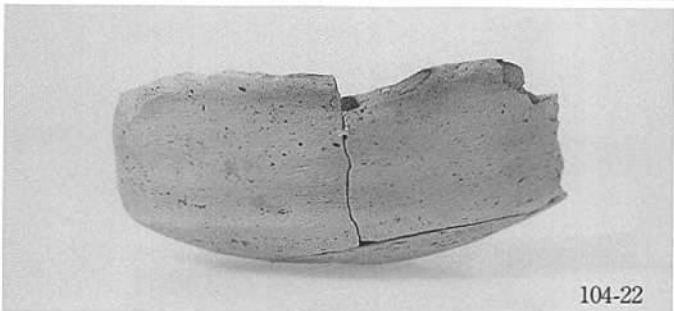
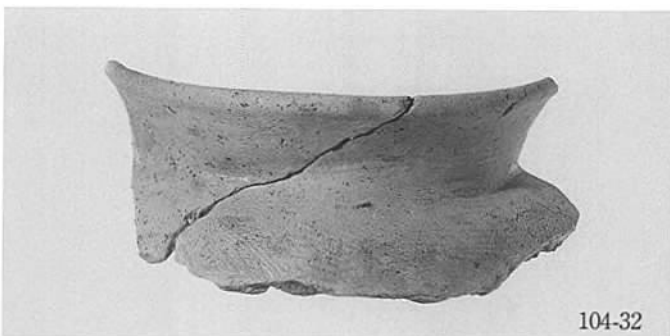
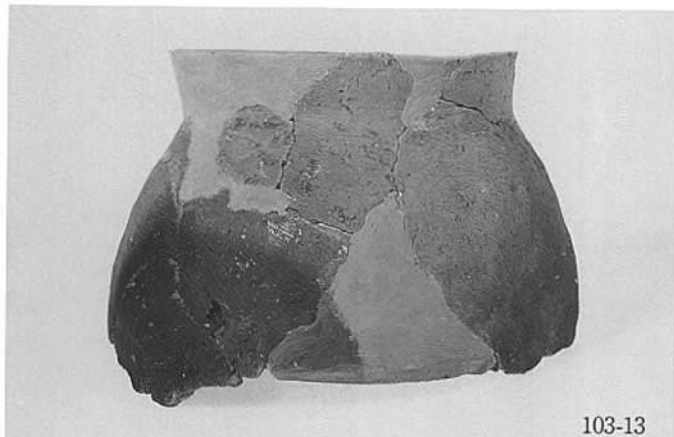


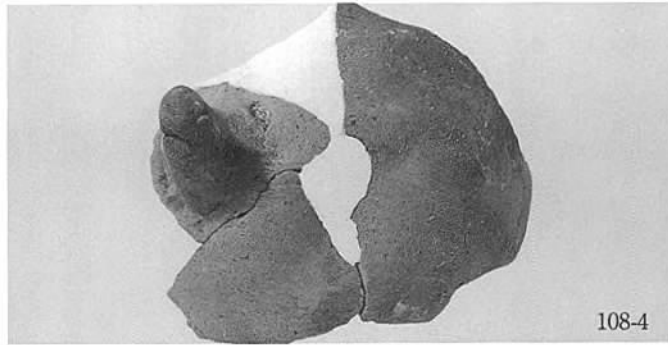
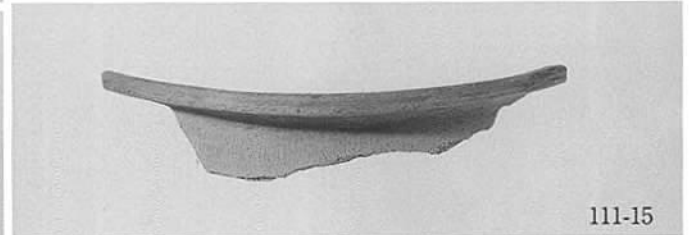
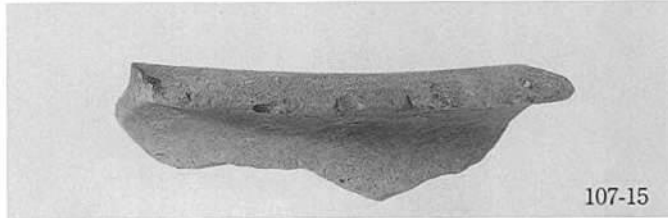
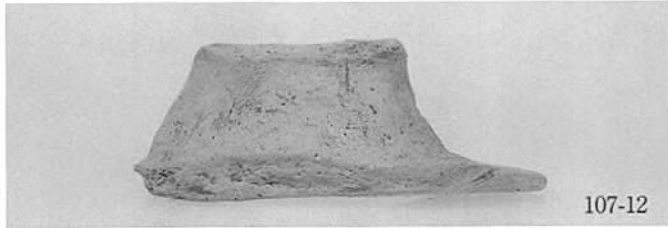
2区出土近代遺物(5)



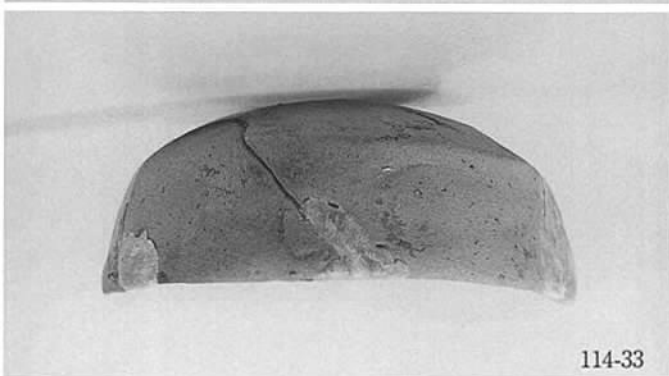
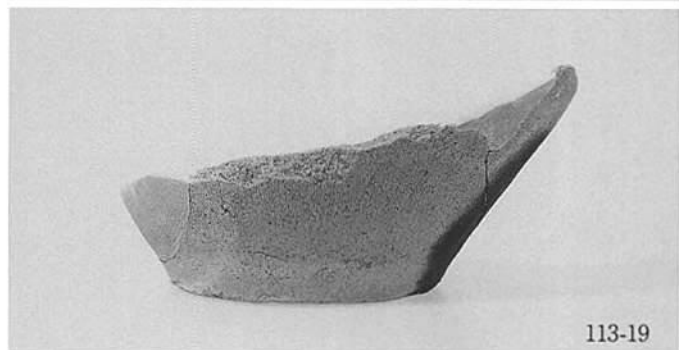
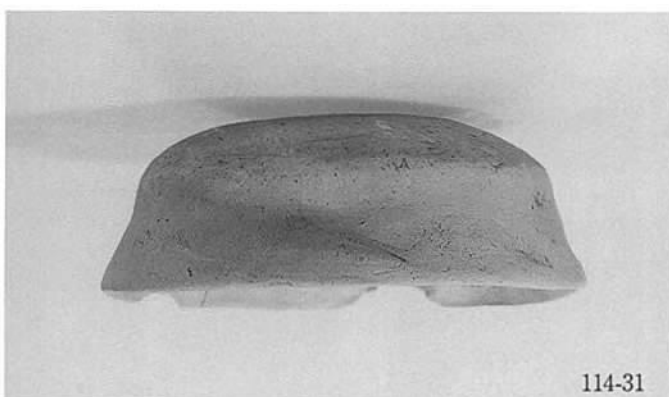


2区出土近代遺物(7)・4号豎穴状遺構出土土器・31号住居跡出土土器(1)

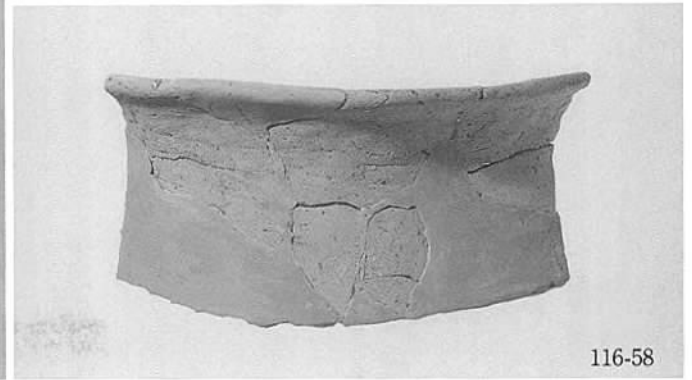
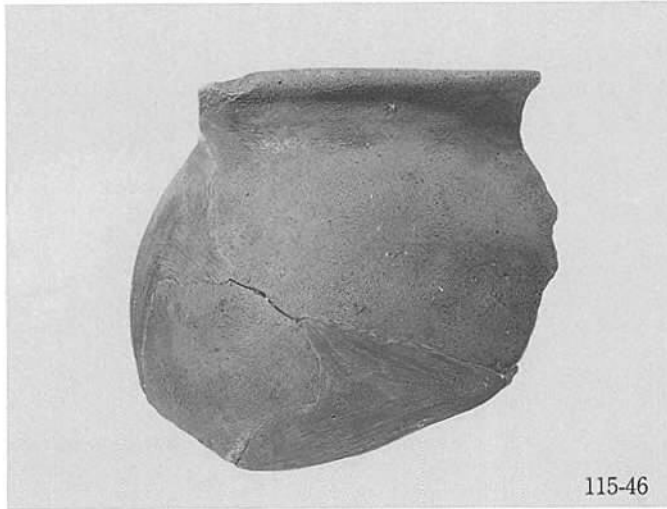
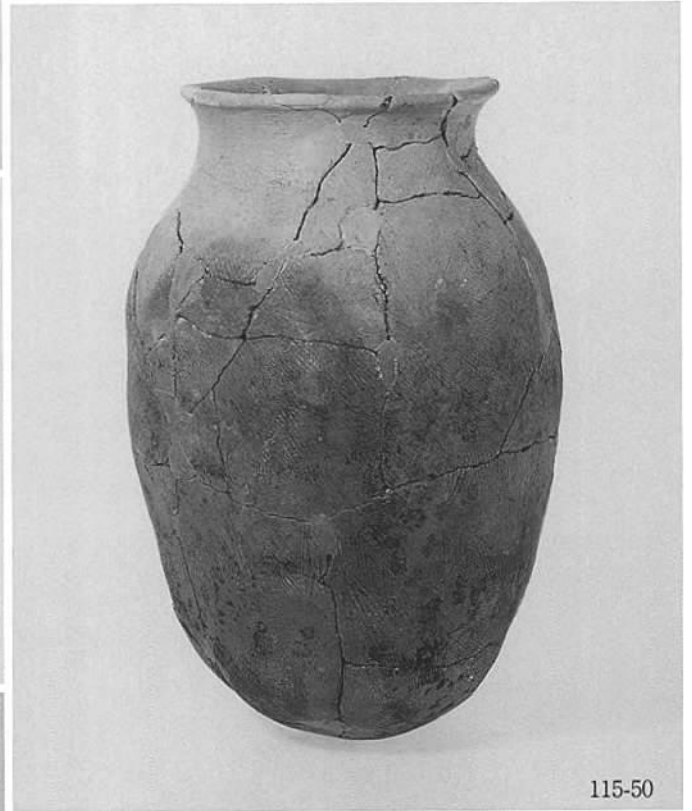
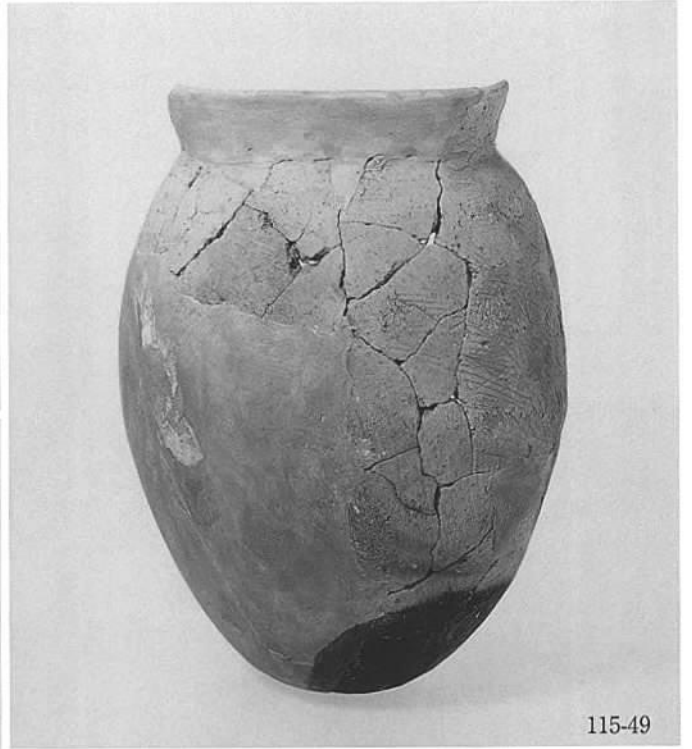




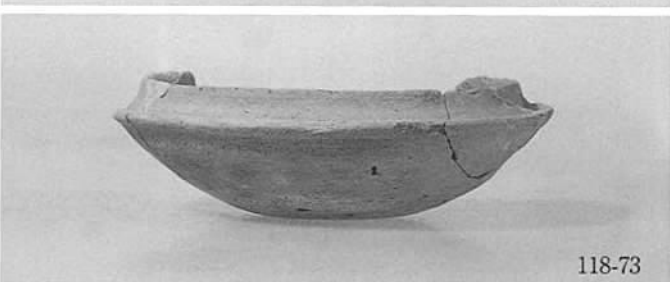
2区第1・2面間包含層出土土器・17・18号土坑出土土器

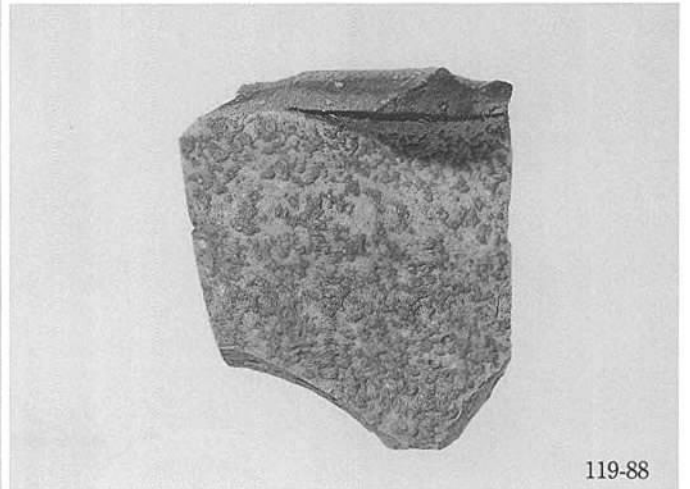
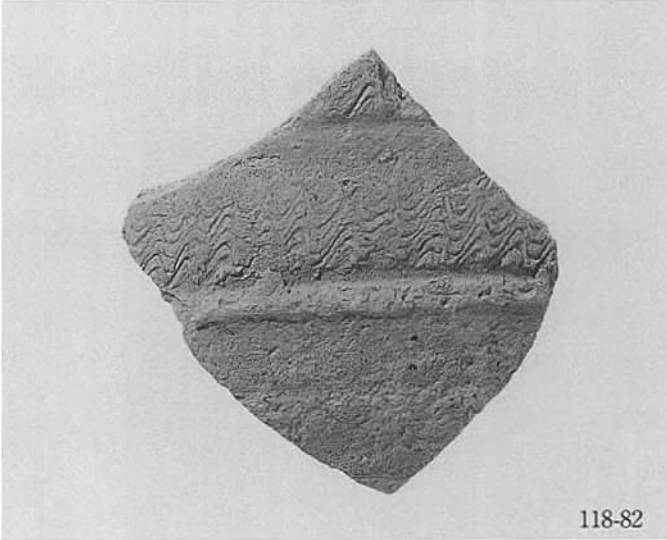


19号土坑·14号沟出土土器(1)

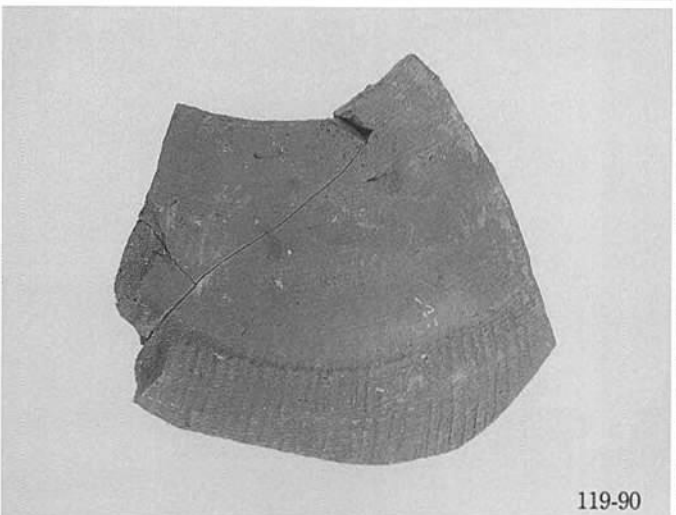
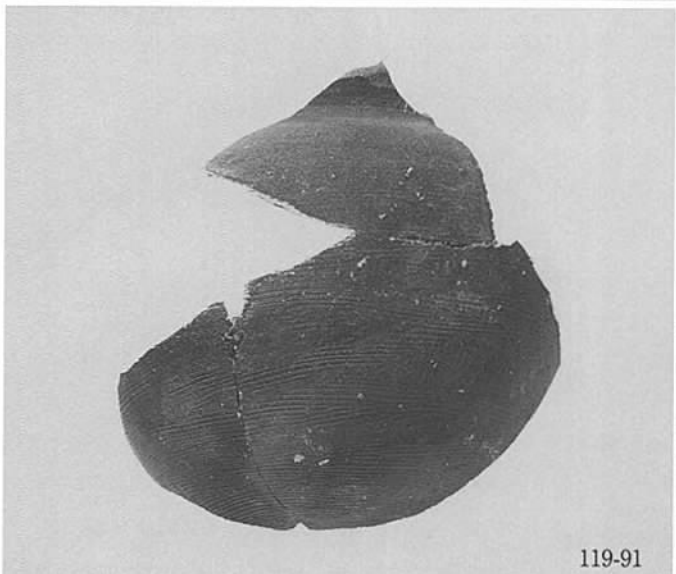
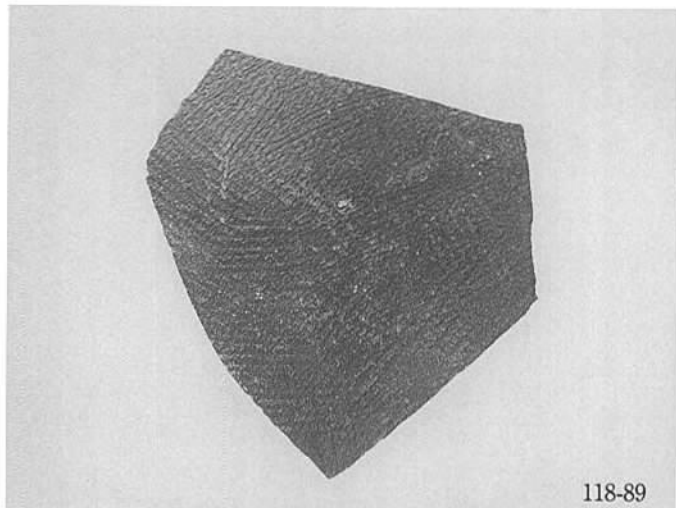


14号沟出土土器 (2)





14号溝出土土器 (4)



14号溝出土土器 (5) ・ 32・33号竪穴住居跡出土土器・作業風景

報 告 書 抄 録

ふりがな	どうはたいせき							
書名	堂畑遺跡 I							
副書名	福岡県浮羽郡吉井町大字新治所在遺跡の調査							
巻次	I							
シリーズ名	一般国道 210 号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第 17 集							
編著者名	重藤輝行・小川泰樹・進村真之							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒 812 - 8575 福岡市博多区東公園 7 番 7 号							
発行年月日	西暦 2002 年 3 月 29 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 。 ”	東経 。 。 ”	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
どうはたいせき 堂畑遺跡	<small>ふくおかけんうきはぐんよしまち</small> 福岡県浮羽郡吉井町 <small>おおあざにいほるあざどうはた</small> 大字新治字堂畑	40481		33° 20' 41"	310° 45' 18"	1996.6.14 〃 1996.12.13 〃 1997.5.9 〃 1998.2.9	2200m ²	道路建設(一般国道210号浮羽バイパス建設)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
堂畑遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 古代 鎌倉時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 溝 墓		土師器 須恵器 陶磁器 石器 鉄器			

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 13	登録番号 9

一般国道
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第17集

堂畑遺跡 I

平成14年3月29日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 株式会社チューエツ福岡工場
福岡市博多区東比恵2丁目9番1号